

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集

蒲船津江頭遺跡 I

福岡県柳川市三橋町蒲船津所在遺跡の調査

2009

福岡県教育委員会

かま ふな つ え がしら い せき
蒲船津江頭遺跡 I

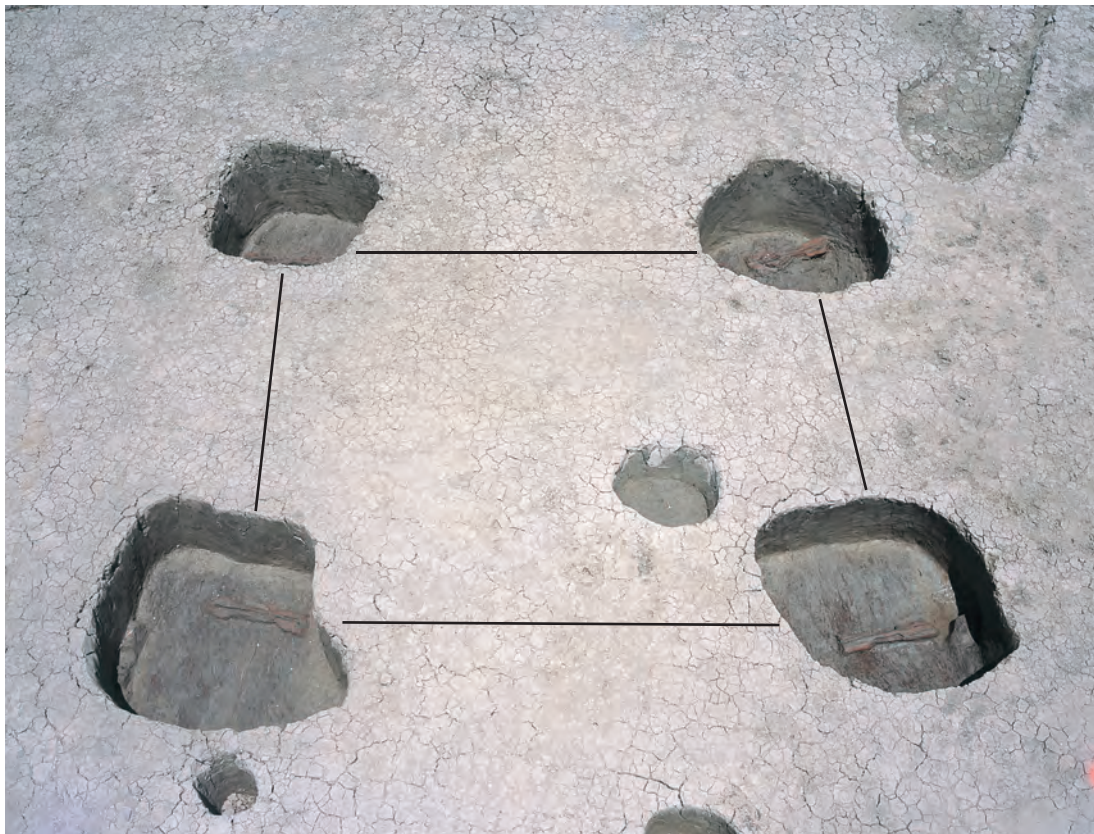
—福岡県柳川市三橋町蒲船津所在遺跡の調査—



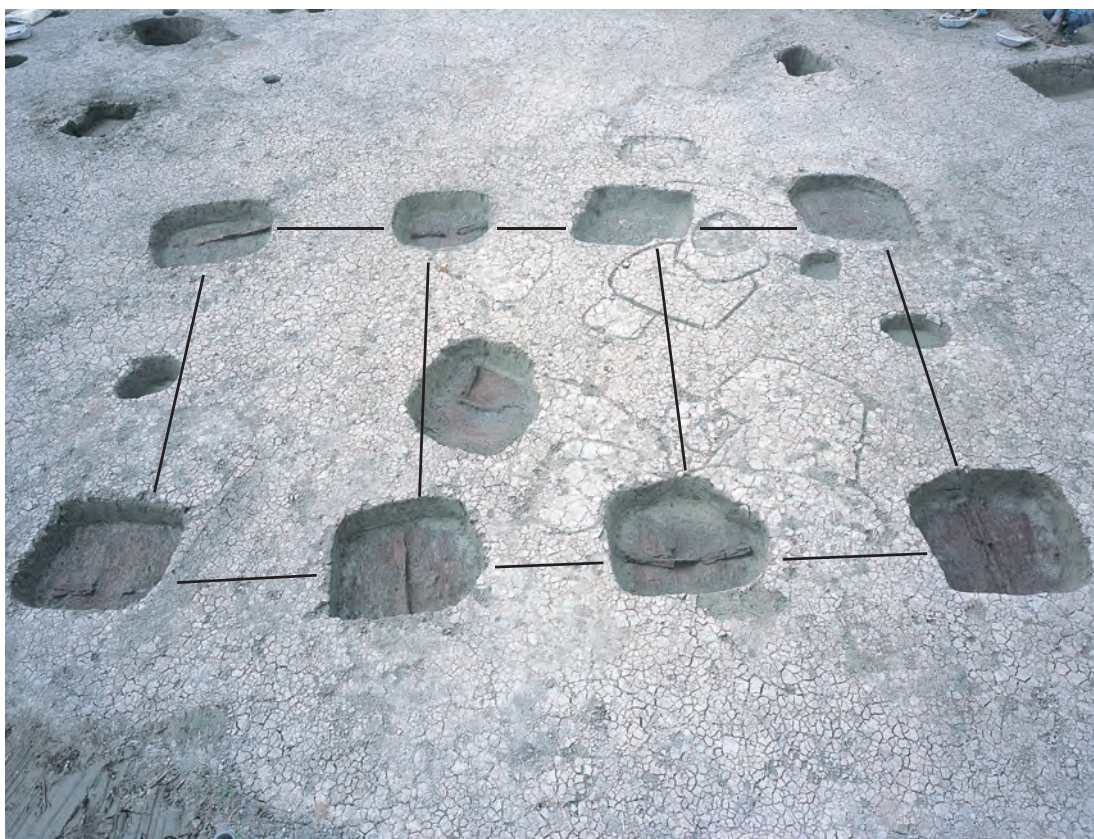
1. II区遠景（南上空から）



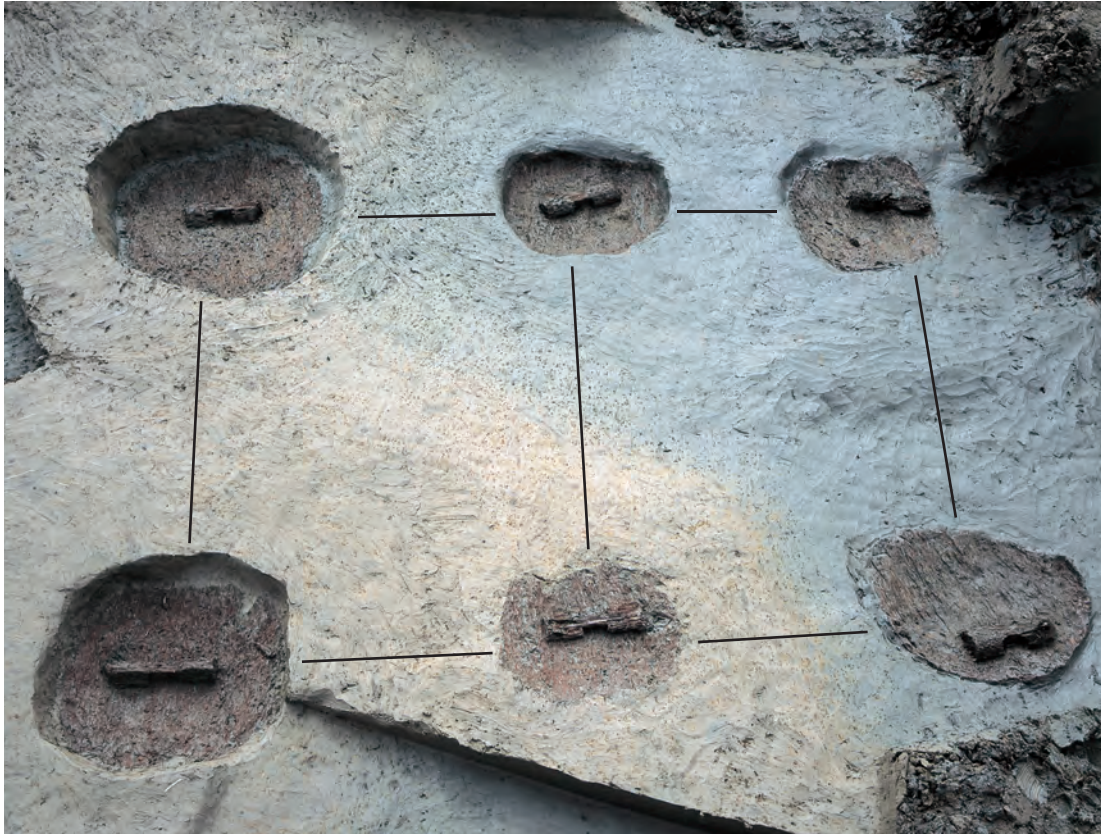
2. I区4号掘立柱建物跡礎盤b 2（東から）



1. II区1号掘立柱建物跡（南から）



2. II区2号掘立柱建物跡（北から）



1. II区6号掘立柱建物跡（北から）



2. II区21号土坑遺物出土状況（北から）



1. I区50号土坑出土土器



2. II区木質集中部（西から）

序

福岡県教育委員会では、平成15年度から平成19年度にわたり国土交通省九州地方整備局の委託を受けて、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は平成17年度から19年度にかけて行った、柳川市三橋町蒲船津に所在する蒲船津江頭遺跡のⅠ・Ⅱ区の調査の記録です。

本遺跡は矢部川支流の沖端川が形成した低地に立地しています。調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期の集落跡を中心とした遺跡であることを確認しました。低湿地の集落として特色のある多数の調査成果と、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただき、厚く感謝いたします。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山良一

例 言

- 1 本書は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査を実施した、柳川市三橋町蒲船津かまふなつえがしらに所在する蒲船津江頭遺跡のⅠ～Ⅳ区までの内Ⅰ・Ⅱ区の記録で、有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第6集である。ただし、Ⅰ・Ⅱ区出土の木製品については、次年度以降のⅢ・Ⅳ区とともに報告する。
- 2 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省福岡工事事務所の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は、椛島由佳里・河口綾香・佐々木貴美・榎崎俊平の協力を得て調査担当者が行った。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課大宰府事務所において、濱田信也・大庭孝夫の指導の下に実施した。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館・福岡県教育庁総務部文化財保護課大宰府事務所において保管する。
- 7 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「羽犬塚・柳川・佐賀南部・セツ家」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。
- 8 出土土器の大半は弥生土器か土師器か明確に区分しがたい時期のものである。そのような土器は本文中で遺物の種類については記載せず、出土土器を整理した表5の遺物の種類では「弥生・土師器」と表示する。
- 9 本書の執筆・編集は坂元雄紀が行った。

目次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
3	調査・整理の関係者	7
II	位置と環境	8
III	調査の内容	11
1	遺跡の概要	11
(1)	遺跡の概要	11
(2)	基本層序	13
2	I 区の検出遺構と遺物	14
(1)	I 区の概要	14
(2)	掘立柱建物跡	17
(3)	土坑	45
(4)	溝	84
(5)	落ち込み	88
(6)	住居跡出土土器	98
(7)	西側流路跡出土土器	105
(8)	包含層出土土器	109
(9)	I 区その他の出土土器	124
(10)	I 区出土石器	128
3	II 区の検出遺構と遺物	130
(1)	II 区の概要	130
(2)	掘立柱建物跡	133
(3)	土坑	168
(4)	溝・落ち込み	185
(5)	II 区トレンチ出土土器	198
(6)	II 区包含層およびその他の出土土器	203
(7)	II 区出土石器	208

IV	まとめ	222
1	遺跡の時期	222
2	旧地形の復元	223
3	木質集中部の性格	226
4	掘立柱建物跡	226

図版目次

巻頭図版 1	1	II区遠景（南上空から）	2	I区4号掘立柱建物跡礎盤 b2（東から）
巻頭図版 2	1	II区1号掘立柱建物跡（南から）	2	II区2号掘立柱建物跡（北から）
巻頭図版 3	1	II区6号掘立柱建物跡（北から）	2	II区21号土坑遺物出土状況（北から）
巻頭図版 4	1	II区50号土坑出土土器	2	II区木質集中部（西から）
図版 1	1	I b区遠景（北から）		
	2	I b区全景（上空から）		
図版 2	1	I a区全景（南から）		
	2	I c区東全景（北から）		
	3	I c区西全景（北から）		
図版 3	1	I区1号掘立柱建物跡（南から）		
	2	I区2号掘立柱建物跡（西から）		
	3	I区礎盤 b15～17 検出状況（南から）		
図版 4	1	I区1号土坑（東から）		
	2	I区2号土坑（東から）		
	3	I区3号土坑（南から）		
図版 5	1	I区4号土坑（南から）		
	2	I区5号土坑（西から）		
	3	I区6号土坑（南から）		
図版 6	1	I区7号土坑（西から）		
	2	I区8号土坑（南から）		
	3	I区9号土坑（北西から）		
図版 7	1	I区10号土坑（西から）		
	2	I区11号土坑（北から）		
	3	I区12号土坑（南東から）		
図版 8	1	I区13号土坑（東から）		
	2	I区14号土坑（南から）		
	3	I区15号土坑（西から）		
図版 9	1	I区16号土坑（南から）		
	2	I区17号土坑（南から）		
	3	I区18号土坑（東から）		

- 図版 10 1 I 区 19 号土坑（北から）
2 I 区 19 号土坑土層（北から）
3 I 区 20 号土坑（東から）
- 図版 11 1 I 区 21 号土坑（東から）
2 I 区 22 号土坑（西から）
3 I 区 24 号土坑（北から）
- 図版 12 1 25 号土坑（南から）
2 29 号土坑（南東から）
3 33 号土坑（北から）
- 図版 13 1 35 号土坑（北西から）
2 36 号土坑（北から）
3 37 号土坑（西から）
- 図版 14 1 I 区 40 号土坑（西から）
2 I 区 41 号土坑（東から）
3 I 区 42 号土坑（東から）
- 図版 15 1 I 区 43 号土坑（北西から）
2 I 区 44 号土坑（西から）
3 I 区 45 号土坑（西から）
- 図版 16 1 I 区 46 号土坑（北から）
2 I 区 46 号土坑土層（北から）
3 I 区 47 号土坑（北から）
- 図版 17 1 I 区 48 号土坑（南から）
2 I 区 49 号土坑（北東から）
3 I 区 49 号土坑土層（東から）
- 図版 18 1 I 区 50 号土坑上層土器出土状況（東から）
2 I 区 50 号土坑下層土器出土状況（東から）
3 I 区 50 号土坑上層土層（北から）
- 図版 19 1 I 区 51 号土坑①（西から）
2 I 区 51 号土坑②（西から）
3 I 区 51 号土坑③（東から）
- 図版 20 1 I 区 52 号土坑（南東から）
2 I 区 53 号土坑（北から）
3 I 区 53 号土坑木器出土状況（北から）
- 図版 21 1 I 区 54 号土坑（北から）
2 I 区 55 号土坑（北から）
3 I 区 55 号土坑土層（北から）
- 図版 22 1 I 区 1 号溝（南から）
2 I 区 2・3 号溝（北東から）

- 3 I区4号溝(東から)
- 図版 23 1 I区1号落ち込み(北から)
2 I区1号落ち込み(東から)
3 I区1号落ち込み土層(北から)
- 図版 24 I区建物および土坑出土土器
- 図版 25 I区土坑出土土器①
- 図版 26 I区土坑出土土器②
- 図版 27 I区土坑出土土器③
- 図版 28 I区土坑出土土器④
- 図版 29 I区土坑出土土器⑤
- 図版 30 I区土坑出土土器⑥
- 図版 31 I区溝および落ち込み出土土器
- 図版 32 I区落ち込み出土土器
- 図版 33 I区住居出土土器
- 図版 34 I区住居および包含層出土土器
- 図版 35 1 I区出土石器①
2 I区出土石器②
3 I区出土石器③
4 I区出土石器④
- 図版 36 1 II区遠景(北東から)
2 II区全景(上空から)
- 図版 37 1 II区1号掘立柱建物跡(南から)
2 II区2号掘立柱建物跡(北から)
3 II区2号掘立柱建物跡柱穴3柱痕検出状況(北から)
- 図版 38 1 II区3号掘立柱建物跡(西から)
2 II区4号掘立柱建物跡(南から)
3 II区6号掘立柱建物跡(北から)
- 図版 39 1 II区南西隅礎盤検出状況(西から)
2 II区礎盤47検出状況(東から)
3 II区谷底トレンチ礎盤検出状況(南から)
- 図版 40 1 II区礎盤222(東から)
2 II区10号掘立柱建物跡礎盤280(北から)
3 II区13号掘立柱建物跡礎盤212(北から)
- 図版 41 1 II区15号掘立柱建物跡礎盤141(南から)
2 II区25号掘立柱建物跡礎盤109(南から)
3 II区25号掘立柱建物跡礎盤110(南から)
- 図版 42 1 II区25号掘立柱建物跡礎盤128(北から)
2 II区25号掘立柱建物跡礎盤138(北東から)

- 3 II区45号掘立柱建物跡礎盤202(東から)
- 図版43 1 II区1号土坑(南から)
2 II区2号土坑(北から)
3 II区3号土坑(南から)
- 図版44 1 II区4号土坑(東から)
2 II区6号土坑(東から)
3 II区7号土坑(西から)
- 図版45 1 II区8号土坑(北西から)
2 II区9号土坑(北から)
3 II区10号土坑(北から)
- 図版46 1 II区11号土坑上部土器検出状況(北から)
2 II区11号土坑(北から)
3 II区12号土坑(西から)
- 図版47 1 II区13号土坑(北から)
2 II区14号土坑(東から)
3 II区15号土坑(東から)
- 図版48 1 II区16号土坑(西から)
2 II区17号土坑(東から)
3 II区18・19号土坑(南から)
- 図版49 1 II区20号土坑(西から)
2 II区21号土坑(北から)
3 II区22号土坑(東から)
- 図版50 1 II区23号土坑(南から)
2 II区24号土坑(東から)
3 II区25号土坑(北から)
- 図版51 1 II区1号溝(南から)
2 II区4号落ち込み(南西から)
3 II区5号落ち込み(西から)
- 図版52 1 II区木質集中部(西から)
2 II区木質集中部(北から)
3 II区木質集中部樹皮検出状況(西から)
- 図版53 1 II区木質集中部土層(南西から)
2 II区木質集中部大型杭下部確認状況(北から)
3 II区木質集中部小型杭下部確認状況(西から)
- 図版54 II区建物および土坑出土土器
- 図版55 II区土坑出土土器①
- 図版56 II区土坑出土土器②
- 図版57 II区土坑出土土器③

- 図版 58 II 区落ち込み出土土器
 図版 59 II 区木質集中部出土土器
 図版 60 II 区トレンチおよびその他の出土土器
 図版 61 II 区その他の出土土器
 図版 62 1 II 区出土石器①
 2 II 区出土石器②
 3 II 区出土石器③
 4 II 区出土石器④

挿 図 目 次

第 1 図	柳川市の位置	1
第 2 図	有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)	2
第 3 図	周辺遺跡分布図 (1/40,000)	9
第 4 図	周辺地形および各調査区位置図 (1/2,500)	12
第 5 図	I・II 区基本土層実測図 (1/40)	13
第 6 図	I 区遺構配置図 (1/200)	15
第 7 図	I 区 1・2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	18
第 8 図	I 区 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	19
第 9 図	I 区 4・5 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	20
第 10 図	I 区 1・2・4 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	21
第 11 図	I 区 6・7 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	23
第 12 図	I 区 5・6 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	24
第 13 図	I 区 8 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	25
第 14 図	I 区 7～9 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	26
第 15 図	I 区 9・10 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	27
第 16 図	I 区 11 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	28
第 17 図	I 区 10・11 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	29
第 18 図	I 区 12 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	30
第 19 図	I 区 13 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	30
第 20 図	I 区 14・15 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	32
第 21 図	I 区 16 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	33
第 22 図	I 区 12～19 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	34
第 23 図	I 区 17 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	35
第 24 図	I 区 18・19 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	36
第 25 図	I 区 20・21 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	37
第 26 図	I 区 22・23 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	38
第 27 図	I 区 20・21・23～26 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	39

第 28 図	I 区 24・25 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	40
第 29 図	I 区 26・27 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	41
第 30 図	I 区 28 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	42
第 31 図	I 区 27・28 号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図 (1/4)	43
第 32 図	I 区 1～5 号土坑実測図 (1/30)	46
第 33 図	I 区 2・4～7 号土坑出土土器実測図 (1/4)	48
第 34 図	I 区 6～10 号土坑実測図 (1/30)	50
第 35 図	I 区 11・12 号土坑実測図 (1/30)	51
第 36 図	I 区 8～11 号土坑出土土器実測図 (1/4)	52
第 37 図	I 区 13～19 号土坑実測図 (1/30)	55
第 38 図	I 区 12～16 号土坑出土土器実測図 (1/4)	56
第 39 図	I 区 17～19 号土坑出土土器実測図 (1/4)	57
第 40 図	I 区 20～22 号土坑実測図 (1/30)	58
第 41 図	I 区 20～22 号土坑出土土器実測図 (1/4)	60
第 42 図	I 区 24・25・29・33・35 号土坑実測図 ((1/30)	62
第 43 図	I 区 24・25・29 号土坑出土土器実測図 (1/4)	63
第 44 図	I 区 33・35～37・40 号土坑出土土器実測図 (1/4)	65
第 45 図	I 区 36・37・40～42 号土坑実測図 (1/30)	67
第 46 図	I 区 41 号土坑出土土器実測図① (1 のみ 1/8、他は 1/4)	69
第 47 図	I 区 41 号土坑出土土器実測図② (1/4)	70
第 48 図	I 区 42・43 号土坑出土土器実測図 (1/4)	72
第 49 図	I 区 43～45・47～49 号土坑実測図 (1/30)	74
第 50 図	I 区 45 号土坑出土土器実測図 (1/4)	75
第 51 図	I 区 46・50 号土坑実測図 (1/30)	77
第 52 図	I 区 46・49 号土坑出土土器実測図 (1/4)	78
第 53 図	I 区 50 号土坑出土土器実測図 (1/4)	79
第 54 図	I 区 51～53 号土坑実測図 (1/30)	80
第 55 図	I 区 51 号土坑出土土器実測図 (1/4)	81
第 56 図	I 区 52～54 号土坑出土土器実測図 (1/4)	82
第 57 図	I 区 54・55 号土坑実測図 (1/30)	83
第 58 図	I 区 1～3 号溝出土土器実測図 (1/4)	85
第 59 図	I 区 4 号溝出土土器実測図 (1/4)	86
第 60 図	I 区 1～4 号溝、1・2 号落ち込み土層実測図 (1/60)	87
第 61 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図① (1～4 は 1/8、他は 1/4)	90
第 62 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図② (1/4)	91
第 63 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図③ (1/4)	92
第 64 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図④ (1/4)	93
第 65 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑤ (96 のみ 1/6、他は 1/4)	94

第 66 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑥ (1/4)	95
第 67 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑦ (1/4)	96
第 68 図	I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑧ (1/4)	97
第 69 図	I 区 2 号落ち込み出土土器実測図 (1 のみ 1/8、他は 1/4)	98
第 70 図	I 区 1・2 号住居出土土器実測図 (9 のみ 1/8、他は 1/4)	100
第 71 図	I 区 2 号住居出土土器実測図① (1/4)	101
第 72 図	I 区 2 号住居出土土器実測図② (65 のみ 1/3、他は 1/4)	102
第 73 図	I 区 3 号住居出土土器実測図 (1/4)	103
第 74 図	I 区 4 号住居出土土器実測図 (1 のみ 1/6、他は 1/4)	104
第 75 図	I 区 5 号住居出土土器実測図 (1/4)	105
第 76 図	I 区西側流路跡出土土器実測図① (14 のみ 1/8、他は 1/4)	106
第 77 図	I 区西側流路跡出土土器実測図② (1/4)	107
第 78 図	I 区西側流路跡出土土器実測図③ (41～53 は 1/3、他は 1/4)	108
第 79 図	I b 区西側包含層出土土器実測図① (1～7 は 1/8、他は 1/4)	110
第 80 図	I b 区西側包含層出土土器実測図② (1/4)	111
第 81 図	I b 区西側包含層出土土器実測図③ (54～58 は 1/8、他は 1/4)	112
第 82 図	I b 区西側包含層出土土器実測図④ (1/4)	113
第 83 図	I b 区西側包含層出土土器実測図⑤ (1/4)	114
第 84 図	I b 区西側包含層出土土器実測図⑥ (1/4)	115
第 85 図	I b 区西側包含層出土土器実測図⑦ (1/4)	117
第 86 図	I b 区西側包含層出土土器実測図⑧ (1/4)	118
第 87 図	I b 区西側包含層出土土器実測図⑨ (199 のみ 1/3、他は 1/4)	119
第 88 図	I 区東側包含層出土土器実測図 (1/4)	120
第 89 図	I c 区西側包含層出土土器実測図① (1～3 は 1/8、他は 1/4)	121
第 90 図	I c 区西側包含層出土土器実測図② (24 のみ 1/8、他は 1/4)	122
第 91 図	I c 区西側包含層出土土器実測図③ (1/4)	123
第 92 図	I 区ピットおよびその他の出土土器実測図① (1/4)	125
第 93 図	I 区ピットおよびその他の出土土器実測図② (44 のみ 1/3、他は 1/4)	126
第 94 図	I 区出土石器① (1/3)	127
第 95 図	I 区出土石器② (1/3)	128
第 96 図	I 区出土石器③ (1/3)	129
第 97 図	II 区遺構配置図 (1/200)	131
第 98 図	II 区 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	133
第 99 図	II 区 2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	134
第 100 図	II 区 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	135
第 101 図	II 区 4 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	136
第 102 図	II 区 1～8 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	137
第 103 図	II 区 5 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	138

第 104 図	Ⅱ区 6 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	139
第 105 図	Ⅱ区 7 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	140
第 106 図	Ⅱ区 8 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	141
第 107 図	Ⅱ区 9・10 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	142
第 108 図	Ⅱ区 11 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	143
第 109 図	Ⅱ区 12・13 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	144
第 110 図	Ⅱ区 14・15 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	145
第 111 図	Ⅱ区 16・17 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	146
第 112 図	Ⅱ区 18・19 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	148
第 113 図	Ⅱ区 20・21 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	149
第 114 図	Ⅱ区 22 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	150
第 115 図	Ⅱ区 23・24 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	151
第 116 図	Ⅱ区 25 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	152
第 117 図	Ⅱ区 26・27 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	154
第 118 図	Ⅱ区 10・12・16・17・20・22・25・26・28・32・34・38・39 号掘立柱建物跡出土土器実 測図 (1/4)	155
第 119 図	Ⅱ区 28・29 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	156
第 120 図	Ⅱ区 30・31 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	157
第 121 図	Ⅱ区 32・33 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	158
第 122 図	Ⅱ区 34・35 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	159
第 123 図	Ⅱ区 36・37 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	160
第 124 図	Ⅱ区 38 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	161
第 125 図	Ⅱ区 39・40 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	162
第 126 図	Ⅱ区 41・42 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	163
第 127 図	Ⅱ区 44 号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図 (1/4)	164
第 128 図	Ⅱ区 43・44 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	165
第 129 図	Ⅱ区 45 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	166
第 130 図	Ⅱ区 46 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	166
第 131 図	Ⅱ区 1～4 号土坑実測図 (1/30)	169
第 132 図	Ⅱ区 2・3 号土坑出土土器実測図 (1/4)	170
第 133 図	Ⅱ区 4・6 号土坑出土土器実測図 (1/4)	171
第 134 図	Ⅱ区 6～9 号土坑実測図 (1/30)	172
第 135 図	Ⅱ区 8 号土坑出土土器実測図 (9 のみ 1/8、他は 1/4)	174
第 136 図	Ⅱ区 10～12 号土坑実測図 (1/30)	176
第 137 図	Ⅱ区 9～12・17 号土坑出土土器実測図 (1/4)	178
第 138 図	Ⅱ区 13～19 号土坑実測図 (1/30)	179
第 139 図	Ⅱ区 20～25 号土坑実測図 (1/30)	181
第 140 図	Ⅱ区 21 号土坑出土土器実測図 (1/4)	182

第 141 図	Ⅱ区 22・23 号土坑出土土器実測図 (1/4)	183
第 142 図	Ⅱ区 24 号土坑出土土器実測図 (1/4)	184
第 143 図	Ⅱ区 1 号溝・土層実測図および 2 号落ち込み土層実測図 (1/60)	186
第 144 図	Ⅱ区 1・2・4 号落ち込み出土土器実測図 (1/4)	187
第 145 図	Ⅱ区 4 号落ち込み出土土器実測図② (1/4)	188
第 146 図	Ⅱ区 5 号落ち込み出土土器実測図① (1/4)	189
第 147 図	Ⅱ区 5 号落ち込み出土土器実測図② (1/4)	190
第 148 図	Ⅱ区 5 号落ち込み出土土器実測図③ (1/4)	191
第 149 図	Ⅱ区木質集中部模式図および土層実測図 (1/140・1/70)	192
第 150 図	Ⅱ区木質集中部北端部実測図 (1/60)	193
第 151 図	Ⅱ区木質集中部出土土器実測図① (1/4)	194
第 152 図	Ⅱ区木質集中部出土土器実測図② (1/4)	195
第 153 図	Ⅱ区木質集中部出土土器実測図③ (1/4)	196
第 154 図	Ⅱ区木質集中部出土土器実測図④ (1/4)	197
第 155 図	Ⅱ区トレンチ出土土器実測図① (1/8)	199
第 156 図	Ⅱ区トレンチ出土土器実測図② (1/4)	200
第 157 図	Ⅱ区トレンチ出土土器実測図③ (1/4)	201
第 158 図	Ⅱ区トレンチ出土土器実測図④ (1/4)	202
第 159 図	Ⅱ区包含層およびその他の出土土器実測図① (1・2 は 1/8、他は 1/4)	204
第 160 図	Ⅱ区包含層およびその他の出土土器実測図② (25・26 は 1/8、他は 1/4)	205
第 161 図	Ⅱ区包含層およびその他の出土土器実測図③ (1/4)	206
第 162 図	Ⅱ区包含層およびその他の出土土器実測図④ (105 のみ 1/3、他は 1/4)	207
第 163 図	Ⅱ区出土石器① (1/3)	209
第 164 図	Ⅱ区出土石器② (1/3)	210
第 165 図	Ⅱ区出土石器③ (1/3)	211
第 166 図	I・Ⅱ区遺構配置及び地形復元想定図 (1/600、土層は 1/80)	224
第 167 図	I・Ⅱ区建物跡先後関係図	227

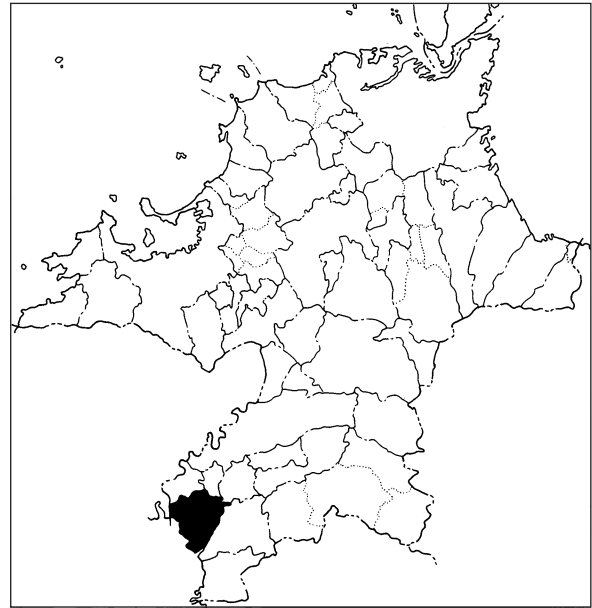
表 目 次

表 1	国道 208 号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要	3
表 2	Ⅱ区掘立柱建物跡一覧表	44
表 3	Ⅱ区掘立柱建物跡一覧表	167
表 4	蒲船津江頭遺跡 I・Ⅱ区出土石器一覧表	212
表 5	蒲船津江頭遺跡 I・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表	213

I はじめに

1 調査に至る経緯

蒲船津江頭遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴い発掘調査した遺跡である。有明海沿岸道路は、大牟田三池港、佐賀空港などの広域交通拠点及び福岡県大牟田市、柳川市、大川市、佐賀県佐賀市、鹿島市など有明海沿岸の都市群を連携することで、地域間連携、交流を図るとともに一般国道 208 号等の渋滞緩和と交通安全確保を目的として計画された延長約 55km の地域高規格道路である。このうち、福岡県内は大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの 3 事業に区分される。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長約 10km 区間であり、平成 10 (1998) 年 12 月 18 日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間指定された。2008 年 3 月 29 日には大牟田 IC から大川西 IC (21.8km) 間のうち高田 IC から大和南 IC を除く 21.8km が暫定供用され、初開通となった。



第 1 図 柳川市の位置

有明海沿岸道路建設に先立って、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所（以下「福岡国道事務所」という。）から平成 12 (2000) 年 11 月 16 日付け「一般国道 208 号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財について」で文化財の有無についての照会があった。これに対し福岡県教育庁総務部文化財保護課では平成 13 (2001) 年 2 月に 17 地点において文化財が所在し、それ以外の地点に関しても試掘確認調査等別途協議が必要である旨を回答した。そこで、福岡国道事務所及び有明海沿岸道路出張所と文化財保護課で随時協議を行い、用地を取得できた地点から試掘確認調査を実施した。その結果、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認される一方で、従来埋蔵文化財包蔵地とされていた範囲でも、客土に遺物が混入するのみで遺構が確認できないことが明らかになり、結果として本調査を要する 15 遺跡を確認した (表 1)。なお、蒲船津江頭遺跡については平成 16 年 9 月 14 日から 17 日にわたって山門郡三橋町大字蒲船津 (現在柳川市三橋町蒲船津) 周辺の試掘調査を実施した際に文化財の存在を確認し、本調査を行うこととした。

2 調査の経過

蒲船津江頭遺跡の調査は、平成 17 年度の第 1 次調査、平成 18 年度の第 2 次調査、平成 19 年度の第 3 次調査の三年にわたって行った。既存の排水溝で調査中も使用するため掘削できないものを境として、北から順に I ~ IV 区と区分した。また、道路の施工工程や用地の解決状況の都合から、各区でまとめて調査できなかったために、各区内を必要に応じて調査の着手順に a ~ c と細分した。なお、全体の調整窓口は基本的に国土交通省福岡国道事務所有明海沿岸道路出張所で



- 本発掘調査
- ▲ 遺跡なし

第2図 有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)

表1 国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要

地点	市町名	大字名(区間)	遺跡名	H19.4.1現在 対象面積 (m ²)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要	
					試掘年度	未発掘面積 (m ²)	調査年度	面積(m ²)	作成年度	面積(m ²)	主な時代	特記事項
1	大川市	津(終点 ～県道新田 橋津線間)		12,900	H18	0						試掘済み、遺跡無し
2	大川市	津(県道 新田橋津線 ～大字境)		25,700	H14・15・18	0						試掘済み、遺跡無し
3	大川市	幡保		15,400	H15・18	0						試掘済み、遺跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17・18	0	H17 H18	1,820 1,200	H19	3,020	鎌倉時代	・条里の区画溝
5	柳川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16 H17 H18	4,390 9,460 350	H19	14,200	平安時代 鎌倉時代 室町時代	・条里の区画溝 ・墨書土器
6	柳川市	西蒲池	西蒲池将監坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代 奈良時代	・条里の区画溝
7	柳川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・条里の区画溝と畑畝跡
8	柳川市	西蒲池	西蒲池下里	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・条里の区画溝
9	柳川市	東蒲池	東蒲池榎町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
10	柳川市	東蒲池	東蒲池大内曲り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
11	柳川市	矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15・16	0	H16 H17 H18 H19	2,040 430 1,820 565(860)	H17整理 H18 (H21～ 23)	1,500 880 2,475	江戸時代 明治時代	・江戸時代の町屋跡 ・水田焼の銘入り土器 ・鉄湯釜の鋳型とるつば ・街道側溝らしい大溝
12	柳川市	矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
13	柳川市	矢加部	矢加部南屋敷	10,470	H16	0	H17 H18	6,000 4,470	H20	10,470	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
14	柳川市	三橋町 柳河		4,700	H18	0						試掘済み、遺跡無し
15	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津江頭 蒲船津	9,700	H16	0	H17 H18 H19	4,700 3,300 1700	H20 ～H22	4,800	弥生時代 古墳時代 古代・中世	・弥生～中世の複合集落遺跡 ・弥生時代終末～古墳時代初頭の 礎版(掘立柱建物の柱の基礎)多数
16	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津水町 蒲船津	4,500	H17	0	H19	(1400) 4,500	(H20～ 22)	4,500	弥生時代 鎌倉時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
17	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津西ノ内 蒲船津	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
18	柳川市	大和町 徳益		4,500	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
19	柳川市	大和町 豊原		25,000	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
20	柳川市	大和町 塩塚	塩塚地蔵面 塩塚	22,740	H17～19	0					江戸時代	一部本調査必要(塩塚地蔵面遺跡) 試掘済み、遺跡無し
21	柳川市	大和町 栄	慶長本土居跡	64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	・柳川市指定史跡慶長本土居跡 一部試掘済み、遺跡無し
22	高田町	黒崎開	新開村旧隄記碑	—		0	H14 H19	—	H20	—	江戸時代	・敷粗染工法(葦など植物を敷く工法)
23	高田町	黒崎開	黒崎堤防	300		0	H16	移設作業 300	H20	300	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳河藩干拓遺跡



II 区の重機掘削および検出状況

行いたいとの要望があり、そのわずか 220 m²程度の範囲を I a 区として調査を開始した。

平成 17 年 5 月 16 日にバックホーを搬入し表土の掘削を開始した。17 日には発掘機材を搬入し、19 日に作業員による人力掘削を開始した。I a 区の次に調査を行う III a 区のバックホーによる表土掘削を 6 月 15 日に開始し、6 月 17 日には I a 区の調査を終了し、埋め戻しを開始した。

III a 区の人による掘削は 6 月 20 日より開始した。この頃から梅雨の降雨が本格化し、度々調査区が水没しては水のポンプアップを繰り返すこととなり、作業がなかなか進捗しにくい状況となった。特に 7 月 6 日には完全に水没する状態で、7 月 8 日には、北側の既存の溝へ自然排水できるように形にするため周囲に側溝を廻らし、それ以降は大幅に雨水がたまることは解消された。その後梅雨も明け、7 月 19 日からは作業をまとめて進捗していくことが可能となった。9 月 2 日には台風が接近していたので、現場事務所及びその周辺の暴風雨対策に追われることとなった。9 月 28 日には、次の調査地点となる I b 区の表土掘削のためバックホーを搬入した。III b 区は 10 月 4 日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、10 月 7 日に作業を終了させ、I b 区の調査へと移った。

I b 区においては、11 月 5 日は「ふくおか歴史彩発見事業」の一環で親子体験発掘を実施した。12 月 9 日には次の調査地点となる II a 区の表土掘削のためにバックホーを搬入した。12 月 22 日からは I b 区の図面を作成させる一方で、II a 区の人による遺構検出も開始した。12 月 28 日に平成 17 年内の作業を終了した。平成 18 年 1 月 5 日より作業を再開し、1 月 31 日にラジコンヘリにより I b 区の空中撮影を行った。2 月 2 日に調査区西側包含層をバックホーで掘り下げている際に、掘立柱建物跡の礎盤を検出した。掘形がほとんど認識できないものの多数の礎盤が存在し、ピンポールを下層に差し込んで礎盤の横木の存在を探りながら検出していく作業を 22 日まで行っ



親子体験発掘の様子

あったが、I 区については直接の施工管理が柳川土木事務所所有明海沿岸道路対策室であったため、I 区の現地での直接的な調整等は柳川土木事務所と行うこともあった。

平成 17 年度の第 1 次調査は、I a 区、III a 区、I b 区、II a 区の順に発掘調査を実施した。年度当初の柳川土木事務所所有明海沿岸道路対策室を含め有明海沿岸道路出張所での協議において、調査範囲の最も北側部分で沖端川をまたぐ橋梁の橋脚施工を早急に

た。想定していなかった急遽の礎盤の検出作業で、段取りが不十分であり、内容的に非常に残念となった点が悔やまれるが、I b 区の調査を終了した。

I b 区の礎盤検出で中断していた II a 区の調査を 2 月 23 日から再開した。外部から調査区壁を通してしみだしてくる水に対応するため、調査区の側溝を掘削した。また、遺構検出作業をほぼ終了していたが、検出された

遺構はほとんどなかったため、下層を確認するため数箇所にトレンチを掘削した。木片がまとまって出土したトレンチもあり、特に調査区中央部からは木質が密集していたため、「木質集中部」として3月7日よりその範囲を確認するために掘削範囲を広げていった。木質集中部の範囲確認の掘削を続けたが、年度内に調査の区切りをつけることが困難となり、15日に遺構の保護のため土嚢により埋め戻しを行い、年度内の作業員による掘削作業を終了した。



梅雨時のⅡ区水没状況

また、Ⅱa区に隣接するⅡb区において用地交渉が解決したため、次年度の調査に向けてバックホーによる表土掘削を一部行い、28日には平成17年度の全ての作業を終了した。

平成18年度は4月17日より作業を開始した。年度当初に作業が中断している間に調査区内にたまった多量の水をポンプアップし、18日には引き続きⅡb区の表土掘削を行うためバックホーを搬入した。24日よりⅡa区の木質集中部の掘削を再開し、他に補足するトレンチも掘削した。6月6日には佐賀大学低平地センターの林重徳教授に現地指導のため来訪いただいて、木質集中部の性格を把握するための助言を頂いた。6月9日からはⅡa区の木質集中部の調査と同時にⅡb区の遺構掘削も開始した。また、Ⅱa区の南西端や谷底にトレンチを掘削した際に礎盤が検出されたために、この段階でⅡ区においてもある程度の礎盤の広がりを把握することができた。その後6月後半にかけて木質集中部の下部を掘削してその構造を調査した。また、Ⅱb区では初めて柱穴の掘形の認識が可能な掘立柱建物跡を検出した。7月19日から25日にかけて梅雨の大雨で作業が停滞した。9月15日には台風の接近ため現場事務所及びその周辺の対策を行った。9月29日にはラジコンヘリによるⅡ区の空中撮影を行った。10月3日からは、掘形の不明な柱穴の礎盤検出する作業を開始した。Ⅱb区では突然の礎盤の検出作業で十分な対応ができなかったが、Ⅱ区ではバックホーにより少しずつ掘り下げては検出を繰り返していく方法をとることとし、作業は11月15日まで行った。

Ⅱ区の調査終了後は11月15日よりⅢb区の調査に着手した。なお、Ⅲb区中央に地元住民が利用している里道が横切っていたが、有明海沿岸道路出張所および地元区長と協議の上、調査開始前に迂回路を設置した。また、当初試掘調査の結果、Ⅲa区から北側が本調査対象地でⅢb区は未試掘地点、Ⅲb区より南は調査対象地外としていたため、Ⅲb区は遺構が希薄であることが想定された。しかし、表土掘削の開始とともに最も遺構の濃密な地点と判明した。大小多数の土坑や調査区を縦断する溝等があり、掘形の確認できる柱穴も多数検出した。調査に12月28日に平成18年内の作業を終了し、平成19年1月9日より作業を再開した。また、Ⅲb区の遺構の分布状況から本調査対象外としていたさらに南側にも遺構が続くことがほぼ確実であるため、有明海沿岸道路出張所と協議の上Ⅲb区を更に南側に一筆分拡張した。2月26日にはラジコンヘリによる空中撮影を実施した。その後バックホーにより下層の礎盤の検出を行い、調査区南側では遺構面で確認できていたものが多く新たな検出数は少なかったが、北のⅢa区の近くではまとまって検出された。なお、さらに南側に遺構の広がりが続くが予想され、その状況を把握するためにバツ

クホーによるトレンチを掘削したが、遺構面より上層に盛土されたバラス状の堆積土に含まれた多量の水がトレンチ内に流入した。そのため、礎盤の存在は確認したが、詳細な状況の確認を断念せざるを得なかった。3月30日に、バックホーによるⅢb区の埋め戻しも含め平成18年度の作業を終了した。

平成19年度は、納骨堂が所在していたが移転が終了したIc区の調査から開始した。事前の柳川土木事務所所有明海沿岸道路対策室との協議で東半部の調査を早急に終了して欲しいとの要望があったので、Ic区を東西に分けて東半部より調査を行うこととした。平成19年4月23日よりバックホーを搬入して表土の掘削を開始し、4月25日から作業員による人力掘削を開始した。土坑や一部で掘形の認識できる柱穴・礎盤も検出した。しかし、全体的に元々遺構の識別しにくい土壌である上に、Ic区では生い茂っていた葦が遺構面以下にも残存し、また納骨堂の下部の盛土の影響で遺構面がグライ化で変色している上、地盤強化のために大きな木杭が複数打ち込まれていたため、遺構検出が非常に困難な部分があった。5月28日にローリングタワーよりIc区東半の全景撮影を行った。その後5月30日までバックホーで掘り下げながら下部の礎盤の検出を行った。6月4日よりIc区西半の表土の掘削を開始し、7日より作業員の人力による掘削を開始した。検出可能な遺構がほとんどなかったため、検出面で土器の集中する部分等にトレンチを掘削し、下部の遺構の有無や礎盤の広がりを確認した。12日にローリングタワーより全景撮影を行った。その後21日までバックホーで掘り下げながら下部の礎盤の検出を行い、Ic区の調査を終了した。

Ⅲb区より南側は当初本調査対象外であったが、改めて遺構の広がりが見られたため、有明海沿岸道路出張所と協議の上、IV区として調査を実施することとした。昨年度末でトレンチを掘削した際のように大量の水が流入する上、遺構面が上層埋土の影響でグライ化し、宅地としての地盤強化のための木杭も複数打ち込まれており、悪条件が重なっていた。そのため、通常の遺構面での検出作業を諦め、当初から水をポンプアップしながらバックホーで掘り下げていき遺構・礎盤を確認していくこととした。6月26日からIV区の掘削作業を開始し、また併せてⅢa区調査時には礎盤の存在を把握していなかったため、Ⅲa区内の礎盤の確認作業も行った。IV区は礎盤の検出される範囲を追いかけていく形で徐々に調査範囲を広げていき、9月13日まで調査区内での掘削作業を行った。14日には機材を搬出し、18日には調査区埋め戻し等を含めバックホーによる作業を終了、搬出を行った。19日にハウス等の建機の搬出を行い、蒲船津江頭遺跡における全ての発掘調査の工程を終了した。

なお、各調査地点の調査期間をまとめると以下ようになる。

- I a 区 : 第1次調査 平成17年5月16日～平成17年6月17日
- I b 区 : 第1次調査 平成17年10月7日～平成18年2月22日
- I c 区 : 第3次調査 平成19年4月23日～平成19年6月21日
- Ⅱ区 : 第1次調査 平成17年12月22日～平成18年3月28日
第2次調査 平成18年4月17日～平成18年11月15日
- Ⅲ a 区 : 第1次調査 平成17年6月20日～平成17年10月7日
- Ⅲ b 区 : 第1次調査 平成18年11月15日～平成19年3月30日
- IV区 : 第3次調査 平成19年6月26日～平成19年9月19日

3 調査・整理の関係者

平成 17（2005）年度から 20（2008）年度の調査・報告に関わる関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
所長	増田 博行 (～H17.8.1) 小口 浩 (H17.8.2～)	小口 浩	小口 浩	小口 浩 (～H20.7.10) 森山 誠二 (H20.7.11～)
副所長	後田 徹 佐々木 秀明	後田 徹 春田 義信	春田 義信 佐々木 秀明 (～H19.6) 栞原 正純 (H19.7～)	白川 逸喜 栞原 正純
建設監督官	松尾 淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 鶴林 保彦	今村 隆浩 鶴林 保彦	山北 賢二 鶴林 保彦
調査第二課長	鈴木 昭人			
調査課長		鈴木 昭人	鈴木 昭人	今里 英美
調査係長	松木 厚廣	松木 厚廣 (～H18.9) 川原 一哲 (H18.10～)	川原 一哲	矢野 幸樹
専門員	相島 伸行	伊藤 良二	伊藤 良二	伊藤 良二
国土交通技官	柳瀬 純矢	谷川 勝	谷川 勝	猿澤 宗一郎
工務課長	堀 泰雄	堀 泰雄	堀 泰雄 (～H19.6) 清時 義雄 (H19.7～)	清時 義雄

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	楢崎 洋二郎	楢崎 洋二郎
総務部長	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦
文化財保護課長	久芳 昭文	磯村 幸男	磯村 幸男	磯村 幸男
同副課長	川述 昭人	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦	池邊 元明
同参事兼課長技術補佐	木下 修	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲
同課長補佐	安川 正郷	安川 正郷	中藪 宏	前原 俊史
同参事補佐（調査二係長）	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
庶務				
管理係長	稲尾 茂	井手 優二	井手 優二	富永 育夫
同事務主査	石橋 信二	野中 顯		
同主任主事	末竹 元 淵上 大輔	淵上 大輔 柏村 正央 小宮 辰之	淵上 大輔 柏村 正央 小宮 辰之	藤木 豊 近藤 一崇 小宮 辰之
同主事			野田 雅	野田 雅
調査・報告書作成				
主任技師	坂元 雄紀	坂元 雄紀	坂元 雄紀	坂元 雄紀
整理担当				
参事補佐			濱田 信也	濱田 信也
主任技師	大庭 孝夫 岡寺 未幾	大庭 孝夫		

なお、発掘調査及び報告書作成にあたっては、地元の方々をはじめ、発掘調査に参加された方々と福岡国道事務所、有明海沿岸道路出張所、柳川市教育委員会の関係者の皆様に感謝いたします。

Ⅱ 位置と環境



柳川市内を流れるクリーク

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付けで旧柳川市・三橋町・大和町で合併し、現柳川市となった。北は矢部川水系花宗川、太田川およびクリーク等を境に大川市・三潞郡大木町・筑後市に接する。東は矢部川を境にみやま市、西は筑後川を境として佐賀県と接し、南は有明海に面する。柳川市域は矢部川およびその支流である沖端川・塩塚川による大量の土砂の堆積によって形成された有明粘土を基盤とする沖積

地と、非常に広大な範囲が近世初頭以降干拓によって造成された土地からなる。標高1～6m程度と低平な平地で、水田地帯が広がっており、水田の用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにはりめぐらされる部分もあり、当地方の景観を特徴づけている。また、有明海沿岸は大小の干拓地が鱗状に展開していて日本の代表的海面干拓地帯である。それぞれの河口には干潟が発達する。

本遺跡の所在する柳川市三橋町蒲船津は、旧三橋町域の西側で旧柳川市域との境に近くの標高4m前後の低平な水田地帯に位置している。

本調査地点の所在する有明海沿岸周辺地域において集落が進出するのは弥生時代からで、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する大川市下林西田遺跡で、前期の遺構と遺物が確認されており、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。しかし、前期の痕跡を窺わせる遺跡は非常に限られており、低地の微高地上の集落の展開はこの段階では限定的なものかもしれない。弥生時代中期に柳川市域でも遺跡が確認されるようになり、遺跡の分布が拡大する。特に柳川北部に位置する蒲池地区の三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群は市北部の拠点的な集落と見られ、広域に散布地や貝塚が確認されている。西蒲池地区の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石と甕棺墓群の存在が確認されている。また三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の一つと言われている。西蒲池地区のクリークにかかる橋のたもとにも巨石を見ることができたが、有明海沿岸道路の路線内に入る範囲では遺構を確認できなかった。また、市西部では磯鳥フケ遺跡、江鶴遺跡が挙げられる。市域で散布地等が多く詳細な実態不明な弥生遺跡が多い中で、磯鳥フケ遺跡では本格的な調査によって弥生中期後半段階での掘立柱建物跡を伴う低地の集落の様相が明らかとなった。先述の大川市下林西田遺跡でも中期初頭～前半を最盛期としており、酒見貝塚では中期・後期・終末期の井戸が検出されている。後期になると一本松遺跡、礎盤の出土した正行西の頭遺跡、松の木塚遺跡、日渡遺跡など遺跡が増加する。なお、本調査地点の所在する蒲船津の二ッ川左岸では弥生後期から古墳時代の土器が出土することで知られていた。

古墳時代では、後期に西蒲池古塚遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が出土しており、ヘータカサン遺跡や地藏堂遺跡などの集落遺跡がさらに増加する。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加

- 1 坂井長水遺跡
- 2 西蒲池古塚遺跡
- 3 西蒲池將監坊遺跡
- 4 西池蒲古溝遺跡
- 5 西蒲池下里遺跡
- 6 東蒲池大内曲り遺跡
- 7 東蒲池榎町遺跡
- 8 矢加部町屋敷遺跡
- 9 矢加部五反田遺跡
- 10 矢加部南屋敷遺跡
- 11 蒲船津江頭遺跡
- 12 蒲船津水町遺跡
- 13 蒲船津西ノ内遺跡
- 14 榎津城跡
- 15 栗木町遺跡
- 16 小保遺跡
- 17 津村貝塚
- 18 津村城跡
- 19 浦田遺跡
- 20 北島ノ一遺跡
- 21 宮ノ後遺跡
- 22 郷原遺跡
- 23 北古賀遺跡
- 24 西田口内城跡
- 25 三丸中小路遺跡
- 26 三丸東田口遺跡
- 27 宮ノ前遺跡
- 28 園田遺跡
- 29 蒲池遺跡群
- 30 東蒲池門前遺跡
- 31 東蒲池蒲池遺跡
- 32 前田遺跡
- 33 鬼古賀遺跡Ⅱ
- 34 下木佐木遺跡Ⅰ
- 35 天神松遺跡
- 36 下木佐木遺跡Ⅲ
- 37 馬場遺跡
- 38 鬼古賀遺跡Ⅰ
- 39 中村遺跡
- 40 扇ノ内遺跡
- 41 玉垂命神社遺跡
- 42 南矢ヶ部遺跡Ⅰ
- 43 南矢ヶ部遺跡Ⅱ
- 44 阿弥陀屋敷遺跡
- 45 東小路遺跡
- 46 磯鳥ブケ遺跡
- 47 松ノ木三十六遺跡
- 48 赤太郎遺跡
- 49 一本松遺跡
- 50 日渡遺跡
- 51 ヘータカサン遺跡
- 52 地蔵堂遺跡
- 53 蒲船津城跡
- 54 浮島天神遺跡
- 55 徳益ハツ枝遺跡
- 56 今古賀城跡
- 57 逆井手遺跡
- 58 内新聞遺跡
- 59 西島揚遺跡
- 60 江崎城跡
- 61 垂見古墳
- 62 垂見遺跡



第3図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

が原因であろう。

律令制下では北部が三潞郡、南・東部が山門郡に属していたと思われるが、郡界は不詳である。条理が敷かれ、土地改良事業が行われる以前はその跡をうかがわせるクレークも見られた。平安時代末期には三潞郡域を中心に三潞庄、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する。旧三橋町域は瀬高下庄に属したが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。奈良時代では西蒲池将監坊遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が認められる。平安時代では東蒲池榎町遺跡で10世紀の遺構が多く見られ、西蒲池下里遺跡でも溝が検出された。中世初頭では西蒲池古塚遺跡、東蒲池大内曲り遺跡、坂井長永遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が出土している。中世後期には矢加部南屋敷遺跡で中国製陶磁器が多く見られ、有力豪族の蒲池氏との関連も想起させるものである。

戦国時代末期に蒲池氏は滅亡し、天正15(1587)年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。なお、蒲船津地内の南部に所在した蒲船津城は蒲池氏の支城の一つで、鍋島勢の攻撃の前に落城するが、その後も鍋島輩下の城として大友勢の柳川侵攻の際にも歴史上に登場する。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易され、田中吉政が筑後国主となり、慶長6(1601)年に入国した。

田中吉政は慶長本土居の建設、掘割の掘削や街道整備など多くの土木事業を行った。慶長本土居は現在道路として使用されており、掘割は「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が領有するに至った。



深い遺構の掘削作業

参考文献

- 鏡山 猛 1956『九州考古学論攷』吉川弘文館
筑後考古学研究会 1997『筑後考古』第9巻
福岡県教育委員会 1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集
柳川市 2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編
平凡社 2004『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻
福岡県教育委員会 2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集
福岡県教育委員会 2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集
福岡県教育委員会 2008『坂井長永遺跡(1・2次) 西蒲池古塚遺跡(1～4次) 西蒲池将監坊遺跡(1・2次) 西蒲池古溝遺跡 西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集

Ⅲ 調査の内容

1 遺跡の概要

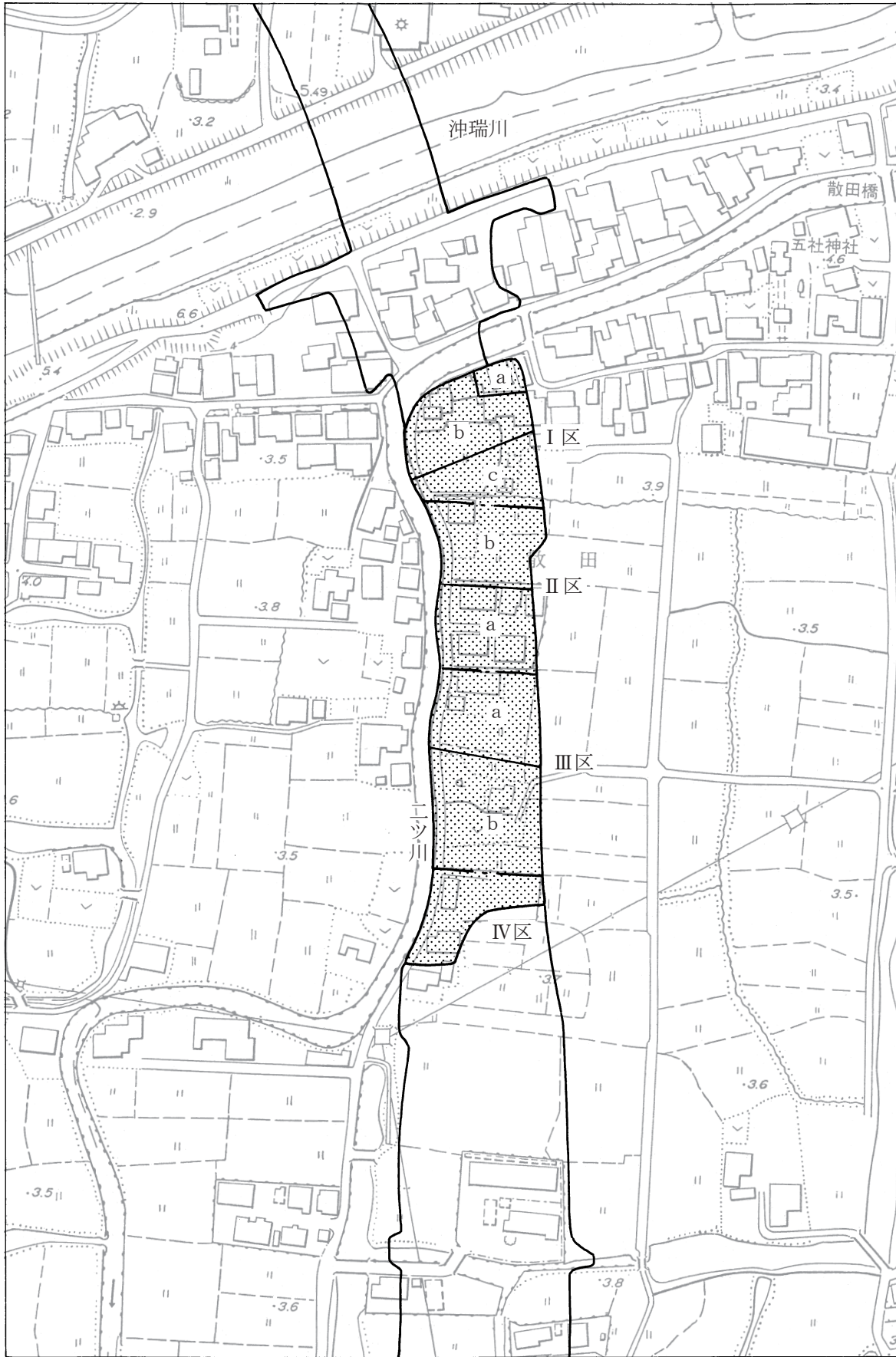
(1) 遺跡の概要

本調査地点は柳川市内で旧三橋町域の西端に所在し、西鉄柳川駅の約 800 m 北東に所在する。沖端川南岸の標高 4 m 前後の低平な水田地帯の中に位置する調査区周辺の旧地形は把握し難く、低地内に微高地が散在する様相を呈していたと想定される。遺跡はそのような限られた微高地上の立地と考えられる。この調査区内の土壌は、地山となる基盤層、包含層や遺構の埋土はともに低湿地特有の粘質土である。この土壌は、調査の円滑な進行の妨げとなる。水捌けが著しく不良で、降雨等で調査区内に溜まった水は全てポンプアップする必要があった。何よりも、遺構検出をはじめとして土質の相違の判別が非常に困難を伴う。また、表土の除去後に遺構面で一度滞水や乾燥の影響を受けると、再度同一面での遺構検出はほぼ不可能な状態となる。

ほとんどの遺構と遺物が弥生時代終末から古墳時代前期にあたるもので、一部古代・中世のものも見られる。主な遺構に井戸を含む土坑、溝、落ち込み等があり、特筆すべきは掘立柱建物跡の柱穴の基底部にあたる礎盤を多数検出したことである。この礎盤は、柱穴の底に沈み込み防止用と思われる樹皮を敷いて、その上に乗せた横木と組み合わせることにより柱を固定したものである。柱の下端と横木中央の連結部には欠き込みを施して、連結を強固にしている。柱穴の埋土の認識・掘形の検出は困難な場合が多い。これは、特に礎盤自体が複雑に切り合う場合、柱穴自体の掘形と柱を抜く際に掘削した痕跡が錯綜してより複雑な切り合いとなっていることや低湿地の堆積土壌の特性が影響していると想定される。また、掘削したトレンチ下部から検出された礎盤に伴う柱穴の掘形について、トレンチ壁面での確認を試みたが、ほとんどが認識できる状況ではなかった。そのため、柱穴を十分な形で記録することを断念し、同一建物の礎盤の組み合わせや全体的な建物の配置等の情報を優先して抽出するため、各礎盤の位置を把握することとした。そのため、検出面で確認できた遺構の調査後に、礎盤が確認できるところまで上部の土をバックホーで掘削しながら、最後は人力で掘削した。また更にその下部の礎盤を探し、出土しなければバックホーでの掘削地点を横に移して作業を繰り返していった。そのため、ほとんどの建物の礎盤の組み合わせは、図面整理の段階において相対的な位置関係を中心に判断した。出土遺物は、弥生土器・土師器を中心とした土器がパンケース 600 箱以上に及び、低湿地内の立地ということもあり木器も多数出土した。

また、基本土層等でも分層の困難な部分があり、好条件が伴わないと地山と包含層の境界も厳密には判別し難い場合がある。そのため、遺構面の認識が困難な点とも併せて、調査区内の地形の変化を把握し、旧地形を判断するのは難しい。この地形の把握については、特徴の表れたトレンチの土層とトレンチ下部の遺物や木質の出土状況や各礎盤間の高低差等の複数の要素をもとに判断し、「Ⅳ まとめ」(223 頁)において後述する。

調査区はⅠ～Ⅳ区に区分され、既存の排水溝で調査中も使用するため掘削できないものを境界としている。また、道路建設の施工工程や用地の解決状況の都合から、各区でまとめて調査できなかったために、各区内を必要に応じて調査の着手順に細分した。本報告ではⅠ・Ⅱ区を対象とする。



第4図 周辺地形図および各調査区位置図 (1/2, 500)

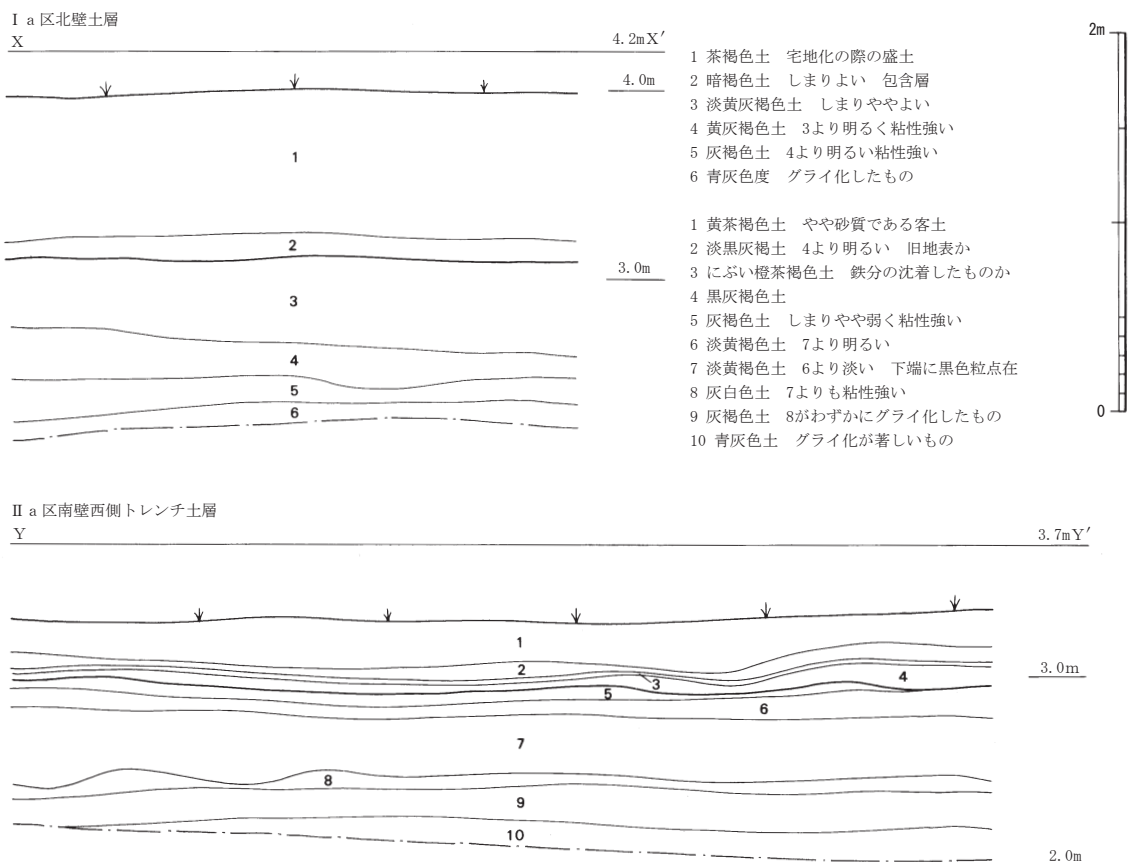
(2) 基本層序

当遺跡は基本的に水田地帯の中に位置するが、調査区内では広い範囲が宅地として利用される他、納骨堂が立地していた。周辺の田面標高 3.3 ~ 3.5 m で、宅地等で利用されていた部分は標高 4.0 m 前後である。

基本層序は第 5 図で I 区の北端部と II 区の南端部のものを図示した。最上層の盛土、客土以外の堆積土はいずれも低湿地に特徴的な非常に粘性の強い軟弱な土質である。

I 区では宅地利用の際の盛土 (1 層) が厚く堆積し、その直下の包含層の暗褐色土 (2 層) 以下は基盤層の地山であり、その境界面が遺構面である。基盤層も上位から淡黄灰褐色土 (3 層)、黄灰褐色土 (4 層)、灰褐色土 (5 層) と区分され、以下はグライ化した青灰色土 (6 層) となる。

II 区でも宅地化の際の客土 (1 層) が最上層にあり、以下に淡黒灰褐色土 (2 層)、にぶい橙茶褐色土 (3 層)、黒灰褐色土 (4 層)、灰褐色土 (5 層) と薄い層が連続して堆積する。これらは、耕作されていた際の痕跡と考えられる。以下は包含層で淡黄褐色土 (6 層)、より明るい淡黄褐色土 (7 層) でややにごりのあるものである。そこから灰白色土 (8 層)、ややグライ化した灰褐色土 (9 層)、グライ化の著しい青灰色土 (10 層) と続き、これらはそれまでの上層の堆積土とは異なりにごりが少ないため、当初地山と考えられた。しかし、後に木質集中部や III 区の調査の結果、谷状に落ち込んでいる部分と考えられ、このレベルではまだ基盤層に達しておらず、これら 3 つの層も包含層と考えられるに至った。



第 5 図 I・II 区基本土層実測図 (1/40)

よって、Ⅱ区の土層図では基盤層のレベルやそこまでの堆積状況を全て表示できておらず、Ⅰ区との対応関係も不明瞭で地形の変化等を把握するには不十分である。そこで、各区調査終了時にバックホーで掘削して記録した部分やトレンチの特徴的な土層とともに、その際の遺物や木質の出土状況も併せて調査区内の地形の変化を把握した。また、土層の判断も好条件が伴わないと地山と包含層の境界も厳密には判別し難い場合があるため、各礎盤の高低差も手掛かりとしながら旧地形を判断することとした。これらについては「Ⅳ まとめ」(223頁)で後述する。

なお、土層を表示するにあたり、グライ化は土壌の堆積後に地下水位の影響により変色したもので、堆積土の有意な単位を反映するものではないと判断された。

2 Ⅰ区の検出遺構と遺物

(1) Ⅰ区の概要

Ⅰ区はa～cに細分され、全調査区中最も北側に位置する。Ⅰa区とⅠb区は第1次調査で平成17年度の、Ⅰc区は第3次調査で平成19年度の調査実施地点で、Ⅰc区は道路建設の施工工程の都合から東西に分けて東側から順次調査を実施した。検出面より下部の状況を確認するためや降雨の際に水ためとして排水等に利用するために、a～cの小調査区の境界や調査区隅に複数の側溝やトレンチを掘削した。また、Ⅰb・c区西側ではにごりのある包含層中(西側包含層と呼称する)で遺構がほとんど検出できなかったため、下部の遺構の有無を確認するためにも土器の集中する部分等に任意にトレンチを掘削した。礎盤の広がりや予測できたⅠc区の調査段階では、その分布範囲確認の目的も兼ねている。

Ⅰa・b区は元宅地であり、大幅な盛土のため地下の遺構面以下に大きな影響はなかったが、Ⅰc区では東側に直前まで立地していた納骨堂の下部の盛土が遺構面がグライ化し変色する影響を与えている上、地盤強化のために大きな木杭が複数打ち込まれていた。また、Ⅰc区の全体的に生い茂っていた葦が遺構面以下にも残存していることもあり、元々遺構が識別しにくい中で遺構検出が一際困難な部分があった。また、Ⅰa・b区ともに礎盤が集中する周辺から西側にかけてにごりの強い黄灰褐色の包含層が広がっており(実際は建物の柱穴が多数切り込んでいるはずだが、ほとんどが認識できない)、多量の土器が出土した。調査区内での標高は3.0m前後で、面積は全体で2350㎡である。遺構・遺物の大半は弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのもので、わずかに中世のものも含まれる。

主な遺構は約150基の礎盤から28棟分の掘立柱建物跡の組み合わせを確認した。土坑は当初55基として調査したが、後に掘立柱建物跡の柱穴の一つと判断したものは、土坑から除外し欠番とした。他に溝4条、落ち込み3基があり、西端にはクリーク跡が南北に通っている。なお、Ⅰa区は狭小な範囲で最初に調査を行った地点であり、遺構の検出等に不慣れで判断を誤った点が多分にある。そのひとつとして、1号落ち込みの最上層の暗褐色土の埋土の広がりを竪穴住居跡の切り合いと判断してしまった。そして、下層の地山に近い埋土は認識できず、その地山との境界を平面的にも底面でもほとんど正確に把握することができなかった。また一方で、Ⅰa区の南東周辺の側溝や竪穴住居跡と誤認して掘削した部分から土器が出土した。この包含層(東側包含層と呼称する)は認識しにくく、分布範囲は不明瞭であるが、40号土坑は5cm程度の包含層を掘削して検出されたため、この一帯まで広がっていることが想定される。

Y-53 560

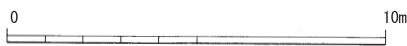
I a区

I b区



Y-53 560

Y-53 600



X+18 980

西側流路跡



図 (1/200)

X+18 960

X+18 940

(2) 掘立柱建物跡

I 区の掘立柱建物跡は、検出した約150基という多数の礎盤の相対的な位置関係から28棟分の組み合わせを把握した。少ないながら最初の検出面で柱穴の掘方を確認できたものもあるが、この段階で組み合わせが揃い建物を把握するに至ったものはない。このため、掘形が確認できない大半の柱穴もほぼ同様の面から掘削されていると想定できる。建物は1×1間もしくは2×1間である。I b区の西側からI c区の中央部にかけて礎盤が特に集中する範囲があり、その西側では礎盤は途切れ、東側では希薄となる。ただ、I b区では埋め戻しと併行した中での想定外で急遽の礎盤の検出作業であったため、東側・北側では広い範囲でその十分な確認作業ができたとは言い難い。段取りが不十分で取りこぼしも少なからずあるものと思われるが、わずかながら行ったトレンチの掘削とI c区東側の状況から、さほどの密度はないと想定される。

なお、以下で表示する梁行・桁行の数値は、それぞれの建物ごとの確認可能な柱間の平均値とする。

1号掘立柱建物跡（図版3、第7図）

I 区中央部の東側に位置する1×1間の建物である。建物1-1・3、ピット147からなり、礎盤の横木の埋置軸に共通性が見られ、これら柱穴の組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.1m、桁行3.5mを測り、床面積は10.9㎡程度となる。柱穴の内2つは検出面で把握でき、1つは攪乱により確認できなかった。確認できた柱穴の平面は隅丸方形である。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第10図1～3）

1は甕の口縁部である。2は頸部で緩やかに屈曲して口縁部が外側にのびる鉢である。3は器台の口縁部付近で、透かし孔の一部が残存する。

2号掘立柱建物跡（図版3、第7図）

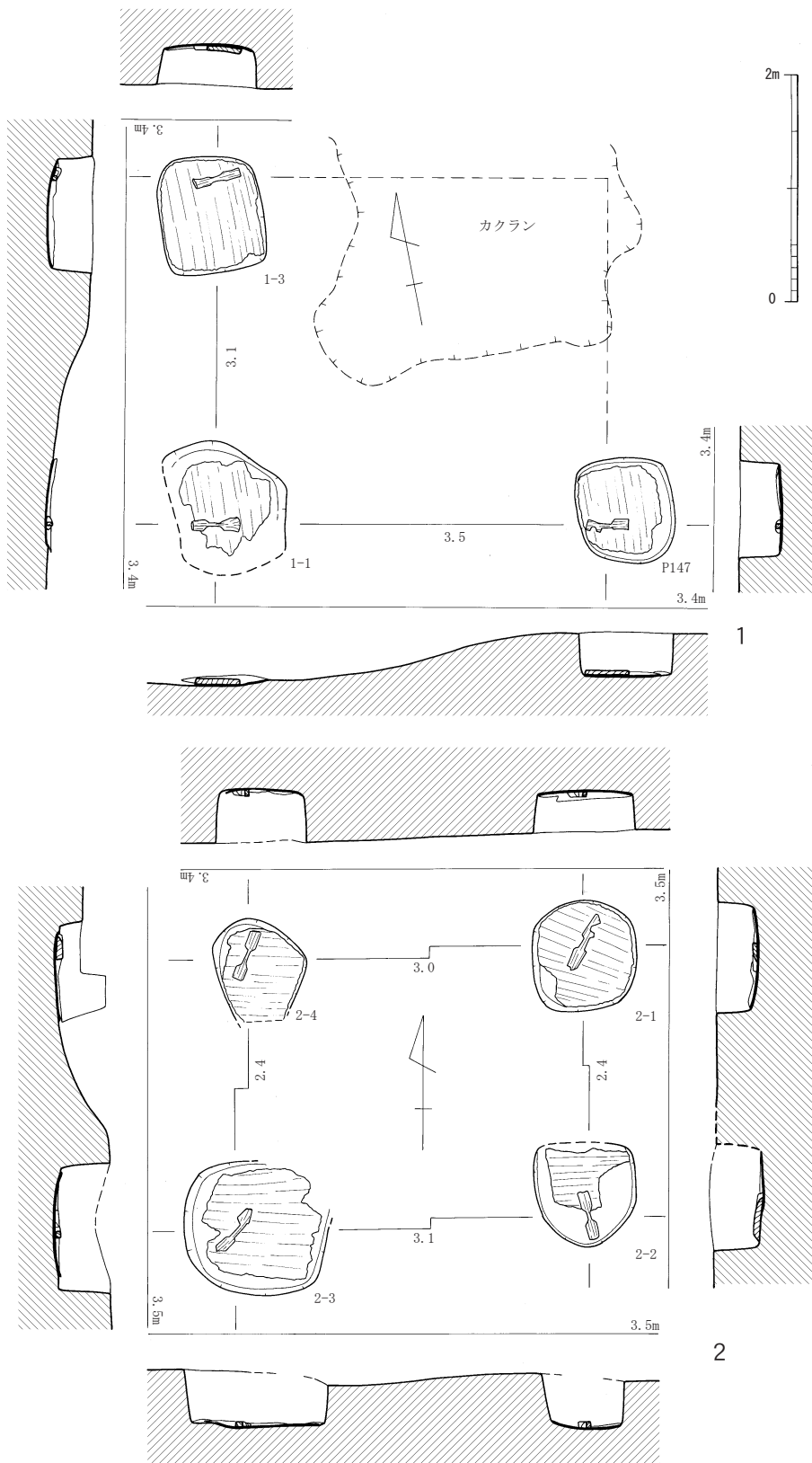
I 区東端で1号建物の東側に位置し、1×1間の建物である。建物2-1～4からなり、礎盤の横木の大きさ・形状等の類似する点から、これら柱穴の組み合わせによるこの建物の確実性は高い。一部で3号建物と切りあい、先後関係は明瞭ではないが、平面の検出状況から3号建物より後出と判断した。梁行2.4m、桁行3.05mを測り、床面積は7.3㎡程度となる。柱穴は他の遺構との切り合いが多く先後関係が不明瞭な点もあるが、検出面でほぼ確認できたものばかりである。柱穴の平面はほぼ隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第10図4～12）

4～7は壺の口縁部で、7は口唇部にキザミを付す。8は胴部が強く張り、頸基部で屈曲して非常に短い口縁部が外に開く小型の短頸壺である。9は甕の口縁部。10は高杯の口縁部。11は頸部で屈曲して口縁部が外側へ直線的にのびる鉢である。12は素口縁の鉢。

3号掘立柱建物跡（第8図）

I 区東端で1号建物の東側に位置し、2×1間の建物である。P131・132・134他からなり、北東部分は調査区外に延びている点ではこれらの組み合わせにやや不安がある。ただ、礎盤の横木

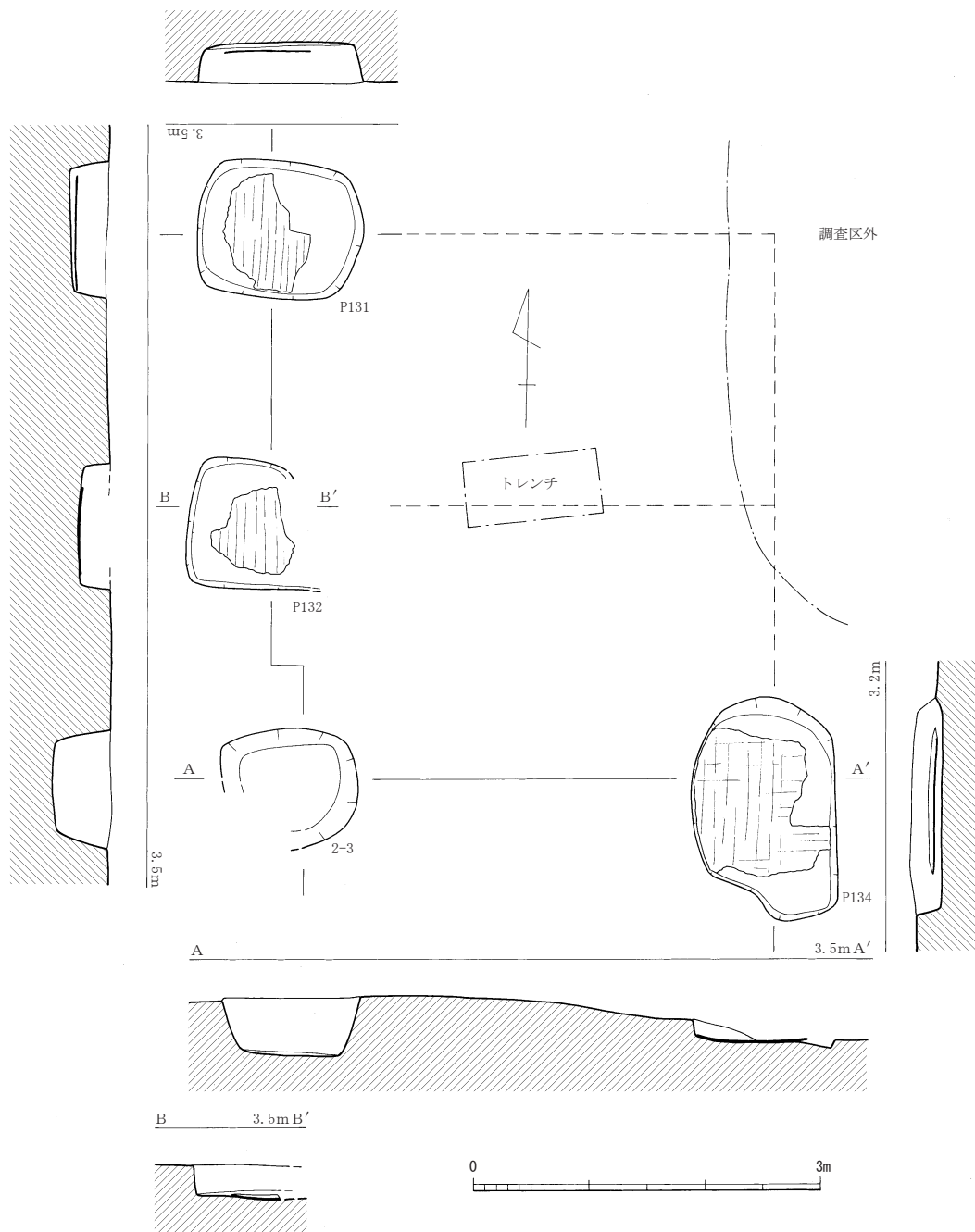


第7図 I区1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

が検出段階で既に失われていた点は、建物廃絶時とともに横木を持ち去った共通性として重視することができる。一部で2号建物と切りあうものの先後関係は決して明瞭ではなかったが、平面の検出過程で見られた状況から2号建物に先行すると判断した。横木が無いため概算であるが、梁行約4.3m、桁行約4.7mを測り、床面積は約20㎡程度となる。西側柱穴は検出面で確認できたが、東側柱穴のP134はやや下部に掘り下げた段階で確認した。南西端の柱穴では礎盤が検出できなかった。柱穴は多くが隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる遺物は出土していない。

4号掘立柱建物跡 (第9図)

I区中央部より西寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤 b2・b14・b18・



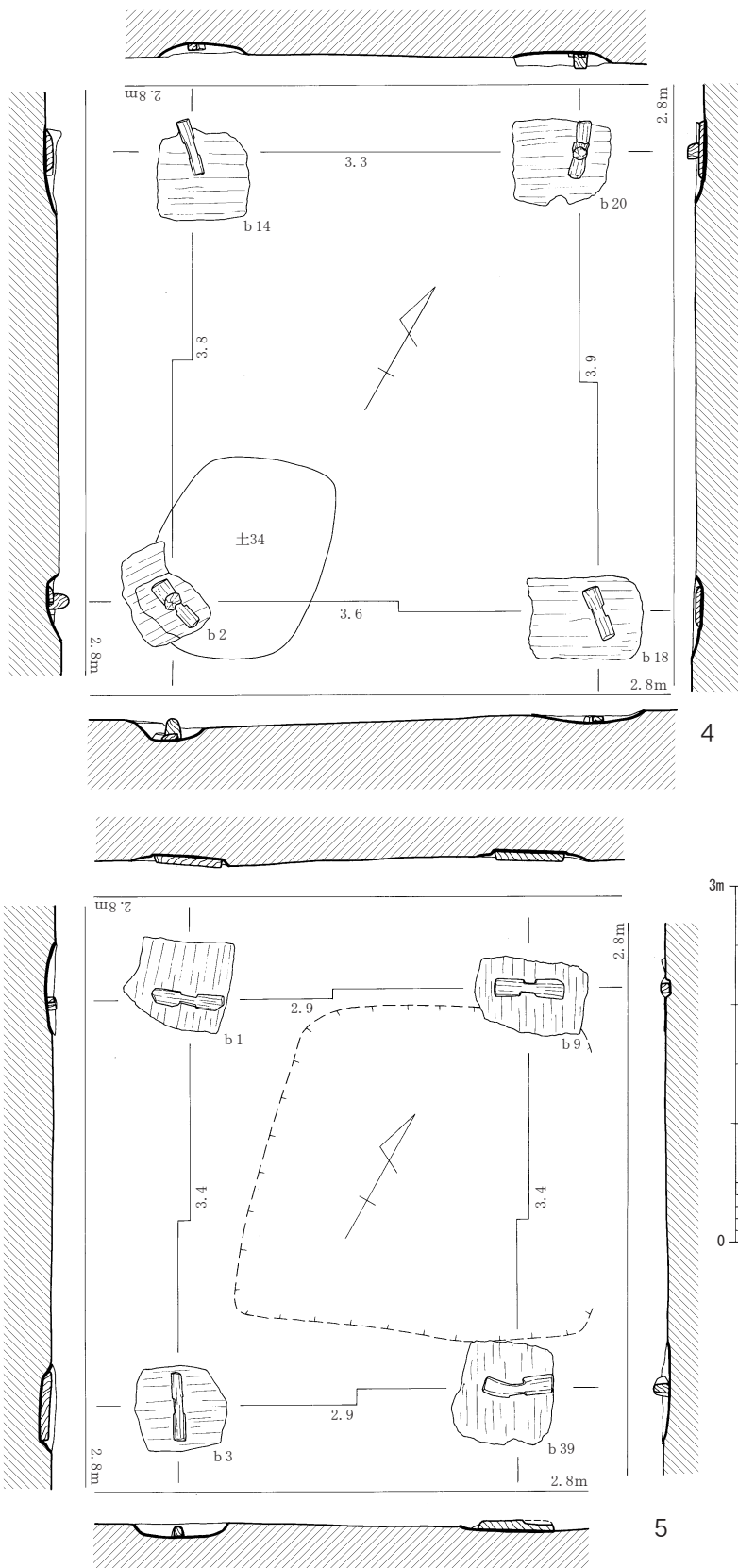
第8図 I区3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

b20 からなり、横木の形状の類似性や礎盤 b2・b20 で柱根が残存するという共通点からもこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行 3.45 m、桁行 3.85 m を測り、床面積は 13.3 m² 程度となる。

柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに西側に低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第10図 13～32)

13～15 は頸基部で強くくびれ、口縁部が外反しながら開く壺である 14 は頸基部に断面三角形の突帯を有しキザミを付す。15 は口唇部にキザミを付す。16 は壺の口縁部である。17 は頸基部



第9図 I区4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

でややくびれ、口縁部がわずかに外側へ直線的にのびる壺である。18は頸基部のくびれが非常に弱く、短い口縁部が上方へのびる短頸壺である。19は頸基部で屈曲し、非常に短い口縁部が外側へのびる短頸壺である。20は脚部を有する壺で外面には密にミガキを施す。21～26は在地系甕の口縁部である。27は甕の底部でわずかにレンズ状である。28・29は高坏の口縁部である。30は外側へのびる鉢の口縁部である。31・32は素口縁の鉢である。

4

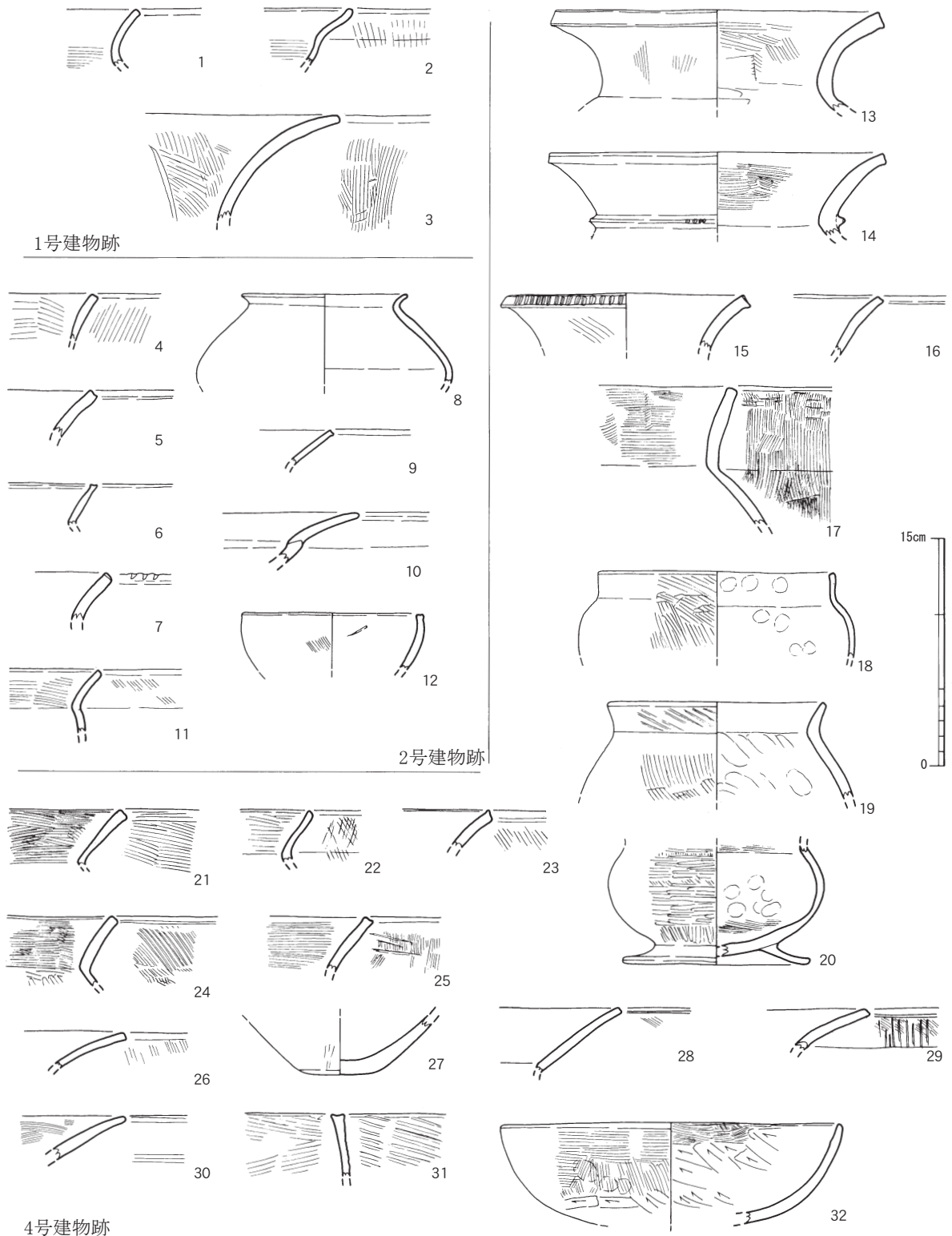
5号掘立柱建物跡 (第9図)

I区中央部より西寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤b1・b3・b9・b39からなり、横木の埋置軸が桁・梁方向と共通しており、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。6号建物と切る。梁行2.9m、桁行3.4mを測り、床面積は9.9㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器 (第12図1～18)

1～5は壺の外反する口縁部で、1は口唇部にキザミを付す。6～8は在地系甕の口縁部および肩部にかけてである。9・10は甕の底部。11・

5



第10図 I区1・2・4号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)

12は高杯の低い脚部である。13・14は素口縁の鉢。15は鉢の外側へのびる口縁部。16は脚部を有する鉢の脚部と胴部の接合部付近で、低い突帯が廻る。17・18は器台で透かし孔が残存する。17の上下の透かし孔の間に平行文の文様帯を有す。

6号掘立柱建物跡（第11図）

I区中央部より西寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤b7・b11・b40・b43からなり、横木の埋置軸が桁・梁方向と共通しており、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。礎盤b43では小さな杭が下面に打ち込まれる。5・8号建物に切られる先後関係が認められる。梁行3.4m、桁行3.95mを測り、床面積は13.4㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第12図19～36）

19～22は外反する壺の口縁部である。23は在地系複合口縁壺の口縁部である。24は頸基部で屈曲して外半して開く壺の口縁部である。25は壺の口縁部である。26～30は在地系甕の口縁部から肩部にかけての部位である。31・32は壺の底部で、32の底部はわずかにレンズ状である。33は外反して開く高杯の口縁部で内外面ともにミガキを施す。34は大型の素口縁の鉢である。35・36は器台で、透かし孔が部分的に残存し、35は上下の透かし孔の間の胴部中位に平行文の文様帯を有する。

7号掘立柱建物跡（第11図）

I区中央部より西寄りに位置し、2×1間の建物である。礎盤b5・b17・b22・b27・b48からなり、1基は攪乱により消失している。これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安があるが、横木の大きさの共通性やその加工の少ない形状が主体である点を重視したい。8・9号建物に切られる先後関係である。梁行2.8m、桁行4.0mを測り、床面積は11.2㎡程度となる。柱穴は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。

出土土器（第14図1～6）

1は頸基部で強くくびれ、口縁部がやや外反しながらのびる広口壺である。2は壺の口縁部。3は胴部が扁球形で、頸基部のくびれは弱くわずかに外反して口縁部が上方にのびる壺である。4・5は在地系の甕の口頸部。6は甕の底部である。

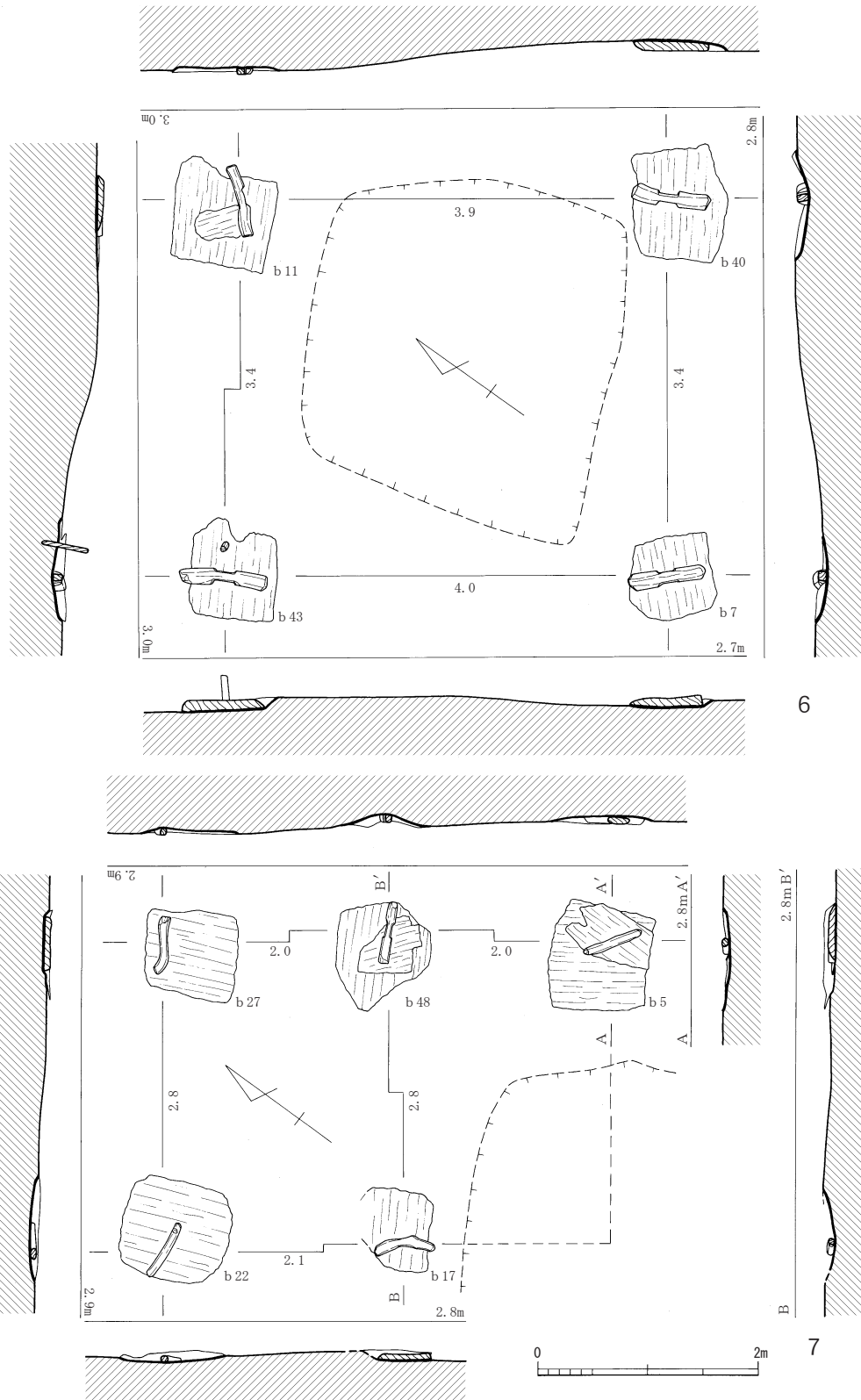
8号掘立柱建物跡（第13図）

I区中央部より西寄りに位置する1×1間の規模の建物である。礎盤b4・b15・b37・b38からなり、礎盤b38は切り合いにより横木が失われているものの、他の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性を基にすると、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと判断できる。6・7号建物を切り、9号建物に切られるという先後関係が確認できる。梁行3.0m、桁行3.4mを測り、床面積は10.2㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、検出した礎盤の形状より隅丸方形に近い平面形と考えられる。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第14図7～23）

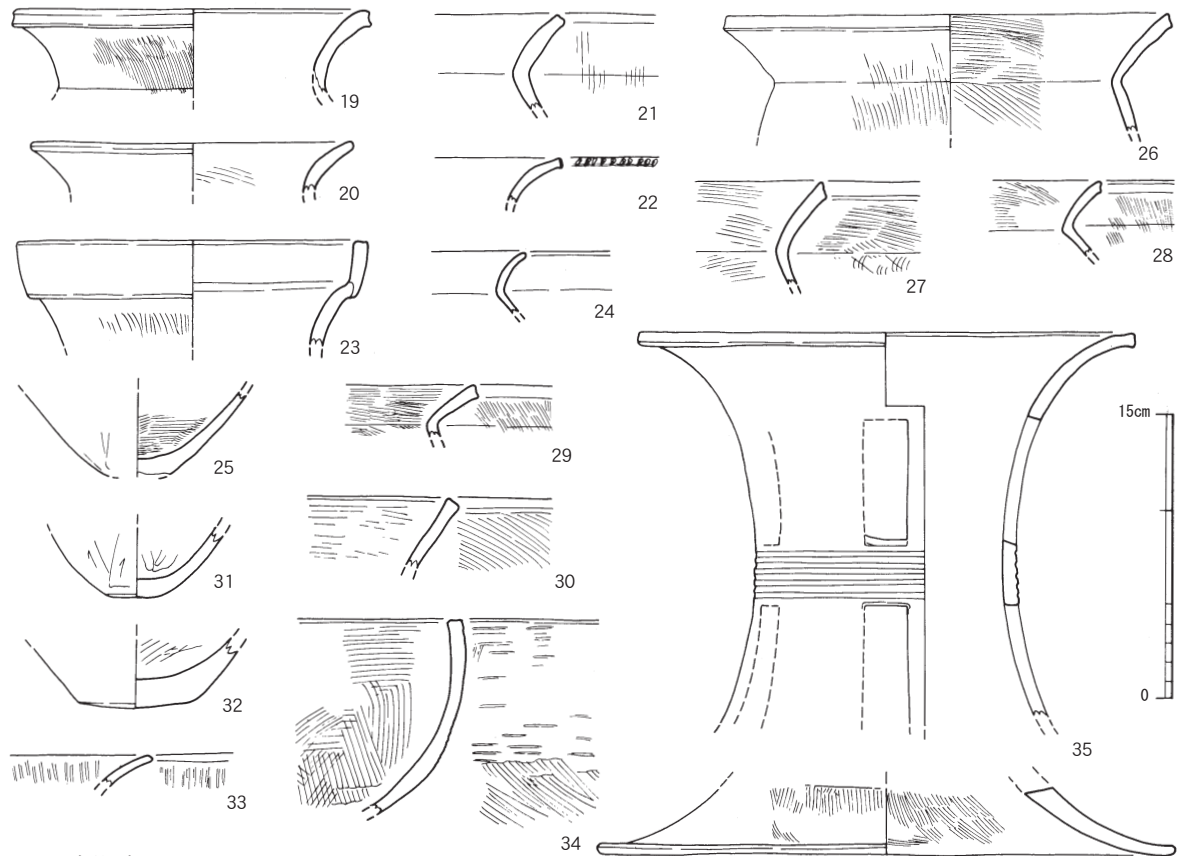
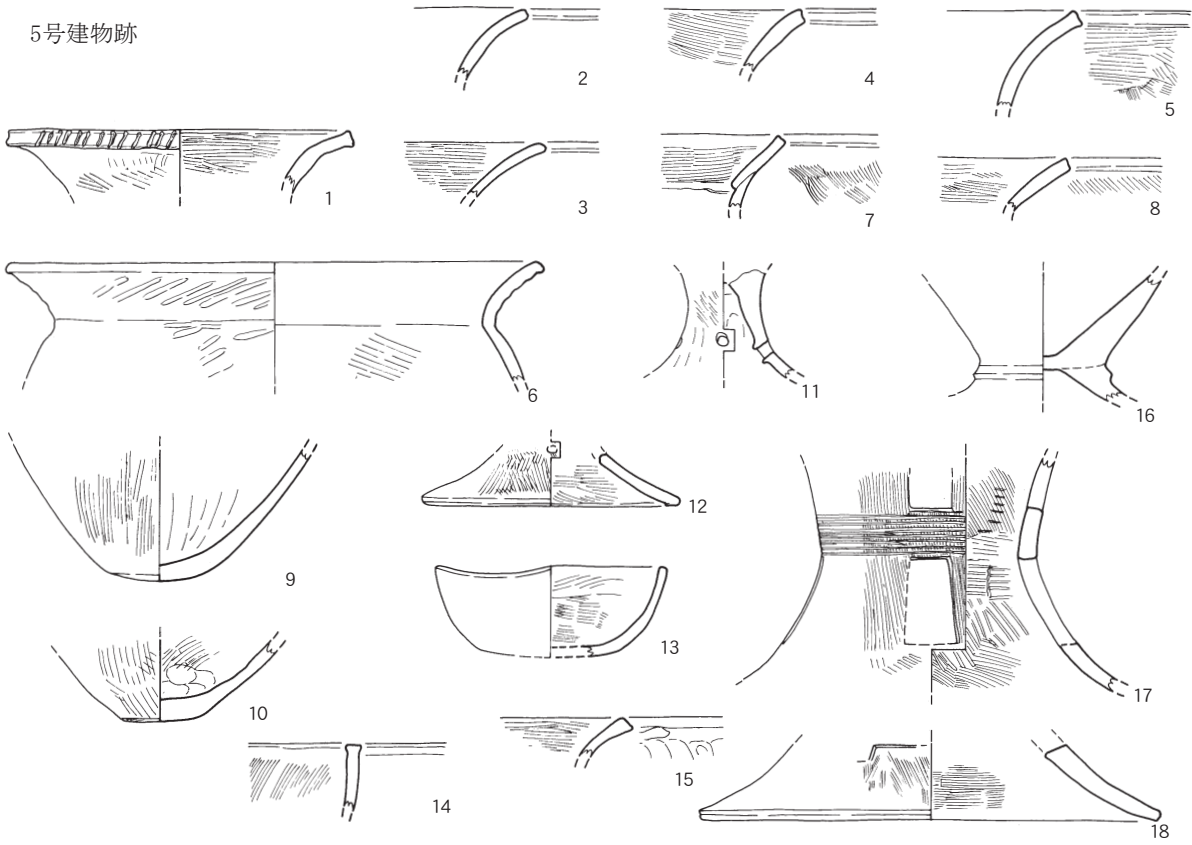
7～9は頸基部で強くくびれて、口縁部が外反して開く広口壺である。9は口唇部にキザミを付し、頸部外面に低い突帯が廻る。10は頸基部で強く屈曲して短い口縁部が直線的に外側への

びる短頸壺で、なで肩の器形である。11は頸基部で強く屈曲して短い口縁部が外反してのびる壺である。12～16は在地系甕である。17・18は高杯の脚部である。19～21は素口縁の鉢である。22は頸基部で屈曲して口縁部が外反してのびる鉢である。23は支脚と思われる。



第11図 I区6・7号掘立柱建物跡実測図(1/60)

5号建物跡



6号建物跡

第12图 I区5·6号掘立柱建物跡出土土器实测图(1/4)

9号掘立柱建物跡（第15図）

I区中央部より西寄りに位置し、2×1間の建物である。礎盤b10・b16・b38 - 2・b42・b44からなり、1つは対応する位置に攪乱があるために失われているが、他の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。7・8号建物を切っている。梁行3.5m、桁行4.55mを測り、床面積は15.9㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（図版24、第14図24～34）

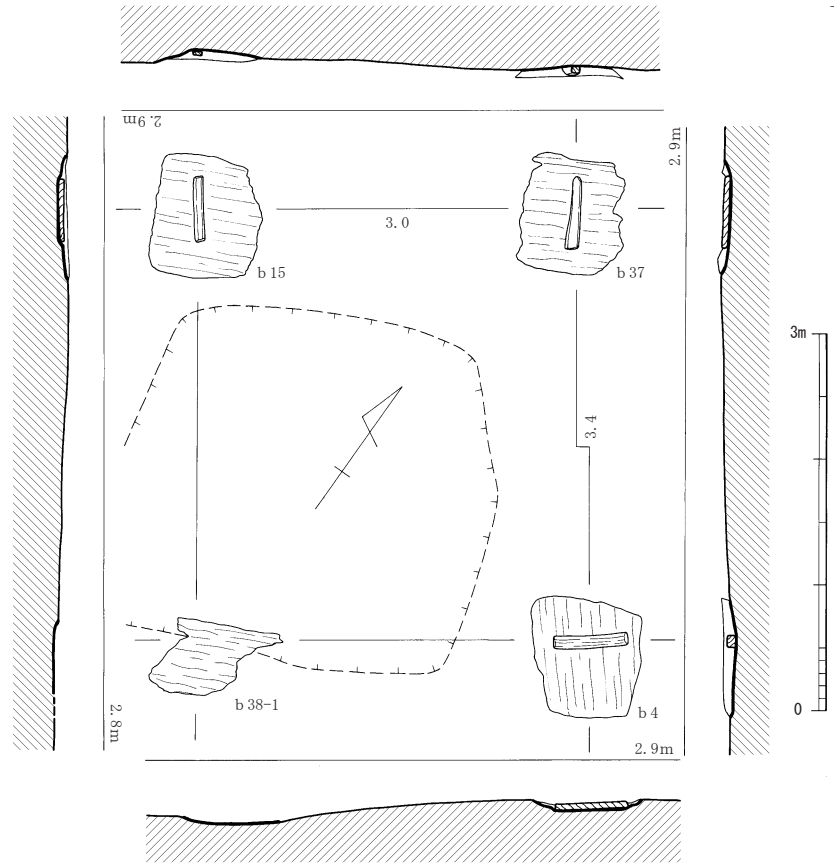
14は頸部が緩やかに屈曲して口縁部がやや外側へ開く壺である。25・26は胴部が扁球形で、しまりの弱い頸基部から口縁部が直線的に上方にのびる直口壺である。27・28は地系の甕の口頸部である。29は小型の甕の口頸部である。30は高坏の杯部で、内面に暗文が施される。31は端部が肥厚して丸く収まる高坏の口縁部である。32は高坏の杯部と脚部の接合部で、内外面ともにミガキが残存する。33は素口縁の鉢である。34は頸部で屈曲して短い口縁が外側へ開く鉢である。

10号掘立柱建物跡（第15図）

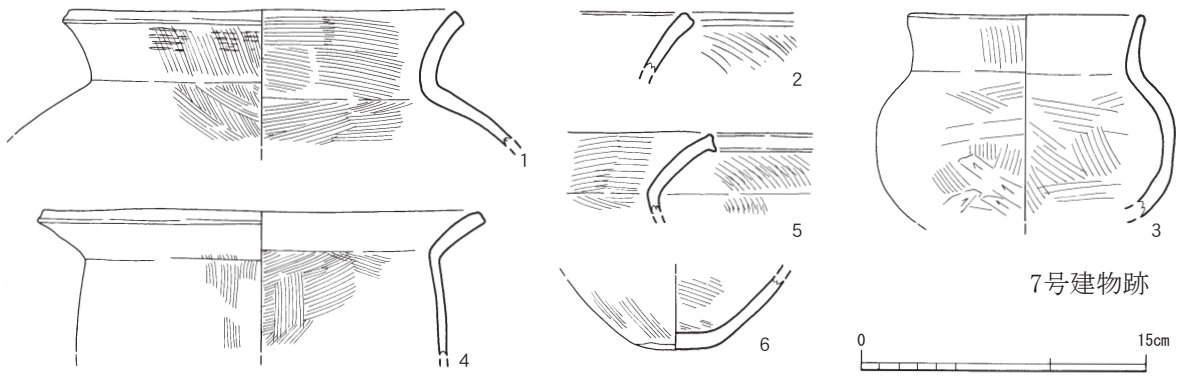
I区中央部より西寄りに位置し、2×1間の建物である。礎盤b8・b(46・50)・c21・c23・c25・c47からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。11号建物に切られる先後関係が認められる。梁行3.5m、桁行4.8mを測り、床面積は16.8㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間である程度の高低差はあるが、共通した傾向は見出し難い。

出土土器（第17図1～19）

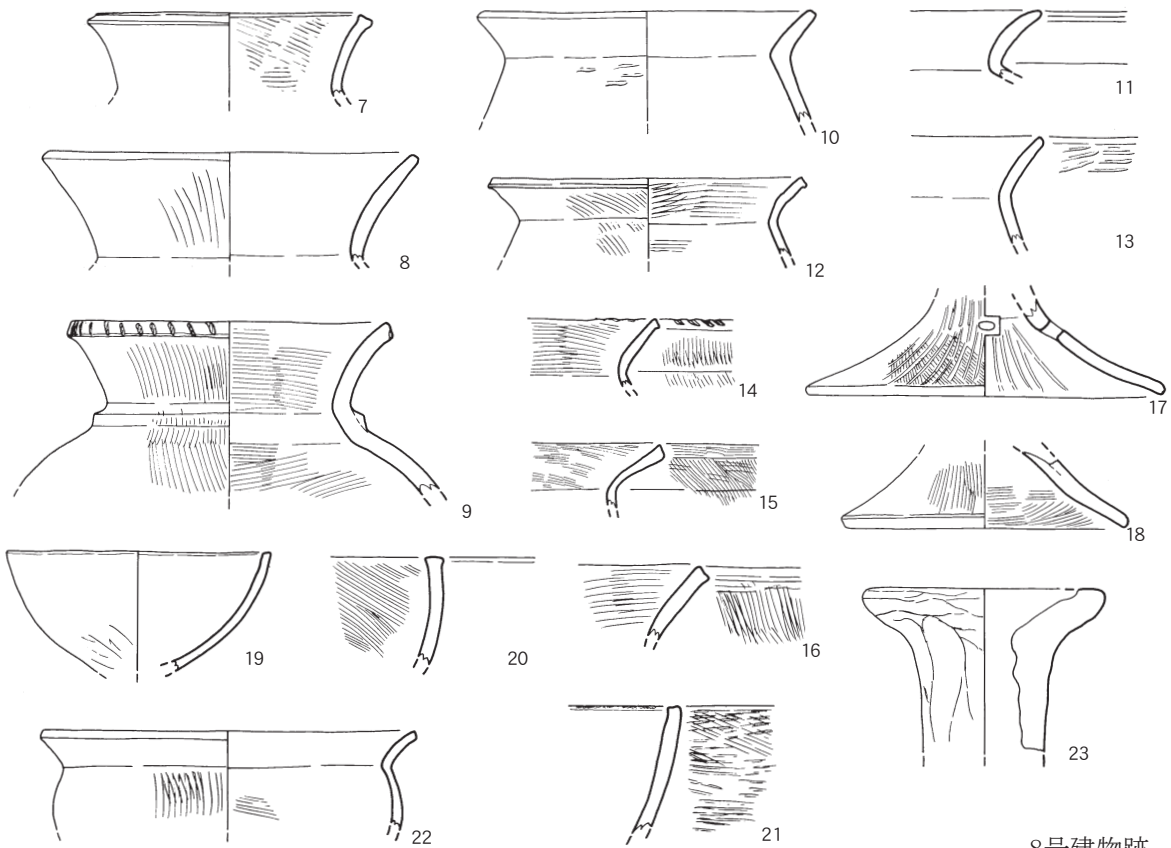
1・2は外反して開く広口壺の口縁部で、口唇部にキザミを付す。3はあまりくびれず太い頸基部から口縁部がわずかに外側にのびる壺である。4は口縁部が頸基部からほぼ直上にのびる中部九州系の直口壺である。5は頸基部でややくびれて非常に短い口縁部が外反する小型の短頸壺



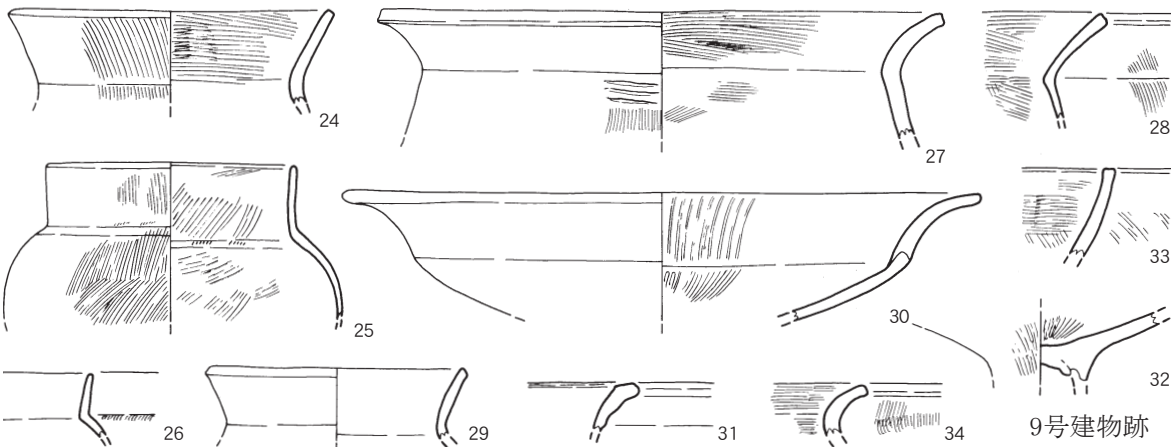
第13図 I区8号掘立柱建物跡実測図（1/60）



7号建物跡

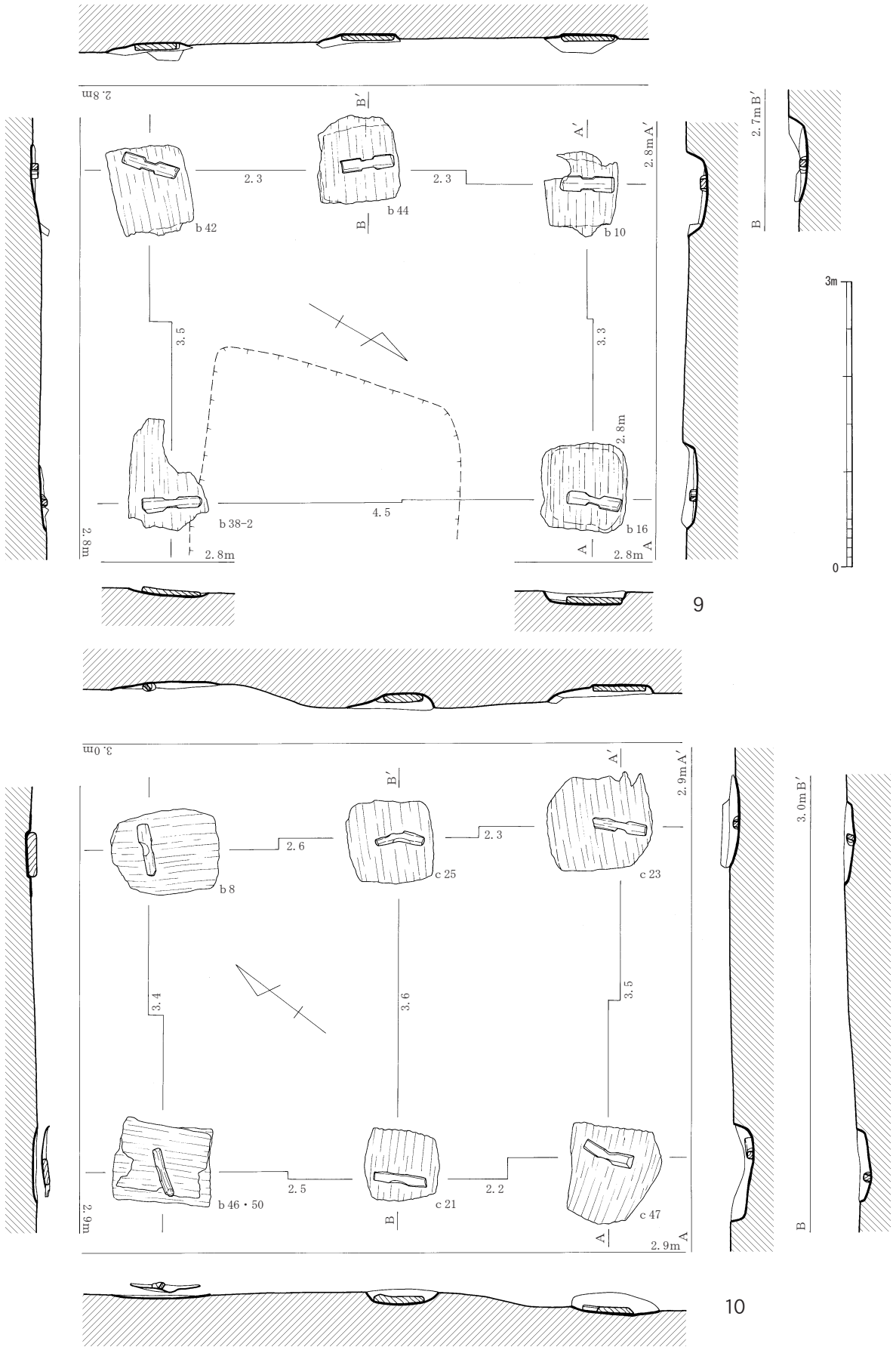


8号建物跡

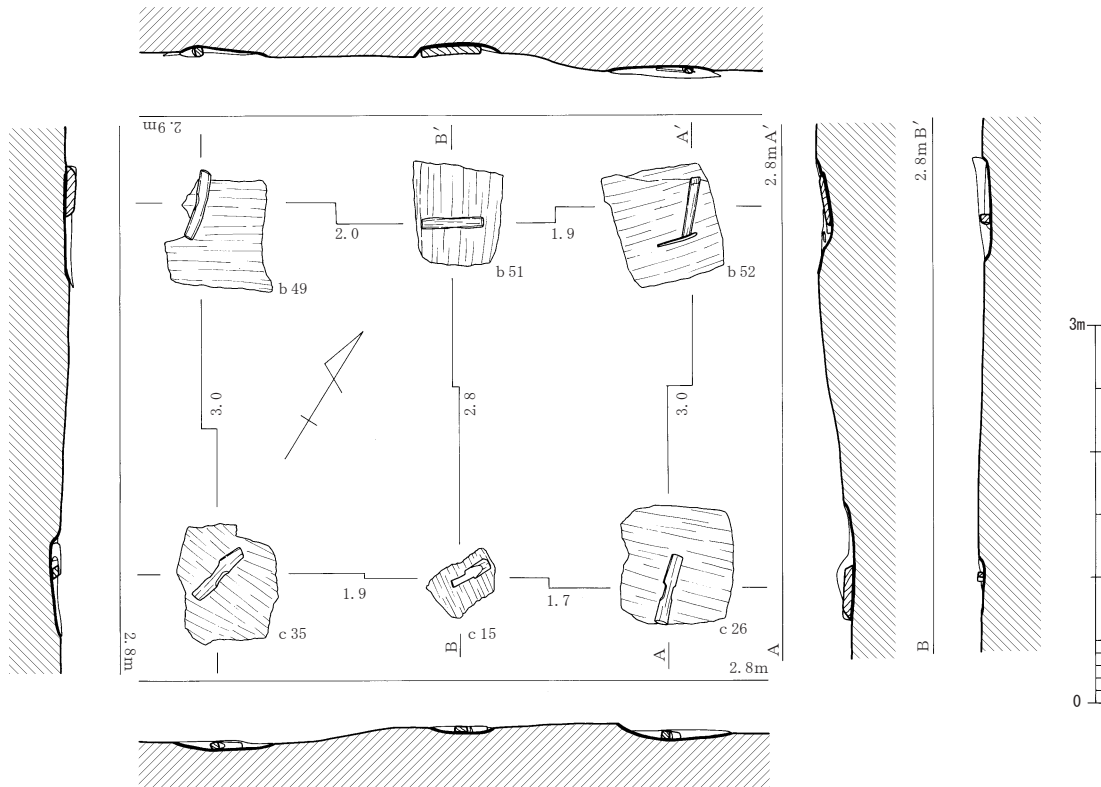


9号建物跡

第14图 I区7~9号掘立柱建物跡出土土器实测图(1/4)



第 15 图 I 区 9·10 号掘立柱建物迹实测图 (1/60)



第16図 I区11号掘立柱建物跡実測図(1/60)

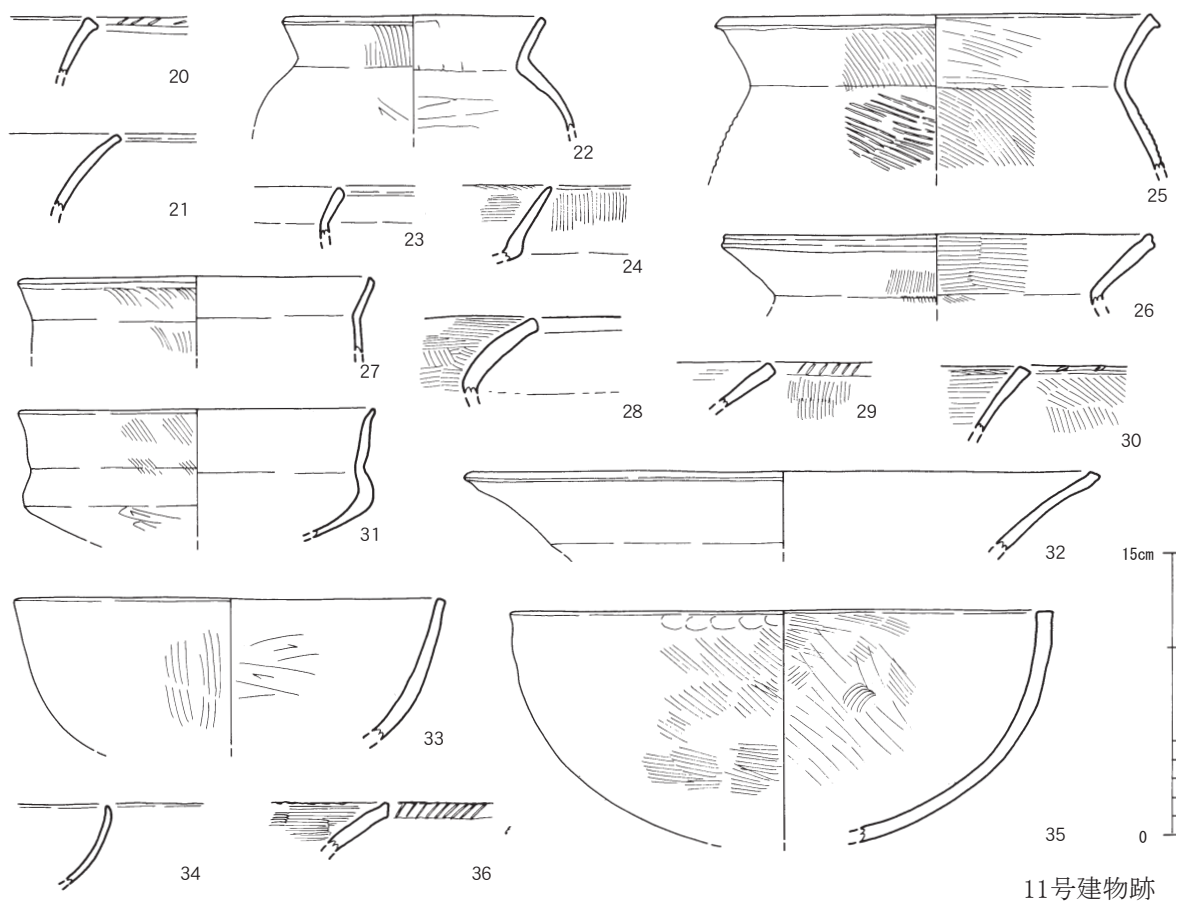
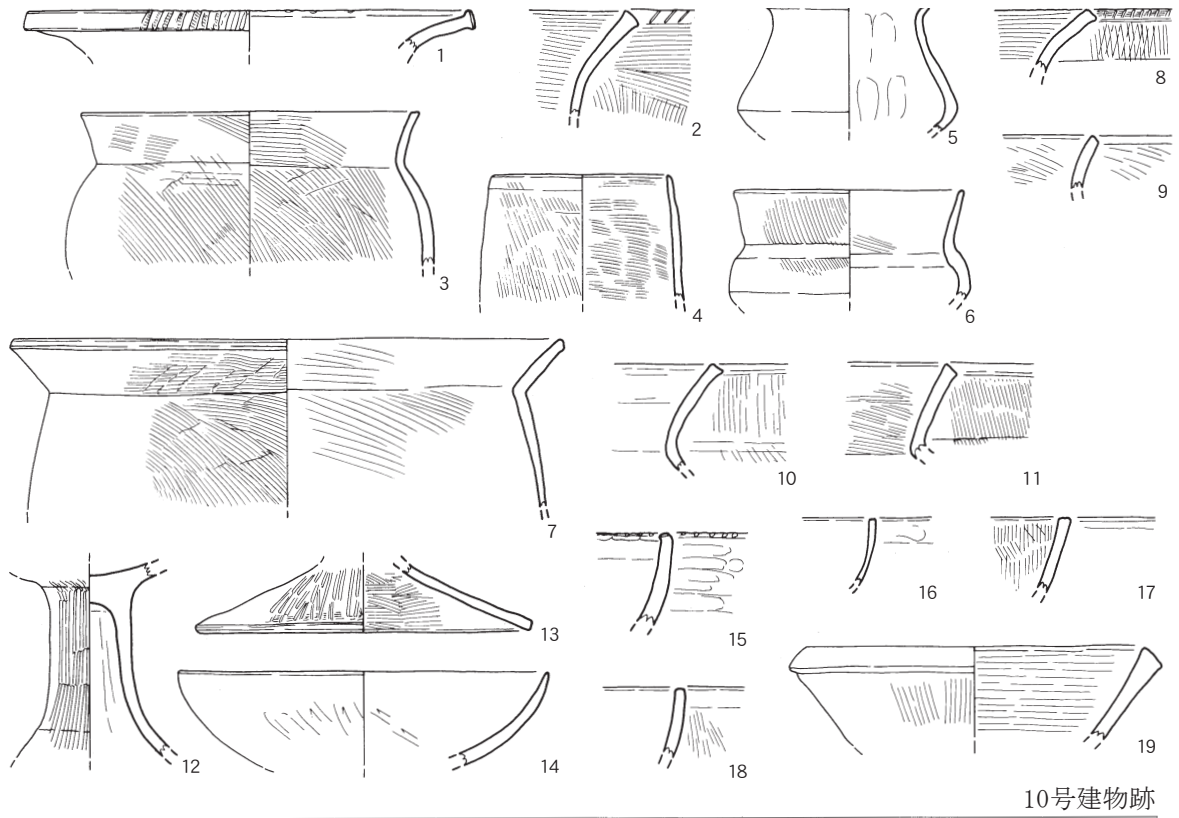
で、下膨れの器形である。6は胴部が扁球形で頸基部があまりくびれずして屈曲し、やや外側へ直線的に口縁部がのびる小型の壺である。7～11は在地系甕である。8は口唇部にキザミを付す。12・13は高杯の脚部で、外面調整でミガキが施される。14～18は素口縁の鉢で、15は口唇部にキザミを付す。19は器台の口縁部である。

11号掘立柱建物跡(第16図)

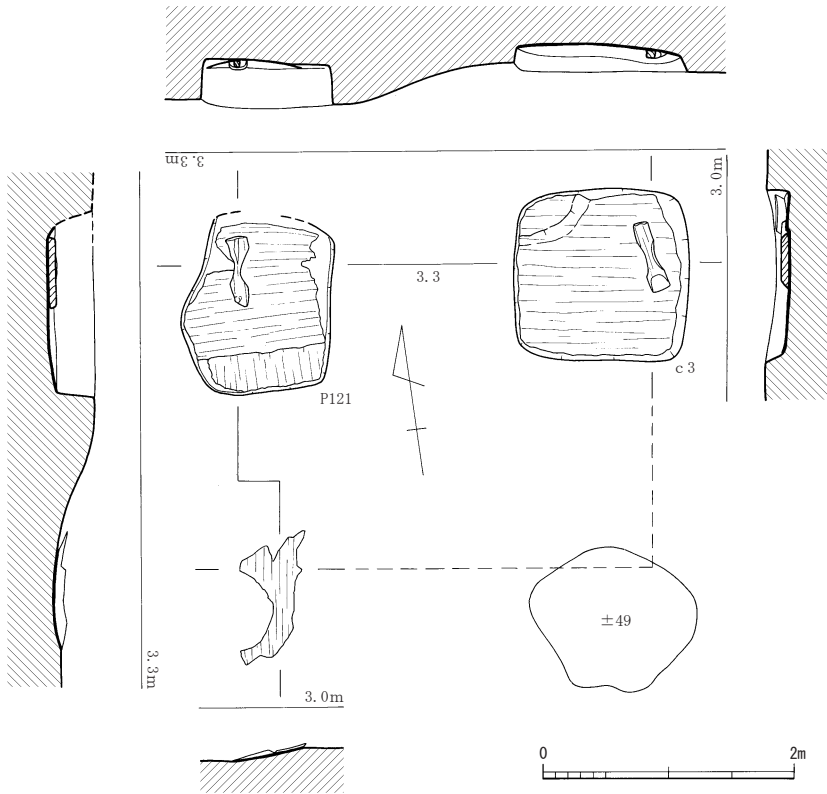
I区中央部より西寄りに位置し、2×1間の建物である。礎盤b49・b51・b52・c15・c26・c35からなり、横木の形状がある程度類似するものが多いので、一定程度の確実性は認められる。礎盤c15は、検出の際にバックホーでやや掘り下げ過ぎている。10号建物を切り、23号建物に切られる。梁行2.93m、桁行3.75mを測り、床面積は11.0㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器(第17図20～35)

20・21は外反して開く広口壺の口縁部で、20は口唇部にキザミを付す。22は頸基部で屈曲して、やや外側へと短い口縁部がのびる壺である。23は短頸壺の口縁部である。24は二重口縁壺の口縁部である。25～30は在地系甕の口縁部から胴部にかけての部位である。31は高杯の杯部で、扁平な下半部の中位部分でわずかに張る。口縁部はやや屈曲してわずかに外側へとびる。32は高杯の口縁部である。33～35は大小の素口縁の鉢である。36は器台の口縁部で口唇部にキザミを付す。



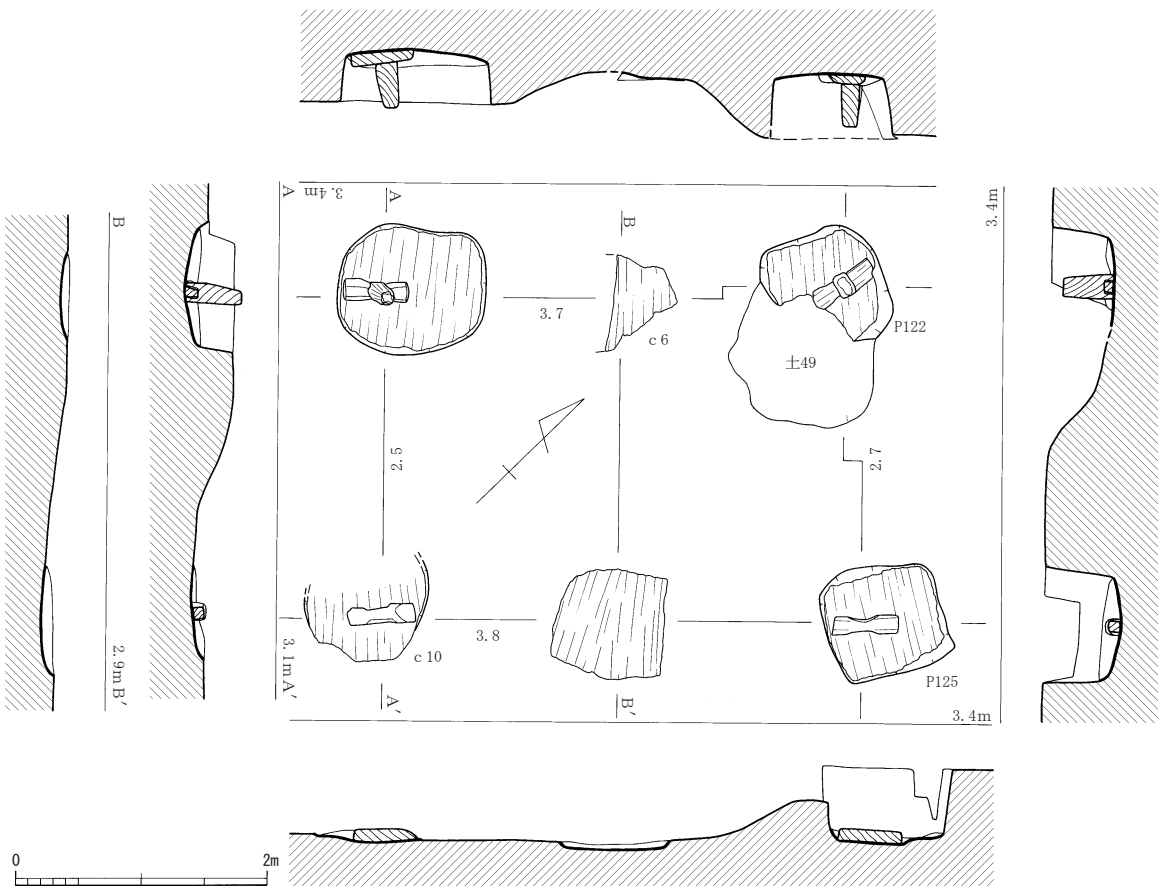
第17图 I区10·11号掘立柱建物跡出土土器実測图(1/4)



第18図 I区12号掘立柱建物跡実測図(1/60)

12号掘立柱建物跡(第18図)

I区中央部より南寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤c3、ピット121他からなる。礎盤c3とP121は横木の形状や位置関係から非常に組み合う確実性が高い。他に対応する礎盤として、南西側では周辺の遺構により切られ、わずかに残存するものが妥当な位置にあたる。その場合は南東側の礎盤は49号土坑により削平されたと判断した。14・15号建物に切られる。梁行は約2.8m程度と想定され、桁行3.3mを測り、床面積は約9.2㎡程度と思われる。礎盤c3やP121の掘形は隅丸方



第19図 I区13号掘立柱建物跡実測図(1/60)

形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第22図1～11）

1は頸基部で屈曲して、短い口縁部がやや外側へのびる壺である。2は頸基部の屈曲が緩やかで、短い口縁部がやや外側へのびる小型の壺である。3は在地系甕の口頸部である。4は頸基部から外側へのびる甕の口縁部で外来系のものと考えられる。5・6は素口縁の鉢で、6は口縁部を肥厚させ、口唇部にキザミを付す。7・8は短い口縁部が屈曲して外側にのびる鉢である。9～11は口縁部が屈曲して外側にのびる鉢である。10の外面下位はケズリを施す。

13号掘立柱建物跡（第19図）

I区中央部より南寄りに位置し、2×1間の建物である。礎盤c6・c10、P122・125他からなる。端部の角にあたる4基の礎盤は横木の形状の類似性から、確実性の高い組み合わせと判断できる。桁の中間に位置する2基については他の礎盤に切られていることもあるが横木がない点からは、組み合わせとしては不安が残る。柱根が残存するものもあり、柱根は径15cm程度である。梁行2.6m、桁行3.75mを測り、床面積は9.8㎡程度となる。14・15・17号建物と49号土坑のいずれにも切られる先後関係が確認できる。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第22図12～14）

12・13は外反してのびる壺の口縁部である。14は高坏の口縁部である。

14号掘立柱建物跡（第20図）

I区中央部より南寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤c11・c49・c50からなり、横木の形状や埋置軸に共通性が見られ、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行2.4m、桁行3.1mを測り、床面積は7.4㎡程度となる。12・13号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに北東方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第22図15～17）

15は在地系甕の口縁部である。16は短い高坏の脚部である。17は尖底気味の鉢の底部で外面下端にケズリが残存する。

15号掘立柱建物跡（第20図）

I区中央部より南寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤c2やP124他からなり、柱穴の1つが他の柱穴に切れ横木も欠けるが、他の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.2m、桁行3.6mを測り、床面積は11.5㎡程度となる。12・13号建物を切る。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いと判断される。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第22図18・19）

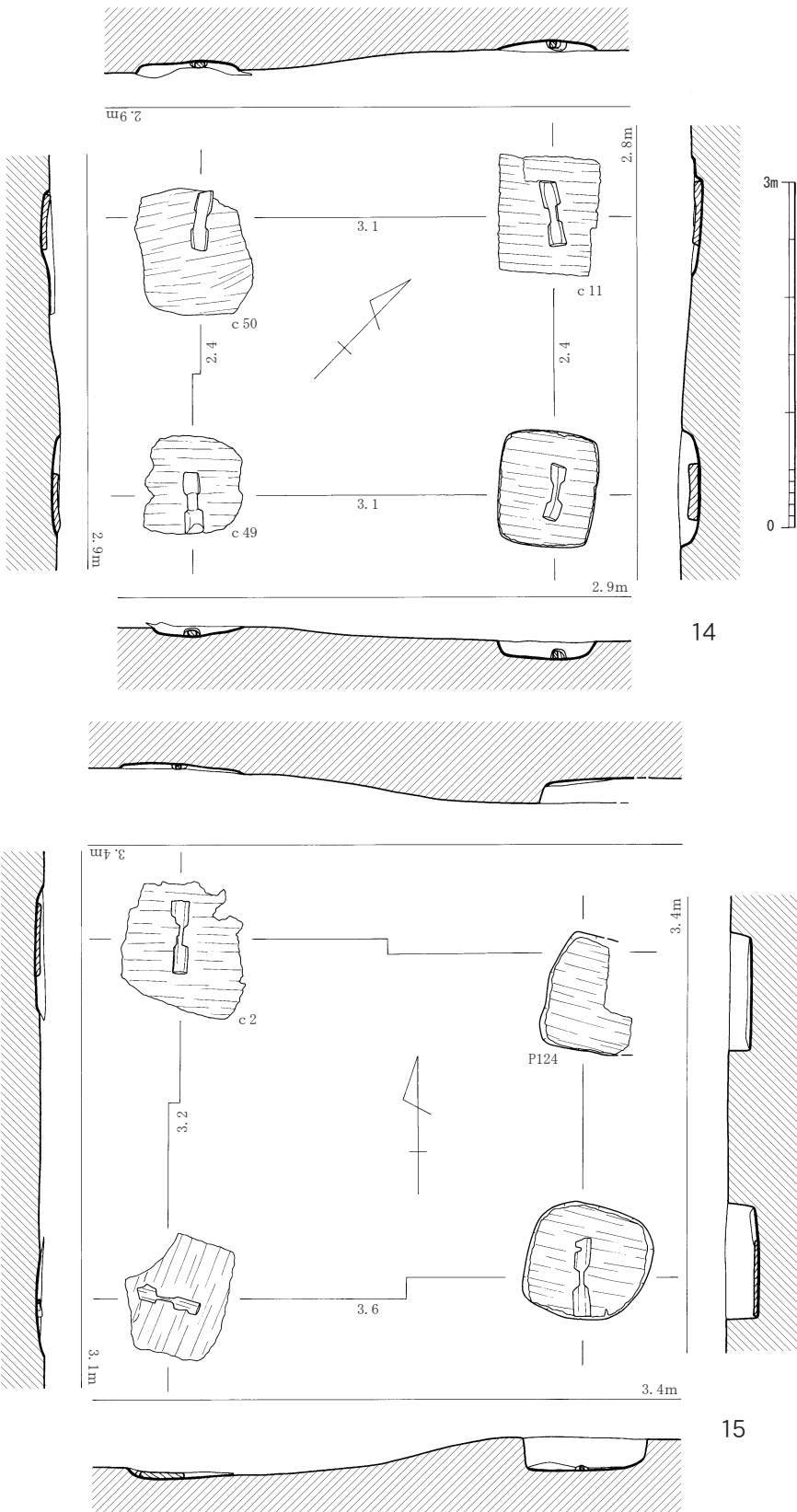
18はなで肩で頸部がややくびれ、短い口縁部がやや外反する壺である。19は非常に短い口縁部が外反する小型の短頸壺である。

16号掘立柱建物跡(第21図)

I区中央部より南寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤c4・c41・c48他からなり、西側の2基は横木の形状や埋置軸が類似するが、礎盤c4は他遺構に切られてほとんどが失われ、礎盤c41の横木は他と異なり、これらの組み合わせの確実性には不安がある。梁行2.7m、桁行3.0mを測り、床面積は8.1㎡程度となる。17号建物に切られる。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いと判断される。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。

出土土器(第22図20～27)

20～22は外反する壺の口縁部で、21・22は口唇部にキザミを付す。23・24は在地系甕の口縁部。25は素口縁の小型の鉢で、26は素口縁の大型の鉢で外面にタタキの痕跡が残る。27は口縁部が強く屈曲して外側へのびる鉢である。



第20図 I区14・15号掘立柱建物跡実測図

17号掘立柱建物跡（第23図）

I区南側の中央部に位置し、2×1間の建物である。礎盤c5・c9・c28・c36・c44とP128からなる。P128以外の礎盤の横木中央部の柱受け部の欠き込みは、完全に彫り抜かれず下端部を残す特徴のあるもので、埋置軸など共通性が強く、その組み合わせの確実性は極めて高い。P128についても、横木の加工や埋置の軸は異なるものの相対的な位置から同じ建物の柱穴である可能性は高い。梁行3.53m、桁行5.1mを測り、床面積は18.0㎡程度となる。13・16号建物を切り20号建物に切られる。ほとんどの柱穴は掘形を確認できなかったが、一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第22図28～36）

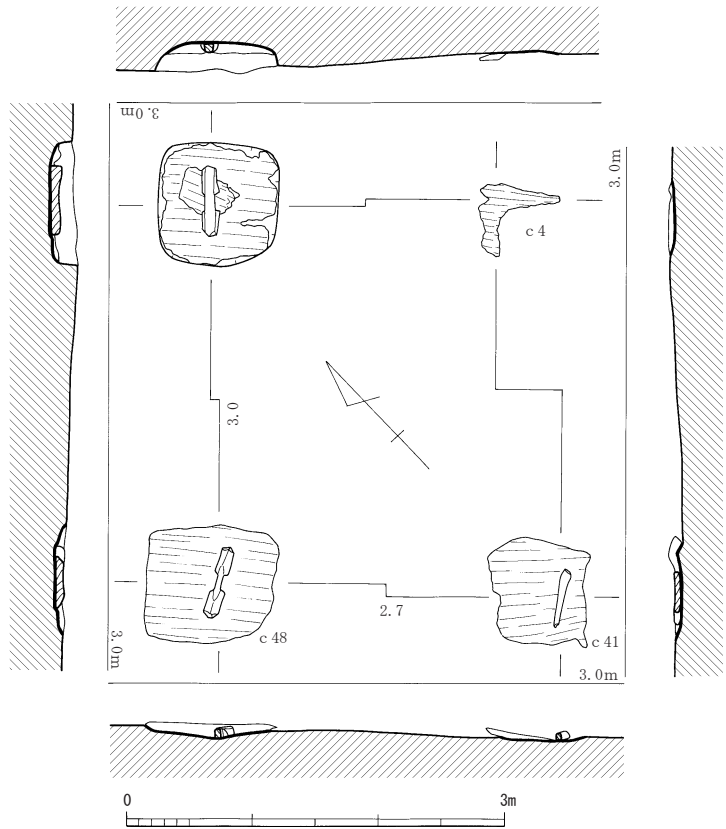
28はなで肩の器形で、頸基部でくびれて口縁部がやや外反してのびる壺である。29～33は在地系甕の口頸部である。30・31は頸部の屈曲が強く、30～32は口唇部にキザミを付す。34は高坏の杯部で、短い直立気味の杯部上半部をもち、杯部下半部との接合部外面には沈線を廻らすとともにキザミを付す。口縁端部は外反する。上半外面には暗文が見られる。35は素口縁で、長胴の器形の鉢である。36は鉢の脚部で、非常に小さな穿孔を4箇所に施す。

18号掘立柱建物跡（第24図）

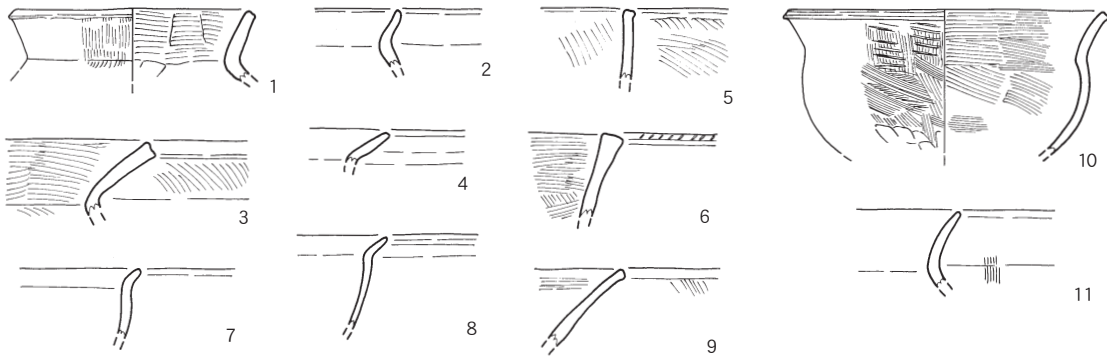
I区南側の中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤c（29・37）他からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考える。組み合わせの中には、南東側の柱穴は欠落しているが、相応の位置に礎盤は所在する。しかし、19号建物との切り合い関係から、その位置の礎盤は19号建物に帰属し、18号建物に帰属するものはこの礎盤により削平されと判断するのが妥当である。梁行3.4m、桁行3.9mを測り、床面積は13.3㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第22図37）

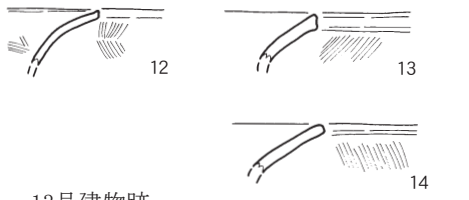
37は壺の外反する口縁部である。



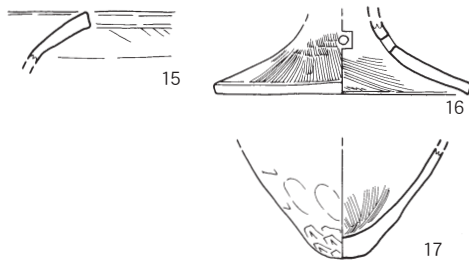
第21図 I区16号掘立柱建物跡実測図（1/60）



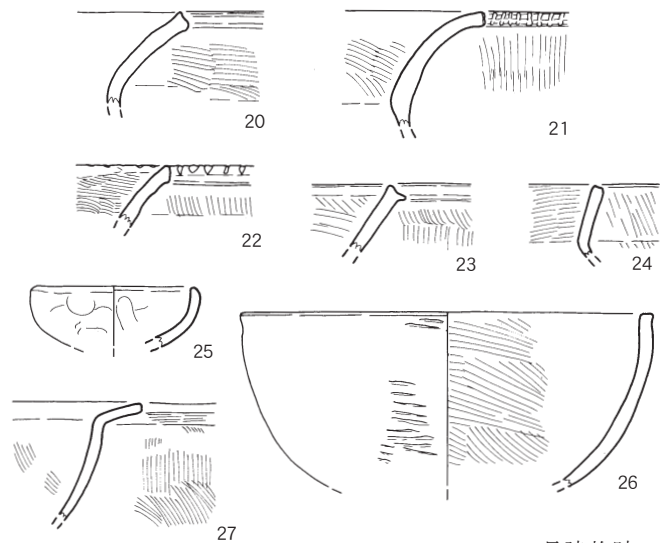
12号建物跡



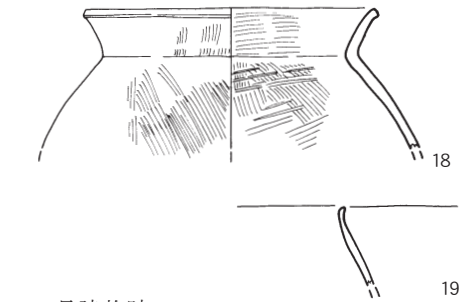
13号建物跡



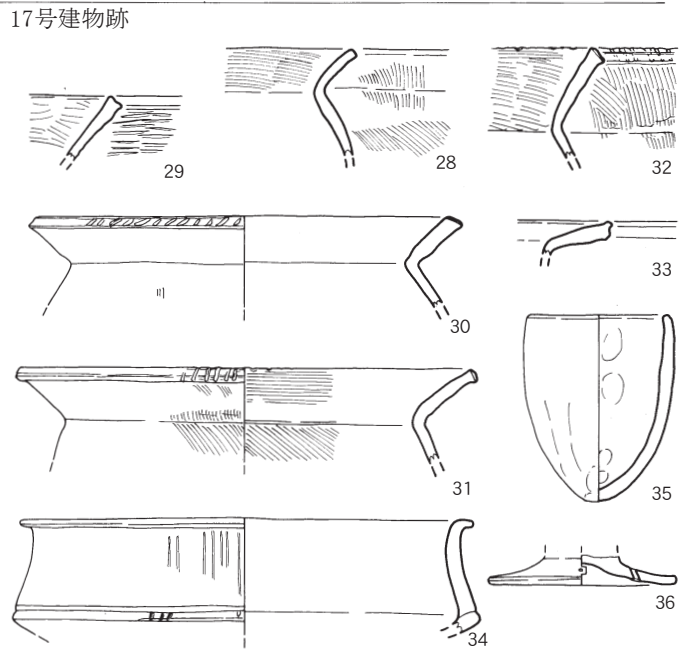
14号建物跡



16号建物跡



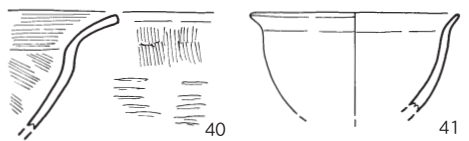
15号建物跡



17号建物跡



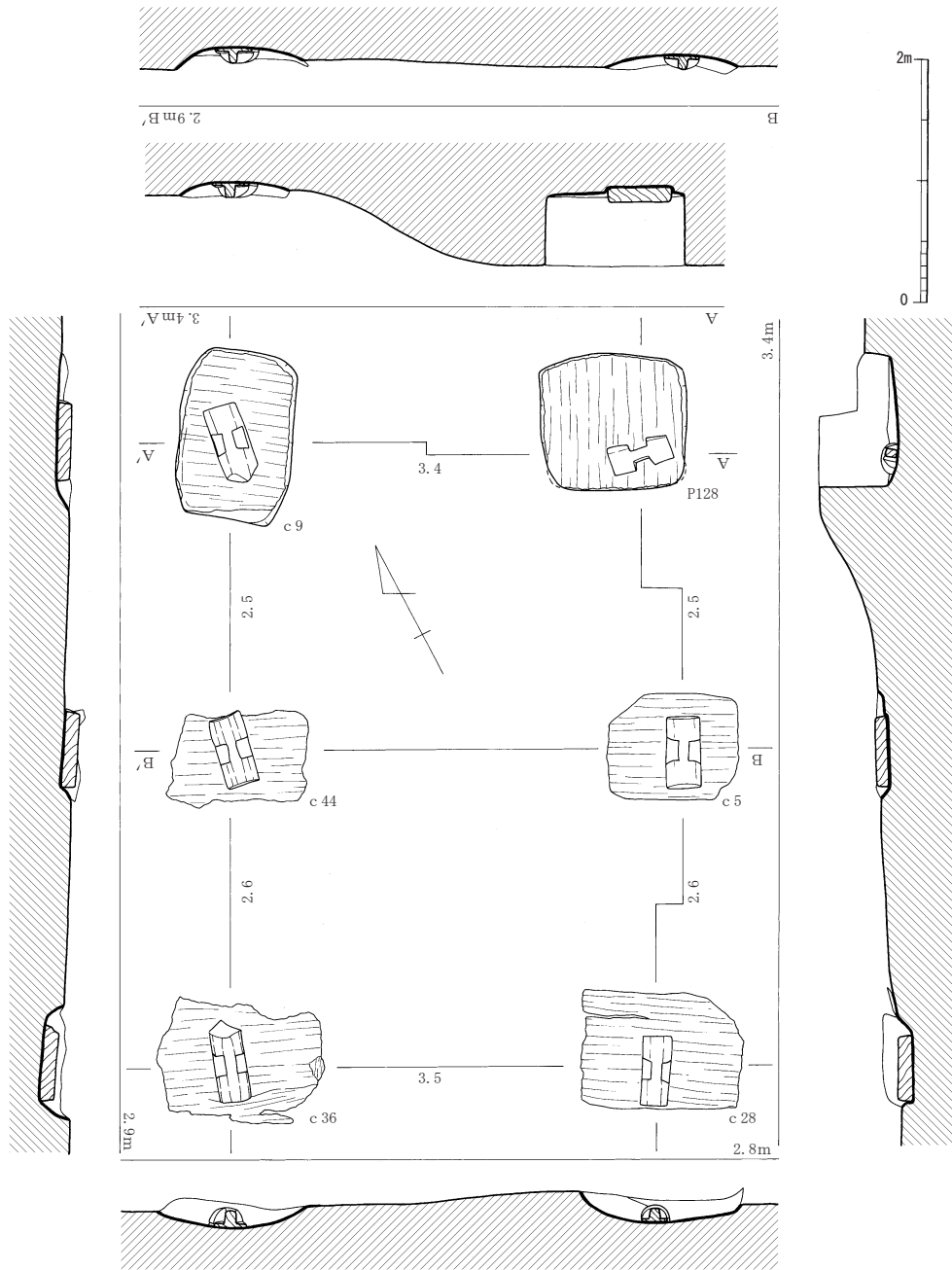
18号建物跡



19号建物跡



第22图 I区12~19号掘立柱建物跡出土土器实测图(1/4)



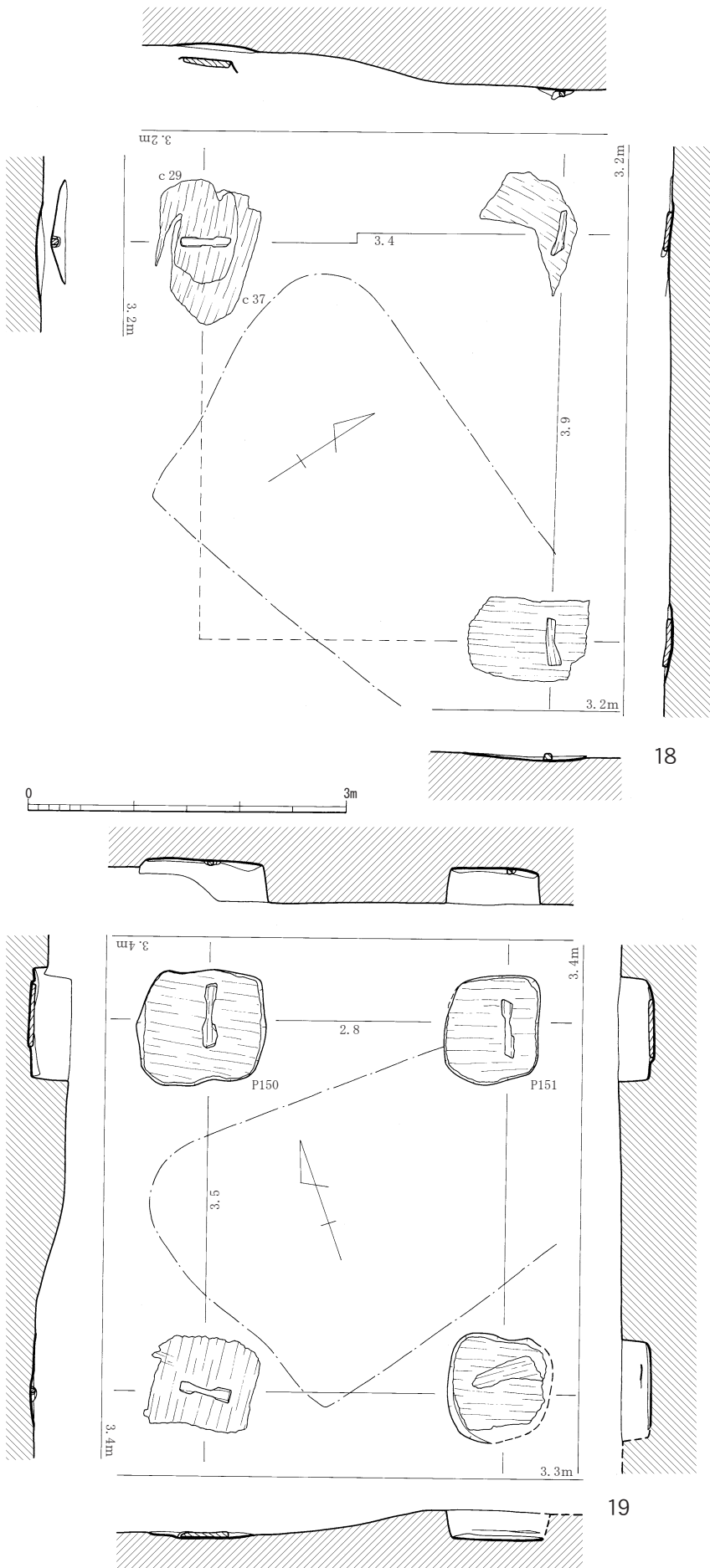
第 23 図 I 区 17 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

19 号掘立柱建物跡 (第 24 図)

I 区南側の中央部に位置し、1 × 1 間の建物である。ピット 151・150 他からなり、南東側の礎盤には横木が無いが、他の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行 2.5 m、桁行 3.5 m を測り、床面積は 8.8 m² 程度となる。18 号建物を切る。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いと判断される。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器 (第 22 図 38 ~ 41)

38・39 は外反する壺の口縁部である。40・41 は屈曲して口縁部が外側へのびる鉢で、40 は外



面にタタキが残存する。41は小型で脚を伴う可能性がある。

20号掘立柱建物跡（第25図）

I区南側の中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤c30・c31やP152他からなり、横木の形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.0m、桁行4.0mを測り、床面積は12.0㎡程度となる。17・24号建物を切る。一部掘形を検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

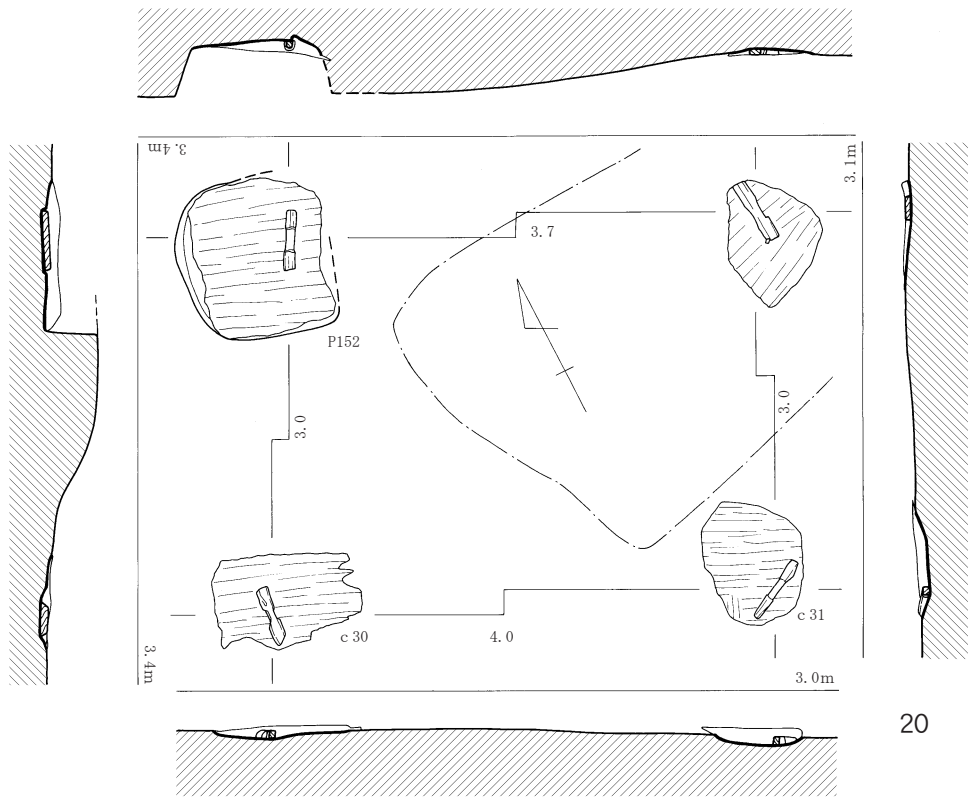
出土土器（第27図1～8）

1は外反する壺の口縁部である。2～4は在地系甕の口縁部で、3は口唇部にキザミを付す。5・6は甕の底部で丸底である。7は高坏の口縁部である。8は器台の下端部である。

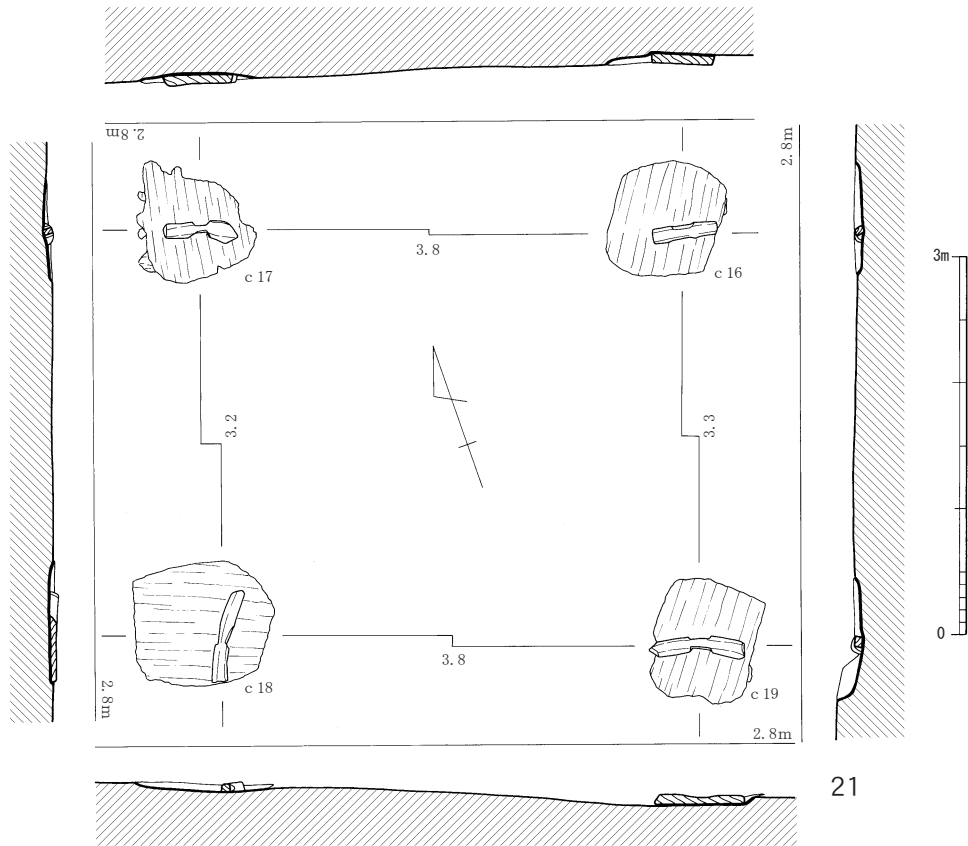
21号掘立柱建物跡（第25図）

I区南西端に位置し、1×1間の建物である。礎盤c16～c19からなり、礎盤c16の横木が他

第24図 I区18・19号掘立柱建物跡実測図（1/60）

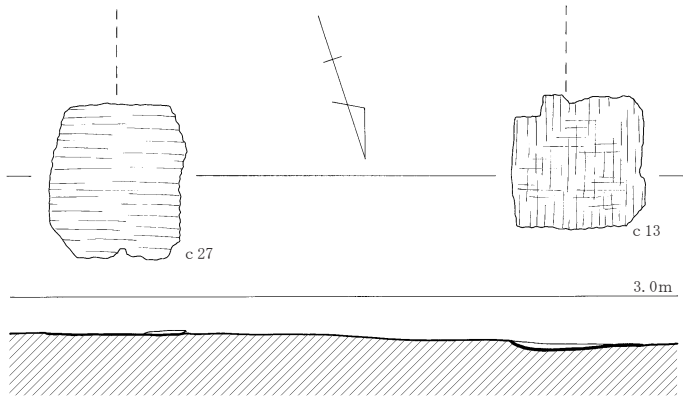


20

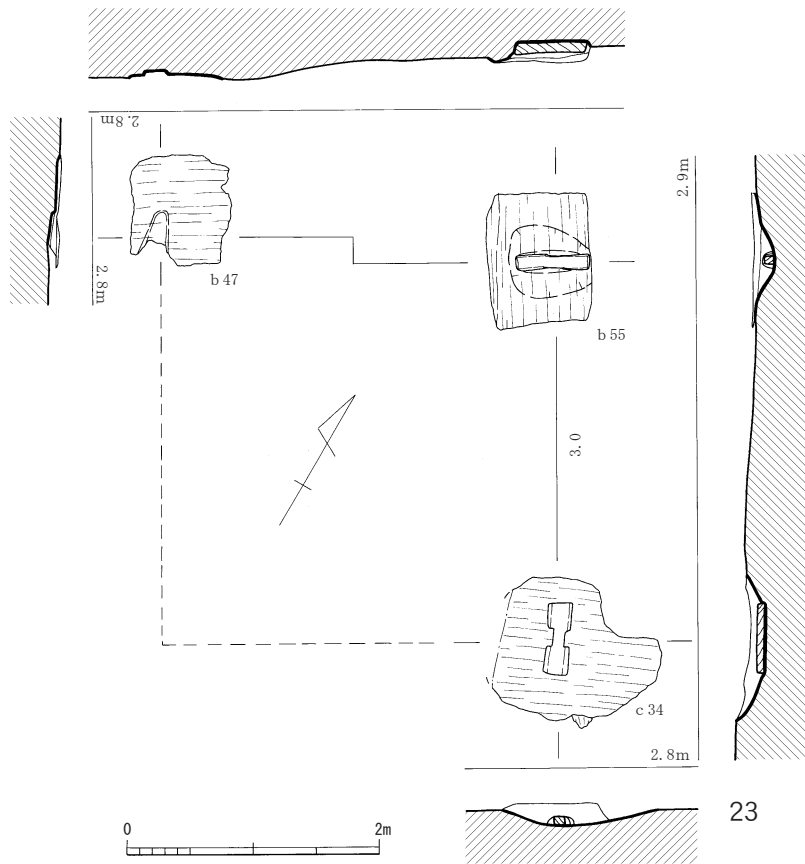


21

第 25 图 I 区 20·21 号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



22



23

第26図 I区22・23号掘立柱建物跡実測図(1/60)

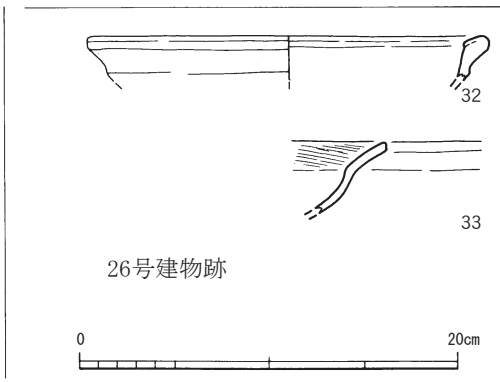
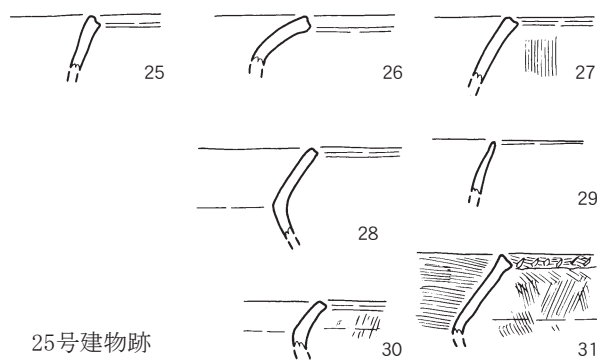
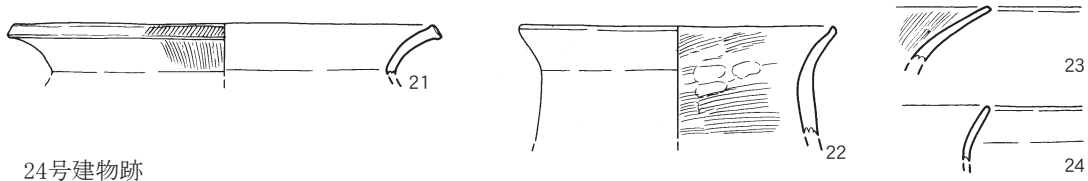
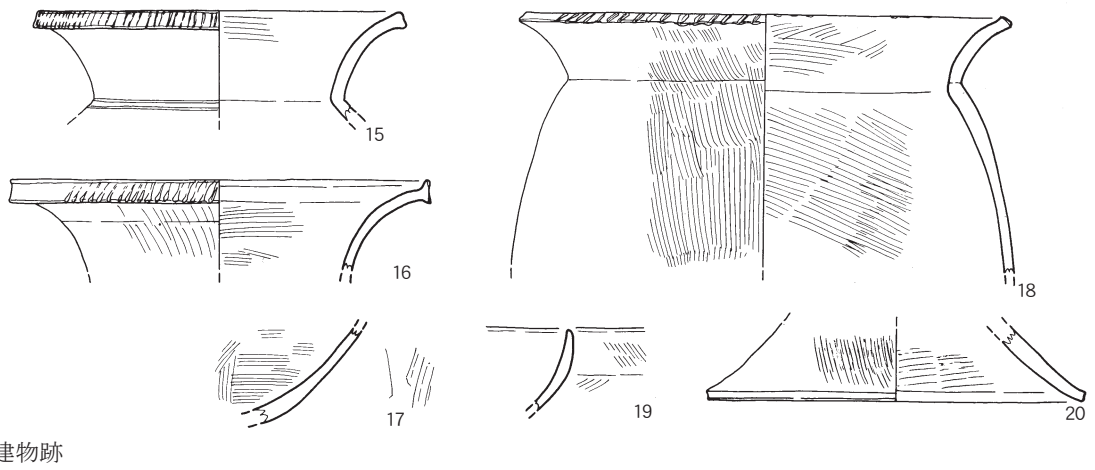
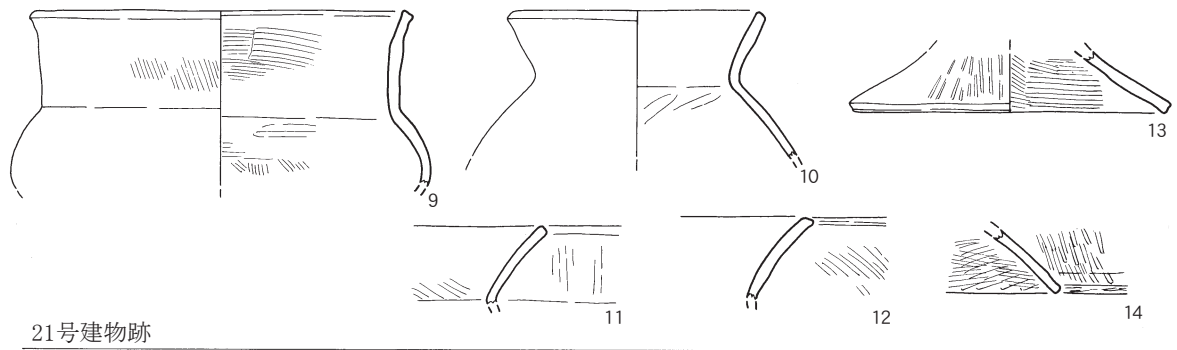
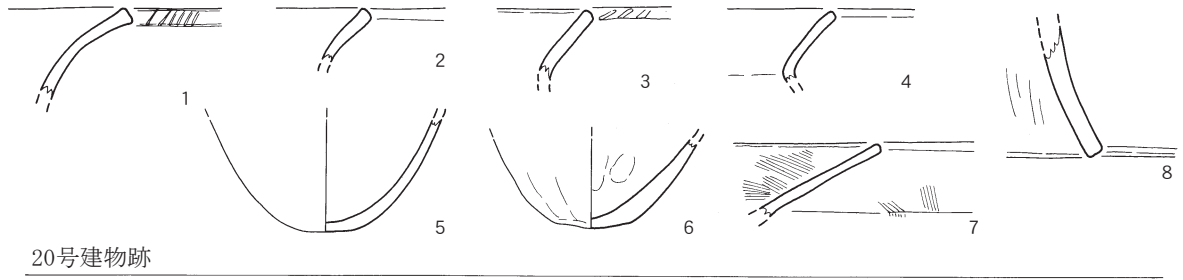
の横木とやや形状が異なるものの、それ以外の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。また、周辺に他の礎盤が全く検出されていないこともその大きな理由となる。梁行3.25m、桁行3.8mを測り、床面積は12.4㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が認められる。

出土土器(第27図9～14)

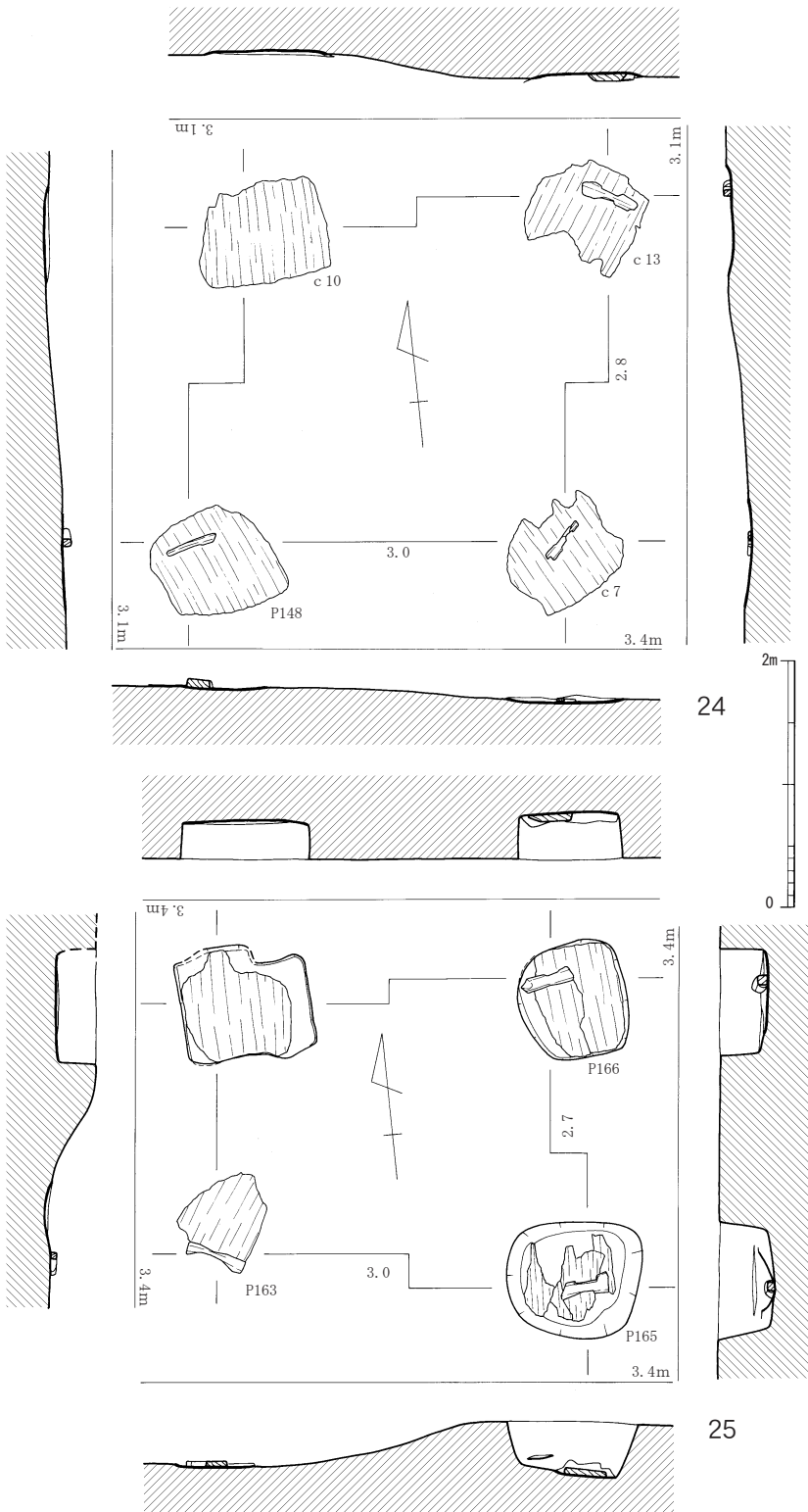
9は胴部の張りがわずかで、頸部でわずかに屈曲して口縁部がやや外側の上方にのびる壺である。10はなで肩の器形で、頸部でくびれて口縁部が外側へ直線的にのびる壺である。11は外側へのびて開く壺の口縁部である。12は高

22号掘立柱建物跡(第26図)

I区南端中央部に位置する。礎盤c13・c27の2基が検出されたのみで、南側は調査区外へと延びるため、規模は不明である。周辺に他の礎盤は検出されず、重複する建物は存在しないため、この建物の確実性は高い。2基の礎盤ともに横木が失われて、正確な数値は判然としないが、3.5～4.0m程度と考えられる。柱穴は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向がある。図示できる出土遺物はない。



第 27 图 I 区 20·21·23~26 号掘立柱建物跡出土土器实测图 (1/4)



第28図 I区24・25号掘立柱建物跡実測図(1/60)

17は壺の底部である。18は在地系の甕で、口唇部にキザミを付す。23は甕の底部でわずかにレンズ状の形態が残る。24・25は素口縁の鉢である。24は口縁端部を肥厚させ口唇部は面を成し、19は素口縁の鉢である。20は脚部を有する鉢の下端部である。

23号掘立柱建物跡(第26図)

I区中央部より西寄りに位置し、1×1間の建物である。礎盤b47・b55・c34からなる。もう1基の礎盤は検出されなかったが、対応する位置に11号建物の礎盤c35が所在する。ただ、他の礎盤との切り合い関係を考慮すると、本建物は11号建物を切っており、検出に至らなかっただけで、礎盤c35に切れられ消失したわけではないと判断する。ただ、この礎盤自体や横木が失われて切り合い関係に不安が残り、残存する横木もあまり類似しておらず、この建物の確実性には不安がある。梁行3.0mを測り、桁行約3.2m程度と考えると床面積は約9.6㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より方形・隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でやや高低差はあるが、傾斜に一定の方向性は見られない。

出土土器(第27図15～20)

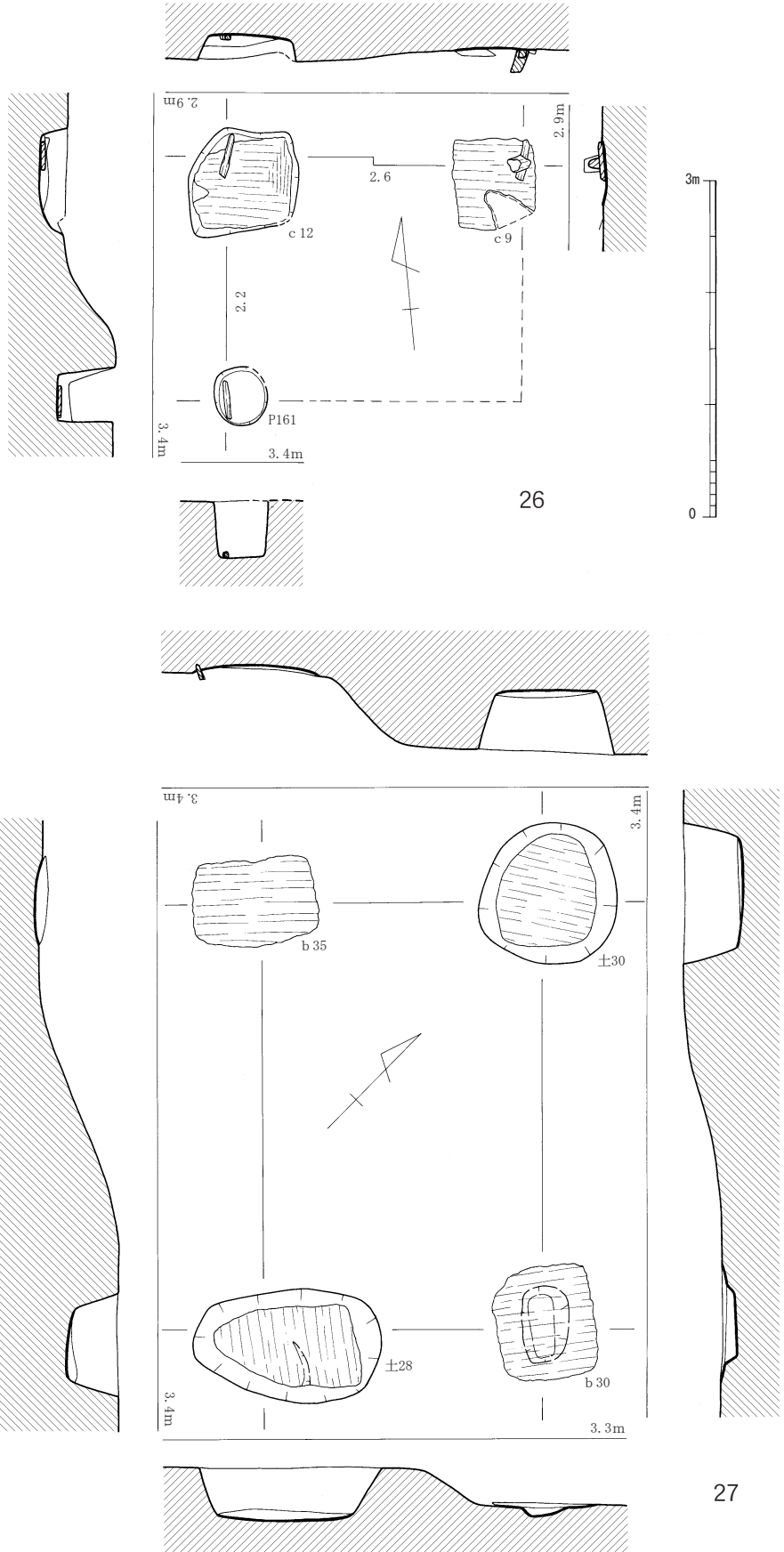
15・16は外反して開く大口壺で、口縁端部を肥厚させ口唇部にキザミを付す。

24号掘立柱建物跡(第28図)

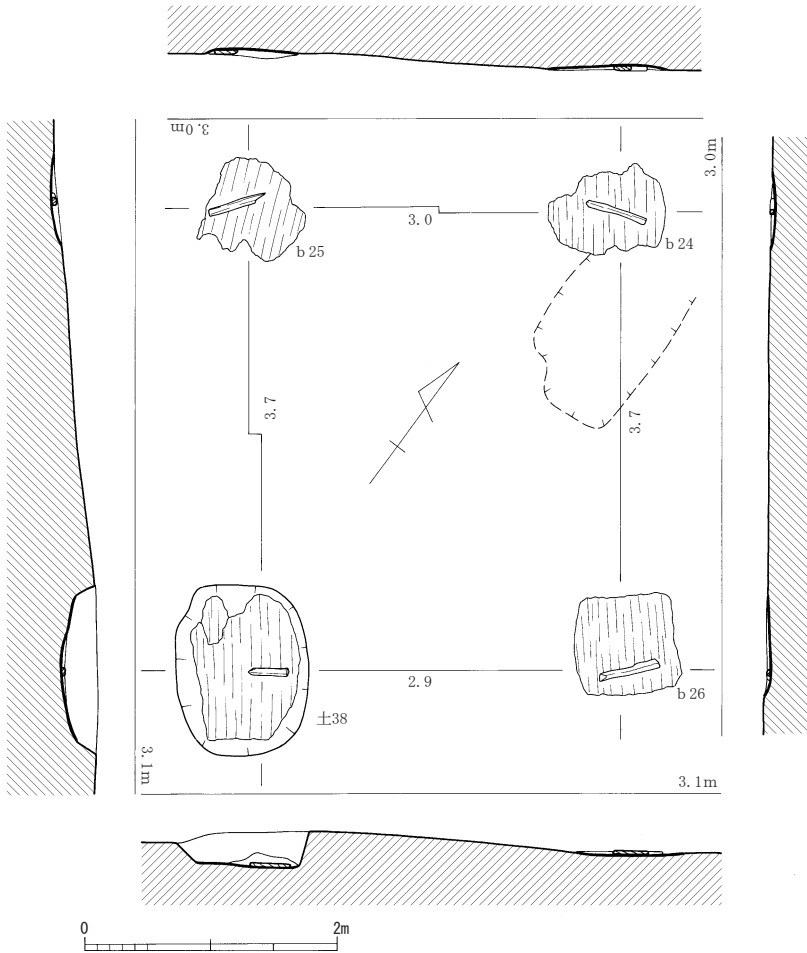
I区南側の中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤c7・c10・c13とピット148からなり、横木は欠失するものがあり、残存しているものの形状もあまり類似しておらず、これらの組み合わせの確実性にはやや不安が残る。20号建物に切られる。梁行2.8m、桁行3.0mを測り、床面積は8.4㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でやや高低差はあるが、傾斜に一定の方向性は見られない。

出土土器(第27図21～24)

21は頸基部が太く、短い口縁部が外反する壺で口唇部にキザミを付す。22は在地系の小型の甕で、頸基部で緩やかに屈曲して口縁部が外側へのびる。23は高杯の口縁部である。24は口縁部がやや外側へ開く鉢である。



第29図 I区26・27号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第30図 I区28号掘立柱建物跡実測図(1/60)

25号掘立柱建物跡(第28図)

I区南端部東寄りに位置し、1×1間の建物である。P163・165・166等からなる。東側のピット165・166の柱穴は検出面で掘形が確認され、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から確実に組み合わせるものである。しかし西側の2基は、横木が欠失し、また形状が東側の2基とは異なり、この4基の組み合わせによる建物の確実性には不安がある。調査前に立地していた納骨堂の影響で周辺の土壌が変色等を受け、検出に悪条件の中で西側の礎盤を確認したこともあり、他の組み合わせ礎盤が存在した可能性は十分にある。梁行2.7m、桁行3.0mを測り、床面積は8.1㎡程度となる。

検出された柱穴の掘形は、隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器(第27図25～31)

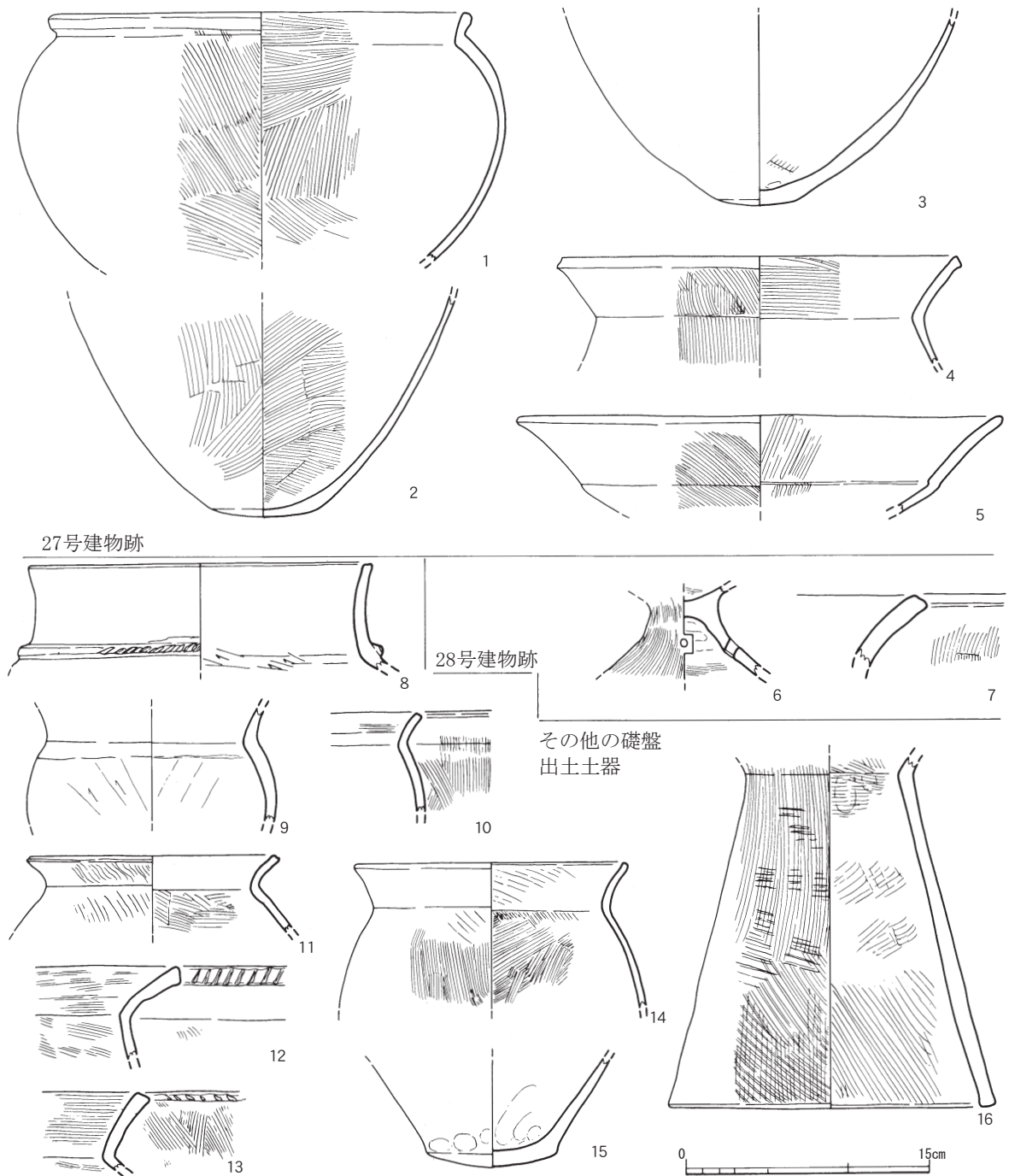
25～29は壺の口縁部である。26は外反気味に開くが、他は直線的に広がる。25～28の口縁端部は面を形成するが、29の口縁端部は細くなり丸く仕上げる。30・31は甕の口縁部で、30はやや外側に開く非常に短いもので、31は口縁端部が面を成しキザミを付す。

26号掘立柱建物跡(第29図)

I区南端部東寄りに位置する1×1間の建物。礎盤c9・c12とP161からなり、南東部分に対応する礎盤は確認できなかった。横木が小型である特徴と埋置軸の共通性から同一の建物に組み合わせると判断したが、P161は他の柱穴と異なり円形で検出され、底面に樹皮等の埋置が確認できず、梁長・桁長が他の建物より格段に小型で、この建物の確実性への不安要素は多い。礎盤c9で残存する柱根の径は10～15cm程度。梁行2.2m、桁行2.6mを測り、床面積は5.7㎡程度となる。柱穴は、円形の他に隅丸方形に近いものも検出した。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器(第27図32・33)

32は高杯の口縁部で、端部は外側へ断面三角形形状に肥厚する。33は口縁部がゆるやかに屈曲して外側へ大きく開く鉢である。



第 31 図 I 区 27・28 号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図 (1/4)

27号掘立柱建物跡 (第 29 図)

I 区中央部に位置し、1 × 1 間の建物である。当初、建物跡の一部と気づかずに土坑として検出していた 28 号土坑と 30 号土坑は、その後検出した礎盤 b30・b35 と組み合せて建物となると認識したものである。これらはともに横木が失われている共通性や検出面で確認できたものが組み合わせの中に複数含まれる点から、この建物の確実性は高いと考える。ただ、検出面で確認して掘削した 28・30 号土坑底面の礎盤は、柱穴の掘形が隅丸方形と想起させる礎盤 b30・b35 の形状とはやや異なっており、実際には 28・30 号土坑の掘形は掘削が不足していて、より広がる可能

表 2 I 区掘立柱建物跡一覧表

遺構名	押番番号	規模	桁長	梁長	床面積	構成柱穴の遺構名								確実性	傾斜
1号掘立柱建物跡	7	1 × 1 間	3.5 m	3.1 m	10.9 m ²	建1-1	建1-3	ビット147	—					○	
2号掘立柱建物跡	7	1 × 1 間	3.05 m	2.4 m	7.3 m ²	建2-1	建2-2	建2-3	建2-4					◎	
3号掘立柱建物跡	8	2 × 1 間	4.7 m	4.3 m	20.0 m ²	ビット131	ビット132	ビット134	名称無	—	—			△	
4号掘立柱建物跡	9	1 × 1 間	3.85 m	3.45 m	13.3 m ²	礎盤b2	礎盤b14	礎盤b18	礎盤b20					◎	西
5号掘立柱建物跡	9	1 × 1 間	3.4 m	2.9 m	9.9 m ²	礎盤b1	礎盤b3	礎盤b9	礎盤b39					○	
6号掘立柱建物跡	11	1 × 1 間	3.95 m	3.4 m	13.4 m ²	礎盤b7	礎盤b11	礎盤b40	礎盤b43					○	南西
7号掘立柱建物跡	11	2 × 1 間	4.0 m	2.8 m	11.2 m ²	礎盤b5	礎盤b17	礎盤b22	礎盤b27	礎盤b48	—			△	
8号掘立柱建物跡	13	1 × 1 間	3.4 m	3.0 m	10.2 m ²	礎盤b4	礎盤b15	礎盤b37	礎盤b38-1					◎	南西
9号掘立柱建物跡	15	2 × 1 間	4.55 m	3.5 m	15.9 m ²	礎盤b10	礎盤b16	礎盤b38-2	礎盤b42	礎盤b44	—			◎	南西
10号掘立柱建物跡	15	2 × 1 間	4.8 m	3.5 m	16.8 m ²	礎盤b8	礎盤b46-50	礎盤c21	礎盤c23	礎盤c25	礎盤c47			◎	
11号掘立柱建物跡	16	2 × 1 間	3.75 m	2.93 m	11.0 m ²	礎盤b49	礎盤b51	礎盤b52	礎盤c15	礎盤c26	礎盤c35			○	南西
12号掘立柱建物跡	18	1 × 1 間	3.3 m	(2.8) m	(9.2) m ²	礎盤c3	ビット121	名称無	—					○	
13号掘立柱建物跡	19	2 × 1 間	3.75 m	2.6 m	9.8 m ²	礎盤c6	礎盤c10	ビット122	ビット125	名称無	名称無			○	南西
14号掘立柱建物跡	20	1 × 1 間	3.1 m	2.4 m	7.4 m ²	礎盤c11	礎盤c49	礎盤c50	名称無					◎	北東
15号掘立柱建物跡	20	1 × 1 間	3.6 m	3.2 m	11.5 m ²	礎盤c2	ビット124	名称無	名称無					○	西
16号掘立柱建物跡	21	1 × 1 間	3.0 m	2.7 m	8.1 m ²	礎盤c4	礎盤c41	礎盤c48	名称無					△	
17号掘立柱建物跡	23	2 × 1 間	5.1 m	3.53 m	18.0 m ²	礎盤c5	礎盤c9	礎盤c28	礎盤c36	礎盤c44	ビット128			◎	
18号掘立柱建物跡	24	1 × 1 間	3.9 m	3.4 m	13.3 m ²	礎盤c29-37	名称無	名称無	—					○	
19号掘立柱建物跡	24	1 × 1 間	3.5 m	2.5 m	8.8 m ²	ビット150	ビット151	名称無	名称無					○	
20号掘立柱建物跡	25	1 × 1 間	4.0 m	3.0 m	12.0 m ²	礎盤c30	礎盤c31	ビット152	名称無					○	
21号掘立柱建物跡	25	1 × 1 間	3.8 m	3.25 m	12.4 m ²	礎盤c16	礎盤c17	礎盤c18	礎盤c19					◎	南東
22号掘立柱建物跡	26	1 × 1 間				礎盤c13	礎盤c27	—	—					○	西
23号掘立柱建物跡	26	1 × 1 間	3.2 m	3.0 m	9.6 m ²	礎盤b47	礎盤b55	礎盤c34	—					△	
24号掘立柱建物跡	28	1 × 1 間	3.0 m	2.8 m	8.4 m ²	礎盤c7	礎盤c10	礎盤c13	ビット148					△	
25号掘立柱建物跡	28	1 × 1 間	3.0 m	2.7 m	8.1 m ²	ビット163	ビット165	ビット166	名称無					△	
26号掘立柱建物跡	29	1 × 1 間	2.6 m	2.2 m	5.7 m ²	礎盤c9	礎盤c12	ビット161	—					△	
27号掘立柱建物跡	29	1 × 1 間	(3.8) m	(2.5) m	(9.5) m ²	28号土坑	30号土坑	礎盤b30	礎盤b35					○	
28号掘立柱建物跡	30	1 × 1 間	3.7 m	2.95 m	10.9 m ²	38号土坑	礎盤b24	礎盤b25	礎盤b26					○	西

性がある。この建物は廃棄の際に、柱を抜くだけでなく、再利用のためか柱穴の底部まで掘削して横木を取り去ったものと考えられる。全て横木が失われているため、やや正確性には欠けるが、梁行約 2.5 m 程度、桁行約 3.8 m で床面積は 9.5 m² 程度となると思われる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。礎盤 b30 の樹皮には、横木が上部から重量により沈下した際の影響によると思われる窪みが残存する。

出土土器 (図版 24、第 31 図 1 ~ 5)

1 は頸基部があまりくびれず太く、非常に短い口縁部が屈曲してやや外側へのびる壺である。胴部は扁球形に近い。2・3 は壺の胴部から底部にかけてで、底部はややレンズ状である。4 は在地系甕の口頸部である。5 は高杯の杯部で、上半は外反、下半は内湾し、内面にはミガキが施される。

28 号掘立柱建物跡 (第 30 図)

I 区北西部に位置し、1 × 1 間の建物である。当初土坑として掘削した 38 号土坑と礎盤 b24 ~ b26 からなる。横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行 2.95 m、桁行 3.7 m を測り、床面積は 10.9 m² 程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第 31 図 6・7)

6 は高杯の短い脚部で 4 箇所穿孔を施す。7 は器台の口縁部である。

その他の礎盤の出土土器 (第 31 図 8 ~ 16)

I 区の礎盤について、他の複数の礎盤との組み合わせが確認できず、掘立柱建物跡として認識

することができなかつたものから出土した土器の一部について以下で触れる。

8は頸基部が太く口縁部がわずかに外側の上方へのびる直口壺で、頸部外面にはキザミを付した突帯が廻る。9は頸部のくびれが弱く、胴部の外面にケズリ、内面に板状工具によるナデを施す壺である。10は頸基部のくびれが弱く、短い口縁部がやや外側へ直線的にのびる短頸壺で、なで肩である。11は短い口縁部がわずかに外反する短頸壺である。12～14は在地系甕の口縁部から胴部にかけてである。12・13は口唇部にキザミを付す。14は頸基部の屈曲が緩やかである。15は在地系甕の底部でレンズ状である。16は器台で外面は残存するタタキの上にハケを施す。

(3) 土坑

I区では当初55基の土坑を検出した。しかし、掘立柱建物跡の礎盤の存在を確認し、その検出を行っていく過程で、当初土坑とした遺構の中には建物の柱穴と判断されるものがあった。底から樹皮を検出していたものの横木が伴わず、さらに建物として認識するだけの複数の柱穴の組み合わせを検出できていなかったためである。また、掘削していた土坑と重複する形で下層から礎盤が検出されたものは、埋土が不明瞭なために柱穴の上層を掘削したのみで止まり、礎盤まで掘削が及んでいなかったものと判断した。これらについては欠番として扱い、他の礎盤等との組み合わせが認められ帰属する建物を見出すことができたものについては、各掘立柱建物跡の項に含めて言及している。

I b区の西側包含層中では、当初の検出面ではほとんど土坑は検出されなかったが、下部での遺構確認のためにバックホーで徐々に掘り下げた際に検出されたものもある。また、土坑の中には、検出面から底面までの深さが100cm以上に至るものや完形の土器が出土するものも多い。

1号土坑 (図版4、第32図)

I区北端近くのI a区内に位置する。長軸142cm×短軸127cm、深さ12cmの円形の浅い土坑である。1号落ち込みを切り、その内側に完全に入り込む位置にある。埋土は黒茶褐色で周辺の1号落ち込みの埋土よりも暗いため個別の土坑と判断したが、1号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。図示できる遺物は出土していない。

2号土坑 (図版4、第32図)

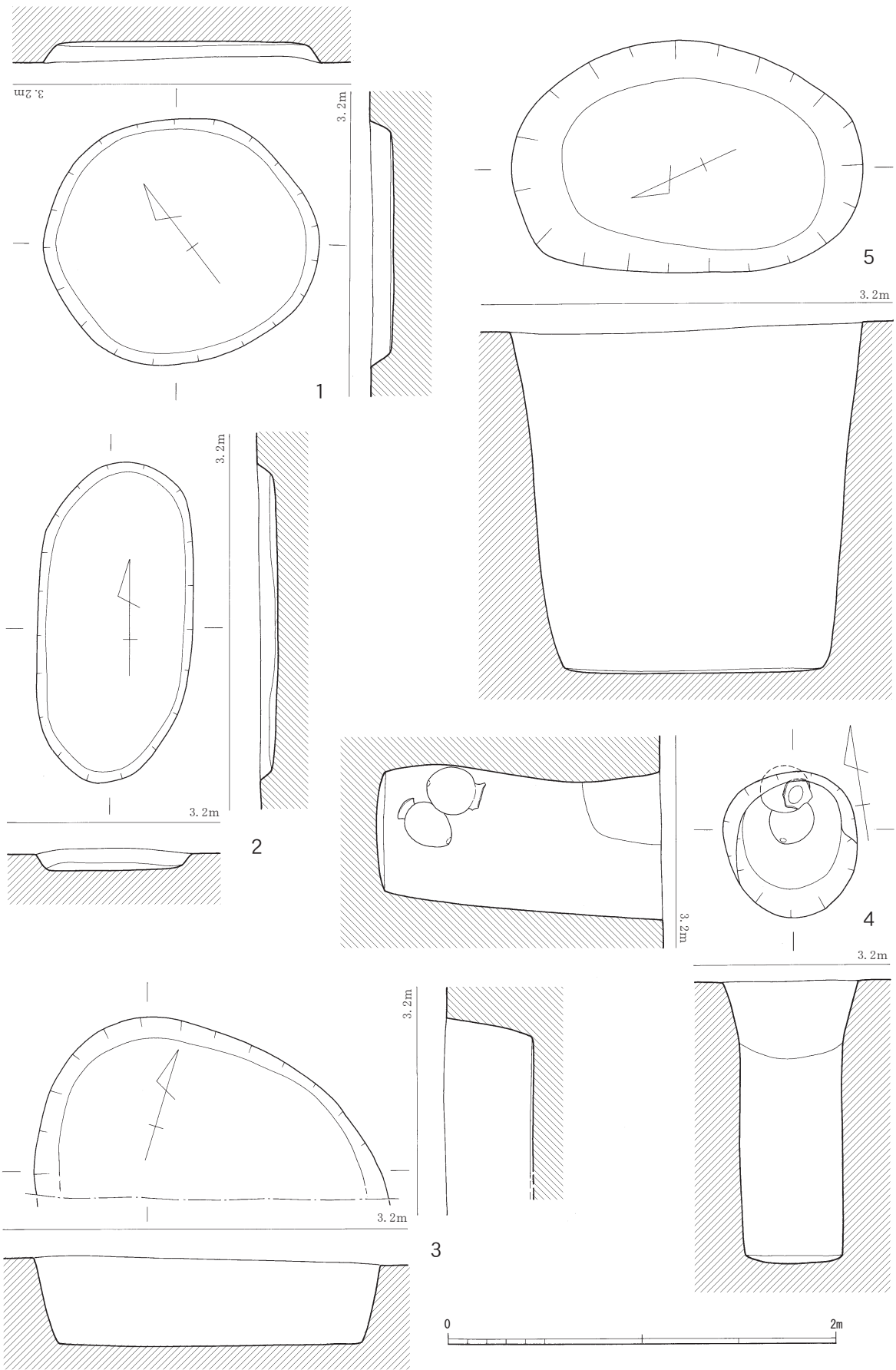
I区北端の中央付近のI a区内に位置する。長軸165cm×80cm、深さ11cmの楕円形の浅い土坑である。1号落ち込みを切り、その内側に入り込む位置にある。埋土は黒茶褐色で周辺の1号落ち込みの埋土よりも暗いため個別の土坑と判断したが、1号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。

出土土器 (第33図1・2)

1は頸基部のくびれが強く、外反する口縁部が大きく開く広口壺である。2は甕の口頸部。

3号土坑 (図版4、第32図)

I区北東部のI a区内南端で、5号土坑の東、6号土坑の西に位置する土坑である。南半はI a区調査時に設け、I b区との境をなす側溝により失われている。現状で長軸180cm×短軸92cmで、



第 32 图 I 区 1 ~ 5 号土坑实测图 (1/30)

深さ 45cm である。1 号落ち込みを切り、その内側に入り込む位置にあるが、平面で明瞭に検出できたわけではなく、側溝からの断面の観察でも判然としなかったため、1 号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。埋土は暗灰茶褐色主体である。図示できる遺物は出土していない。

4 号土坑 (図版 5、第 32 図)

I 区北側で I a 区内の南端に位置する土坑である。長軸 75cm × 短軸 69cm の円形で、深さ 148cm ということもあり、壁の立ち上がりは非常に急で北側はオーバーハングする。底近くからは完形に近い土器が 2 点出土した。

出土土器 (図版 24、第 33 図 3・4)

3・4 は壺で頸基部のくびれが強く、外反する口縁部が大きく開く広口壺で口唇部に刻みを有する。3 の肩部は 4 に比して張りが強く、ハケ状の工具による粗い平行文が見られる。

5 号土坑 (図版 5、第 32 図)

I 区北側で I a 区内の南端に位置する土坑である。8 号土坑をその東側に接する形で切る。長軸 181cm × 短軸 119cm の楕円形で、深さ 175cm である。ただ、底面が判然とせず、大幅に掘りすぎた可能性がある。検出面直下で完形に近い土器が出土したが、他にまとまった遺物は出土していない。

出土土器 (図版 24、第 33 図 5～10)

5・6 は頸基部のくびれが強くやや長い口頸部が立ち気味にのびる小型の広口壺である。7・8 は甕である。7 の口縁部は外反する。9 は高杯の杯部上半で屈曲部があり、口縁部は外反する。10 は素口縁の小形の鉢である。

6 号土坑 (図版 5、第 34 図)

I 区北東部の I a 区内南端で、3 号土坑の東に位置する土坑である。南半は I a 区調査時に設け、I b 区との境をなす側溝により失われている。現状で長軸 152cm × 短軸 95cm で、深さ 35cm である。1 号落ち込みを切り、その内側に入り込む位置にあるが、平面で明瞭に検出できたわけではなく、側溝からの断面の観察でも判然としなかったため、1 号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。埋土は暗灰茶褐色主体である。

出土土器 (第 33 図 11・12)

11・12 はともに壺である。頸基部のくびれが強く、外反する口縁部が大きく開く広口壺である。12 は頸基部のくびれは特に強い。

7 号土坑 (図版 6、第 34 図)

I 区北東部の I a 区内北西隅付近で、2 号土坑の南に位置する土坑である。1 号落ち込みを切る先後関係である。長軸 120cm × 短軸 85cm の楕円形に近く、深さ 150cm である。中位程度の深さの位置から完形のものを含む土器が出土しているが、底面は判然としなかったため掘りすぎた可能性がある。

第 33 图 I 区 2・4～7 号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器（図版 24、第 33 図 13～15）

13 はやや小形の壺で口頸部がやや立ち気味にのびる。14 は甕の口頸部である。15 は鉢でやや長い屈曲口縁を有する。

8 号土坑（図版 6、第 34 図）

I 区北側で I a 区内の南端に位置する土坑である。5 号土坑にその西側で接して切られる。現状で長軸 99cm × 短軸 85cm で、円形に近いと考えられ、深さ 63cm である。底面から完形に近い土器が出土した。

出土土器（図版 24、第 36 図 1）

1 は土師器の布留系甕で肩部に一条の沈線を廻らせる。

9 号土坑（図版 6、第 34 図）

I 区北側で I a 区内の南西付近に位置する土坑である。長軸 247cm × 短軸 105cm の隅丸長方形で、深さ 58cm である。底面には樹皮と思われるものが一面に敷かれる。当初検出時には平面形は判然とせず、また埋土も地山である黄灰褐色粘質土と極めて近く、底面で検出した樹皮を追いかけていく形で掘削し、その結果現状のような形状となった。この土坑の北西に位置する 24 号土坑も極めて似たような様相を呈し、また主軸の近似していることから、相互の関連性が窺える。

出土土器（第 36 図 2～5）

2・3 は甕の口頸部である。4・5 は鉢で、4 はごく短い内湾気味の屈曲口縁を有する胴の張らないやや扁平な器形と考えられ、5 は口縁が外反気味で胴部は丸みを帯びる。

10 号土坑（図版 7、第 34 図）

I 区東側で、I b 区内南東隅付近に位置する土坑である。長軸 84cm × 端軸 70cm の楕円形で、深さ 137cm と狭小ながら深く、壁の立ち上がりは急である。20 号土坑をその北西側に接して切る。埋土はレンズ状の堆積をなし、検出面から 25cm 程度まで淡暗灰褐色土、55cm 程度まで暗褐色土で、それ以下は地山であるブロック状の黄灰褐色土が主体である。

出土土器（第 36 図 6～9）

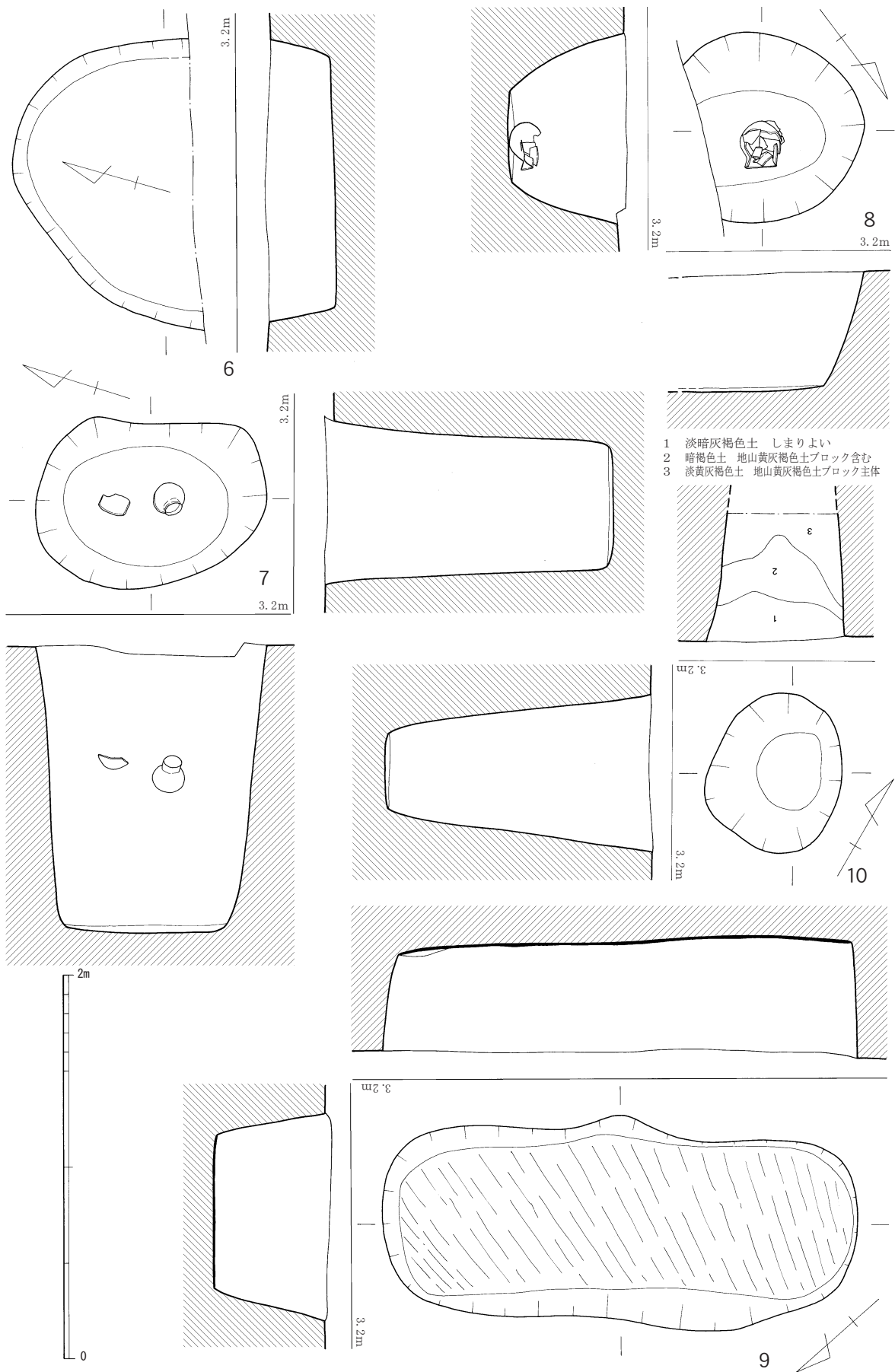
6 は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺である。7 は甕の口頸部である。8・9 は鉢で、8 は短い屈曲口縁がわずかに外反し、9 は短く外反する口縁を有する扁平な器形である。

11 号土坑（図版 7、第 35 図）

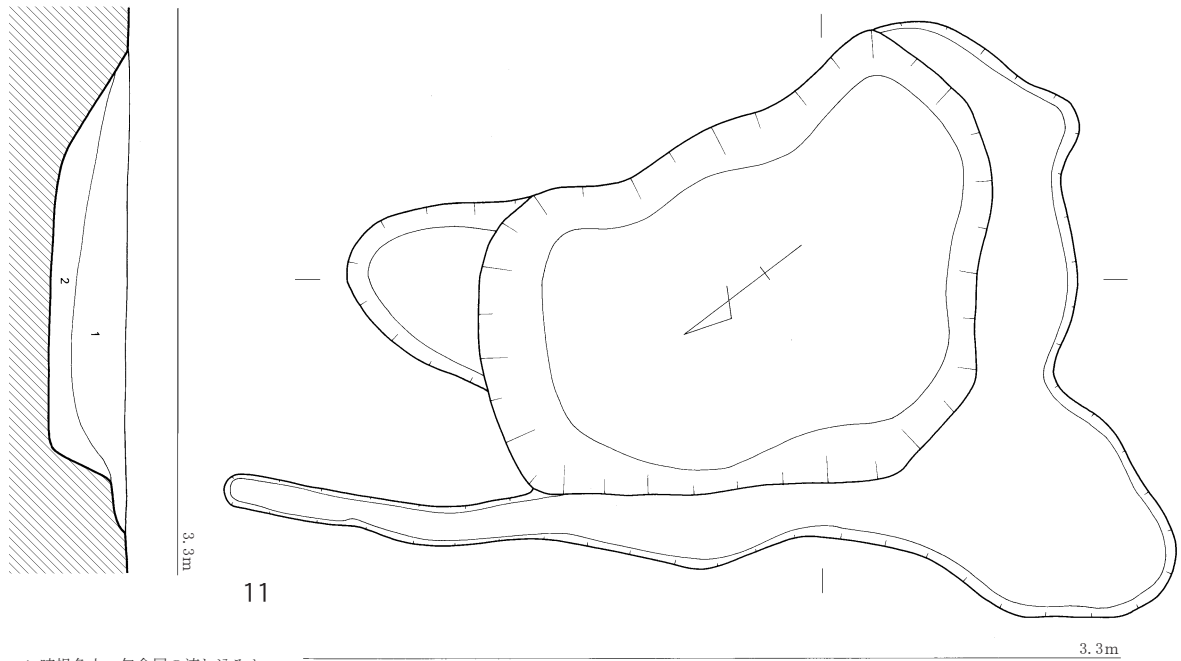
I 区北西付近で、I b 区内に位置する。I b 区の西側包含層中で当初から明瞭に確認された唯一の土坑である。当初著しく不整な形状で、そこから一段掘削すると不整形ではあるが、ある程度まとまった平面形が検出された。長軸 197cm × 短軸 179cm で深さ 33cm である。埋土は上層が暗褐色で、下層は暗灰褐色で多量の灰と焼土ブロックを含む。

出土土器（図版 24、第 36 図 10～23）

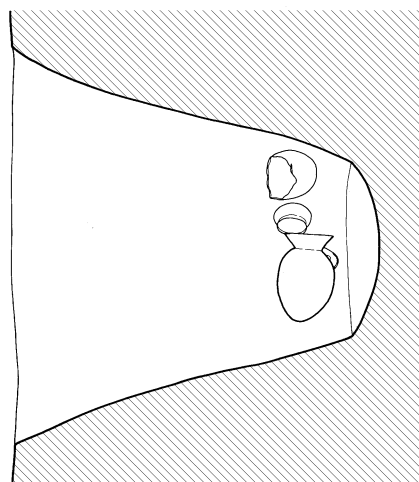
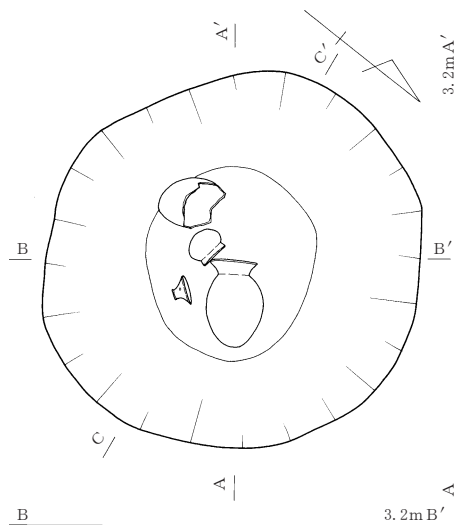
10 は頸基部のくびれが強く、外反する口縁部が大きく開く広口壺である。11・12 は壺の胴部～底部で、11 は 10 と同一個体の可能性があり、12 は胴部下半に焼成後外面から穿孔を施す。13 は



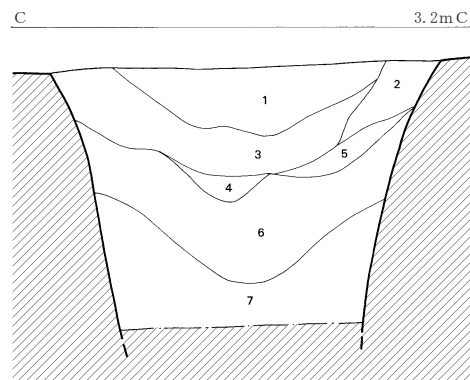
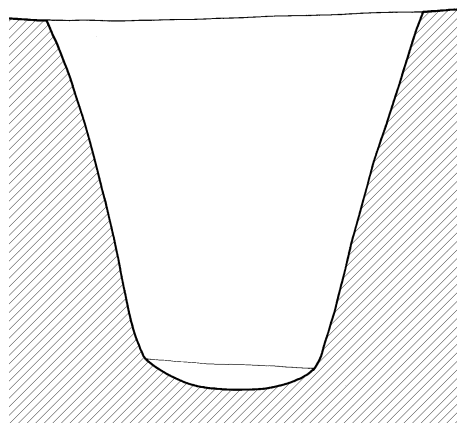
第34図 I区6~10号土坑実測図 (1/30)



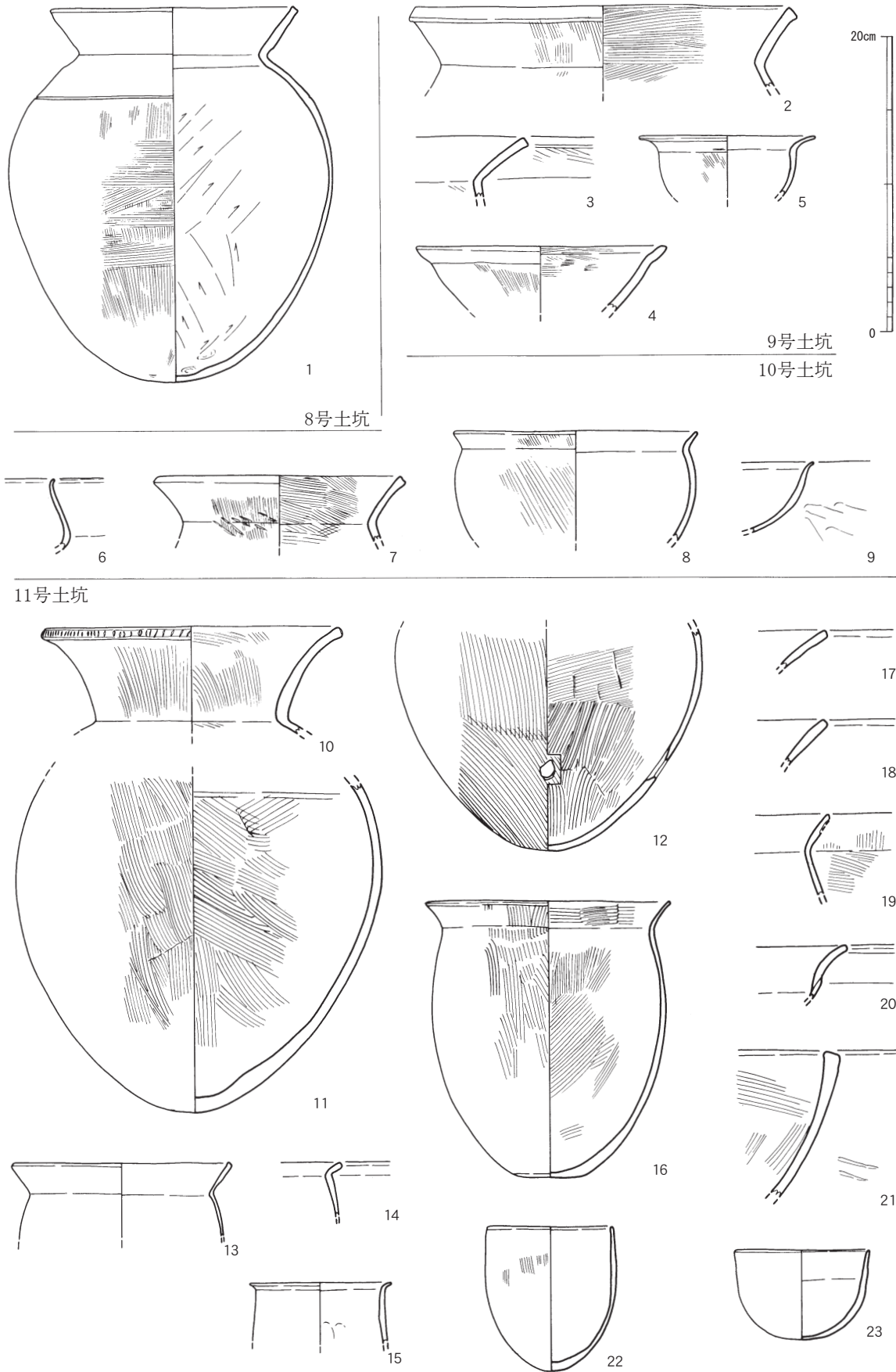
- 1 暗褐色土 包含層の流れ込みか
土器細片多い しまり
よく、粘性弱い
- 2 暗灰褐色土 多量の灰とわずかな
焼土ブロック含む
1よりしまりあまく、
土器細片が多い



- 1 暗褐色土 地山黄灰褐色粘土ブ
ロックを多量に含む し
まりよく、粘性やや弱い
- 2 暗褐色土 1とほぼ同じ地山ブ
ロックがやや少ない
- 3 淡黄灰褐色土 地山ブロック主体
暗褐色土少量含む
1よりしまりあまい
- 4 黄灰褐色土 全体にまだら状にに
ごり、灰粒少量含む
しまりあまく、粘性
強い
- 5 黄灰褐色土 4とほぼ同じ
- 6 淡黄灰褐色土 4・5よりも均質な
層灰塊含む
- 7 暗青灰色土 グライ化著しい
やや砂質土が混ざる
しまり極めて甘い



第 35 図 I 区 11・12 号土坑実測図 (1/30)



第 36 图 I 区 8 ~ 11 号土坑出土土器实测图 (1/4)

頸基部のくびれの弱い小型の広口壺である。14は短い口縁が外反する短頸壺である。15は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺である。16は平底の甕である。17～19は甕の口縁部である。20は高杯の口縁部から屈曲部である。21～23は鉢である。21は素口縁でやや大型、22は素口縁でやや長胴、23は小型で口縁部はごくわずかに外反気味である。

12号土坑（図版7、第35図）

I区中央付近で、I b区内に位置する土坑である。径150cm程度のほぼ正円に近く、深さ150cmで、他の同様な深さの土坑に比べ平面形が大きく、壁の立ち上がりやや緩やかである。底近くからは、完形のものをはじめまとまった土器が出土した。埋土は、検出面から30cm程度は暗褐色で明瞭に識別できるものであるが、以下85cm程度の深さまでは地山に近似した黄灰褐色のものが主体で、それ以下はグライ化しており細分は困難で、ややシルト状の埋土も含まれる。

出土土器（図版25、第38図1～9）

1は頸基部のくびれが強く、口頸部がやや外反する長胴の壺で、胴部最大径が中位にあり、なで肩である。2は口頸部が短く直立してのびる直口壺である。3は口縁がやや外反する壺で外面はハケの後にミガキを施し、内面はケズリの後にナデを施す。4は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺である。5は小型丸底壺の口頸部で外面にわずかにミガキが残る。6～8は甕で、8は頸部の屈曲が強く口縁が外反し、畿内五様式系の可能性がある。9は高杯の短い脚部で、穿孔は3箇所施される。

13号土坑（図版8、第37図）

I区東側でI b区南東付近に位置する土坑である。長軸102cm×短軸70cmの隅丸長方形で、深さは最深部で42cmである。東側は深さ16cm程度でテラス状となる。1号落ち込みを切り、その内側に完全に入り込んで位置にある。埋土は暗褐色で周辺の1号落ち込みの埋土よりも暗いため個別の土坑と判断したが、1号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。

出土土器（第38図10～16）

10～12は壺で、10は頸基部のくびれが強く、口縁部外反する広口壺である。11は短頸壺の口頸部。12は頸基部のくびれがやや弱く、開きの小さい短い口縁部をもつ畿内系広口壺である。13～16は甕で、16は頸部のしまりが弱く胴部が張らない器形である。

14号土坑（図版8、第37図）

I区東側でI b区内に位置する土坑である。長軸115cm×短軸79cmの不整楕円形で、深さは最深部で33cmである。東側は深さ12cm程度でテラス状となる。1号落ち込みを切り、その内側に入り込む位置にある。埋土は暗褐色で周辺の1号落ち込みの埋土よりも暗いため個別の土坑と判断したが、1号落ち込み内の埋土の相違を抽出したものである可能性も否定できない。

出土土器（第38図17～21）

17は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺。18は甕の口頸部。19～21は高杯で、19・20は口縁部から屈曲部にあたる。21はやや長い屈折口縁を有し、屈折部より下位は丸みを持つ。

15号土坑（図版8、第37図）

I区北側でI b区中央に位置する土坑である。長軸62cm×短軸57cmで正円に近く、深さは101cmである。壁の立ち上がりは非常に急で、底面近くからまとまって土器が出土した。

出土土器（図版25、第38図22～25）

22～25は土師器坏である。22は底部のみであるが、他は完形に復原される。23は口径12.8cm、器高3.3cm。24は口径13.7cm、器高4.2cm。25は口径15.4cm、器高2.9cm。底部調整は22が回転ヘラ切り、23が回転ヘラケズリの後ナデ、24は回転ヘラケズリ、25は回転ヘラケズリの後ハケ状の調整が施される。

16号土坑（図版9、第37図）

I区北端付近で、I b区北端中央部に位置する土坑である。長軸65cm×短軸54cmで正円に近い平面形で、深さ62cmである。壁の立ち上がりは非常に急で、上層の埋土は暗褐色のため明瞭に検出できた。

出土土器（第38図26～28）

26は大型の広口壺口縁部である。27は甕口頸部で、口縁部はごくわずかに外反する。28は甕底部である。

17号土坑（図版9、第37図）

I区東側中央部に位置し、I b・c区の境界付近に位置する土坑である。長軸70cm×短軸58cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは非常に急で、直下に落ちていく傾斜である。埋土については、上層は暗褐色である程度のしまりがあるが、下層は黒褐色で著しく粘性の強い泥質のものであった。人力で160cm程度の深さまで掘削を行ったが、平面的に狭小でそれより下部の掘削を続けていくことは困難であった。そのため、I b区の調査終了後の埋め戻し前にバックホーで掘削できなかった下部周辺を掘削し、底面を確認する作業を行った。その結果、検出面より230cm程度の深さまで及んでいることが判明し、底面付近で残存状況の良好な土器が出土した。

出土土器（図版25、第39図1～6）

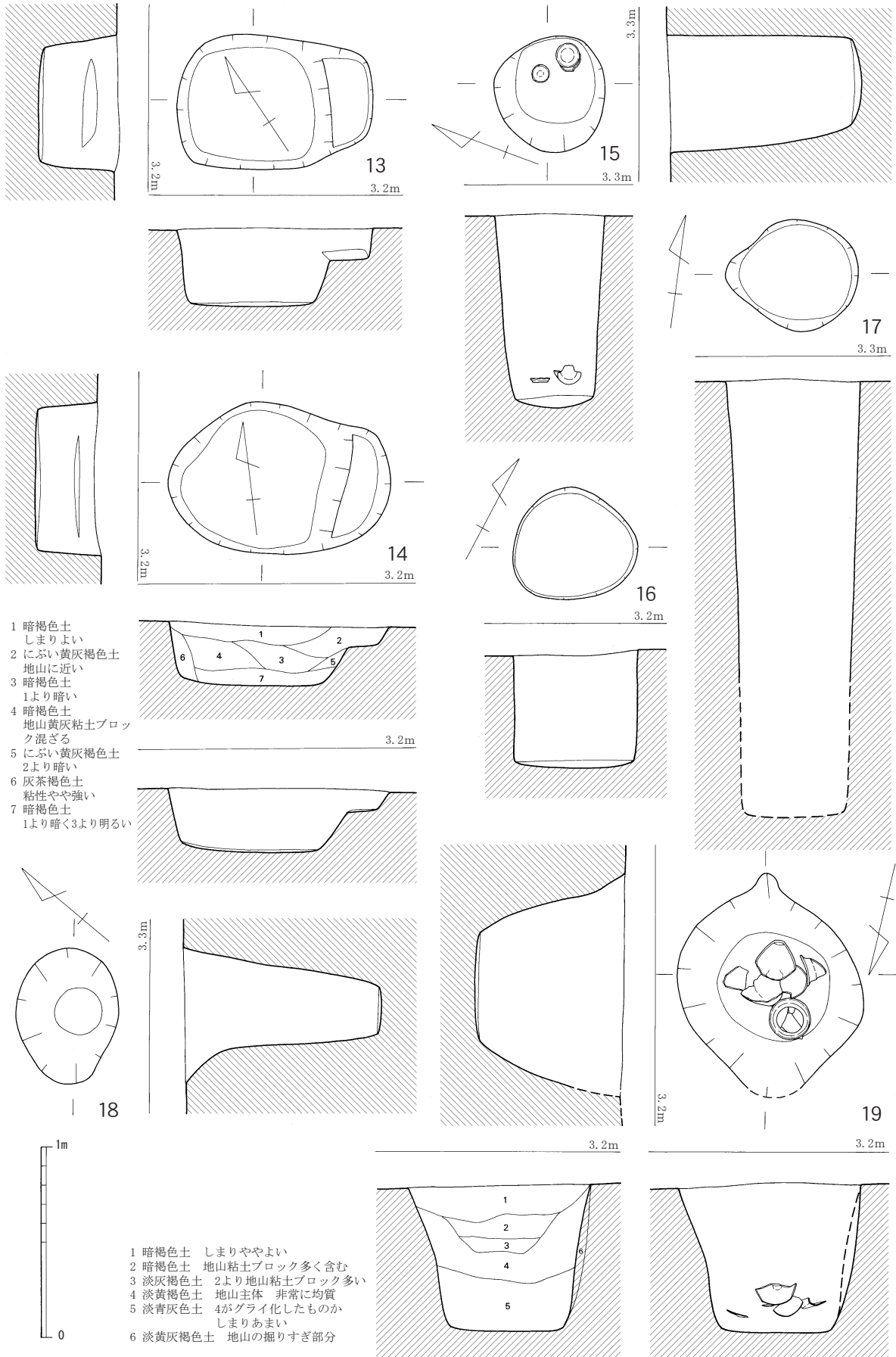
1・2は在地系の甕で、ともに頸部の屈曲は緩やかで、短い口縁部は外反する。胴部はやや張って丸みのある器形である。3～6は鉢である。3の口縁部はやや内湾気味のものである。4・5は脚部を有すると考えられ、5の口縁部はわずかに外反する。6は直線的に立ち上がる素口縁のものである。

18号土坑（図版9、第37図）

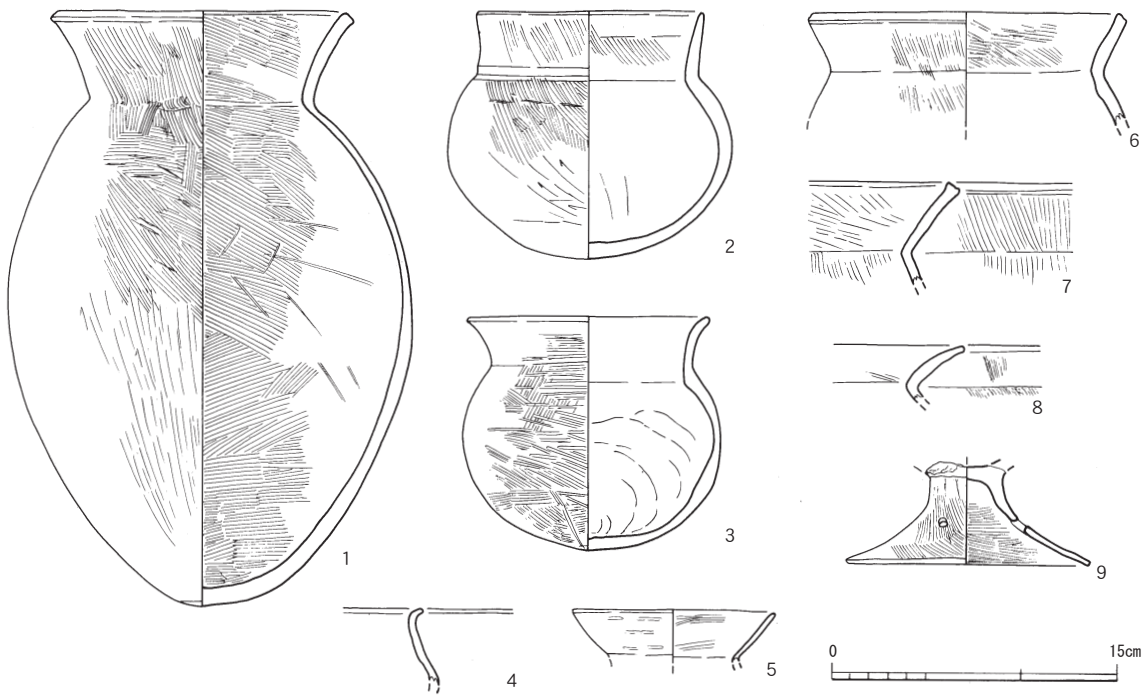
I区東端のやや北寄り、I b区内に位置する土坑である。長軸71cm×短軸53cmの楕円形で、深さ103cmである。この程度の深さの土坑としては、壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面は非常に狭くなっている。南西側の検出面付近の壁の立ち上がりは、特に緩やかである。埋土はシルト状の灰茶褐色である。

出土土器（第39図7）

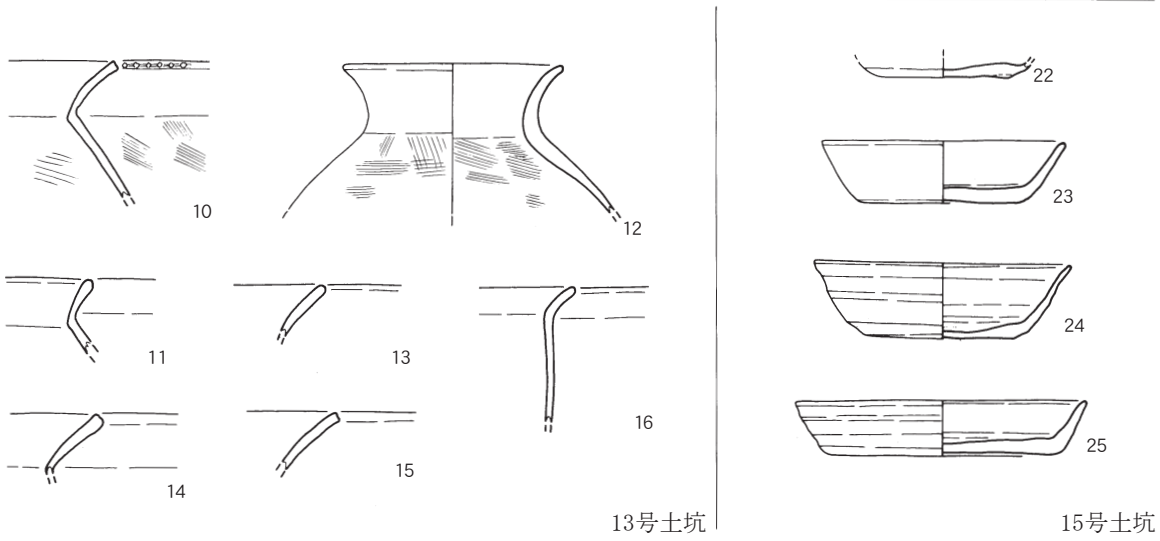
7は須恵器坏身の底部で、貼り付け状の高台を有す。



第37図 I区13～19号土坑実測図 (1/30)

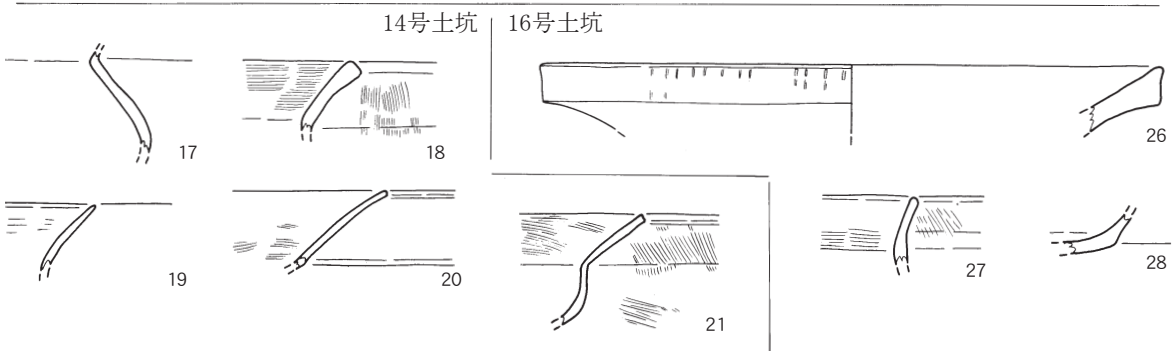


12号土坑



13号土坑

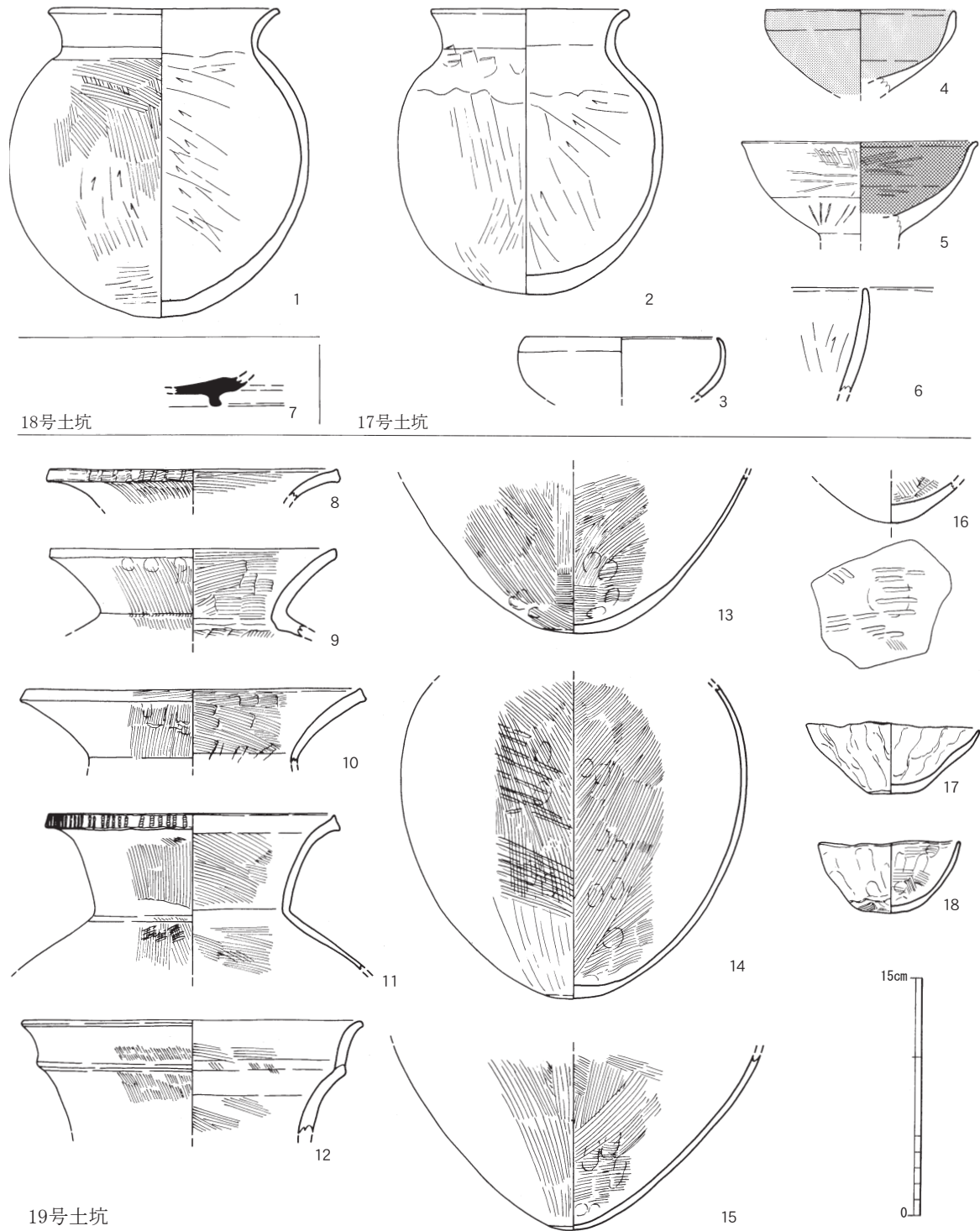
15号土坑



14号土坑

16号土坑

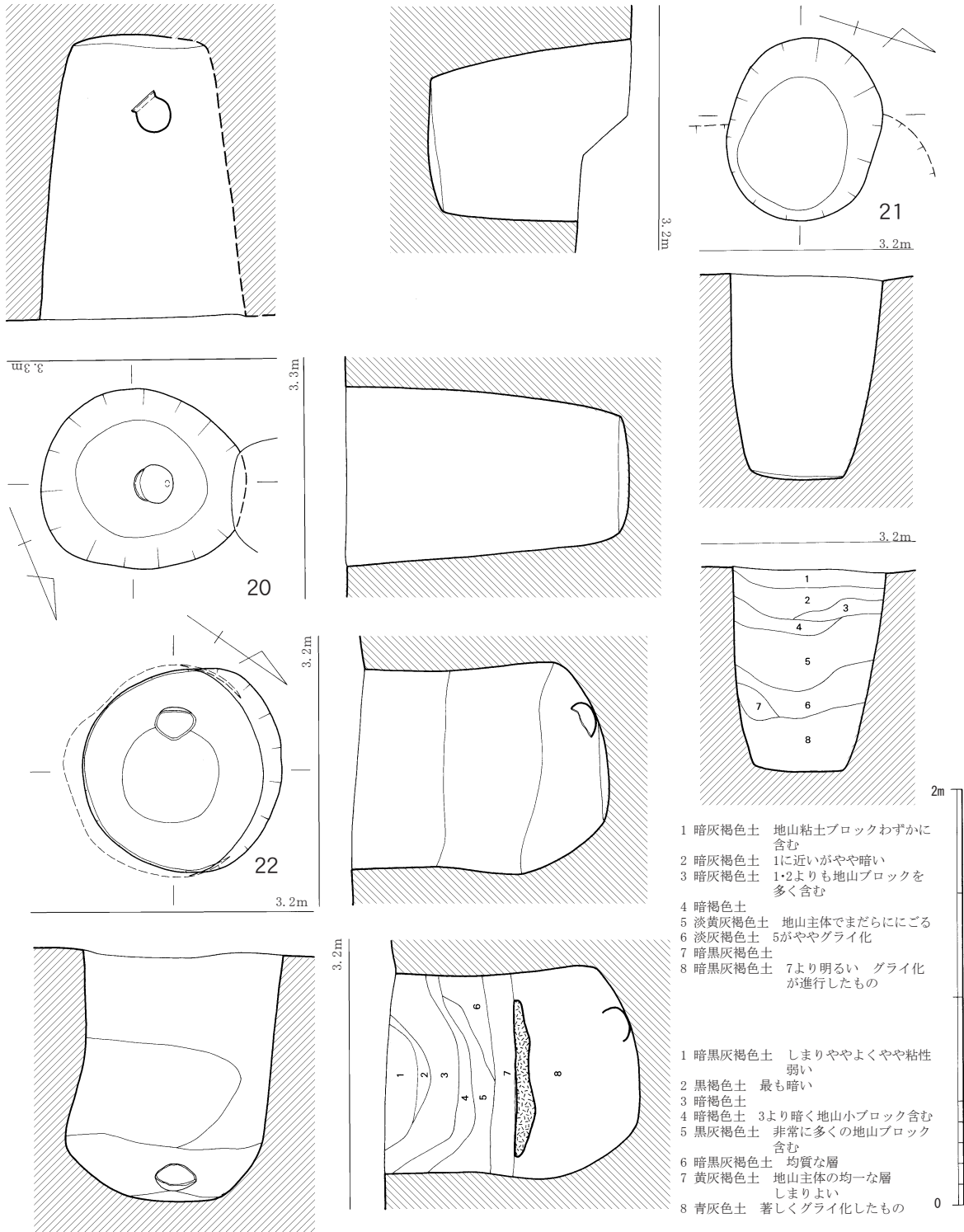
第38图 I区12~16号土坑出土土器实测图(1/4)



第 39 図 I 区 17 ~ 19 号土坑出土土器実測図 (1/4)

19号土坑 (図版 10、第 37 図)

I 区中央部付近で、I b 区内に位置する土坑である。長軸 115cm × 短軸 98cm で、平面形は円形に近く南側の一部がわずかに外側に張り出しており、深さ 78cm である。北側の一部がわずかにピットに切られる。壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面よりやや浮いた状態でまとまって土器が出土したが、いずれも大きく欠損している。埋土については、上層は淡黄灰褐色の地山ブロックが



第40図 I区20～22号土坑実測図 (1/30)

混ざる暗褐色であり、下層はにごりの少なく地山に近い淡黄灰褐色で、最下層は下層と本来同一のものと考えられるが、グライ化し淡青灰色となっている。

出土土器 (図版25、第39図8～18)

8～11は頸基部のくびれが強く、口頸部が大きく開く広口壺である。8・11は口唇部にキザミ

を有す。12は在地系複合口縁壺の口頸部である。13・14は壺の胴部から底部にかけてで、14にはタタキが残存する。15・16は甕の底部で、16の外面にはタタキが残存する。17・18は手づくねによるものである。

20号土坑（図版10、第40図）

I区東側で、I b区内南東隅付近に位置する土坑である。10号土坑にその南東側に接して切られる。現状で長軸95cm×端軸87cmと円形に近く、深さ136cmである。埋土は上層が暗褐色土主体、下層は地山に近い黄灰褐色土が主体で、さらに下位ではグライ化し青灰色である。下位の底面からある程度離れた位置から完形の土器が出土した。

出土土器（図版26、第41図1～6）

1は頸基部のくびれがやや弱く、口縁部が直線的に立ち上がる短頸壺である。2は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺である。3は甕の口縁部。4～6は鉢で、4・5は素口縁で6はやや長い屈折口縁が直線的にのびる。

21号土坑（図版11、第40図）

I区北東部で、I b区の北東隅に位置する土坑である。東側の上部は攪乱により失われている。現状で長軸87cm×短軸73cmで、深さ97cmである。壁の立ち上がりは急で、埋土の上層は暗灰褐色主体で、中位に地山に近い淡黄灰褐色土を挟み、下層は暗黒灰褐色である。

出土土器（第41図7～14）

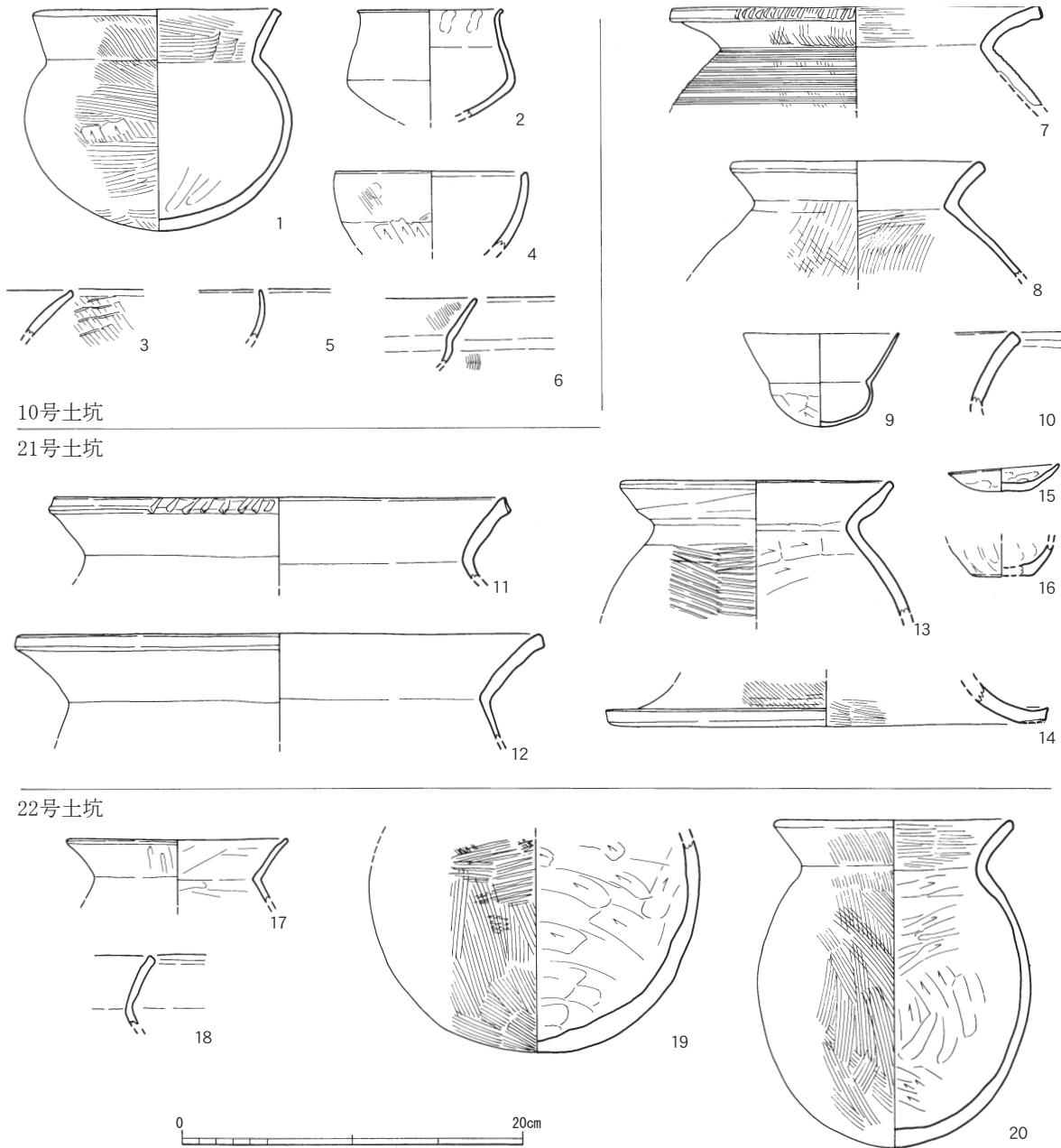
7は頸基部があまりくびれないため太く、短い口頸部が強く外反して開く壺である。肩部にはハケ原体によると思われる粗い平行文が施される。8は頸基部のくびれが強く、短い口頸部がわずかに外反気味にのびる壺である。9は小型精製器種の小型丸底壺である。10～12は在地系甕の口頸部で、13は庄内系甕である。14は器台の下端部である。15・16は手づくねによる鉢状の器形のものである。

22号土坑（図版11、第40図）

I区内では北東部にあたり、I b区での東端部付近に位置する土坑である。40号土坑の南東側に隣接している。平面形は径95cm程度の正円に近く、検出面から深さ120cmである。壁の立ち上がりは非常に急な傾斜となっており、特に南半はオーバーハングする。下方の底面より30cm程度高い位置で、底面への傾斜がやや緩やかに転換して落ち込み、その結果底面はやや狭くなっている。埋土は、上層で暗褐色、黒褐色等の認識しやすいものである。検出面より50cm程度の深さの位置で、樹皮のようなものが一面に薄く敷き詰められている。その下位に10cm程の地山に近似した黄灰褐色土の層を挟み、深さ60cm程度で最大で厚さ10cm程度で木クズのようなものが一面に広がる。それより下位の埋土はグライ化して青灰色で細分は困難であり、底面付近で大きな土器片が出土した。

出土土器（図版26、第41図17～20）

17は小型丸底壺の口頸部である。18～20は甕で、19の外表面は粗いハケ、内表面は粗いケズリを施し、20の内表面はケズリを施す。



第 41 図 I 区 20 ~ 22 号土坑出土土器実測図 (1/4)

23 号土坑

当初土坑としたが後に建物の柱穴と判断したため欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。

24 号土坑 (図版 11、第 42 図)

I 区北端部で、I b 区内の I a 区と境界付近に位置する土坑である。長軸 240cm × 短軸 88cm の隅丸長方形に近い形状で、深さ 50cm である。底面には樹皮と思われるものが一面に敷かれる。当初検出時では、特に北側部分で最終的な掘削範囲より狭く遺構の大きさを捉えていた。しかし掘削段階で、底面の樹皮が想定したよりも外側へ続いたため、それを追いかけていく形で掘削を続け、

最終的な形状に至った。樹皮の直上には横木のような木質が2箇所で見られるが、非常に薄く不整形であるため、建物の礎盤とは即断し難い。埋土については、小単位での分層が認識され、地山と同一の黄灰褐色に近似する層と暗褐色等の暗い層とが複雑に上下する堆積状況であった。また、掘り返しのされた可能性がある。この土坑の南東に位置する9号土坑も類似した形状で、また主軸の近似していることから、相互の関連性が窺える。

出土土器 (第43図1～10)

1は頸基部が太く短い口頸部が外反する短頸壺である。2は頸基部のくびれが強く口頸部が立ち気味にのびる壺である。3は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺で、肩部に櫛歯状の工具によると思われる文様が見られる。4は布留系甕の口頸部と考えられる。5は甕の底部である。6・7はやや大型の在地系甕である。7の底部はわずかにレンズ状である。8は高杯の口縁から屈曲部である。9素口縁の鉢である。10は器台の口縁部である。

25号土坑 (図版26、第42図)

I区中央部のやや北寄り、I b区内に位置する土坑である。径76cm前後の正円に近い形状で、深さ90cmである。底面まで中位の深さで、原形を保っていないが完形となる土器が出土した。この土器よりも上位の埋土は、地山である淡黄灰褐色土の小ブロックが混ざる暗褐色土で細分できず、一括して埋没した可能性がある。

出土土器 (図版26、第43図11～15)

11は在地系複合口縁壺の口頸部である。12は壺で口縁部が中位から屈曲して直立し、口唇部はわずかに外反する。13・14は甕で、13は在地系長胴の甕で内外面はハケ調整が施され、胴部上半にはタタキが残存する。14は在地系甕の口頸部である。15は棒状の土製品で、片側の端部は欠損している。

26号土坑

当初土坑としたが、直下から礎盤b30が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したものと判断したため欠番とする。礎盤b30は礎盤b35、土坑28、土坑30との組み合わせにより27号掘立柱建物となる。

27号土坑

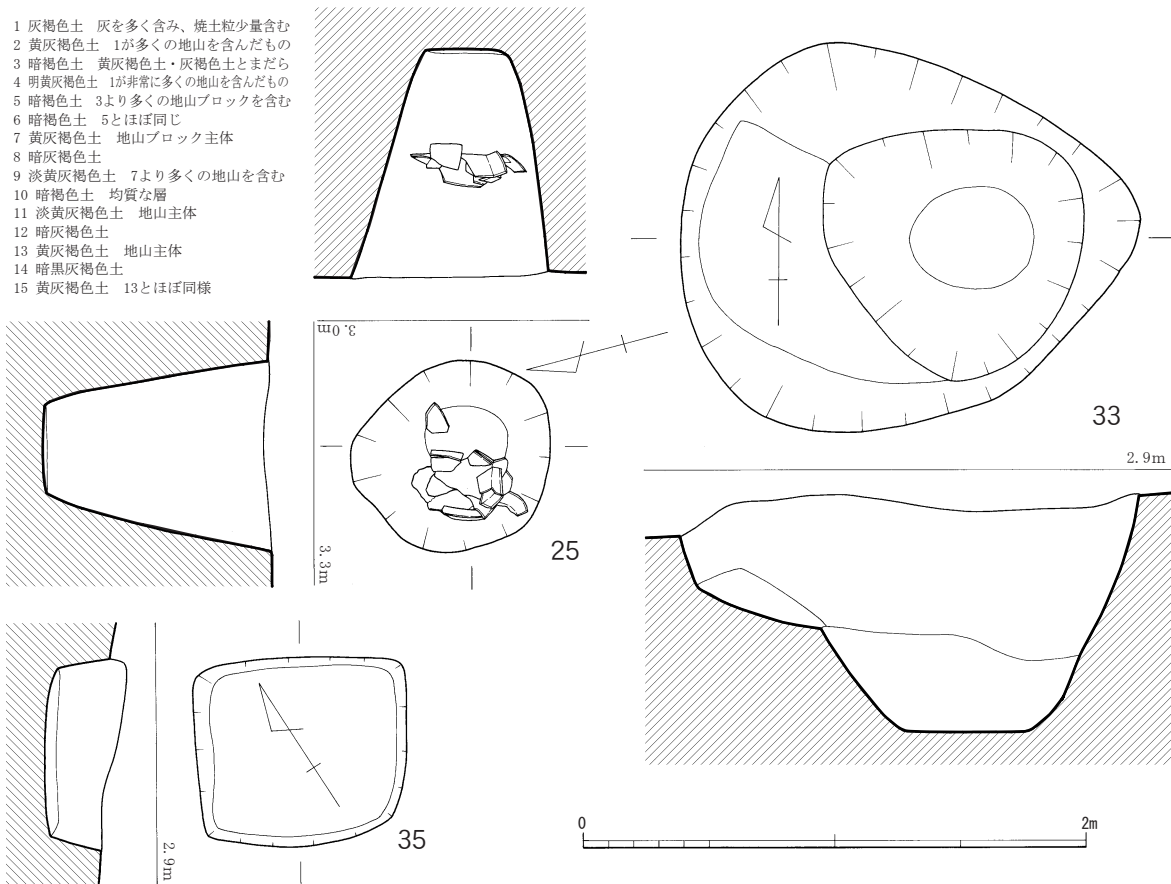
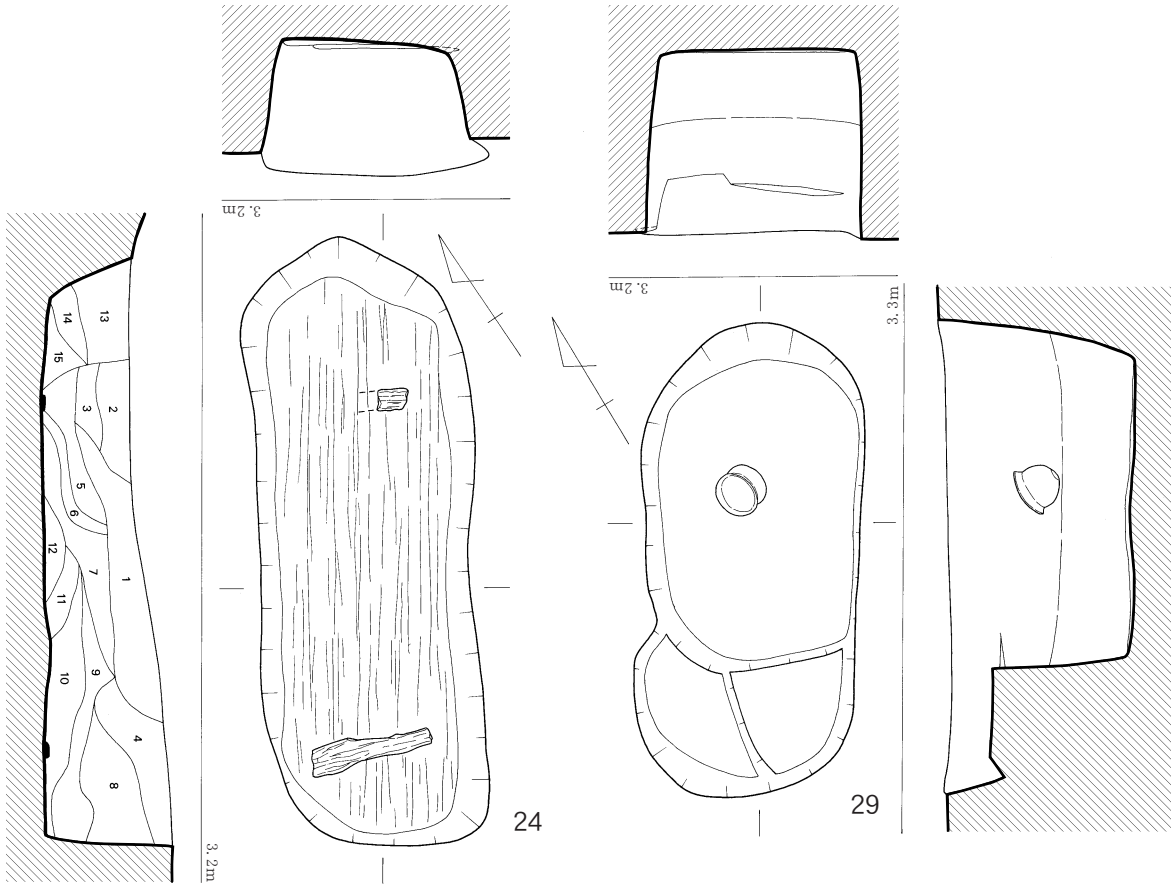
当初土坑としたが、直下から礎盤が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したものと判断して欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。

28号土坑

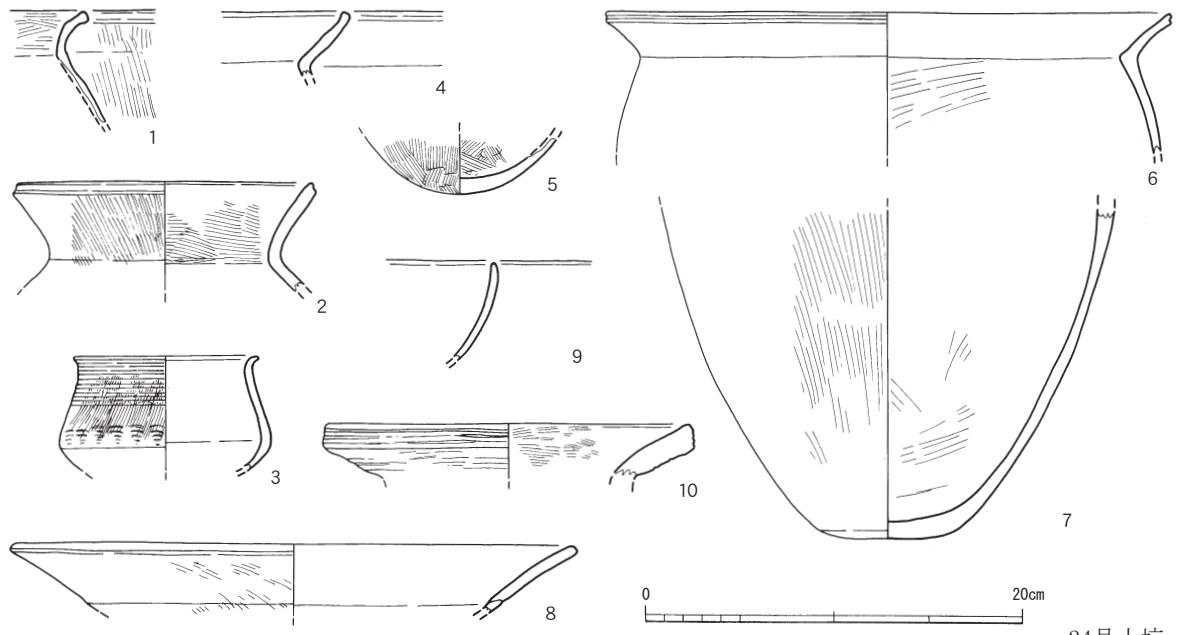
当初土坑としたが、礎盤b30、礎盤b35、30号土坑との組み合わせにより27号掘立柱建物となると判断したため欠番とする。

29号土坑 (図版12、第42図)

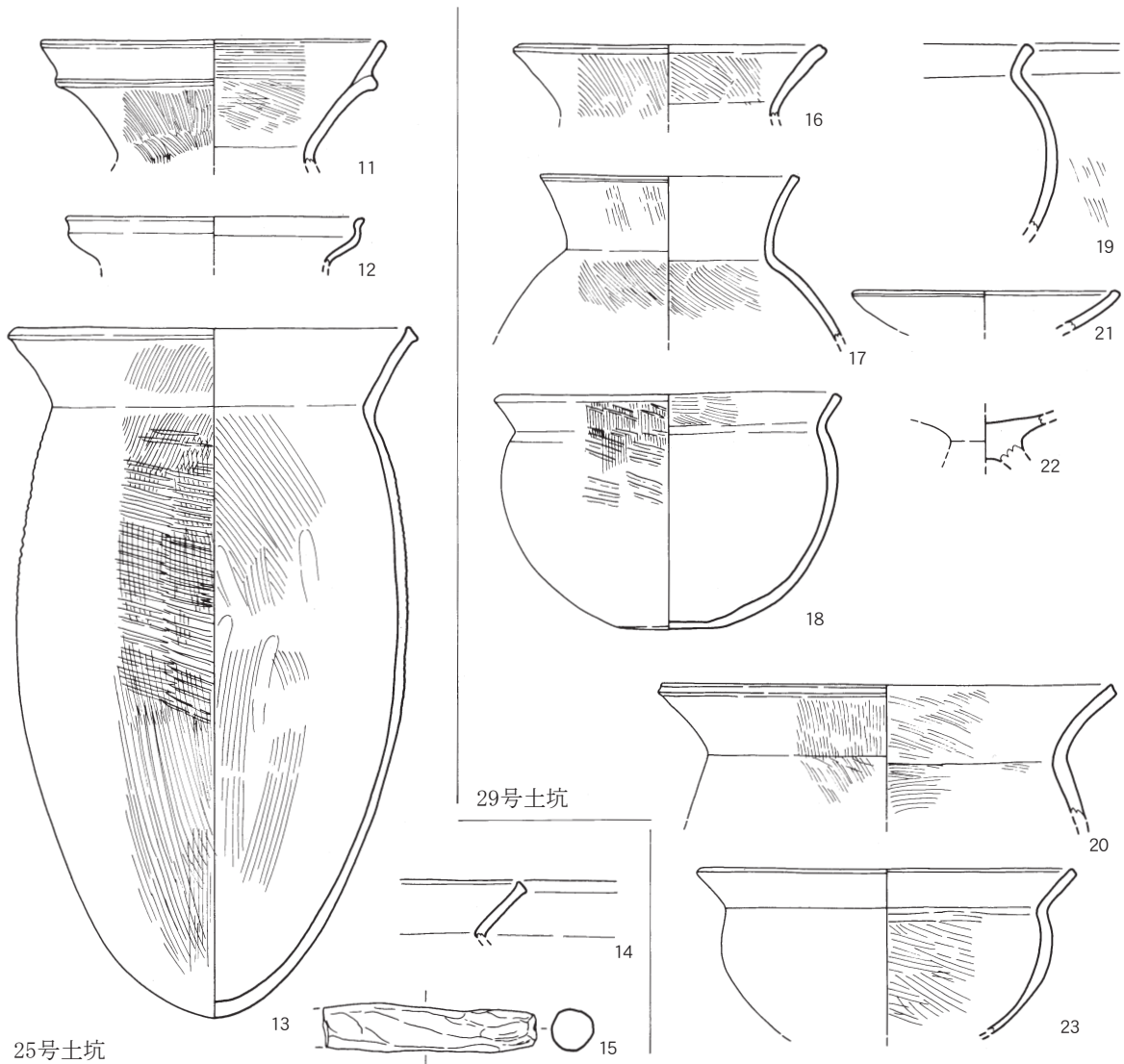
I区中央部のやや北寄り、I b区内に位置する土坑である。長軸188cm×短軸88cmで不整形楕



第 42 図 I 区 24・25・29・33・35 号土坑実測図 (1/30)



24号土坑



25号土坑

29号土坑

第43图 I区24·25·29号土坑出土土器实测图(1/4)

円形に近く、深さ 75cm である。埋土は地山の黄灰褐色よりわずかに暗いが、非常に分かりづらく、そのため南側は二段のテラス状になっているが、確実なものとは言い切れない。また、底面までの中位の深さで完形の土器が出土しているが、底面も非常に認識し難く掘り過ぎた可能性が高い。この出土土器の直下あたりが本来の底面である可能性が高いと考える。

出土土器（図版 26、第 43 図 16～23）

16・17 は頸基部のくびれが強く、口頸部が立ち気味にのびる壺である。18・19 は頸基部が太く、短い口縁が外反する壺である。18 は外面に一部タタキが残存する。20 は在地系甕の口頸部で、21 は外来系の甕の口縁部と考えられる。22 は脚部を有する鉢の上下の接合部である。23 は頸部で屈曲した口縁部が外側で直線的にのびる鉢で内面はミガキを施す。

30 号土坑

当初土坑としたが、礎盤 b30、礎盤 b35、28 号土坑との組み合わせにより 27 号掘立柱建物となると判断したため欠番とする。

31 号土坑

当初土坑としたが、直下から礎盤が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したものと判断して欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。

32 号土坑

当初土坑としたが、直下から礎盤が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したものと判断して欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。

33 号土坑（図版 12、第 42 図）

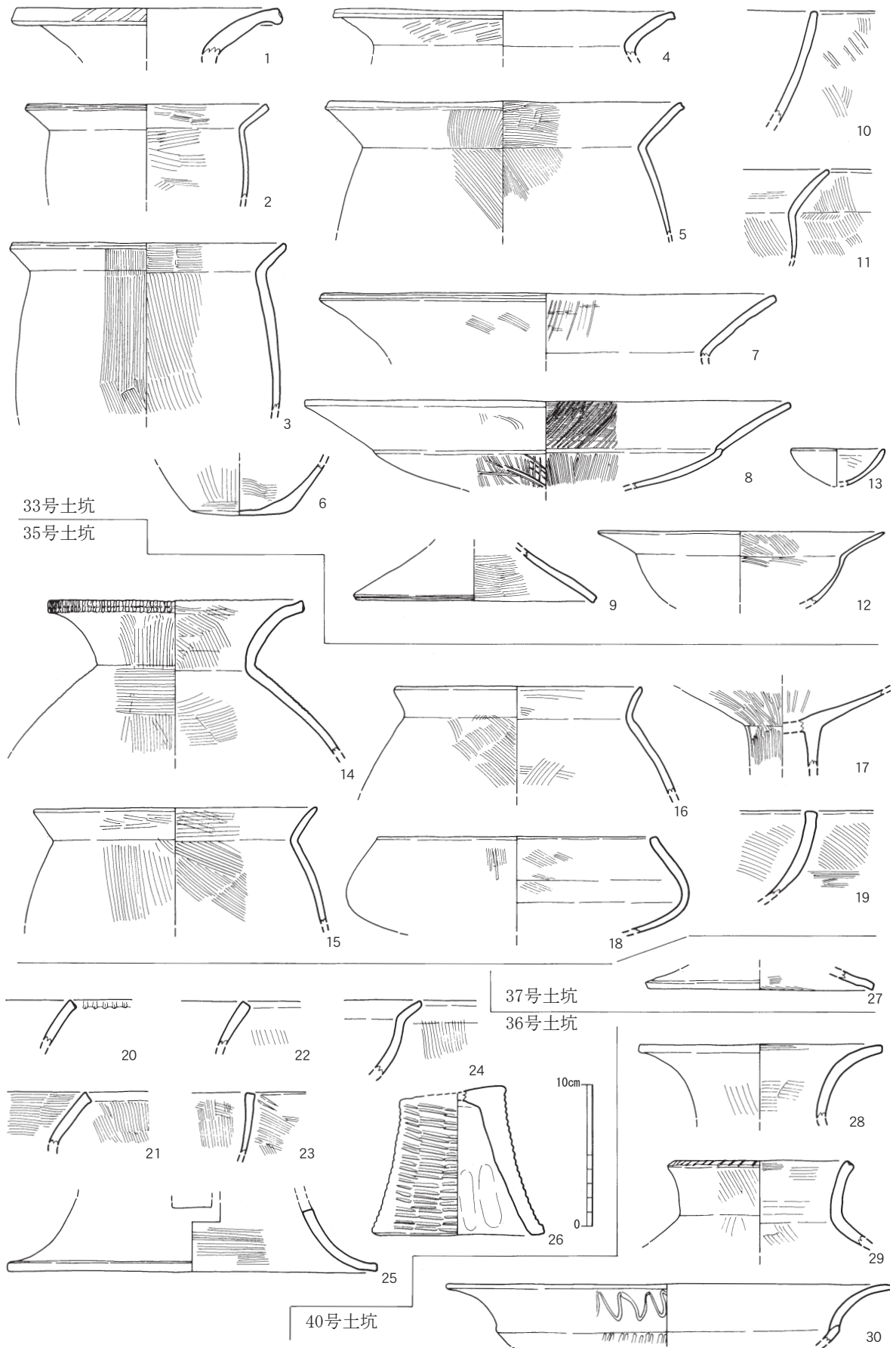
I 区北西隅付近で、I b 区内に位置する土坑である。長軸 184cm × 短軸 153cm の不整楕円形で、深さ 92cm である。西側は深さ 50cm 程度でテラス状になっており、東側で更に深くなる。上層の埋土は淡茶褐色主体で、明瞭に検出できず、1 号落ち込みとの切り合いも必ずしも明瞭に検出して確認できたわけではないが、この土坑が先行すると判断した。また、下層の埋土はグライ化した青灰色土で、わずかなにごりの有無を基に掘削したため、底面についても正確に掘削できたかの確実性には不安がある。

出土土器（第 44 図 1～13）

1 は器台の口縁部である。3～5 は甕の口縁部から胴部にかけてで、6 は甕の底部でわずかにレンズ状である。7・8 は高杯の口縁部から屈曲部にかけての部位でともに暗文が見られる。9 は高杯の脚部である。10 は素口縁の鉢で外面にはタタキが残存する。11・12 は頸部で屈曲して直線的な口縁部がのびる鉢である。13 は手づくねによる鉢形の土器である。

34 号土坑

当初土坑としたが後に建物の柱穴と判断したため欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。



第44图 I区33·35~37·40号土坑出土土器实测图(1/4)

35号土坑（図版13、第42図）

I区北東部で、I b区内に位置する土坑である。長軸85cm×短軸77cmの隅丸方形で、深さ30cmである。1号落ち込みを掘り下げている際に、その内部で検出した。当初の検出面から確認できたものではないものの、1号落ち込みの底面にわずかに至る前に検出したため、当土坑が切る先後関係と判断した。これは、埋土は暗褐色土主体で、1号落ち込みの上層の埋土と近似しているために当初からの検出が困難であったためと見られる。壁の立ち上がりはやや急な傾斜である。

出土土器（図版第44図14～19）

14は頸基部のくびれが強く、口頸部が大きく広口壺で口唇部にキザミを有す。15・16は頸基部が太く短い口縁部がわずかに外反するものである。17は高杯の杯部・脚部の接合部付近である。18は胴部が強く張り口縁へすばまる東北部九州地域で見られる高杯の杯部である。19は素口縁の鉢である。

36号土坑（図版13、第45図）

I区北東部で、I b区内に位置する土坑である。径85cm程度の正円に近く、深さ21cmである。西側包含層中で当初検出されなかったが、バックホーで下層の確認のため掘り下げる際に明瞭に検出したものである。埋土は、地山に近似する淡黄灰褐色土主体で暗褐色土が混ざる。

出土土器（第44図20～26）

20はやや外反する広口壺の口縁部で口唇部にキザミを有す。21・22は在地系甕の口縁部である。23は素口縁の鉢の口縁部である。24は頸部で外側に屈曲し、口頸部が短くのびる鉢である。25は器台の底部付近で上端部には透かし孔の一部が残存する。26は支脚で外面には密にタタキが見られる。

37号土坑（図版13、第45図）

I区北東部で、I b区内に位置する土坑である。長軸113cm×短軸82cmの不整楕円形で、深さ17cmである。西側包含層中で当初検出されなかったが、バックホーで下層の確認のため掘り下げる際に明瞭に検出したものである。埋土は、地山に近似する淡黄灰褐色土主体で暗褐色土が混ざる。内部のピットは、上層で検出された本土坑を切るものである。

出土土器（第44図27）

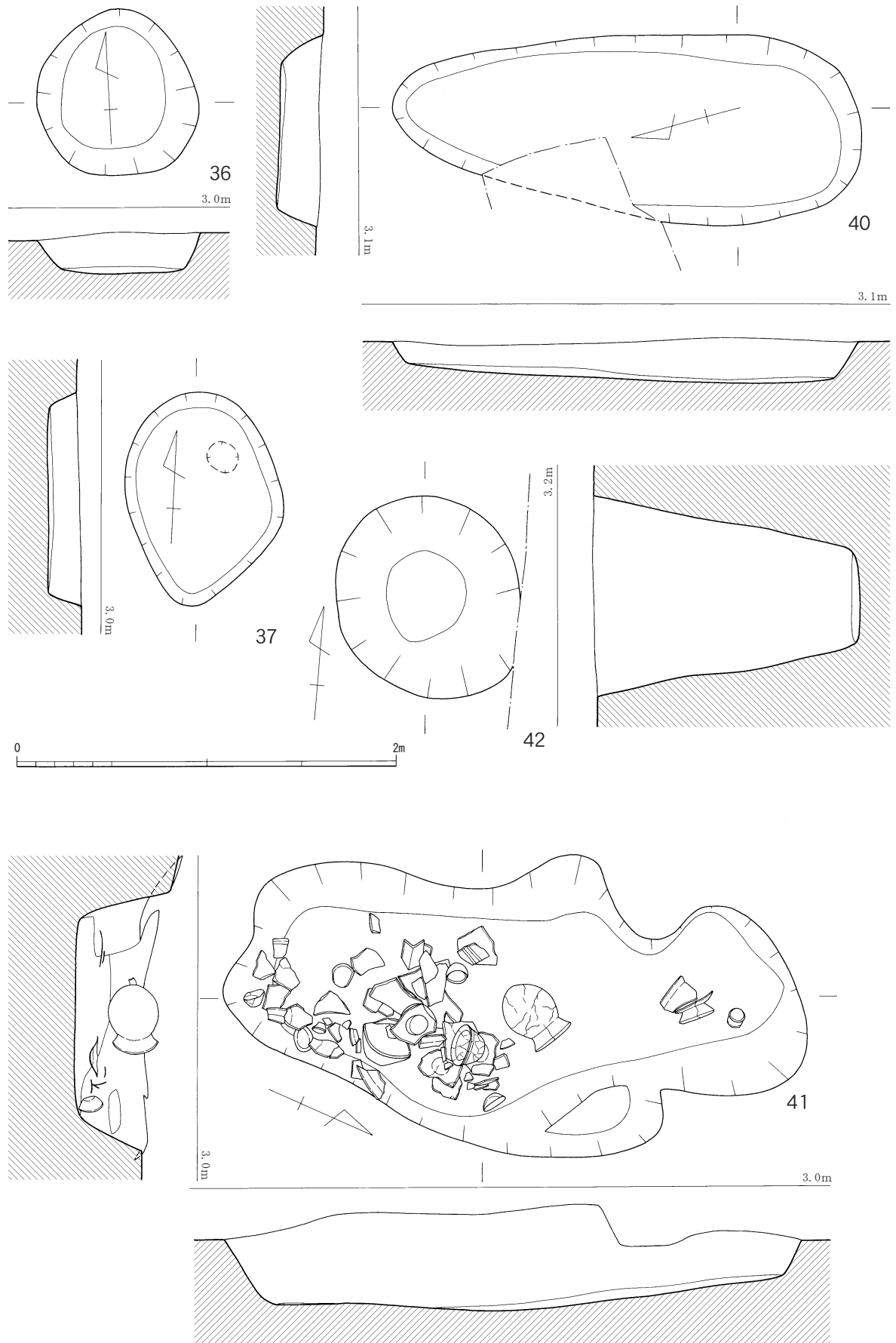
27は高杯の脚部である。

38号土坑

当初土坑としたが、礎盤b24・b25・b26の組み合わせにより28号掘立柱建物となると判断したため欠番とする。

39号土坑

当初土坑としたが、直下から礎盤b26が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したものと判断したため欠番とする。礎盤b24・b25、38号土坑との組み合わせにより28号掘立柱建物となると判断した。



第45图 I区36·37·40~42号土坑实测图(1/30)

40号土坑（図版14、第45図）

I区北東部で、I b区の東端近くに位置する土坑である。長軸245cm×短軸100cmの楕円形に近く、深さ23cmである。当初本土坑は東側包含層の下層にあったため検出できていなかったが、1号落ち込みの埋土確認の際に設けたトレンチの東端で遺構の掘りこみが認められていた。そのため、この周辺を5cm程度掘り下げたところ、平面形を全体的に検出することができた。なお、トレンチ掘削の際に遺構の一部は失われている。また、2号溝とは切り合い自体を検出して確認できなかったが、その下層で検出されているので本土坑が切られると考えられる。埋土については、上層で5cm程度の暗茶褐色土が堆積し、下層は地山に近似する淡黄灰褐色土に暗褐色土がわずかに混ざるものである。

出土土器（第44図28～30）

28は強く外反してのびる広口壺の口頸部である。29は短い口頸部がわずかに広がって立ち上がる壺で、口唇部にキザミを付す。30は高杯で屈曲部から上位は強く外反し、外面には暗文が見られる。

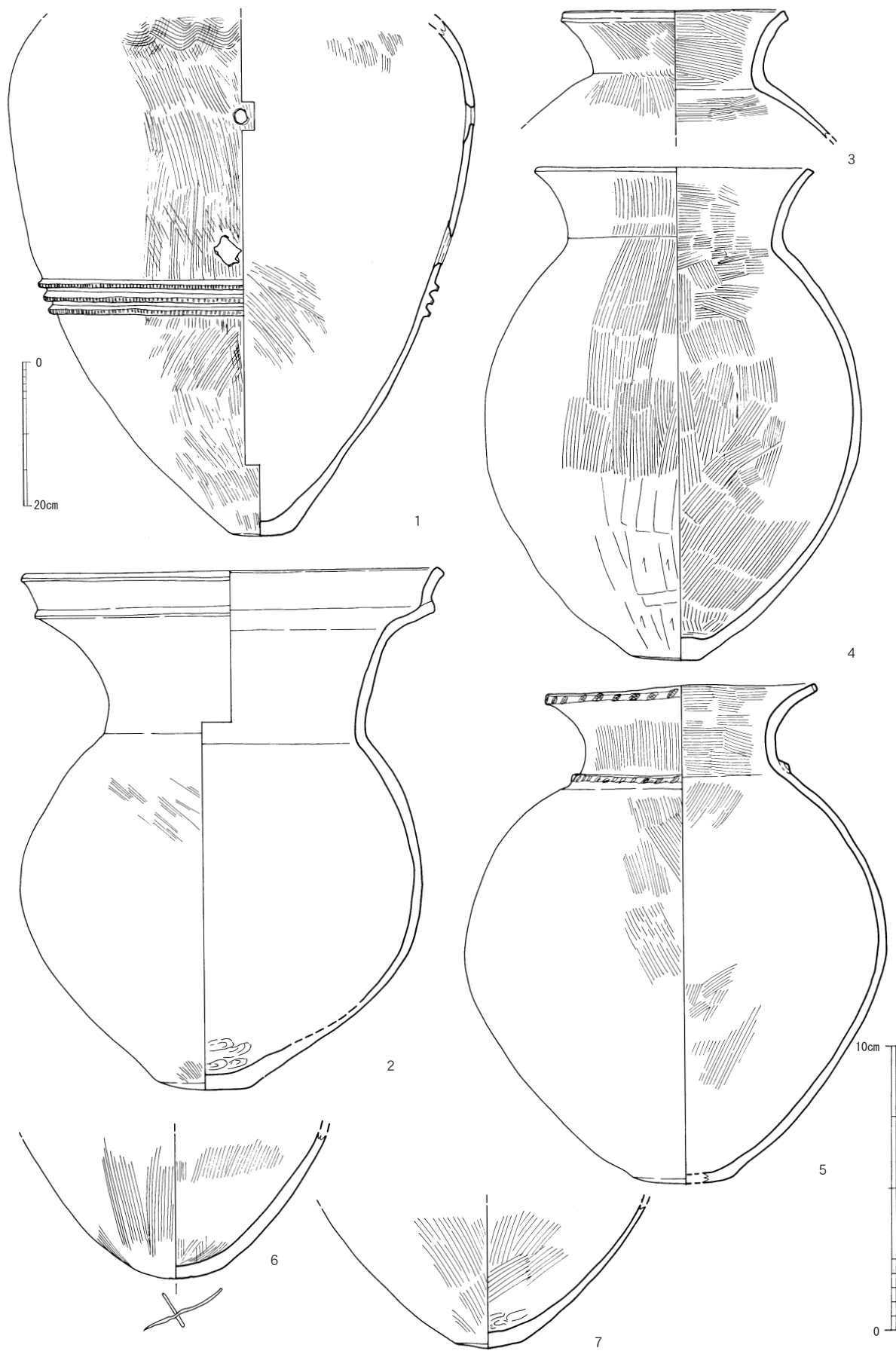
41号土坑（図版14、第45図）

I区北東部で、I b区内に位置する土坑である。長軸304cm×短軸158cmで不整形であり、深さ53cmである。1号落ち込みを掘り下げている際に、その内部で部分的に特に掘り下がり、土器が集中的に出土したため1号落ち込みとは別遺構の土坑と判断した。ただ、掘削段階の状況では、両遺構の先後関係を判断することはできなかった。遺構内からは完形のものをはじめ多くの土器が出土しており、特に南側に集中する。西側の遺構の上端ラインが特に不整形となっており、東側では深さ15～20cm程度のテラス部分が見られる。

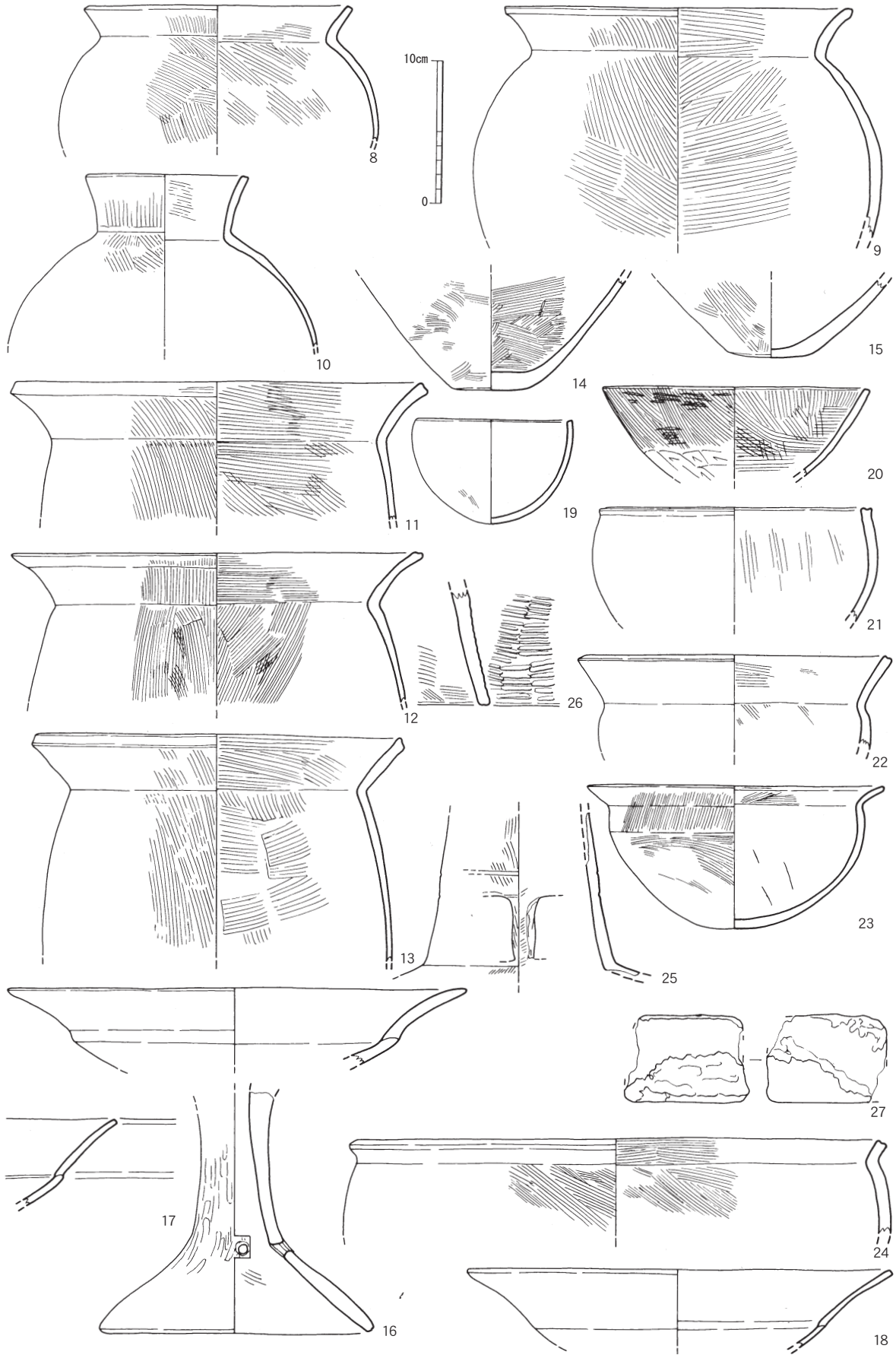
出土土器（図版26・27、第46・47図1～27）

1は大型の壺である。胴部中位よりやや下に断面コ字状でキザミを有する突帯が三条廻る。

底部はわずかにレンズ状で焼成後に外面から施された穿孔が二箇所に見られる。2は在地系の複合口縁壺で底部はレンズ状である。3・4は頸基部のくびれが強く口頸部がやや外反する広口壺である。4の胴部下半はハケの後にケズリを施す。5は頸基部のくびれが強く口頸部が強く外反し大きく開く広口壺である。頸基部には小さな突帯が廻り口唇部とともにキザミを有し、底部はややレンズ状である。6・7は壺の底部である。6は丸底で「×」状の沈線が見られる。7はややレンズ状である。8・9は頸基部が太く、短い口頸部がやや外反する広口壺である。9は8よりもやや大型である。10は頸基部が強くしまつて細く、口頸部がわずかに外反気味にのびる壺である。11～13はともに在地系甕の口縁から胴部にかけての部位である。14・15は甕の底部でともに平底に非常に近いわずかにレンズ状となったものである。16～18は杯部に屈曲部のある高杯である。19～21はともに素口縁の鉢で、19は直上に向けて開口しており、20はほぼ直線的に広がり、21は胴部中位に最大径があり、口縁部はごくわずかに内湾気味である。22・23は頸部で屈曲して口縁部が外側にのび、胴部から底部へと急激に径を減じる器形の鉢である。23の口縁部はやや外反気味である。24は大型の鉢で、屈曲した頸部から短い口縁部がわずかに外側へのびる。25は器台で透かし孔が一部残存し、外面には沈線が見られる。26は支脚の底部で外面にはタタキが密である。27は支脚で一部欠損しているが、方形のブロック状である。



第46図 I区41号土坑出土土器実測図① (1のみ1/8、他は1/4)



第 47 图 I 区 41 号土坑出土土器实测图② (1/4)

42号土坑（図版14、第45図）

I区東端中央部で、Ic区北東隅付近に位置する土坑である。43号土坑の北側に隣接する。長軸105cm×短軸95cmのやや楕円気味で、深さ140cmである。一部は調査区外東側に及ぶ。埋土は深さ70cm程度までは地山に近似する淡黄灰褐色土主体で、黒灰褐色土、明黄褐色土がわずかに混ざりまだら状になるもので、細分できず一括して埋まったと考えられる。底面近くからはほぼ完形の土器が1点出土した。

出土土器（図版27、第48図1～7）

1は頸基部で強く屈曲してくびれ、わずかに外反気味の口縁部がやや短くのびる壺である。胴部下半に焼成後の外面からの穿孔が見られる。2は頸基部のくびれが強く、わずかに外反気味の口縁部が立ち気味にのびる壺である。3は口頸部が短く直立する短頸壺で、胴部がやや強く張り胴下部から底部まで急に径を減じる。4はやや外反気味の口頸部を有する甕である。5は高杯の短い脚部である。6・7は手づくねによるもので、6は頸部がくびれ非常に短い直口の口頸部を有する壺状の器形で、7は指頭圧痕を多く残す鉢状の器形である。

43号土坑（図版15、第49図）

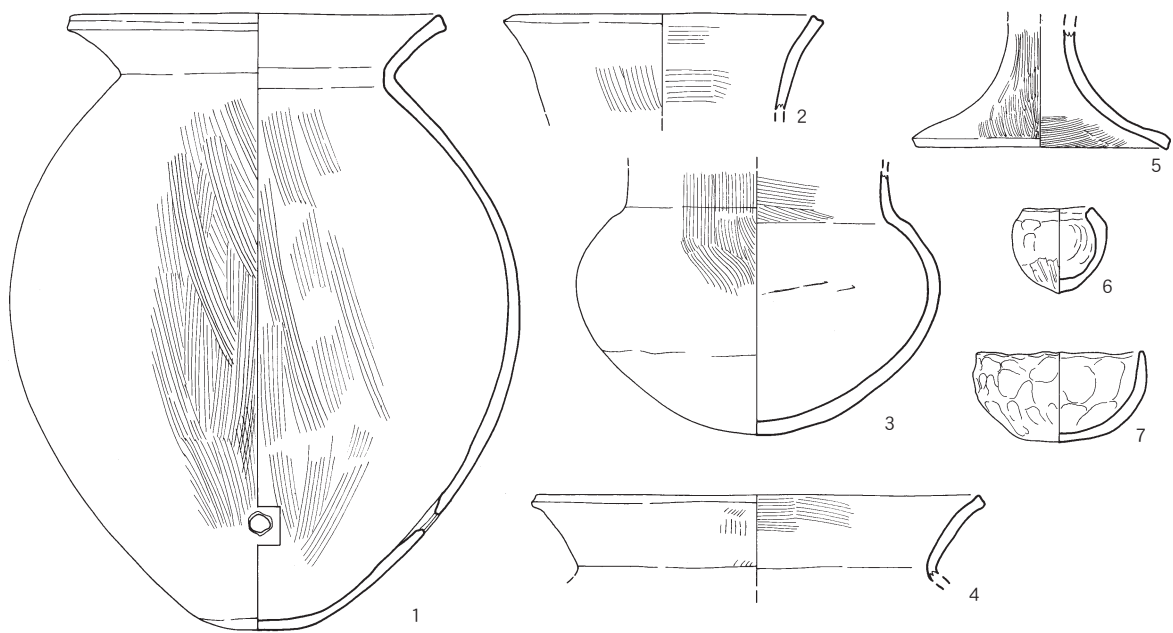
I区東端中央部で、Ic区北東隅付近に位置する土坑である。42号土坑の南側に隣接する。長軸110cm×短軸105cmで上端は正円に近く、底面はやや隅丸方形に近く掘削された。深さ169cmである。埋土については、暗灰褐色土が東側から西側へ低く傾斜して25cm程度の深さまで堆積する。より下位では70cm程度の深さまで粘性が非常に強い黒褐色土が堆積し、細分できず、また上層との境界で見られる傾斜の様相から東側から一括して埋没したと考えられる。中位から底面直上の深さにわたって完形のものをはじめ多くの土器が出土した。

出土土器（図版28、第48図8～20）

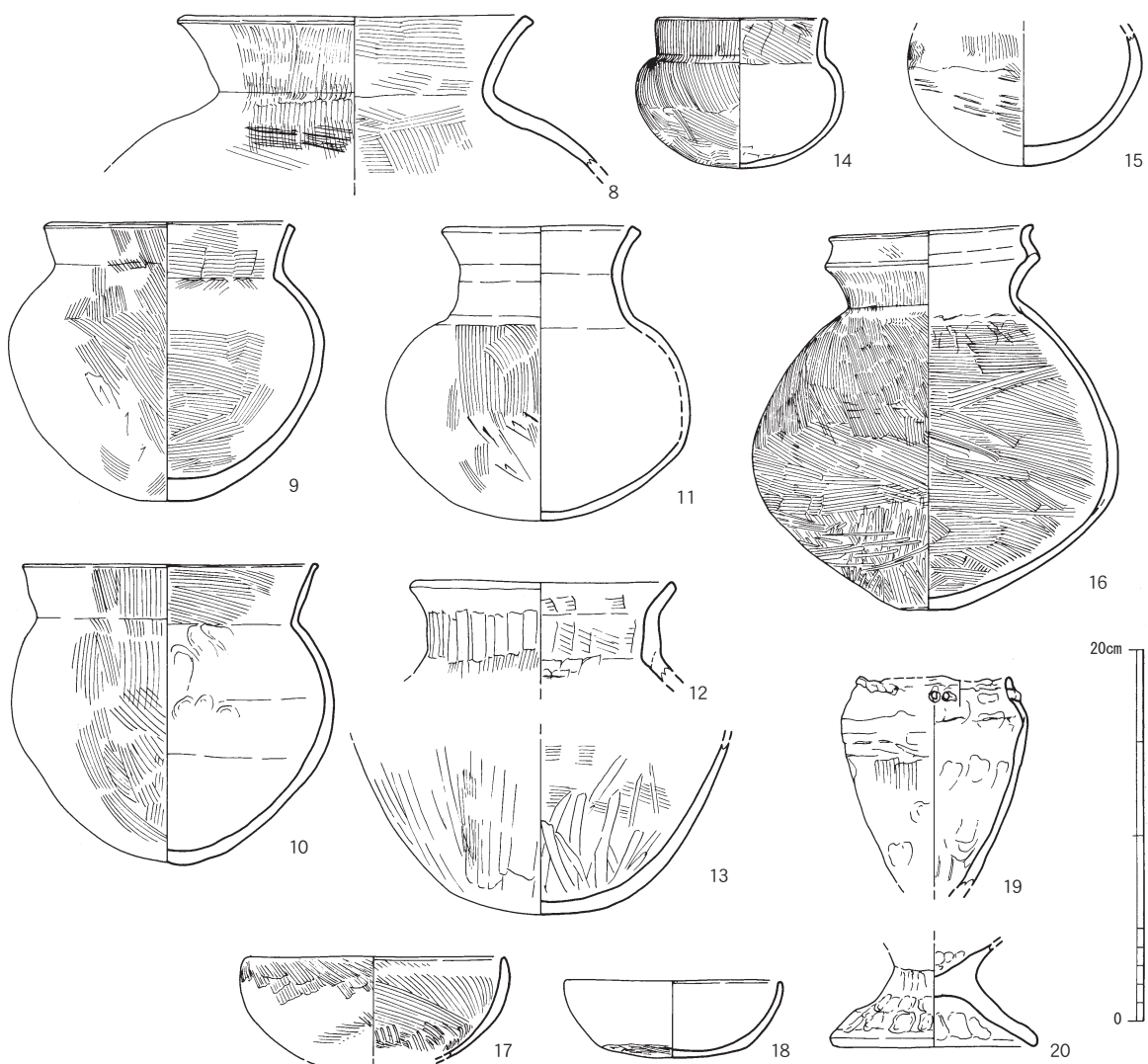
8は頸基部のくびれが強く口頸部がやや外反する広口壺である。9・10は頸部で屈曲して短い口縁部が直線的にやや外側へのびる短頸壺である。11～13は頸基部で強く屈曲して頸部で再度屈曲し口縁部がやや外側にのびる長頸壺である。12・13は同一固体で板状の工具によるナデが特徴的である。14は頸部で屈曲して短い口縁部が直線的にやや外側へのびる短頸壺で小型のものである。15は壺の胴部より下位で下半にはタタキの痕跡が見られる。16は短い口縁部に在り系複合口縁壺の特徴が見られるが、胴部の最大径が中位よりやや下半の下膨れの器形で、五様式系との折衷と考えられる。胴部外面の調整は高さにより三分割されており、上位と中位はハケの原体が異なっており、下位にはミガキが見られる。17・18は素口縁の小型の鉢で18の底部付近はケズリの後にハケが施される。19は長胴の鉢で、胴部上位で屈曲が見られ、口縁部直下で並んで二つの焼成前穿孔がある。器表の凹凸が大きく調整もやや雑で全体に簡素な作りである。20は鉢の脚部と考えられる。

44号土坑（図版15、第49図）

I区南半の東側部分にあたるIc区内に位置する土坑である。平面形は径65cm程度の正円に近い。壁の立ち上がりは非常に急で、オーバーハングする部分もある。埋土については、上層はある程度のしまりがあるが、下層は黒褐色で著しく粘性の強い泥質のものであった。人力で検出



42号土坑
43号土坑



第48图 I区42·43号土坑出土土器实测图(1/4)

面より 155cm 程度の深さまで掘削したが、平面的に狭小な状況のためにそれより下部の掘削を続けていくことは困難であった。そのため、I c 区の調査終了時にバックホーで下部を掘削し、底面を確認した。その結果、195cm 程度の深さまで及んでいることが判明した。出土遺物はない。

45 号土坑 (図版 15、第 49 図)

I 区中央部付近で、I c 区内に位置する土坑である。長軸 183cm × 短軸 168cm の不整形で、深さ 65cm である。検出段階では現状よりは小さく捉えていたが、にごりのある部分の掘削していく中で、特に南西方向へ大きく掘り広げる結果となった。埋土は上層では淡黄茶褐色であるが、浅い部分からグライ化する。壁の立ち上がりは北東側で緩やかで、南西側は急な傾斜でオーバーハングする部分も見られる。北東側の底面は深さ 45cm 程度でテラス状になっており、南西側へ更に落ち込んでいる。

出土土器 (第 50 図 1 ~ 7)

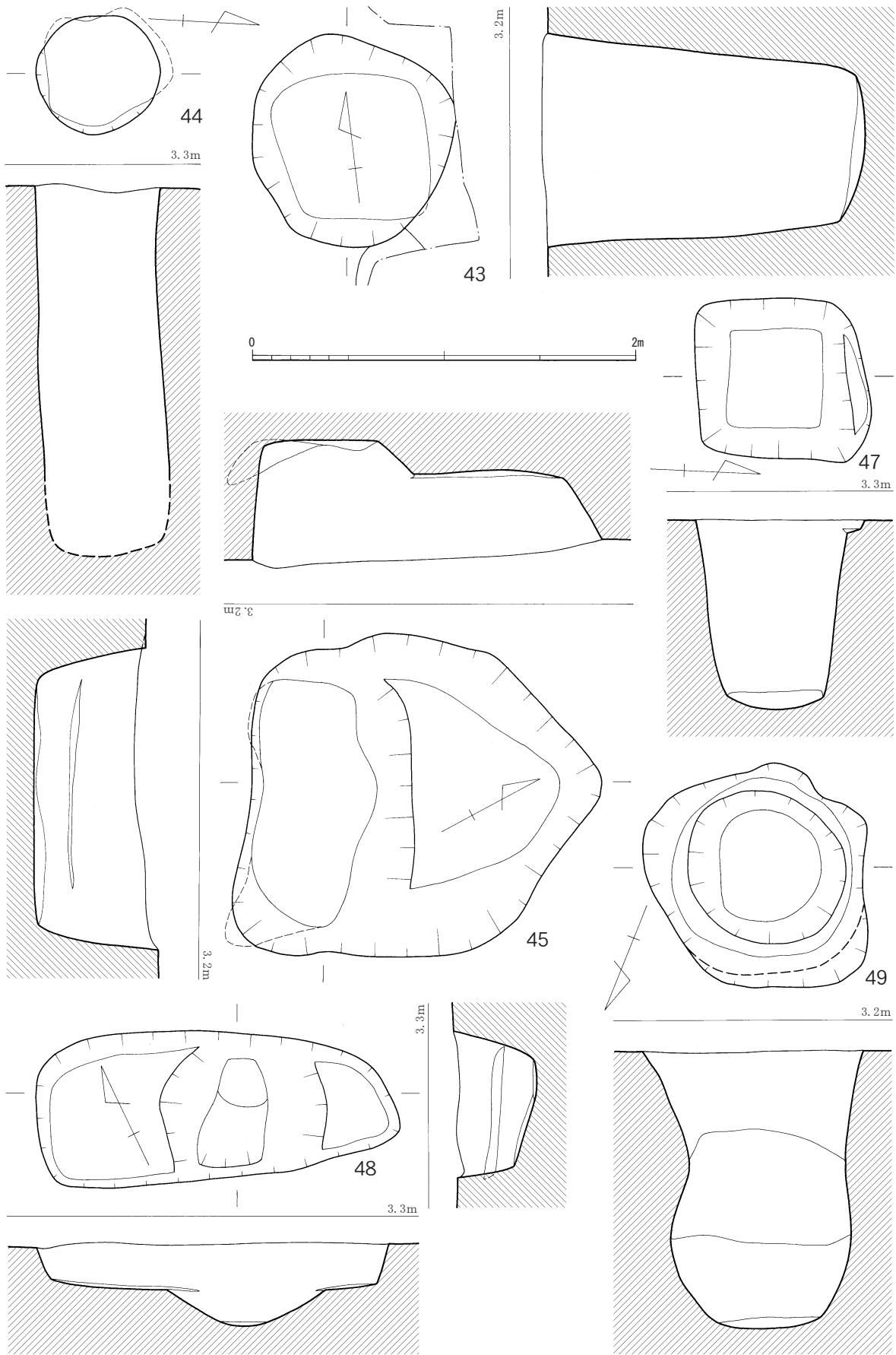
1 は頸基部で強くくびれ、わずかに外反気味に口縁部がのびる壺である。2 は胴部が強く張り、頸基部で強くくびれ、非常に短い口縁部がわずかに外反してのびる短頸壺である。肩部には小さな段差が認められる。3 はやや大型の甕の口頸部である。屈曲する頸基部には低い断面三角形の突帯が付され、口唇部にはキザミを有す。4 は大型の甕の口頸部で、屈曲する頸基部には断面三角形の突帯が付され、幅の広いキザミが施される。口唇部は広く面となり「×」字状にキザミが施される。5 は器台の口頸部で外面にはタタキが密に残存する。6 は器台で上・下半それぞれの透かし孔が残存し、その間には粗い沈線状の文様帯を有す。7 は素口縁の小型の鉢で、器表には整形の際の指頭圧痕が目立つ。

46 号土坑 (図版 16、第 51 図)

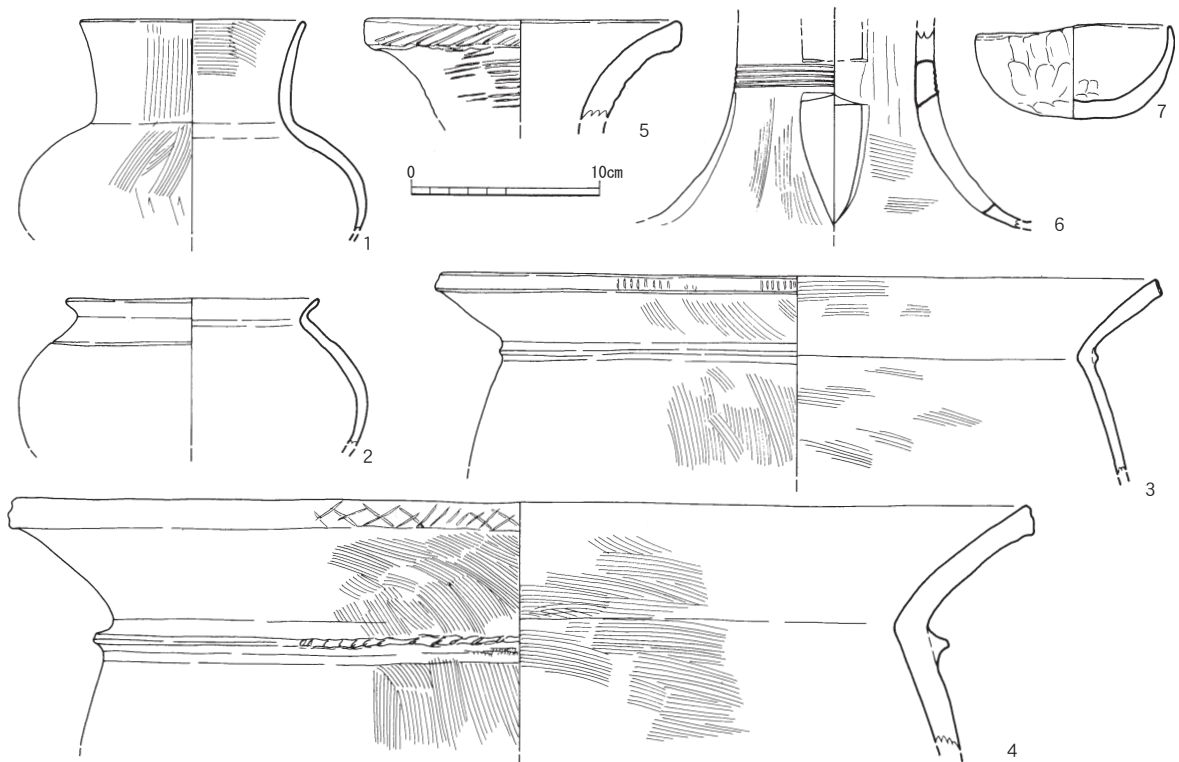
I 区東端中央部で、I c 区北東隅付近に位置する土坑である。47 号土坑の東側に隣接する。長軸 209cm × 短軸 174cm の不整形で、深さ 174cm である。埋土については、黒灰褐色、暗灰褐色、暗褐色等の暗いものが主体で、その中に地山に近似する黄灰褐色土の層が一部入り込んで堆積する。下層の方はグライ化して青灰色となり、120cm 程度よりも下位ではその影響と湧水のため分層することができなかった。また、堆積状況から掘り返しの行われたことが覗え、さらに底面の東端部で完形に近い土器が複数出土したが、これらは後に掘り返された部分の埋没に伴うものと考えられる。壁の立ち上がりは部分により大きく異なっており、オーバーハングする部分も見られる。西側では 120cm ~ 140cm 程度の深さでテラス状の部分がある。

出土土器 (図版 28・29、第 52 図 1 ~ 8)

1 は頸基部で強く屈曲し、やや外側に直線的に口縁部がのびる広口壺である。外面下半にはタタキが残存し、底部はわずかにレンズ状である。2 は頸基部で強く屈曲し、口縁がほぼ直口に近くのびる壺である。3・4 は同一固体と考えられ、在地系複合口縁壺で頸部から肩部にかけて暗文が見られる。底部はわずかにレンズ状である。5・6 は口縁部がわずかに外反する小型の短頸壺で最大径が胴部下半にあり、下膨れの器形である。7 は在地系甕で胴部の張りはあまり強くない、頸部の屈曲は弱く口縁部は外側へ直線的にのびる。外面は板状の工具によるナデが最終的に施される。8 は高杯の短い脚部である。



第 49 图 I 区 43 ~ 45 · 47 ~ 49 号土坑实测图 (1/30)



第50図 I区45号土坑出土土器実測図(1/4)

47号土坑(図版16、第49図)

I区東端中央部で、Ic区北東隅付近に位置する土坑である。46号土坑の西側に隣接する。長軸89cm×短軸83cmの隅丸方形に近く、深さ99cmである。北側で深さ7cmの浅い位置にテラス状の部分がある。埋土については、底面から10cm程度はグライ化した青灰色で、それより上層は灰褐色でしまりがよいもので、細分できないため一括して埋没したと考えられる。遺物は出土していない。

48号土坑(図版17、第49図)

I区南東部で、Ic区内に位置する土坑である。長軸188cm×短軸79cmの細長い楕円形に近い平面形である。底面は東西両側で深さ20~25cm程度で、中央部の底面が最も深く、42cmの深さである。埋土は、中央付近にのみ深さ20cm程度まで淡黒灰褐色の層が堆積し、他は地山に近いがややにごりのある淡黄灰褐色土である。遺物は出土していない。

49号土坑(図版17、第49図)

I区南半の中央部付近で、Ic区内に位置する土坑である。径115cm程度の不整形円形であるが、北側で切っている13号掘立柱建物跡の柱穴・礎盤の埋土も誤って一部同時に掘削してしまったため、実際の形状よりもやや広がってしまった。深さは144cmで、壁の立ち上がりは部分により若干異なるが、急な傾斜となる部分が多く、下位では全体的にオーバーハングして底面より45cm程度の位置で最も外側へ広がって入り込み、そこから底面へ向けて狭まって落ちる。埋土は、60cm程度の深さまで淡黄灰褐色で地山に近いがにごりの強いもので、それよりも下位ではグライ

化して青灰色となる。深さ 80cm 程度の位置で、原形を保っていないが完形土器が 1 点出土した。12・13 号掘立柱建物跡を切る。

出土土器 (図版 29、第 52 図 9)

9 は胴部のあまり張らない長胴の甕で、頸基部でゆるやかにくびれ、口縁部はやや外側に直線的にのびる。胴部上半はタタキが密に残存するが、下半では最終的な調整で粗いハケが施され、タタキは残存しない。

50 号土坑 (図版 18、第 51 図)

I 区南半の中央部付近で、I c 区内に位置する土坑である。51 号土坑の西側、53 号土坑の南側に隣接する。長軸 140cm × 短軸 137cm の不整円形で、深さ 170cm である。上位の広い範囲でテラス状になっており、またテラスより下位の壁の立ち上がりはさほど急でなく緩やかに底面へ落ち込む。そのため、上面の広さに比して底面は狭い。一部で壁はオーバーハングする。埋土については、上層は淡灰褐色土主体で、その上下に地山に近似する暗黄灰褐色土が見られる。深さ 70cm 程度より下位はグライ化して青灰色となる。中位から底面近くにかけてほぼ完形の土器が数点出土した。

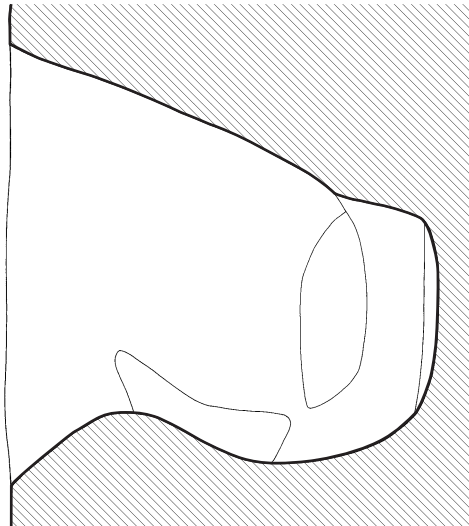
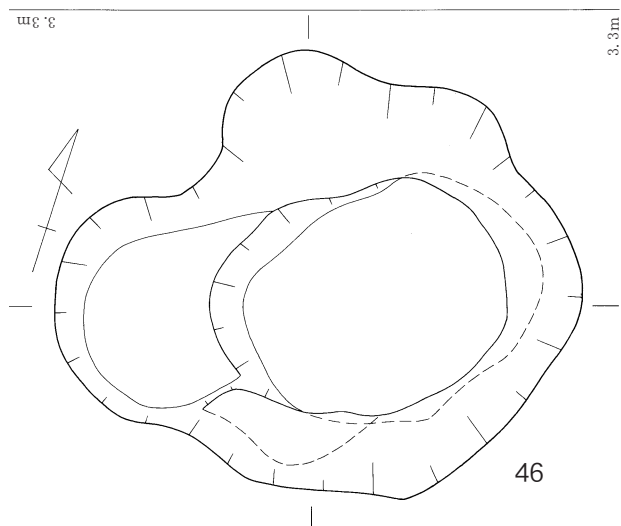
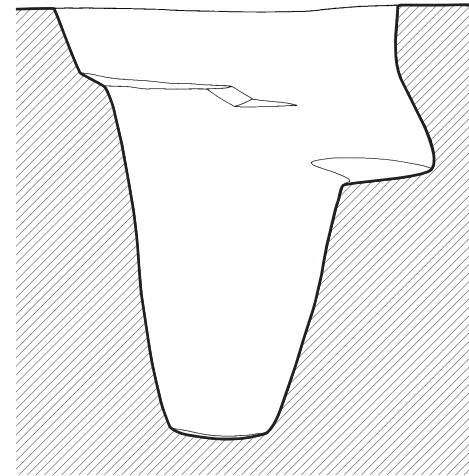
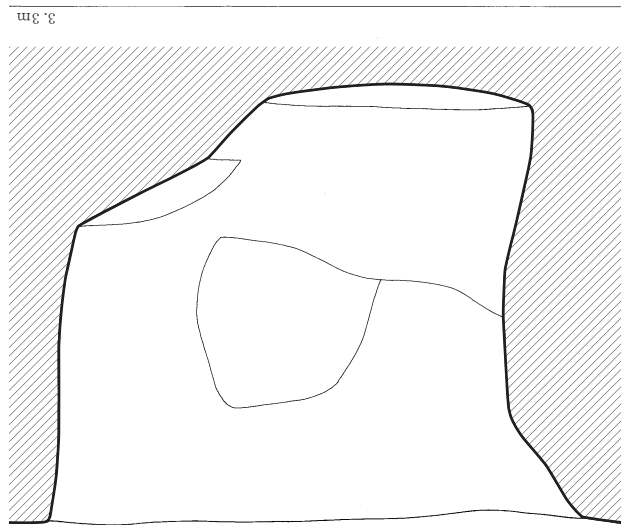
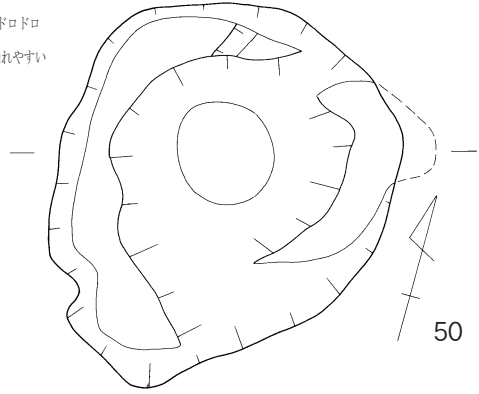
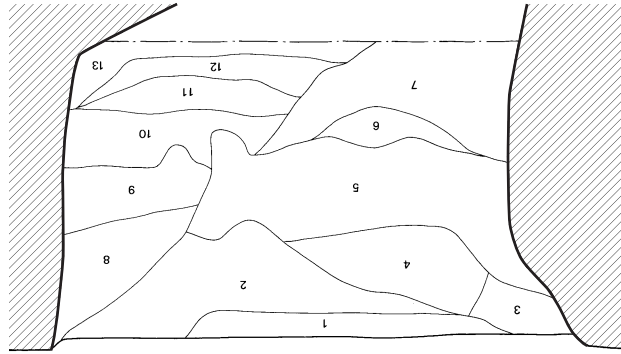
出土土器 (図版 29、第 53 図 1～13)

1 は頸基部で強くくびれ、短い口縁部がやや外側にほぼ直線的に開く壺である。胴部下位一箇所に焼成前の小さな穿孔が施される。2・3 は頸基部で非常に強くくびれ、口縁部が外反しながらのびる壺である。2・3 ともに胴部中・下位では、上位で見られるハケ調整の後にケズリを施し、再度ハケを施す。2 は胴部中位に焼成後に外面から施した穿孔を有す。4 は壺の胴部で上位にはタタキを密に施し、下半ではその後にケズリ・ハケの順で調整を施す。5 は在地系複合口縁壺であるが、器形は外来系の二重口縁壺の影響を受けていると考えられる。胴部上半から肩部・頸部にかけて浅い沈線状の文様が密に見られる。胴部は内外面ともにハケが施されるが、外面の底部付近はその後にケズリが見られる。胴部中位には焼成後に外面から施された穿孔を有す。7・8 は在地系の長胴の甕である。7 は胴部外面の調整はタタキで下半はその後に板状工具によるナデを施す。8 は内外面ともにハケ調整が見られ、外面下半にはその後に板状工具によるナデが施される。9 は東北部九州で見られる高杯の杯部である。口縁直下で立ち上がる素口縁で、内面にはミガキが見られる。10・11 は高杯の脚部で、10 は畿内五様式系で、11 は畿内系の低脚のものと考えられる。12 は頸部で屈曲した口縁が外側へ直線的にのびる尖底気味の鉢である。13 は素口縁の小型の鉢である。なお、10・11・13 は混入品とみられる。

51 号土坑 (図版 19、第 54 図)

I 区南半の中央部付近で、I c 区内に位置する土坑である。50 号土坑の東側、53 号土坑の南側に隣接する。径 110cm 程度の正円に近く、深さ 213cm である。壁の立ち上がりは急で、オーバーハングする部分もある。埋土は上層から順に、厚さ 10cm 程度まで黒灰褐色土層、厚さ 40cm 程度の地山である淡黄灰褐色土の混ざる黒灰褐色土層、厚さ 30cm 程度のグライ化した青灰色土層で、その下層は黒灰褐色土層となる。深さ 110cm 以下は、狭小な上に深くなるため半裁することを断念した。中位から底面近くにかけてほぼ完形の土器が複数出土した。

- 1 黒灰褐色土 しまりよい 2 黒灰褐色土 1よりやや明るい 3 黄灰褐色土 地山に近いがにごり大きい
 4 暗灰褐色土 にごり大きくだら 5 暗灰褐色土 4より明るい 6 淡青灰色土 にごり少なくしまり非常にあくドロドロ
 7 青灰色土 にごり大きくしまり悪くボロボロと崩れる 8 暗灰褐色土 5より明るい 9 淡黄灰褐色土 地山に近い
 10 黒褐色土 しまり悪く崩れやすい 11 暗茶褐色土 しまり悪く崩れやすい 12 青灰色土 にごり大 しまり悪く崩れやすい
 13 青灰色土 純粋でにごり少ない 上部の12との境に細かい木質の集中する薄い層あり

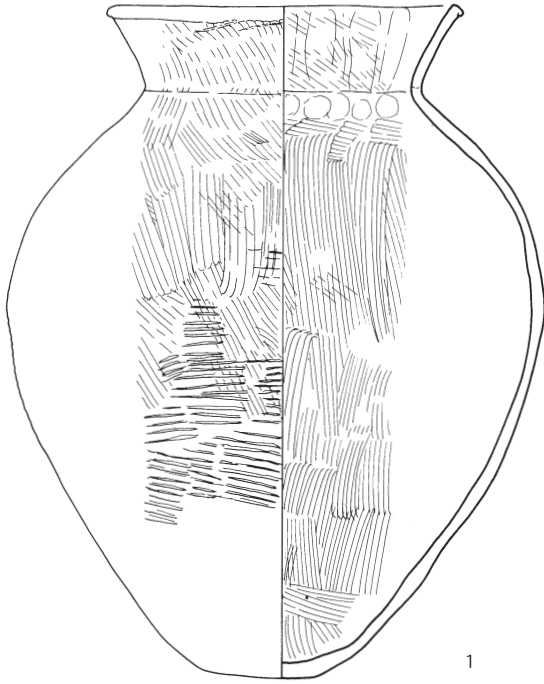


第51図 I区46・50号土坑実測図(1/30)

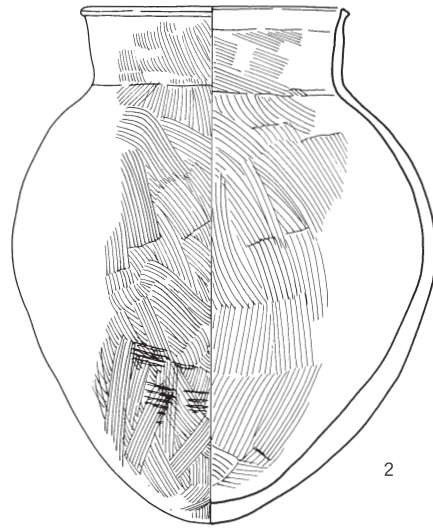
出土土器(図版30、第55図1~14)

1~3は在地系甕の底部から胴部にかけての部位である。1は上半外面にタタキが密に見られ、下半はハケが施される。2・3は密にハケが施される。4~7は長胴の甕で6・7は同一固体であ

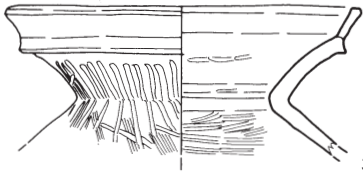
46号土坑



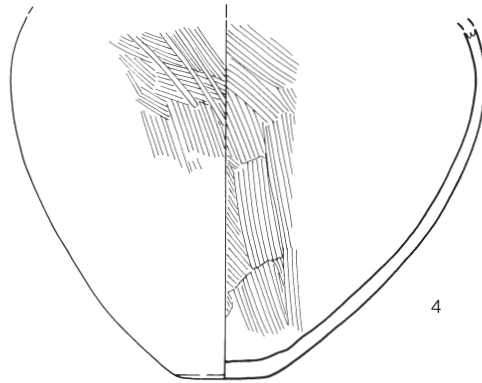
1



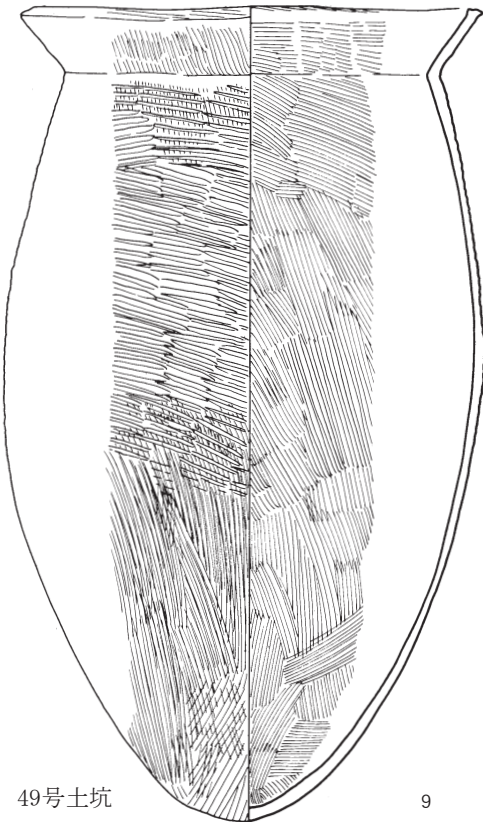
2



3

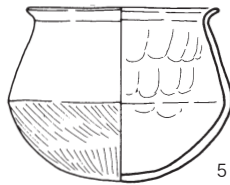


4

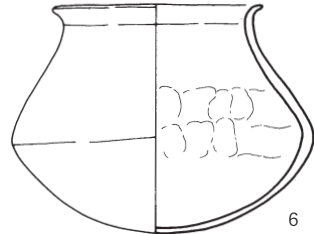


49号土坑

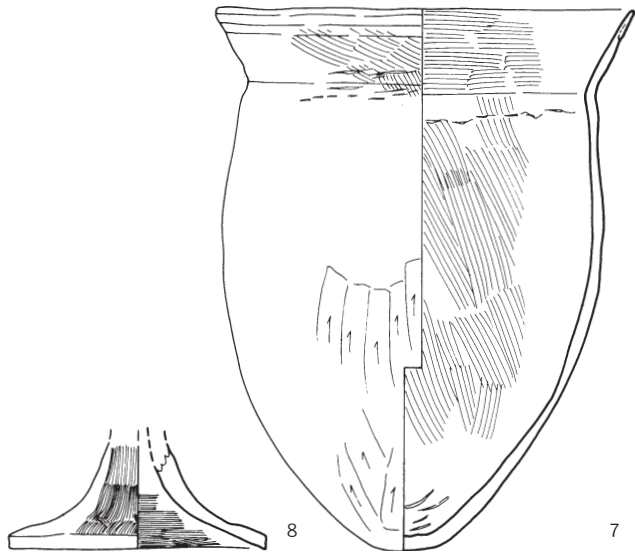
9



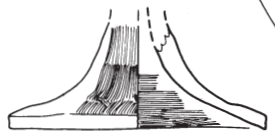
5



6

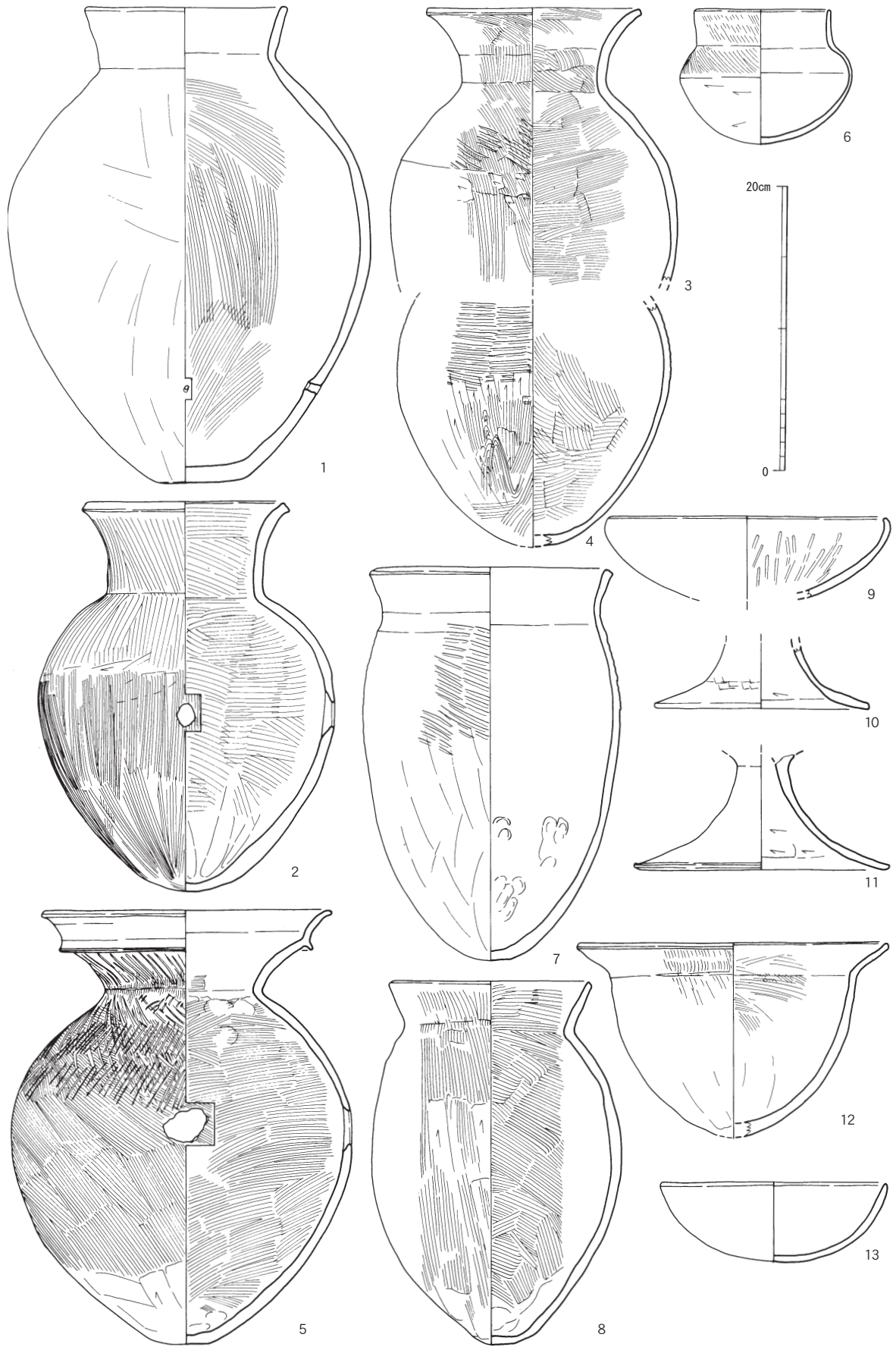


7

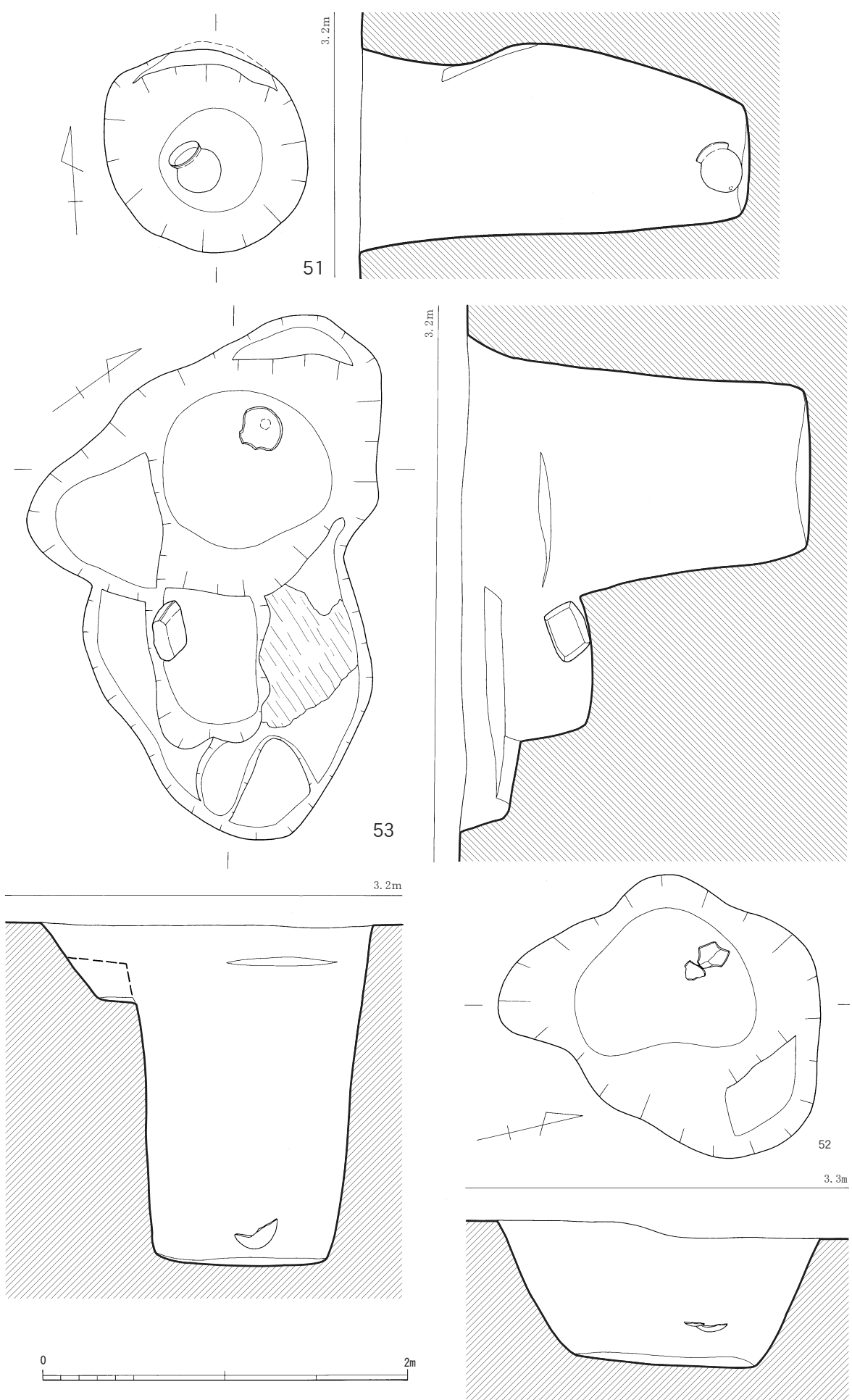


8

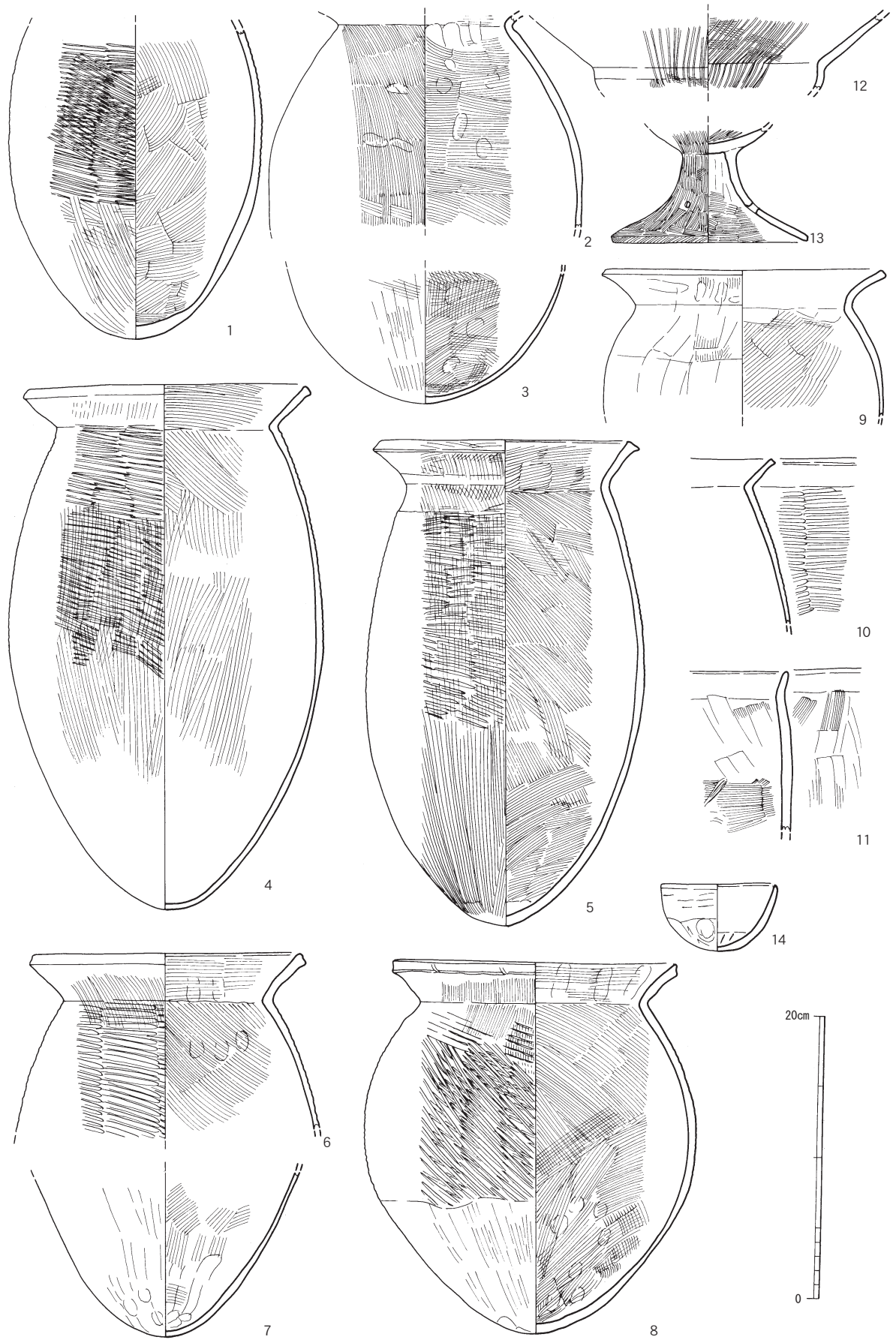
第52图 I区46·49号土坑出土土器实测图(1/4)



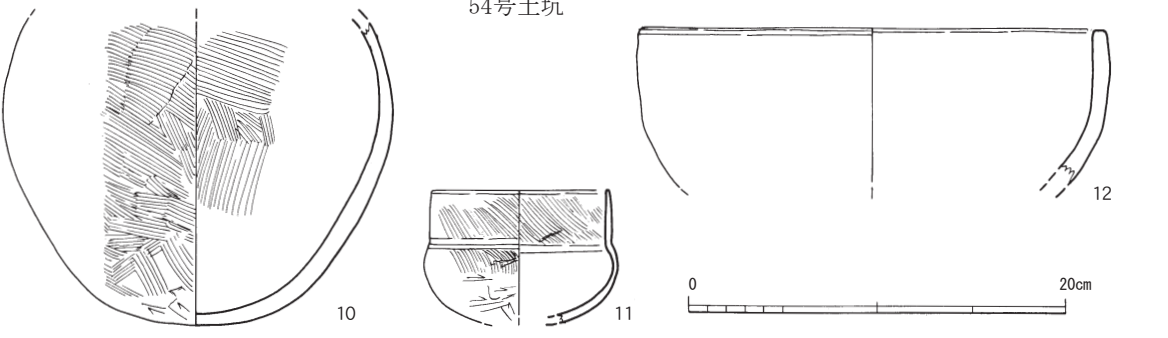
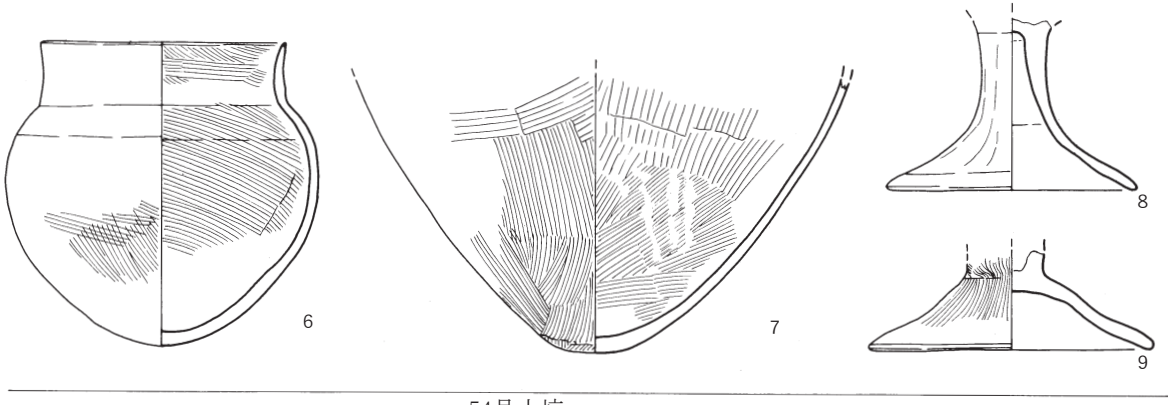
第 53 图 I 区 50 号土坑出土土器实测图 (1/4)



第54图 I区51~53号土坑实测图(1/30)

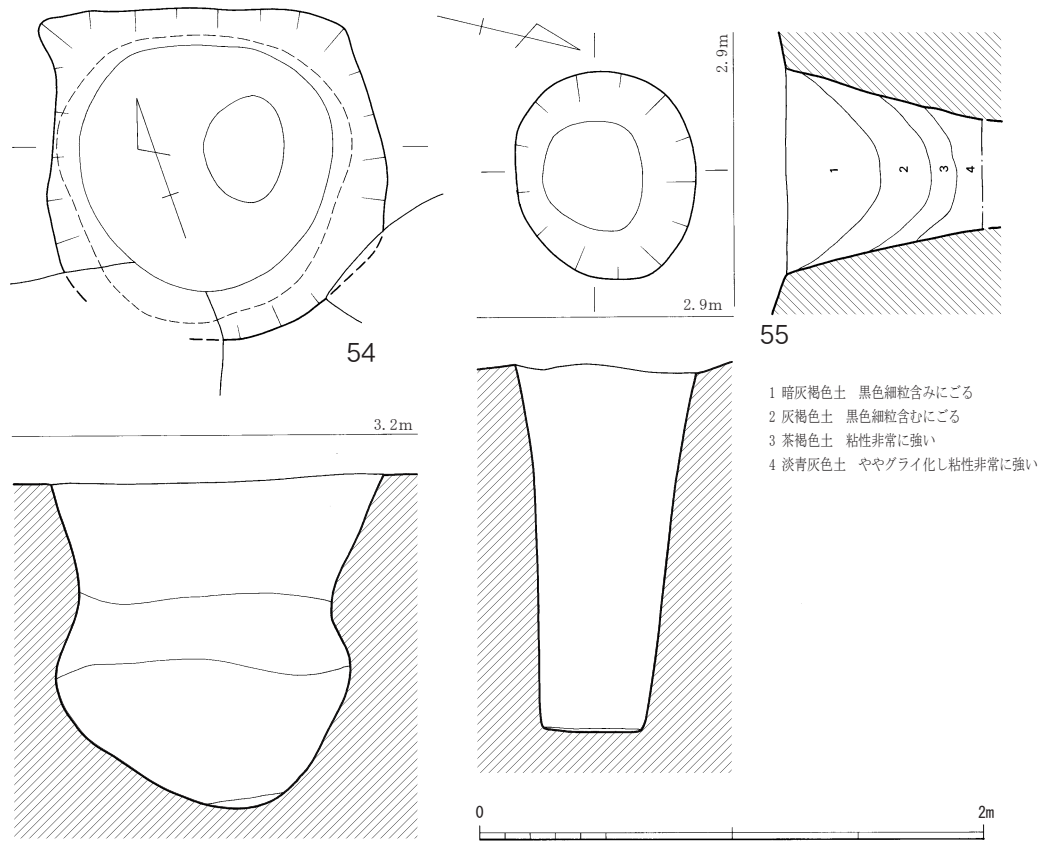


第55图 I区51号土坑出土土器实测图(1/4)



第56図 I区52～54号土坑出土土器実測図(1/4)

る。いずれも胴部上半は密にタタキが残存し、その後に全体的にハケを施す。内面は全体的にハケ調整である。8は五様式系甕で胴部上半は密にタタキが残存し、下半はその後の強いナデを施しており、タタキは消えている。内面はハケ調整である。9は五様式系甕で外面の調整は板状の工具によるナデで、肩部より下位はその前にケズリが施される。10・11は在地系甕の口縁部から胴部にかけてで、10の外面は密なタタキが見られ、11の外面はハケの後に板状工具によるナデで、



第 57 図 I 区 54・55 号土坑実測図 (1/30)

頸基部の屈曲はわずかである。12・13 は同一固体で杯部下半は内湾しながら立ち上がり、頸部で屈曲して外側に口縁部が直線的にのびる高杯である。脚部上半からミガキが施され、杯部は内外面ともに暗文が見られる。14 は素口縁の小型の鉢である。

52 号土坑 (図版 20、第 54 図)

I 区南端の中央部付近で、I c 区内に位置する土坑である。長軸 175cm × 短軸 153cm の不整形で、深さ 76cm である。調査前に建っていた納骨堂の基礎に関連し、周辺に大きな丸太杭が打ち込まれ、地山もグライ化した部分があったため、検出・掘削には困難な点があった。東側にテラス状の部分が見られるが、これは壁の掘り過ぎによりできたものである。埋土はレンズ状に堆積し、上層から焼土ブロックを多く含む橙黄褐色土層、炭・焼土を多く含んだ黒灰褐色土層の順である。以下では中位まで地山に近似する淡黄灰褐色土層で、その下位はグライ化して青灰色となる。中位の深さから土器片が出土した。

出土土器 (図版 30、第 56 図 1～5)

1 は長胴の壺で、頸基部で強くくびれ口縁部はやや外側に直線的にのびる。外面はタタキが密に残存し、その上にハケを施す。2・3 は太い頸基部で屈曲して短い口縁部がわずかに外反してのびる壺で、胴部が強く張る。4 は中部九州系の鉢で、しまる頸基部から外側に口縁部が直線的にのびる。最大径は胴部下半の下膨れの器形で、それより下位では強いナデ調整であるがタタキがわずかに残存する。5 は畿内系の素口縁の高杯杯部で、内外面ともに暗文が施される。

53号土坑（図版20、第54図）

I区南半の中央部付近で、Ic区内に位置する土坑である。50・51号土坑の北側に隣接し、54号土坑を南側に接して切る。長軸287cm×短軸191cmの不整形で、深さ191cmである。検出面では広い範囲で捉えたが、東半は西半ほど深くならず、複雑にテラス状の部分が複合し、底面は高低差があり特に不整な形状となっている。また、樹皮が見られることもあり、礎盤を伴う柱穴等の複数の遺構が切り合う可能性もあり、その場合どこまでが東半部分に伴うものかは判然としない。なお、この西半部で東半に隣接し最も深い位置から木製品の盤が出土した。東半部は西および南側にテラス状の部分が見られるが、南側のものはある程度掘り過ぎてしていると見られる。底面からやや上位で欠損した土器が出土した。

出土土器（図版30、第56図6～9）

6は頸基部があまりしまらず、太い頸基部から短い口縁部が直立する壺である。7は壺の底部である。8は高杯の脚部である。9は脚を有する鉢の一部である。

54号土坑（図版21、第57図）

I区南半の中央部付近で、Ic区内に位置する土坑である。53号土坑を北側に接して切り、帰属する建物は不明である柱穴・礎盤に切られる。長軸134cm×短軸130cmの不整形に近く、深さ129cmである。壁の立ち上がりは、上位はさほど急ではないが、中位で全体的にオーバーハングし、底面から50～60cm程度の位置で最も外側へ広がり、そこから底面へと緩やかに落ちて底面は非常に狭くなる。埋土はレンズ状の堆積で、上層から順に深さ20cm程度まで淡灰褐色土層、深さ60cm程度のオーバーハングする手前まで淡黄灰褐色土層が見られ、それ以下ではグライ化して青灰色となる。

出土土器（第56図10～12）

10は壺の胴～底部で内外面ともにハケ調整が施され、底部外面付近に一部ケズリが見られる。11は胴部が扁球形でしまりの弱い頸基部から口縁部が直立してのびる小型の壺である。12は素口縁の大型の鉢である。

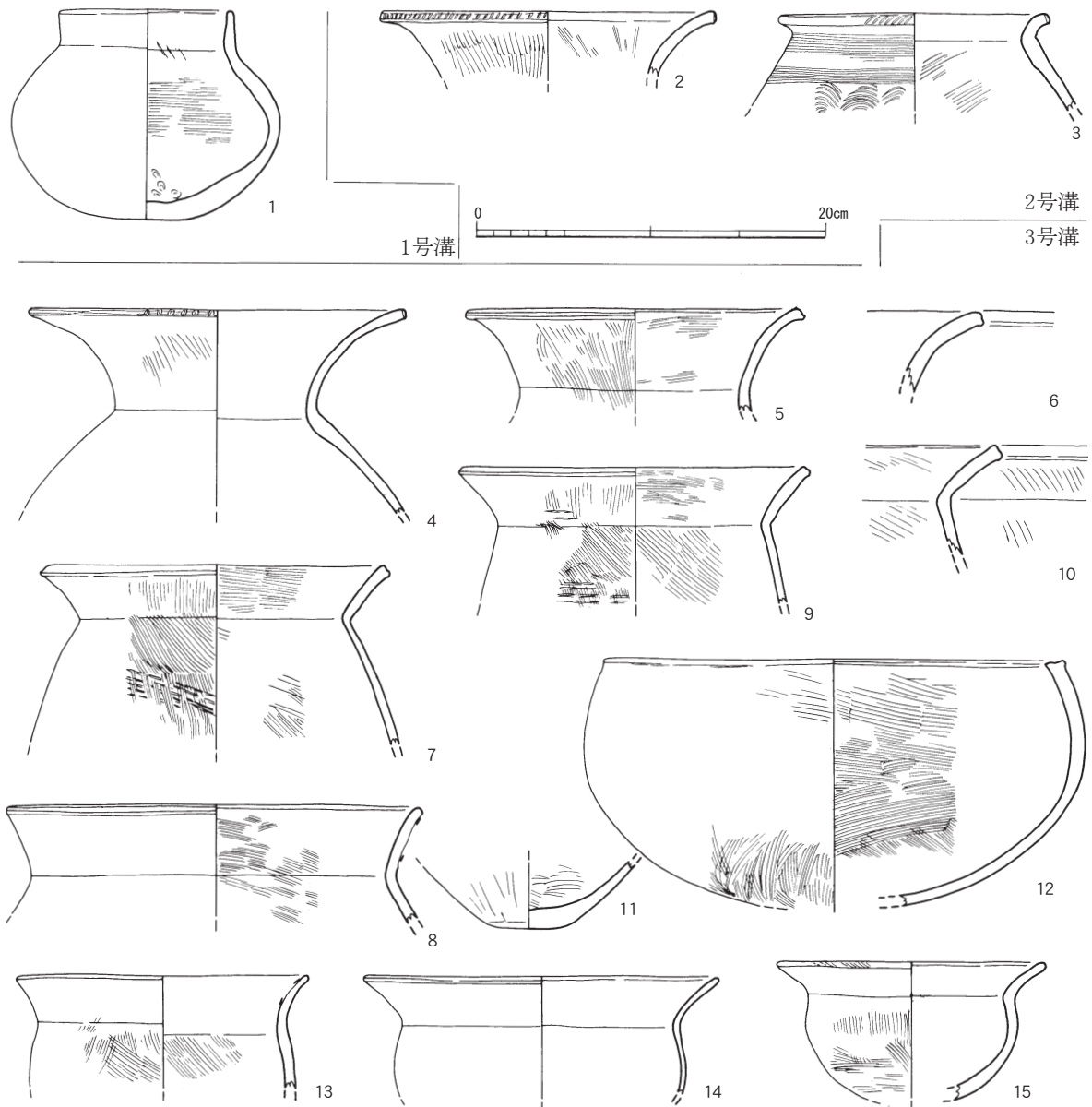
55号土坑（図版21、第57図）

I区西側で、Ic区内のIb区との境界付近に位置する。長軸82cm×短軸71cmの楕円形で、深さ145cmである。壁の立ち上がりは急である。埋土はレンズ状に堆積しており、暗灰褐色等の暗い埋土主体で、黒色細粒が含まれる点は他の土坑には見られない特徴である。深さ67cmから下位はグライ化して淡青灰色である。遺物は出土していない。

（4）溝

1号溝（図版22、第60図）

I区北東隅でIa区内に位置する北東－南西のやや曲がった溝である。北東側は調査区外に延びており、現状で長さ10.3m以上、幅40～75cm程度、深さは15cm前後で部分的にテラス状に浅くなる部分もある。検出した範囲内では床面のはっきりとした高低差の傾向は認められない。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は上層が黄灰褐色土で、下層は淡灰白褐色土である。



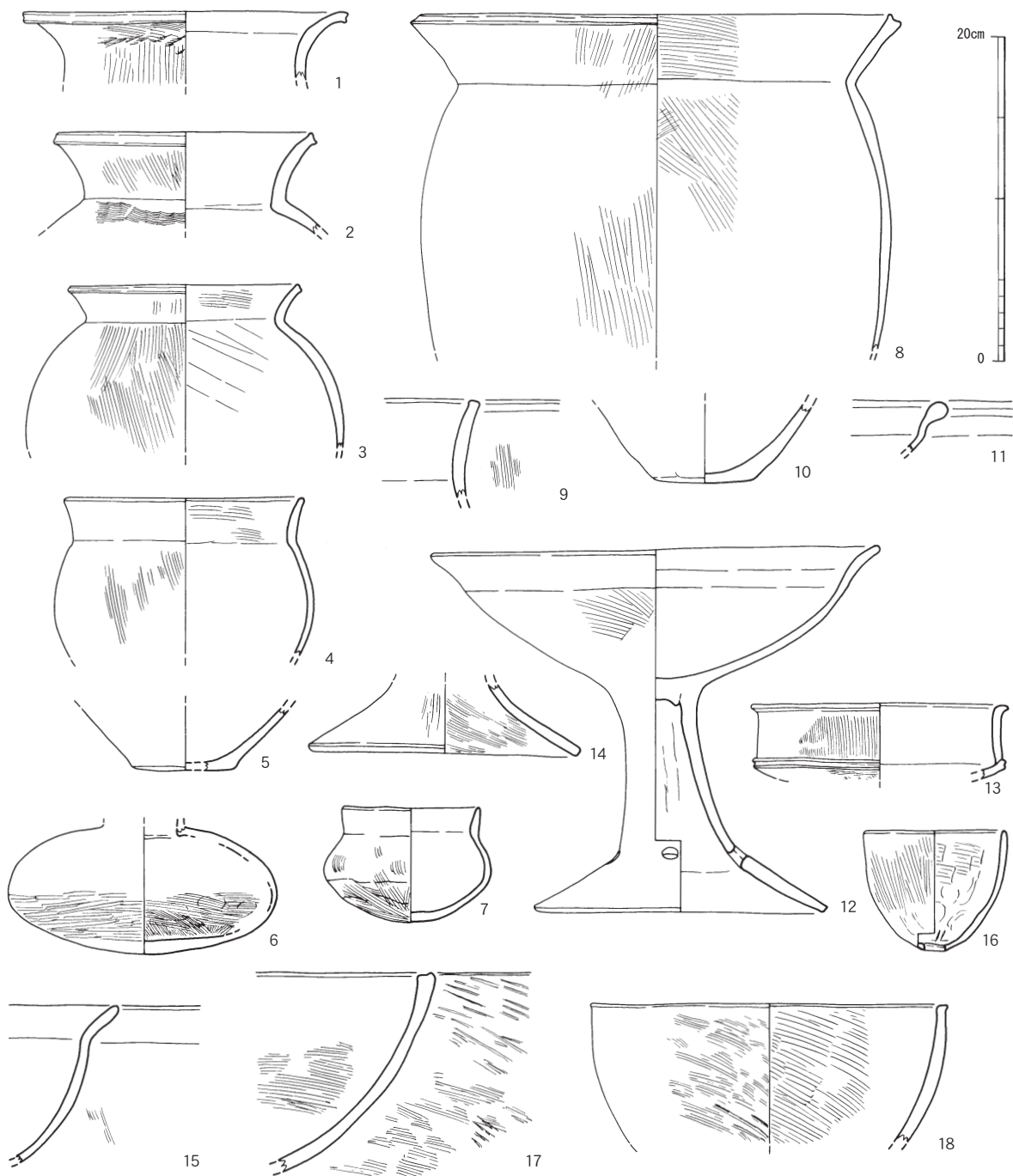
第58図 I区1～3号溝出土土器実測図(1/4)

出土土器 (図版31、第58図1)

1は胴部が扁球形に近く、頸部が緩やかに屈曲して短い口縁部が上方に立ち上がる壺である。

2号溝 (図版22、第60図)

I区北東部でI b区内に位置する東西方向の溝である。東側は調査区外に延びており、現状で長さ5.2m以上、幅40～85cm程度、深さは5～7cm程度で床面は西側がやや低くなる。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰褐色～黄灰褐色である。3号溝と北側で接すると見られるが、その付近を切るピットがあるため、両溝の先後関係を直接平面的には確認しにくい。ただ、西側のトレンチ・ベルトで確認した土層で両溝の埋土の切り合う様相が全く認められないため、平面的な形状から2号溝が切っているか、同時並存のいずれかと判断される。



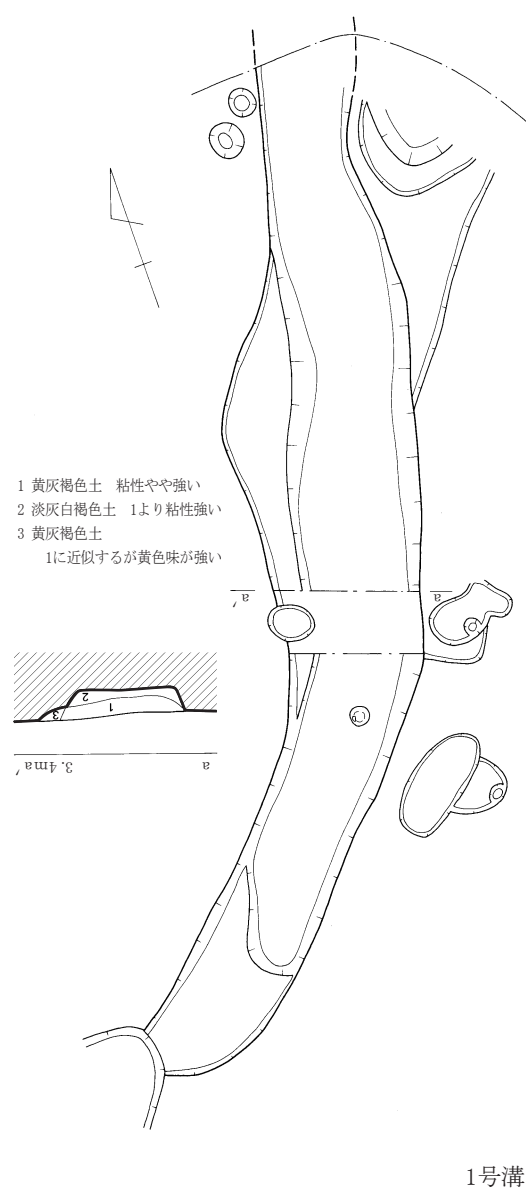
第59図 I区4号溝出土土器実測図(1/4)

出土土器(第58図2・3)

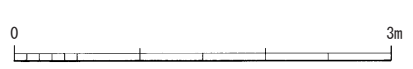
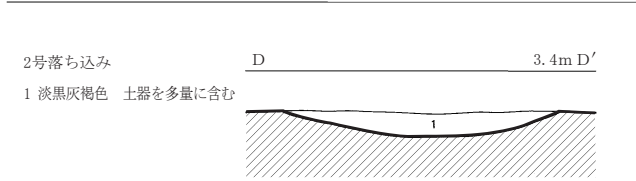
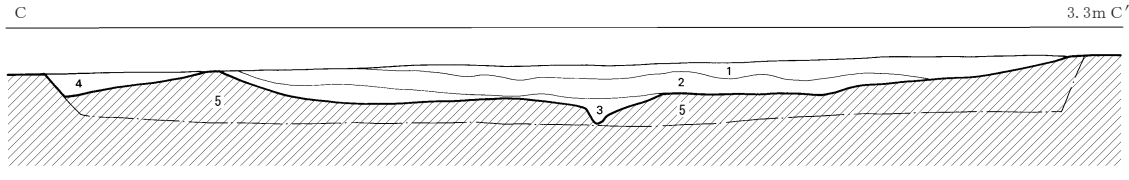
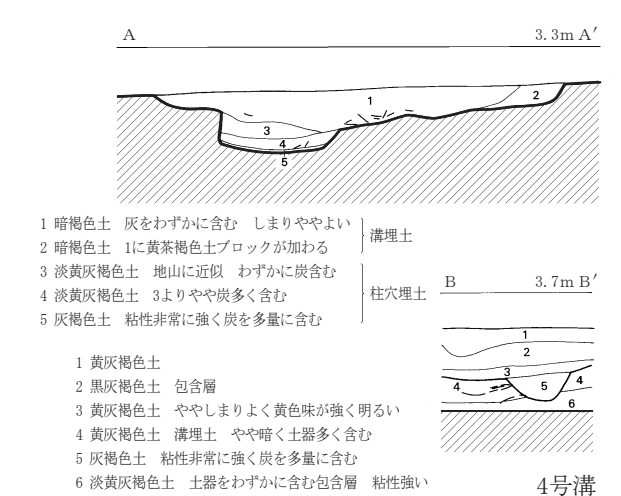
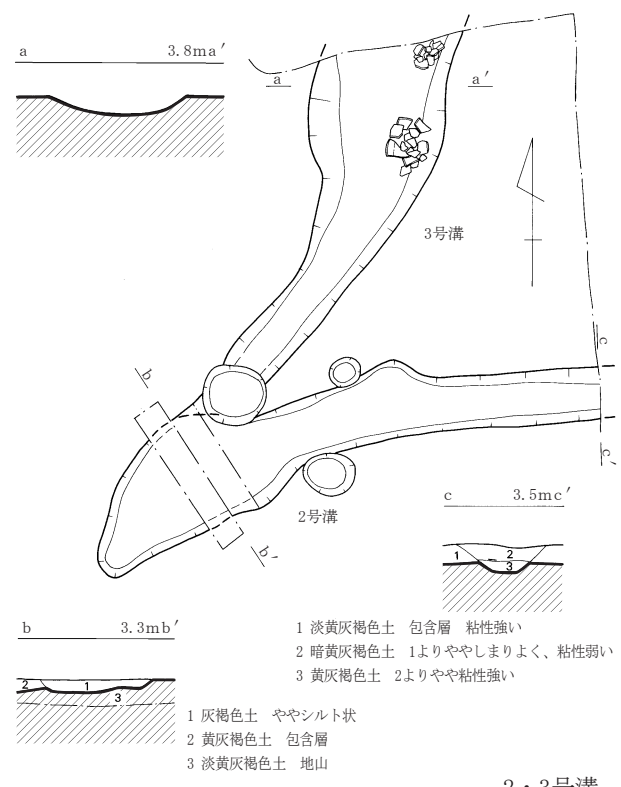
2は広口壺の外反して開く口縁部で、口唇部にキザミを付す。3は肩部がほとんど張らないなで肩の器形で、非常に短い口縁部が外反してわずかに開く中部九州系の短頸壺である。胴部に櫛描文状の重弧文が施され、口唇部にキザミを付す。

3号溝(図版22、第60図)

I区北東部でI b区内に位置する北東-南西のやや曲がった溝である。北側は攪乱により途切



- 1号落ち込み
- 1 暗褐色土 粘性強くしまりあまい
 - 2 淡黄灰褐色土 1よりやや粘性弱くややしまりあまい
 - 3 灰褐色土 2より粘性強くしまりあまい
 - 4 淡黄灰褐色土 東側へ続く包含層
 - 5 淡黄灰褐色土 地山



第 60 図 I 区 1 ~ 4 号溝、1・2 号落ち込み土層実測図 (1/60)

れており、長さ3.4 m以上、幅40～110cm程度、深さは15cm程度で、検出した範囲内では床面のはっきりとした高低差の傾向は認められない。壁の立ち上がりは緩やかである。2号溝と南側で接すると見られるが、その付近を切るピットがあるため、両溝の先後関係を直接平面的には確認しにくい。ただ、南側のトレンチ・ベルトで確認した土層で両溝の埋土の切り合う様相が全く認められないため、平面的な形状から2号溝が切っているか、同時並存のいずれかと判断される。破碎して小片となった土器がまとまって出土する部分が見られる。

出土土器（第58図4～15）

4・5はなで肩で頸基部が強くとびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。4は口唇部にキザミを付す。6は外反する壺の口縁部。7～10は在地系甕の口縁部から胴部にかけての部位。11は甕の底部である。12は口縁部がやや内湾する大型の鉢である。13～15は胴部がやや張り、口縁部が屈曲して外反しながら開く鉢である。13は他に比して口縁部の屈曲が緩やかである。

4号溝（図版22、第6・60図）

I区北西隅付近に位置する溝である。I b区内の西側包含層中を南北に細長く広がっており、北側は調査区外に延び、南端部はトレンチの掘削では残存していないが、I b区内で途切れる。非常に不整な形状で幅の差が大きく、トレンチで観察される断面では壁の立ち上がりは緩やかで、建物の柱穴の掘形を切るのが確認できる。埋土は暗褐色土から黄灰褐色土で、周囲の包含層に近似する部分も多く、明瞭な検出ができたわけではなく、包含層中のやや相違する堆積土の一部を抽出した可能性もある。33号土坑に切られる。

出土土器（図版31、第59図1～18）

1は口縁部が外反して開く広口壺の口縁部。2は口縁部が外反気味に開く壺で、肩部にはハケに似たやや波状の文様が廻る。3は胴部がやや張り、頸基部があまりとびれず太く、短い口縁部が外側へ開く短頸壺である。4は頸部がほとんどとびれず、口縁部がわずかに外側の上方にのびる短頸壺である。5は壺の底部でわずかにレンズ状である。6は長頸壺の扁球形の胴部である。外面下半には密にミガキを施す。7はやや扁球形の胴部から短い口縁部がほぼ直上にのびる小型の短頸壺である。8は在地系の甕で口縁部から胴部である。9は在地系甕の口頸部で、頸部の屈曲はわずかである。10は甕の底部である。11は口縁部が上方にやや屈曲して、端部が外側に肥厚する高杯である。12は高杯で、杯部の下部は内湾して立ち上がり、外反する上部は短い。脚部の穿孔は4箇所を施す。13は高杯の杯部で、上半は直立気味で、接合部付近の下半端部に凹線を施す。14は高杯の脚部。15は口縁部が屈曲して外側にのびる鉢である。16～18は素口縁の鉢。16は小型でやや縦長の器形で、底部には焼成後の穿孔を施す。17・18は大型で、外面にタタキが残存する。

(5) 落ち込み

1号落ち込み（図版23、第6・60図）

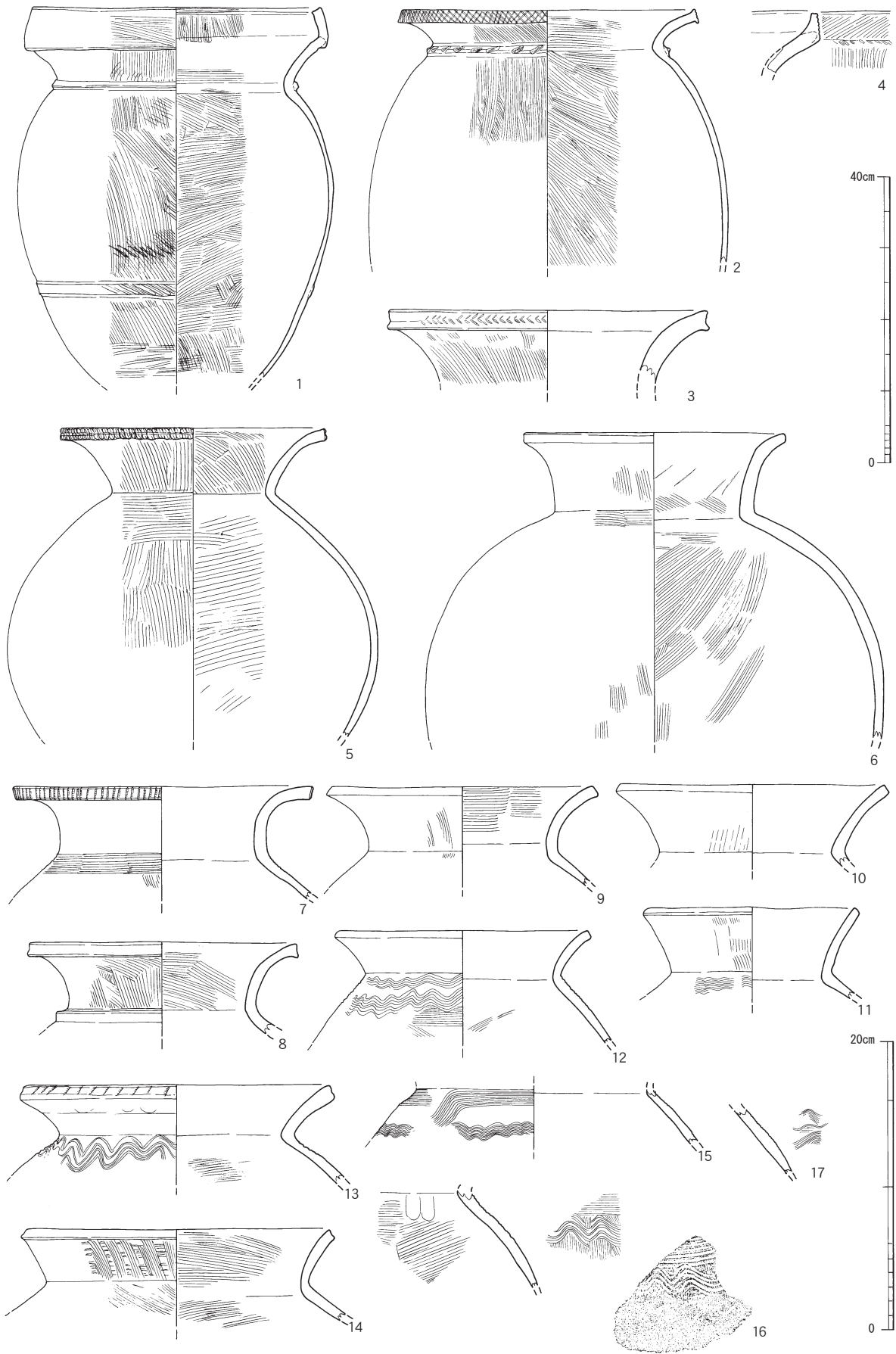
I区北東部に位置し、I a・b区にまたがる落ち込みである。I a区内では狭小な範囲で最初に調査を行ったこともあり、最上層の認識しやすい埋土を竪穴住居跡の切り合いと誤って判断してしまい、また他の地山に近似する層をうまく認識できなかった。そのため、地山との境界を平面的にも底面でも誤って掘削をしている部分が多々あり、正確に形状を把握できていない。その

ため、I b 区内での調査の際には最初にトレンチを設けて埋土の確認を行った。その結果、最上層は暗褐色土で、その下位に地山に近似する淡黄灰褐色土が見られ、最下層には灰褐色土の堆積が見られた。また I b 区北端東側では遺構のラインが不明瞭であったため、トレンチを掘削してその確認を行った。壁の立ち上がりは全体的に緩やかであるが一様ではなく、底面は平坦ではなく段階的に深くなる部分や微かに落ち込む部分があるなど起伏が見られる。幅は広い部分で 6.7 m 程度ある。I b 区内では不整形の平面的な様相が検出された一方で、検出のままならなかった I a 区内では、I b 区からの延長線を参考に側溝からの土器の出土状況や明瞭な埋土の広がりからある程度の範囲は想定できる。軸は I b 区内ではほぼ南北に沿っているが、I a 区内では北西—南東の軸に転換していると見られ、北側は調査区外に延びている。13・14・35 号土坑に切られ、41 号土坑と切り合うが先後関係は確認できなかった。

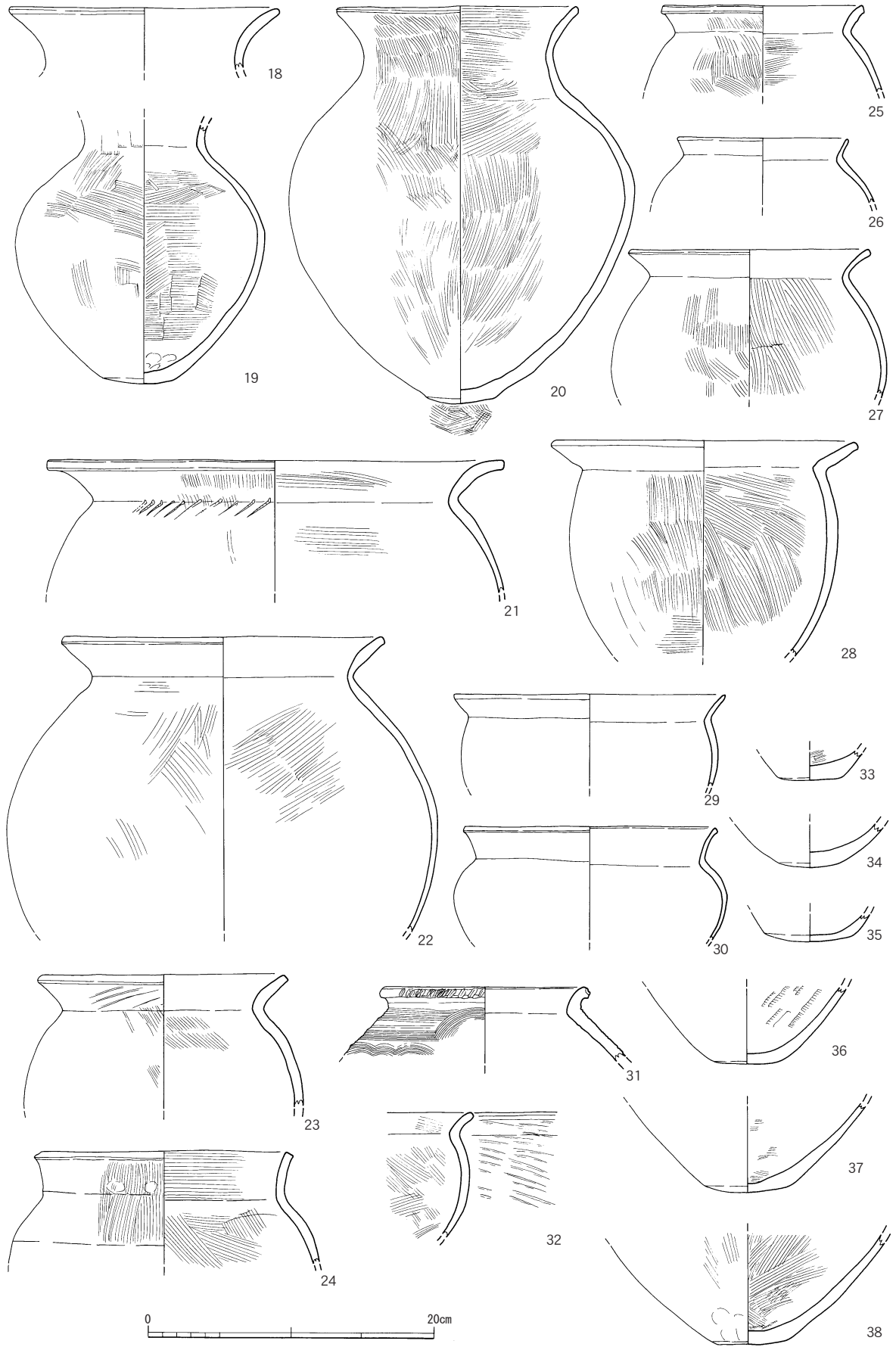
出土土器 (図版 31・32、第 61～68 図 1～163)

1～48 は壺である。1 は大型の在地系複合口縁壺である。頸基部と胴部下部に突帯が廻り、下方の突帯は低くキザミが施される。2・3 は口縁部が外反して開く大型の広口壺である。2 は口唇部に格子状にキザミを付し、頸基部に廻らせた突帯にもキザミを付す。3 の器壁は厚く、口唇部に綾杉文状にキザミを付す。4 は大型の広口壺の口縁部で、端部は上部に突出させて広い面を成し、密なキザミを施す。5～11 は頸基部が強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。5 は口唇部にキザミを付す。7 は口唇部にキザミを付し、肩部にハケ状の平行文が見られる。8 は頸基部に突帯を廻らせる。10・11 の口縁部の外反は他のものほど強くない。12～14 はなで肩でやや短い口縁部が強く屈曲して外側に開く壺で、15～17 も同様の器種と考えられる。12・13・15～17 はいずれも櫛描状の波状文や平行文を肩部に施す。13 は口唇部にキザミを付す。18～20 は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部が外反して開く畿内系広口壺である。19・20 はともにレンズ状の底部で、20 は突出気味である。21～27 は丸みを帯びた球形に近い胴部から頸部で屈曲して短い口縁部が外側へ開く短頸壺である。21・22 は大型である。28 は頸基部があまりくびれず球形に近い胴部から、口縁部が外側へ直線的にのびる壺である。29・30 は頸基部があまりくびれず太く、口縁部が外側にのびる短頸壺である。30 は 29 よりも頸基部のくびれがやや強く口縁部がやや上方にのびる。31 はなで肩で非常に短い口縁部が外反して開く中部九州系の短頸壺である。32 は頸基部があまりくびれず短い口縁部が外側へのびる短頸壺で、外面にはタタキが残存する。33～38 は壺の底部である。39 は頸部が長く徐々に細くなり、短い口縁部外側へ広がる壺である。40 は胴部が扁球形に近く、頸基部で強くくびれ口縁部がやや外側の上方へのびる壺である。41 は長頸壺の細長のびる口縁部で、端部は外側へ強く屈曲する。42 は胴部が強く張る小型の壺である。43 は小型丸底壺で胴部外面にミガキが残存する。44～48 は下膨れの器形で非常に短い口縁部が外反する小型の短頸壺である。49 は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部が外反して開く小型の壺。

50～96 は甕である。50～71 は在地系甕の口縁部から胴部にかけてである。62 は口縁部が短くあまり外反せず、胴部に外面から焼成後の穿孔を施す。66・67 は口唇部にキザミを付し、66 の頸部には断面三角形の突帯を廻らす。68～71 はやや小型である。72 は五様式系甕である。73 は口縁部がわずかに内湾気味で中部九州系甕の可能性はある。74 は口縁部がわずかに外側へ屈曲する。75 はやや小型の甕で外面にケズリが施される。76 は五様式系甕で内面にケズリを施す。77～95 は甕の底部で、89～95 は中部九州系で脚部を有す。96 は大型の甕の胴部下段で、突帯が 2



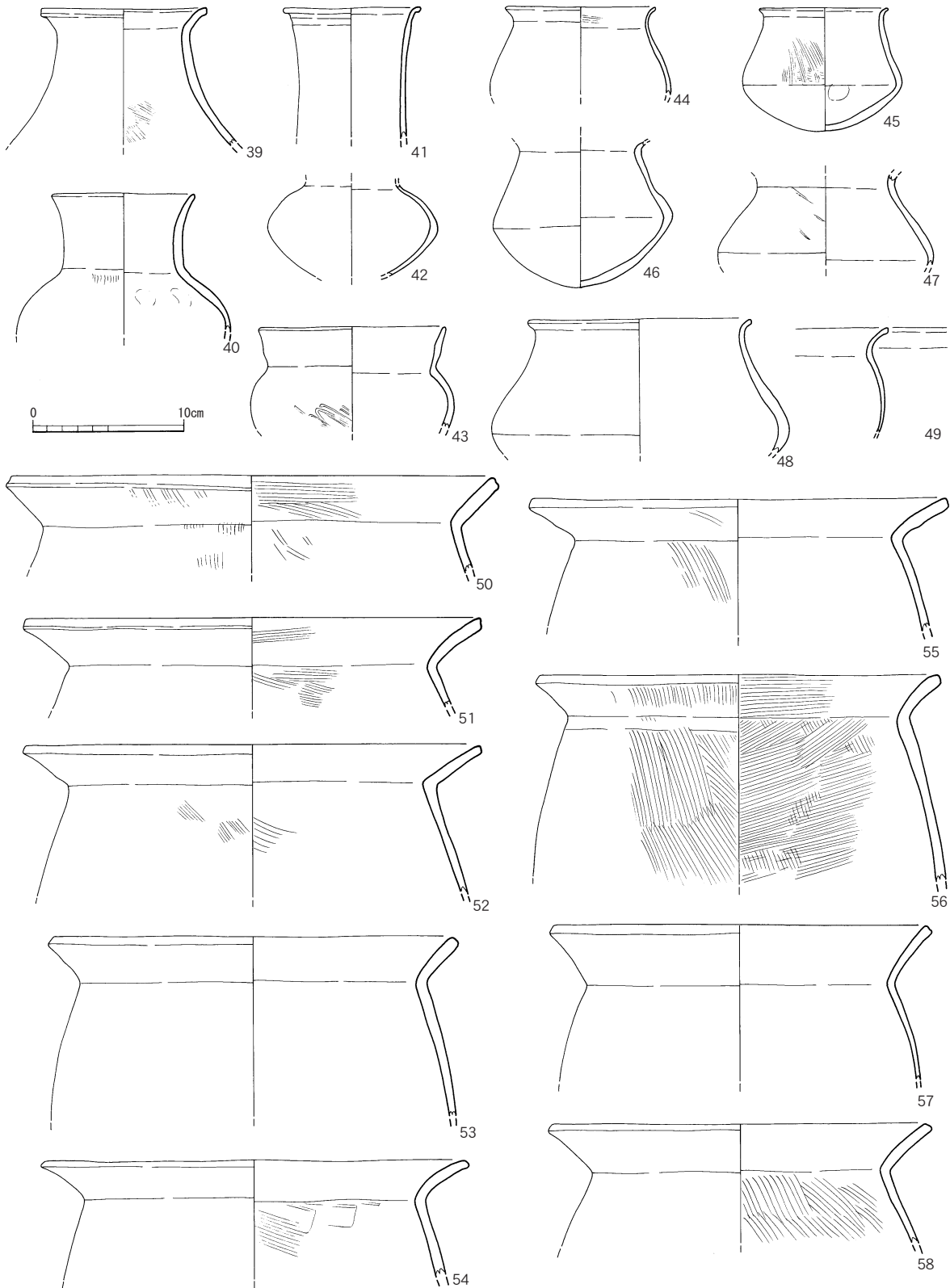
第61図 I区1号落ち込み出土土器実測図① (1~4は1/8、他は1/4)



第 62 図 I 区 1 号落ち込み出土土器実測図② (1/4)

条廻りいずれもキザミを付す。

97～124は高杯である。97は下半が強内湾し、口縁部が屈曲してやや外反しながらのびる杯部である。98～108は上半が外反し、下半がやや内湾気味の杯部である。98～100は101～107に比して口径がやや小さい。99・100は外反する上半部が短い。102・107・108には暗文が施



第63図 I区1号落ち込み出土土器実測図③ (1/4)

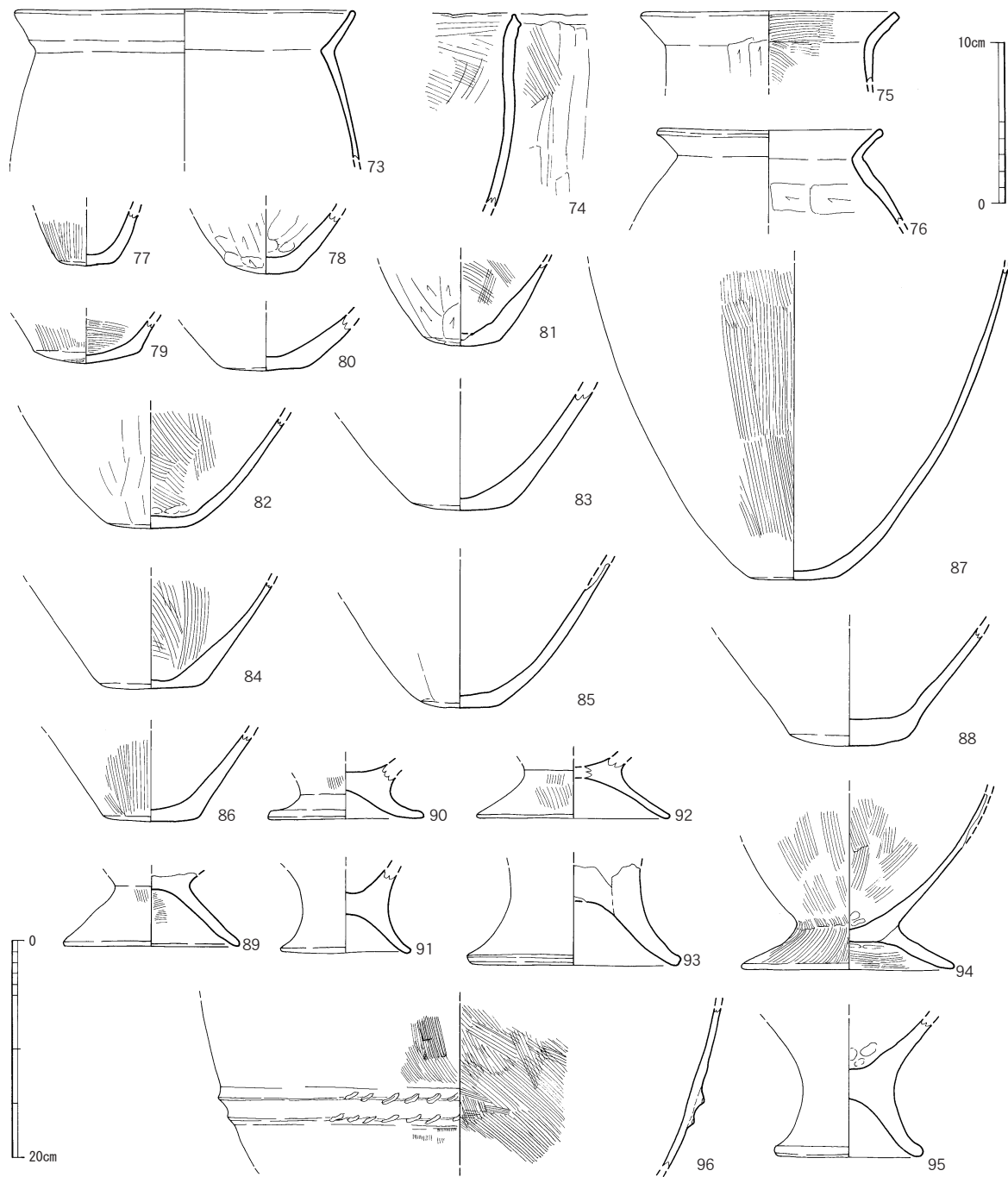
される。109・110 は杯部の屈曲部から上部で、失われた下半部から強く屈曲していると考えられ、110 は内側に傾きながら立ち上がり、屈曲部にキザミを付す。ともに口縁端部を外側へつまみ出す。111 は屈曲部から上部が立ち上がり、口縁端部が外側へ大きく肥厚するものである。112 は下半がやや張り、頸部の屈曲がごくわずかで、口縁部がわずかに外反して上方に立ち上がるものである。



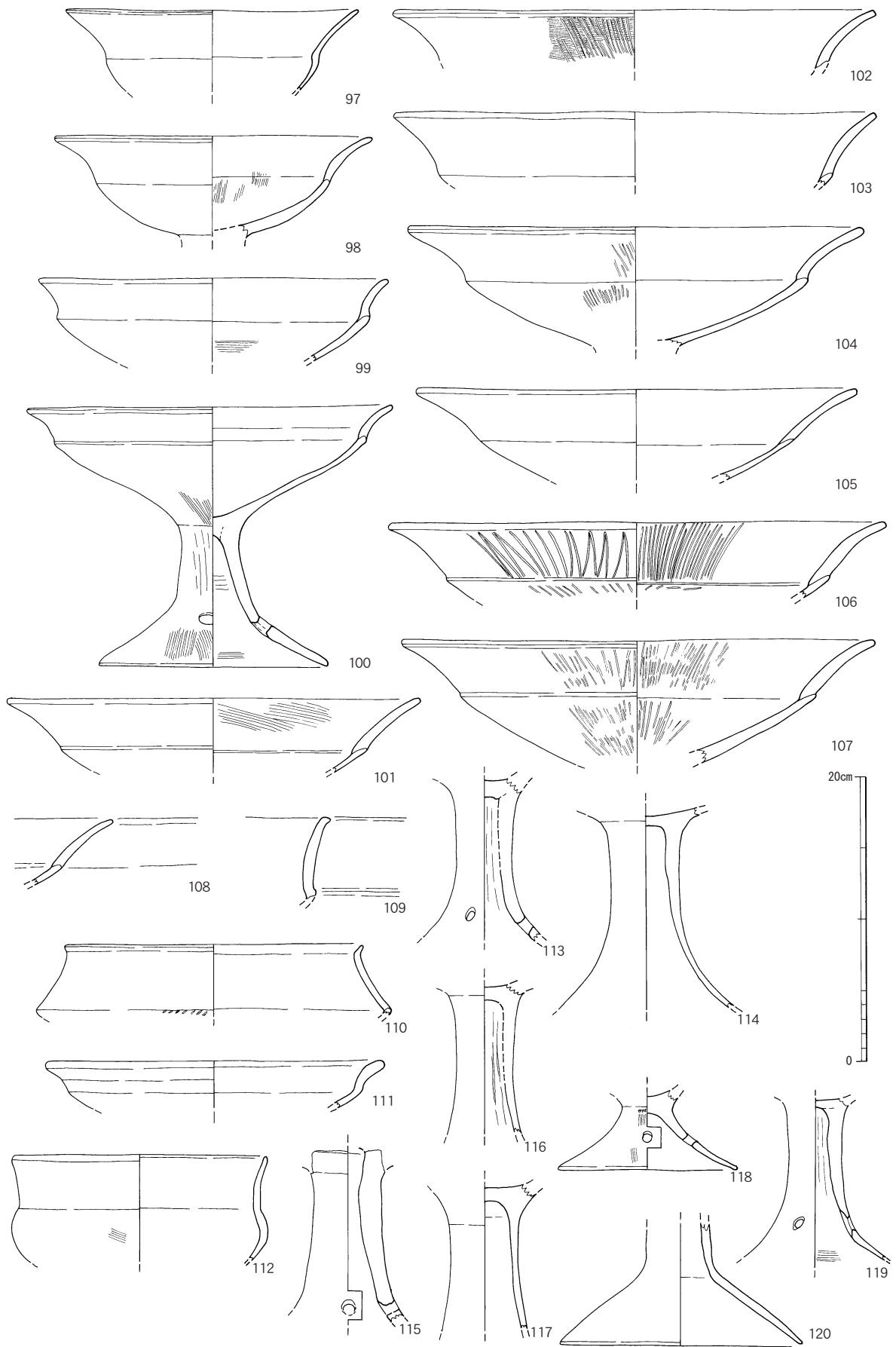
第 64 図 I 区 1 号落ち込み出土土器実測図④ (1/4)

113～124は高杯の脚部である。118は非常に短い。119・123の穿孔は3箇所であるが、他のものの穿孔の数は不明である。121は外面に暗文が残存し、122は裾部にキザミを施す。

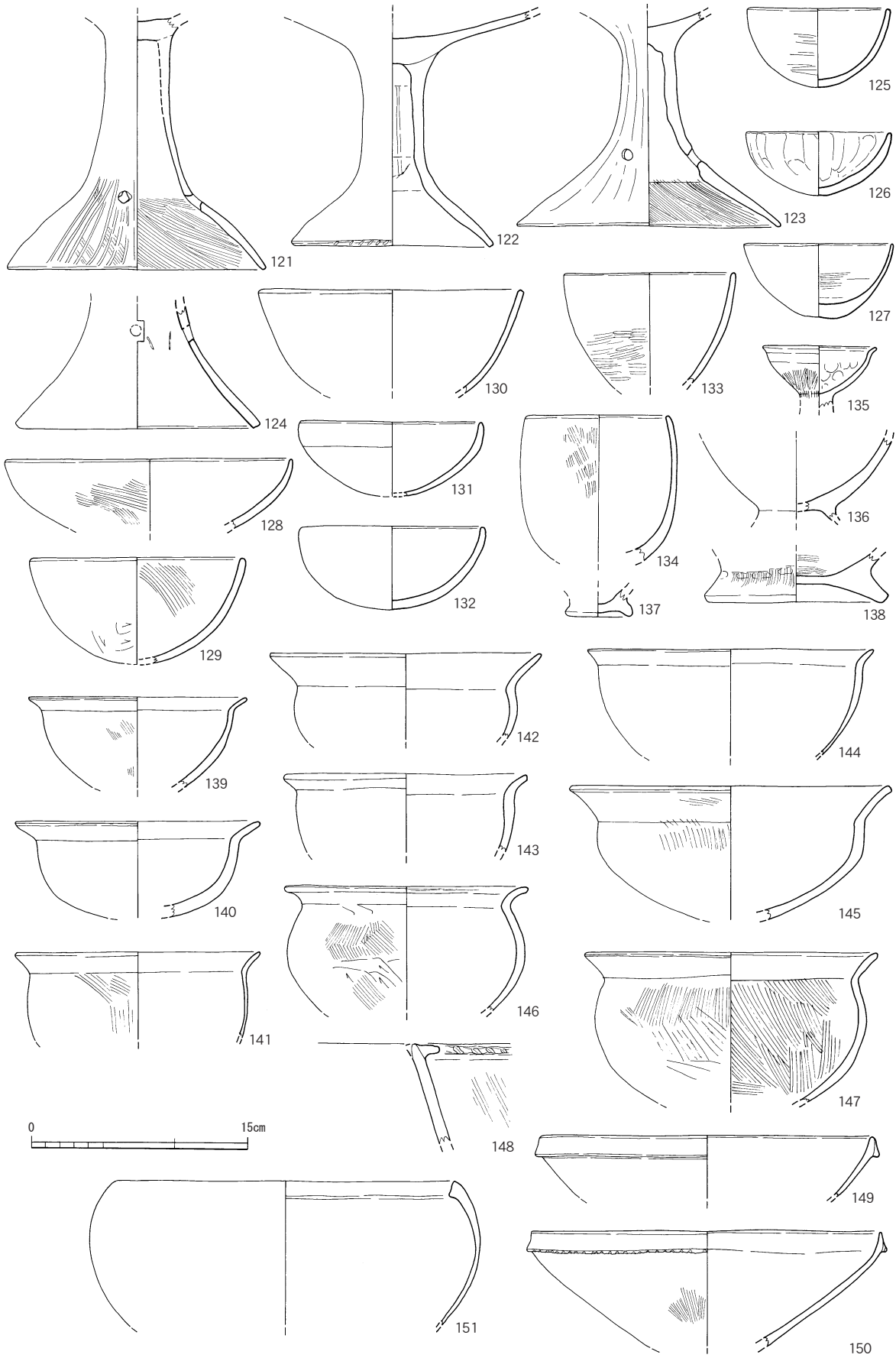
125～151は鉢である。125～134は素口縁の鉢である。125～127は小型である。128は口径が大きい。133・134は縦長の器形で、133は外面にミガキが残存し、134の口縁部は開かず上方にのび、端部付近は内湾気味である。135～138は脚部を有す鉢である。135は非常に小型で口縁部はわずかに外側へ屈曲する。137・138は脚部で、137は非常に小さく138は裾部の径が大きい。139～145は浅く内湾して立ち上がる胴部から口縁部が屈曲して外側にのびる鉢である。140・



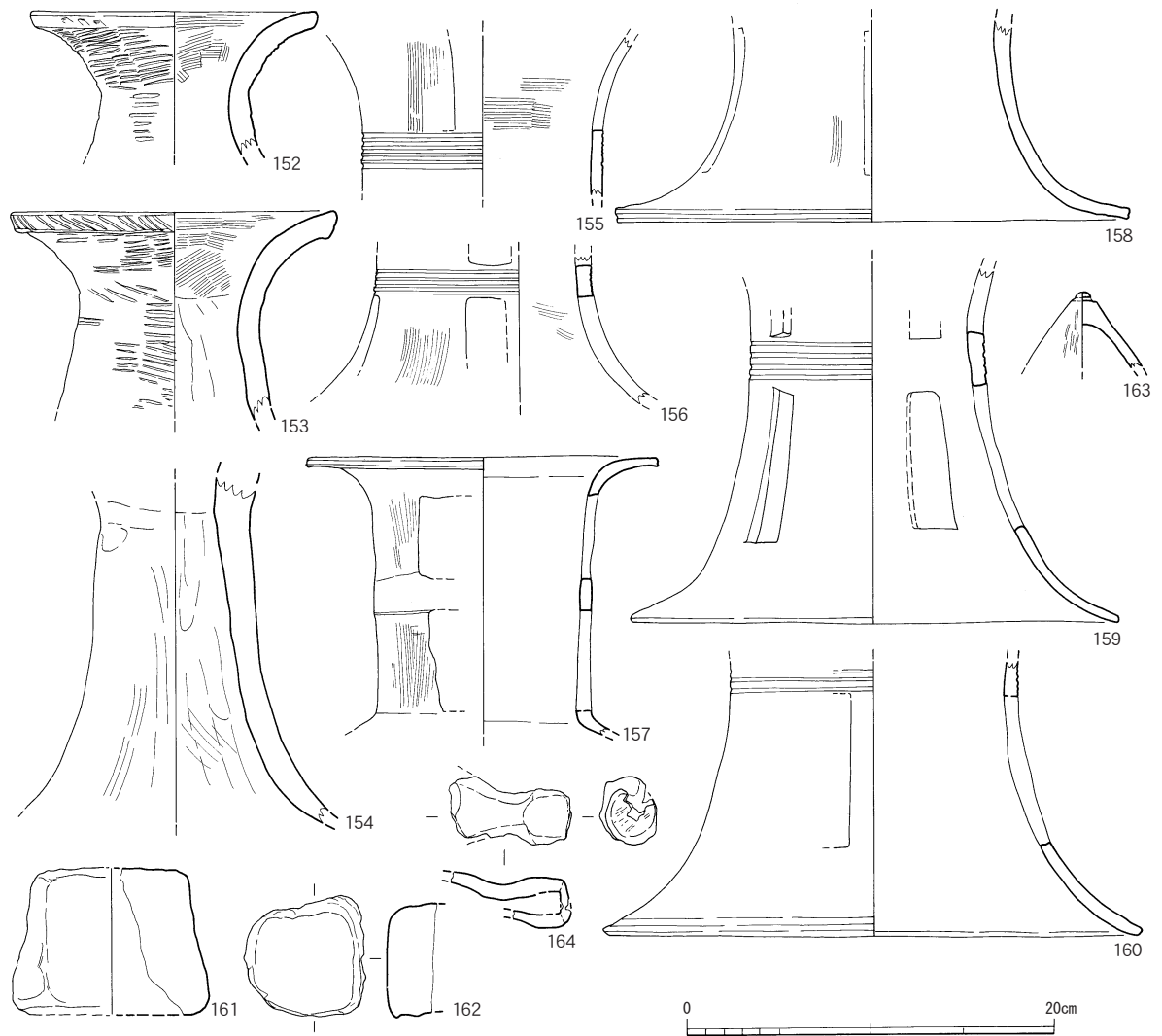
第65図 I区1号落ち込み出土土器実測図⑤ (96のみ1/6、他は1/4)



第 66 図 I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑥ (1/4)



第 67 图 I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑦ (1/4)



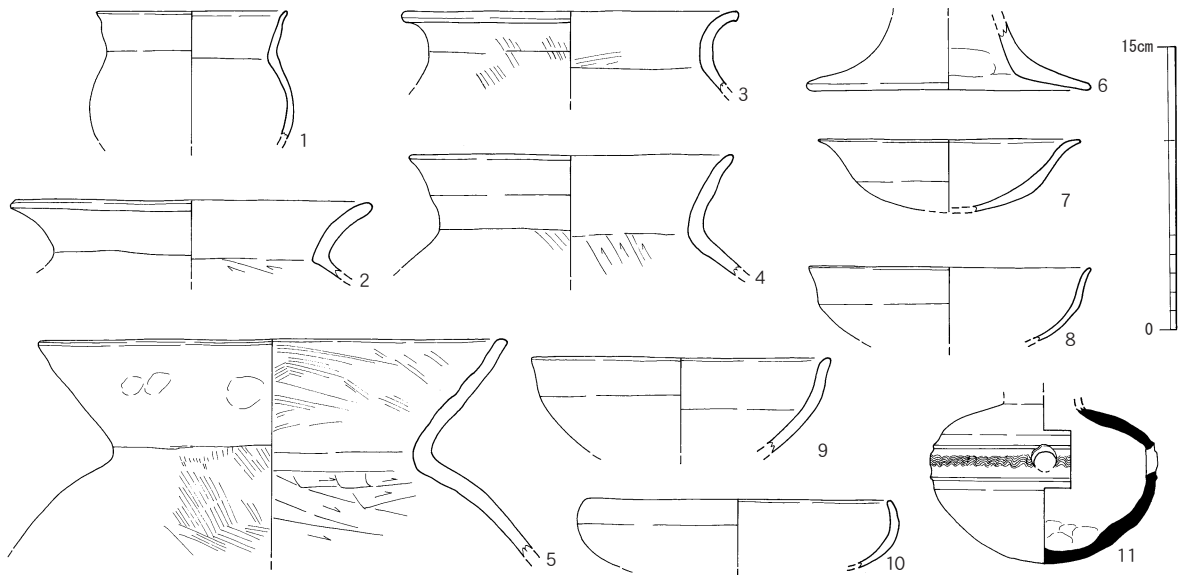
第 68 図 I 区 1 号落ち込み出土土器実測図⑧ (1/4)

142・145 の口縁部はやや長くのびる。146・147 はやや胴部が張り、ややくびれた頸基部から口縁部が外側へのびる鉢である。148 は内側へ傾いて立ち上がる鉢の口縁部で、口縁端部外側にキザミを付した突帯が貼り付けられる。149・150 は胴部の立ち上がりが緩やかで、口縁部は上方へわずかに屈曲し外側へ低い突帯を廻らせる。150 の突帯にはキザミを付す。151 は口縁部が内湾し、端部が面を成す鉢である。

152～160 は器台である。152～154 は上部で強くくびれるもので、152・153 は外面に密にタタキが残存する。155～160 は方形の透かし孔を有する器台である。欠損で確認できないものも含め、いずれも上・下半で透かし孔は対になっていると考えられる。透かし孔の数は156で4対、159は3対に復元され、他は不明である。157・158 以外は胴部中位で凹線の文様帯が残存する。157 の胴部中位は2条の沈線が廻り、くびれない。

161・162 はブロック状の支脚である。

163 は下部が欠損しているが円錐形に復元できると考えられ、上端部付近に径1mm未満の極めて小さな穿孔を施す釣鐘状の土製品である。164 は中空でくびれた中央部から両側へ膨らむ土製品で、用途は不明である。



第 69 図 I 区 2 号落ち込み出土土器実測図 (1/4)

2 号落ち込み (第 6・60 図)

I 区南東隅付近で I c 区内に位置する落ち込みである。溝状に細長く南北に広がり、南北両側ともに調査区外に延びており、南側は II 区 4 号落ち込みに続くと考えられる。幅は全体的に大きな差がなく、2 m 前後である程度一定であるため溝とも考えられるが、壁の立ち上がりが非常に緩やかで底面との境も明瞭ではないため、流路状の落ち込みと判断した。深さ 20cm 程度で、埋土は粘性の強い淡黒灰褐色土である。

出土土器 (第 69 図 1～11)

1 は小型丸底壺である。2～3 は頸基部でややくびれ口縁部が外側へ開く甕で、内面にケズリが施される。4 は頸基部で強くくびれ、長い口縁が外側へのびる甕で、内面にケズリを施す。6 は高杯の脚部である。7～10 は椀で、7～9 はいずれも胴部中位でわずかに屈曲し、口縁端部はわずかに外側へ開く。10 は口縁部が内湾して立ち上がる。11 は須恵器の臚である。

3 号落ち込み (第 6 図)

I 区南西隅付近で I c 区内に位置する落ち込みである。長軸 8.4 m 程度の不整形で、深さ 10cm 程度で、底面まで非常に緩やかに落ち込む。埋土は粘性の強い淡黒灰褐色土である。遺物は出土していない。

(6) 住居出土土器

I a 区は狭小な範囲で最初に調査を行った地点であり、そのため包含層中の堆積土の相違や落ち込みの埋土の広がりを竪穴住居跡やその切り合いと誤認して検出してしまった。そのようにして竪穴住居跡と認識してしまったものは 5 棟分で、そのうち 2・3・5 号住居は I b 区で検出した 1 号落ち込みが北へのびて連続する部分にあたると考えられ、これらの出土遺物も 1 号落ち込みに帰属するものと想定される。1・4 号住居は I 区北東端周辺に広がる包含層の一部と想定され、出土遺物もその帰属となると考えられる。

1号住居（包含層）出土土器（図版33、第70図1～8）

1は壺の底部で狭い平底である。2～4は在地系の甕の口縁部から胴部にかけてで、3は口唇部にキザミを付し、4は頸基部の屈曲が緩やかである。5～7は高杯の脚部で、5は穿孔が4箇所に見られる。8は脚部を有するとみられる鉢で、素口縁である。

2号住居（1号落ち込み）出土土器（図版33、第70～72図9～64）

9～29は壺である。9は大型の広口壺で、長胴で頸基部がくびれ、口縁部が外反し、頸基部に断面三角形の突帯が廻り、胴部下半に断面台形の突帯を2条廻らす。口唇部と胴部下半の突帯にはキザミを付す。10・11は頸基部がくびれ口縁部が外反して開く広口壺で、口唇部にキザミを付す。11は口縁部外側が肥厚し、口縁端部が面をなす。12・13は頸基部がくびれ、やや短い口縁部が外反して開く壺である。14は頸基部がやや強くくびれ、短い口縁部が屈曲してやや外側の上方へ立ち上がる短頸壺である。15・16はなで肩で、口縁部はやや外反して開く壺である。17は胴部がやや強く張り、頸基部がややくびれ口縁部がやや外反して開く壺である。18は頸基部が強くくびれ肩部が張り、短い口縁部が屈曲して外反する短頸壺である。19・20は胴部が球形に近く、非常に短い口縁部が外側へ屈曲する短頸壺である。21は胴部片で、沈線による山形文が見られ、さらにその中に平行文が施される。22・23はややなで肩で、頸基部でくびれ口縁部がやや外反してやや外側の上方にのびる壺である。24は壺の底部でやや不安定な平底である。25は胴部が球形に近く、頸基部で強く屈曲して短い口縁部がやや外側の上方へのびる短頸壺である。26・27は下膨れの器形で、非常に短い口縁部が外側へ屈曲する短頸壺である。28は胴部が扁球形で強く張り、頸基部で強く屈曲して口縁部がやや外側の上方へのびる壺である。29は二重口縁壺の口縁部下半で、外面にはミガキが残存する。

30～43は甕である。30～38は口縁部が残存する。30は外面に密にタタキを施す。31は完形でやや長胴で、口縁部は短く底部はややレンズ状である。32は口唇部にキザミを付し、頸基部に断面三角形の突帯が廻る。36は口唇部にキザミを付す。38は口縁部がやや内湾して立ち上がる。39～43は底部である。39は不安定な平底で、40・41はややレンズ状で器壁が厚い。42は突出気味でややレンズ状である。43は中部九州系の脚部をもつものである。

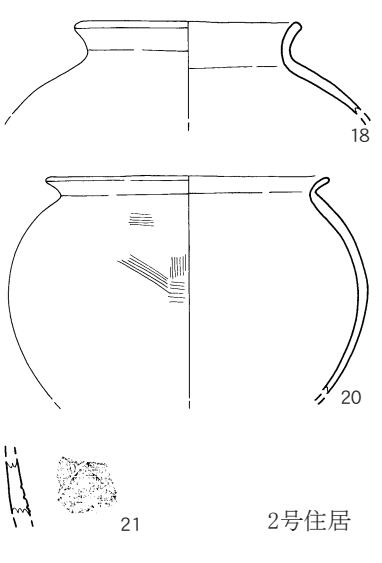
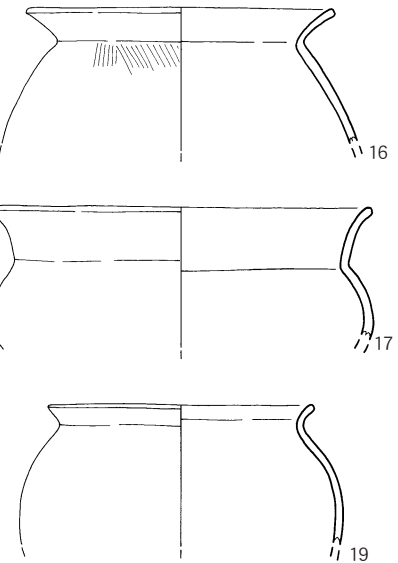
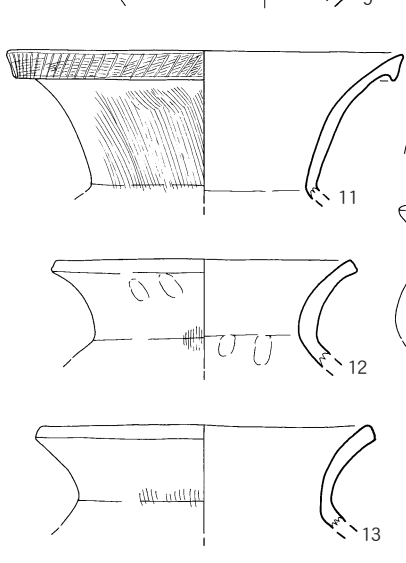
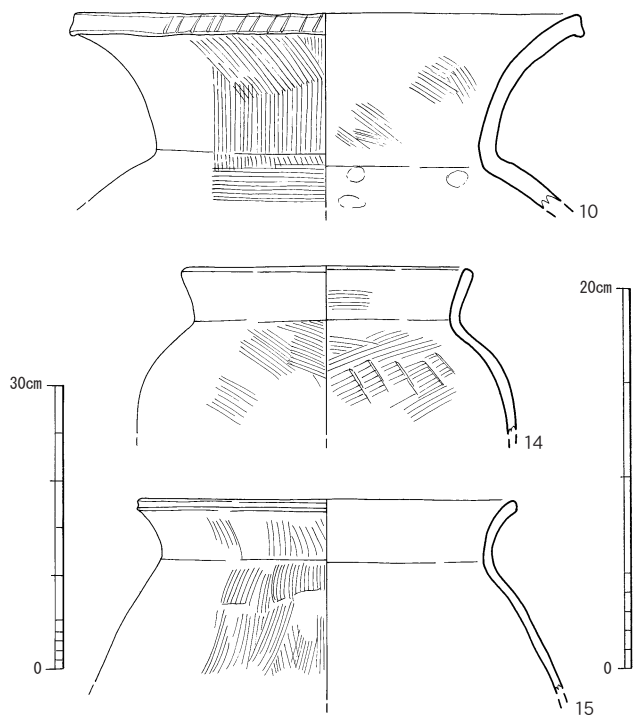
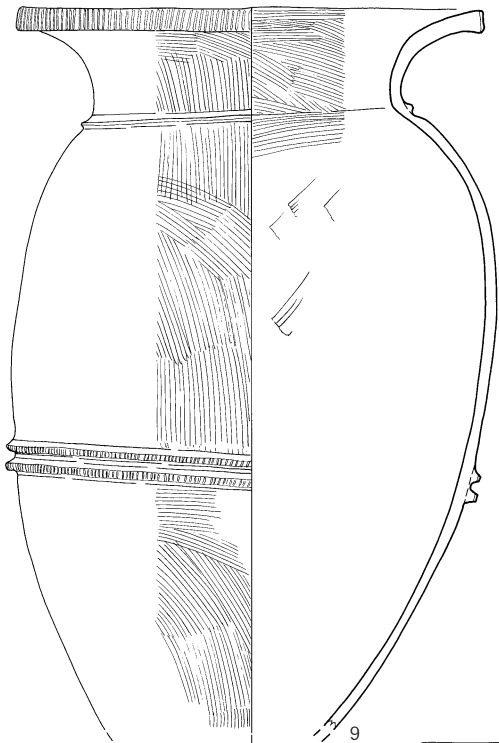
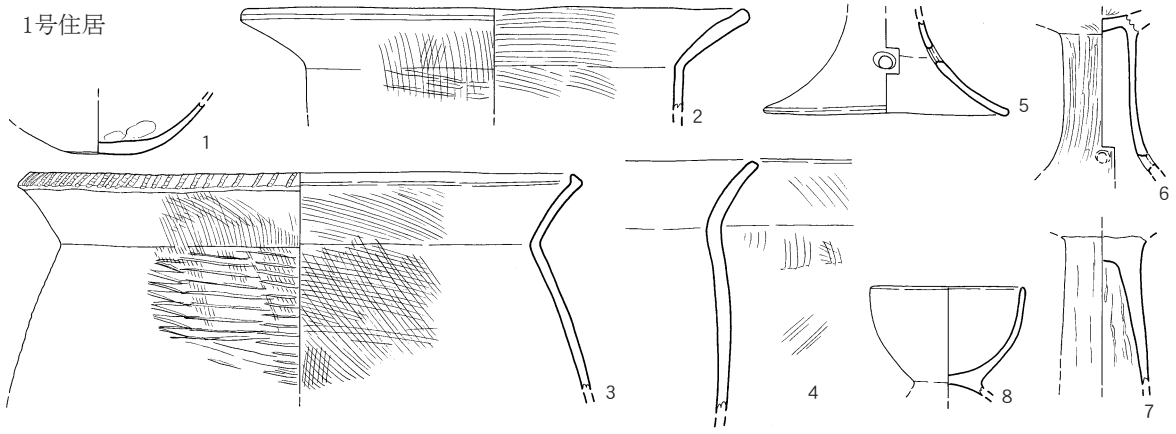
44～50は高杯である。44・45は上半が外反して開き、下半が内湾する杯部である。44は外面に波状の暗文を施し、内面に密にミガキを施す。46～49は脚部である。46・47・49は3箇所に穿孔が施される。50は東北部九州系の高杯の杯部で、口縁部は内側に立ち上がる。

51～56は鉢である。51は短い口縁部が外側へ屈曲する鉢である。52・53は口縁部が屈曲してわずかに外反してのびる鉢で、53は胴部がやや張り口縁部は長い。54はやや小型の鉢で、口縁部は外側へ屈曲し、脚部を有する可能性がある。55は小型の素口縁の鉢で底部はやや突出気味である。56はやや大型の素口縁の鉢で、外面上位はタタキが残存し、下位はケズリを施す。

57～60は器台である。57はくびれ部から口縁部が強く外反して開く。58～60は方形の透かし孔の一部が残存し、58はくびれ部に凹線の文様帯を有し、59は細い沈線が1条残存する。

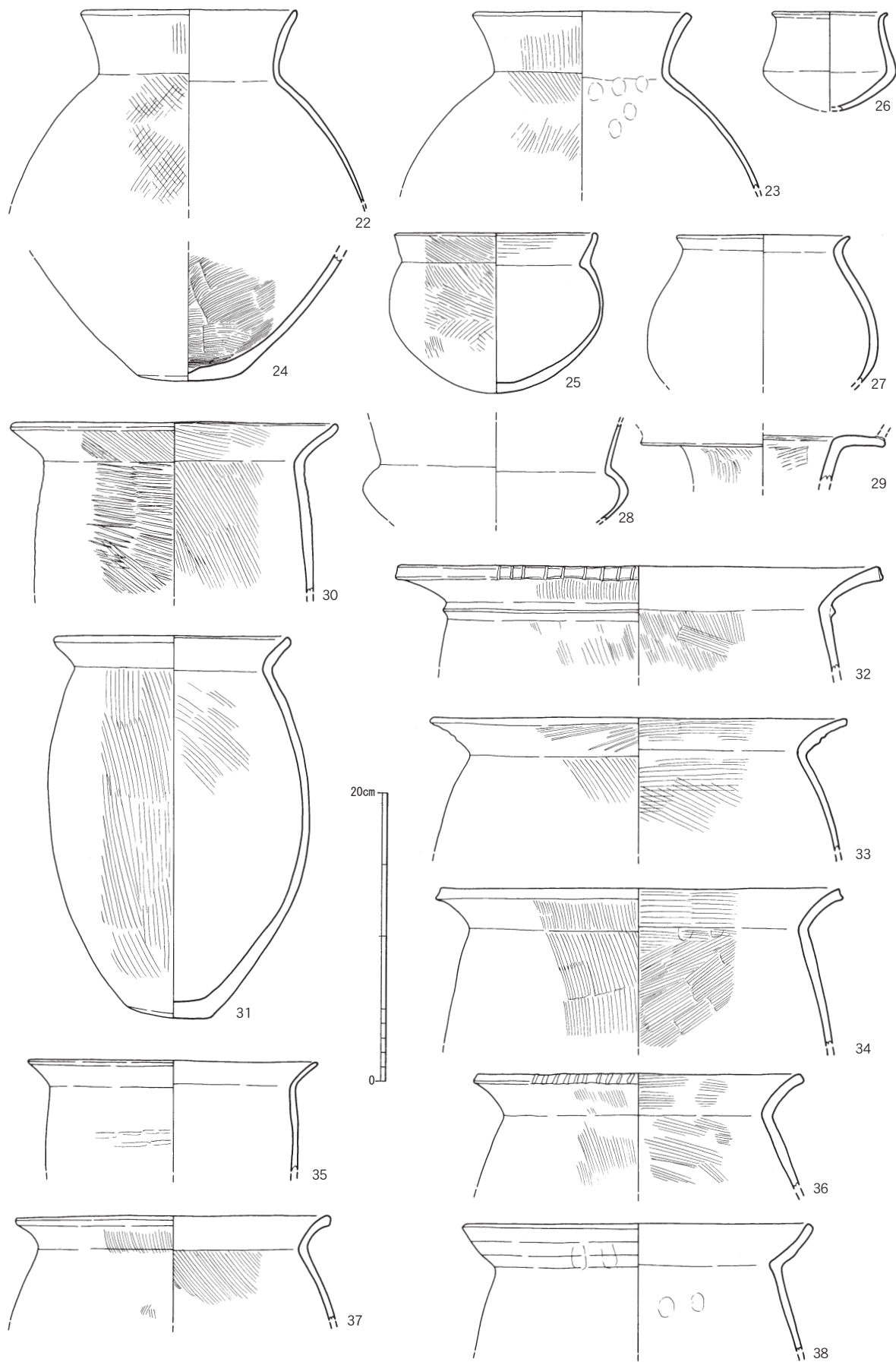
61は支脚で、縦位・横位双方タタキが密に残存する。62は断面円形の棒状の土製品で、片側は欠損している。63・64は鉢状の器形の手づくねによる土器で、ともに素口縁で63は平底である。65は土製紡錘車で径4.1cm程度、孔径は5mm程度で、片面は平坦で断面は扁平な蒲鉾状である。

1号住居

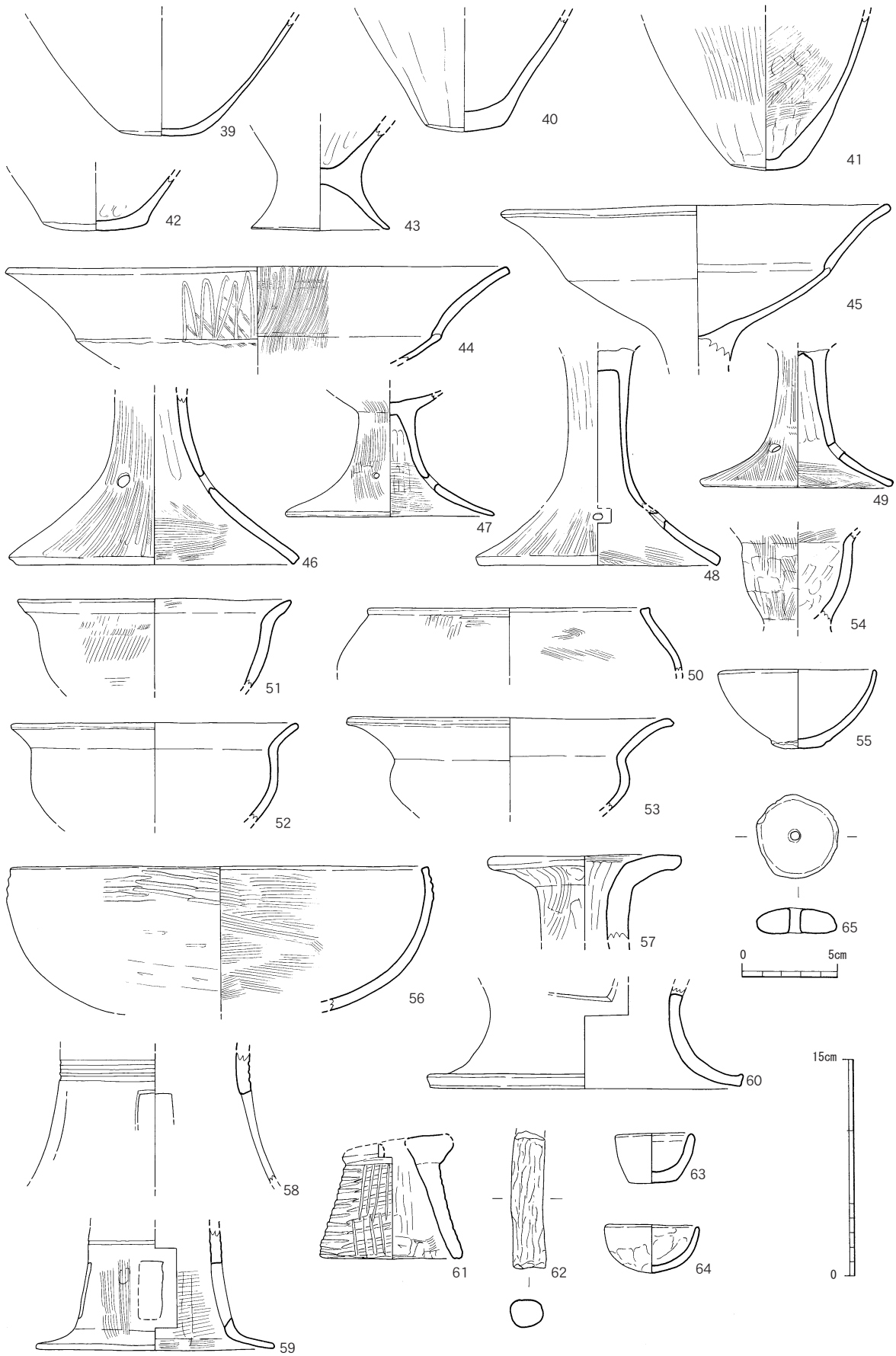


2号住居

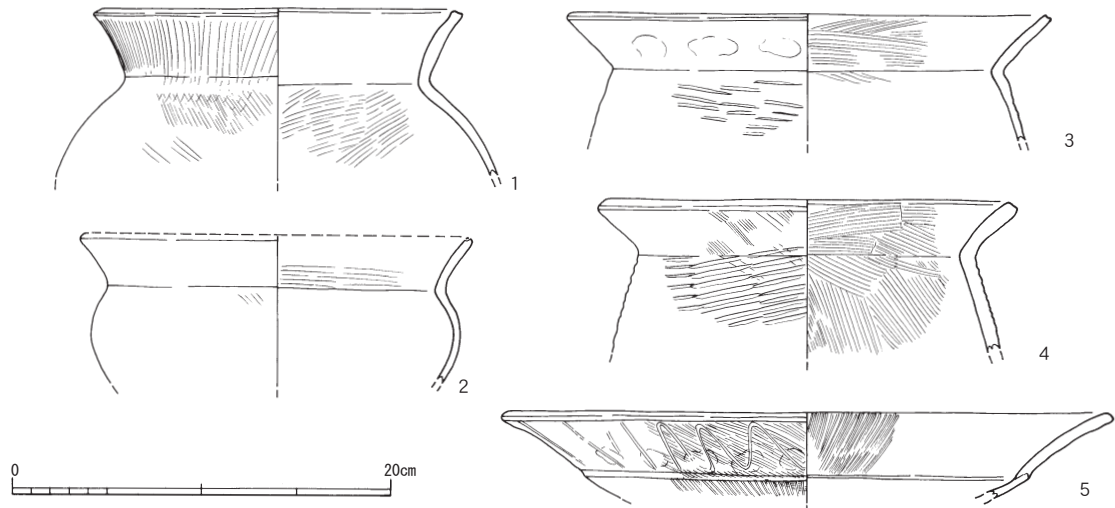
第70図 I区1・2号住居出土土器実測図(9のみ1/8、他は1/4)



第 71 图 I 区 2 号住居出土土器实测图① (1/4)



第72図 I区2号住居出土土器実測図② (65のみ1/3、他は1/4)



第73図 I区3号住居出土土器実測図(1/4)

3号住居(1号落ち込み)出土土器(第73図1~5)

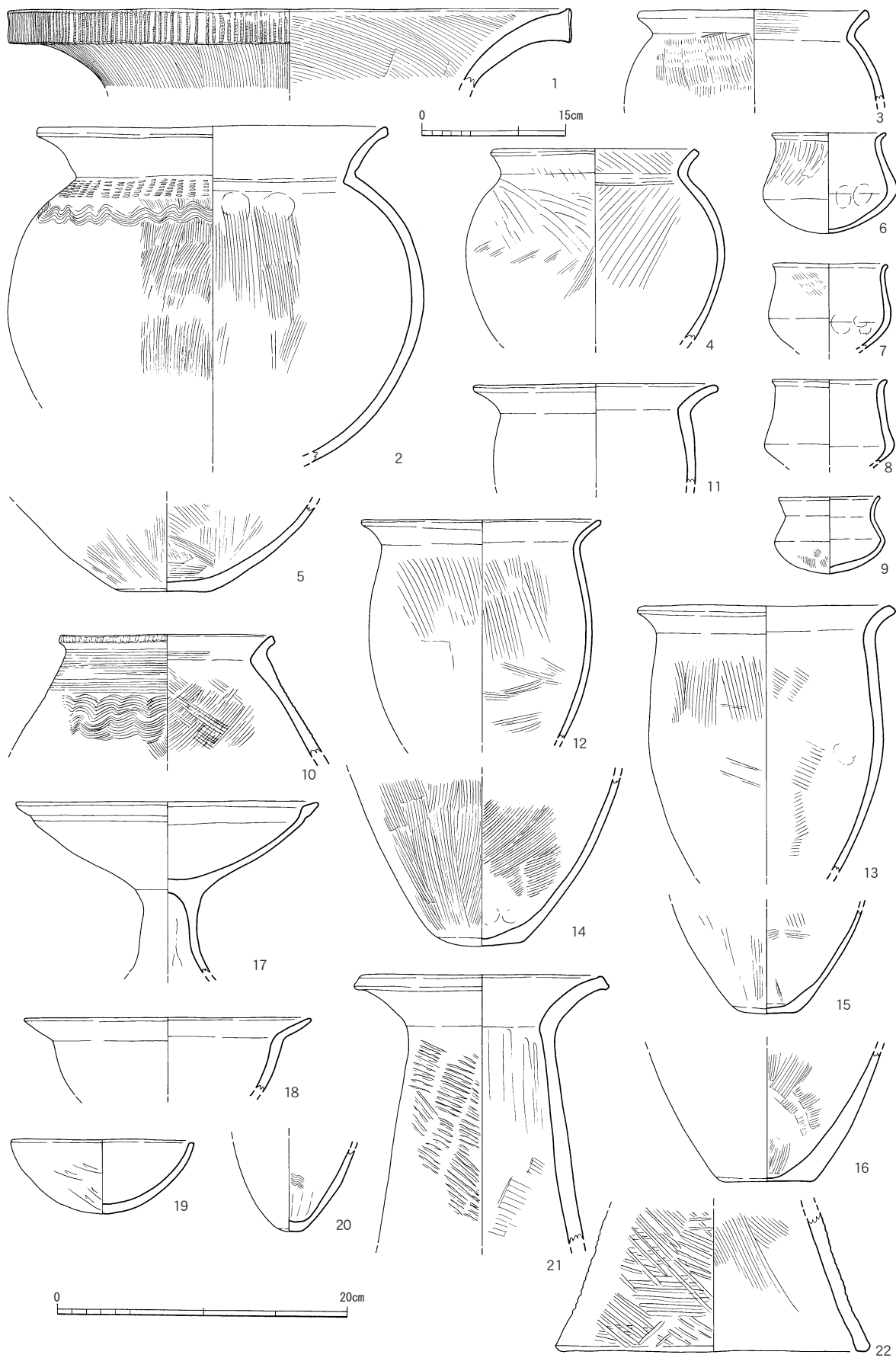
1は頸基部がややくびれ、口縁部がやや外側の上方へのびる壺である。2は胴部がやや強く張り、頸基部があまりくびれず太く、口縁部が外側の上方へのびる壺である。3・4は在地系の甕で外面にタタキが残存する。5は高坏の杯部で外面には波状の暗文を、内面には密にミガキを施す。

4号住居(包含層)出土土器(図版34、第74図1~22)

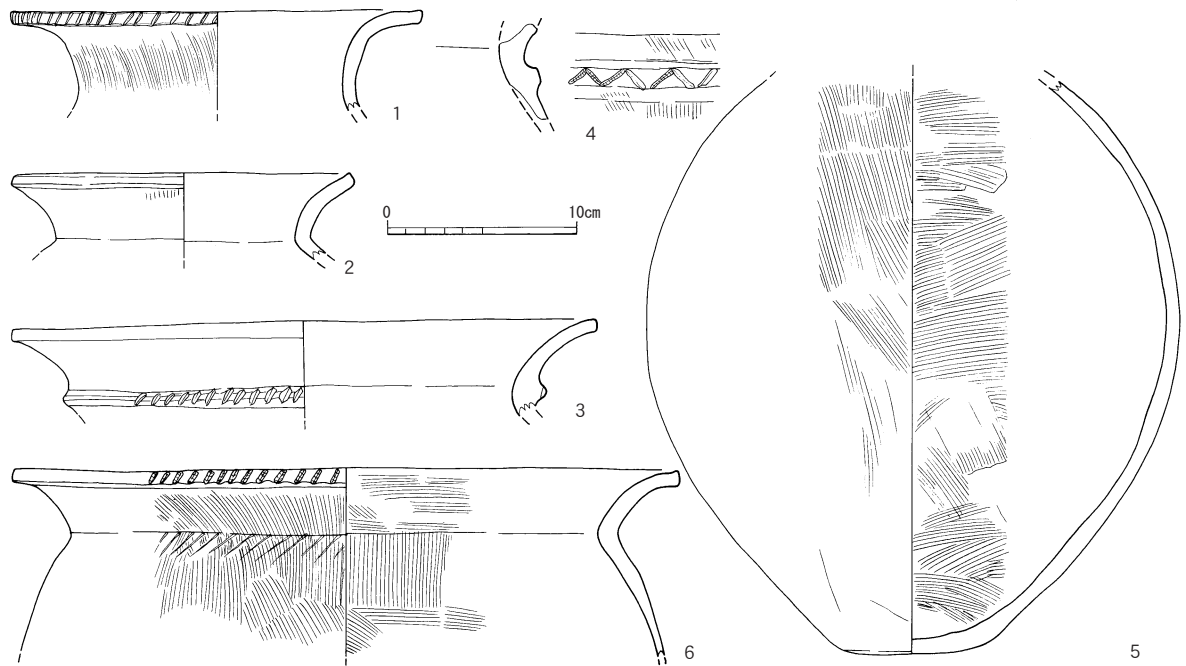
1は大型の広口壺で口縁部が外反して開き、口唇部にハケ原体の端部によるキザミを付す。2は胴部が球形に近く、あまりくびれず太い頸基部からやや短い口縁部が外反して開く広口壺である。肩部には波状文と櫛歯状の工具で施したと考えられる列点が連続して廻る。3・4は胴部が丸みを帯びてやや張り、あまりくびれず太い頸基部から短い口縁部がやや外側の上方へのびる短頸壺である。4はやや粗いハケで調整を施す。5は壺の底部で平底である。6~8は非常に短い口縁部が外反し、下膨れの器形の小型の短頸壺である。9は扁球形の胴部から短い口縁部がやや外側の上方へのびる小型の短頸壺である。10はなで肩で非常に短い口縁部が外側へのびる中部九州系の短頸壺である。肩部には平行文および波状文を施す。11~13はやや小型の在地系甕で口縁部が残存するが、いずれも頸部の屈曲は緩やかで口縁部が短い。14~15は甕の底部で、14はややレンズ状、15は不安定な狭い平底、16は平底で底の器壁は薄い。17はわずかに内へ屈曲する口縁の端部が断面三角形状に肥厚する高坏。18は口縁部が屈曲して外側へのびる鉢である。19は素口縁の鉢で外面にケズリを施す。20は尖底の鉢である。21・22は器台で、外面にタタキを施す。

5号住居(1号落ち込み)出土土器(第75図1~6)

1は外反して大きく開く広口壺の口縁部で、口唇部にキザミを付す。2は頸基部でくびれ口縁部がやや外反して開く壺である。3は口縁部が外反して開くやや大型の壺で、頸基部にキザミを付した突帯が1条廻る。4は大型の壺の肩部で断面台形の突帯を付し、山形文状にキザミを施す。5は壺の胴部で、底部はわずかにレンズ状である。6は在地系甕で頸基部はややくびれ、口縁部は外反して開く。口唇部にはキザミを付し、肩部には斜行する沈線が列ぶ。



第74図 I区4号住居出土土器実測図(1のみ1/6、他は1/4)



第75図 I区5号住居出土土器実測図(1/4)

(7) 西側流路跡出土土器(第76～78図1～53)

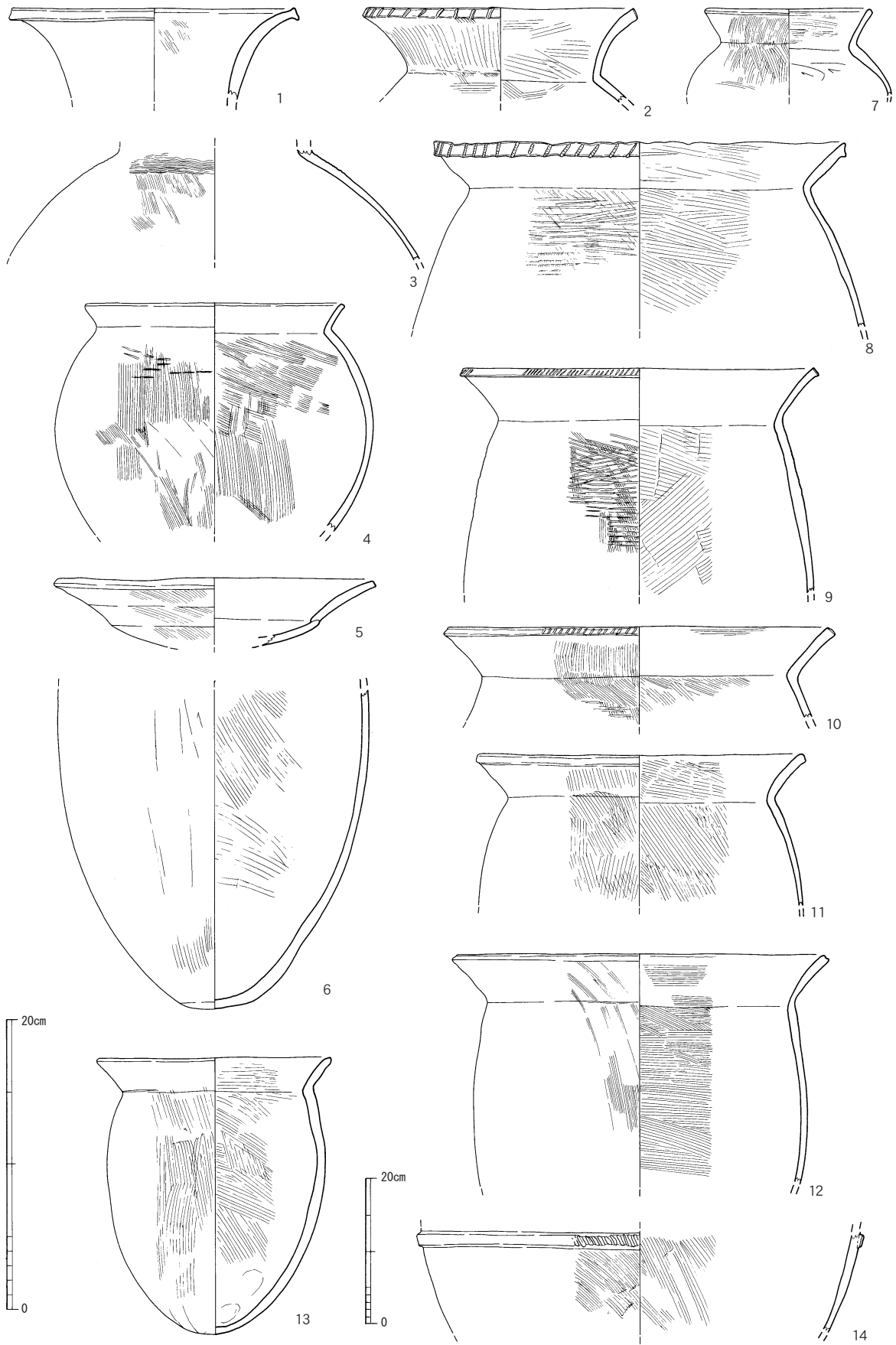
I区西端部で埋土がやや砂質で淡灰茶褐色土のクリーク跡を検出し、陶磁器や多量の土器が出土しており、それらの遺物について以下にまとめる。

1・2は頸基部がくびれ口縁部が外反して開く広口壺で、2の口唇部にはキザミを付す。3はやや張った壺の肩部で、波状文が残存する。4は胴部が球形に近く、太い頸基部から短い口縁部がやや外側の上方にのびる短頸壺である。5は高坏の杯部の可能性もあるが、口径が小さく二重口縁壺の口縁部と考える。6長胴の壺で底部はレンズ状である。7は頸基部が強くくびれ口縁部が外側の上方向へのびる小型の壺である。

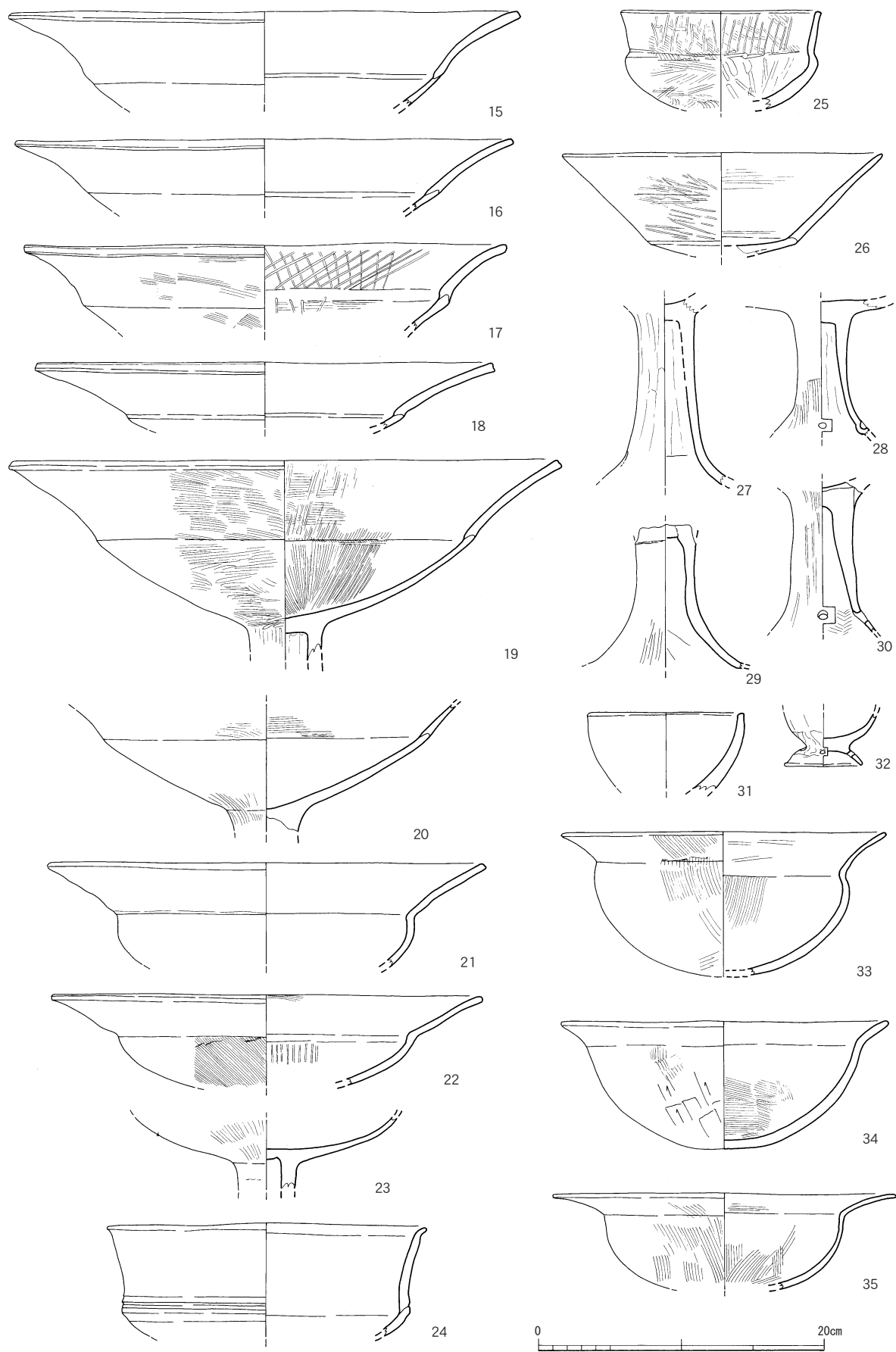
8～13は在地系の甕である。9・10は口唇部にキザミを付す。13はやや小型の甕である。14は大型の甕の胴下半部で、キザミを付した断面方形の突帯を廻らす。

15～20は高坏の杯部で下半は内湾気味に立ち上がり、上半は外反して開く。17は内面に格子状に暗文を施し、外面下半はケズリを施す。21～23は高坏の杯部で下半は内湾して立ち上がり、口縁部が屈曲して外側上方へ立ち上がる。24は高坏杯部で、下半部はほとんど立ち上がりず口縁部は屈曲して直上に立ち上がり、その接合部外面に凹線が廻る。口縁端部はわずかに外反する。25は高坏杯部で、下半はやや張ってわずかにくびれ、口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。口縁部は内外面ともに暗文を施す。26は高坏の杯部で、下部はほとんど立ち上がりず、口縁部は屈曲して外側上方に直線的に立ち上がる。27～30は高坏の脚部である。28は1箇所穿孔を施すが、貫通していない。30は4箇所に穿孔を施す。

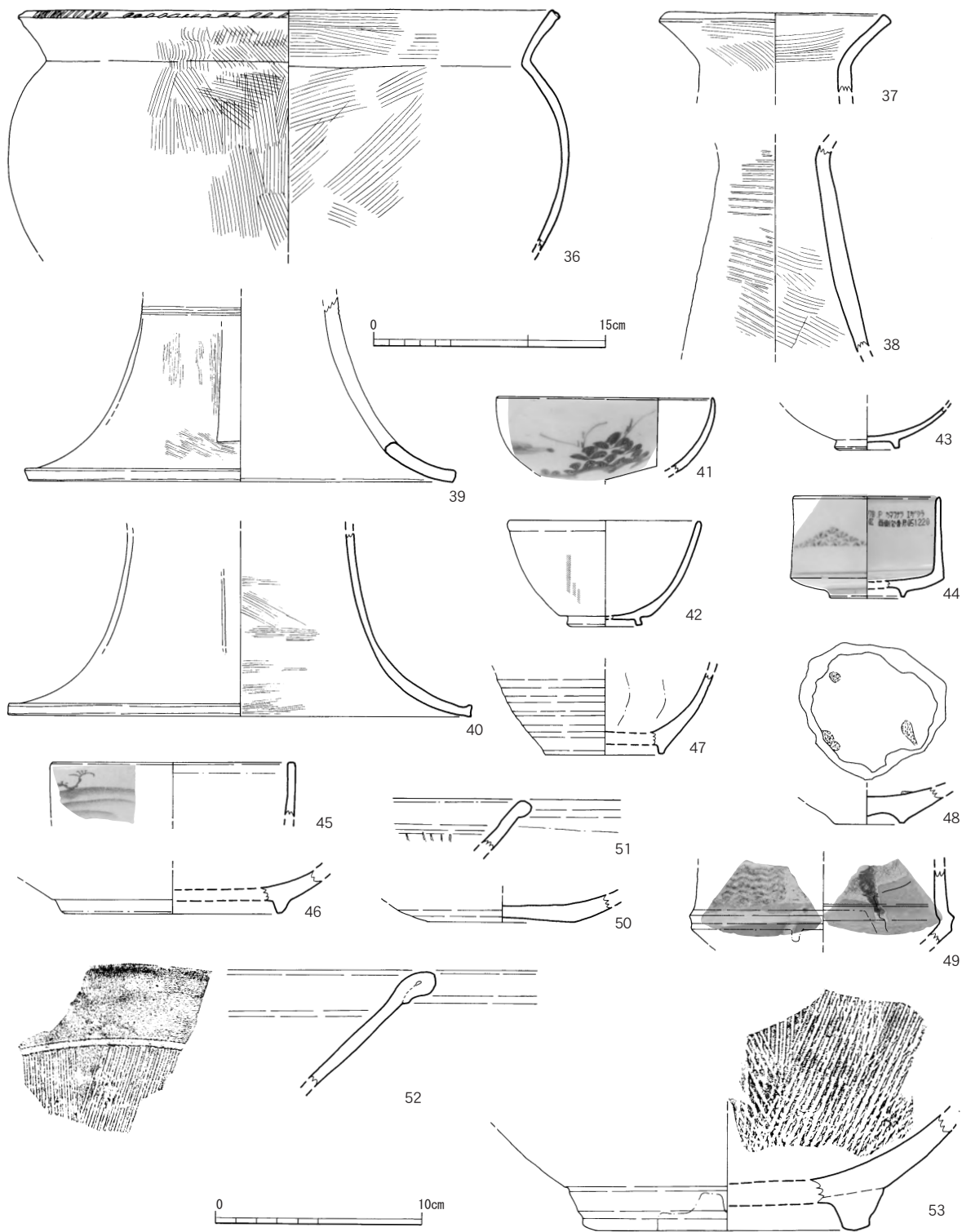
31は素口縁の小型の鉢である。32は脚部を有する小型の鉢と考えられ、2箇所の小さな穿孔を施す。33～35は底部から内湾して立ち上がり、口縁部が屈曲・外反して外側へのびる鉢である。36は胴部がやや張り、頸基部がややくびれて短い口縁部が外側の上方向へのびるやや大型の鉢で、口唇部にキザミを付す。



第 76 図 I 区西側流路跡出土土器実測図① (14は 1/8、他は 1/4)



第 77 图 I 区西侧流路迹出土土器实测图② (1/4)



第 78 図 I 区西側流路跡出土土器実測図③ (41 ~ 53 は 1/3、他は 1/4)

37・38 は上方でくびれる器台である。38 は外面に密にタタキを施す。39・40 は方形の透かし孔が部分的に残存する器台である。39 はくびれ部に凹線が残存する。

41 は花文の染付の肥前系の磁器碗である。42 は京焼風の小杉茶碗である。43 は京焼風の磁器碗である。44 は磁器の腰折碗で、蒟蒻印判で文様が施される。45 は山水文の蓋物の磁器鉢で口

縁端部は釉剥ぎを施す。46は高台を有する瓶の底部で、淡緑色の釉を施し高台の下端は釉剥ぎを行う。内面には陥入が見られる。47は瓶で白泥を施す。48は皿で内面には灰釉を施し胎土目が見られる。49は陶器火入で外面には白泥の上に灰釉による波状文を施す。50は土鍋の底部で外面は回転ケズリが施され、内面は灰釉が施される。51は播鉢の口縁部で端部の肥厚する周辺のみ鉄釉を施す。52・53は鉄釉を施す播鉢である。

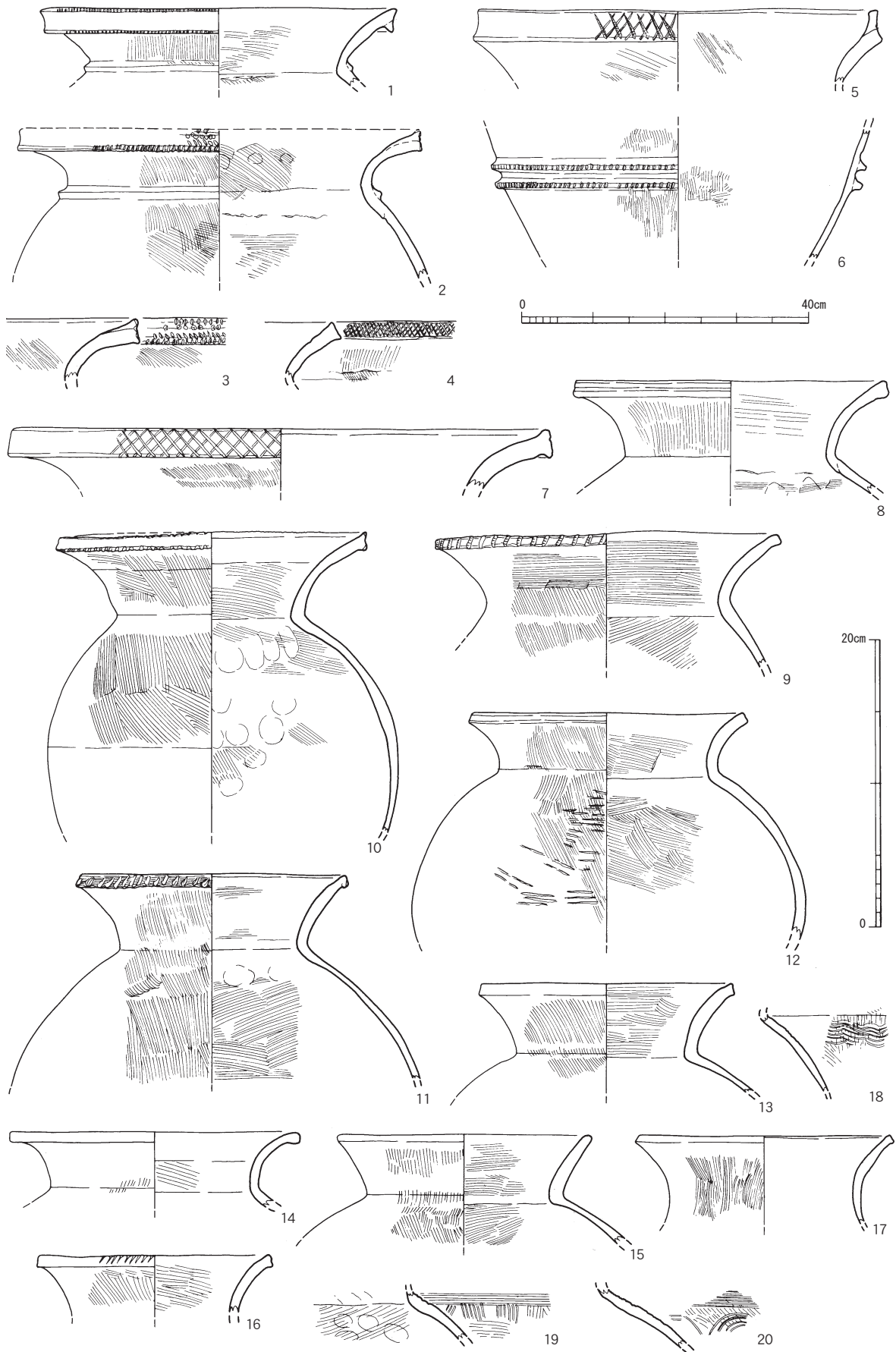
(8) 包含層出土土器

I b 区西側包含層出土土器 (図版 34、第 79～87 図 1～199)

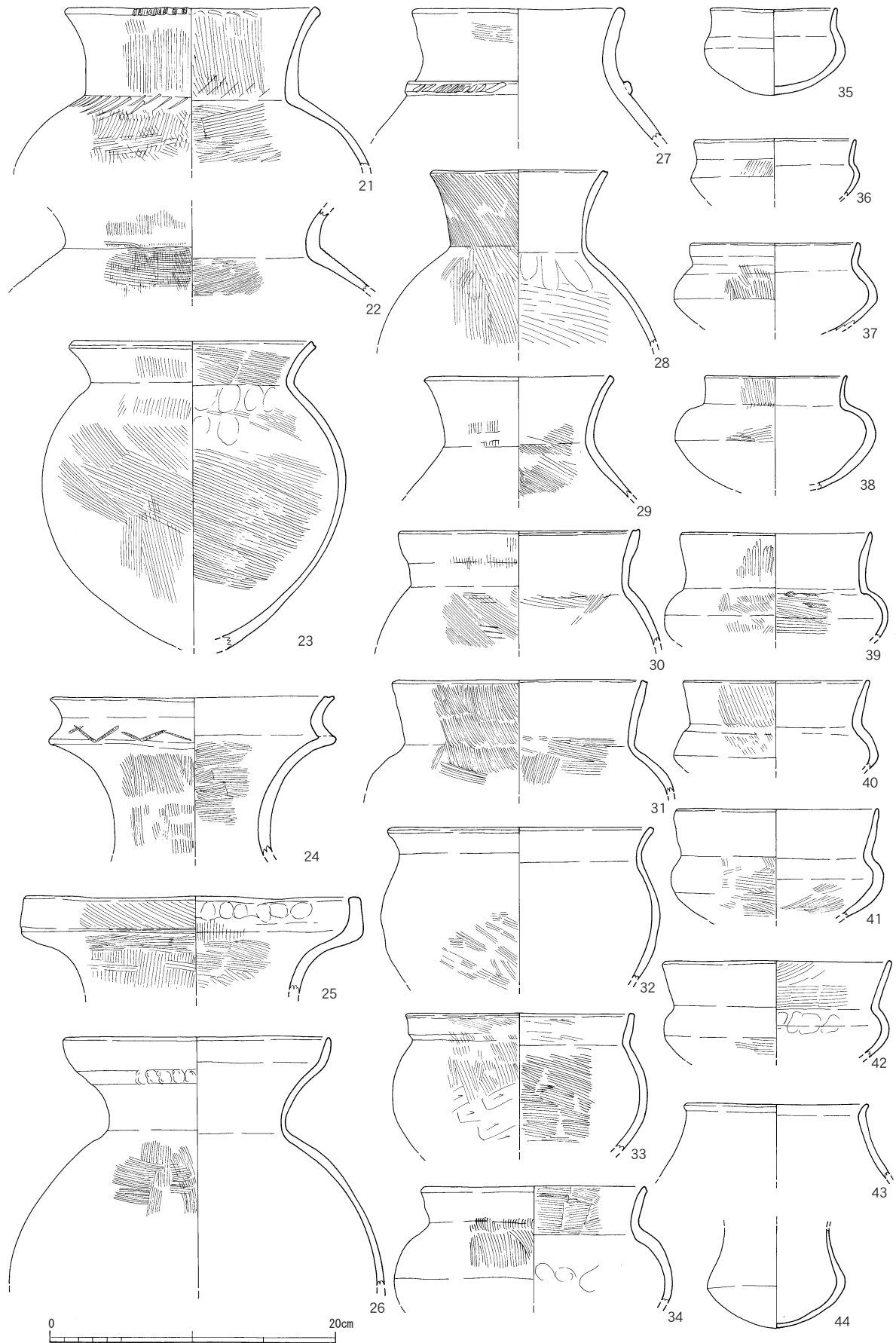
I b 区内の西側調査時にあまり遺構は検出できなかったが、包含層から多量の土器が出土した。この範囲では下層から多数の礎盤が見つかっており、検出できなかった掘立柱建物跡の柱穴の埋土中の土器も含まれる可能性があるが、包含層出土土器として以下にまとめる。

1～6は大型の壺である。1～4はくびれた頸基部から口縁部が外反して開き、端部を肥厚させる広口壺である。1は口唇部の上下端にキザミを付し、頸基部に断面三角形の突帯が廻る。2は口唇部の上下端にキザミを付し、その間にも別のキザミを施し、頸基部に断面三角形の突帯が廻る。3は口唇部の上下端にキザミを付し、その間にも他のキザミを付す。4は口唇部に格子状にキザミを付す。5は外反する口縁部の上部に直立する短い口縁部が付加される複合口縁壺で、口縁部外面は格子状にキザミを付す。6は胴下部でキザミを付す2条の突帯が廻る。7はやや大型の広口壺で、口縁部は外反して開き口唇部に格子状にキザミを付し、胎土は淡黄橙褐色で精良である。8～16は頸基部が強くくびれ口縁部が外反して開く広口壺である。9・11・16は口唇部にキザミを付し、10は口唇部の上下端にキザミを付す。17は外反して開く口縁部である。18～20は壺の肩部でいずれも文様を有す。18は波状文が施され、19は平行文に複数の縦方向の沈線が付加され、20は平行文と円弧文が施される。21は頸基部がくびれ、口縁部が外側の上方へ外反してのびる壺である。口唇部と肩部にキザミが付される。22は頸基部付近で、肩部にはハケ状の平行文が施される。23は胴部が張り、頸基部でややくびれて短い口縁部がやや外側の上方へ外反してのびる。24～26は在地系複合口縁壺である。24は口縁部が屈曲部から上下部ともに強く外反し、山形文状にキザミを付す。25・26の口縁部は外反して開いた後に上方へ屈曲する。27はなで肩で、頸基部で緩やかに屈曲して口縁部はやや外側の上方へのびる。キザミを付した突帯が肩部に廻る。28・29は頸基部がややくびれ、口縁部がやや外側の上方へ立ち上がる。30～34は太い頸基部から口縁部がわずかに外側の上方へのびる。31は口縁部が外反気味に開く。33は外面下半にケズリを施す。35～38は胴部が扁平で太い頸基部から短い口縁部が上方へのびる小型の短頸壺である。39～42は胴部が扁平でやや長い口縁部が上方へのびる。43・44は下膨れの器形で非常に短い口縁部が外反する短頸壺である。45は扁球形の胴部から口縁部がやや外側の上方へのびる。46は低い脚部を有する壺で扁平な胴部は強く張り、口縁部が外反して開く小型の壺である。47は袋状の口縁の壺である。48は球形に近い胴部から短い口縁部がのびる小型の壺で、外面下半はケズリが施される。49は胴部が球形に近く、畿内系の小型の広口壺の可能性があり、外面に非常に細かいミガキを施す。50～53は壺の底部である。

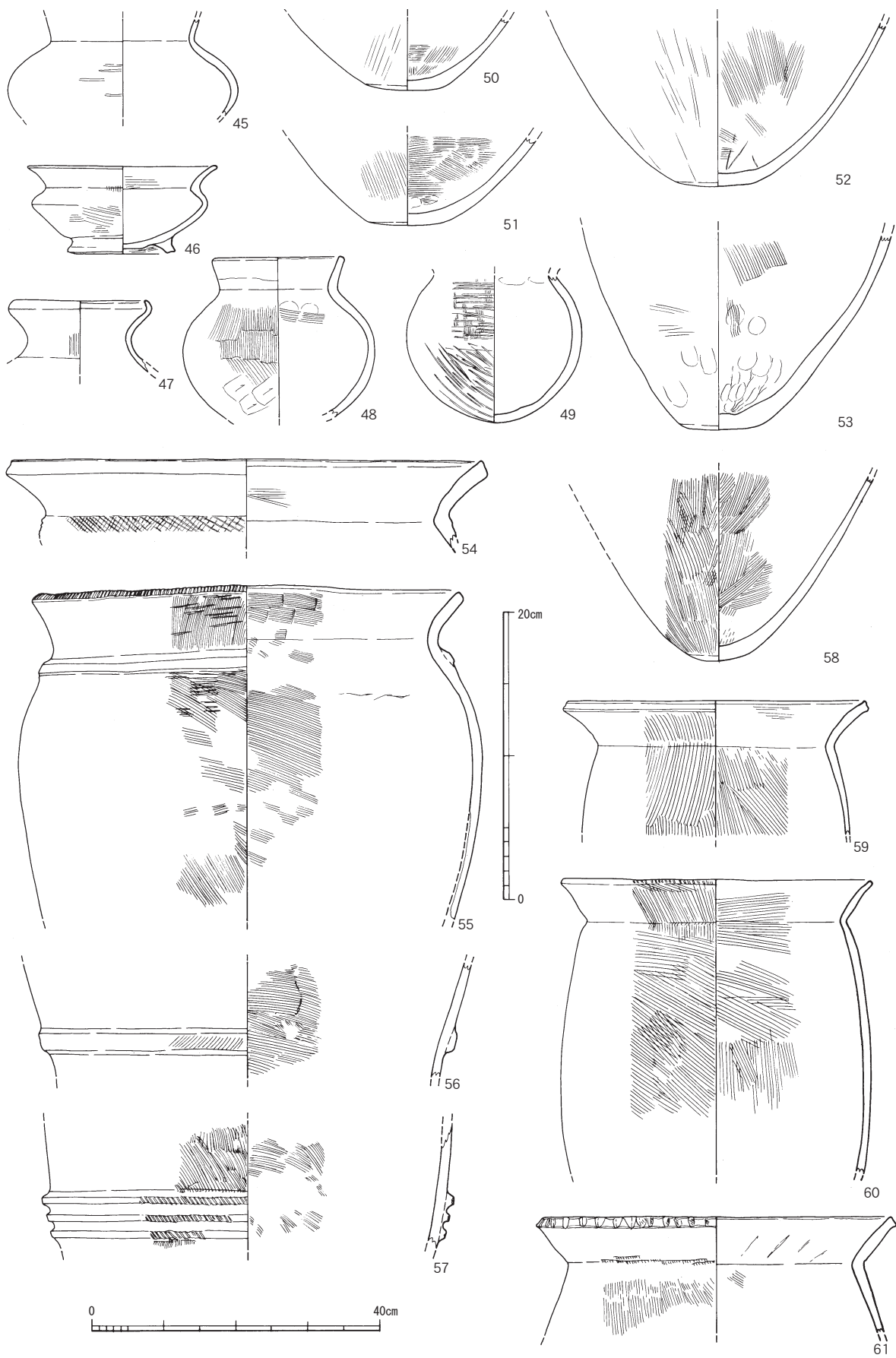
54～83は甕である。54～58は大型の甕である。54は頸基部に幅広で低い突帯を廻らせ、格子状にキザミを付す。55は頸基部が緩やかに屈曲して口縁部が開き、口唇部にはキザミを付す。



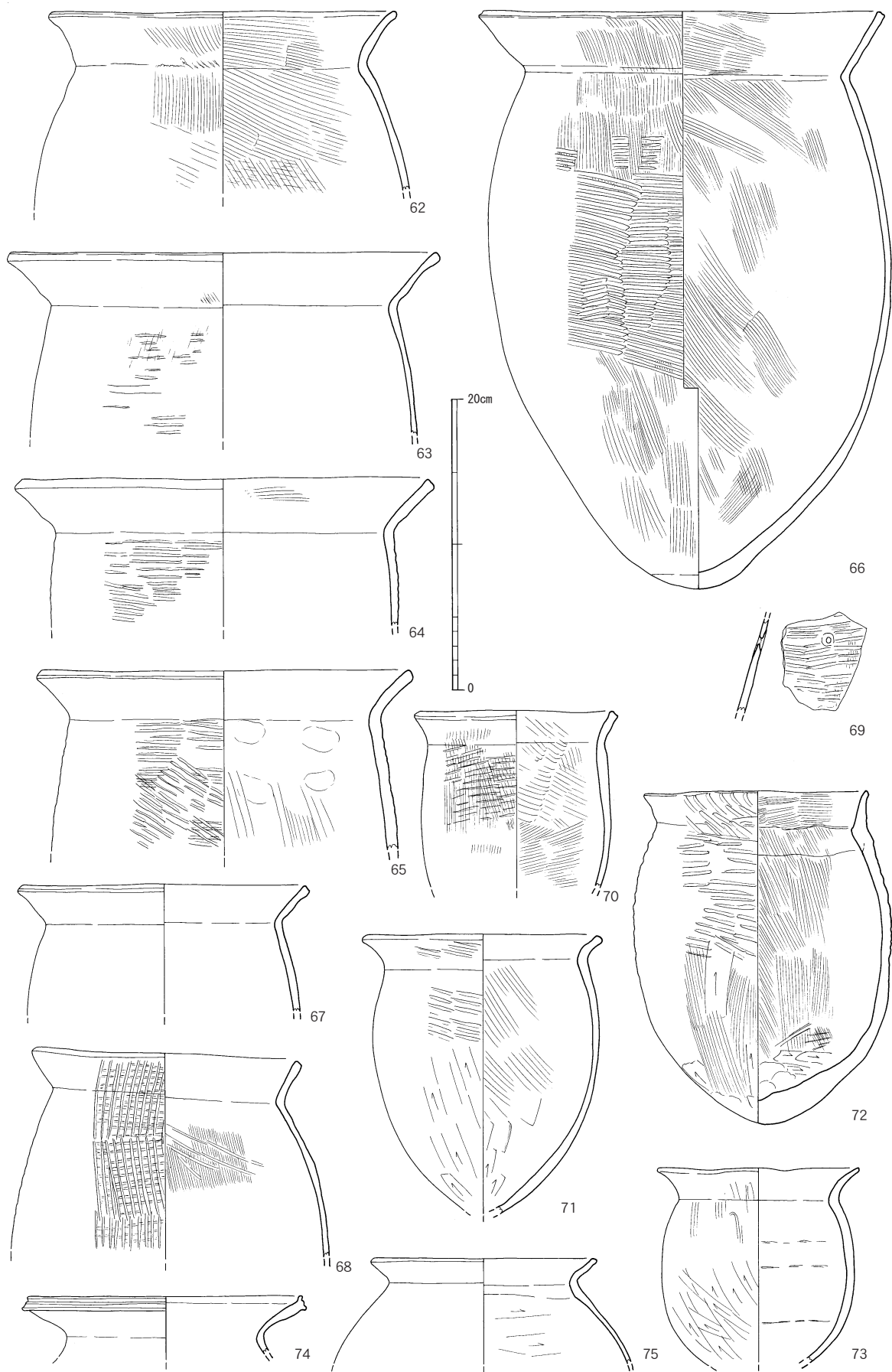
第79図 I b区西側包含層出土土器実測図① (1~7は1/8、他は1/4)



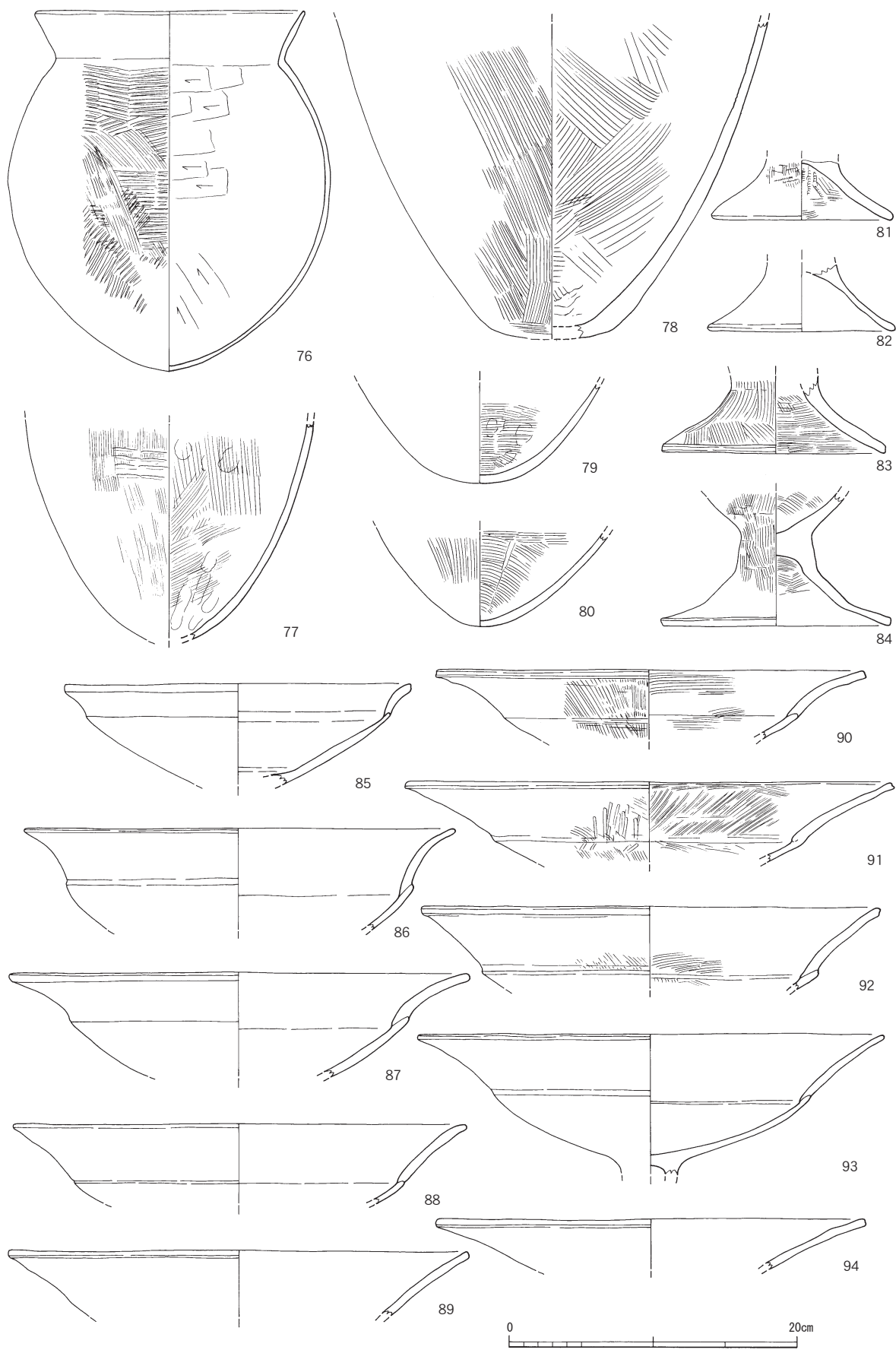
第 80 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图② (1/4)



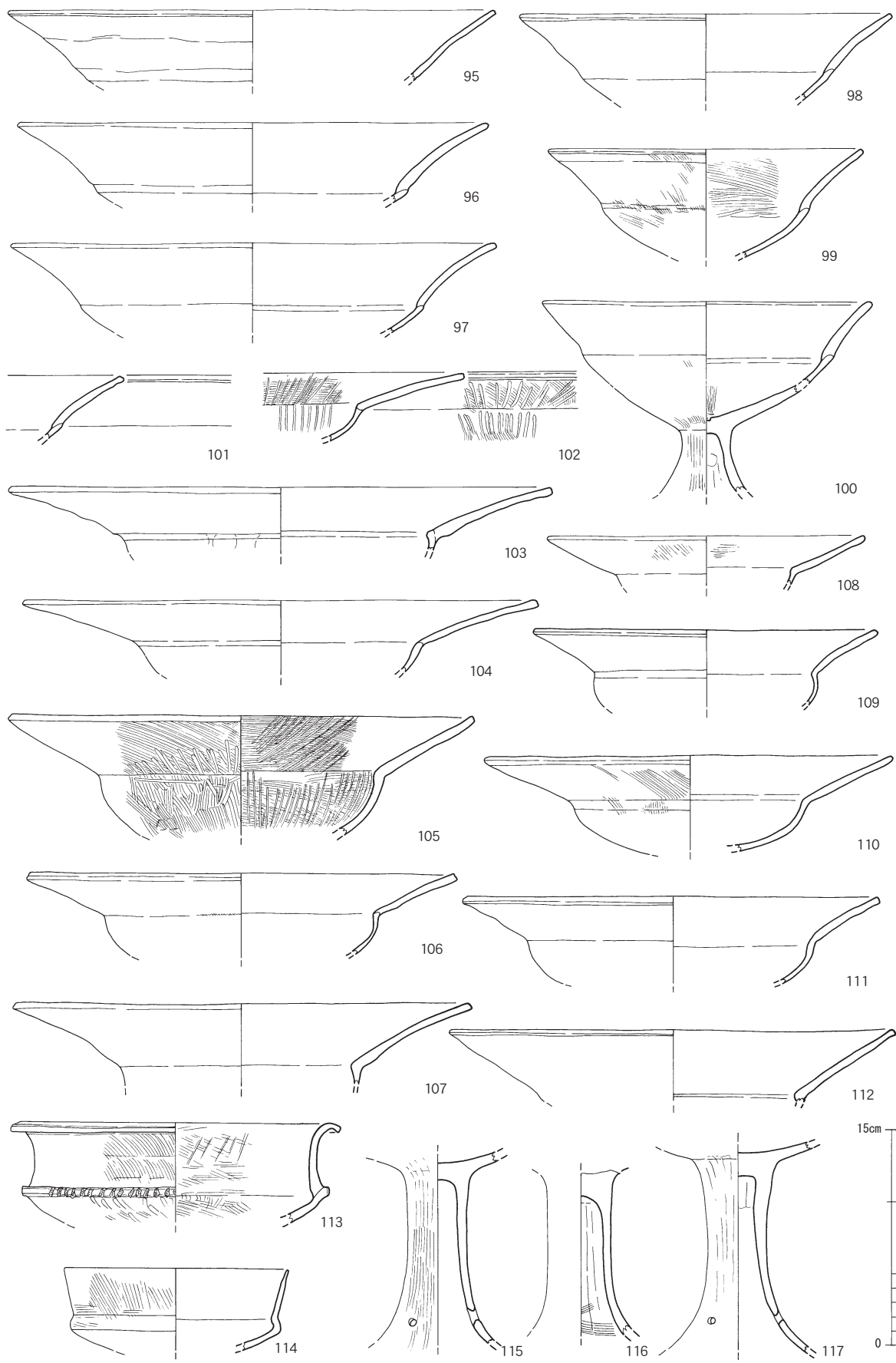
第 81 図 I b 区西側包含層出土土器実測図③ (54 ~ 58 は 1/8、他は 1/4)



第 82 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图④ (1/4)



第 83 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图⑤ (1/4)



第 84 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图⑥ (1/4)

肩部には低い突帯が廻る。56・57は胴下部で、56はキザミを付す断面台形の突帯が1条廻り、57はキザミを付す3条の突帯が廻る。58は底部である。59～73は在地系甕である。61は口縁部にキザミを付す。66は胴部中位にタタキが密に残存する。68は横位・縦位のタタキがともに見られる。69は胴部片で小さな穿孔が見られる。70～73は小型の甕で、口縁部は短い。72は口縁部は短く、頸基部の屈曲も緩やかである。73の口縁部は外反して開き、胴部下半はケズリを施す。74は口唇部の幅が広がって凹線が廻り、瀬戸内系の甕と考えられる。75は布留系甕である。76は庄内系の甕である。77～84は甕の底部である。77～79は在地系である。80は畿内五様式系である。81～84は中部九州系の脚部を有する甕である。

85～131は高杯である。85～101は下半が内湾して立ち上がり、上半が外反して開く高杯杯部である。85は屈曲部より上部の口縁部は短く立ち上がる。91は密に暗文が施される。99・100は口径がやや小さく、立ち上がりのやや強い杯部である。102～112は下部が内湾して立ち上がり、口縁部は屈曲して直線的に開く高杯杯部である。102・105は密に暗文が施される。113は下部があまり立ち上がらず、上部は直立して立ち上がり、口縁端部付近は強く外反する高杯杯部である。上下部の接合部付近にはキザミを付す。114の下半は立ち上がりがわずかなために扁平で、口縁部はやや外側に立ち上がる高杯の杯部である。115～131は脚部である。115・117・118・123・125・128・130は3箇所穿孔を施すことが判別可能である。125はやや低脚で、126～131は非常に低い脚部である。

132～176は鉢である。132～137は素口縁のやや小型の鉢で口縁部が内湾して立ち上がるものが多い。133の口縁端部はわずかに内側へ傾く。134はやや縦長の器形で口縁端部付近はわずかに内側へ傾く。138～144は中程度の大きさの素口縁の鉢である。138・139は外面下半にケズリを施す。142はやや縦長の器形で口縁端部付近はわずかに屈曲する。145は非常に浅く椀状の器形のものである。146～149は大型の素口縁の鉢である。149は焼成後の内面からの穿孔を施し、外面口縁部付近にはタタキが残存する。150は胴部が緩やかに立ち上がり、短い口縁部がわずかに外側に屈曲する鉢である。151は胴部が強く内湾して立ち上がり、短い口縁部は外側へ屈曲する。152・153は扁平な胴部が張り、やや短い口縁部が外側上方へ直線的にのびる鉢である。154～156は扁平でやや張る胴部から長い口縁部が外反して開く鉢である。157は短い口縁部が外側へ屈曲する大型の鉢である。158・159は扁平で張る胴部からやや外側の上方へ口縁部がのびる小型の鉢である。160～175は脚部を有する鉢である。160は口縁部がわずかに外側へ屈曲する。161は小型で素口縁である。161～164はやや縦長の器形となると考えられる。165は口縁部が屈曲して外側へのびる。166～175は脚部である。167・169・170・172は穿孔が残存する。168は体部と脚部の接合部外面に低い突帯状の隆起が見られる。176は厚手で粗雑なつくりの鉢である。

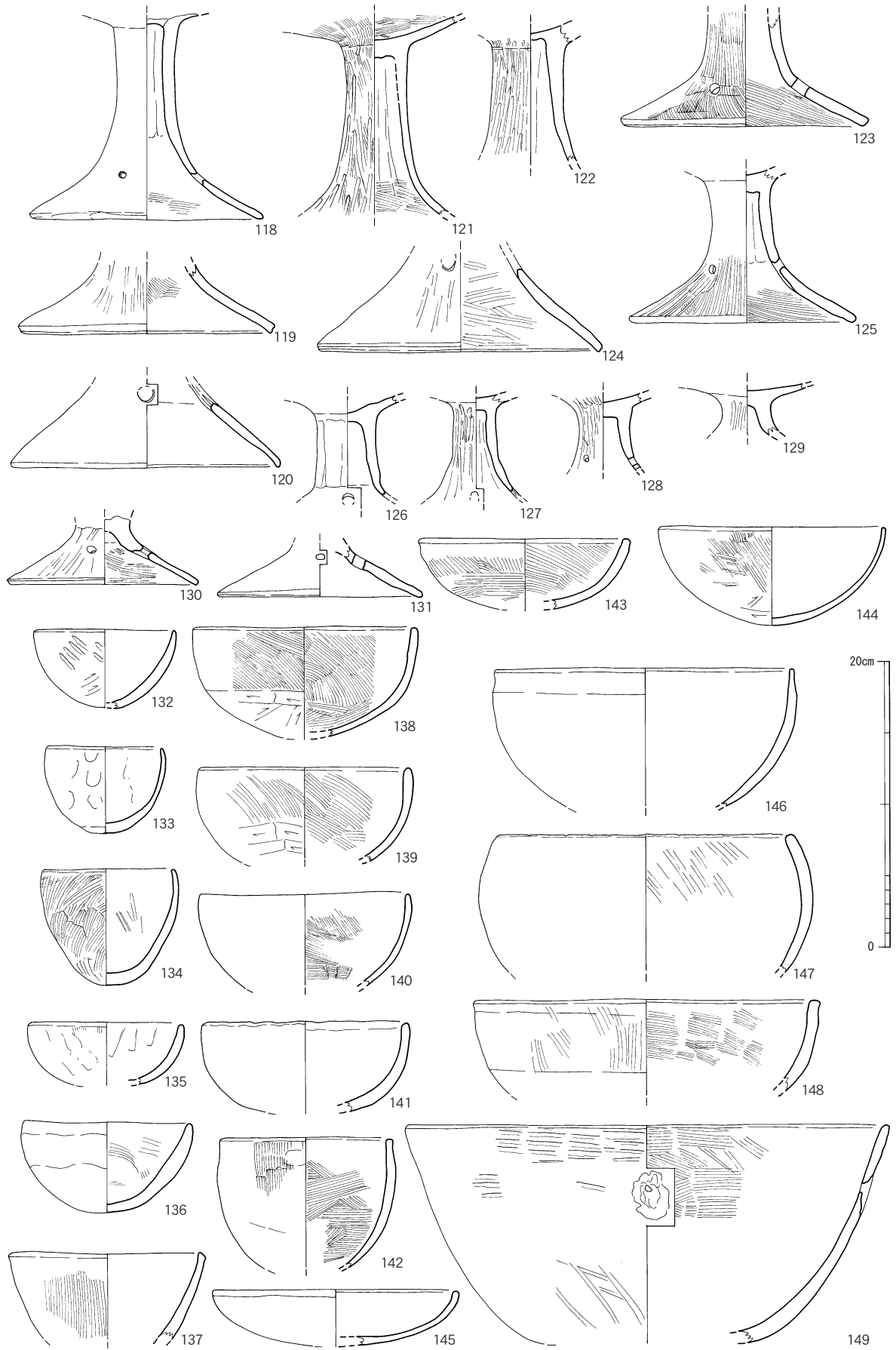
177～187は器台である。177・178は上部で強くくびれ口縁部が開く。179は外面にタタキが残存する。180～187は方形の透かし孔を有する器台で、くびれ部に凹線、ハケ目や沈線による平行文の文様帯が残存するものが多く、181はM字状の突帯が廻る。

188～190は鉢状の器形の手づくねによる土器である。

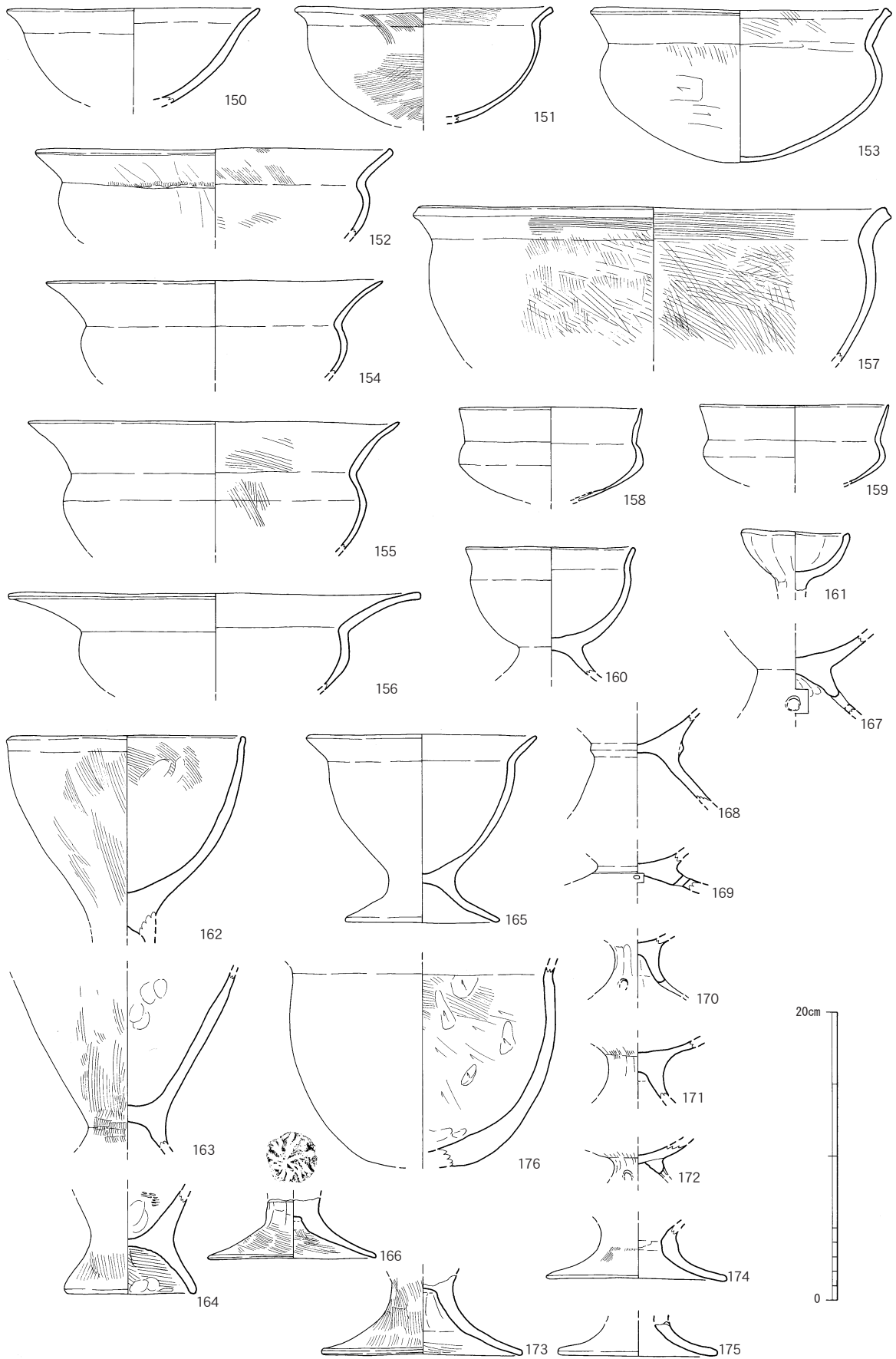
191・192は土製円盤で、表裏面ともにハケが残存する。

193～196は土師器甕の牛角状の把手である。197は土師器甕の下端部と考えられる。

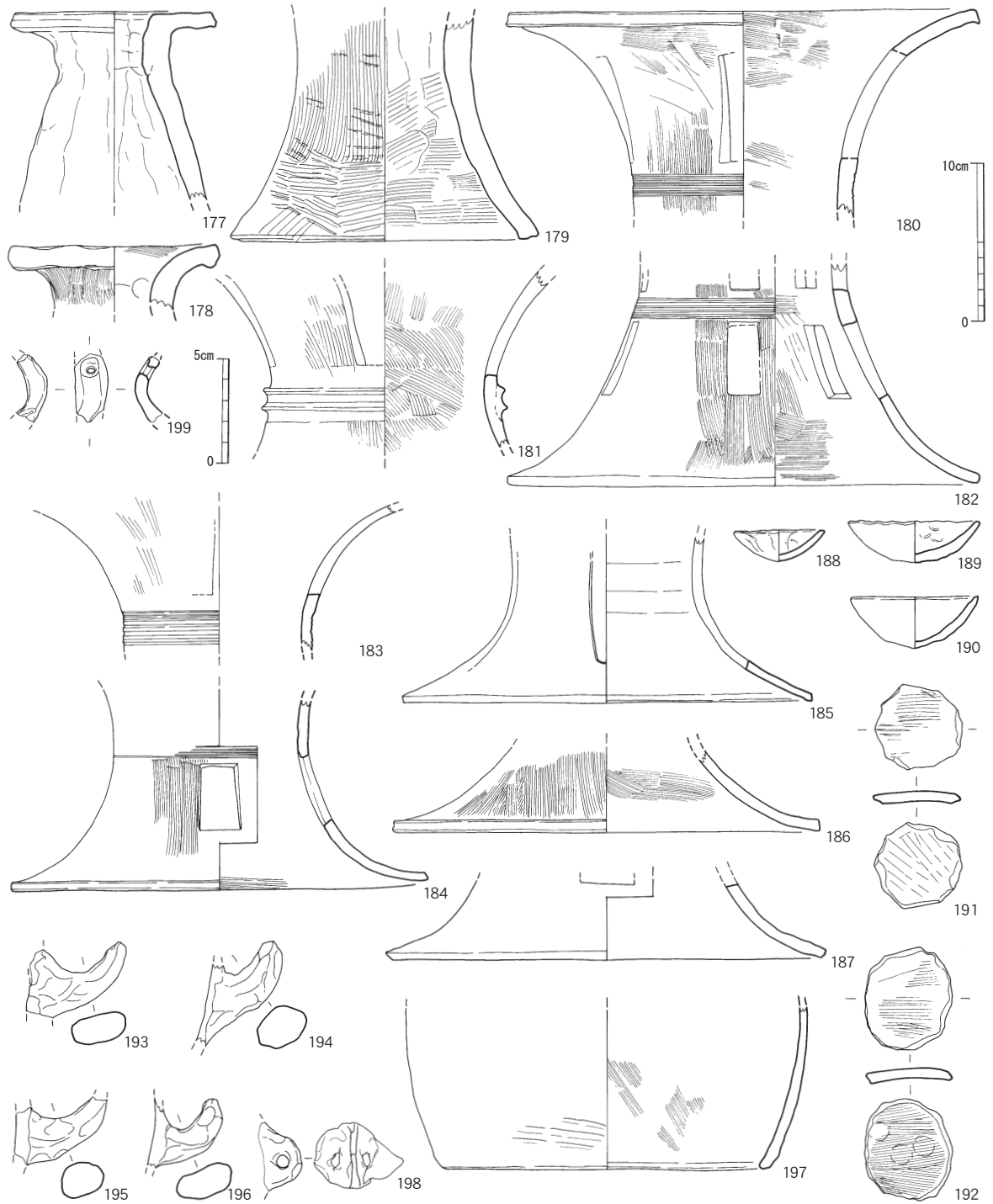
198は瓦質土器茶釜の把手部である。



第 85 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图⑦ (1/4)



第 86 图 I b 区西侧包含层出土土器实测图⑧ (1/4)

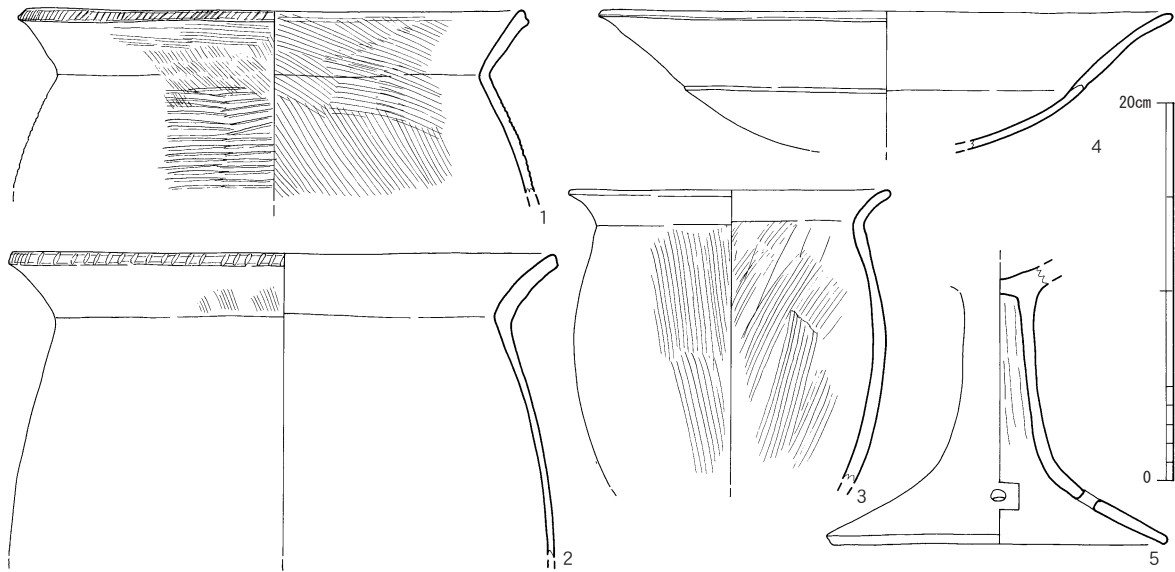


第 87 図 I b 区西側包含層出土土器実測図⑨ (199 は 1/3、他は 1/4)

199 は土製品で、大きく反った形状をしており、穿孔を施すが、両端部が欠失しており、全体の形状は不明である。

I b 区東側包含層出土土器 (第 88 図 1 ~ 5)

1 号落ち込みの東側で包含層を掘削して 40 号土坑が検出されたが、その際に包含層から出土した土器について以下にまとめる。



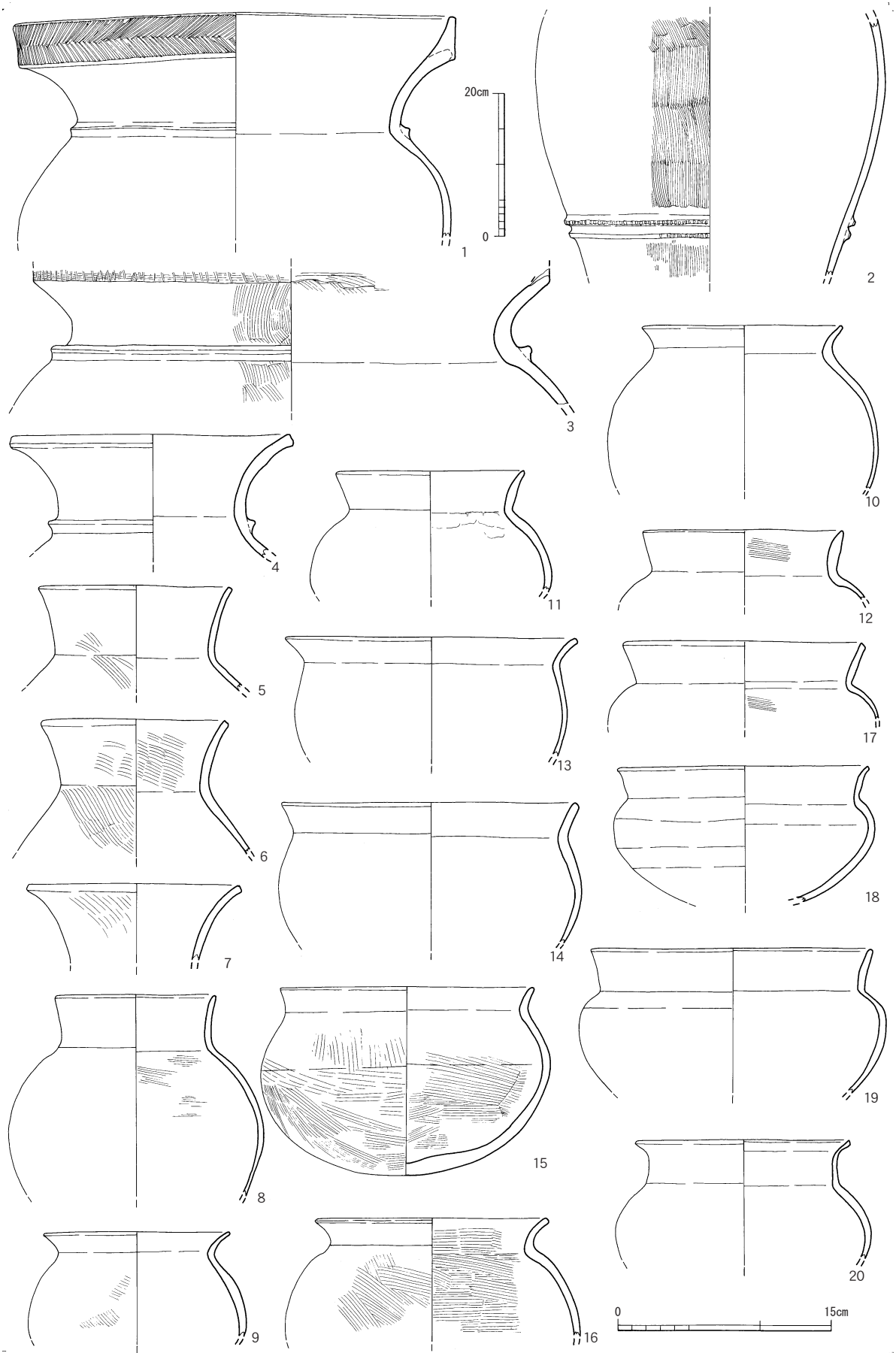
第 88 図 I b 区東側包含層出土土器実測図 (1/4)

1は在地系の甕で、外面には密にタタキが施され口唇部にキザミを付す。2は在地系の甕で口唇部にキザミを付す。3は在地系の小型の甕である。4は高杯の杯部で下半は内湾して立ち上がり、上半は外反して開く。5は高杯の脚部である。

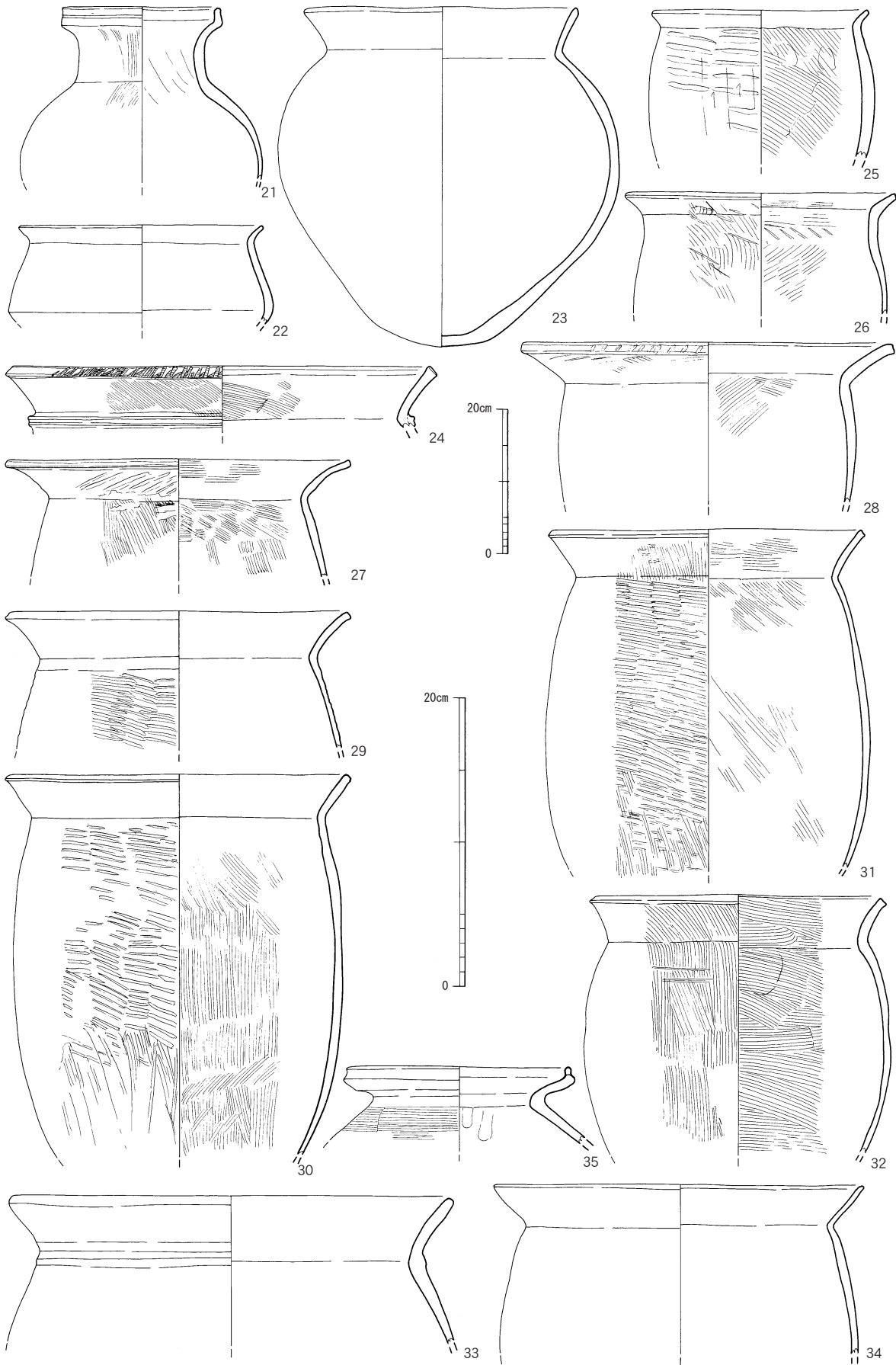
I c 区包含層出土土器 (図版 34、第 89～91 図 1～51)

I c 区西半の調査時に、検出面で遺構は確認できなかったが、土器が多量に出土することもあり、特に土器が集中する部分について、再度遺構の有無と礎盤の広がりも併せて確認するためにトレンチを掘削した。このトレンチをはじめ周辺の包含層から出土した多量の土器の中には検出できなかった掘立柱建物跡の柱穴の埋土中ものが含まれる可能性もあるが、包含層出土土器として以下にまとめる。

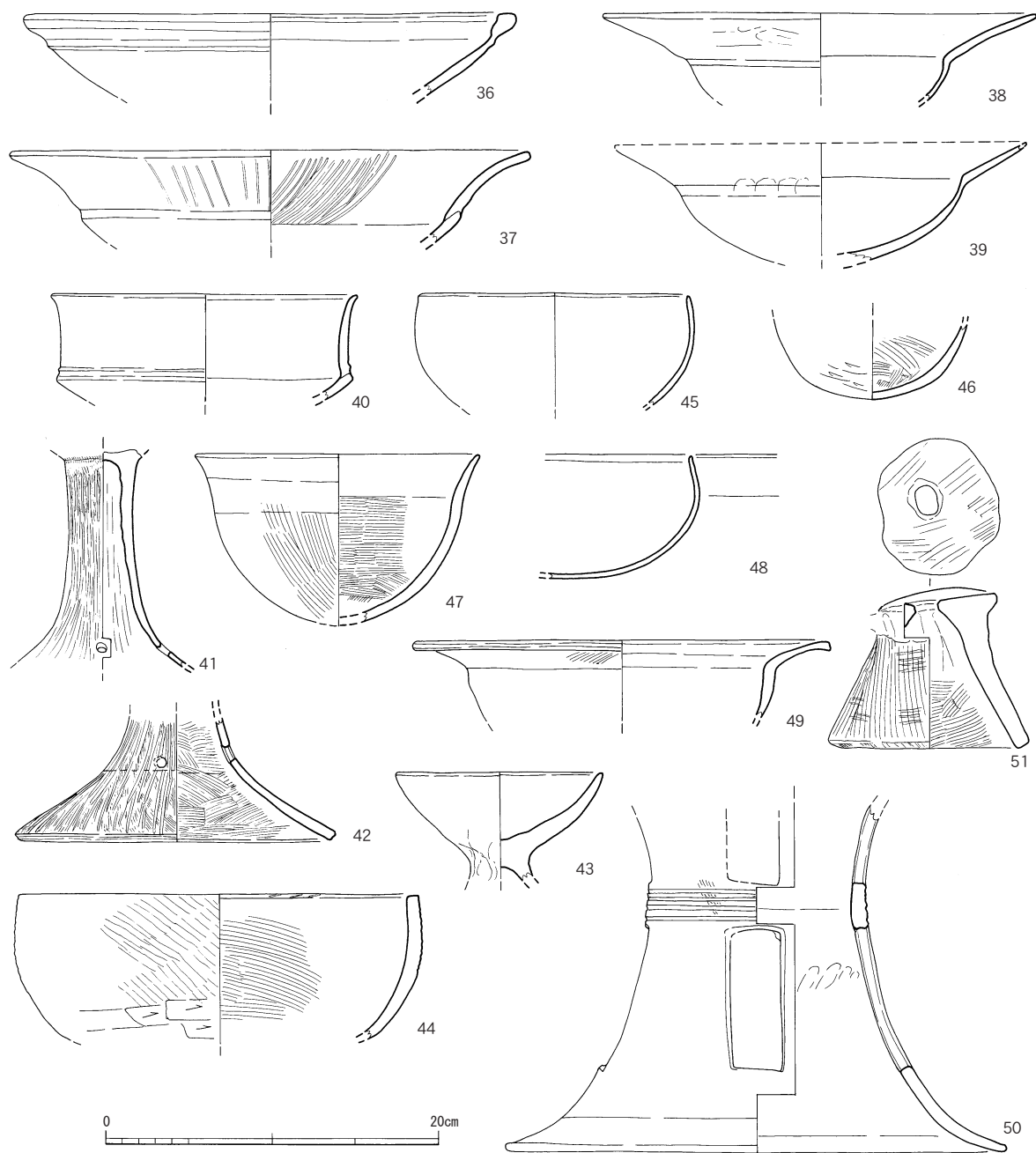
1～23は壺である。1～3は大型の壺である。1は頸基部が強くくびれ、口縁下部は外反して開き、上方に立ち上がる口縁上部が付加される。口縁上部の外面は綾杉文状にキザミが密に施される。頸基部には断面三角形の突帯が廻る。2は胴部下部にキザミが付される断面台形の突帯が2条廻る。3は口縁上部は剥離して欠失し、接合部外面にキザミが残る。頸基部に断面三角形の突帯が廻る。4は頸基部が強くくびれ、口縁部は外反して開く広口壺で、頸基部には断面三角形の突帯が廻る。5・6はなで肩で口縁部はやや外側の上方へのびる壺である。7は外反して開く壺の口縁部である。8は肩部が張り、口縁部が上方へのびる壺である。9～16は胴部が張り短い口縁部がやや外側にのびる短頸壺である。9・10は胴部が球形に近く強く張る。11・12は口縁部があまり外側に開かずへのびる。13～15は胴部が扁球形に近く頸基部はあまりくびれず太い。16は胴部の張りが強く、頸基部が強くくびれ、口縁部はやや強く外反する。17～19は胴部が強く張り、頸基部で強く屈曲して口縁部がやや外側の上方へのびる壺である。20は胴部が強く張り、頸基部で屈曲して口縁部は上方へのびて端部付近で外反する壺である。21は胴部が張り、頸基部から上方にある程度立ち上がって外反して開き、上部に直上へのびる短い口縁部が付加される。在地系複合口縁壺の一種と考えられる。22は下膨れの器形で非常に短い口縁部が外反する短頸壺である。23は太い頸



第 89 图 I c 区包含層出土土器実測図① (1 ~ 3 は 1/8、他は 1/4)



第90図 I c区包含層出土土器実測図② (24のみ1/8、他は1/4)



第91図 I c区包含層出土土器実測図③ (1/4)

基部から口縁部がやや外側の上方へのびる壺で、畿内系広口壺の可能性はある。

24～35は甕である。34は大型の壺で、口唇部にキザミを付し、頸基部に突帯が廻る。25～34は在地系の甕である。25・26はやや小型で口縁部は短い。27・28は口縁部がやや強く屈曲して、長くのびる。28は口唇部にキザミを付す。29～31は外面にタタキが密に残存する。33は頸基部に低い突帯が廻る。34は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。35は頸基部が強くとびれ、口縁部は強く屈曲して外側にのび、直上にのびる短い上部が付加され、瀬戸内系と考えられる。肩部にはハケ状の平行文が見られる。

36～43は高杯である。36は口縁部が上方へ屈曲し、端部が肥厚する高杯杯部である。37は下

部が内湾して立ち上がり、上部は外反して開く高杯杯部である。内外面ともに暗文が施される。38・39は高杯杯部で下半は内湾して立ち上がり、口縁部は屈曲して直線的にのびる。40は高杯杯部で下部はあまり立ち上がらず、上部は直立気味に立ち上がり口縁端部がわずかに外反する。上下半の接合部には凹線が廻る。41・42は高杯脚部である。ともに外面にミガキが残存する。43は畿内系の低脚杯で、素口縁である。

44～49は鉢である。44は素口縁のやや大型の鉢で、外面上部はタタキが密に施され、下部ではタタキの後にケズリが施される。45は素口縁の鉢である。46の外底部付近はケズリが施される。47は口縁部がやや外側へ緩やかに屈曲する。48は胴部がやや張り口縁部がやや内側へ立ち上がり、端部が直上へ屈曲する。49は胴部が内湾して立ち上がり、口縁部が強く屈曲して外反しながら開く鉢である。

50は上下半それぞれに方形の透かし孔が残存する器台で、上下の孔の間のくびれ部分には凹線の文様帯がある。51は受部が傾斜し、上方先端が嘴状に突出する支脚である。外面はタタキの後にハケが施される。

(9) I区その他の出土土器 (第92・93図1～43)

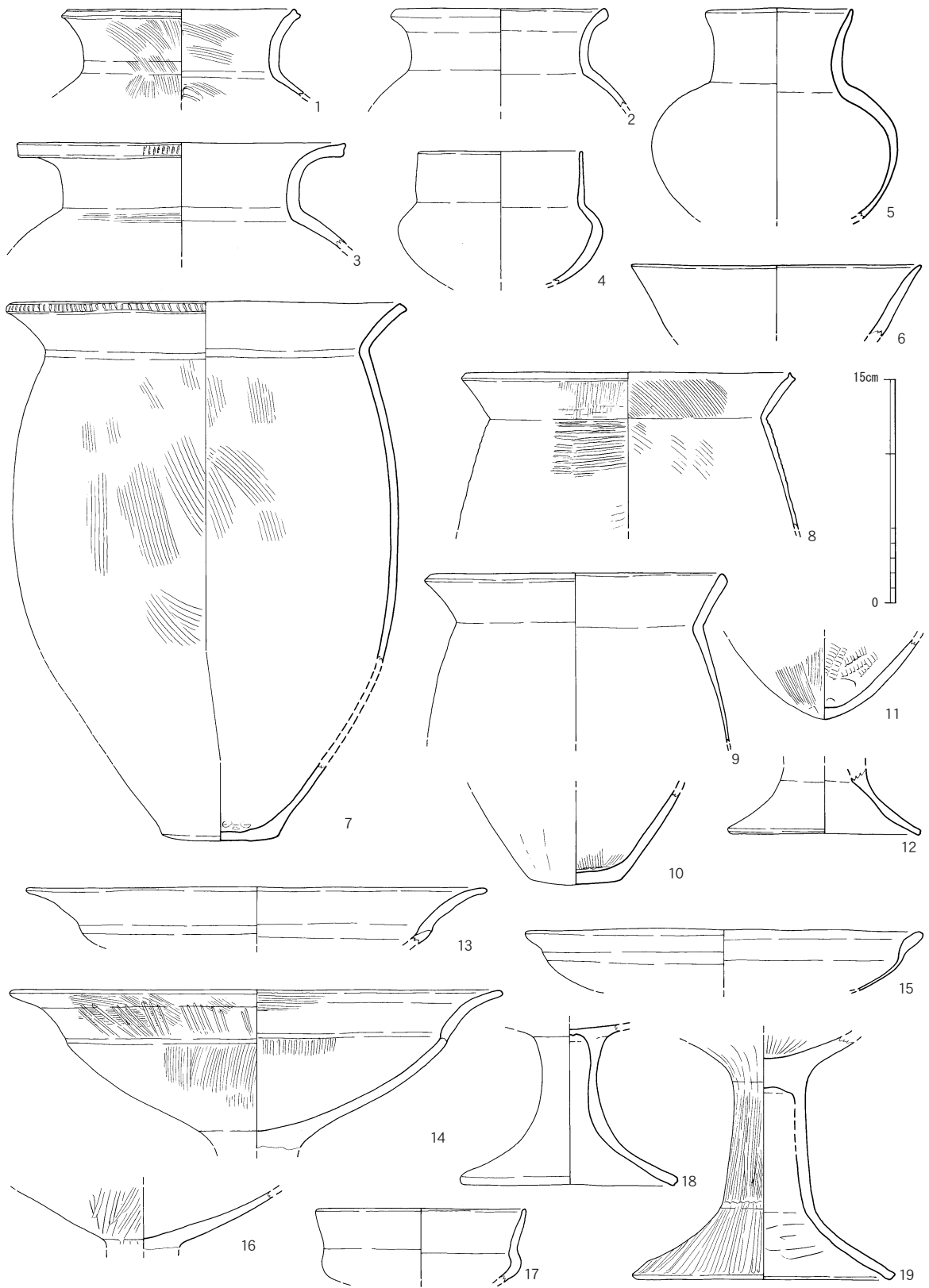
I区における包含層・側溝からの出土、および検出時・清掃時等で出土した土器について以下にまとめる。

1・2は頸基部がくびれ口縁部がやや外反して開く壺である。3は頸基部が強くくびれ、口縁部は強く外反して開く広口壺で口唇部にキザミを付す。4はわずかにくびれる頸基部から口縁部が直上にのびる小型の直口壺である。5は扁球形の胴部からわずかに外反する口縁部が上方にのびる壺である。6は二重口縁壺の口縁上部である。8～9は在地系甕である。7は口唇部にキザミを付す。10～12は甕の底部である。10はわずかにレンズ状で、11は尖底である。13・14は高杯の杯部で下半は内湾して立ち上がり、上半は外反して開く。14は上半外面に暗文を施す。15は口縁部が上方に屈曲し端部が肥厚する高杯の杯部である。16は高杯の杯部で外面にミガキが施される。17は高杯の杯部で、下部は内湾してやや張り、上部はやや外側の上方にのびる。18・19は高杯脚部である。19の裾部はミガキを施し、上半はケズリの後にハケを施す。20～24は素口縁の鉢である。22は外面にタタキが残存し、狭い平底である。23は口縁部が内湾し、肥厚して口唇部は面をなす。24の口縁部は内湾する。25～29は口縁部が屈曲して外側へのびる鉢である。29の口縁部の屈曲はわずかである。30は扁平な器形の鉢で、胴部がわずかに張って口縁部はやや外側の上方へのびる。31は脚部を有する鉢である。32は上下半それぞれに方形の透かし孔が残存し、その間に沈線による文様帯が見られる。

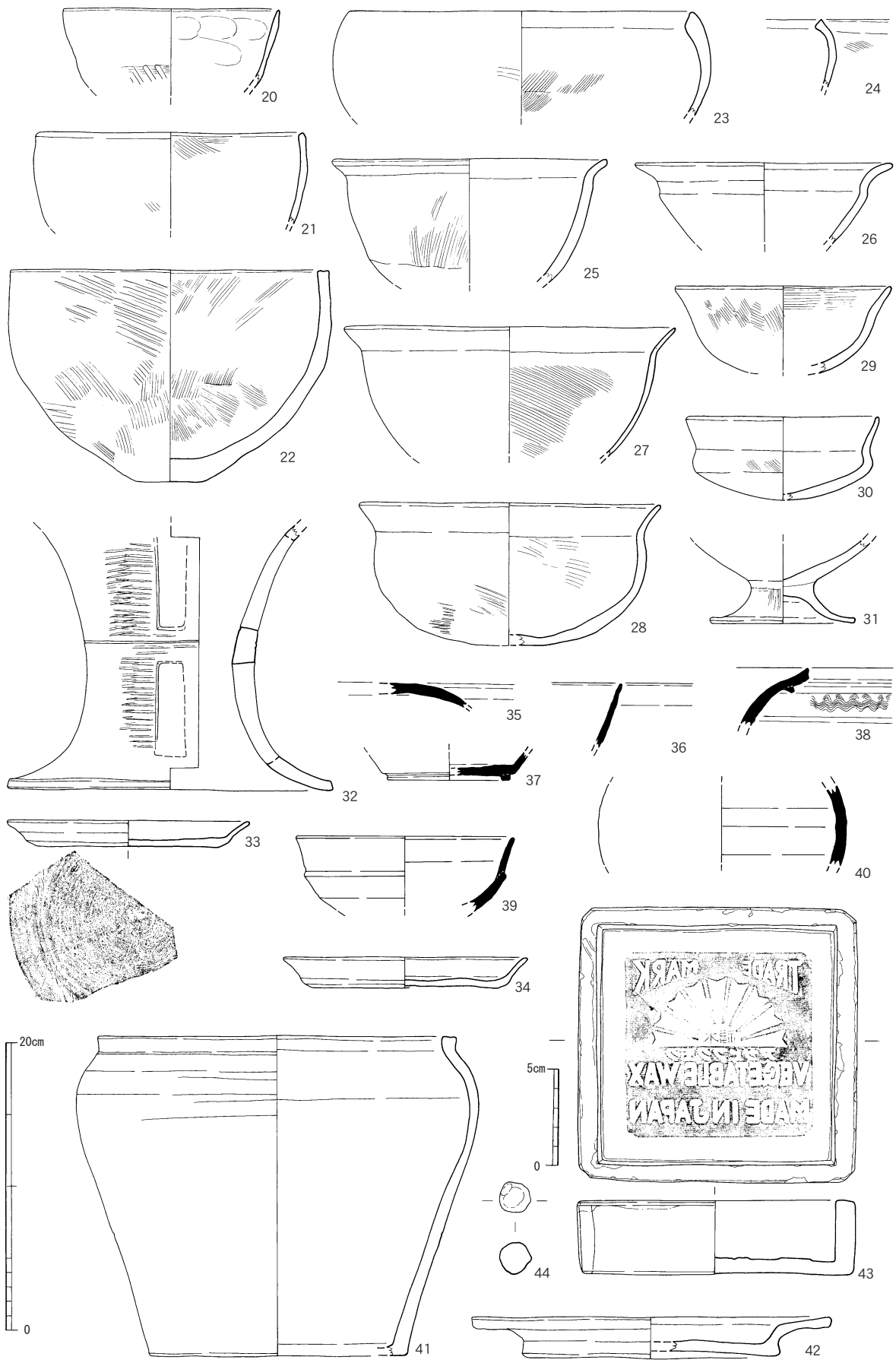
33・34は土師器皿である。33は口径16.8cm、器高1.9cmで、外底部は回転ヘラケズリを施しヘラ記号が見られる。34は口径17.0cm、器高2.0cmで、外底部にはヘラケズリを施す。

35～40は須恵器である。35は杯蓋の天井部である。36は杯身の口縁部である。37は高台を有する杯身底部である。38は外反して開く甕の口縁部である。外面に突帯が1条廻り、波状文が施される。39は高杯の杯部で、中位で屈曲する。40は瓶の胴部である。

41は素焼きの鉢で胴部は上位でやや張り、短い口縁部は上方へ屈曲する。42は素焼きの蓋である。41・42は納骨堂跡地の攪乱から出土しており、蔵骨器と考えられる。43は融解したワック



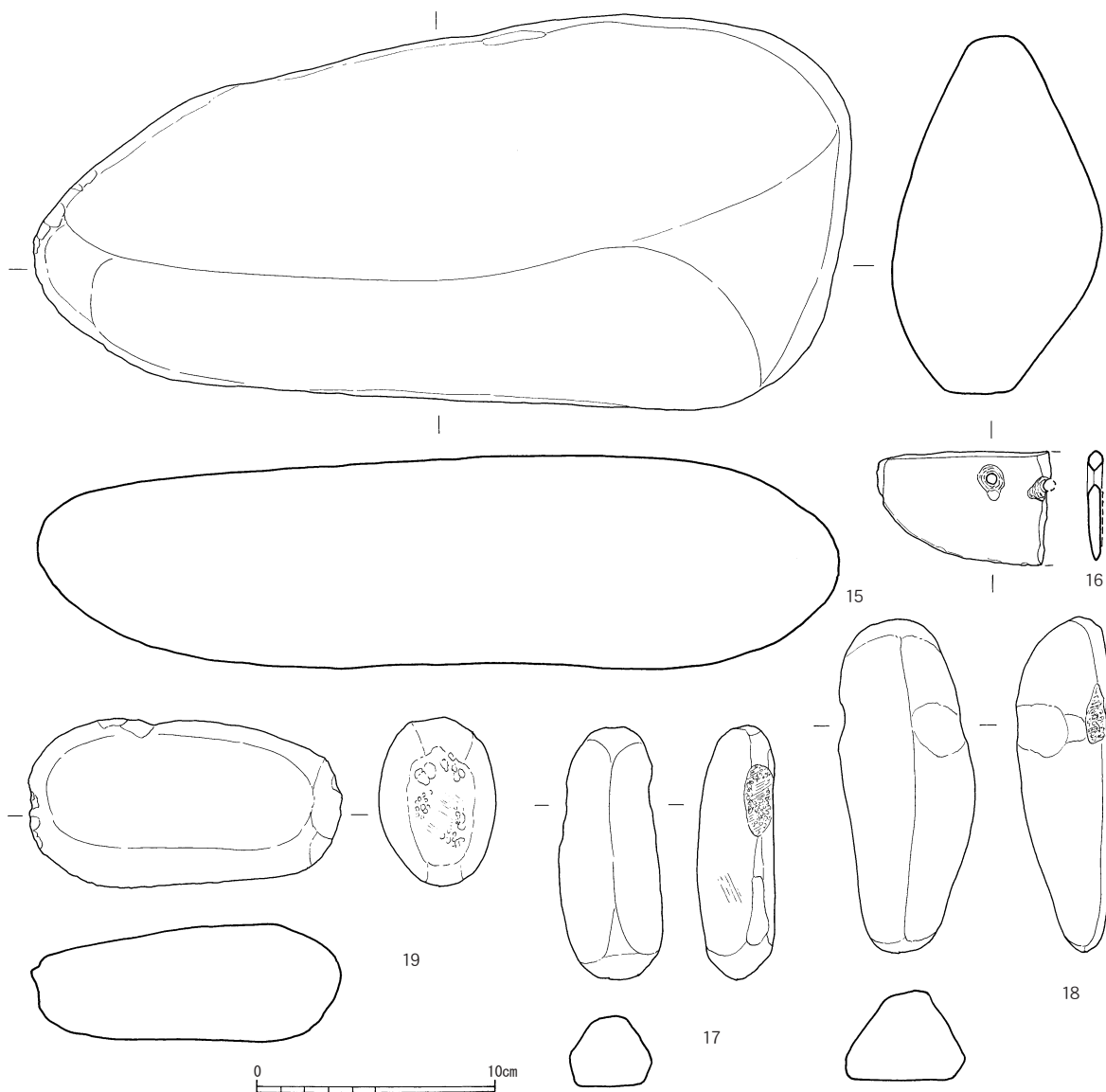
第92図 I区ピットおよびその他の出土土器実測図① (1/4)



第93図 I区ピットおよびその他の出土土器実測図② (44のみ1/3、他は1/4)



第94图 I区出土石器实测图① (1/3)



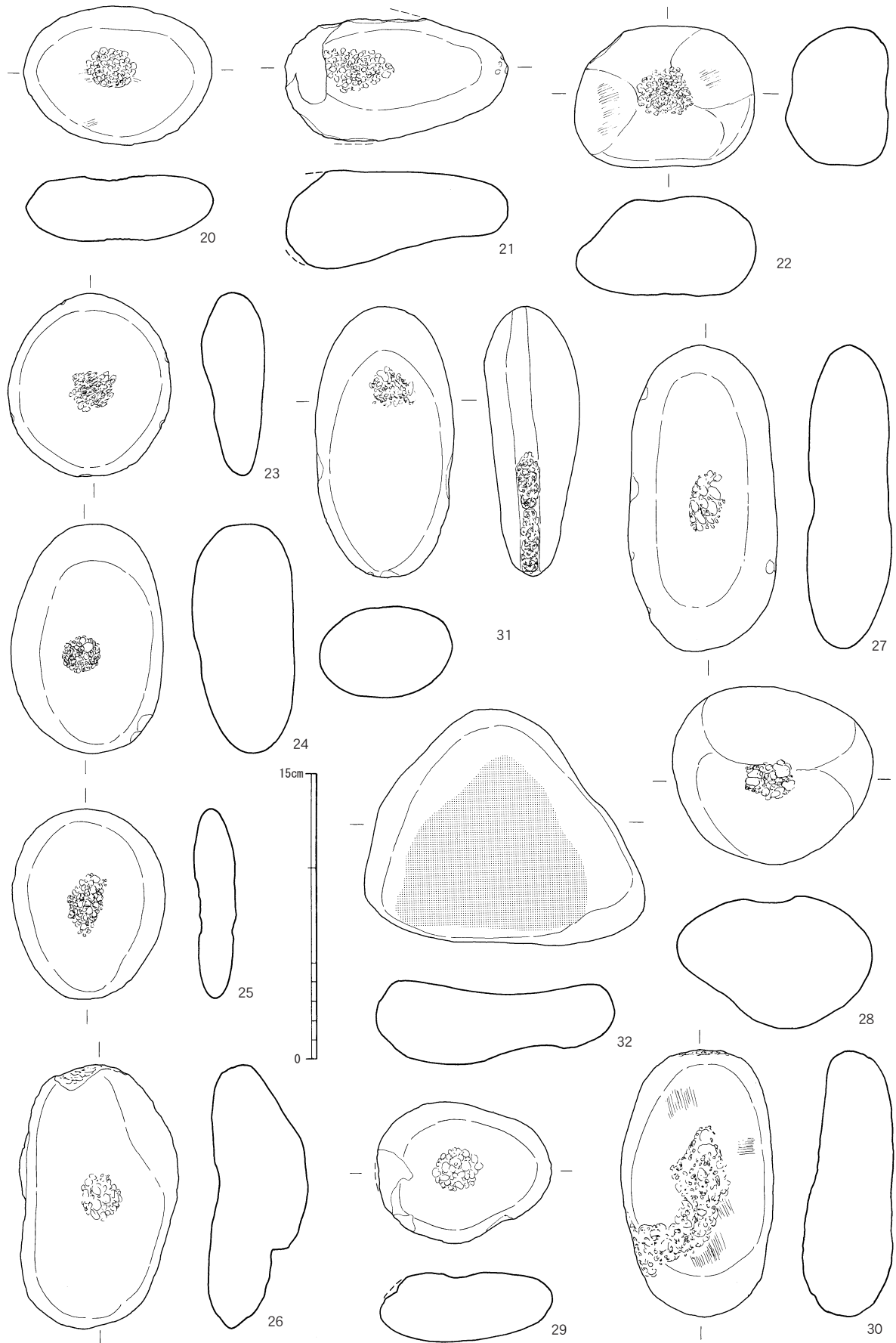
第95図 I区出土石器実測図② (1/3)

スを流し込んで凝固するための鋳型である。外面は丁寧なケズリで調整されており、内面は黄釉でコーティングされている。44は土玉で径1.6cm程度である。

(10) I区出土石器 (図版35、第94～96図1～32)

I区出土の石器を以下にまとめる。出土地点、法量や石材等は表4を参照されたい。

1～15は砥石である。1は大きく欠損しており、砥面は4面確認できる。2は欠損しており、4つの砥面が確認できる。3は扁平で表裏面と1側面が砥面として使用される。4は4つの砥面が残存しており、内3面の使用が著しい。5は表裏面がよく使用されており、側面も一部使用される。6は大きく欠損しており、砥面が3面残存する。7は大きく欠損しており、残存する砥面は1面のみである。8の残存する4つの砥面はともによく使用されており、内1面は凹みが生じている。9の残存する砥面は3面でともによく使用されており、非常に平滑である。10は残存する4つの



第 96 图 I 区出土石器实测图③ (1/3)

砥面が非常によく使用されている。11 は大きく欠損しており、表裏面と側面の一部が使用されている。12 は表裏面と 2 側面が非常によく使用されて平滑であり、表面に一部に研磨後に集中して埒打が加えられる。13 は 4 つの砥面が非常によく使用されており平滑である。14 は砥面が 4 面で、うち 1 側面の使用は顕著ではなく、残りの 3 面の使用は顕著で平滑である。15 は大型の砥石で、表裏面・両側面ともによく使用されており、平滑である。

16 は石包丁で大きく欠損し、欠損する孔の一部に埒打痕が残存し、完存する孔に紐ずれの可能性のある痕跡が見られる。

17 は磨石で、集中的に使用した側縁部が磨り減っている。18 は磨石で、部分的に集中して使用した側縁部が大きく磨り減っている。

19 は叩石で長軸両端部が使用されている。

20～31 は凹石である。20 は両面を使用しており、側縁を叩石としてわずかに使用した可能性がある。21 は 1 面のみわずかに使用しており、また長軸端部を強い力で叩石として使用して大きな打割が見られる。23 は両面を使用しているが、片面のみ顕著な使用で凹みが大きい。22 は片面のみ使用しており、側縁の一部を磨石として使用する。24 は片面のみわずかに使用する。25 は両面に使用痕が見られる。27 は片面のみ使用でやや細長い形状を呈す。28 は片面のみの使用で厚みのある形状を呈す。29 は片面のみの使用である。26 は片面の使用で、側縁端部片側を叩石として使用する。30 は両面を使用しており、側縁にも叩石として使われた痕跡が見られる。31 は片面をわずかに使用しており、側縁端部片側を叩石として使用する。

32 は凹面部の橙褐色の付着物を顔料石皿としたが、鉄分の沈着の可能性もある。

3 II 区の検出遺構と遺物

(1) II 区の概要

II 区は a・b 区に細分され、用地買収の進展状況から、発掘調査の着手時期は a 区で第 1 次調査の平成 17 年度末、b 区で第 2 次調査の平成 18 年度初期と若干の相違がある。しかし、結果的に調査区表土を同時に開削した状態で、並行して調査を実施することができた。調査前の II a 区は宅地、II b 区は一部の宅地以外は畑地であった。調査期間中に梅雨の時期を迎えるとともに、周辺の水田に水が入るため、外部からの浸水と排水の対策を講じる必要があった。そのため、水溜めと調査区表面の乾燥を兼ねて側溝およびトレンチを掘削した。特に II b 区の東側は水田と隣接し、北側は既存の水路があるため、排水路と大型の側溝を二重に巡らせた。II 区の中央部より南寄りには谷状に落ち込んでおり、その最深部で標高 2 m 弱、北側の最高所で標高 3 m 強という高低差が生じている。面積は 2450 m² である。遺構・遺物は大半が弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのもので、わずかながら古墳時代後期初頭までや中世のものも含まれる。

主な遺構は、I 区とほぼ同様な内容で、約 300 基の礎盤から 46 棟分の掘立柱建物跡の組み合わせを確認した。土坑は 25 基で、内 5 基は礎盤を検出する際にバックホーで当初の検出面より掘り下げていく際に確認した。しかし、これらは出土遺物等を見ても、他の土坑等と遺構面が異なるわけではなく、当初の検出面では色調や土質の区分が困難であったため把握できなかったものと考えられる。また、I 区と同様に当初土坑として扱っても、後に掘立柱建物跡の柱穴と判断したものは欠番とした。遺構がほとんど検出されなかった II a 区において、下層を確認するため

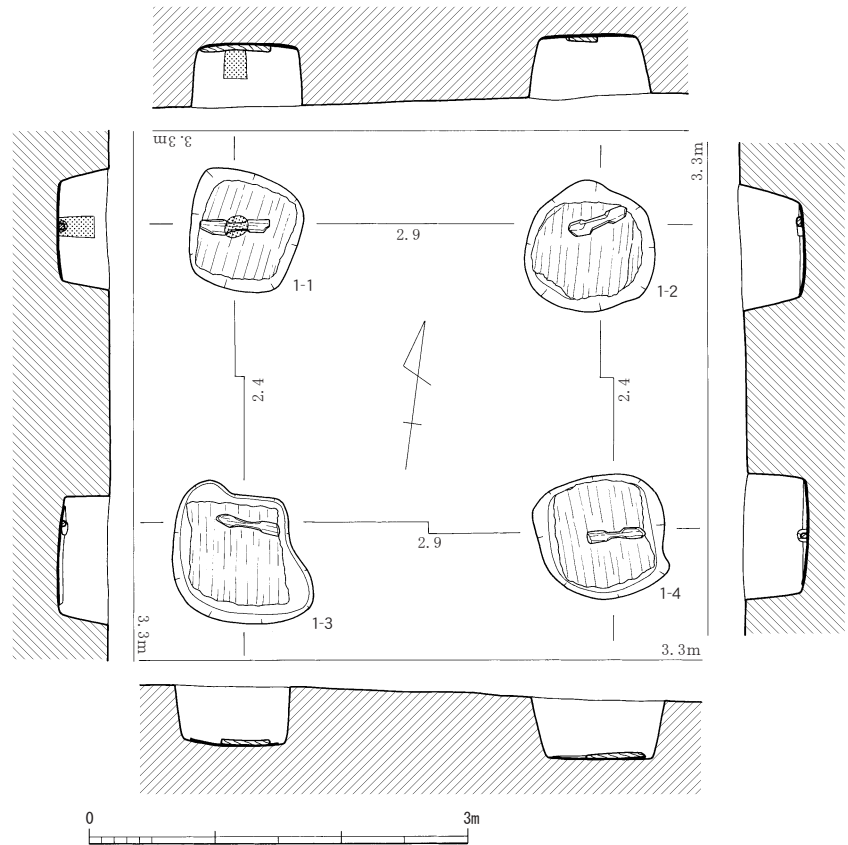




掘削した数箇所のトレンチの中で木質が密集する部分について、その範囲の確認のために掘削範囲を広げた周辺を「木質集中部」とした。他に溝1条、落ち込み5基を検出した。

(2) 掘立柱建物跡

Ⅱ区の掘立柱建物跡は、検出した約300基という多数の礎盤の相対的な位置関係から46棟分の組み合わせを把握した。少ないながら最初の検出面で柱穴の掘形を確認できたものもあり、1～3号建物については、全ての柱穴が検出面で確認できた上で、その組み



第98図 Ⅱ区1号掘立柱建物跡 (1/60)

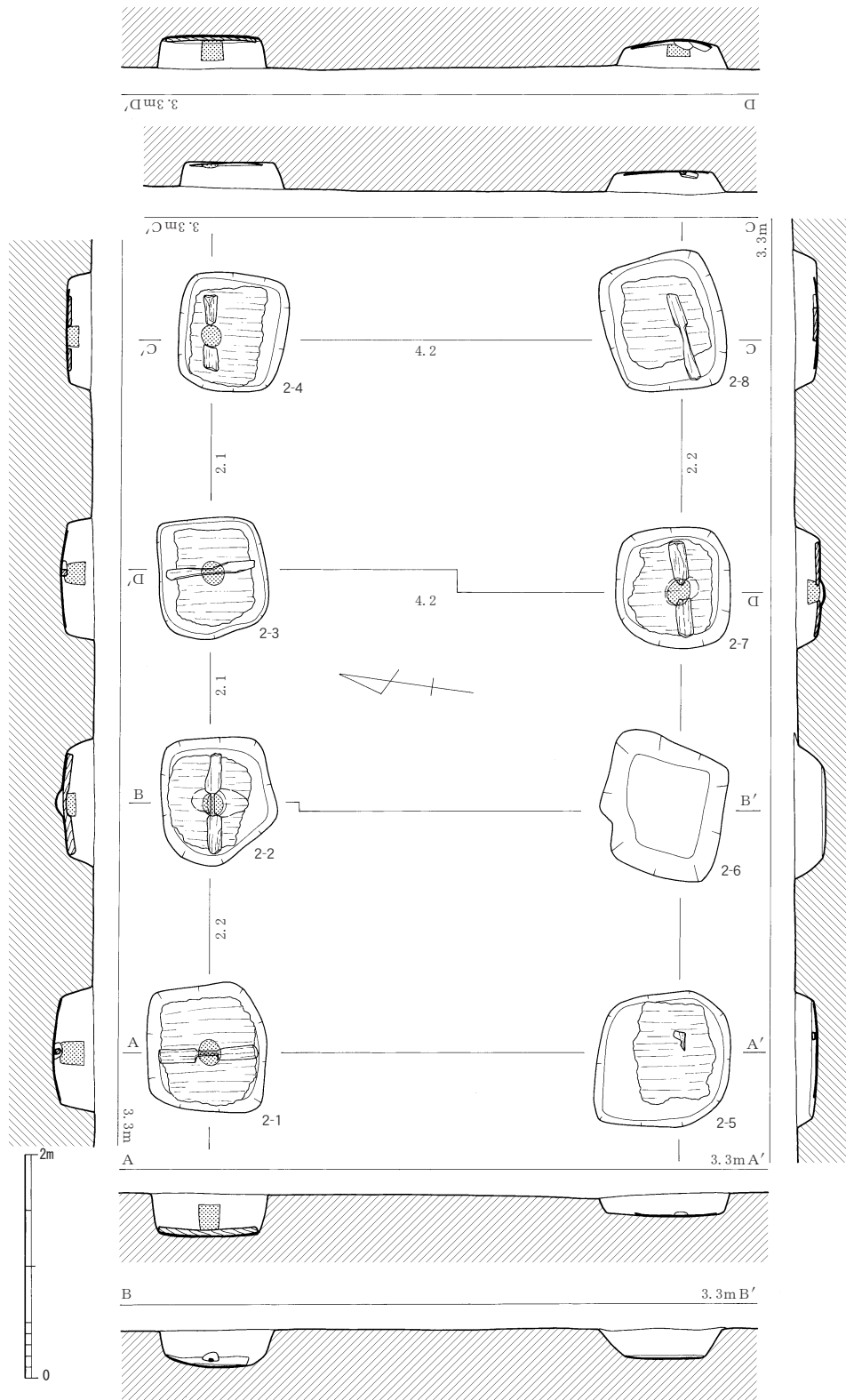
合わせも把握することができた。2・3号建物のみが3×1間で、他は1×1間もしくは2×1間の規模である。礎盤は北側のⅠ区から連続するようにして南側へ広がって分布する。谷部底付近で一旦途切れ、調査区南西端で再び確認できるようになる。Ⅱ区北側周辺や中央部西から南東方向へ密集して連なる部分は、多くの礎盤の組み合わせの対応関係から建物を把握し、組み合わせの確認できない礎盤は少なかった。一方、中央部東側では多数の礎盤が検出されたが、組み合わせを確認できたものは少数であった。

1号掘立柱建物跡 (図版37、第98図)

Ⅱ区北半の東側に位置し、1×1間の建物である。全ての柱穴を最初の検出面において確認することができ、また横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。北西側の柱穴では径18cm程度の柱痕が確認された。梁行2.4m、桁行2.9mを測り、床面積は7.0㎡程度となる。12・45号建物を切る。検出された柱穴は隅丸方形に近く、礎盤の形状も同様である。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器 (図版37、第102図1～10)

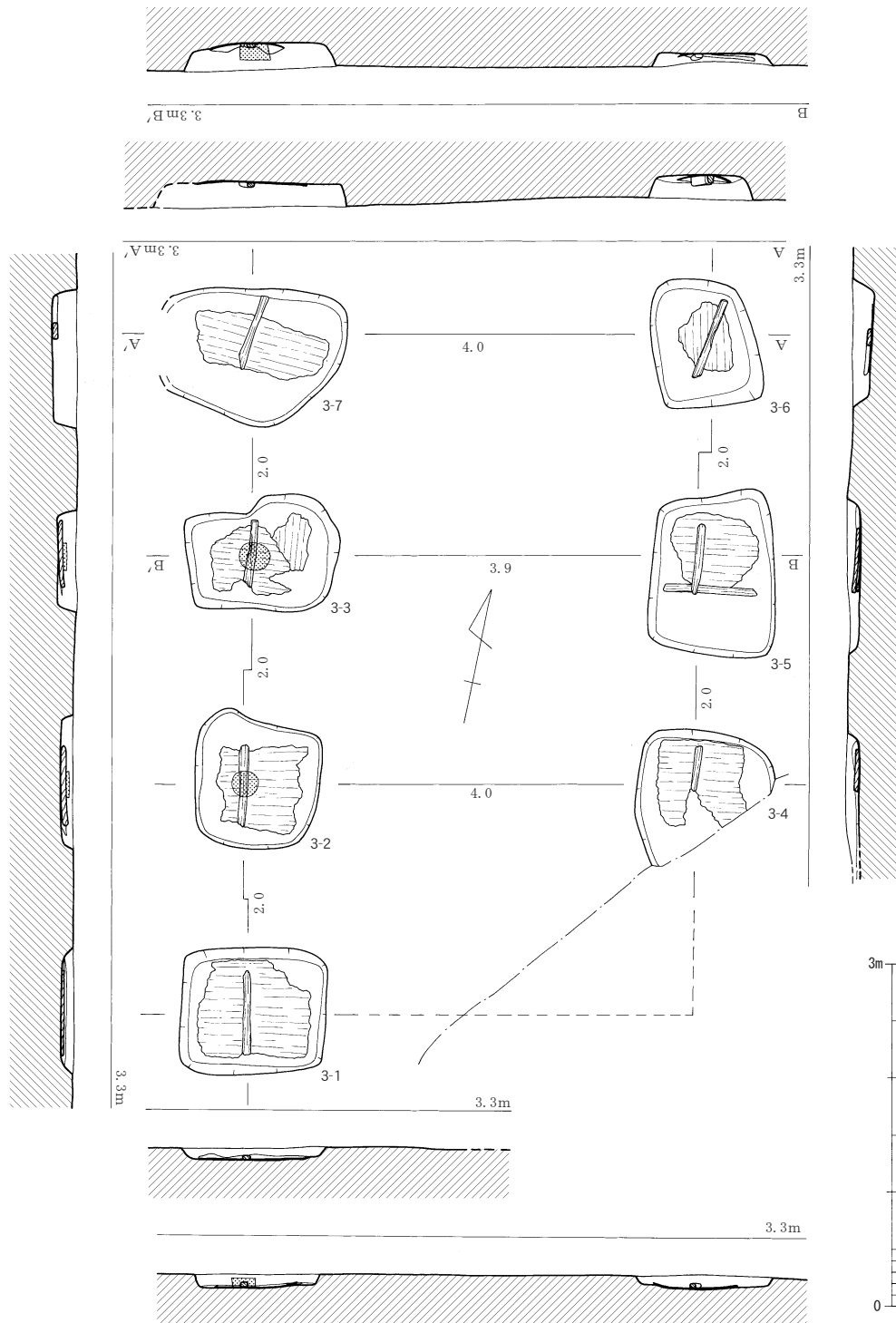
1～3は外反する壺の口縁部で、2は口唇部にキザミを付す。4は非常に短い口縁部が外反して開く小型の短頸壺である。5～7は在地系甕の口頸部である。8は高杯の口縁部である。9は素口縁の鉢で、外面下半はケズリの後にナデを施す。10は頸部の屈曲がわずかで短い口縁部がやや外側へ直線的にのびる鉢である。



第 99 図 II 区 2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

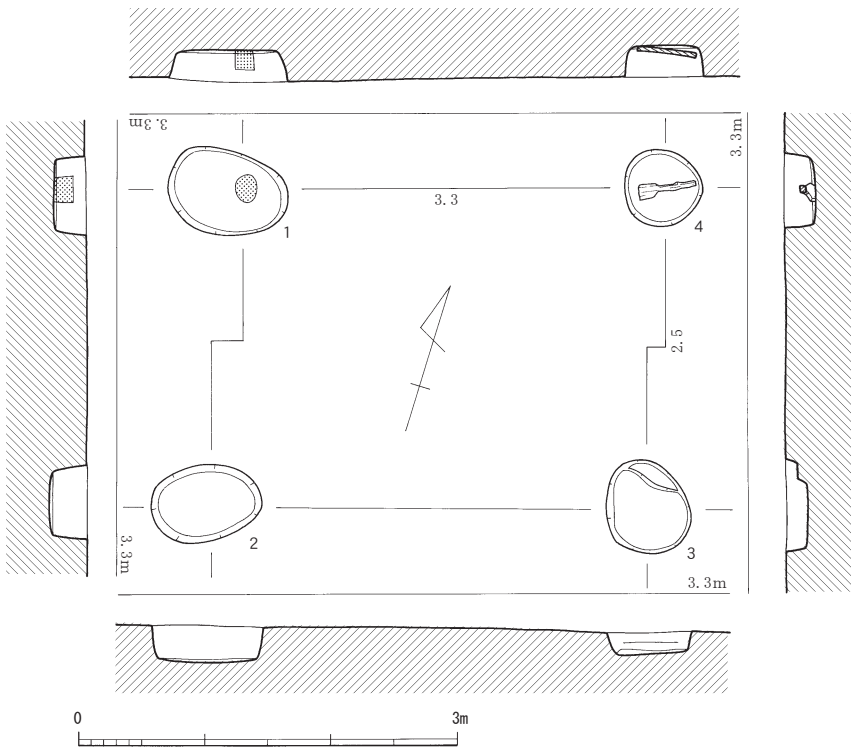
2 号掘立柱建物跡 (図版 37、第 99 図)

II 区北半中央部に位置し、3 × 1 間の建物である。全ての柱穴を最初の検出面において確認す



第 100 図 II 区 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

ることができ、また横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。ただ、横木の失われているものもある他、礎盤自体が検出できなかった柱穴は他遺構とも複雑に切り合い、本来の柱穴を切った他の遺構である可能性を全く払拭できるわけではない。梁行 4.2 m、桁行 6.4 m を測り、床面積は 26.9 m² 程度となる。10・11 号建物を切る。複数の柱穴で柱痕が確認されており、径 20cm 程度である。検出された柱穴は



第101図 II区4号掘立柱建物跡実測図(1/60)

やや不整形なものもあるが、全体的に隅丸方形に近い。礎盤間でごくわずかに北方向へ低くなる傾向が見られる。
出土土器(第102図11~14)

11は頸基部から外側へ口縁部がのびる壺。12は在地系甕の口縁部。13は素口縁の鉢で口縁端部が面を成す。外面にはタタキが残存する。14は脚部を有する鉢の下端部である。

3号掘立柱建物跡(図版38、第100図)

II区北東隅付近に位置し、3×1間の建物である。残存する全ての柱穴を最初の検出面において確認することができ、また横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと判断できる。ただ、南東端の柱穴とその北隣の柱穴の一部は、側溝を掘削する際に気付かずに欠失させてしまった。横木は幅が狭く、欠き込みのごくわずかな形状を呈しており、横木に直行する形で枕木を付属させた礎盤が1基含まれる。柱痕が2ヶ所で認められ、径20~25cm程度である。梁行4.0m、桁行6.0mを測り、床面積は24.0㎡程度となる。検出された柱穴はやや不整形なものもあるが、全体的に隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。

出土土器(第102図15~19)

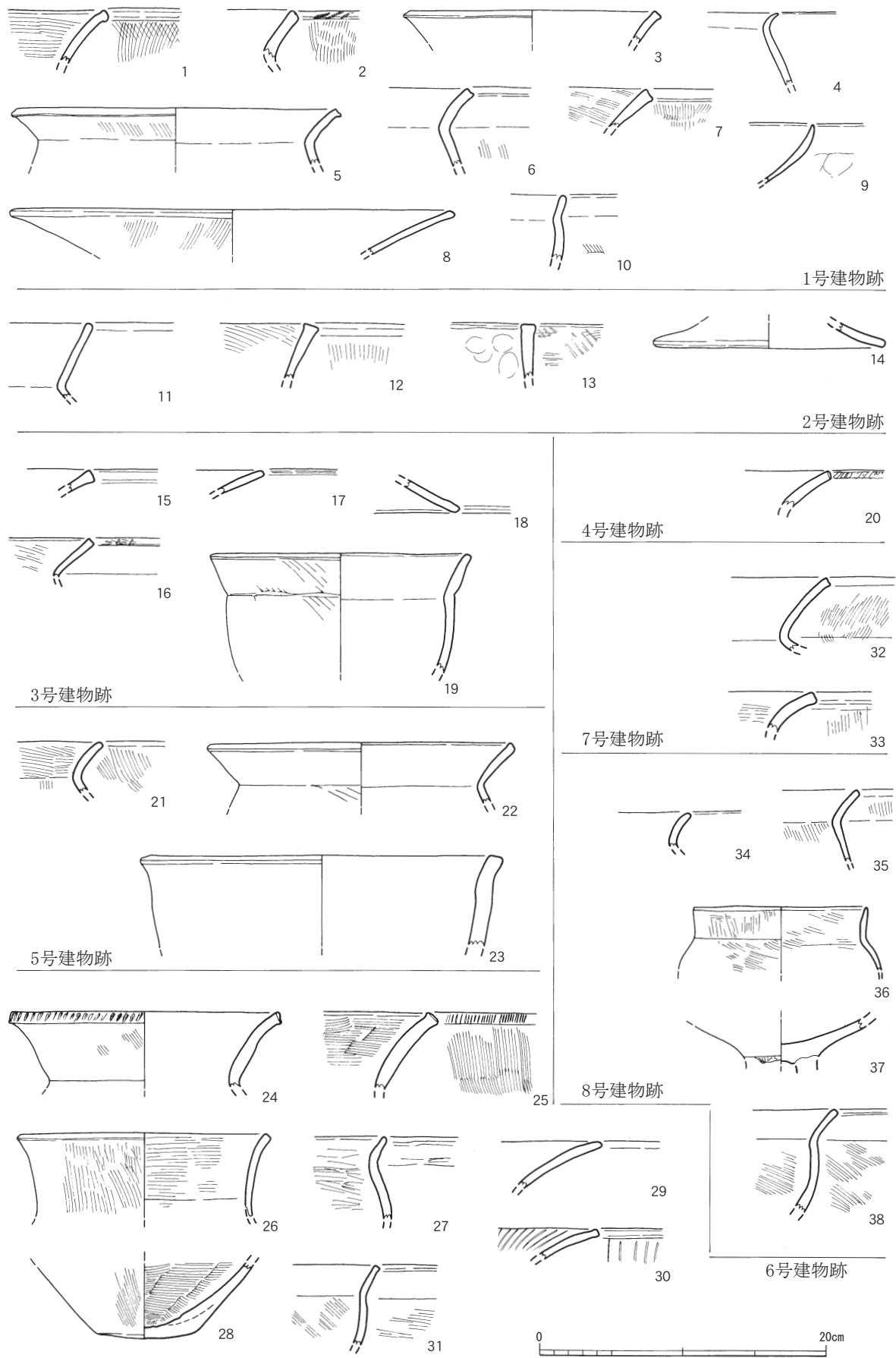
15は壺の口縁部である。16は在地系甕の口縁部で口唇部にキザミを付す。17は高杯の口縁部、18は高杯の脚部である。19はやや屈曲して外側へ直線的にのびる鉢である。

4号掘立柱建物跡(図版38、第101図)

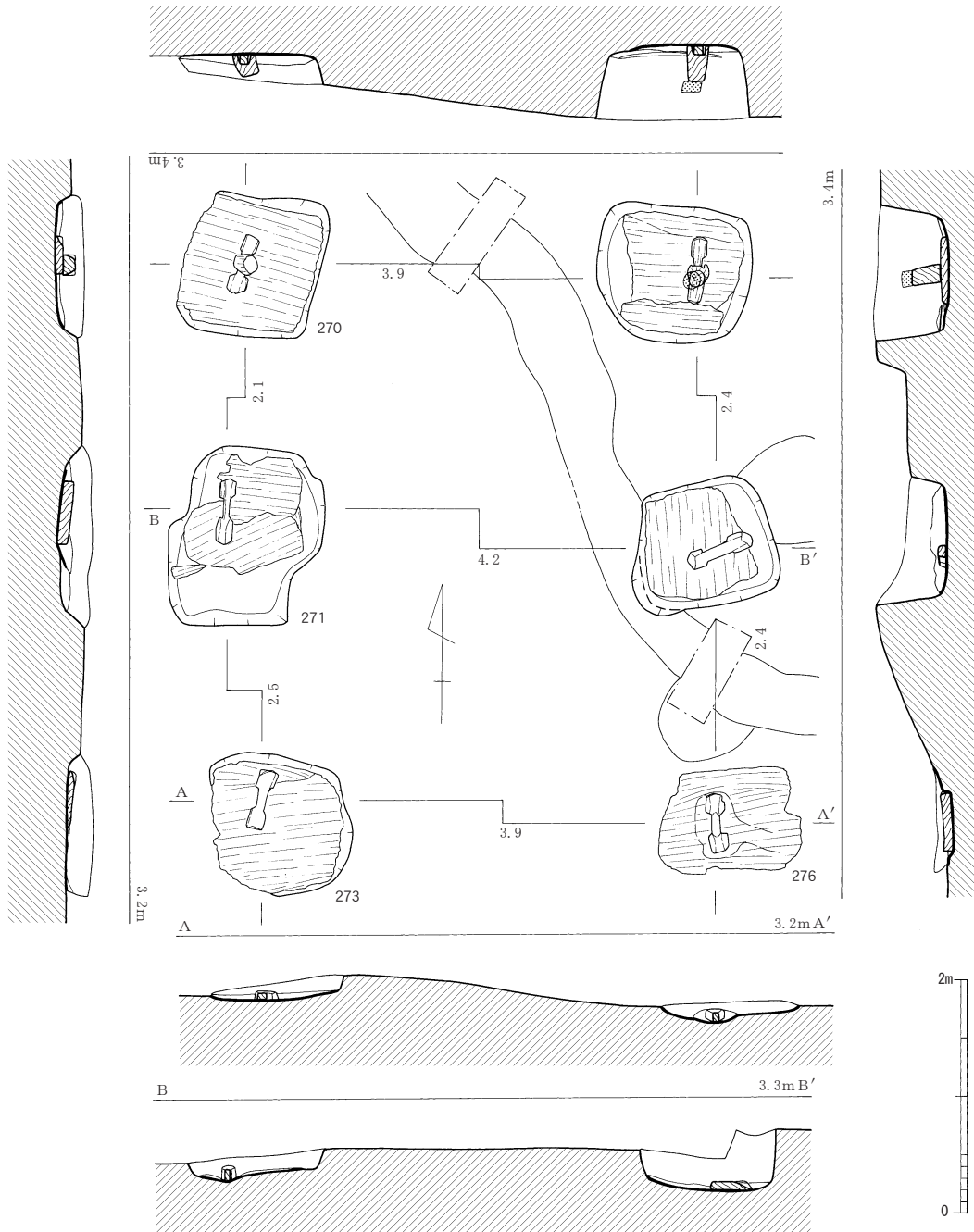
II区北端部付近に位置し、1×1間の建物である。柱穴は最初の検出面で確認することができ、4つの柱穴のうち1つで小さな横木が検出され、他の一つで径20cm程度の柱痕が検出されているが、樹皮を敷いた明確な礎盤は備わっていない。そのため、これらの組み合わせを1棟の建物としての確実性を補強する材料は、相対的な位置関係以外には乏しい。梁行2.5m、桁行3.3mを測り、床面積は8.3㎡程度となる。柱穴は小さな円形・楕円形を呈す。

出土土器(第102図20)

20は在地系甕の口縁部で、口縁部にキザミを付す。



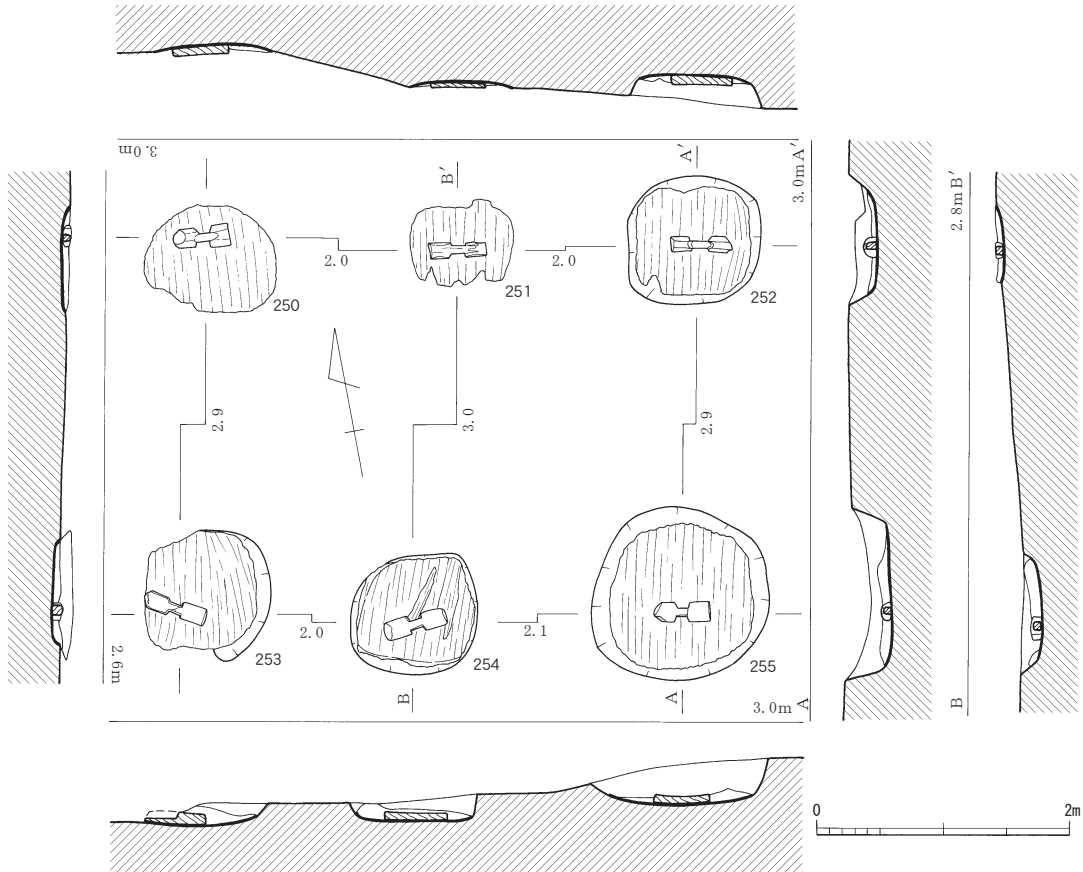
第 102 图 II 区 1 ~ 8 号掘立柱建物跡出土土器実測图 (1/4)



第 103 図 II 区 5 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

5 号掘立柱建物跡 (第 103 図)

II 区北端部付近に位置し、2 × 1 間の建物である。礎盤 270・271・273・276 等からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。また、北側の 2 つの柱穴には柱根が残存しており、その径は 15 ~ 20cm 程度で、柱痕も一部で認められる。9 号建物を切り、検出段階では判断し難かったが 1 号溝にも切られると思われる。梁行 4.0 m、桁行 4.7 m を測り、床面積は 18.8 m² 程度となる。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。



第 104 図 II 区 6 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

出土土器 (第 102 図 21 ~ 23)

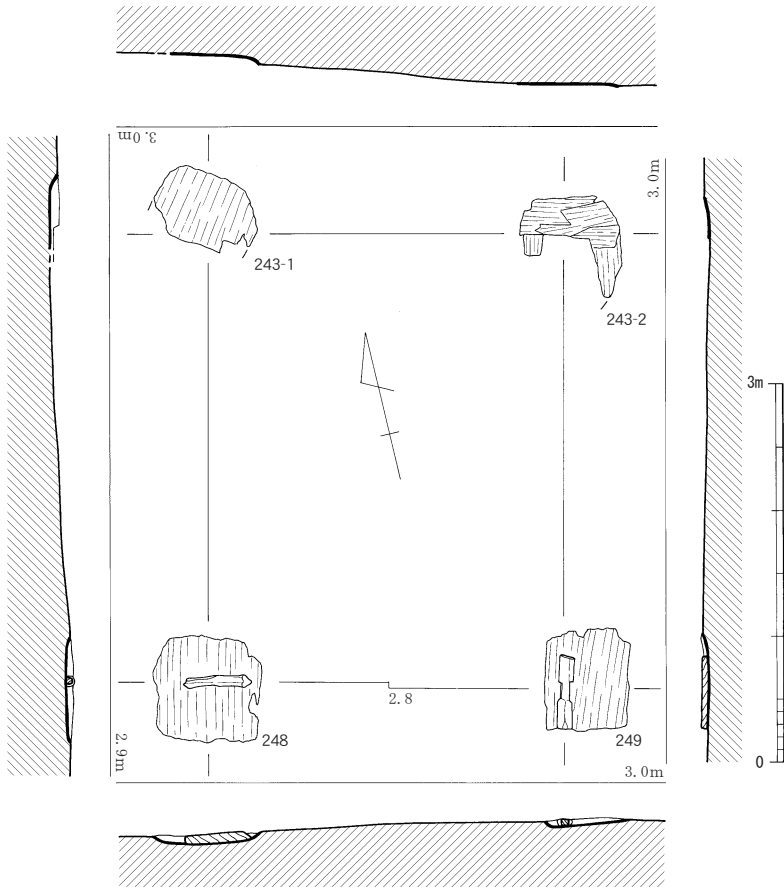
21 は短い口縁部がやや外反する壺である。22 は在地系甕の口頸部である。23 は大型の鉢で口縁部がわずかに屈曲しやや外側へのびる。

6 号掘立柱建物跡 (図版 38、第 104 図)

II 区北半西側に位置し、2 × 1 間の建物である。礎盤 250 ~ 255 からなり、その横木の形状の類似性や埋置軸の共通性が認められ、また他に近接する礎盤は検出されていないことから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。梁行 4.05 m、桁行 2.93 m を測り、床面積は 11.9 m² 程度となる。柱穴はやや円形に近く掘削している部分があるが、掘形を掘り広げ過ぎたもので、礎盤の形状から隅丸方形に近いものと想定される。礎盤間で南西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第 102 図 24 ~ 31)

24・25 は外反しながら開く壺の口縁部で口唇部にキザミを付す。25 のキザミは細いのに対し、24 はそれより幅があり中心に稜が通る。26 はわずかに外反しながら上方へのびる壺の口縁部である。27 は頸基部があまりくびれず、短い口縁部が弱く屈曲してやや外側へのびる壺である。内外面ともに横方向のミガキが残存する。28 は壺の底部でレンズ状である。29・30 は外反気味に開く高杯の口縁部で、30 は内外面ともに縦方向の暗文が施される。31 は鉢の口縁部で、屈曲してやや外側の上方へ直線的にのびる。



第 105 図 II 区 7 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

7号掘立柱建物跡 (第 105 図)

II 区北西隅付近に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 243 (— 1・2)・248・259 からなり、2 基の礎盤は 8 号建物の礎盤に切られ、横木を欠失している。ただ、建物として組み合わない礎盤は周辺に少なく、この建物の確実性はある程度高いと考えられる。梁行約 3.6 m 程度、桁行 2.8 m を測り、床面積は 10.1 m² 程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で北西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第 102 図 32・33)

32 は外反して開く広口壺の口縁部である。33 は外反する短頸壺の口縁部である。

8号掘立柱建物跡 (第 106 図)

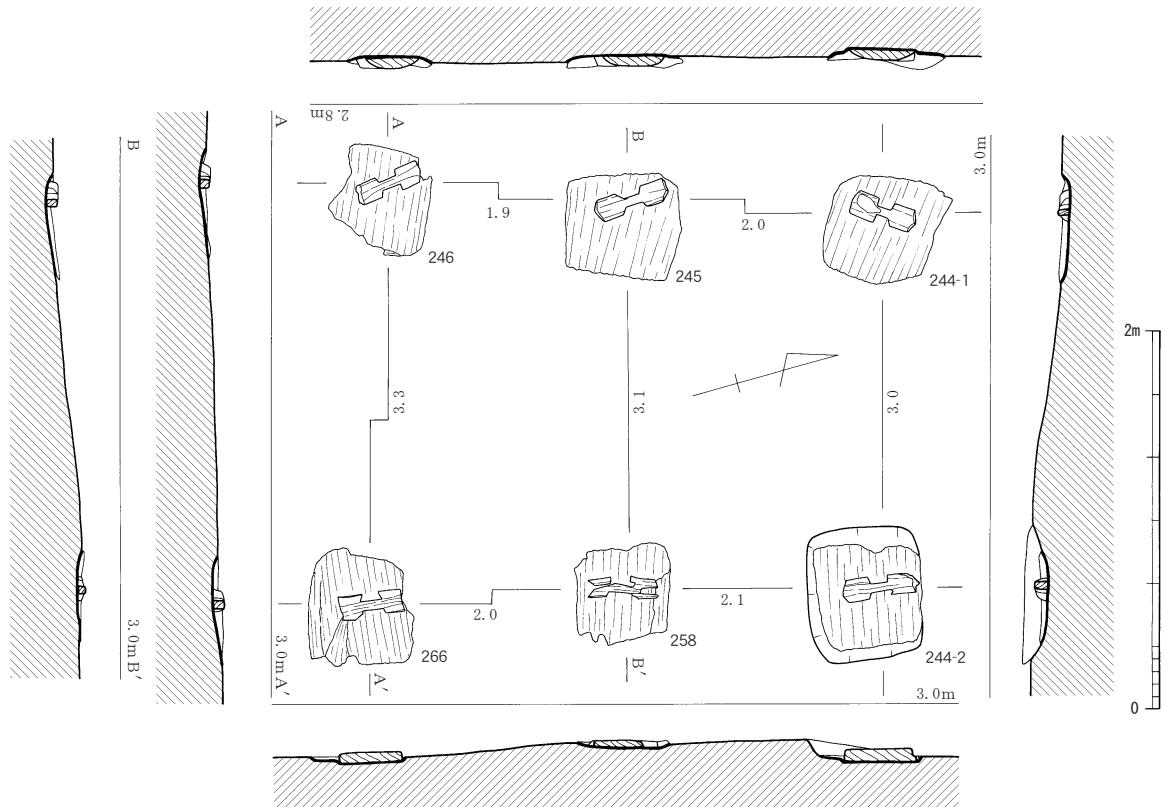
II 区北西隅付近に位置し、2 × 1 間の建物である。礎盤 244 (— 1・2)・245・246・258・266 からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行 3.1 m 程度、桁行 4.0 m を測り、床面積は 12.4 m² 程度となる。7 号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第 102 図 34～38)

34・35 は外反する短頸壺の口縁部から肩部にかけてである。36 は頸基部があまりくびれず、短い口縁部が上方へのびる短頸壺である。37 は高杯の杯部の下部で脚部との接合部が見られる。38 は口縁部が屈曲し外側へ直線的にのびる鉢である。

9号掘立柱建物跡 (第 107 図)

II 区北西隅付近に位置し、2 × 1 間の建物である。礎盤 242・247・260・268 からなり、他の検出できなかった 2 基のうち北東端のものは 5 号建物の礎盤 271 によって切られ消失したと考えられる。そのため組み合わせが不完全であり、横木の残存するものは、形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性が認められるが、この建物の確実性にはやや不安が残る。梁行 2.4 m を測り、



第106図 II区8号掘立柱建物跡実測図(1/60)

桁行約3.7m程度と想定され、床面積は約8.9㎡程度となる。5号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる遺物は出土していない。

10号掘立柱建物跡(図版40、第107図)

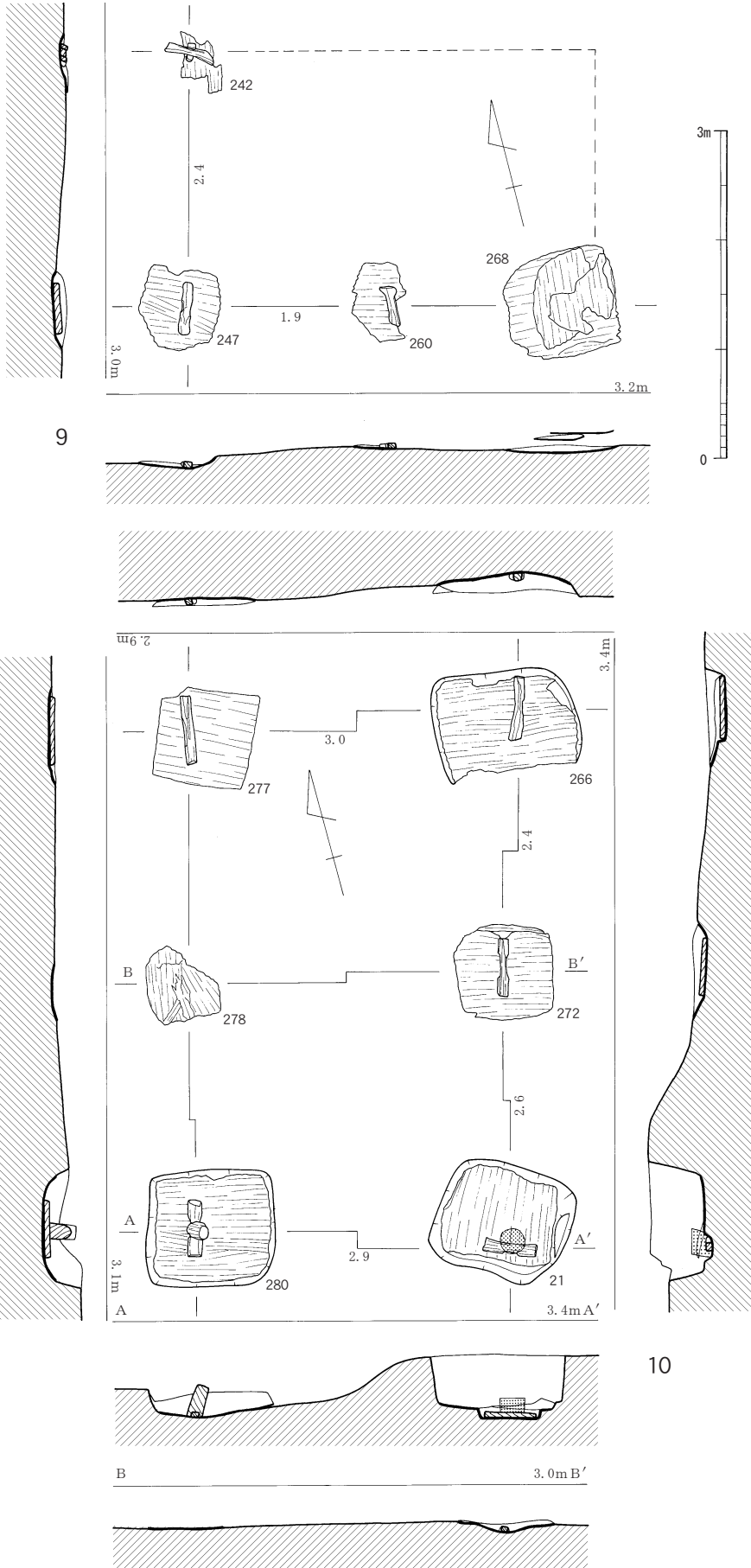
II区北半中央部付近に位置し、2×1間の建物である。礎盤21・266・272・277・278・280からなり、礎盤278では横木が欠失しているが、他の横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。横木の欠失している礎盤は、2号建物に帰属する礎盤の下層より検出され、2号建物に切られたことが横木の欠失した原因と考えられる。また、11号建物にも切られる先後関係が認められる。梁行2.95m、桁行5.0mを測り、床面積は14.8㎡程度となる。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。祖盤280では柱根が残存しており、径15cm程度である。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器(第118図1)

1は頸基部で強く屈曲し、口縁部が外側へ直線的にのびる壺である。

11号掘立柱建物跡(第108図)

II区北半中央部付近に位置し、2×1間の建物である。礎盤20・241・264・265・270・284からなり、横木は埋置軸が揃わないものがあるものの、形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建

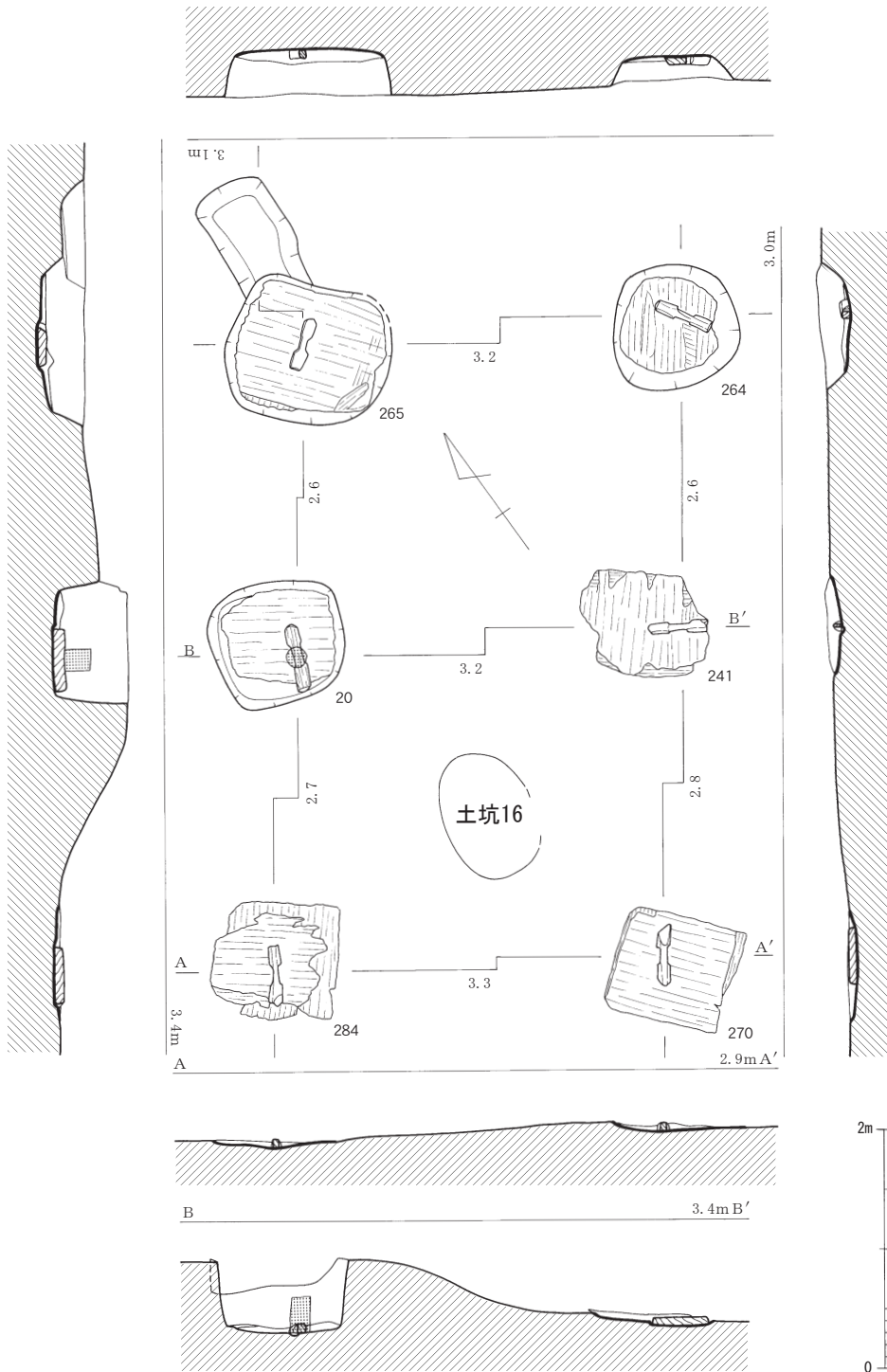


物の確実性は高いと考えられる。梁行 3.23 m、桁行 5.35 m を測り、床面積は 17.3 m² 程度となる。10 号建物を切り、2 号建物に切られる。礎盤 20 では柱痕が確認され、径 15cm 程度である。礎盤 265 では柱穴の掘形に北側へ細く延びる部分が検出され、建物廃絶時に柱を引き抜く際に掘削した引き抜き痕と考える。一部掘形の検出された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いと判断される。礎盤間でごくわずかに西方向へ低くなる傾向がある。図示できる出土遺物はない。

12 号掘立柱建物跡 (第 109 図)

Ⅱ区中央部付近の東側に位置し、2×1 間の建物である。礎盤 187・189・207・224・227・229 からなり、礎盤 207 では横木が失われているが、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと判断できる。礎盤 207 は 1 号建物に

第 107 図 Ⅱ区 9・10 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

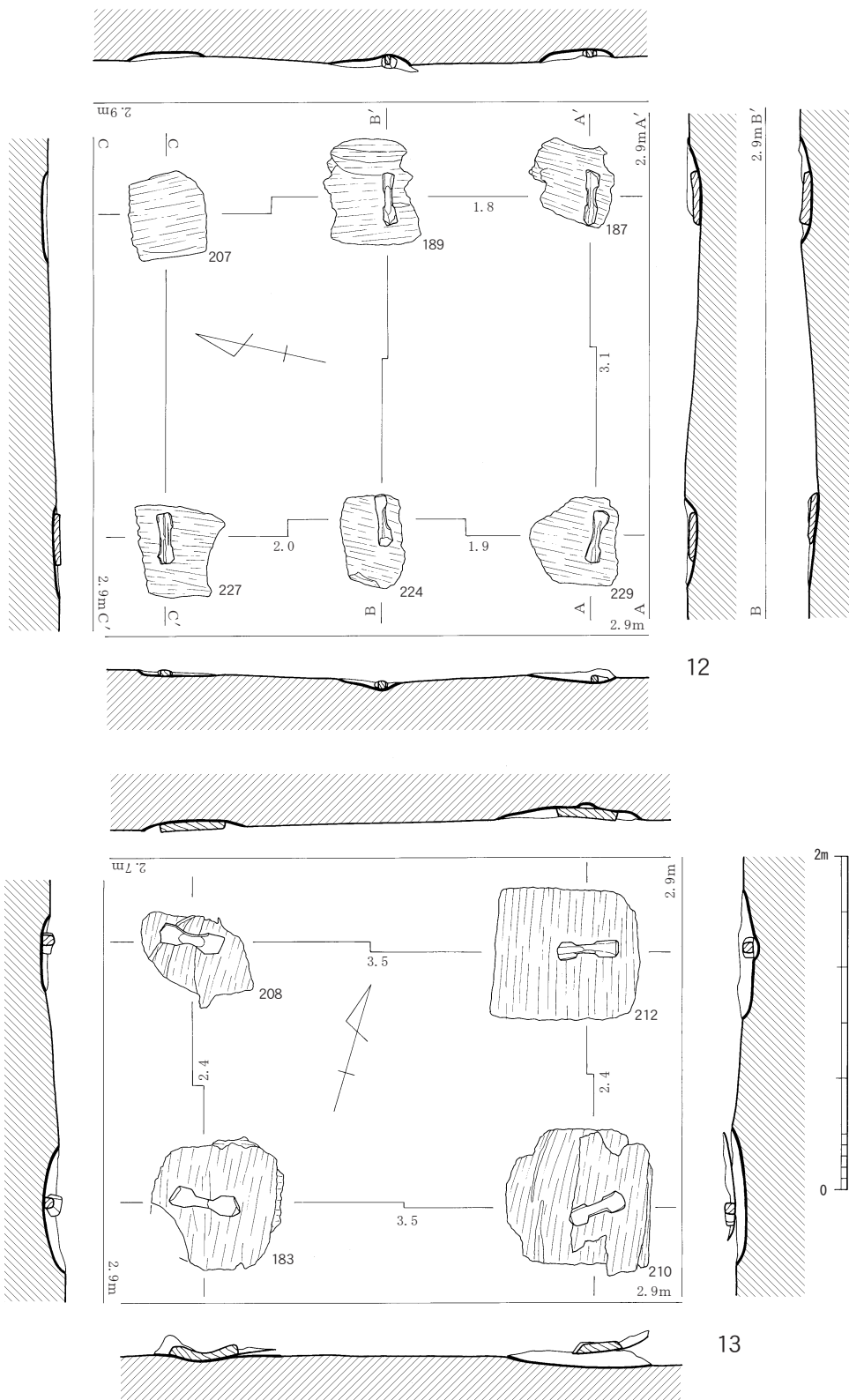


第108図 II区11号掘立柱建物跡実測図(1/60)

帰属する礎盤に切れ横木を失っていると考えられ、1号建物に先行すると思われる。梁行3.0m、桁行3.8mを測り、床面積は11.4㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。

出土土器(第118図2・3)

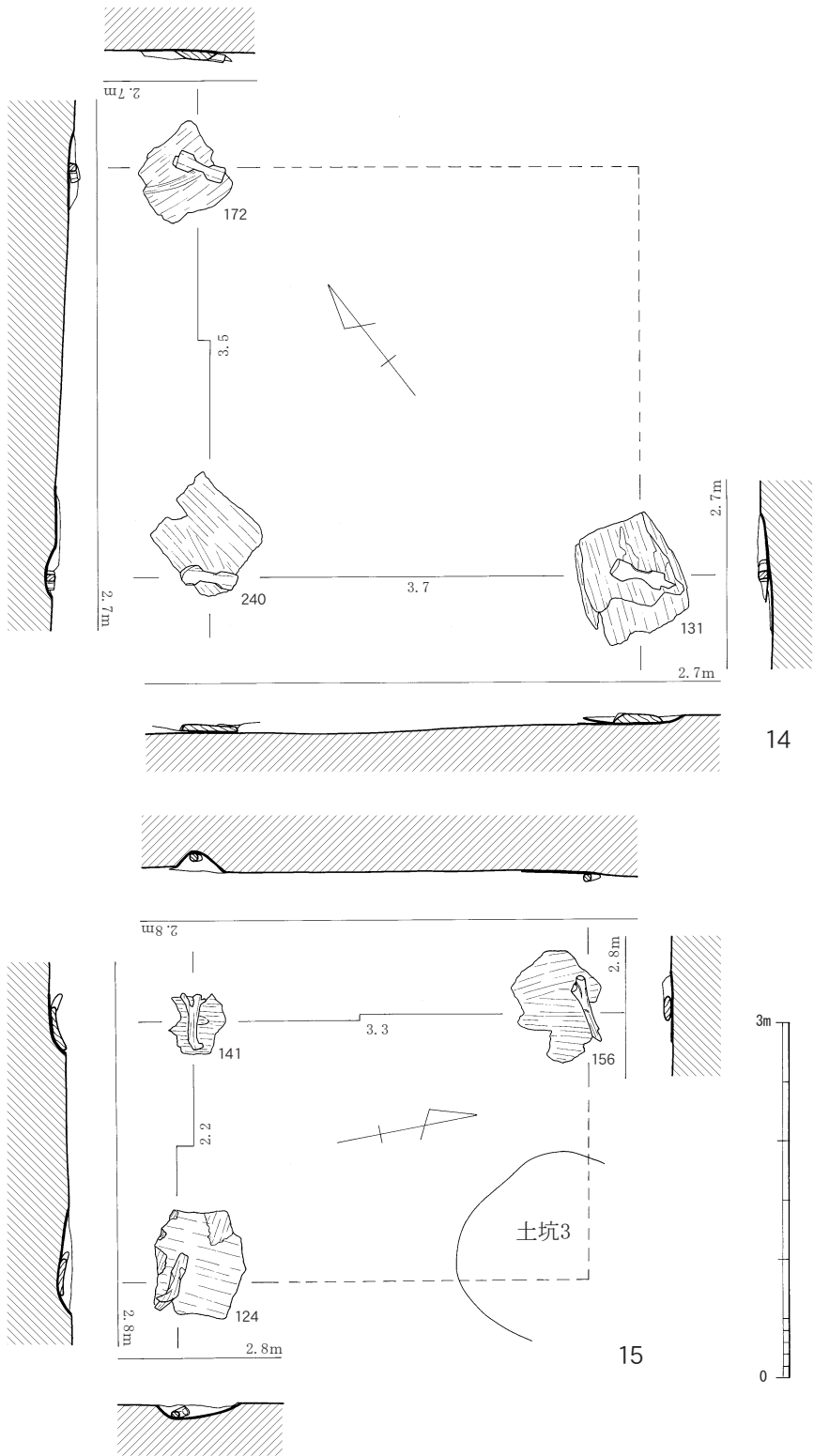
2は在地系甕の口頸部で口唇部にキザミを付す。3は短い口縁部が外反する鉢である。



第 109 图 II 区 12·13 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

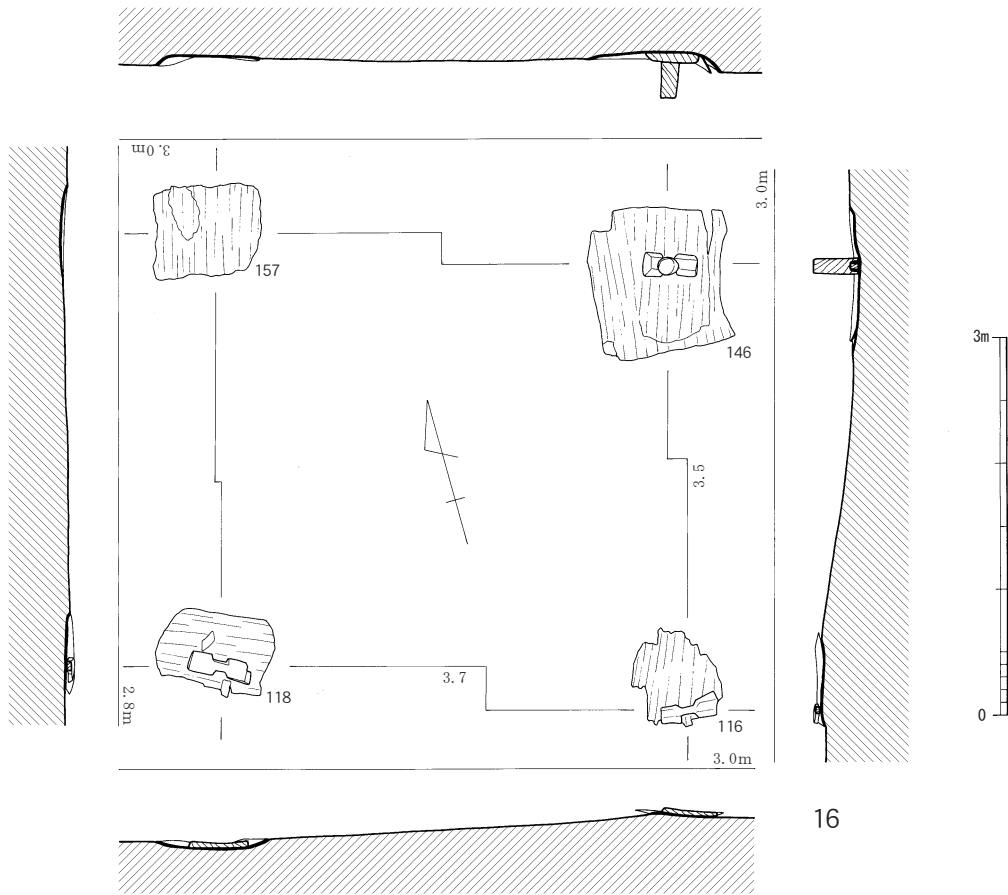
13号掘立柱建物跡 (図版40、第109図)

Ⅱ区中央部付近の東端に位置し、1×1間の建物である。礎盤183・208・210・212からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性が認められ、これらの組み合わせによるこの建物の确实性は高いと考えられる。梁行2.4m、桁行3.5mを測り、床面積は8.4㎡程度となる。ただ、梁・桁両者間の長さの差がやや大きい点に不自然さも否めないため、梁方向に規模が拡大することによって梁・桁の軸が逆転する可能性を考慮する必要もある。梁と判断している軸上で拡大する場合、西側の並びについては、南方へ延長して対応する位置にどの建物にも帰属が確認できない礎盤178があり、本建物跡に組み合わせる可能性もある。しかし、東側の並びで延長して対応する位置の周辺では、念入りに礎盤の検出を試みたものの確認することはできなかったため、上記のような規模の拡大は可能性の示唆に留めておく。43・45号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

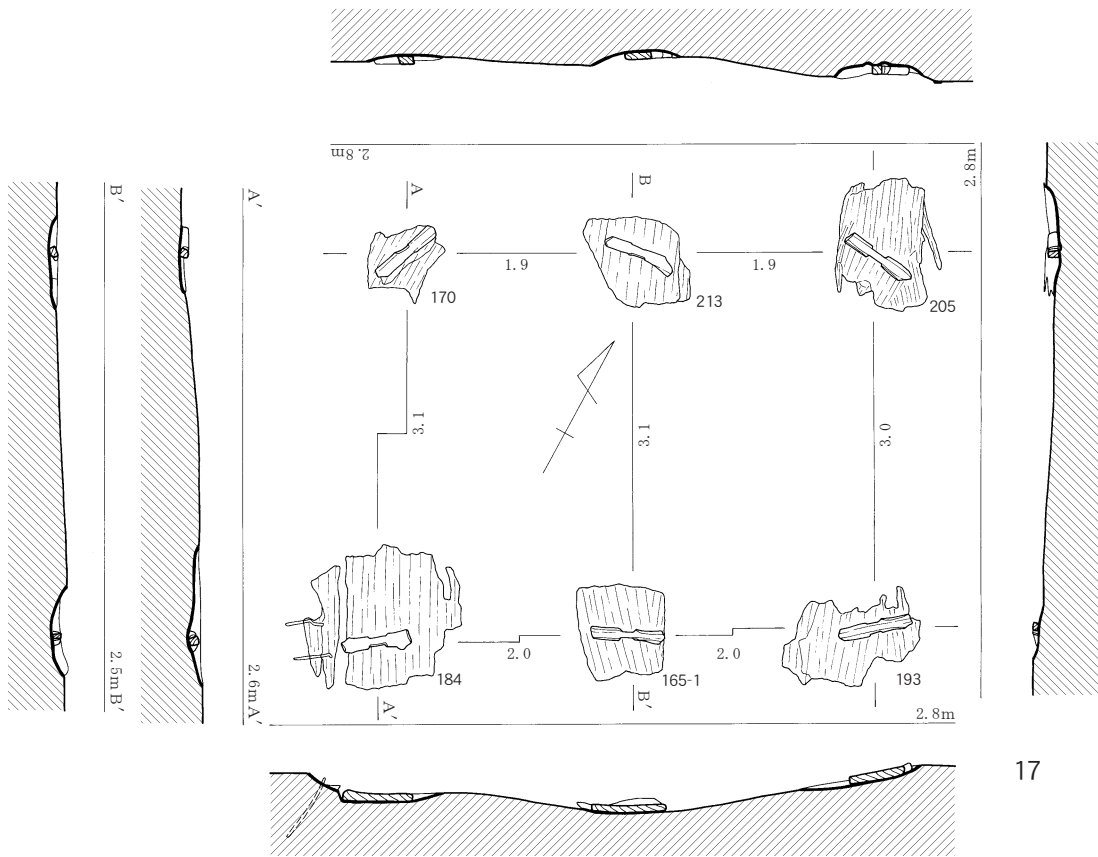


第110図 Ⅱ区14・15号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

たため、上記のような規模の拡大は可能性の示唆に留めておく。43・45号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。



16



17

第111图 II区16·17号掘立柱建物迹实测图(1/60)

14号掘立柱建物跡（第110図）

Ⅱ区中央部付近の東側に位置し、1×1間の建物である。礎盤131・172・240からなり、もう1基の組み合うはずの礎盤は、対応する東側の位置周辺では検出できなかった。しかし、3基の礎盤については、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性が認められ、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行2.4m、桁行3.5mを測り、床面積は8.4㎡程度となる。16・42号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

15号掘立柱建物跡（図版41、第110図）

Ⅱ区中央部付近の東側に位置し、1×1間の建物である。礎盤124・141・156からなり、もう1基の礎盤の対応する位置には3号土坑が所在し、3号土坑に切られて消失したと考えられる。3基の礎盤については、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。横木は小形で分枝部分が見られる特徴あるもので、欠き込みは小さい。梁行2.2m、桁行3.3mを測り、床面積は7.3㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる遺物は出土していない。

16号掘立柱建物跡（第111図）

Ⅱ区中央部東端に位置し、1×1間の建物である。礎盤116・118・146・157からなり、礎盤157の横木は失われているが、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.5m、桁行3.7mを測り、床面積は13.0㎡程度となる。14・41号建物を切る。礎盤146は柱根が残存しており、径13cm程度である。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第118図4・5）

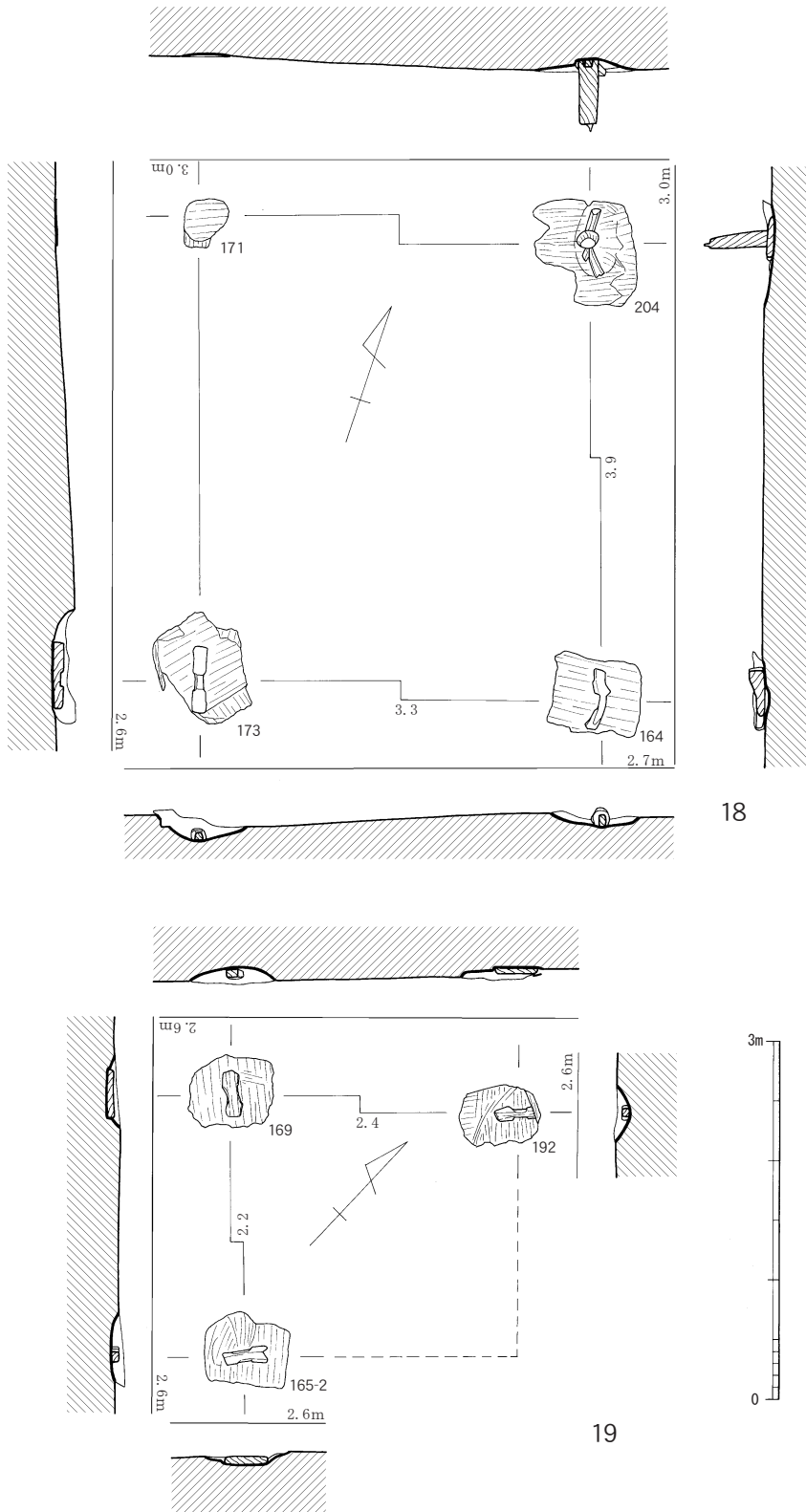
4は高杯の脚部である。5は素口縁の鉢である。

17号掘立柱建物跡（第111図）

Ⅱ区中央部西側に位置し、2×1間の建物である。礎盤165－1・170・184・193・205・213からなり、横木の形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考える。梁行3.1m、桁行3.9mを測り、床面積は12.1㎡程度となる。礎盤184では、細い棒状の木質が礎盤の敷設された樹皮を貫いて下方へ差し込まれている。18・19・20号建物を切る先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに北西方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第118図6・7）

6は在地系甕の口縁部である。7は高杯の杯部で屈曲部から口縁部にかけて外反し、より下位では内湾する。



18号掘立柱建物跡（第112図）

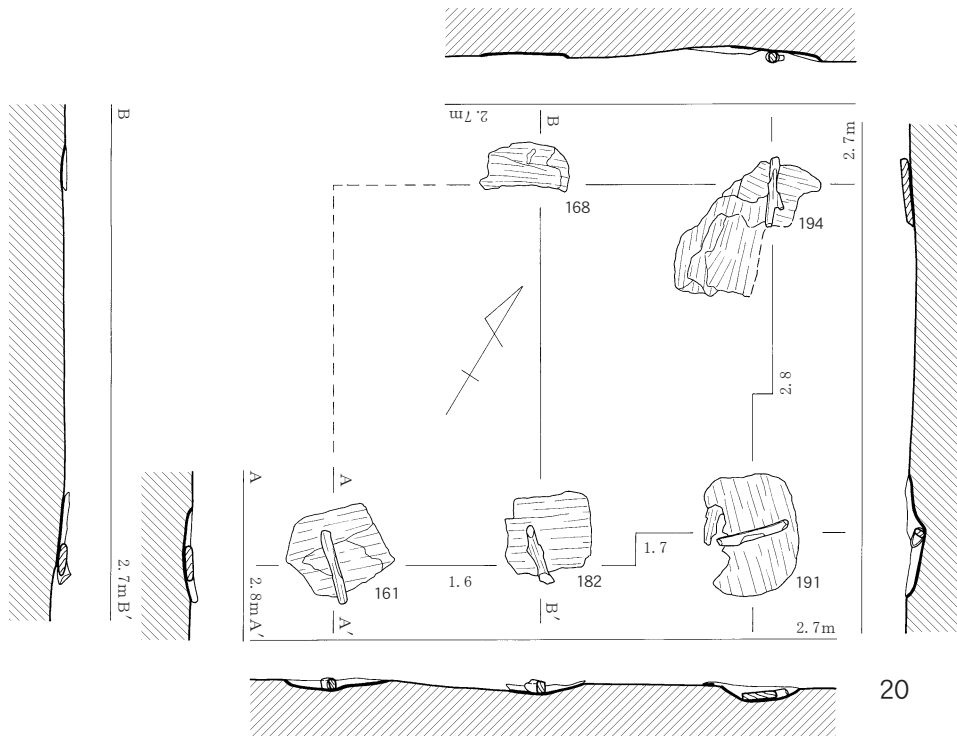
II区中央部西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤164・171・173・204からなり、横木の形状はあまり類似しておらず、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。梁行3.3m、桁行3.9mを測り、床面積は12.9㎡程度となる。礎盤204は柱根が残存しており、径15cm程度である。17・19号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

19号掘立柱建物跡（第112図）

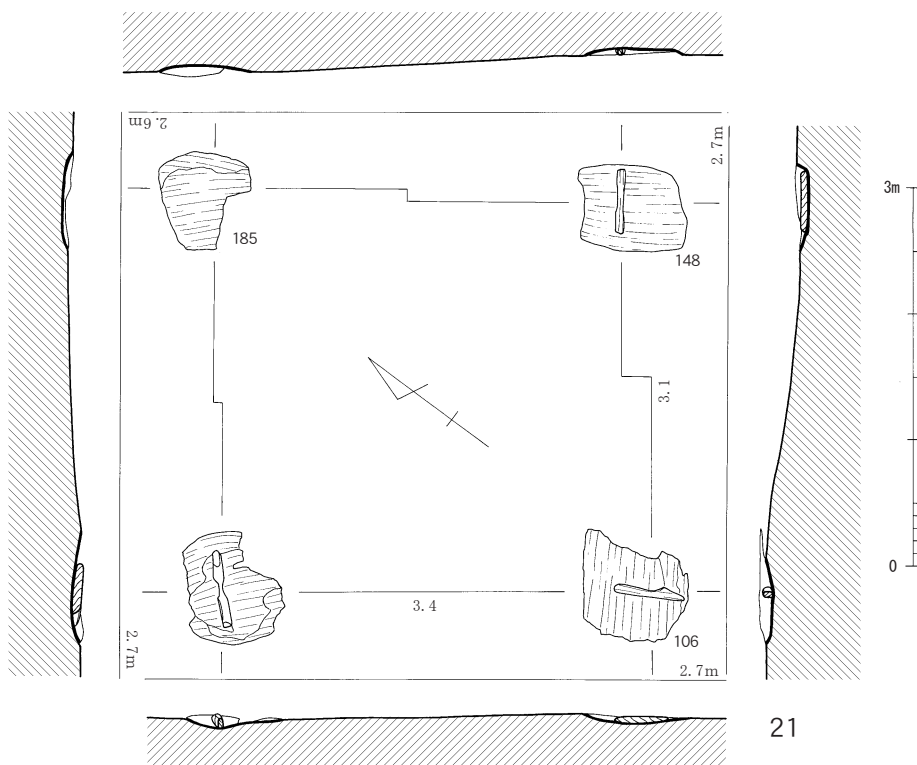
II区中央部西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤165-2・169・192からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと判断した。東側の対応

第112図 II区18・19号掘立柱建物跡実測図（1/60）

する位置周辺で検出されなかった礎盤は、17・20号建物に帰属する礎盤に切れ消失したとみられる。梁行2.2m、桁行2.4mを測り、床面積は5.3㎡程度となる。18号建物を切り、17・20号



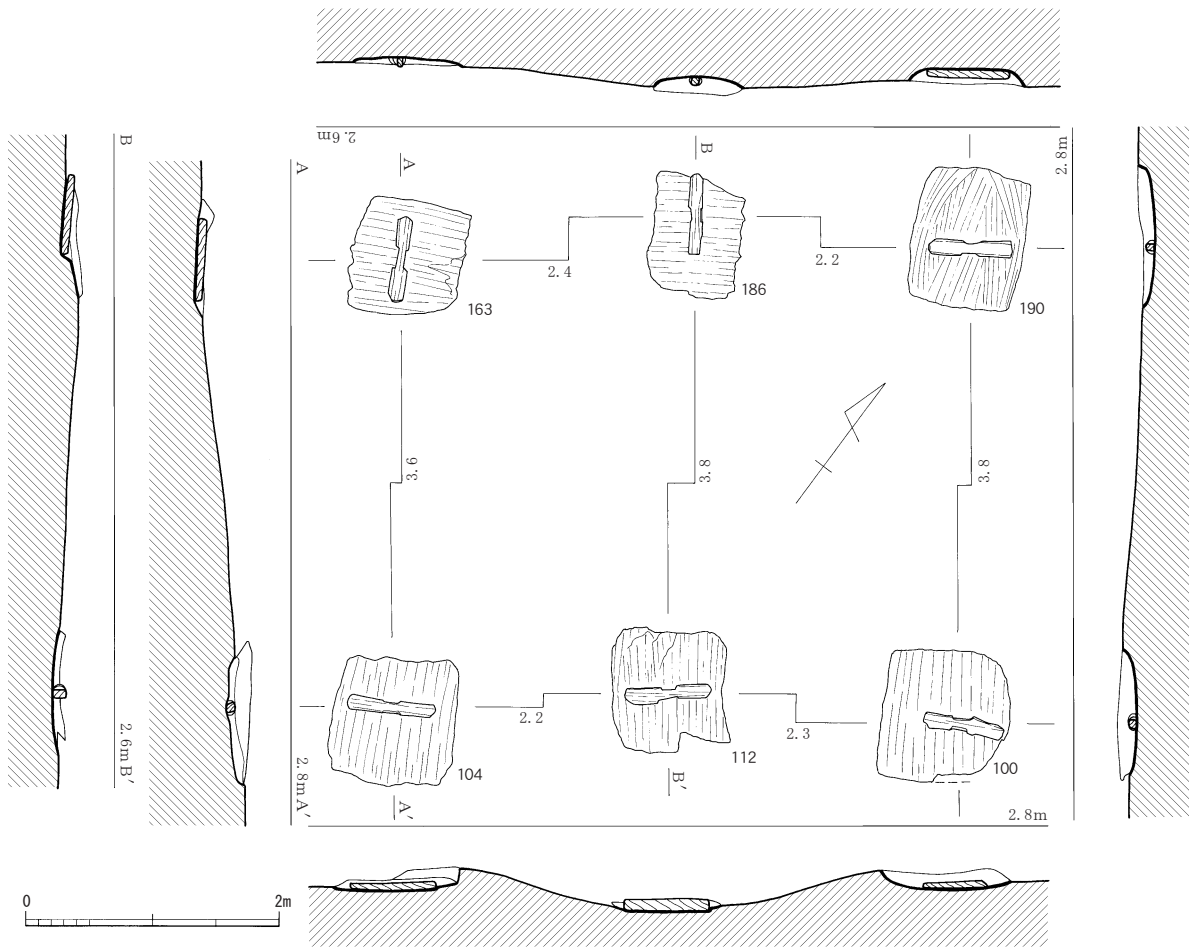
20



21

第113図 II区20・21号掘立柱建物跡実測図(1/60)

建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。



第114図 II区22号掘立柱建物跡実測図(1/60)

20号掘立柱建物跡(第113図)

II区中央部西側に位置し、2×1間の建物である。礎盤161・168・182・191・194からなり、17号建物に帰属する礎盤に切られ礎盤168の横木や北西の位置の礎盤自体が消失している。梁行2.8m、桁行3.3mを測り、床面積は9.2㎡程度となる。礎盤の横木の形状が類似する部分もあるが、桁行が2間に対してその長さがやや短い感があり、特に桁の中間に位置する2基を含めて、これらの礎盤の組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安が残る。19号建物を切り、17号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器(第118図8)

8は素口縁の鉢である。

21号掘立柱建物跡(第113図)

II区中央部西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤106・148・185等からなり、礎盤185の横木は失われているが、他の横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.1m、桁行3.4mを測り、床面積は10.5㎡程度となる。22・40号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅

丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

22号掘立柱建物跡 (第114図)

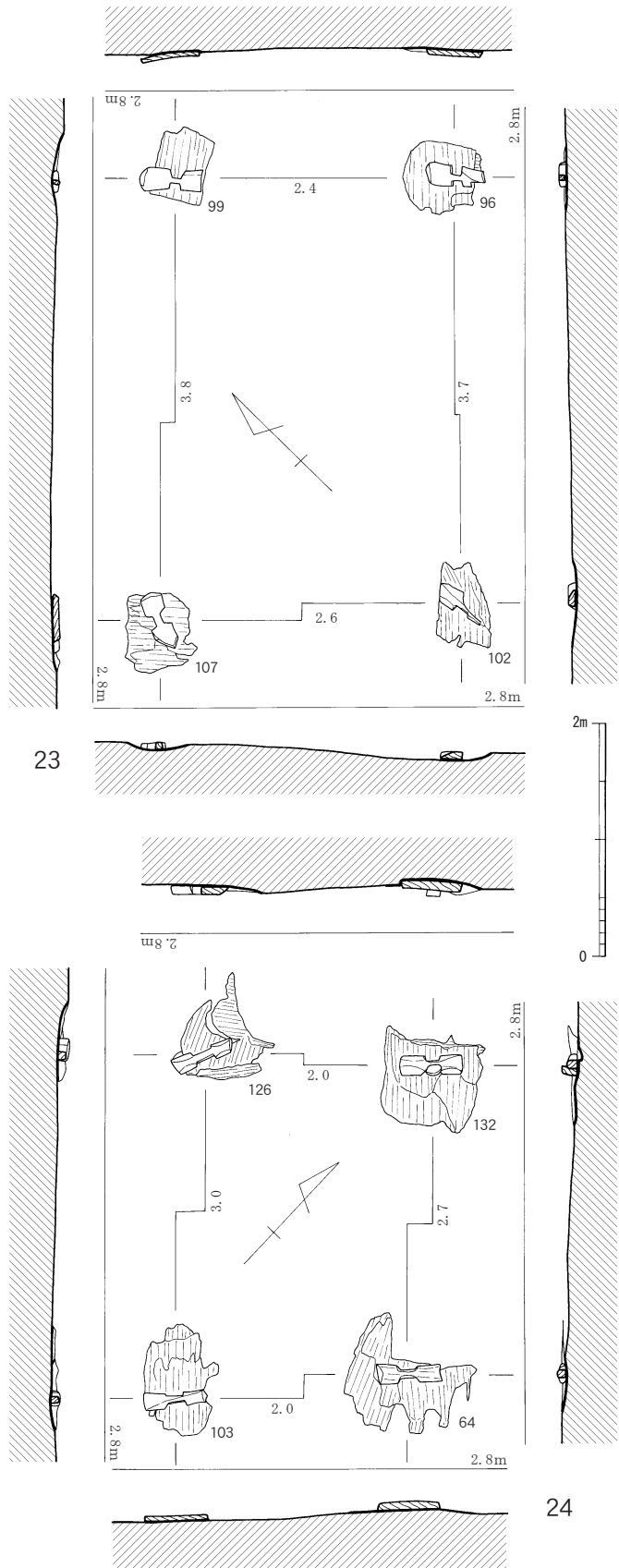
Ⅱ区中央部西側に位置し、2×1間の建物である。礎盤100・104・112・163・186・190からなり、横木の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合っこの建物の確実性は非常に高い。梁行3.73m、桁行4.55mを測り、床面積は17.0㎡程度。21号建物を切り、25・40号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに北西方向へ低くなる傾向がある。

出土土器 (第118図9～11)

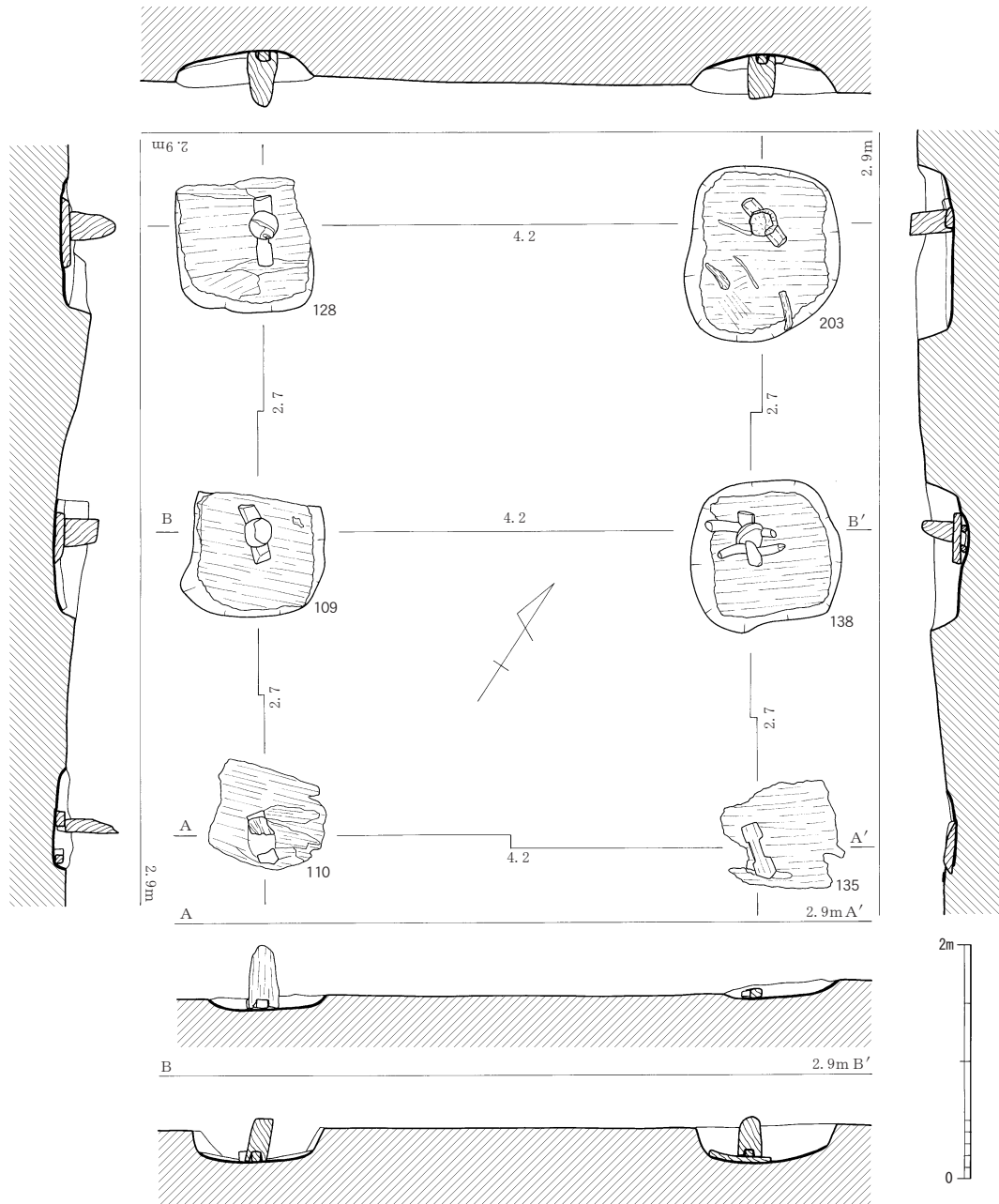
9はなで肩の器形で、頸基部でややくびれて口縁部が外反して開く壺で、内外面ともにハケが施される。10は大型の壺の底部で、器壁は厚く完全な丸底である。11は脚部を有する甕の下端部である。

23号掘立柱建物跡 (第115図)

Ⅱ区中央部西側に位置し、1×1間の建物である。礎盤96・99・102・107からなり、横木の形状の類似性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行2.5m、桁行3.75mを測り、床面積は9.4㎡程度となる。桁行がやや長く、周辺は礎盤の切り合いの激しいこともあり中間に対応する礎盤が存在して2×1間であった可能性も捨てきれない。24号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。



第115図 Ⅱ区23・24号掘立柱建物跡
実測図 (1/60)



第 116 図 II 区 25 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

24 号掘立柱建物跡 (第 115 図)

II 区中央部西側に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 64・103・126・132 からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの礎盤の組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。建物の規模としては検出した状況では、梁行 2.0 m、桁行 2.85 m を測り、床面積は 5.7 m² 程度となる。しかし、梁行が非常に短いため、実際には梁方向に規模が拡大して梁・桁の軸が逆転して 2 × 1 間の建物となるという可能性も捨てきれない。25 号建物を切り、23・40 号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近い平面形であると考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

25号掘立柱建物跡（図版41・42、第116図）

Ⅱ区中央部付近に位置し、2×1間の建物である。礎盤109・110・128・135・138・203からなり、横木の形状の類似性やほとんどで柱根が残存する共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。柱根は径20～25cm程度である。礎盤138では横木の下に直行する形で枕木が配置される。梁行4.2m、桁行5.4mを測り、床面積は22.7㎡程度となる。26号建物を切り、24号建物に切られる。検出された柱穴はやや不整形なものもあるが、礎盤の形状からも隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

出土土器（第118図12～17）

12は外反して開く壺の口縁部である。13・14は在地系甕の口縁部から胴部である。15は高杯の短い脚部で、4箇所穿孔を施す。16は素口縁の鉢である。17は脚部を有する鉢である。

26号掘立柱建物跡（第117図）

Ⅱ区中央部付近に位置し、2×1間の建物である。礎盤134・136・145・151・153・236からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。梁行3.4m、桁行4.25mを測り、床面積は14.5㎡程度となる。25号建物、2号土坑に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向がある。

出土土器（第118図18～21）

18は非常に短い口縁部が外反し、下膨れの器形である短頸壺である。19は壺の底部である。20・21は素口縁の鉢である。

27号掘立柱建物跡（第117図）

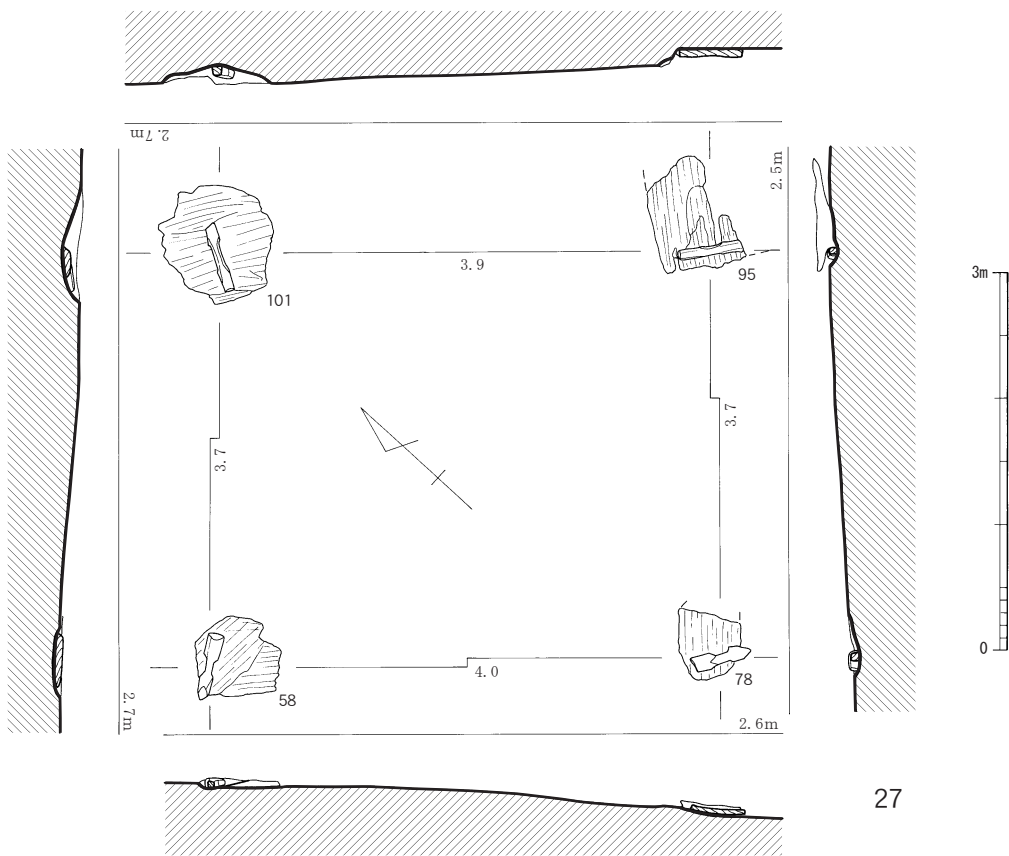
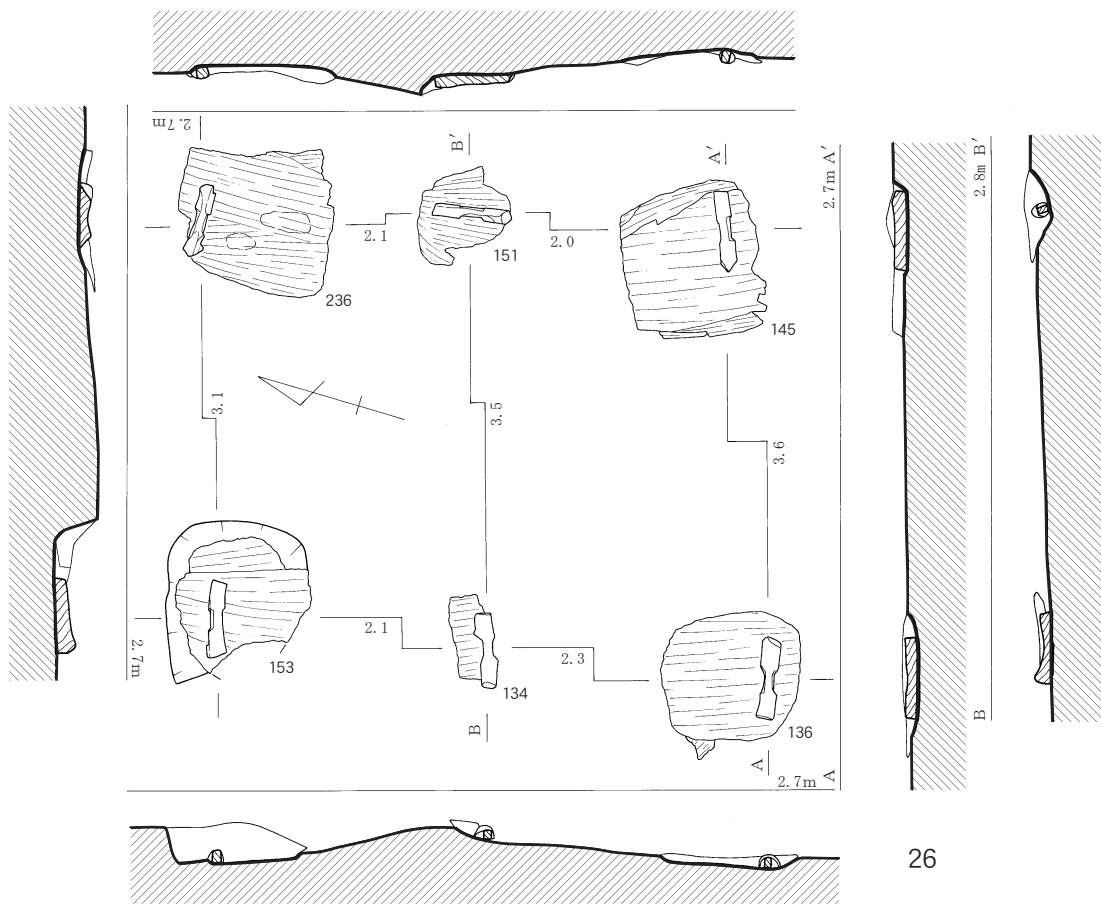
Ⅱ区中央部付近に位置し、2×1間の建物である。礎盤58・78・95・101からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行3.7m、桁行3.95mを測り、床面積は14.6㎡程度となる。28号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤も切り合いや掘り過ぎで残存状態が悪く柱穴の形状は判断しがたい。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向がある。図示できる遺物は出土していない。

28号掘立柱建物跡（第119図）

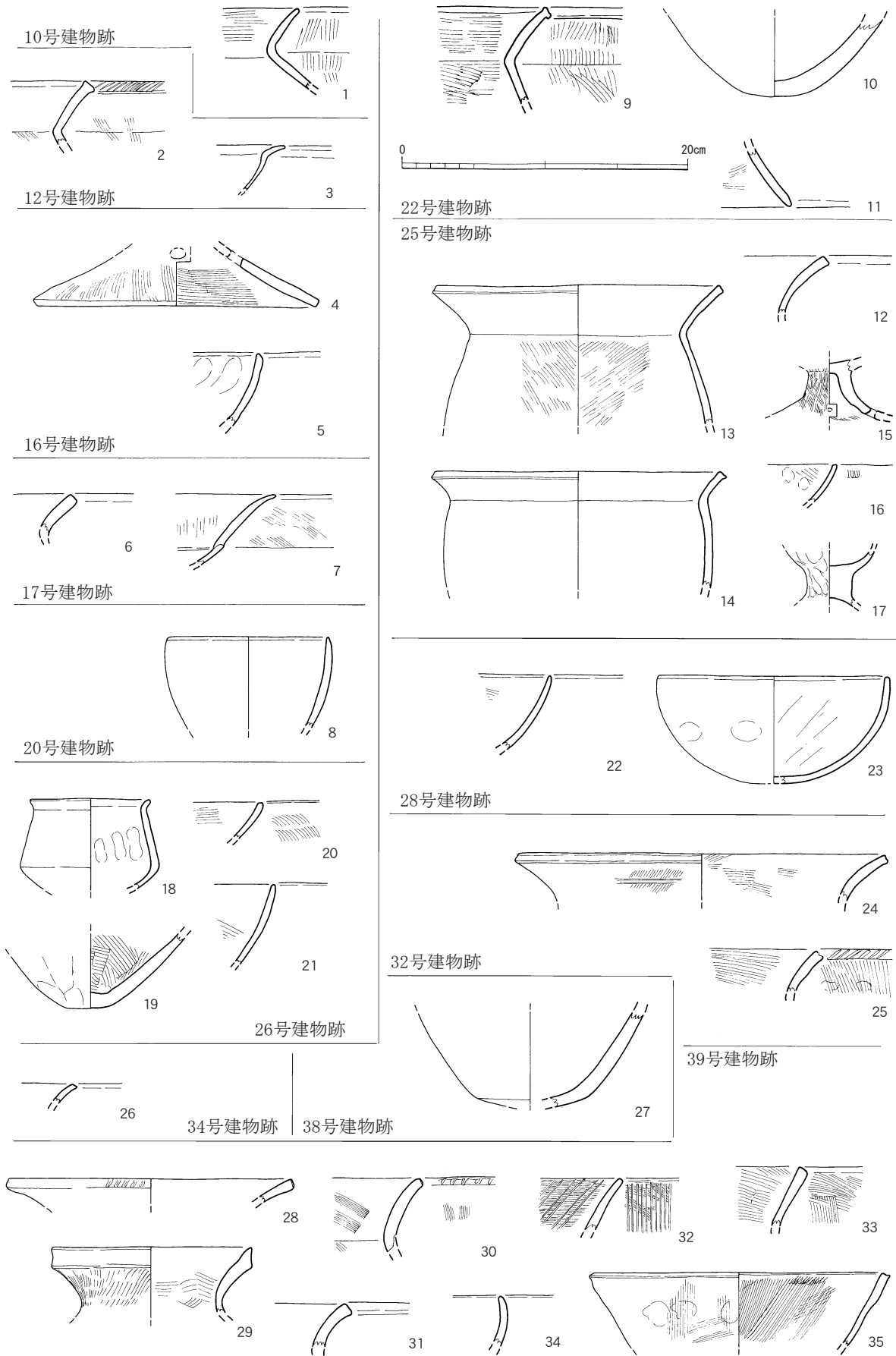
Ⅱ区中央部南側に位置し、2×1間の建物である。礎盤56・57・59・76・92・97からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。ただ、桁の中間に位置する2基の礎盤のみが横木が消失しており、桁行も特に長いわけではないため、これらの中間の礎盤は組み合わせず、1×1間の建物である可能性も完全には捨て切れない。梁行2.9m、桁行3.6mを測り、床面積は10.4㎡程度となる。27号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第118図22・23）

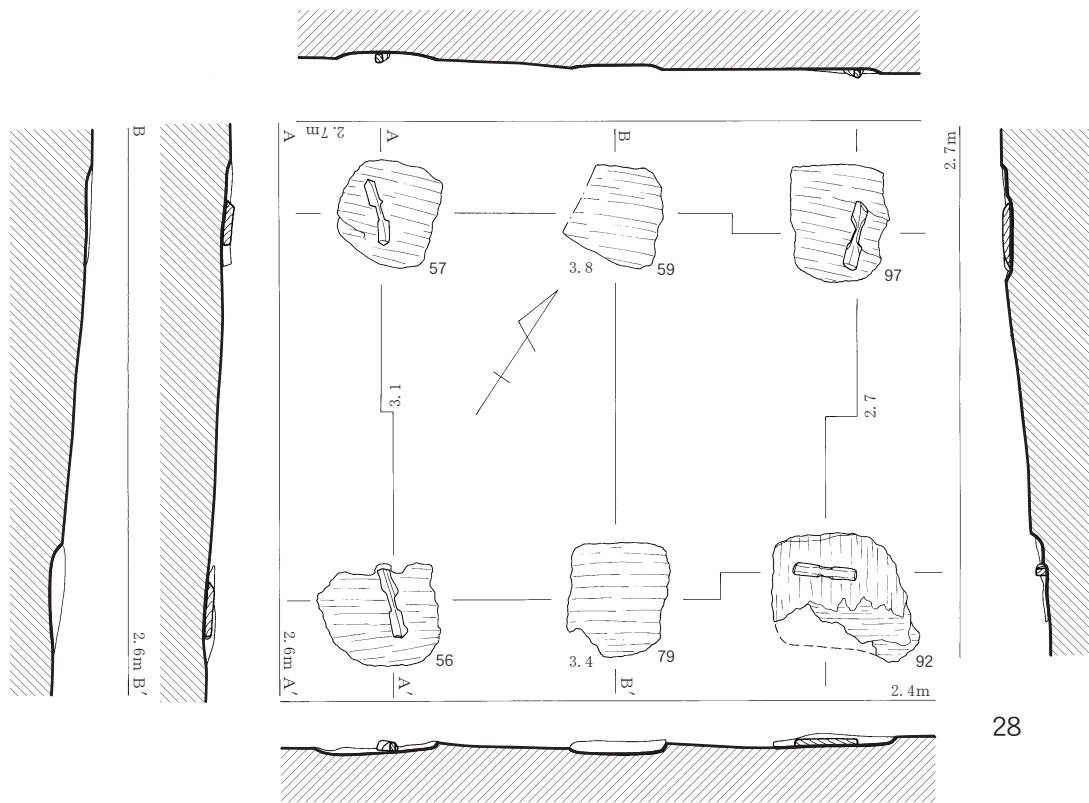
22・23は素口縁の鉢である。



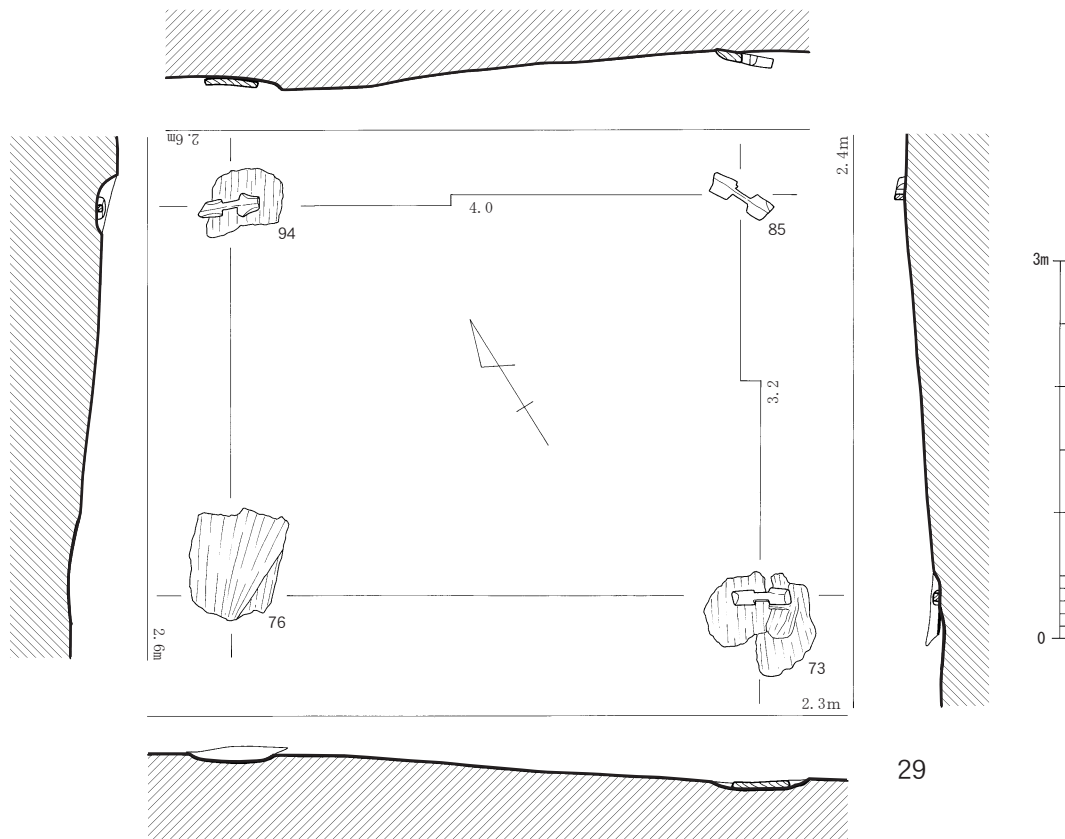
第117图 II区26·27号掘立柱建物迹实测图 (1/60)



第118图 II区10·12·16·17·20·22·25·26·28·32·34·38·39号
掘立柱建物跡出土土器実測图(1/4)



28

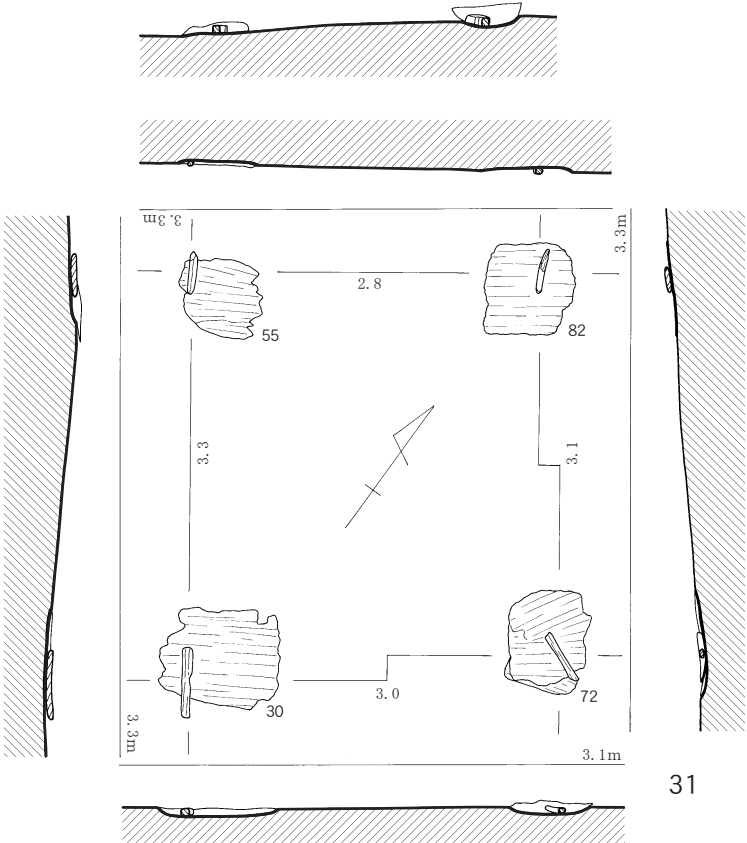
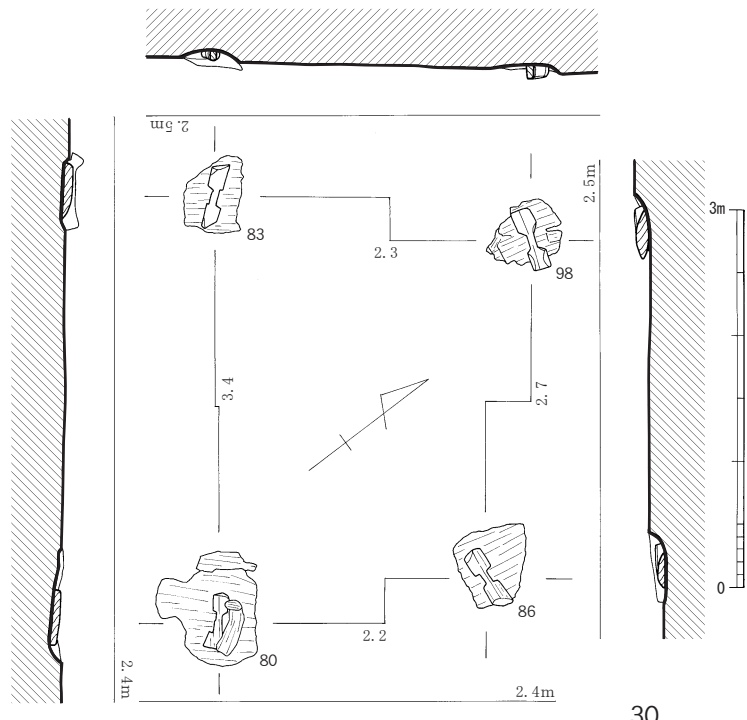


29

第119图 II区28·29号掘立柱建物跡実測图(1/60)

29号掘立柱建物跡 (第119図)

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤73・76・85・94からなり、横木の形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考えられるが、礎盤76では横木が失われており、礎盤85では樹皮等が敷かれておらず直接横木が埋置されている点等がやや不安要素であると感じられる。梁行3.2m、桁行4.0mを測り、床面積は12.8㎡程度となる。30号建物を切る先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されなかったが、残存する礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

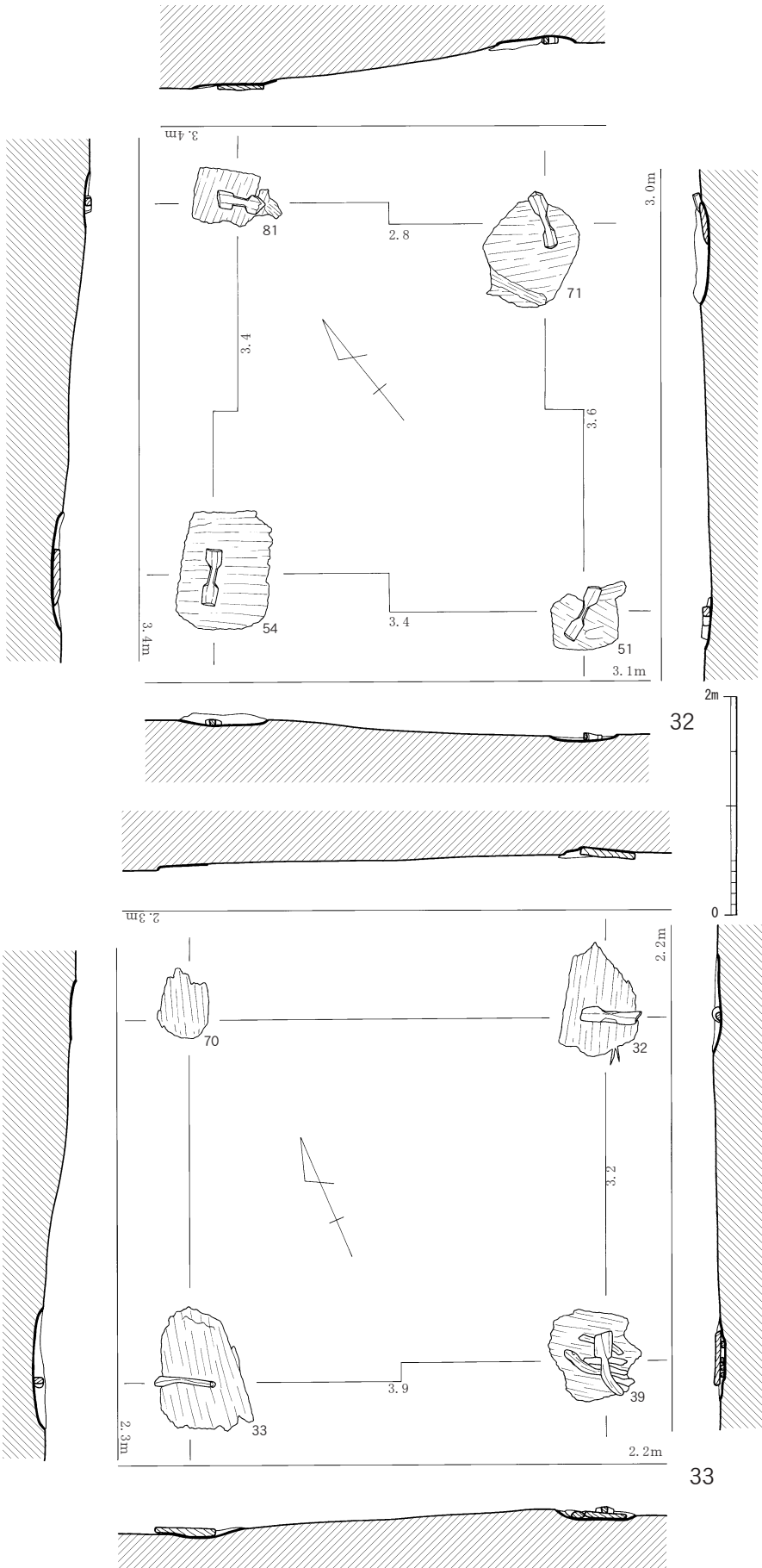


30号掘立柱建物跡 (第120図)

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤80・83・86・98からなり、横木の形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考えられるが、両桁行間の長さの差が約70cmと他の多くの建物に比して大きい点にやや不安が残る。梁行2.25m、桁行3.05mを測り、床面積は6.9㎡程度となる。32号建物を切り、29号建物に切られる先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤も不整形な形でしか検出できなかったため柱穴の形状は判断しがたい。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

第120図 Ⅱ区30・31号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

30号建物を切る先後関係が認められる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤も不整形な形でしか検出できなかったため柱穴の形状は判断しがたい。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。



31号掘立柱建物跡（第120図）

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤30・50・72・82からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。横木は小型で細い特徴的なものである。梁行2.9m、桁行3.2mを測り、床面積は9.3㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

32号掘立柱建物跡（第121図）

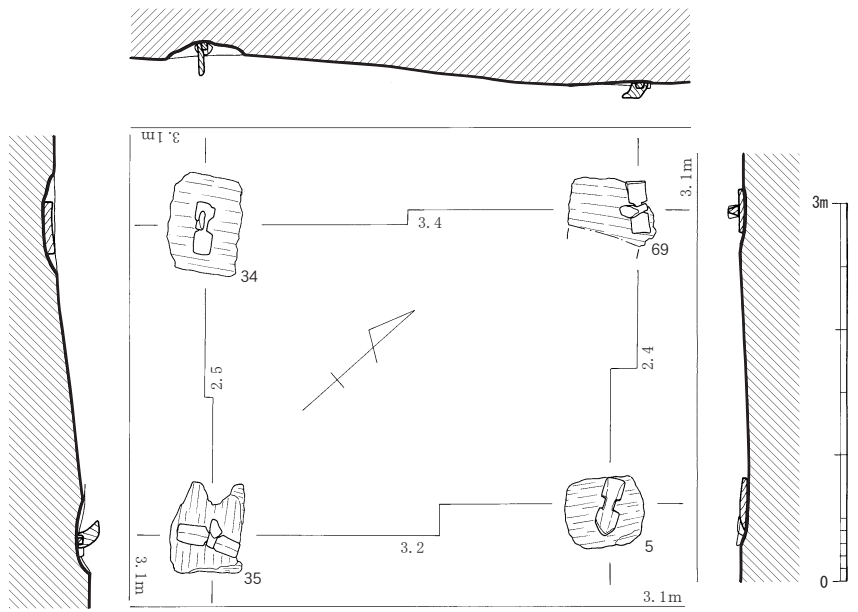
Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤51・54・71・81からなり、横木の形状の類似性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと思われるが、梁行の値が2.8mと3.4mからなり、両梁間の長さの相違が大きい点にやや不安が残る。梁

第121図 Ⅱ区32・33号掘立柱建物跡実測図（1/60）

行 3.1 m、桁行 3.5 m を測り、床面積は 10.9 m² 程度。30 号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器（第 118 図 24・25）

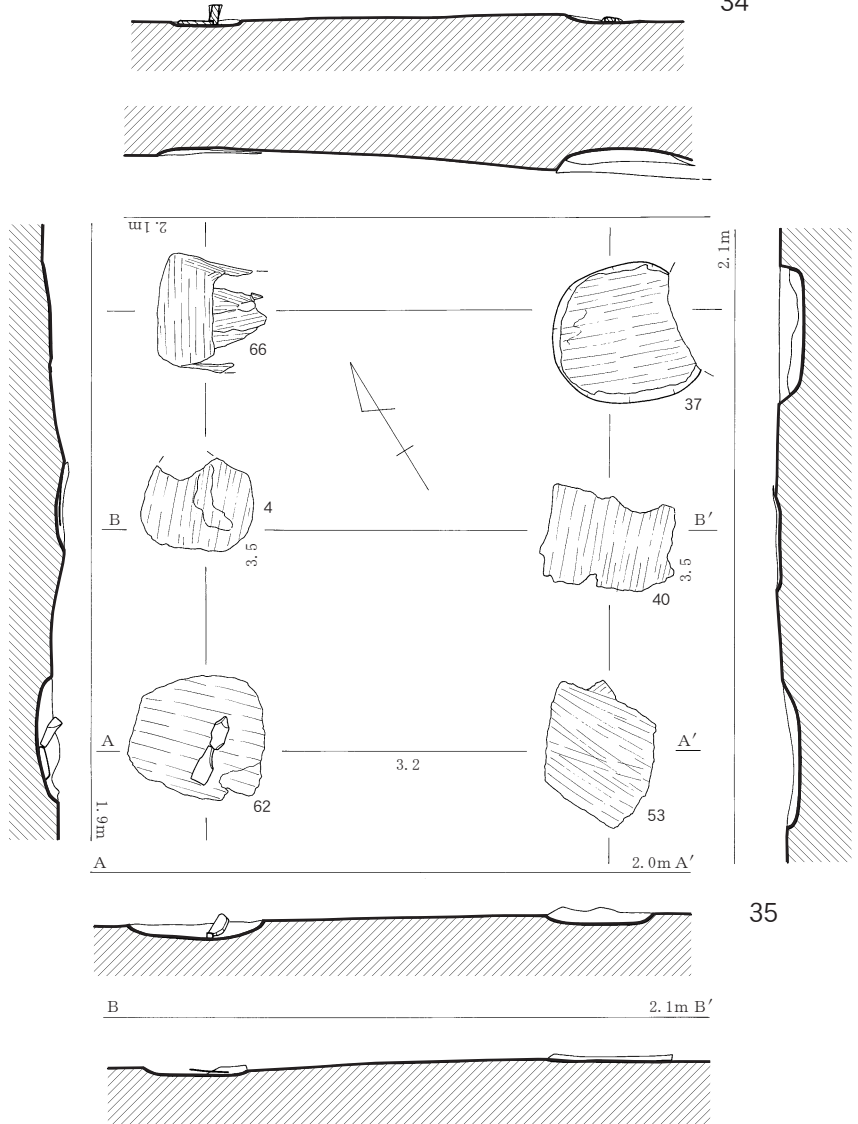
24・25 は在地系甕の口縁部である。25 は口唇部にキザミを付す。



34

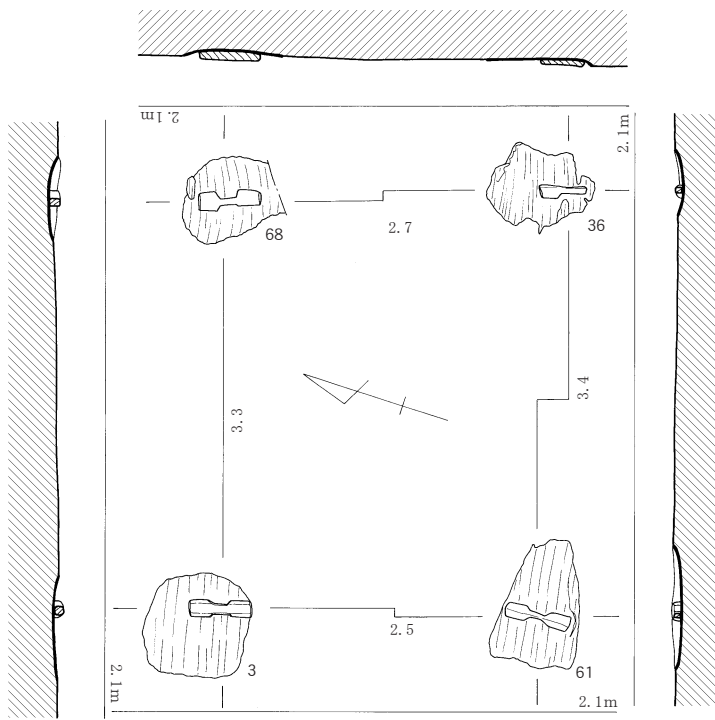
33 号掘立柱建物跡（第 121 図）

Ⅱ 区中央部南側に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 32・33・39・70 からなり、礎盤 70 は横木が失われ大きく削られた状態で検出し、他の礎盤の横木も類似性が低く、礎盤間の相対的な位置関係から判断した組み合わせであり、この建物の確実性はやや低い。礎盤 39 では横木の下に直行する形で複数の枕木を配置する。梁行 3.2 m、桁行 3.9 m を測り、床面積は 12.5 m² 程度となる。35 号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向がある。図示できる出土遺物はない。



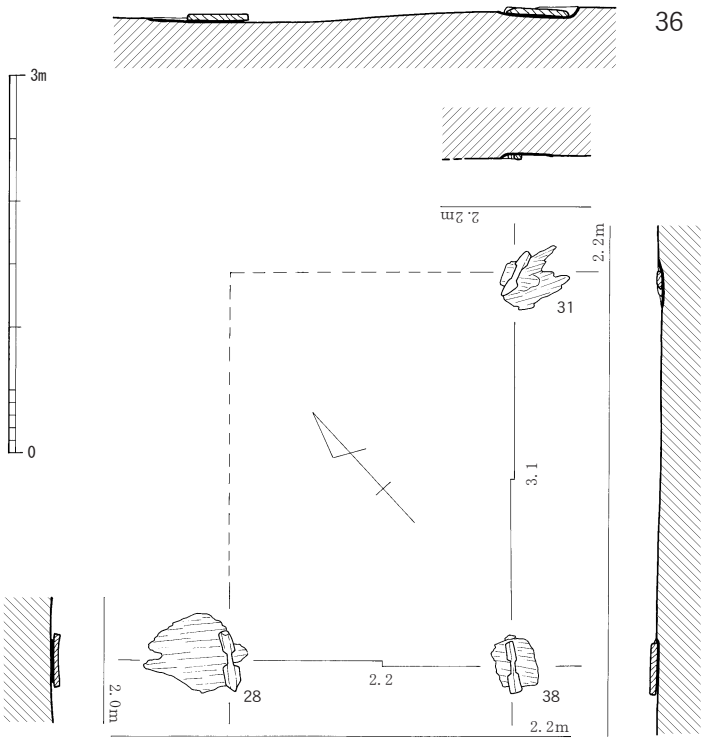
35

第 122 図 Ⅱ 区 34・35 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



34号掘立柱建物跡 (第122図)

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤5・34・35・69からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性が認められ、3基の礎盤で柱根の一部が残存することからこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。柱根は欠損しているが径15cm程度と考えられる。梁行2.45m、桁行3.3mを測り、床面積は8.1㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向が見られる。



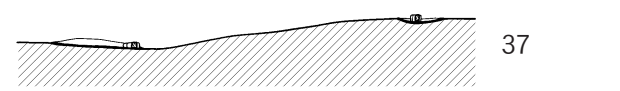
36

出土土器 (第118図26)

26は小型の壺の口縁部である。

35号掘立柱建物跡 (第122図)

Ⅱ区中央部南側に位置し、2×1間の建物である。礎盤4・37・40・53・62・66からなり、ほとんどの礎盤で横木が失われている。横木の類似性を検討することはできないが、横木の欠ける共通性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。この建物は廃棄の際に、柱を抜くだけでなく、再利用のためか柱穴の底部まで掘削して横木を取り去ったものと考えられる。唯一横木の残存する礎盤62も横木は欠損しており、そのために取り去られずに埋置されたままとなっていた可能性が想定される。ほとんど横木が失われているため、やや正確性には欠けるが、梁行約3.2m程度、桁行約3.5



37

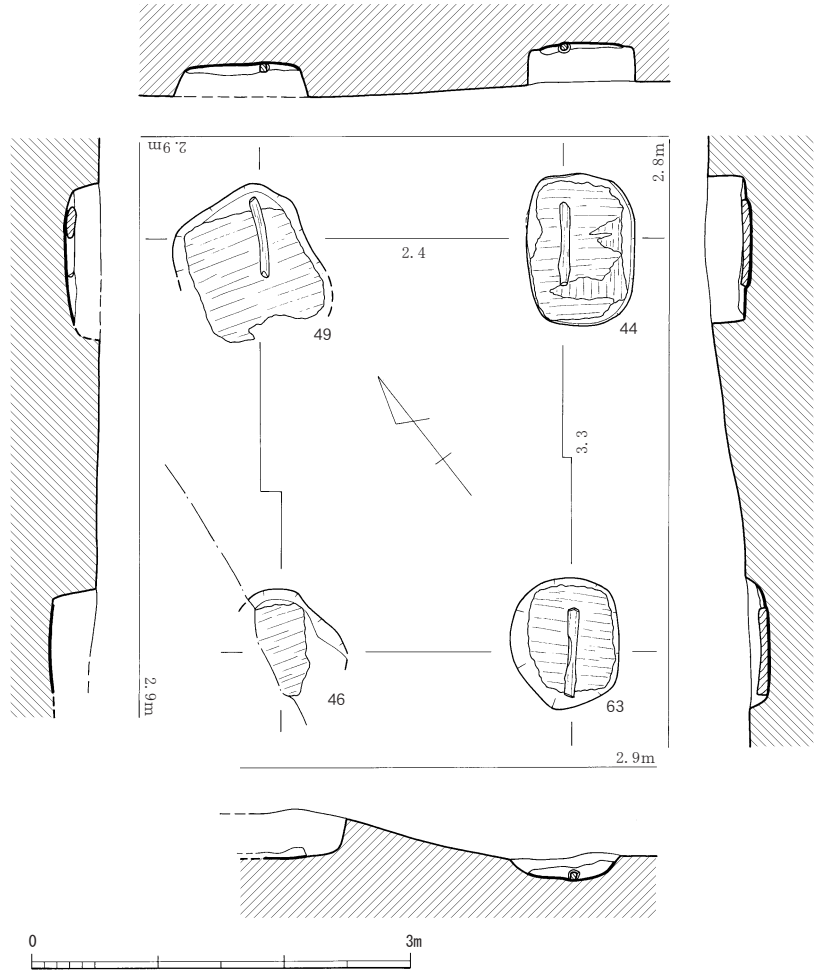
第123図 Ⅱ区36・37号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

mで床面積は11.2㎡程度と思われる。37号建物を切り、36号建物に切られる。一部掘形の検出

された柱穴や礎盤の形状から、柱穴は隅丸方形に近いものと判断される。礎盤間でわずかに西方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

36号掘立柱建物跡（第123図）

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤3・36・61・68からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行2.6m、桁行3.35mを測り、床面積は8.7㎡程度となる。35・37号建物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる遺物は出土していない。



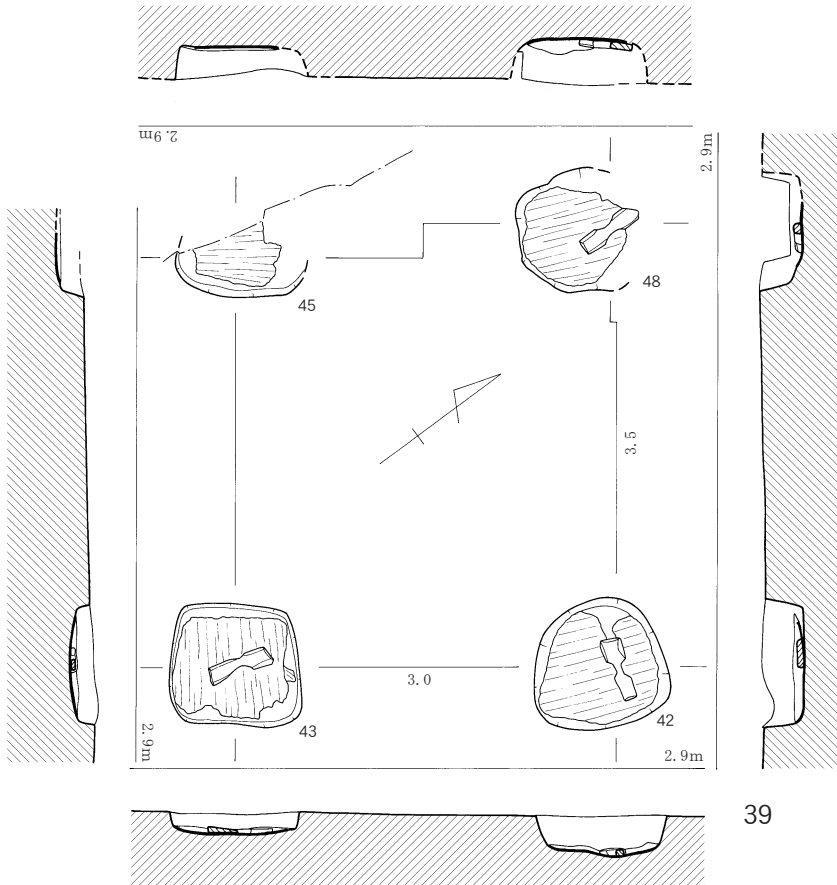
第124図 Ⅱ区38号掘立柱建物跡実測図（1/60）

37号掘立柱建物跡（第123図）

Ⅱ区中央部南側に位置し、1×1間の建物である。礎盤28・31・38からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。横木は小形のものである。検出されなかった北側の礎盤の想定位置には、35・36号建物に帰属する礎盤があり、これらの掘削の際に欠失したと考えられる。梁行2.2m、桁行3.1mを測り、床面積は6.8㎡程度となる。35・36号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤もある程度削られたものばかりのため柱穴の形状は判断しがたい。礎盤間で一定の方向性のある高低差は確認できない。図示できる遺物は出土していない。

38号掘立柱建物跡（図版39、第124図）

Ⅱ区南西隅に位置する。礎盤44・46・49・63からなり、建物の組み合わせに対応しない他の礎盤は周辺になく、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。礎盤46は一部を検出したのみで、調査区外に至っており、横木も検

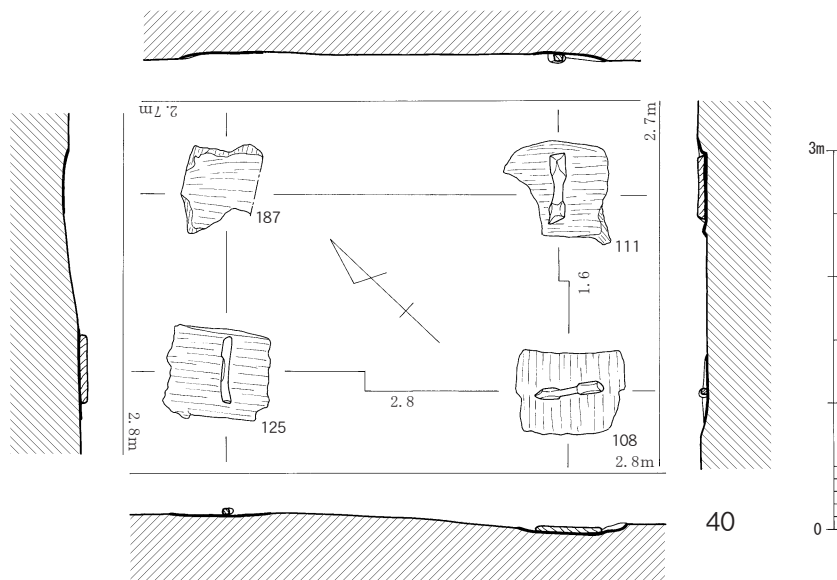


出されていない。横木は細長い特徴的なものである。検出した状態では1×1間の建物であるが、調査区外の西側へ延びてより規模が大きくなる可能性も捨てきれない。1×1間として梁行2.4m、桁行3.3mを測り、床面積は7.9㎡程度となる。39号建物に切られる。確認できた柱穴の平面は隅丸方形に近い。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。

出土土器 (第118図27)

27は大型の壺の底部で、レンズ状である。

39



39号掘立柱建物跡 (図版39、第125図)

II区南西隅に位置し、1×1間の建物である。礎盤42・43・45・48からなり、建物の組み合わせに対応しない他の礎盤は周辺になく、横木の形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。礎盤45は一部を検出したのみで、調査区外に至っており、横木も検出されていない。梁行3.0

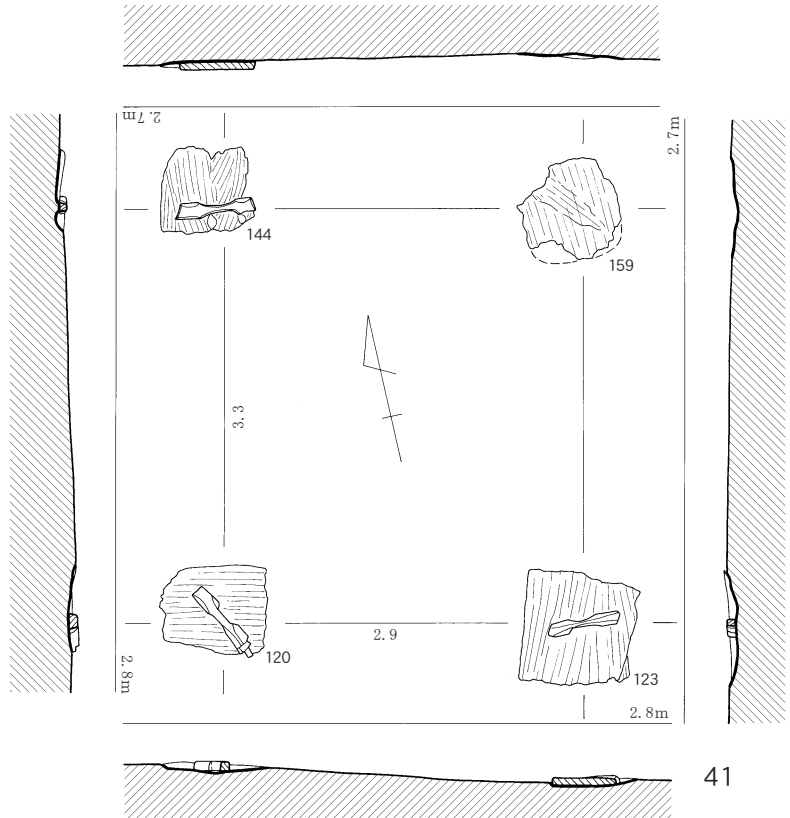
40

第125図 II区39・40号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

m、桁行3.5mを測り、床面積は10.5㎡程度となる。38号建物を切る。調査区外の南側へ延びてより規模が大きくなる可能性はあるが、桁行・梁行の長さの差が小さいこともあり、非常に低いと考えられる。確認できた柱穴の平面は隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差は確認できない。

出土土器 (第 118 図 28 ~ 35)

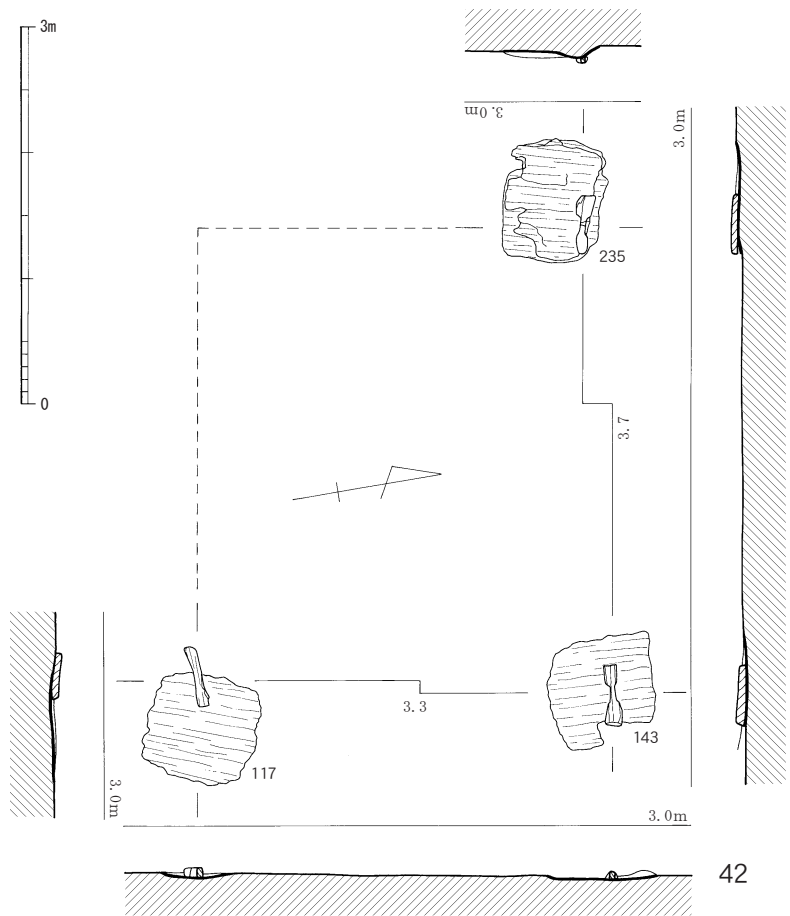
28 は壺の口縁部で、口唇部にキザミを付す。29 は頸基部が細く、口縁部が外反して開き、口唇部はやや幅広い面を成し、中部九州系の壺と思われる。30・31 は在地系甕の口縁部で、30 は口唇部にキザミを付す。32 は高杯の口縁部で、内外面ともに暗文が密に施される。33 は屈曲して外側へ直線的にのびる鉢の口縁部である。34 は素口縁の鉢で、口縁端部付近が内湾気味である。35 は胴部から口縁部まで直線的にのびて開き、口縁端部付近はやや肥厚する鉢である。



41

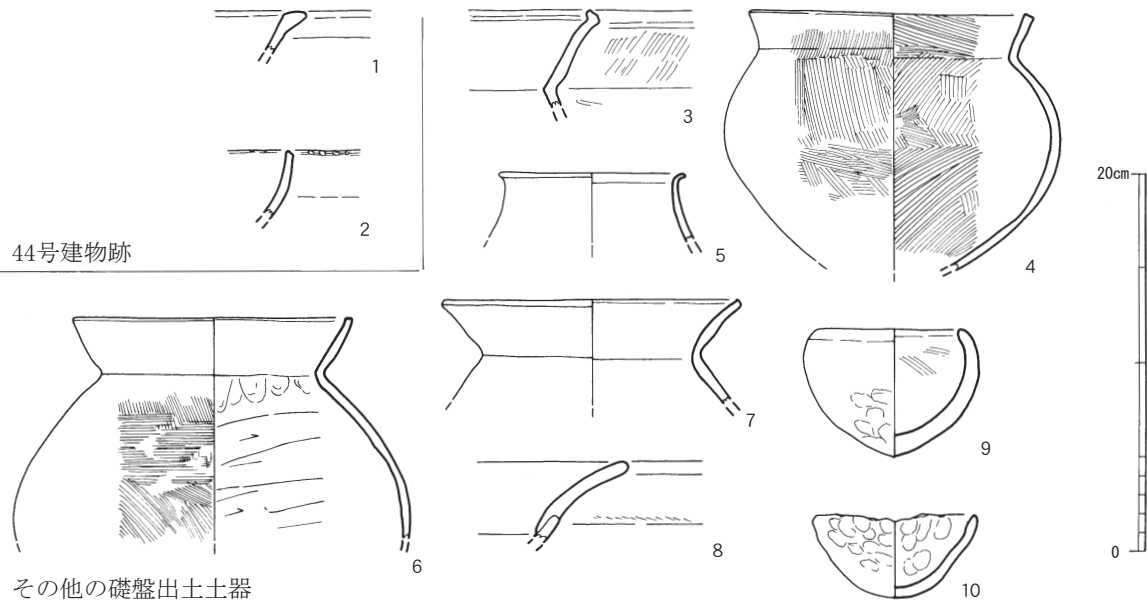
40 号掘立柱建物跡 (第 125 図)

Ⅱ区中央部西側に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 108・111・125・187 からなり、礎盤 108・125 の横木の細くて小型である類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性が認められる。しかし、礎盤 111 の横木は前二例とは形状がやや異なり、礎盤 187 は横木が失われている上に他の礎盤との切り合いも激しく、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。また梁行の長さが非常に短く、実は梁方向に延長して桁となり、2 × 1 間の建物となる可能性も捨てきれない。検出した状況で梁行 1.6 m、桁行 2.8 m を測り、床面積は 4.5 m² 程度となる。21・22・24 号建



42

第 126 図 Ⅱ区 41・42 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 127 図 II 区 44 号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図 (1/4)

物を切る。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

41 号掘立柱建物跡 (第 126 図)

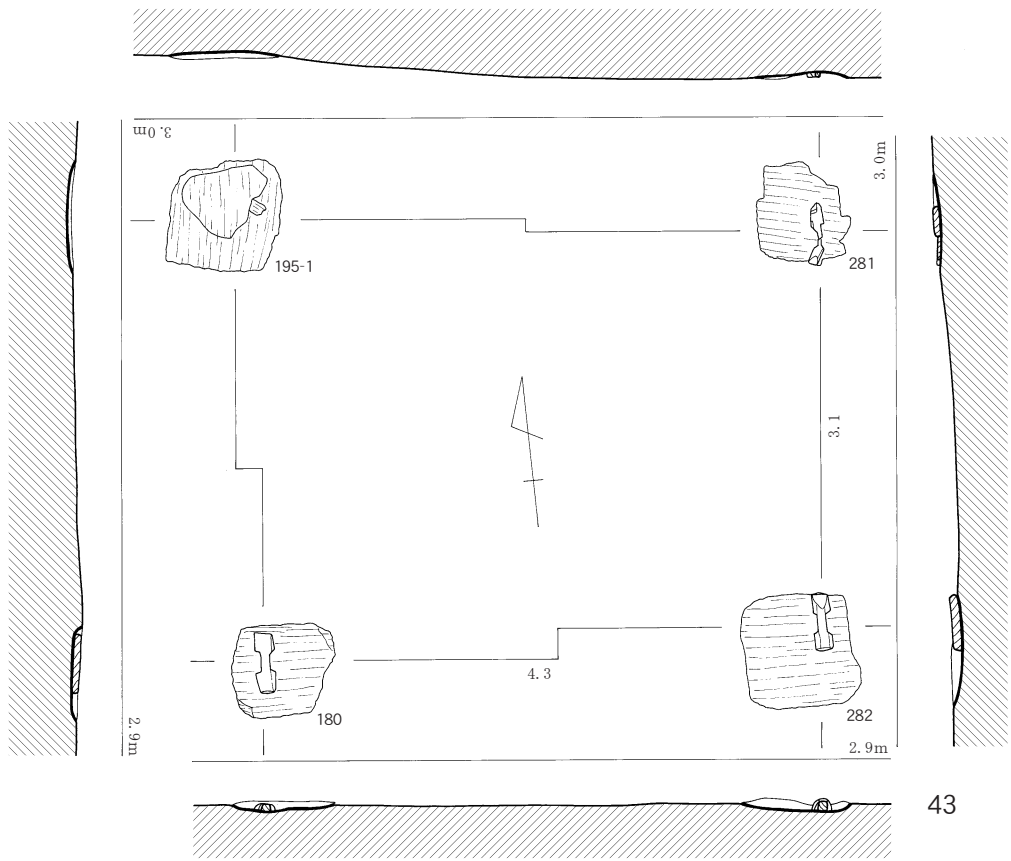
II 区東端の中央部付近に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 120・123・144・159 からなり、礎盤 159 では横木が失われているが、他の礎盤の横木の類似性からこの建物の確実性は高い。梁行 2.9 m、桁行 3.3 m を測り、床面積は 9.6 m² 程度となる。16 号建物に切られる先後関係である。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

42 号掘立柱建物跡 (第 126 図)

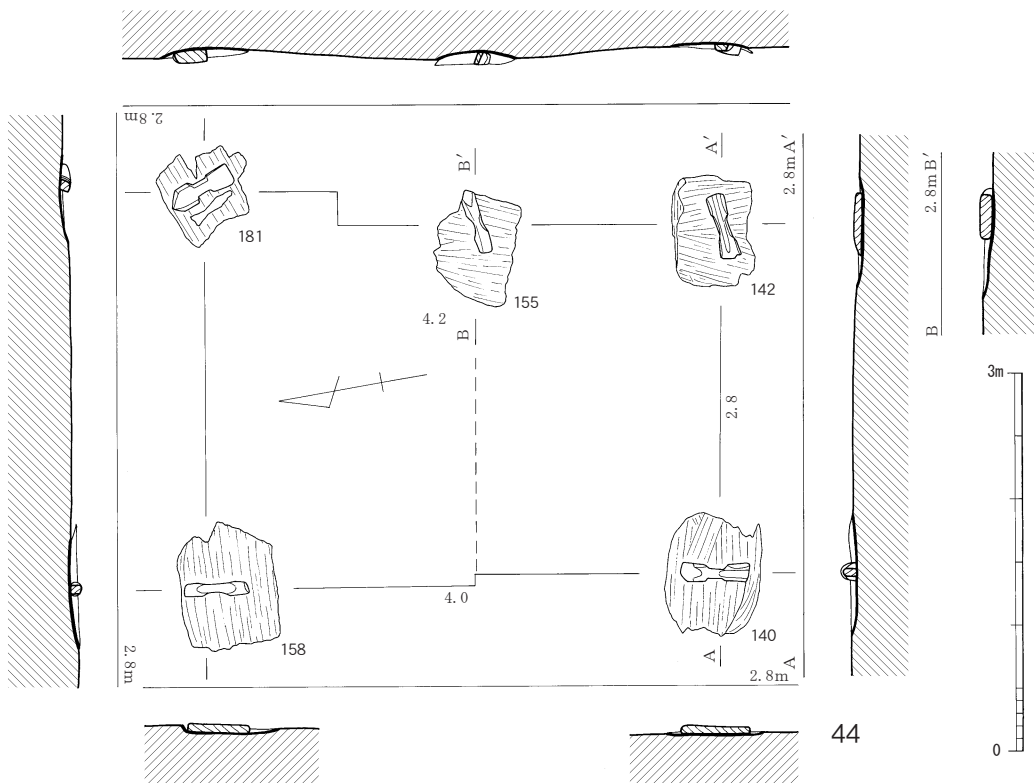
II 区中央部の西側に位置し、1 × 1 間の建物である。礎盤 117・143・235 からなり、南西側の柱穴が対応するはずの位置からは礎盤は検出されておらず、各礎盤で検出した横木の形状も必ずしも類似しているものではないので、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。梁行 3.3 m、桁行 3.7 m を測り、床面積は 12.2 m² 程度となる。14・16 号建物を切る先後関係である。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

43 号掘立柱建物跡 (第 128 図)

II 区西端の中央部よりやや北側に位置し、1 × 1 間の建物である。梁行 3.1 m、桁行 4.3 m を測り、床面積は 13.3 m² 程度となる。礎盤 180・195 - 1・281・282 からなり、礎盤 195 では横木が失われているが、他の礎盤より検出した横木の埋置軸は共通している。しかし、桁間が他に類を見ない程の長さがあり、この建物の確実性にはやや不安があり、桁間の中間に位置する付近において、

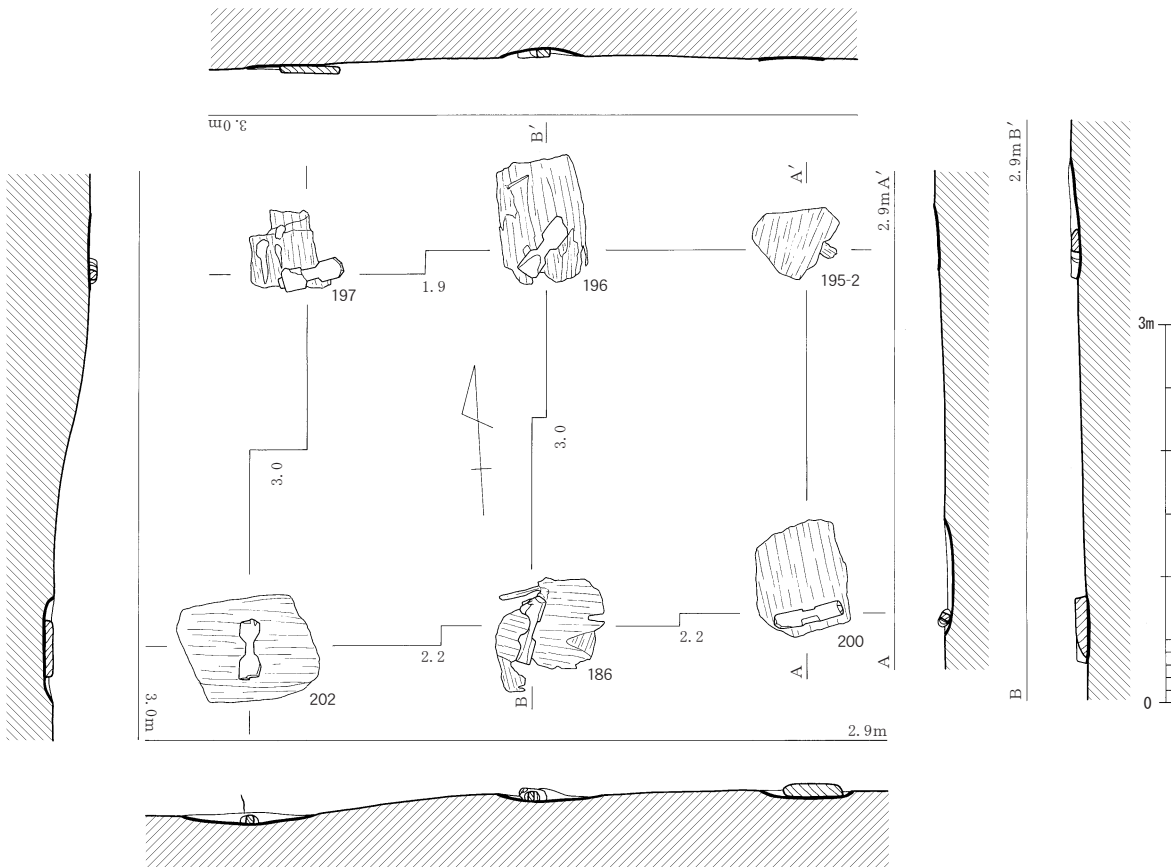


43

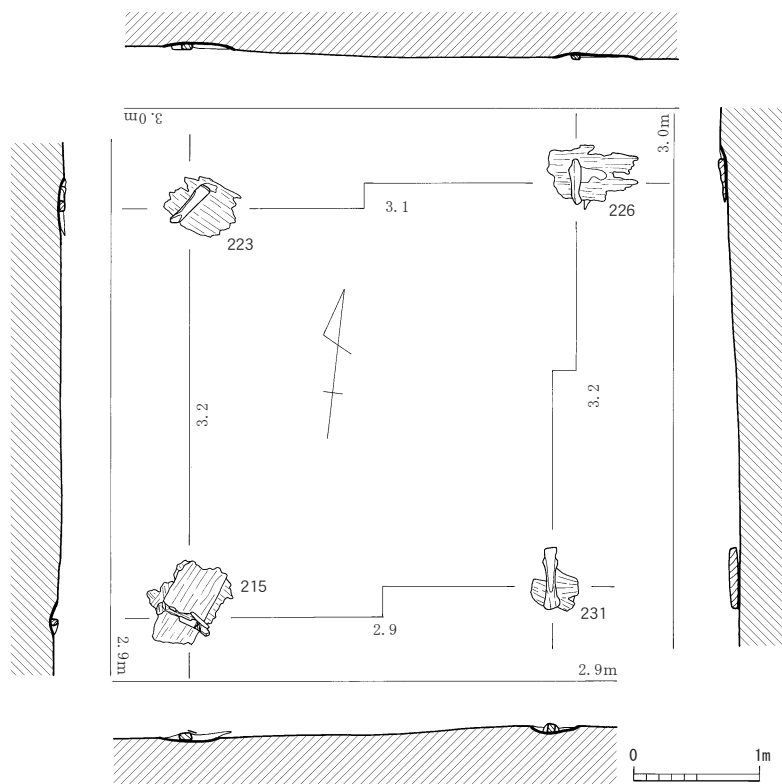


44

第 128 图 II 区 43 · 44 号掘立柱建筑物迹实测图 (1/60)



第 129 図 II 区 45 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 130 図 II 区 46 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

組み合わせに付加される柱穴が存在する可能性も考えられる。13号建物を切り、45号建物に切られる先後関係である。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる遺物は出土していない。

44号掘立柱建物跡 (第128図)

II区西端の中央部よりやや北側に位置し、2×1間の建物である。礎盤 140・142・155・158・181 からなり、桁西列の中央の位置の礎盤は検出でき

表3 II区掘立柱建物跡一覧表

遺構名	挿洞番号	規模	桁長	梁長	床面積	構成柱穴の遺構名	確実性	傾斜
1号掘立柱建物跡	98	1 × 1 間	2.9 m	2.4 m	7.0 m ²	建1-1、建1-2、建1-3、建1-4	◎	
2号掘立柱建物跡	99	3 × 1 間	6.4 m	4.2 m	26.9 m ²	建2-1~8	◎	北
3号掘立柱建物跡	100	3 × 1 間	6.0 m	4.0 m	24.0 m ²	建3-1~7	◎	
4号掘立柱建物跡	101	1 × 1 間	3.3 m	2.5 m	8.3 m ²	建4-1、建4-2、建4-3、建4-4	◎	
5号掘立柱建物跡	103	2 × 1 間	4.7 m	4.0 m	18.8 m ²	礎盤270、礎盤271、礎盤273、礎盤276、名称無、名称無	◎	東
6号掘立柱建物跡	104	2 × 1 間	4.05 m	2.93 m	11.9 m ²	礎盤250、礎盤251、礎盤252、礎盤253、礎盤254、礎盤255	◎	南西
7号掘立柱建物跡	105	1 × 1 間	3.6 m	2.8 m	10.1 m ²	礎盤243-1、礎盤243-2、礎盤248、礎盤259	◎	北西
8号掘立柱建物跡	106	2 × 1 間	4.0 m	3.1 m	12.4 m ²	礎盤244-1、礎盤244-2、礎盤245、礎盤246、礎盤258、礎盤266	◎	西
9号掘立柱建物跡	107	2 × 1 間	(3.7) m	2.4 m	(8.9) m ²	礎盤242、礎盤247、礎盤260、礎盤268、—、—	△	
10号掘立柱建物跡	107	2 × 1 間	5.0 m	2.95 m	14.8 m ²	礎盤21、礎盤266、礎盤272、礎盤277、礎盤278、礎盤280	◎	
11号掘立柱建物跡	108	2 × 1 間	5.35 m	3.23 m	17.3 m ²	礎盤20、礎盤241、礎盤264、礎盤265、礎盤270、礎盤284	◎	西
12号掘立柱建物跡	109	2 × 1 間	3.8 m	3.0 m	11.4 m ²	礎盤187、礎盤189、礎盤207、礎盤224、礎盤227、礎盤229	◎	
13号掘立柱建物跡	109	1 × 1 間	3.5 m	2.4 m	8.4 m ²	礎盤183、礎盤208、礎盤210、礎盤212	◎	
14号掘立柱建物跡	110	1 × 1 間	3.5 m	2.4 m	8.4 m ²	礎盤131、礎盤172、礎盤240、—	◎	
15号掘立柱建物跡	110	1 × 1 間	3.3 m	2.2 m	7.3 m ²	礎盤124、礎盤141、礎盤156、—	◎	
16号掘立柱建物跡	111	1 × 1 間	3.7 m	3.5 m	13.0 m ²	礎盤116、礎盤118、礎盤146、礎盤157	◎	
17号掘立柱建物跡	111	2 × 1 間	3.9 m	3.1 m	12.1 m ²	礎盤165-1、礎盤170、礎盤184、礎盤193、礎盤205、礎盤213	◎	北西
18号掘立柱建物跡	112	1 × 1 間	3.9 m	3.3 m	12.9 m ²	礎盤164、礎盤171、礎盤173、礎盤204	△	西
19号掘立柱建物跡	112	1 × 1 間	2.4 m	2.2 m	5.3 m ²	礎盤165-2、礎盤169、礎盤192、—	◎	
20号掘立柱建物跡	113	2 × 1 間	3.3 m	2.8 m	9.2 m ²	礎盤161、礎盤168、礎盤182、礎盤191、礎盤194、—	△	
21号掘立柱建物跡	113	1 × 1 間	3.4 m	3.1 m	10.5 m ²	礎盤106、礎盤148、礎盤185、名称無	◎	東
22号掘立柱建物跡	114	2 × 1 間	4.55 m	3.73 m	17.0 m ²	礎盤100、礎盤104、礎盤112、礎盤163、礎盤186、礎盤190	◎	北西
23号掘立柱建物跡	115	1 × 1 間	3.75 m	2.5 m	9.4 m ²	礎盤96、礎盤99、礎盤102、礎盤107	◎	南
24号掘立柱建物跡	115	1? × 1 間	2.85 m	2.0 m	5.7 m ²	礎盤64、礎盤103、礎盤126、礎盤132	◎	
25号掘立柱建物跡	116	2 × 1 間	5.4 m	4.2 m	22.7 m ²	礎盤109、礎盤110、礎盤128、礎盤135、礎盤138、礎盤203	◎	
26号掘立柱建物跡	117	2 × 1 間	4.25 m	3.4 m	14.5 m ²	礎盤134、礎盤136、礎盤145、礎盤151、礎盤153、礎盤236	◎	南西
27号掘立柱建物跡	117	1 × 1 間	3.95 m	3.7 m	14.6 m ²	礎盤58、礎盤78、礎盤95、礎盤101	◎	南
28号掘立柱建物跡	119	2 × 1 間	3.6 m	2.9 m	10.4 m ²	礎盤56、礎盤57、礎盤59、礎盤79、礎盤92、礎盤97	◎	南東
29号掘立柱建物跡	119	1 × 1 間	4.0 m	3.2 m	12.8 m ²	礎盤73、礎盤76、礎盤85、礎盤94	◎	南
30号掘立柱建物跡	120	1 × 1 間	3.05 m	2.25 m	6.9 m ²	礎盤80、礎盤83、礎盤86、礎盤98	◎	南東
31号掘立柱建物跡	120	1 × 1 間	3.2 m	2.9 m	9.3 m ²	礎盤30、礎盤55、礎盤72、礎盤82	◎	南東
32号掘立柱建物跡	121	1 × 1 間	3.5 m	3.1 m	10.9 m ²	礎盤51、礎盤54、礎盤71、礎盤81	△	南
33号掘立柱建物跡	121	1 × 1 間	3.9 m	3.2 m	12.5 m ²	礎盤32、礎盤33、礎盤39、礎盤70	△	西
34号掘立柱建物跡	122	1 × 1 間	3.3 m	2.45 m	8.1 m ²	礎盤5、礎盤34、礎盤35、礎盤69	◎	西
35号掘立柱建物跡	122	2 × 1 間	(3.5) m	(3.2) m	(11.2) m ²	礎盤4、礎盤37、礎盤40、礎盤53、礎盤62、礎盤66	◎	西
36号掘立柱建物跡	123	1 × 1 間	3.35 m	2.6 m	8.7 m ²	礎盤3、礎盤36、礎盤61、礎盤68	◎	
37号掘立柱建物跡	123	1 × 1 間	3.1 m	2.2 m	6.8 m ²	礎盤28、礎盤31、礎盤38、—	◎	
38号掘立柱建物跡	124	1 × 1 間	3.3 m	2.4 m	7.9 m ²	礎盤44、礎盤46、礎盤49、礎盤63	◎	南
39号掘立柱建物跡	125	1 × 1 間	3.5 m	3.0 m	10.5 m ²	礎盤42、礎盤43、礎盤45、礎盤48	◎	
40号掘立柱建物跡	125	1? × 1 間	2.8 m	1.6 m	4.5 m ²	礎盤108、礎盤111、礎盤125、礎盤187	△	
41号掘立柱建物跡	126	1 × 1 間	3.3 m	2.9 m	9.6 m ²	礎盤120、礎盤123、礎盤144、礎盤159	◎	
42号掘立柱建物跡	126	1 × 1 間	3.7 m	3.3 m	12.2 m ²	礎盤117、礎盤143、礎盤235、—	△	
43号掘立柱建物跡	128	1 × 1 間	4.3 m	3.1 m	13.3 m ²	礎盤180、礎盤195-1、礎盤281、礎盤282	△	
44号掘立柱建物跡	128	2 × 1 間	4.1 m	3.0 m	12.3 m ²	礎盤140、礎盤142、礎盤155、礎盤158、礎盤181、—	△	
45号掘立柱建物跡	129	2 × 1 間	4.4 m	3.0 m	13.2 m ²	礎盤186、礎盤195-2、礎盤196、礎盤197、礎盤200、礎盤202	△	
46号掘立柱建物跡	130	1 × 1 間	3.2 m	3.0 m	9.6 m ²	礎盤215、礎盤223、礎盤226、礎盤231	△	

なかった。全体的には横木の形状はあまり類似しておらず、南北の桁間の差がややあるため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。梁行 3.0 m、桁行 4.1 mを測り、床面積は 12.3 m²程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。3号土坑に切られる。

出土土器 (第127図1・2)

1は高杯の口縁部で、外側に断面三角形に肥厚する。2は素口縁の鉢で、口唇部外側にキザミを付す。

45号掘立柱建物跡 (図版42、第129図)

II区西端の中央部よりやや北側に位置し、2 × 1間の建物である。礎盤 186・195 - 2・196・197・200・202 からなり、北東側の礎盤の横木は失われており、他の横木の形状も必ずしも類似しているものではないので、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。梁行 3.0 m、桁行 4.4 mを測り、床面積は 13.2 m²程度となる。13・43号建物を切り、1号建物に切られる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状より隅丸方形に近いものと考えられる。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

46号掘立柱建物跡（第130図）

Ⅱ区北半中央部付近に位置し、1×1間の建物である。礎盤215・223・226・231からなり、横木の形状も必ずしも類似しているものではないので、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。梁行3.0m、桁行3.2mを測り、床面積は9.6㎡程度となる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤の残存状況も良好ではないため、その形状は把握し難い。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる遺物は出土していない。

その他の礎盤の出土土器（図版54、第127図3～10）

Ⅱ区の礎盤について、他の複数の礎盤との組み合わせが確認できず、掘立柱建物跡として認識することができなかったものやその周辺から出土した土器の一部について以下で触れる。

3は口縁部が外反して開く壺で、なで肩の器形である。4は頸基部があまりくびれず太く、短い口縁部がやや外側へ直線的にのび、胴部はやや扁球形に近い。5は非常に短い口縁部が外反する小型の短頸壺である。6・7は布留系甕の口縁部から胴部にかけてである。8は高杯の口縁部である。9・10は素口縁の小型の鉢である。9はやや尖底気味で口縁部は内湾する。

(3) 土坑

Ⅱ区では25基の土坑を検出した。その中には、掘立柱建物跡の礎盤の検出のためにバックホーで下層へ掘り下げる段階において、当初土坑としていたものの建物の柱穴と判断したものや、新たに検出できたものが含まれる。結果的に柱穴とみなしたのは、掘削していた土坑と重複する形で下層から礎盤が検出されたもので、埋土が不明瞭なために柱穴の上層を掘削したのみで止まり、礎盤まで掘削が及んでいなかったものと判断した。これについては欠番として扱った。

1号土坑（図版43、第131図）

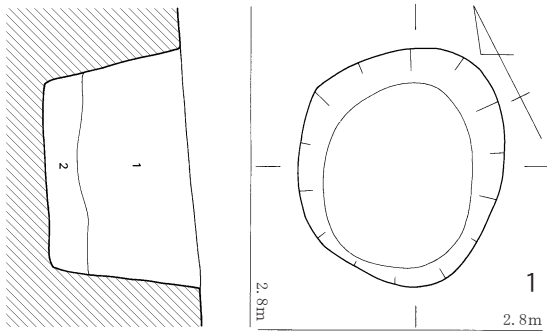
Ⅱ区南半中央部付近で、谷部へと落ちていく南側の斜面上に位置する土坑である。長軸94cm×短軸82cmの楕円形で、深さ60cmである。埋土は2層からなり、上層が暗灰褐色土主体で下層はややグライ化した淡灰褐色主体であるが、下層は底面より下位を掘りすぎた部分という可能性もある。遺物は出土していない。

2号土坑（図版43、第131図）

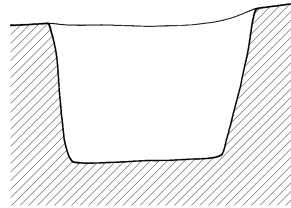
Ⅱ区中央部で北側から谷部へ落ち込み始める付近に位置する土坑である。長軸260cm×短軸98cmの非常に細長い楕円形である。深さ13cmでそこからさらに浅く落ち込む部分がある。南側は深さ10cm程度のテラス状となっている。礫や破損した土器が流れ込んだような状況で出土した。埋土は暗灰褐色土・灰褐色土が主体となる。26号掘立柱建物跡を切る。

出土土器（図版54、第132図1～5）

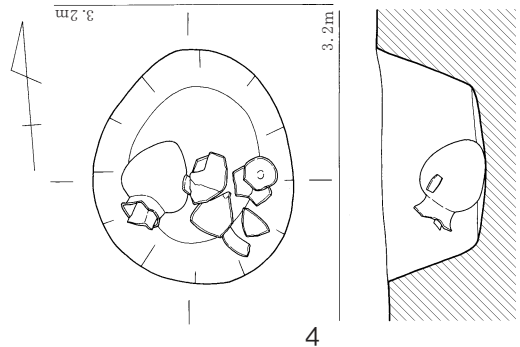
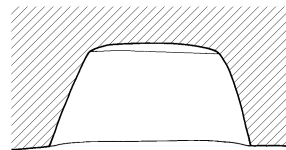
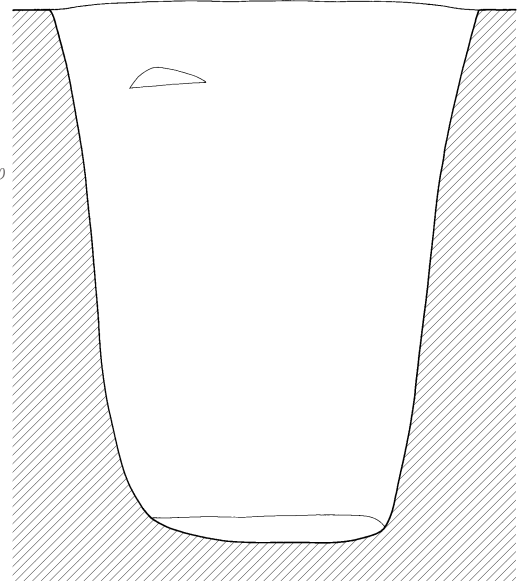
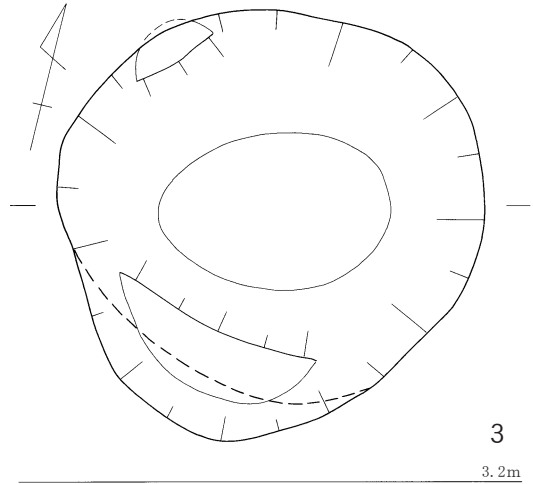
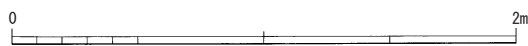
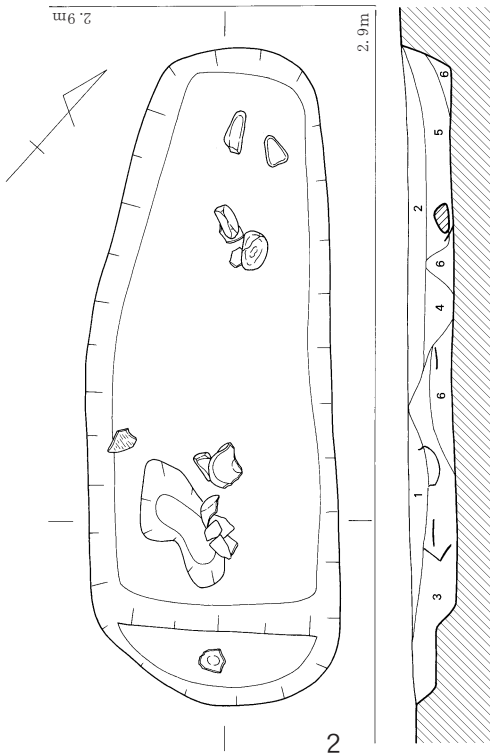
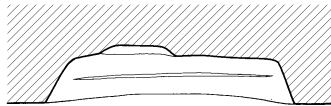
1は胴部が扁球形で、頸基部で弱くくびれ口頸部が短く直立する壺で、胴部外面下半にケズリを施す。2は胴部の張りは弱くやや寸胴な器形の壺で、底部はややレンズ状である。胴部外面下部は粗雑なケズリを施す。3は高杯で杯部中位で緩やかに屈曲し、口縁部は外反して開く。4は頸部でわずかにくびれ口縁部がやや外側に開く鉢。5は鉢の胴部より下位で、底部はやや厚い。



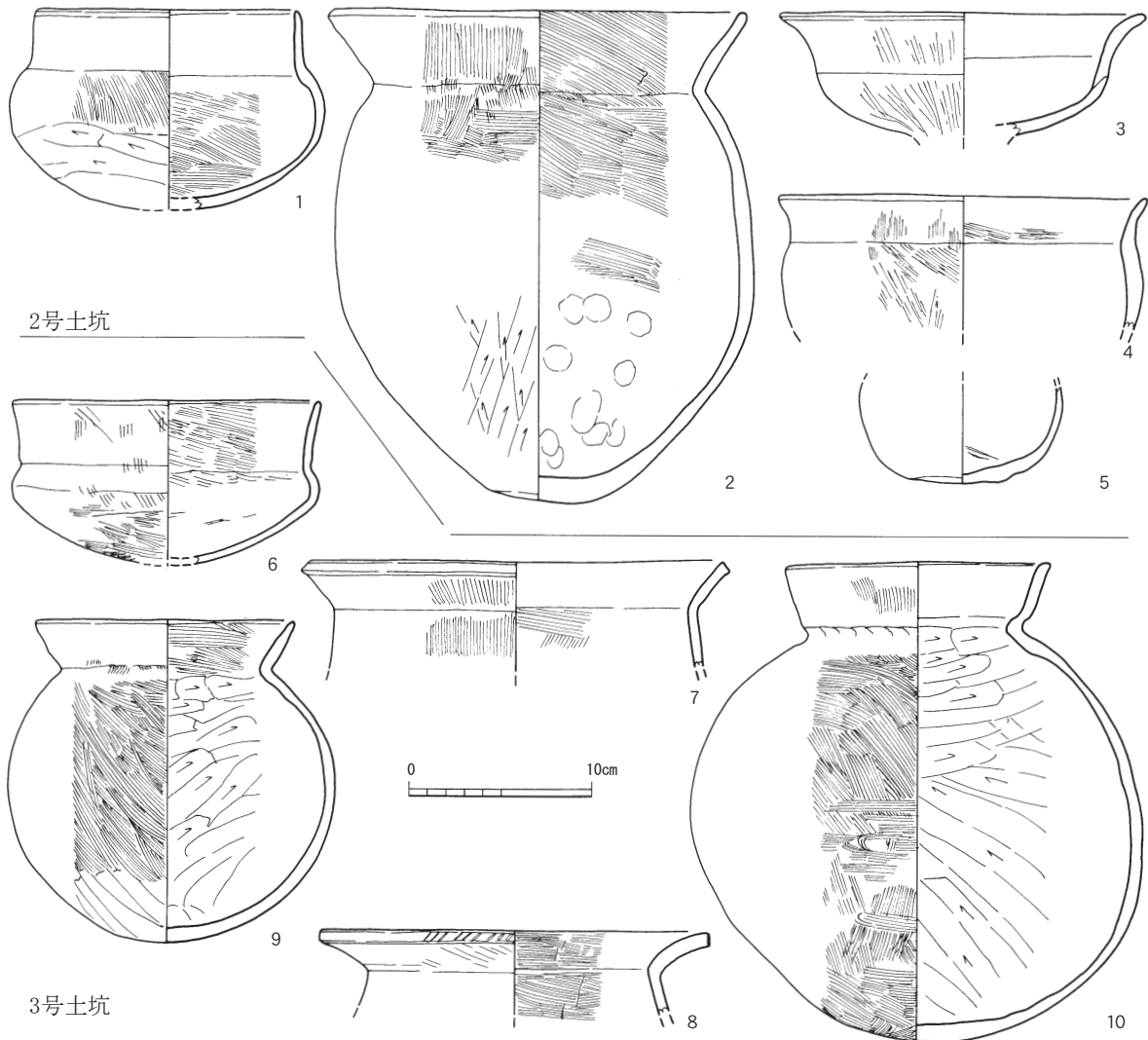
- 1 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック
多く含む
- 2 淡灰褐色土 粘性強くしまり
あまい ややグ
ライ化する 暗灰
褐色土がわずかに混
ざる 掘りすぎた
地山部分の可能性
あり



- 1 暗灰褐色土 黒褐色土が混ざりまだら状になる
- 2 暗灰褐色土 1とほぼ同じだがやや明るい
- 3 暗灰褐色土 1よりも暗い
- 4 灰褐色土 2より明るい 炭粒が混ざる
- 5 灰褐色土 4とほぼ同じ 炭粒の集中する部分有り
- 6 淡黄灰褐色土 地山に非常に近い



第131図 II区1~4号土坑跡実測図 (1/30)



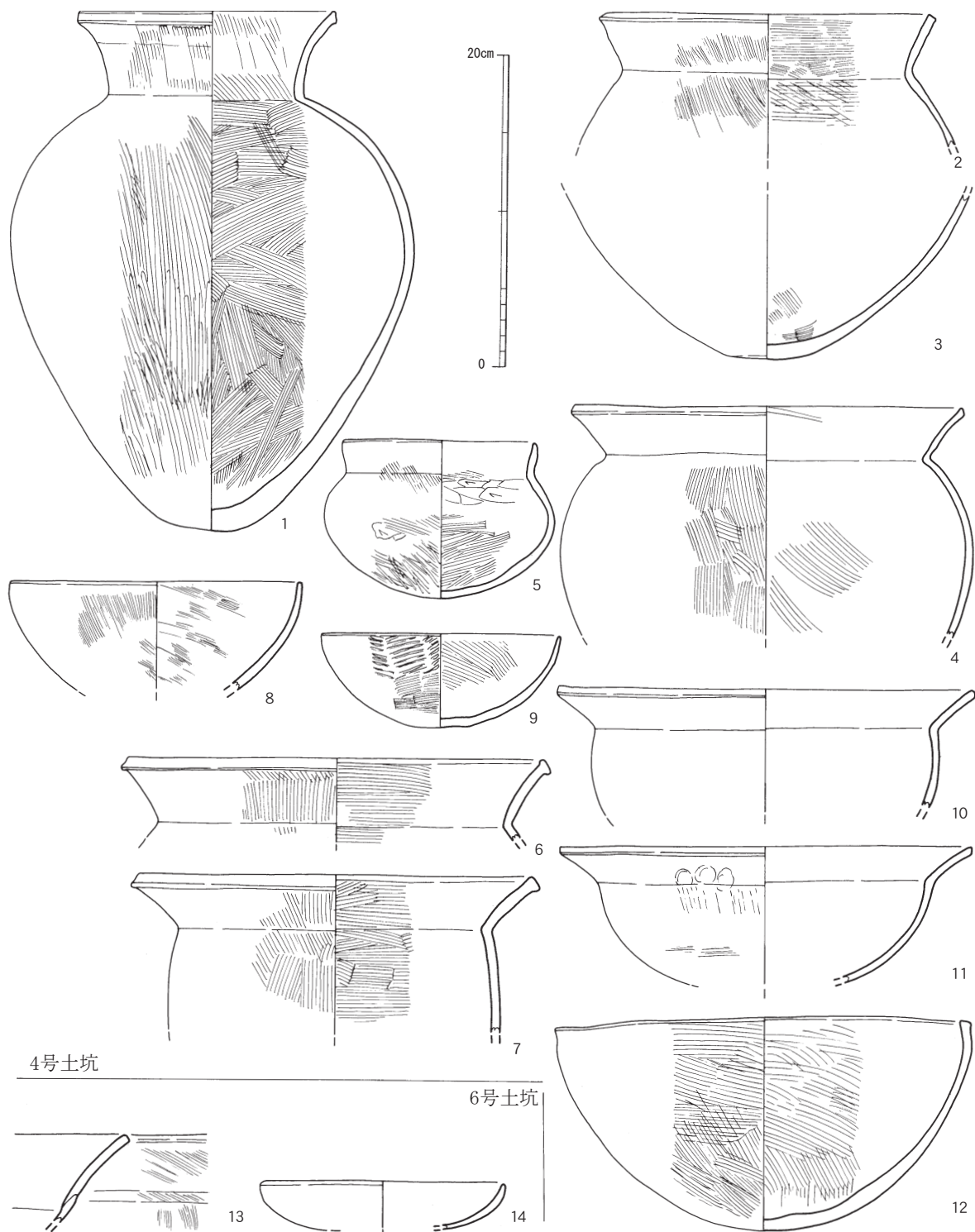
第 132 図 II 区 2・3 号土坑出土土器実測図 (1/4)

3 号土坑 (図版 43、第 132 図)

II 区中央部の東端に位置する土坑である。長軸 170 × 短軸 167cm の不整円形で、深さ 215cm である。北側に大きなテラス部があるが、この部分で切っている掘立柱建物跡の柱穴・礎盤と接しており、その埋土の一部を誤って同時に掘削してしまったため掘り広がったもので、実際には楕円形に近い形状であったと考えられる。一方、北側の小さなテラス部上には炭化物が集中して付着する。埋土はレンズ状の堆積がみられ、上層は暗灰褐色主体で炭粒が混じる。深さ 70cm 程度より下位の埋土は、グライ化して青灰色で細分はできず、粘質土主体の中にわずかに砂質のものが含まれる。44 号建物を切る。

出土土器 (図版 54、第 132 図 6 ~ 10)

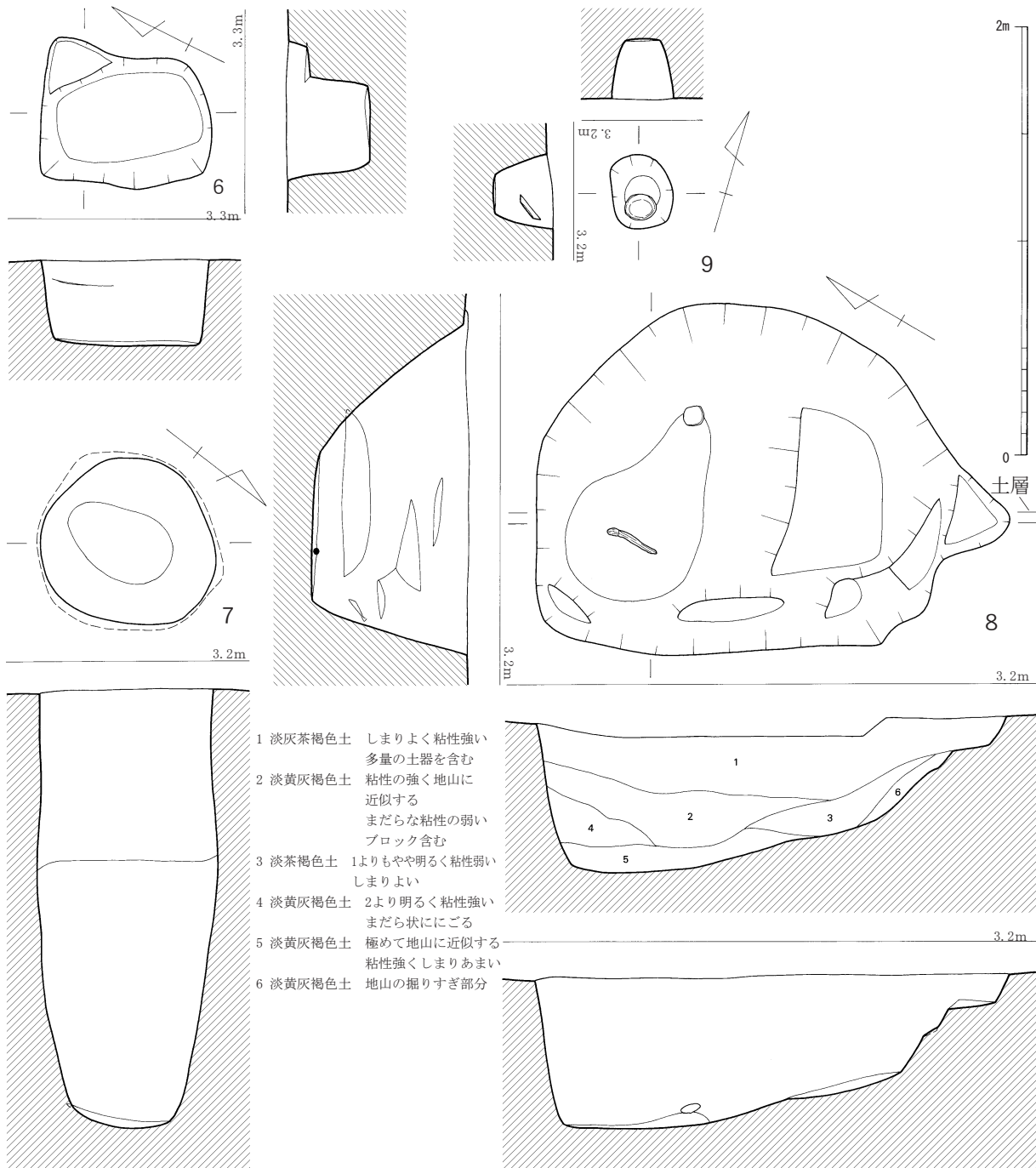
6 は胴部が扁球形で、わずかにくびれる頸基部からごくわずかに外側へ広がって口縁部がのびる直口壺である。7・8 は在地系甕で、8 は頸基部のくびれが強く、長胴と考えられる。口唇部にはキザミを付す。9 は小型の布留系甕で内面、および底部外面付近にケズリを施す。10 は布留系甕で、頸基部は強くしまり胴部は強く張って球状に近いが、やや歪んだ部分も目立つ。



第133図 II区4・6号土坑出土土器実測図(1/4)

4号土坑 (図版44、第131図)

II区中央部北側に位置する土坑である。長軸92cm×短軸80cmの楕円形で、深さ42cmである。深さ10cm程度から床面直上に至るまで完形に近いものや大きく欠損したものなどまとまった土器が出土した。



第134図 II区6～9号土坑実測図(1/30)

出土土器(図版54・55、第133図1～12)

1は頸基部が強くくびれ、口頸部が外反して開く壺である。2はくびれた頸基部から屈曲した口縁部がやや外側へ直線的にのびる壺である。3は非常に狭くわずかにレンズ状の壺の底部である。4は太い頸基部から外側へ強く屈曲して口縁部がのびる壺である。5は胴部が扁球形で、頸基部で屈曲して短い口縁部がわずかに外側の上方へのびる小型の壺である。6・7は在地系の甕で内外面ともにハケ調整を施す。8・9は素口縁の小型の鉢である。10・11は口縁部が屈曲し外側へ直線的にのびる鉢である。12は素口縁の大型の鉢である。

5号土坑

当初土坑としたが、直下から礎盤が検出されたため、柱穴の上層のみを掘削したと判断したため欠番とする。同一の建物として対応する他の柱穴・礎盤との組み合わせは確認できなかった。

6号土坑（図版 44、第 134 図）

Ⅱ北半の中央部付近に位置する土坑である。長軸 79cm × 短軸 66cm の不整形で、深さ 39cm である。北側に深さ 10cm 程度の深さでテラス部分が見られる。埋土は、にごりの少ない淡灰褐色主体である。

出土土器（第 133 図 13・14）

13 は高杯の口縁部で、内外面ともに屈曲部が残存し、上部はやや外反気味に開く。14 は素口縁の浅い鉢である。

7号土坑（図版 44、第 134 図）

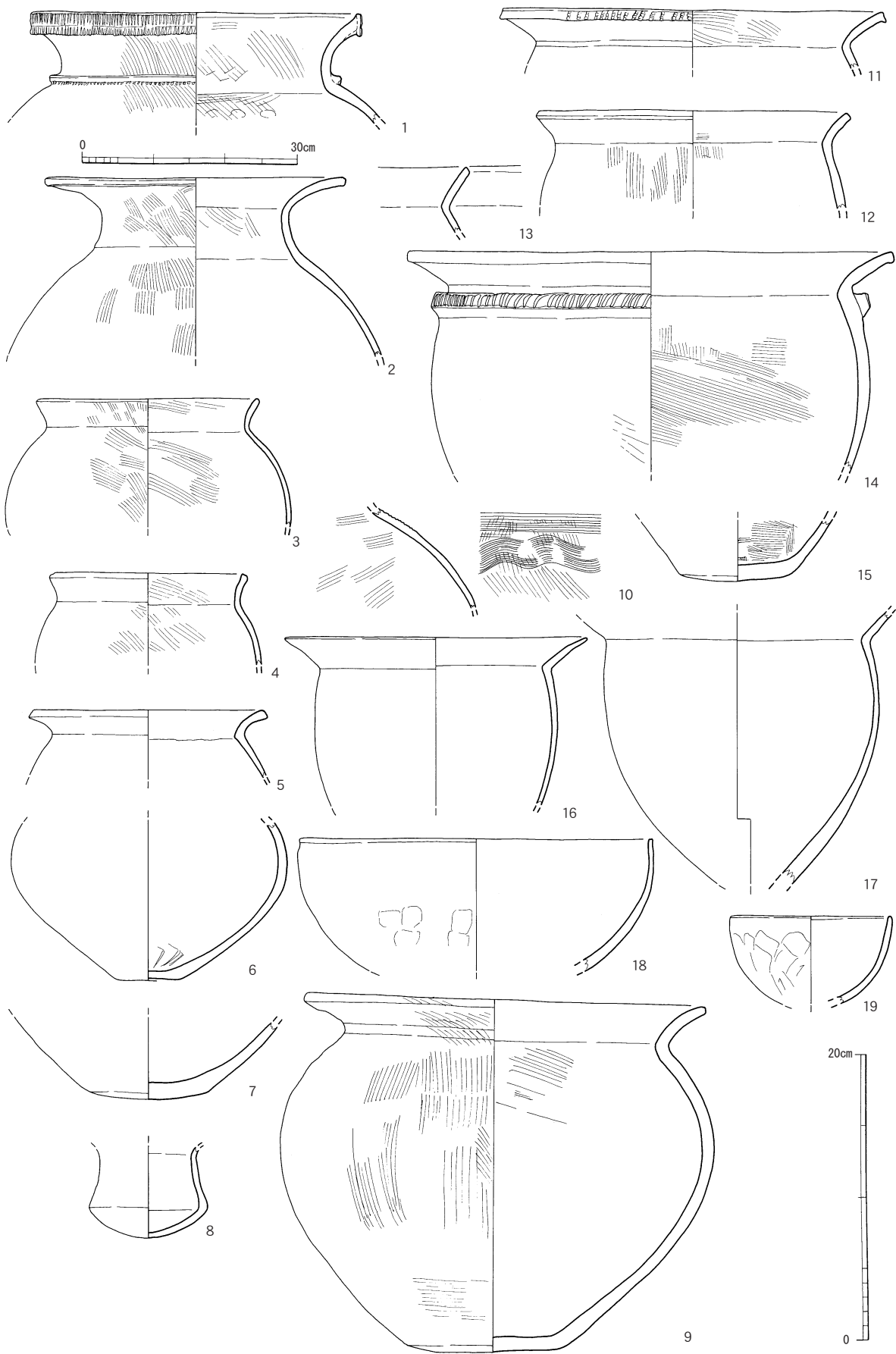
Ⅱ区北東部に位置する土坑である。10号土坑の南側に隣接する。長軸 82cm × 短軸 77cm で正円に近く、深さ 204cm である。壁の立ち上がりは非常に急で、中位の深さでわずかにオーバーハンクする。埋土はレンズ状の堆積が見られ、深さ 30cm 程度までの最上層では暗褐色である。その直下で深さ 40cm 程度まで地山主体の淡黄灰褐色土であり、以下では深さ 55cm 程度まで暗褐色主体であるが淡黄灰褐色土が混ざる埋土となる。狭小であるため、更に下層の土層の観察はできなかった。遺物は出土していない。

8号土坑（図版 45、第 134 図）

Ⅱ区北半の中央部よりやや北側に位置する土坑である。長軸 220cm × 短軸 163cm の不整形で、深さ 70cm である。底面は北半が最深部となり、南半ではそこに落ち込む途上の深さ 45～57cm で大きなテラス部が見られる。壁の立ち上がりは、西半ではやや急で落ち込んでいく途上で小さなテラス部分が複数見られ、それに対して南・東側では緩やかである。埋土については、厚く堆積する上層の淡灰茶褐色土は非常に多量の土器を含む。より下位ではにごりの強さで層の差異があるが、地山に近い淡黄灰褐色土主体で堆積する。底面近くでは木質の遺物が出土する。

出土土器（図版 55、第 135 図 1～19）

1 は大型の壺で、頸基部で強くくびれ、口縁部は外反して開く。頸基部には断面三角形の突帯が廻り、突帯の下端には列点文、口唇部にはキザミを施す。2 はなで肩の器形で頸基部の屈曲も緩やかで、口縁部が強く外反して開く壺である。3・4 は頸基部があまりくびれず短い口縁部がわずかに外反してのびる壺である。5 は 3・4 に比して頸基部の屈曲がやや強く、短い口縁部が強く外反して開く壺である。6 は壺の胴部から底部にかけてである。7 は壺の底部でややレンズ状である。8 は非常に短い口縁部が外反する下膨れの器形の短頸壺である。9 は頸基部で強く屈曲して口縁部が外反してのびるやや大型の短頸壺である。10 は壺の肩部で平行文と波状文の文様帯を有す。11～13 は在地系甕の口頸部である。14 は頸基部があまり強くくびれないやや大型の甕である。肩部にキザミを付す断面台形の突帯を有す。15 は甕の底部でレンズ状である。16・17 はやや深い鉢で、頸基部で屈曲して外側へ口縁部がのび、脚部を有すると思われる。18・19 は素口縁の鉢である。



第 135 図 II 区 8 号土坑出土土器実測図 (9 は 1/8、他は 1/4)

9号土坑（図版 45、第 134 図）

Ⅱ区北東部に位置する土坑で、10号土坑の北側に隣接する。長軸 35cm × 短軸 28cm の楕円形で、深さ 28cm という本来ピットとして扱う程度の規模であるが、完形の土師器杯が出土して本調査区において非常に稀な中世の遺物が伴う遺構と認められるため、土坑として個別に取り扱うこととした。土器は底面よりある程度浮いて傾いた状態で出土した。埋土は暗褐色主体である。

出土土器（図版 55、第 137 図 1）

1 は土師器皿である。口径 14.4cm、器高 1.8cm を測り、底部は回転ヘラ切りが見られる。

10号土坑（図版 45、第 136 図）

Ⅱ区北東部に位置する土坑で、7号土坑の北側、9号土坑の南側に隣接する。長軸 107cm × 短軸 99cm の不整形円形を呈し、検出面からの深さは 153cm である。一部ピットと切り合うが先後関係は確認できなかった。壁の立ち上がりは非常に急で、全面的にオーバーハングする部分が見られ、底面より 40cm 程度上位の高さで最も広がり、そこから底面へ向けて緩やかに狭まって落ちる。そのオーバーハングして最も広がる位置に入り込む形でほぼ完形の土器が出土し、底面直上から大きな土器片が出土した。埋土については、最上層が灰茶褐色土で、それより下位の暗褐色土主体、黒灰褐色土主体の層の境界には樹皮状のものの広がりが認められる。深さ 80cm 程度よりも下位は確認できなかった。

出土土器（図版 55、第 137 図 2・3）

2 は頸基部のくびれはやや弱く非常に短い口縁部がわずかに外反してのびる壺で、胴部はやや下膨れの器形である。胴部の内外面ともに上下で調整に相違が見られる。3 は甕の胴部から底部にかけてで、底部は尖底気味である。外面は上半にタタキが残存し、下半ではケズリの後に粗いハケが施される。

11号土坑（図版 46、第 136 図）

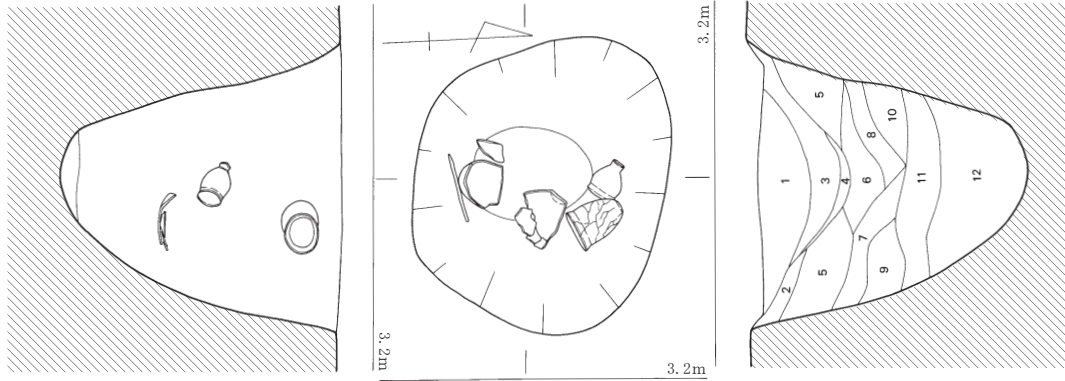
Ⅱ区北端中央部よりやや南に位置する土坑である。長軸 117cm × 短軸 98cm の不整形円形を呈し、検出面からの深さは 110cm である。壁の立ち上がりはやや緩やかで、底面は狭小となる。上層では暗褐色土・黒灰褐色土・暗灰褐色土といった暗い埋土が主体で、中層には地山に近い淡黄灰褐色土が集中し、下層では灰褐色土が堆積し、次いで深さ 75cm 程度より下位ではグライ化して淡青灰色土となる。上層から中層にかけてほぼ完形の土器がし、下層では欠損した大きな土器片が出土した。

出土土器（図版 56、第 137 図 4～8）

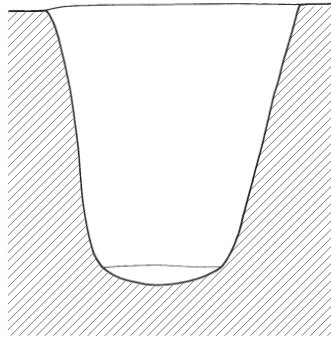
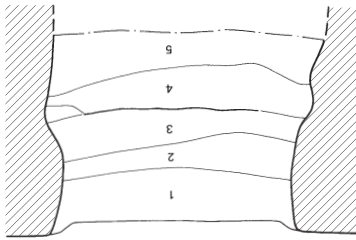
4 は在地系のやや小型の甕である。5 は中部九州系の脚部を有する甕で頸基部の屈曲は弱い。6・7 は素口縁の鉢で、6 は平底で 7 は尖底である。8 は手づくねによるものである。

12号土坑（図版 46、第 136 図）

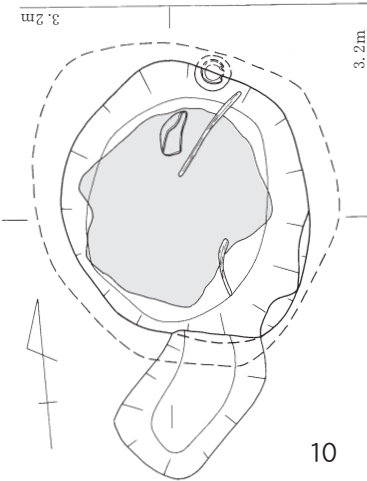
Ⅱ区北端中央部よりやや南に位置する土坑である。径 75～80cm 程度の正円に近く、深さ 135cm である。壁の立ち上がりは非常に急で、全面的にオーバーハングする部分が見られ、底面より 40cm 程度上位の高さで最も広がり、その位置でほぼ完形の土器が出土した。そこから底面



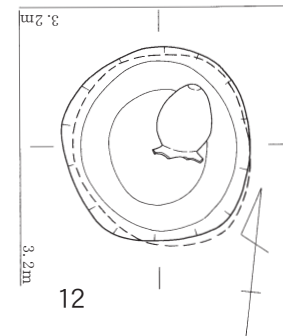
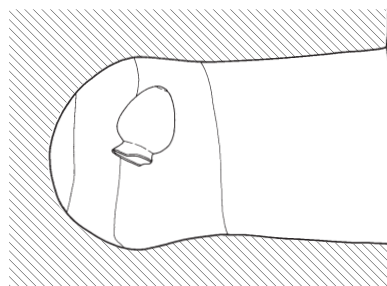
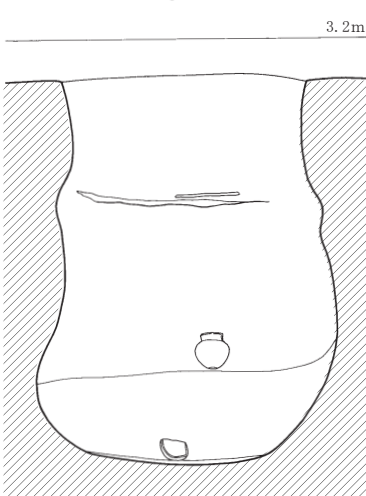
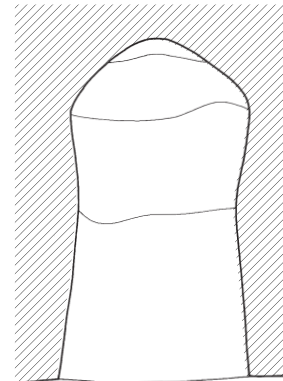
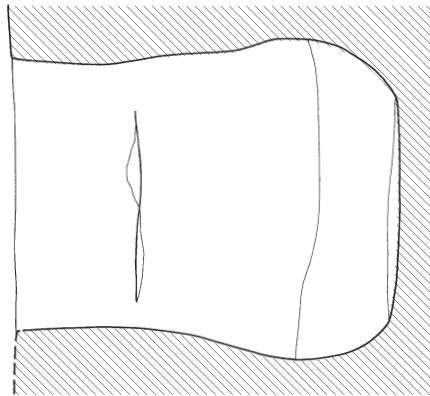
- 1 灰茶褐色土 粘性弱くしまりよい 大きな地山ブロック含む
- 2 暗褐色土 1より粘性強くしまりあまい 炭粒・小地山ブロック混ざる
- 3 暗褐色土 2より粘性やや強い 小炭粒・小地山ブロック混ざる
- 4 暗黒灰褐色土 泥質で粘性非常に強い 灰白粘質土・小木質片多量に含む
- 5 淡黒灰褐色土 灰白粘質土含む 4よりしまりあまい



- 11
- 1 暗褐色土 しまりややよい
 - 2 黒灰褐色土 しまりややよい
 - 3 灰褐色土 やや黄色味がかかる 縞状の堆積が見られ粘性強い
 - 4 暗灰褐色土 粘性強い
 - 5 淡黄灰褐色土 地山に近似するがにごりが強い
 - 6 灰褐色土 粘性強い
 - 7 淡黄灰褐色土 まだら状ににごりが強いしまりややよい
 - 8 淡黄灰褐色土 7よりもにごりが少ない
 - 9 淡黄灰褐色土 5に近いが粘性強い
 - 10 灰褐色土 粘性非常に強い
 - 11 灰褐色土 10よりやや暗い
 - 12 淡青灰色土 ややにごり強い 10・11よりもしまりよい



10



12



第 136 図 II 区 10 ~ 12 号土坑出土土器実測図 (1/30)

へ向けて緩やかに狭まって落ちる。埋土はレンズ状に堆積し、40cm程度の深さまでの上層は地山に近似する黄灰褐色土主体でただらににごる。次いで厚さ10cm程度で土器を多く含む暗褐色土、再度地山に近い暗黄灰褐色土の薄い層と続く。深さ55cm程度より下位は黒灰褐色土となり、深さ75cm程度まで同様であり、それより下位は確認できなかった。

出土土器（図版56、第137図9～11）

9はなで肩で頸部は緩やかに屈曲し口縁部が外反して開く壺である。頸基部で低く隆起して突帯状に廻る。10は頸基部で強くくびれ口縁部が外反して開く壺で、胴部中位に焼成後に外面から施された穿孔を有す。11は杯部下半が扁球形で、上半は屈曲して外側へ直線的にのびる高杯である。内面は暗文が密に施される。

13号土坑（図版47、第138図）

Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、17号土坑の南に隣接する。長軸78cm×短軸64cmの隅丸長方形に近い平面形で、底面までの深さは30cmである。埋土は検出面より深さ15cm程度までが暗灰褐色を呈し、それ以下では地山に近似するがややにごる淡黄灰褐色土である。遺物は出土していない。

14号土坑（図版47、第138図）

Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、18号土坑の東側に隣接する。北側を側溝に切られるが、一辺80cm程度の隅丸方形に近い形状になると思われる。埋土は淡灰褐色の一層である。遺物は出土していない。

15号土坑（図版47、第138図）

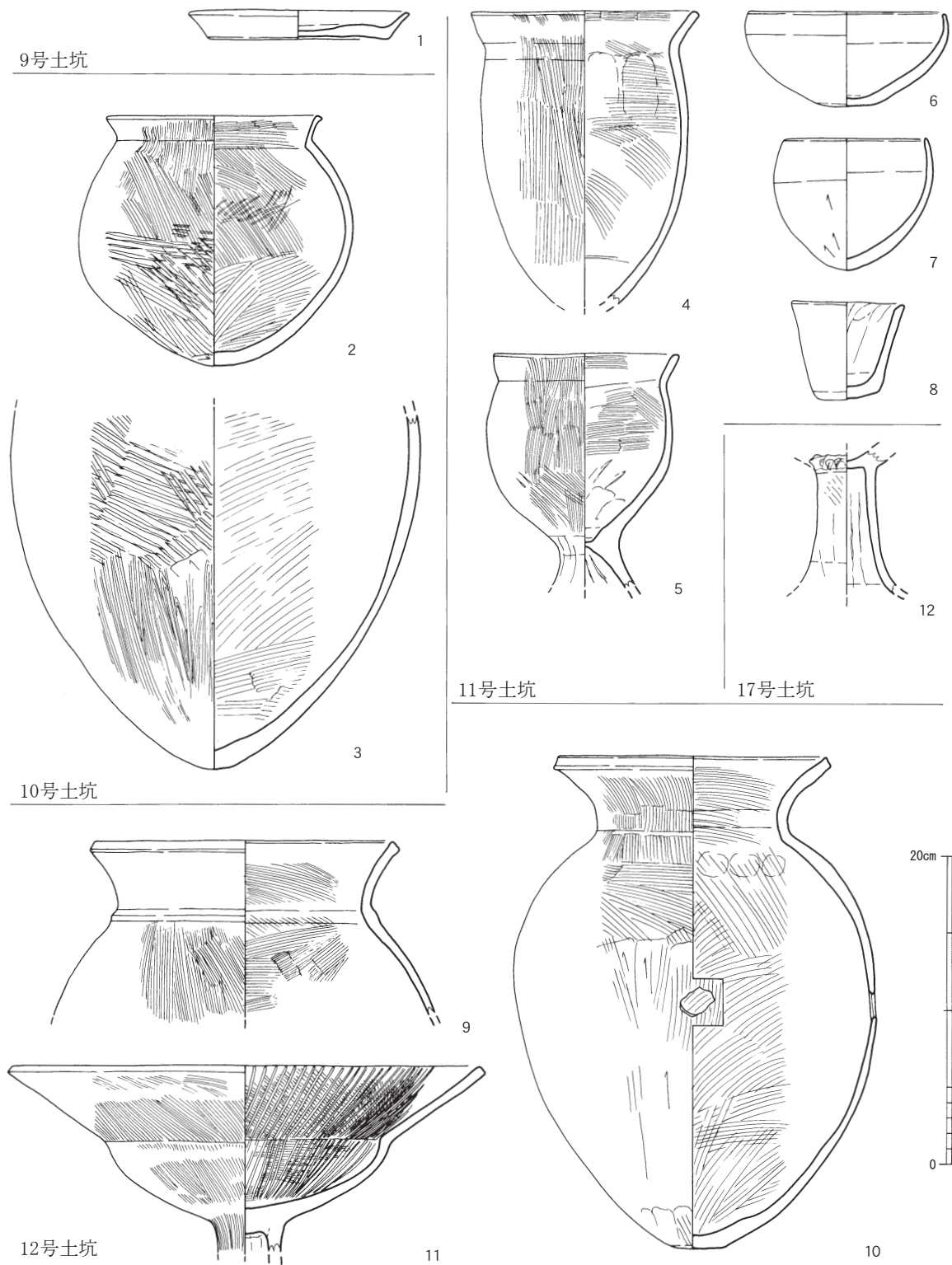
Ⅱ区北端中央部付近に位置する土坑である。5号建物に切られ一部を失っているが、一辺70cm程度の隅丸方形に近い平面形になると思われる。埋土の上層は淡黄茶褐色土で、下層は地山に近似した淡黄灰褐色土でわずかににごる。遺物は出土していない。

16号土坑（図版48、第138図）

Ⅱ区北半中央部付近に位置する土坑である。一部が失われているが、長軸80cm×短軸59cmの楕円形で、深さ17cmである。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は暗褐色土のほぼ単層で、明瞭に分層される堆積は認められない。10号掘立柱建物跡を切り、2号掘立柱建物跡に切られる。遺物は出土していない。

17号土坑（図版48、第138図）

Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、13号土坑の北側、20号土坑の南側に隣接する。検出面での平面形は一見円形ともとれるが、下層になるほど一辺100～105cm程度の丸みを帯びた隅丸方形に近づき、深さ129cmである。55cm程度の深さまでは単一の層で、暗褐色土・黄茶褐色土・淡茶褐色土が混ざり合いただらである。次に75cm程度の深さまで地山に近い黄灰褐色土が堆積し、それよりも下位はグライ化して青灰色である。深さ50cm程度を境に壁の立ち上がりは変化し、そ

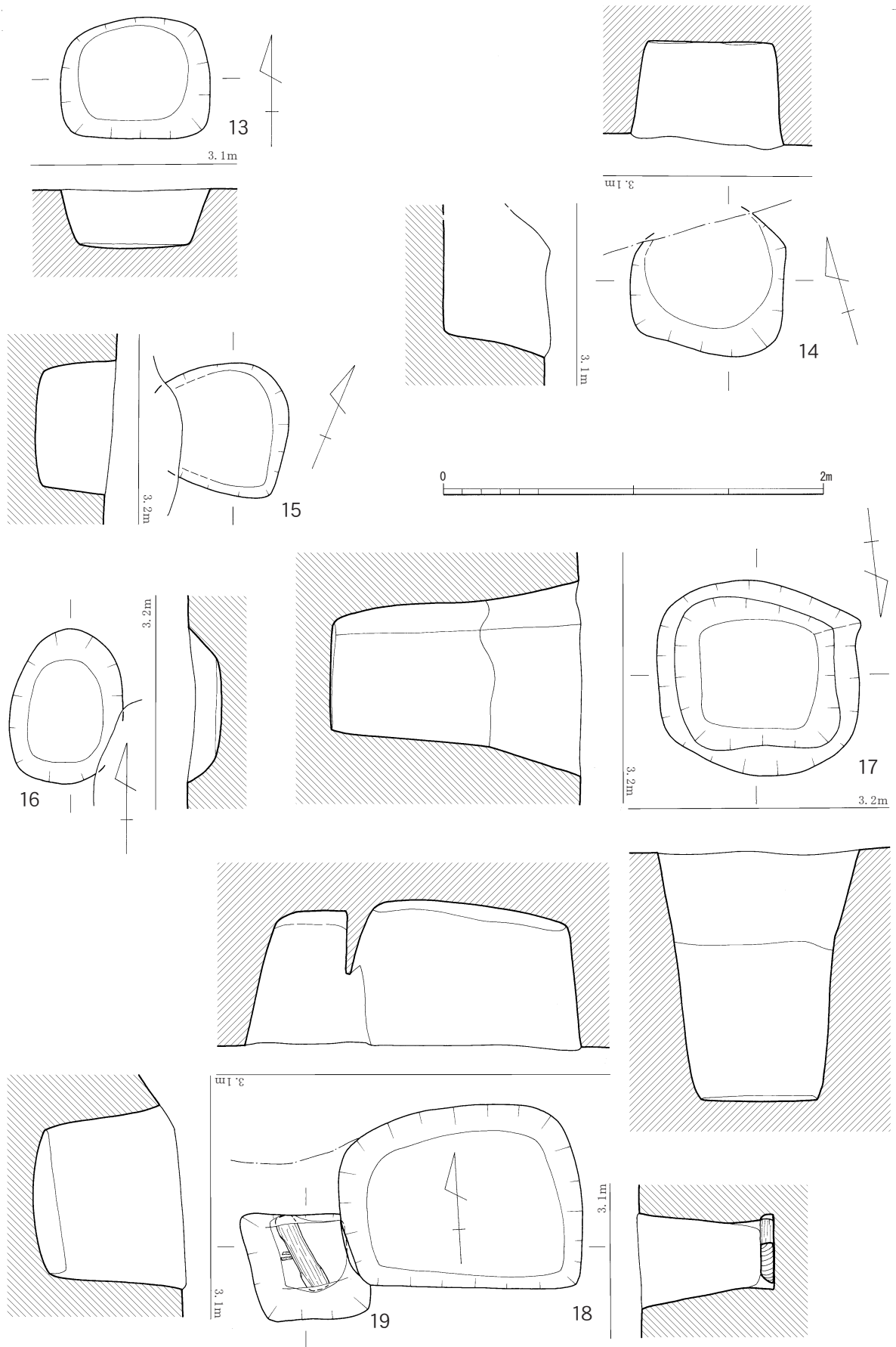


第 137 図 II 区 9 ~ 12・17 号土坑出土土器実測図 (1/4)

れより下位は上位に比べてやや急となる。

出土土器 (第 137 図 12)

12 は高杯の脚部で、杯部との接合部に接合を強固にするためのキザミが見られる。



第 138 图 II 区 13 ~ 19 号土坑出土土器实测图 (1/30)

18号土坑（図版48、第138図）

Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、14号土坑の西側に隣接する。19号土坑の東側に接して切り合うが、埋土は共通してしまりのよい灰茶褐色土主体で、同時に掘削してしまったため先後関係は不明である。長軸127cm×短軸96cmの隅丸長方形に近く、深さ76cmである。遺物は出土していない。

19号土坑（図版48、第138図）

Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、18号土坑の西側に接して切り合うが、埋土は共通してしまりのよい灰茶褐色土主体で、同時に掘削してしまったため先後関係は不明である。一辺55cm程度の隅丸方形に近い形状である。深さ64cmの位置から掘立柱建物跡の礎盤から出土する横木と同一のものが検出された。当初この横木は本土坑に伴うものと思われた。しかし、時期の判別できる掘立柱建物跡はほぼ弥生時代終末期から古墳時代初頭と見られる一方で、本土坑は埋土の特徴からそれよりも大幅に新しい時代に属すると見られるため、その差が疑問であった。後にバックホーでこの周辺を掘り下げた状況より、弥生時代には地形的に大幅に落ち込んでいたと考えられ、横木はそこに転落したもので、その低地部分の埋没後に本土坑は横木の直上に偶然掘削されたものと判断した。遺物は出土していない。

20号土坑（図版49、第139図）

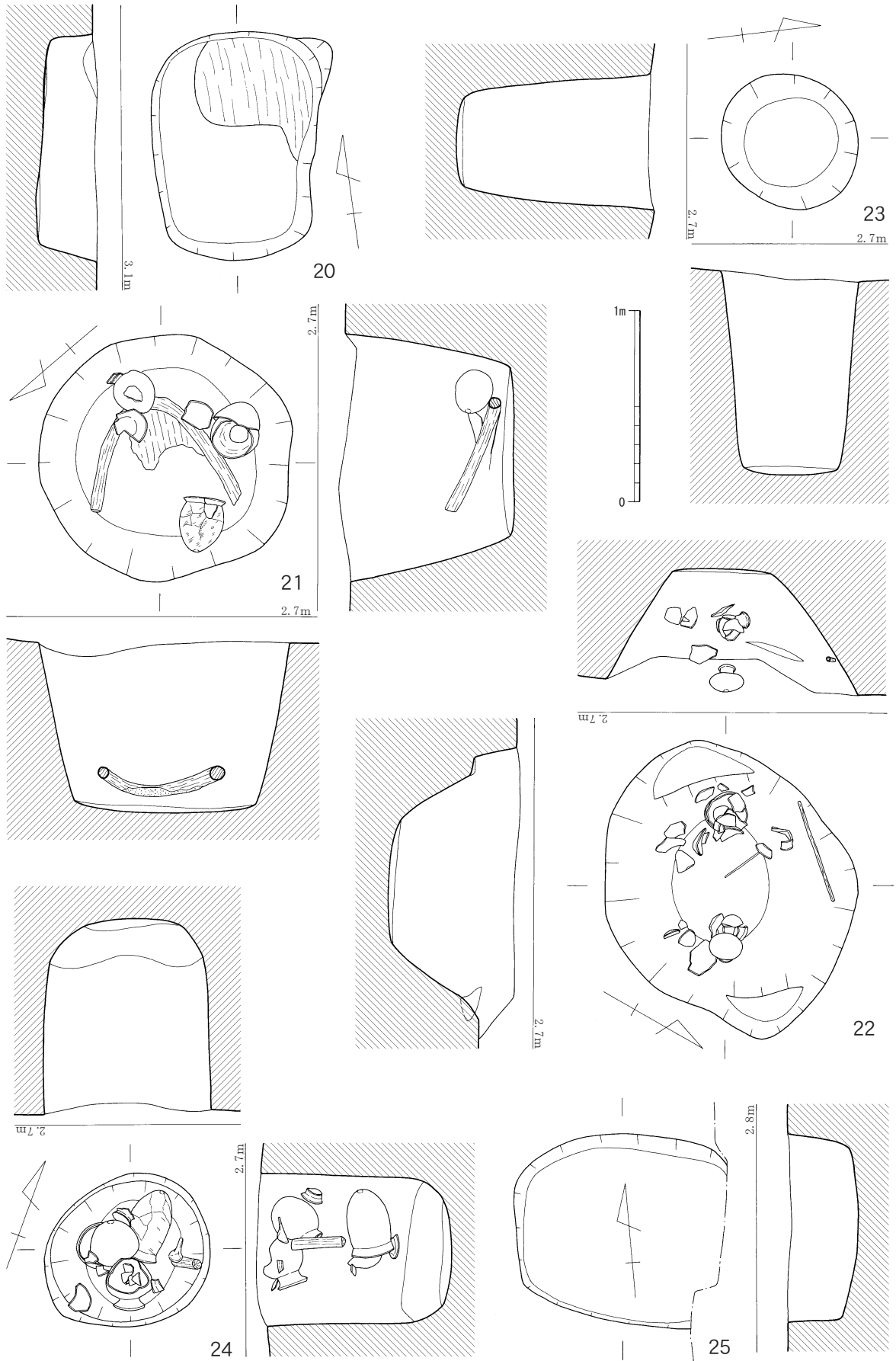
Ⅱ区北東隅付近に位置する土坑で、17号土坑の北側に隣接する。長軸118cm×短軸87cmの隅丸長方形に近い形状で、深さ32cmである。埋土は淡灰褐色主体で、底面の北側では樹皮のようなものの広がりが見られたが、非常に薄く微かに残存していたもので、掘立柱建物跡の礎盤とは考えにくい。遺物は出土していない。

21号土坑（図版49、第139図）

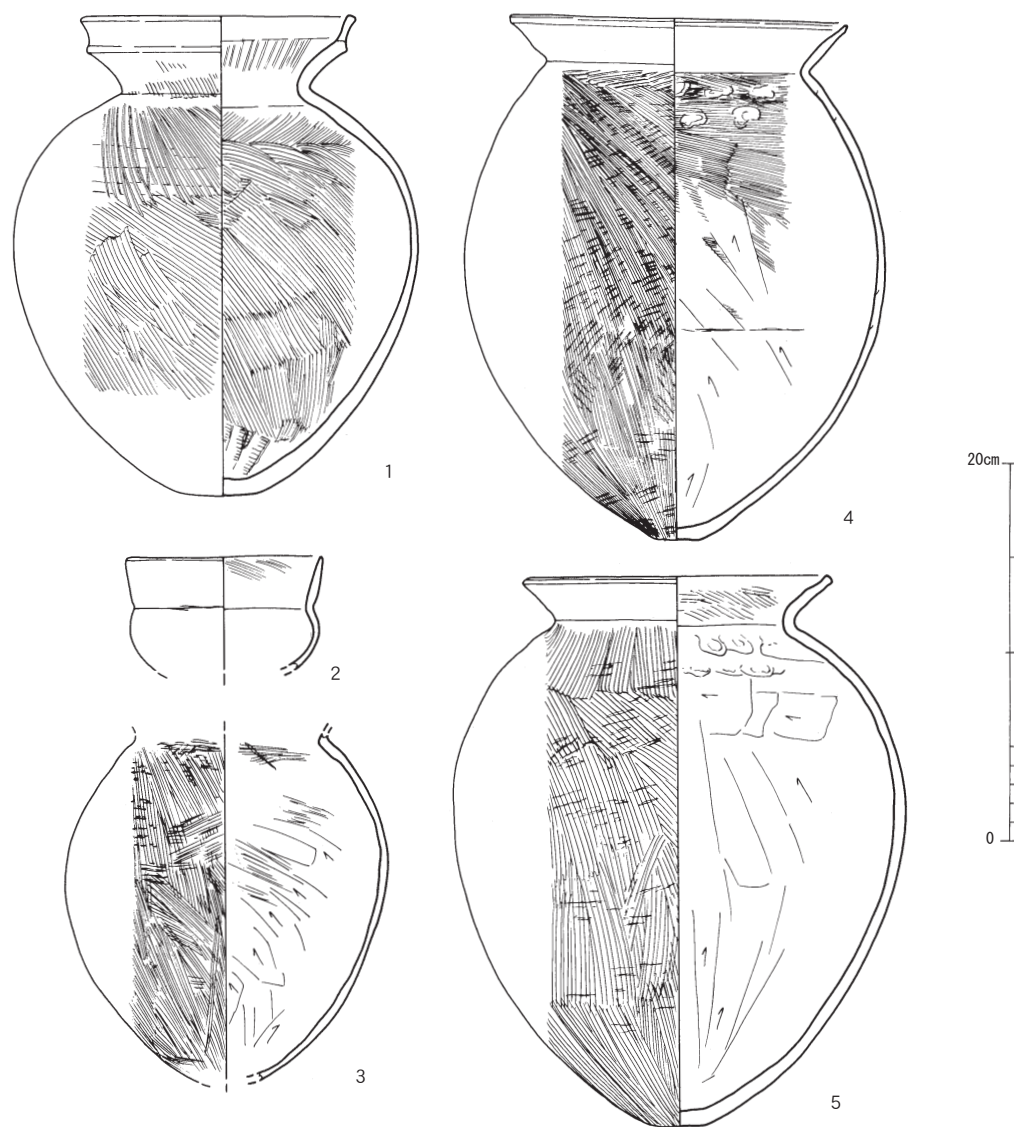
Ⅱ区南西隅付近に位置する土坑で、当初の調査面では検出できなかったが、礎盤の有無を確認するためにバックホーで掘り下げる過程で検出したものである。径130cm程度の正円に近い形状で、検出できた面からの深さが89cmである。土器はほぼ完形のものを含めてまとまって出土した。特筆すべきは、細い蔓状の植物を束ねて緊縛して固定されたものを屈曲した有機質の遺物が出土した点である。これはすべての土器よりも深い位置で、底面よりもやや上位で出土している。屈曲部付近にわずかに樹皮状のものが残存し、箕のような形状を想定することもできるが、用途等は不明である。

出土土器（図版56、第140図1～5）

1は在地系の複合口縁壺である。内面頸部に暗文が見られ、外面肩部には横ナデの後に密にミガキを施す。2は小型丸底壺である。3は布留系甕の胴部と思われ、胴部上下半で異なるハケ調整が施される。4は五様式系甕で、外面はタタキが残存するが全面的にハケ調整で仕上げられる。内面はハケの後にケズリが施される。5は甕で外面はやや粗いハケを施し、内面はケズリを施す。わずかに面を残す底部と口縁端部をわずかにつまみあげる特徴から五様式系甕と布留系甕の折衷と考えられる。



第 139 图 II 区 20 ~ 25 号土坑实测图 (1/30)



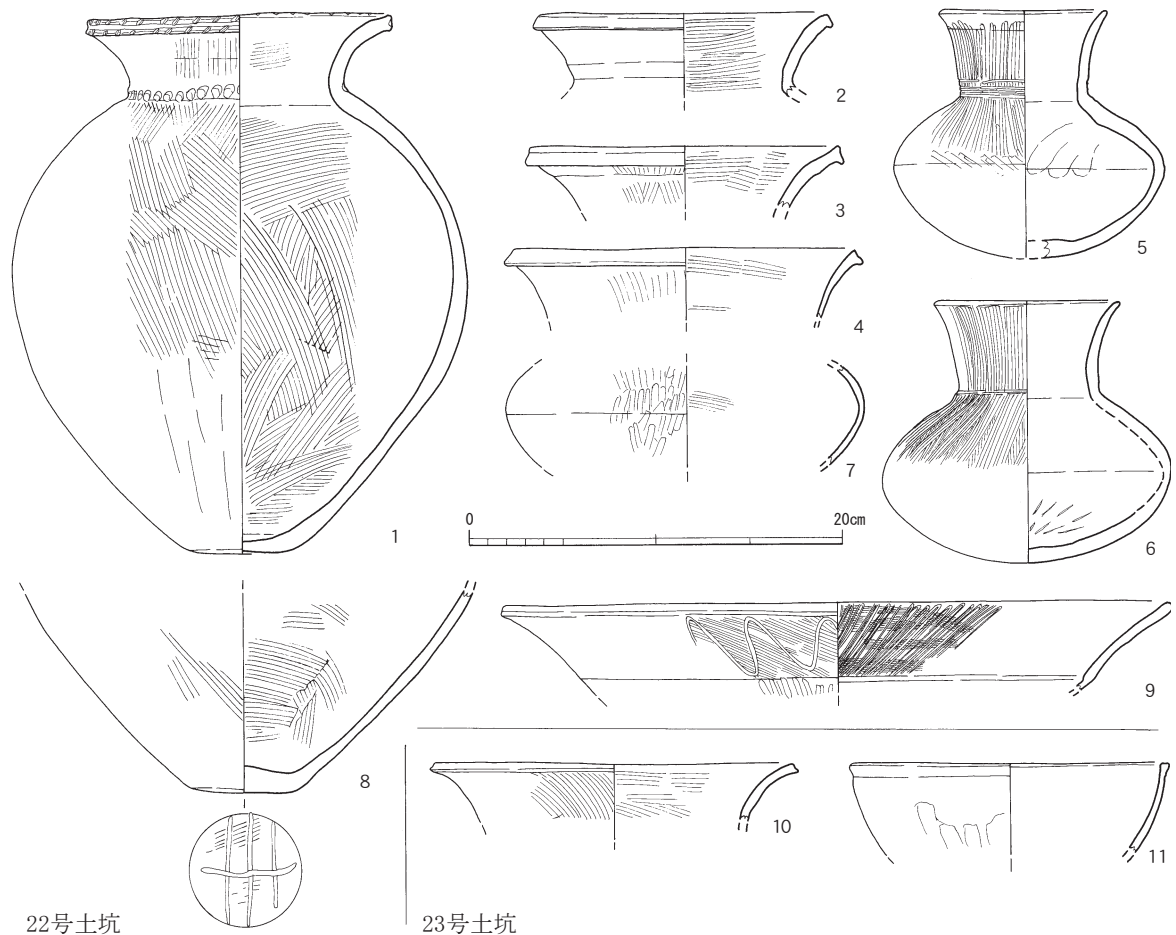
第140図 II区21号土坑出土土器実測図(1/4)

22号土坑(図版49、第139図)

II区北半の東端中央部付近に位置する土坑で、当初の調査面では検出できなかったが、礎盤の有無を確認するためにバックホーで調査区内を掘り下げる過程で検出したものである。東半は当初の調査面から掘削していた側溝がかかっていたため欠失している。長軸159cm×短軸122cmの不整楕円形で、検出した時点での深さは66cmである。東西の対称となる位置関係で2箇所テラス部分が見られる。土器がまとまって出土しており、完形のものも含まれるがほとんどが大きく欠損している。埋土については、上層が白灰褐色でシルト状の淡青灰色土の薄い層が続き、下層は青灰色土である。

出土土器(図版57、第141図1~9)

1~4は頸基部で強くくびれ、口縁部が強く外反して開く広口壺である。1は頸基部には刺突痕が並び、口唇部の上下端にキザミが付される。5・6は胴部が中位で強く張る扁球形で、頸基部は非常に強くくびれ、口縁部がわずかに外反して立ち上がる壺である。5は胴部上半から口頸



第141図 II区22・23号土坑出土土器実測図(1/4)

部にかけて暗文が施され、頸基部のやや上位に沈線による平行文が見られる。6の外には黒色顔料が塗布される。7は壺の強く張る胴部で、外面にはミガキが施され黒色顔料が塗布される。8は壺の底部付近で、外底部にへラ記号が施される。9は高杯の口縁部で、内面は縦方向の暗文が密に施され、外面の暗文は波状である。

23号土坑(図版50、第139図)

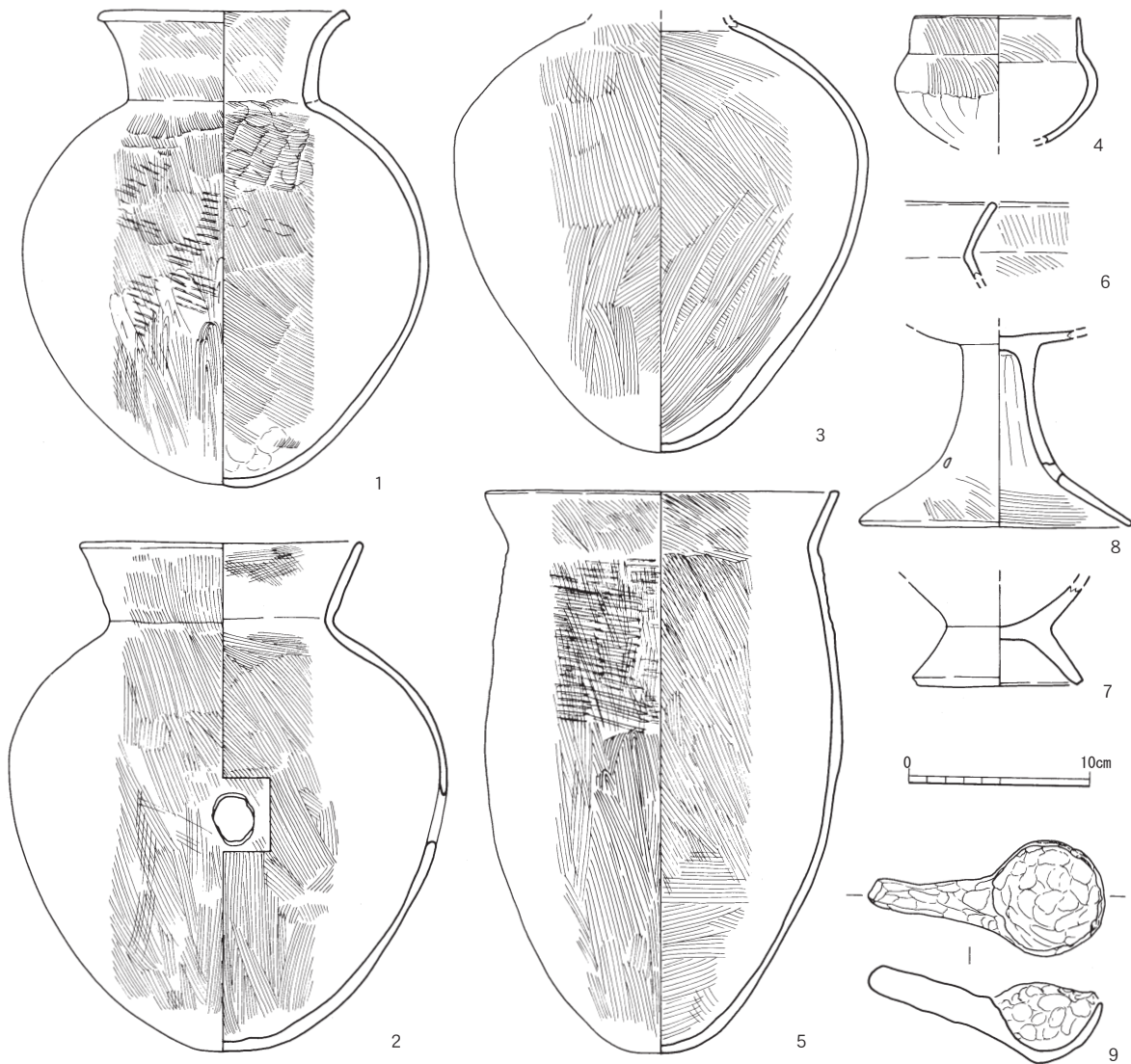
II区北半北側の中央部に位置する土坑で、当初の調査面では検出できなかったが、礎盤の有無を確認するためにバックホーで調査区内を掘り下げる過程で検出したものである。径70cm程度の正円に近い形状で、深さ105cmである。壁の立ち上がりは全体的に急である。埋土は上層が地山に近い淡黄灰褐色土で、下層はグライ化して青灰色土である。

出土土器(第141図10・11)

10は壺の外反して開く口縁部である。11は素口縁の鉢である。

24号土坑(図版50、第139図)

II区北端近くの中央部に位置する土坑で、当初の調査面では検出できなかったが、礎盤の有無を確認するために調査区内をバックホーで掘り下げる過程で検出したものである。1号溝の下層



第 142 図 II 区 24 号土坑出土土器実測図 (1/4)

で確認されており、1号溝に切られると判断される。径80～85cm程度で正円に近い形状で、深さ101cmである。壁の立ち上がりは非常に急で、底面から20cm程度の位置からはやや緩やかな傾斜となって底面へ落ち込んでいる。出土土器はほぼ完形のものを含めてまとまった量となっており、その位置は底面から25cm以上浮いた状態で、高さにはある程度の幅がある。同位置から木質物も出土した。

出土土器 (図版 57、第 142 図 1～9)

1は頸基部で強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。胴部外面上半はハケ調整を施し、その前段階のタタキが残存する。下半は更にケズリを施した後に粗雑なハケを施す。2は頸基部で強くくびれ、口縁部が外側へ直線的にのびる壺である。胴部中位に焼成後施した穿孔を有す。3は壺の胴部から底部で内外面ともにハケ調整である。4は胴部が扁球形で、くびれの弱い頸基部から直線的な口縁部が立ち上がる小型の壺である。胴部はハケ調整で、下半はその後にケズリ、更にナデを施す。5・6は在地系の甕である。7は脚部を有する甕の底部である。8は高杯の脚部で焼成前の穿孔は三ヶ所である。

25号土坑（図版50、第139図）

Ⅱ区東端の中央部付近に位置する土坑で、当初の調査面では側溝を掘削した位置に当たり確認できておらず、礎盤の有無を確認するためにバックホーで掘り下げる過程で検出したものである。東端部は調査区外に延び全体を確認できなかったが、隅丸長方形に近い形状と考えられる。短軸は100cmで、長軸は120cm程度と考えられる。埋土は大半が均質な灰褐色土層で、底面直上に細かい植物質を含有する粘性の強い灰褐色土層がわずかに堆積する。遺物は出土していない。

(4) 溝・落ち込み

1号溝（図版51、第143図）

Ⅱ区北端部に位置する溝。幅50cm前後で、南端は大きく屈曲し、北側では側溝で両端ともに途切れる。埋土は淡黄茶褐色土主体で、周囲の包含層との区分は必ずしも明瞭ではないため、トレンチで断面を観察して掘削を行った。北側への延長部は、東西両筋の断面部を側溝の北壁で確認し、明瞭に検出したものではないため確実性には不安が残るが、不整形ながら輪状に廻る可能性がある。5号掘立柱建物跡の柱穴と24号土坑を切る。図示できる出土遺物はない。

1号落ち込み（第97図）

Ⅱ区南西付近の谷部の斜面上に位置する不整形の落ち込みで、2号落ち込みの西側に隣接する。埋土は黒灰褐色で粘性が強く、西側で高く東側で低い谷の傾斜に添う形で浅く堆積し、その最高部と最低部との高低差は50cm程度である。

出土土器（第144図1・2）

1は在地系複合口縁壺の口縁部である。2は三角錐状の高杯の脚部で、穿孔は3箇所。

2号落ち込み（第97・143図）

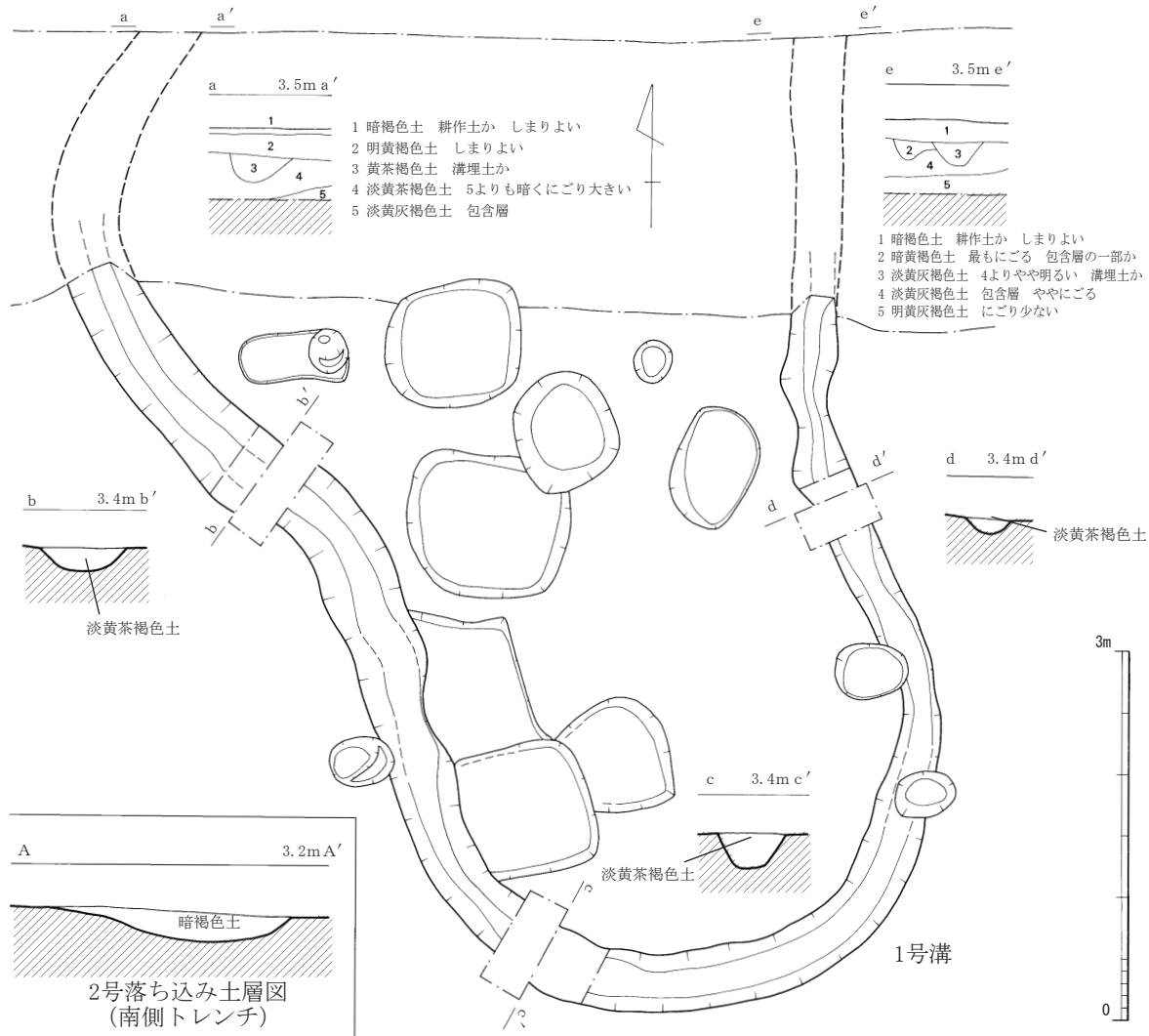
Ⅱ区南西付近に位置する落ち込みで、1号落ち込みの東側に隣接する。谷部の斜面上を等高線に直行する形で細長く延びる。深さは谷の上部で20～25cm程度、谷の下部で3cm程度と浅い。壁の立ち上がりは非常に緩やかで、底面の幅はわずかである断面から流路的な性格と考えられる。埋土は黒灰褐色で粘性が強い。

出土土器（第144図3～11）

3は山陰系二重口縁壺の口縁部である。4は甕の口頸部で、内面にケズリを施す。5～8は鉢で、いずれも口縁端部が外側へ屈曲しするが、5は強く屈曲し、8はごくわずかに傾く程度である。9は椀で口縁端部をつまみ上げて細く収め、底部付近にケズリを施す。10は小型器台の脚部で、3箇所に穿孔を施し、外面にわずかにミガキが残存する。胎土はやや粗く橙褐色である。11は須恵器礎の肩部でカキメが見られる。

3号落ち込み（第97図）

Ⅱ区南西付近で2号落ち込みと同様に谷部への落ち際付近に位置する長軸3m程度の不整形の落ち込みで、2号落ち込みの東側に隣接する。埋土は黒灰褐色で粘性が強く、深さは5cm以下と非常に浅い。遺物は出土していない。



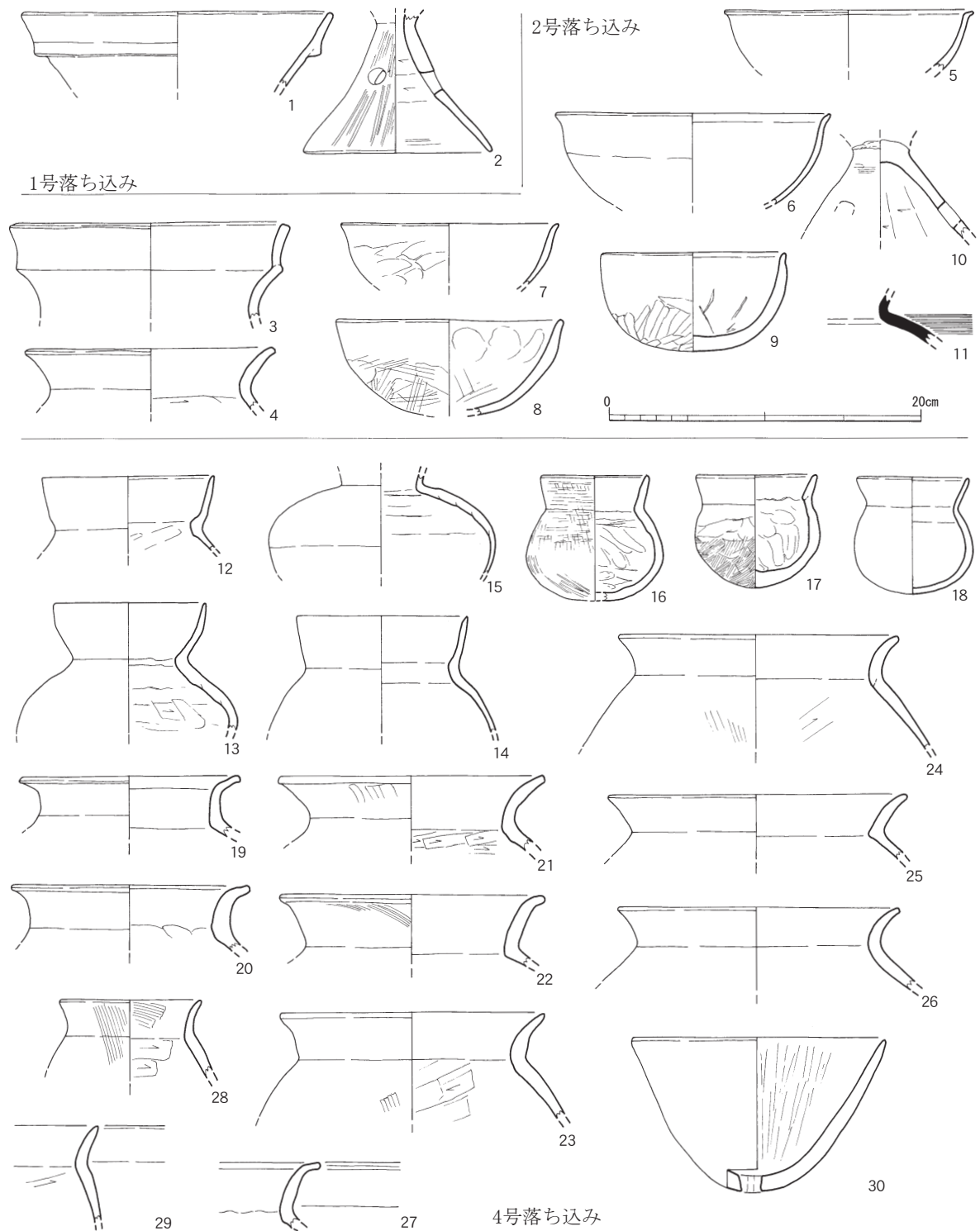
第 143 図 II 区 1 号溝・土層実測図および 2 号落ち込み土層実測図 (1/60)

4 号落ち込み (図版 51、第 97 図)

II 区北東隅に位置する落ち込みである。非常に緩やかな壁の立ち上がりと幅の狭い底面が見られる断面から流路的な性格と考えられ、深さ 20cm 程度である。幅は最大で 4.2 m 程度で、北側と東側が側溝に切られるが、そのまま調査区外に溝状に延びていると考えられる。その場合、北側は I 区 3 号落ち込みに真っ直ぐ繋がると見られ、II 区内でちょうど東向きに転換しているといえる。埋土は黒灰褐色で粘性が強い。18・19 号土坑に切られる。

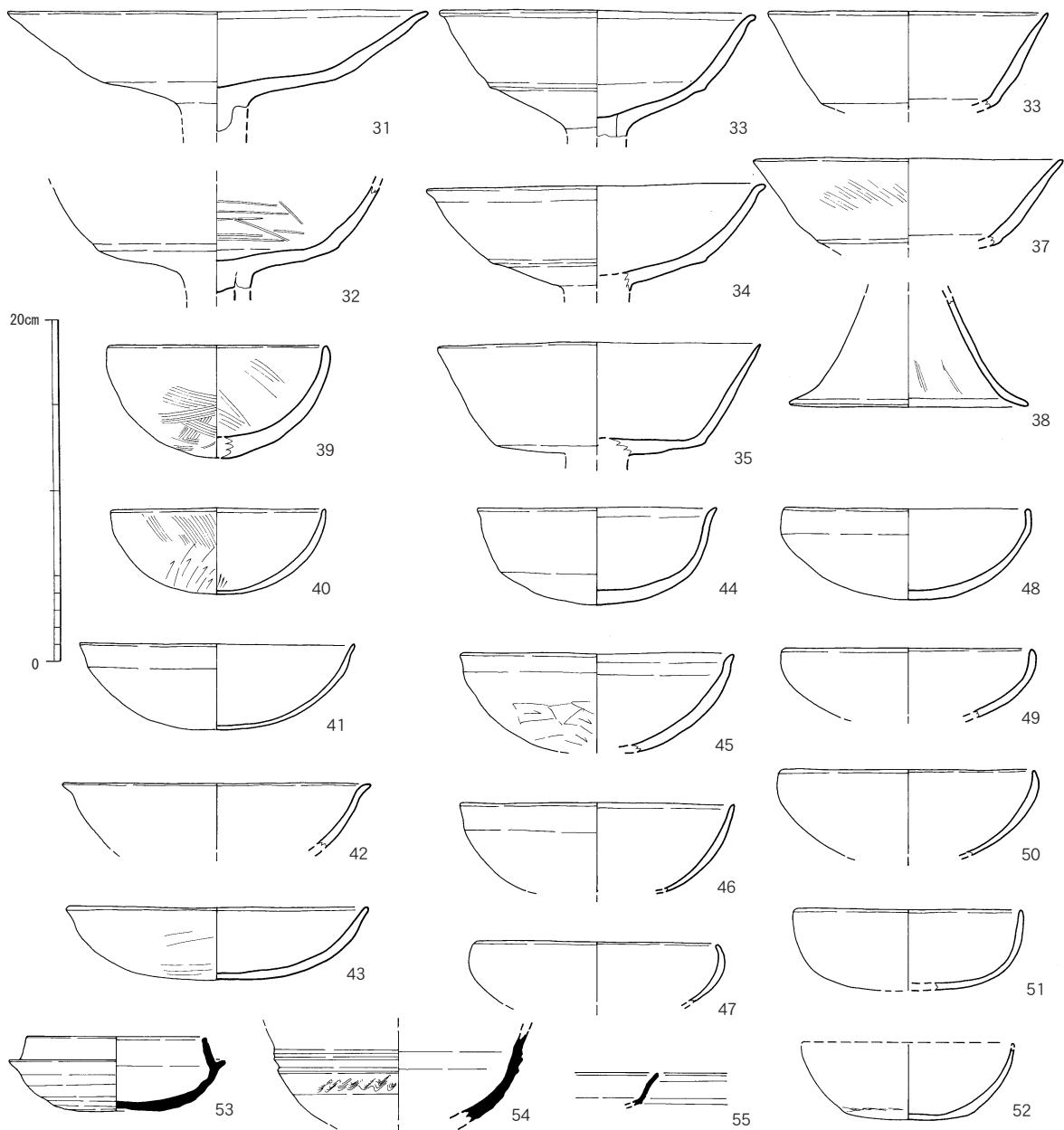
出土土器 (図版 58、第 144・145 図 12～55)

12～14 は中型の壺で、頸基部がやや強くくびれ、口縁部が上方へ外反しながらのびる。内面はケズリが施される。15 は頸基部が強くくびれて細い長頸壺の肩部付近である。16～18 は小型丸底壺である。19～29 は甕の口縁部から肩部にかけてである。28・29 は小型で頸基部の屈曲と口縁の外反はわずかである。30 は甕であり、素口縁の鉢状の器形で低部に焼成前の穿孔を一つ施す。31～38 は高杯である。31・32 は杯部で緩やかな屈曲部を有し、31 の口縁端部はわずかに外反する。33・34 は上下半の接合部外面が突帯状にわずかに隆起し、口縁端部はわずかに外反する。



第144図 II区1・2・4号落ち込み出土土器実測図(1/4)

35～37は杯部で、強い屈曲部から下位はほとんど立ち上がらない。38は脚部で裾部付近がわずかに屈曲する。39・40は素口縁の鉢である。41～46は口縁がわずかに外反する鉢である。47～52は素口縁の椀で、口縁端部は直上に立ちあがるか、わずかに内湾する。51・52は平底気味である。53は須恵器の杯身である。54は須恵器高杯の杯部で、沈線と波状文が廻る。55は須恵器甕の口



第145図 II区4号落ち込み出土土器実測図(1/4)

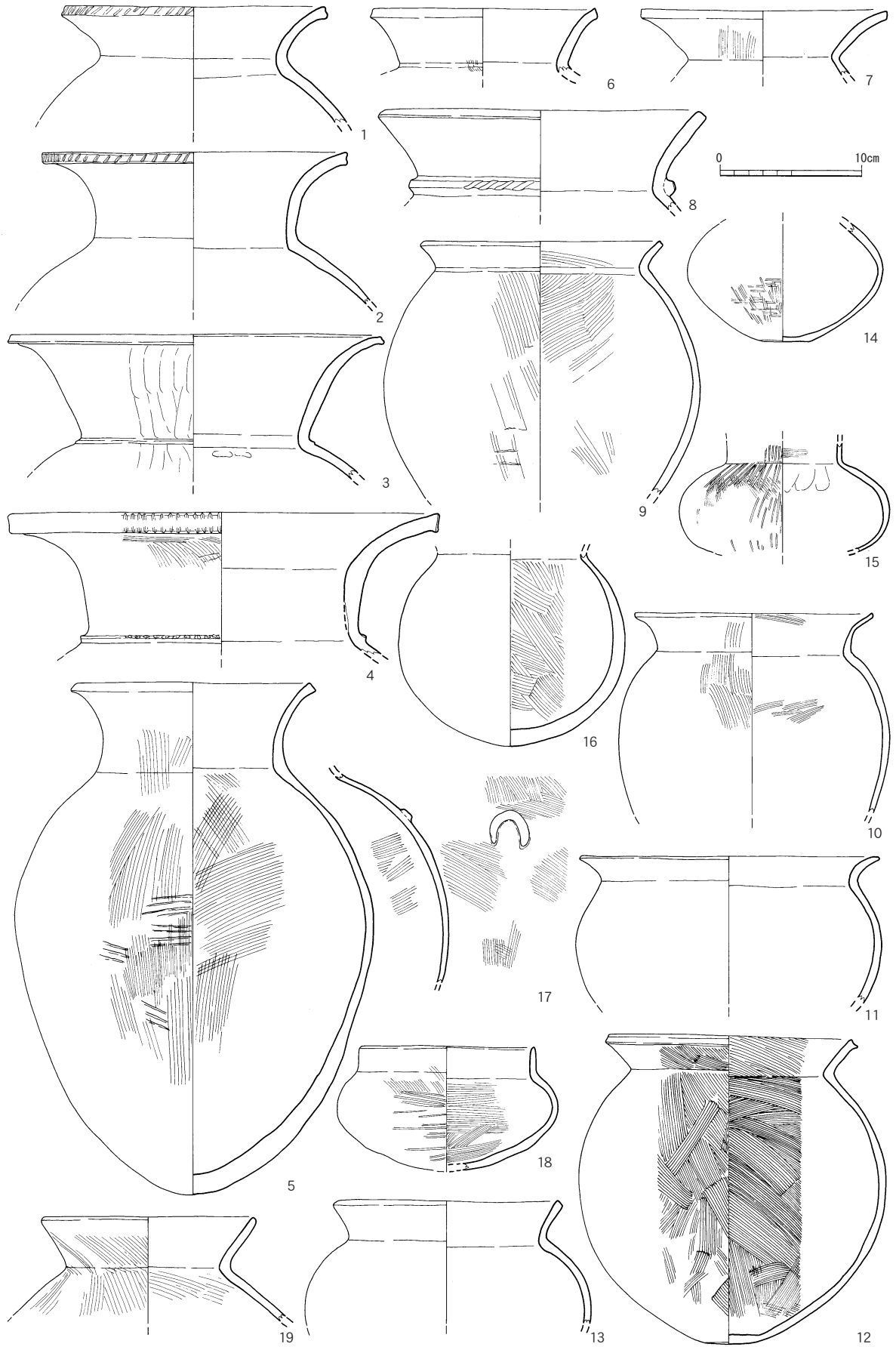
縁部である。

5号落ち込み (図版51、第97図)

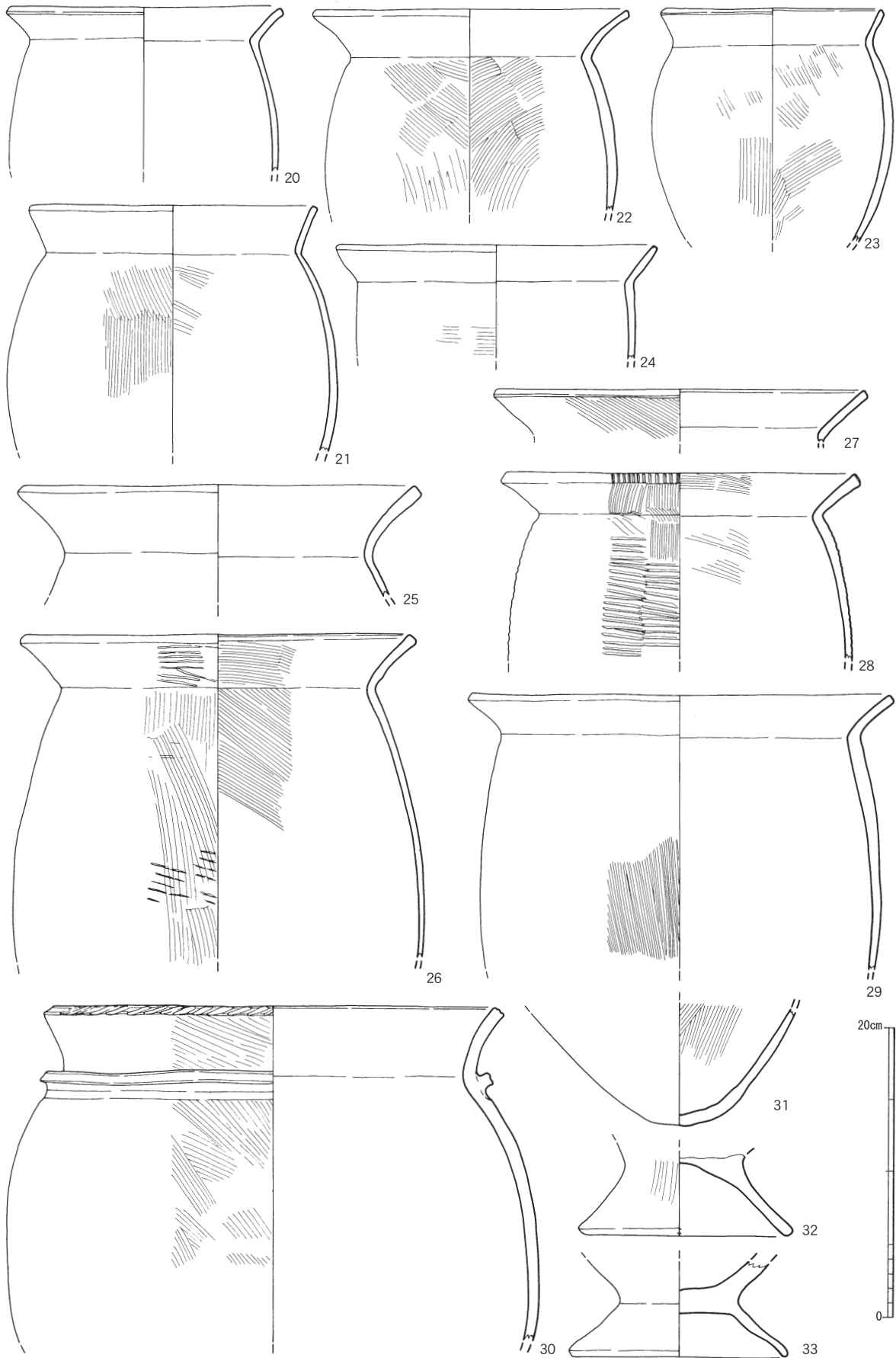
II区北半に位置する落ち込みである。不整形で北西-南東の軸でやや弧状に曲がりながら約20mに亘って長く広がっている。最深部での深さは25cm程度で、壁の立ち上がりは非常に緩やかで流路的な性格と考えられる。また、埋土は淡黄茶褐色で、検出の際に認められた周辺の淡黄灰褐色の包含層との差はわずかで、堆積した単位の異なる包含層の一部の可能性もある。

出土土器 (図版58、第146～148図1～48)

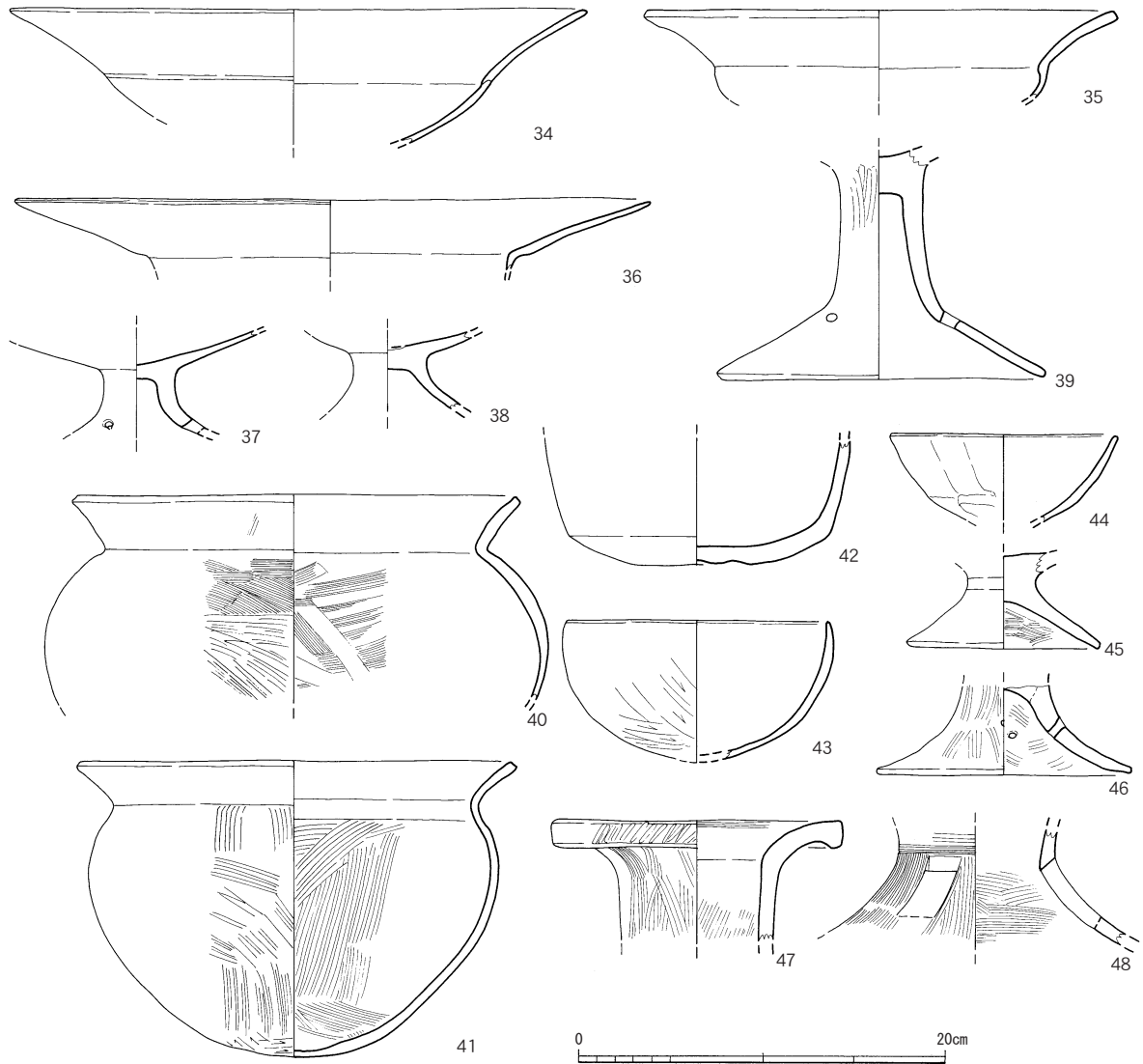
1～19は壺である。1～4は頸基部が強くとびれ口縁部が外反しながら開く広口壺である。1・2は口唇部にキザミを付し、3・4は頸基部に低い突帯を廻らせ、4は口唇部と突帯にキザミを付す。



第 146 図 II 区 5 号落ち込み出土土器実測図① (1/4)



第 147 図 II 区 5 号落ち込み出土土器実測図② (1/4)



第 148 図 II 区 5 号落ち込み出土土器実測図③ (1/4)

5 はなで肩の長胴で、口縁部は外反して開く。6～8 は頸基部で強く屈曲してくびれ、口縁部は弱く外反して外側へのびる。8 は頸基部にキザミを付した突帯が廻る。9～13 は胴部丸みがあり、頸基部があまりくびれず太く、短い口縁部が外側へのびる。10・11 は口縁部が強く外反する。14 は小型の壺で、胴部は強く張り、底部は平底である。15 は扁球形の胴部で、口縁部が直上にのびる中部九州系の直口壺で、外面にミガキが残存する。16 は球形に近い胴部で器壁は厚く、底部はやや突出気味である。17 は胴部で逆U字の浮文が付される。18 は胴部が扁変球形で、短い口縁部が太い頸基部から直上にのびる直口壺である。19 は頸基部が強く屈曲し、なで肩で口縁部は直線的に外側上方へのびる。

20～33 は甕である。20～30 は在地系甕の口縁部から胴部にかけてである。20～24 はやや小型である。28 は外面にタタキが密に施され、口唇部にはキザミを付す。30 はやや大型の甕で、頸基部は屈曲が緩やかで断面方形の突帯が廻る。口唇部にはキザミを付す。31～33 は底部で、32・33 は中部九州系の脚部をもつものである。

34～39 は高杯である。34～36 は杯部。34 は上半が外反、下半が内湾して立ち上がる。35・

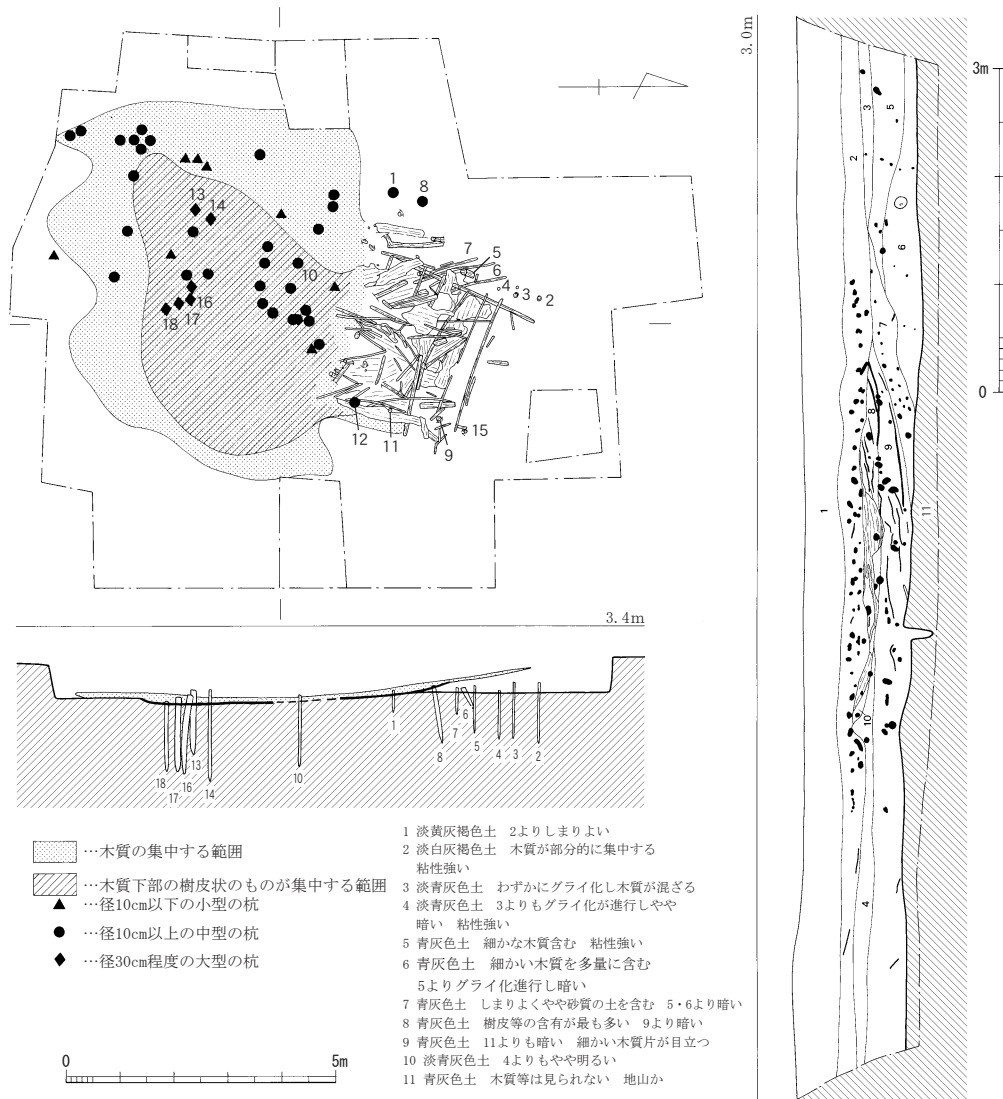
36は下半が丸みをおびて立ち上がり、口縁部は強く屈曲して外側へのびる。37～39は脚部である。37・38は短い脚部で、37は3箇所に穿孔を施す。39は3箇所に穿孔を施す。

40～46は鉢である。40・41は胴部がやや張り、頸基部で屈曲して短い口縁部が外側上方へのびる鉢である。42は器壁が厚く、底部から緩やかに立ち上がり、屈曲してから上方へのびる。43・44は素口縁の鉢である。45・46は脚部を有する鉢で、46は4箇所に穿孔を施す。

47・48は器台である。47は強くくびれ、口唇部にキザミを付す。48は方形の透かし孔が残存し、3箇所に復元される。くびれ部には沈線が1条廻る。

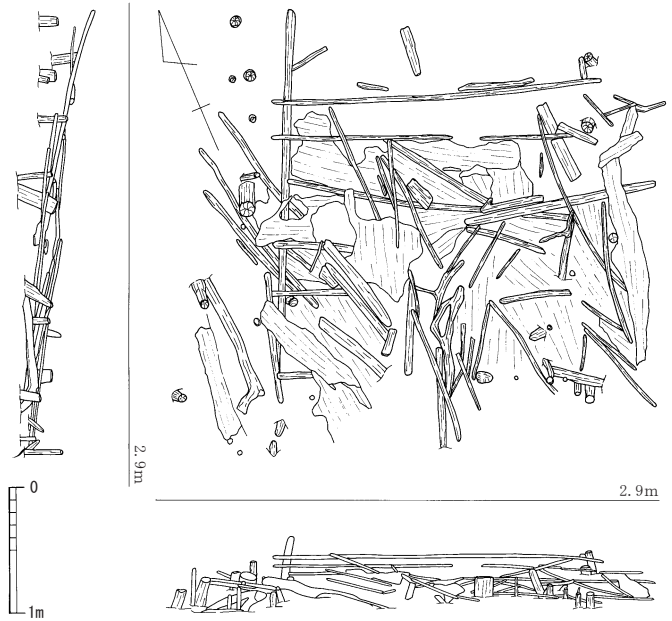
(6) 木質集中部 (図版 52・53、第 149・150 図)

Ⅱ区南端付近の掘削した下部で検出した遺構である。Ⅱa区南側では当初の調査面ではほとんど遺構が検出できなかったため、下層の状況の確認のため複数のトレンチを掘削したのが検出の契機である。トレンチの下部からは包含層中の土器片や木質が出土したが、特に木質が集中する部分が検出されたトレンチについて、木質の範囲を確認するために掘削範囲を順次広げたもので、「木質集中部」とした。この遺構は、一定の範囲内に細長い棒状のものが主体の木質が多数集積



第 149 図 Ⅱ区木質集中部模式図および土層実測図 (1/140・1/70)

し、それよりもやや狭い範囲の下部に樹皮のようなものを敷いている。集積する木質の大半は、わずかな整形以外加工はほとんど加えられないものであるが、その中に混ざって木製品が複数出土している。木質の集中する範囲は長軸8 m程度で、これらの検出状況では規則的な配置等はほとんど認められず、北端の一部のみで木質を格子状に組んだような配置がわずかに見られる。樹皮状のものを敷いた範囲は長軸で5～6 m程度である。さらにその一帯には、下部に深く入り込んで直立した木質も多数見られる。これらの下端は、全てを確認していないが確認したものについてはいずれも打ち込むために尖らせた加工を施した杭であり、確認していないものも同様と考えられる。これらの杭は径10 cm以下のものから径30 cm程度のものまであり、樹皮の敷いた面からさらに1 m以上深く打ち込んでいるものが多く、1.5 m以上の深さに至っているものもある。またこれら杭の位置については、北端部の木質の意図的な配置が見られる外側で並んでいるような様相が見られるが、他に規則的な配置は見られない。東西方向で確認した土層から、当初の地山の上に西側からある程度包含層が堆積し、その段階でもある程度木質が集まる状況で、その後本遺構が形成されたと考えられる。



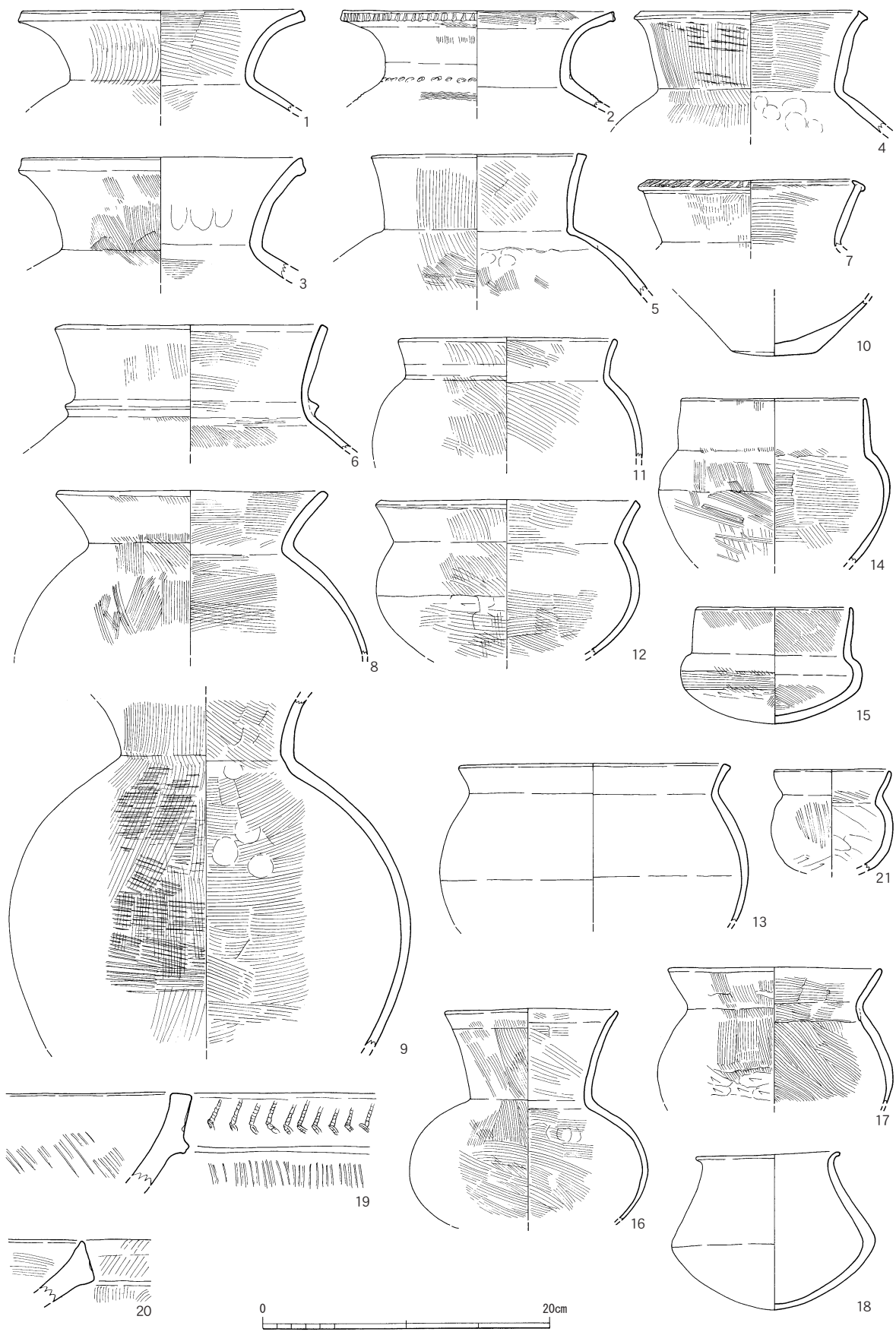
第150図 II区木質集中部北端部実測図(1/60)

た加工を施した杭であり、確認していないものも同様と考えられる。これらの杭は径10 cm以下のものから径30 cm程度のものまであり、樹皮の敷いた面からさらに1 m以上深く打ち込んでいるものが多く、1.5 m以上の深さに至っているものもある。またこれら杭の位置については、北端部の木質の意図的な配置が見られる外側で並んでいるような様相が見られるが、他に規則的な配置は見られない。東西方向で確認した土層から、当初の地山の上に西側からある程度包含層が堆積し、その段階でもある程度木質が集まる状況で、その後本遺構が形成されたと考えられる。

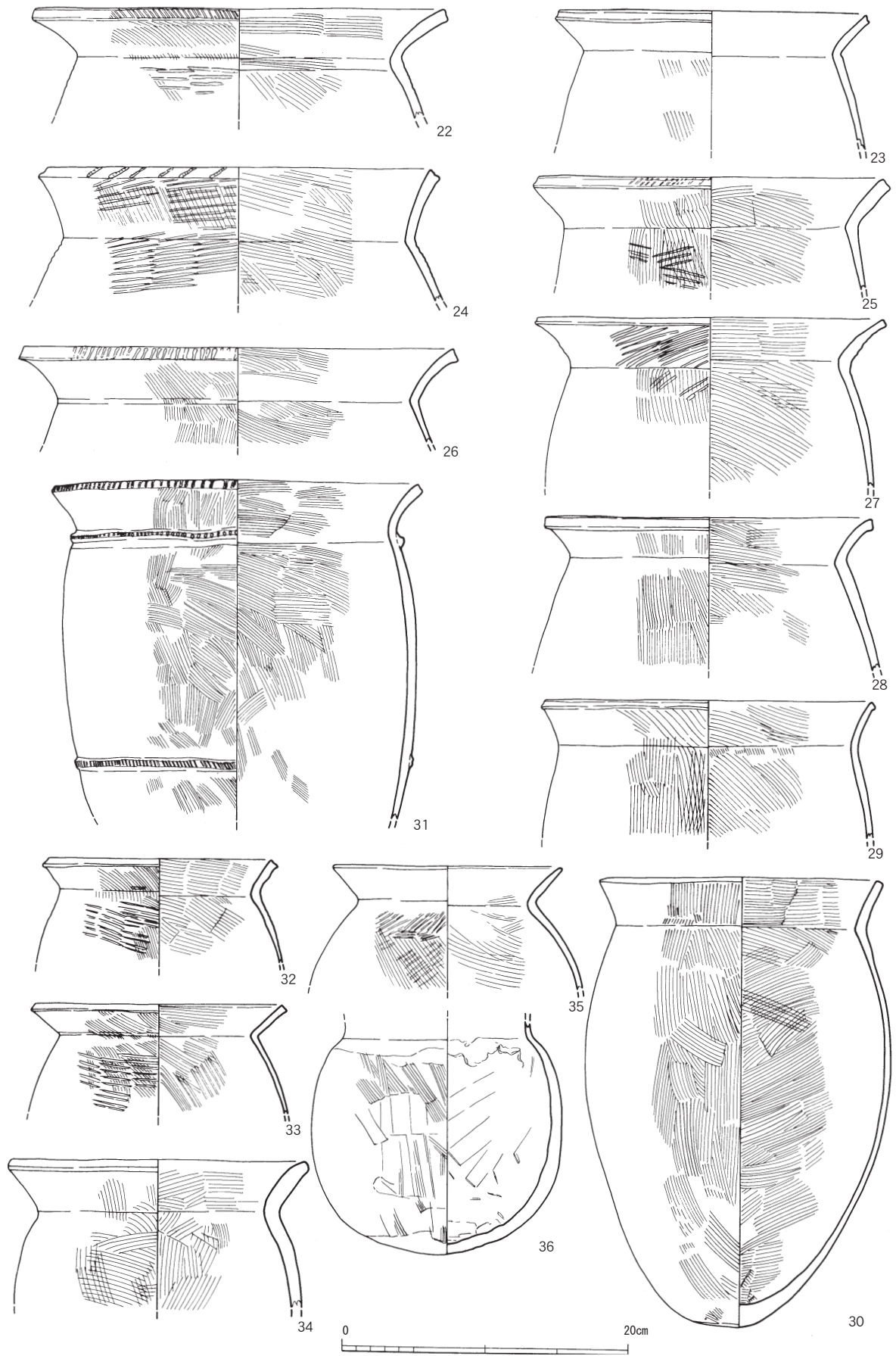
出土土器 (図版59、第151～154図1～92)

1～21は壺である。1～3は頸基部のくびれが強く、口縁部が外反して開く広口壺である。2は口唇部にキザミを付し、頸基部外面に列点文を施し、肩部に粗いハケ状の平行文を施す。4～7は頸基部のくびれが強く、口縁部がやや外側の上方に直線的にのびる壺である。4は口縁端部がやや外反する。6の頸基部外面には断面三角形の突帯が廻る。7は口唇部にキザミを付す。8・9は頸基部が強くくびれ、口縁部がわずかに外反気味に外側へのびる畿内系広口壺である。10は壺の底部でややレンズ状である。11～15は胴部が扁球形に近く、あまりくびれず太い頸基部からやや短い口縁部がのびる短頸壺である。11～13の口縁部は外側へのび、14・15の口縁部は上方へのびる。16は扁球形の胴部で、強くくびれる頸基部から長い口縁部が外反して開く壺である。17は頸基部のくびれがやや弱く、口縁部がやや内湾気味にのびる小型の広口壺で、胴部下半の外面はケズリが施される。18は非常に短い口縁部が外反し、下膨れの器形となる小型の短頸壺である。19・20は大型の壺の口縁部で、19は在地系複合口縁壺で20は広口壺である。21は小型丸底壺で、口縁部はやや内湾気味である。

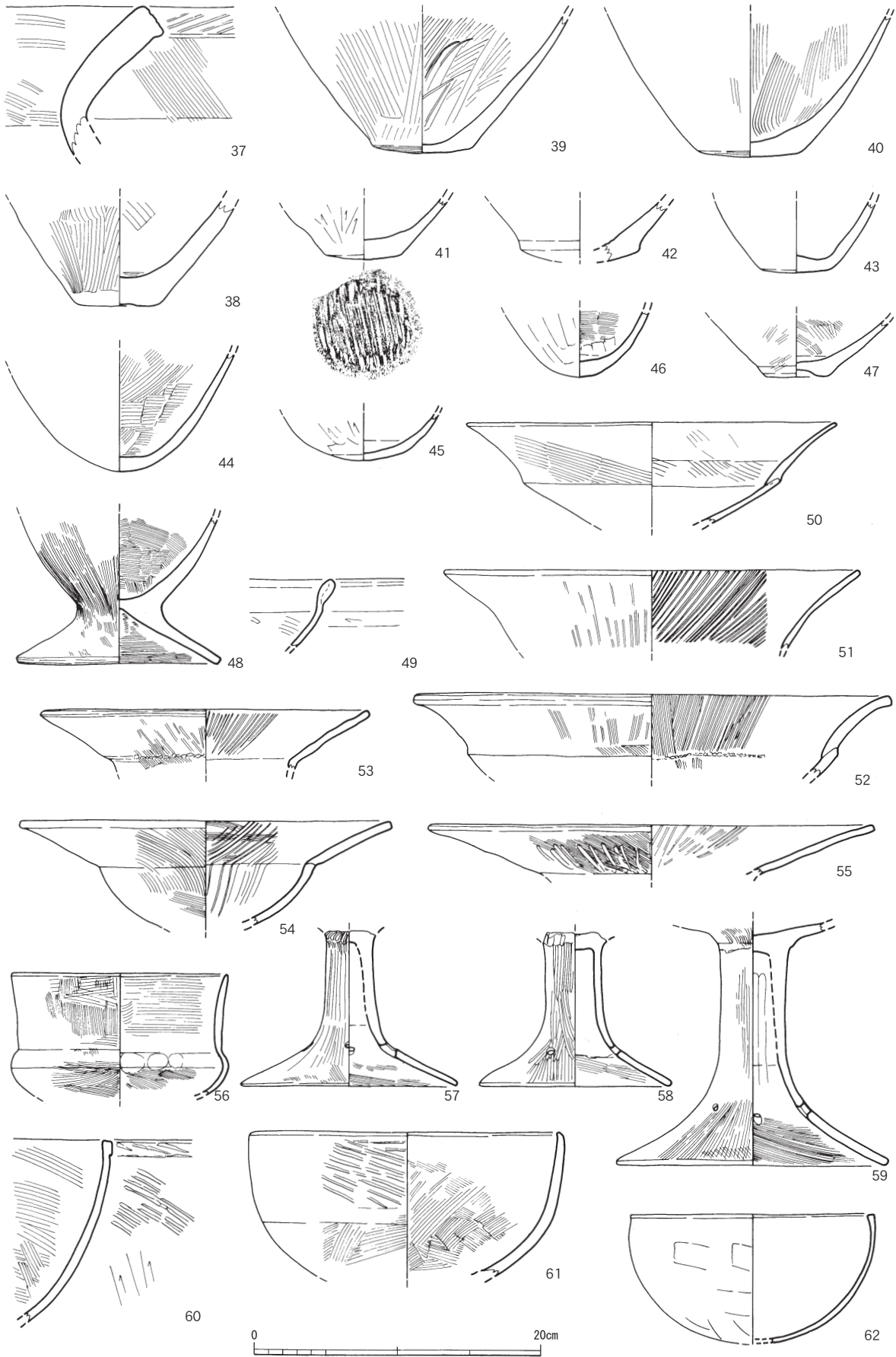
22～48は甕である。22～30は在地系甕の口縁部から胴部にかけてで、24・26は口唇部にキザミを付す。31は大型の在地系甕で、頸基部に断面三角形の突帯が廻り、胴部下半に断面台形の



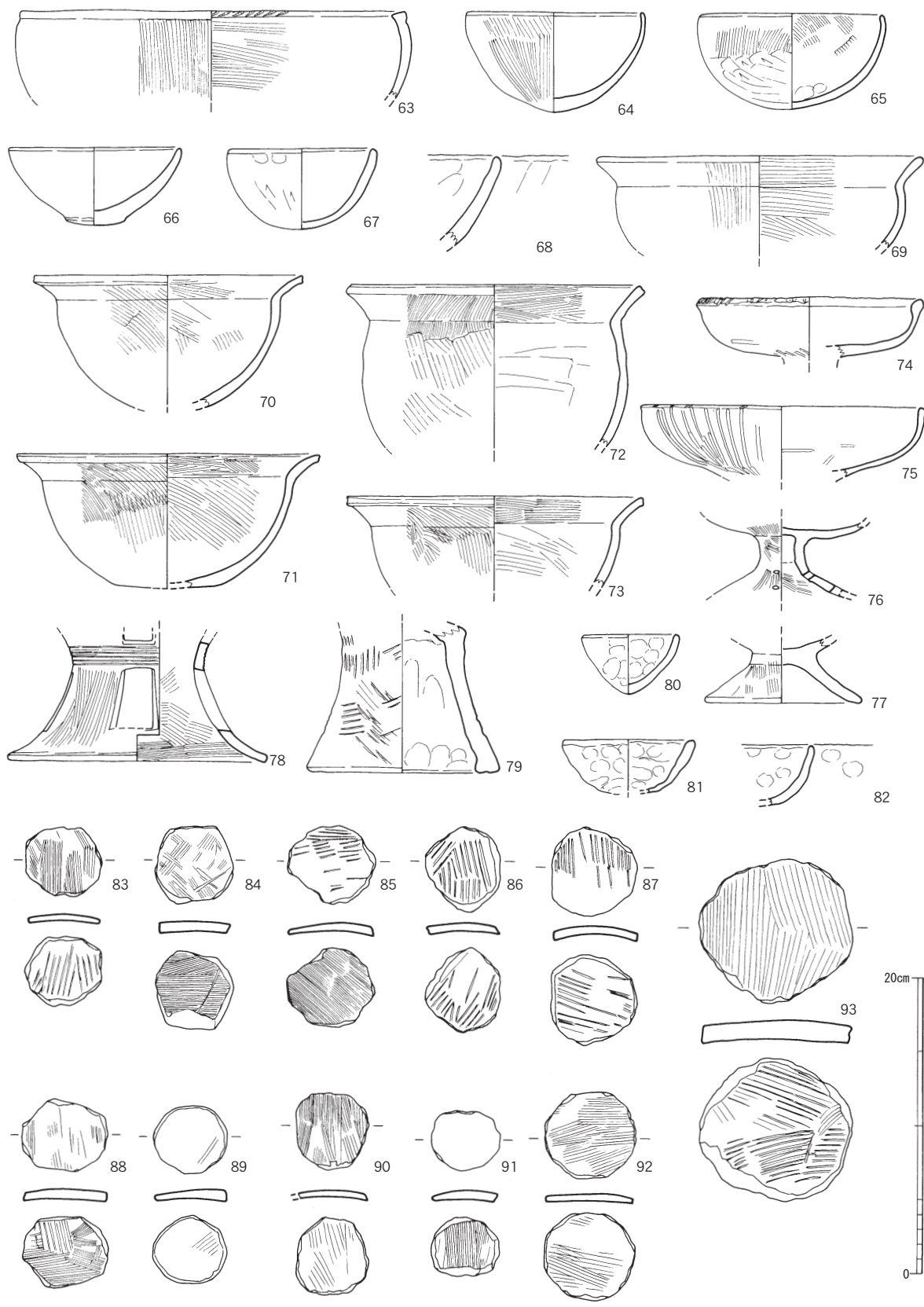
第 151 图 II 区木質集中部出土土器実測图① (1/4)



第 152 図 II 区木質集中部出土土器実測図② (1/4)



第 153 图 II 区木質集中部出土土器実測图③ (1/4)



第 154 图 II 区木質集中部出土土器実測图④ (1/4)

突帯が廻る。これらの突帯と口唇部にキザミを付す。32～34はやや小型の在地系甕である。35は畿内五様式系の甕である。36は頸基部のくびれが弱く、胴部は球形に近い。37は大型の甕の口縁部である。38～48甕の底部付近である。38は平底で、40～43はレンズ状で、41は底面にタタキが残存する。44～46は丸底である。47は輪台充填技法による五様式系甕である。48は脚部を有する甕である。

49～59は高杯である。49～56は杯部である。49は上方へ屈曲する口縁部で、端部が外側へ断面三角形に肥厚する。51・52は残存している上半部は外反し、特に内面に暗文やミガキが密に残存する。53～55は下半が半球形に近く、上半は屈曲して外側へ直線的にのびる口縁部である。いずれも内面に暗文が見られる。55は胴部が著しく扁球形で、口縁部はわずかに外側へ長くのびる。57～59は脚部である。57・58は低身で穿孔は57で4箇所、58で3箇所に施す。59の穿孔は3箇所。

60～77は鉢である。60～68は素口縁の鉢である。底部の残存するものはほとんどが丸底であるが、66はやや厚く突出気味の不安定な平底である。60は口縁端部外側を肥厚させ、タタキがキザミ状に付される。69～73は口縁部が屈曲して外側へのびるものである。74・75は、下半がほとんど立ち上がりせず、口縁部が上方に緩やかに屈曲するものである。74は口縁端部を肥厚させる。ともに口唇部にキザミを有し、外面にミガキが施され、下端の形状から脚部を有した可能性がある。76・77は脚部を有する鉢で、76は縦に列んで施された穿孔が残存する。

78は器台で、上下半双方の方形の透かし孔が残存し、その間に粗い平行文の文様帯を有す。透かし孔は上下4箇所ずつ施されるように復元される。

79は支脚で、外面にタタキが残存する。

80～82は手づくねによるもので小型の鉢状の器形である。

83～93は土製円盤である。表裏面ともにハケ調整が見られるものがほとんどである。93以外はいずれも径5～6cm程度で厚さ6～8mm程度であるのに対し、93は径10cm程度で厚さ1.6cmと大型である。

(5) II区トレンチ出土土器

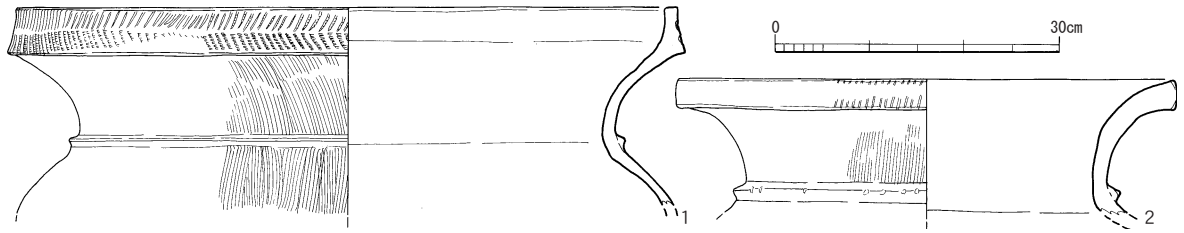
II区内の南半に設けたトレンチから出土した土器について以下にまとめる。

トレンチ1出土土器 (図版60、第155・156図1～5)

1・2は大型の壺ある。1は複合口縁壺で、口縁上部外面に上下に分割しハケ原体によるキザミで綾杉文を施す。頸基部には断面三角形の突帯が廻る。2は口縁部が外反して開く広口壺で、頸基部に断面三角形の突帯が廻る。口唇部上下端と突帯にキザミを付す。3は在地系複合口縁壺である。4は頸基部で強くくびれ、口縁部がやや外側に直線的にのびる壺で、頸基部には断面三角形の突帯が廻る。5は支脚である。

トレンチ2出土土器 (第156図6～19)

6は頸基部で強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。7～13は在地系甕で、外面はハケ調整で仕上げられてもタタキが残存するものが多い。全体的に頸部の屈曲は強くなく、口縁



第155図 II区トレンチ出土土器実測図①(1/8)

部はあまり強く外反はしない。14は甕の底部でややレンズ状である。15は高杯の杯部で、2箇所
で屈曲し、口縁部は外反しながら開く。16は素口縁の鉢で、口縁部はやや内湾する。17は胴部
が扁球形で、口縁部が上方にのびる鉢である。18は器台で、口唇部にキザミを付し、外面下半
にはタタキが残存する。19は器台で、方形の透かし孔の一部が残存する。

トレンチ3出土土器 (図版60、第157・158図1～34)

1～10は壺である。1は在地系複合口縁壺で、上部口縁外面にハケ原体の端部で施したと考
えられるキザミを連続させた山形文が見られる。頸基部外面にはキザミを付した突帯が廻る。2は
頸基部が強くくびれ、口縁部が外反して開き、なで肩の器形である。5は頸基部があまりくびれ
ず太く、胴部があまり張らない壺である。口縁部はやや外反して開き、口唇部には細かいキザミ
を付す。4・5は頸基部が強くくびれ、非常に短い口縁部が外反して開く短頸壺である。6は頸基
部の屈曲が緩やかで、わずかに外側に開く短頸壺である。7は太い頸基部で屈曲して口縁部が外
側へ直線的にのびる壺である。8は畿内系加飾二重口縁壺の口縁部である。外面の口縁端部のや
や下位には波状文が廻り、屈曲部には竹管文が連続している。9は胴部が扁球形で、非常に強く
くびれ細い頸基部からやや外側の上方に口縁部がのびる直口壺である。外面は密にミガキが施さ
れる。10は頸基部があまりくびれず口縁部がやや外側の上方へのびる壺である。胴部が強く張る
器形である。

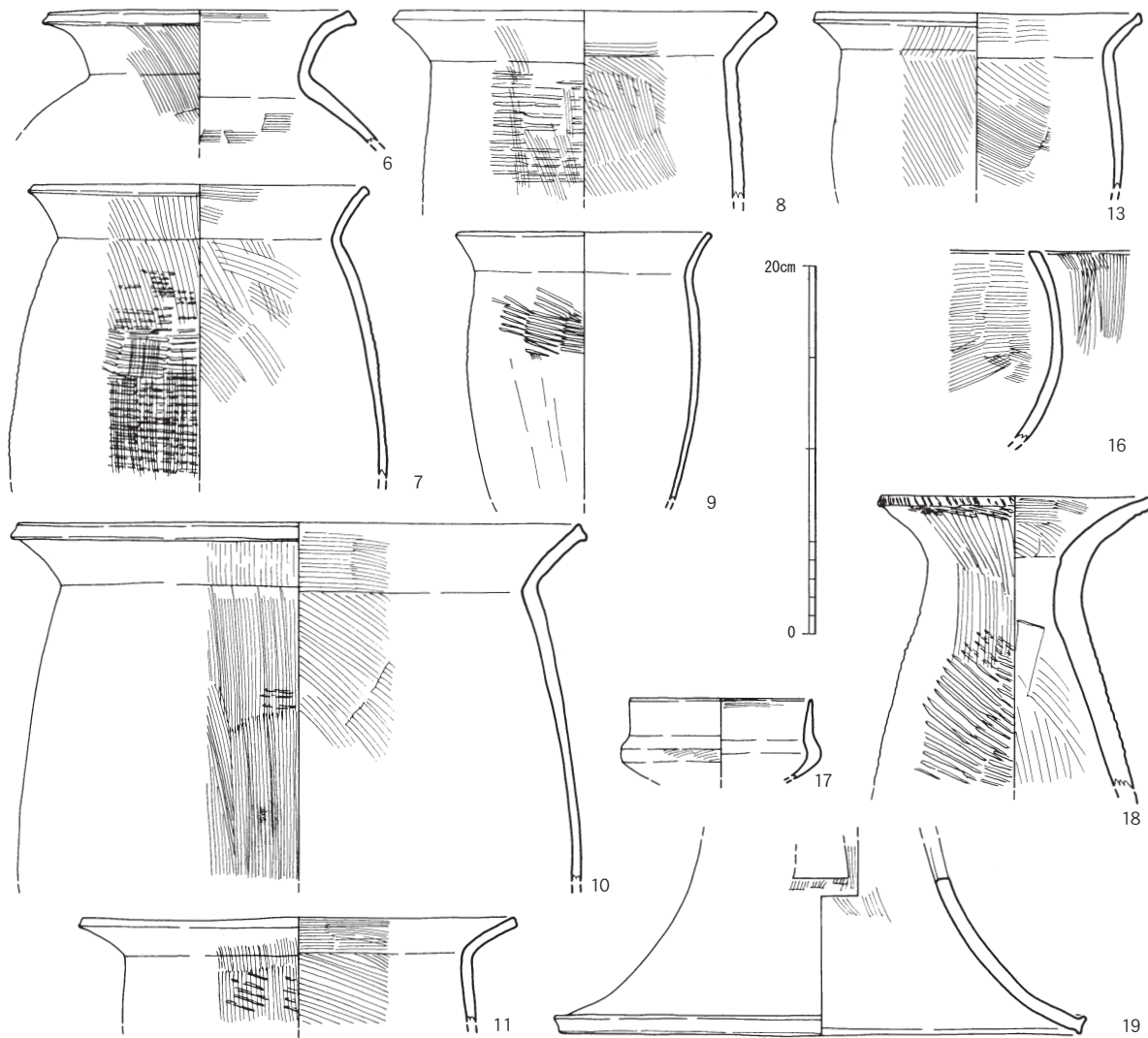
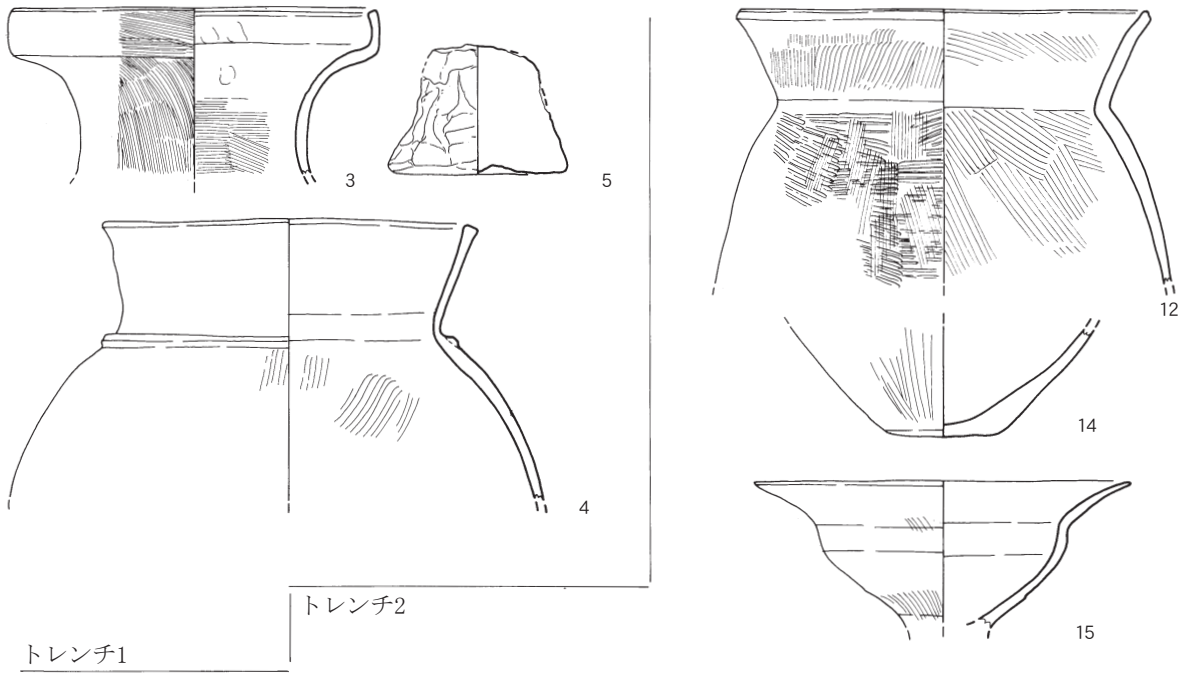
11～14は在地系甕の口縁部から胴部の部位。11・12は小型の甕で11の頸部の屈曲は弱い。13
は口唇部にキザミを付す。15～17は甕の底部で、15は丸底、16・17は狭く不安定な平底である。

18～24は高杯である。16～19は杯部で、18は上半が外反、下半が内湾し、内外面ともに暗
文が見られる。19の下部はあまり立ち上がらず、上部との接合する屈曲部付近でつまみ出した低
い突帯が廻る。20・21は下半が扁球形に近く、口縁部は屈曲して外側へ直線的にのびる。22～
24は高杯の短い脚部である。22・23は3箇所に穿孔を施す。

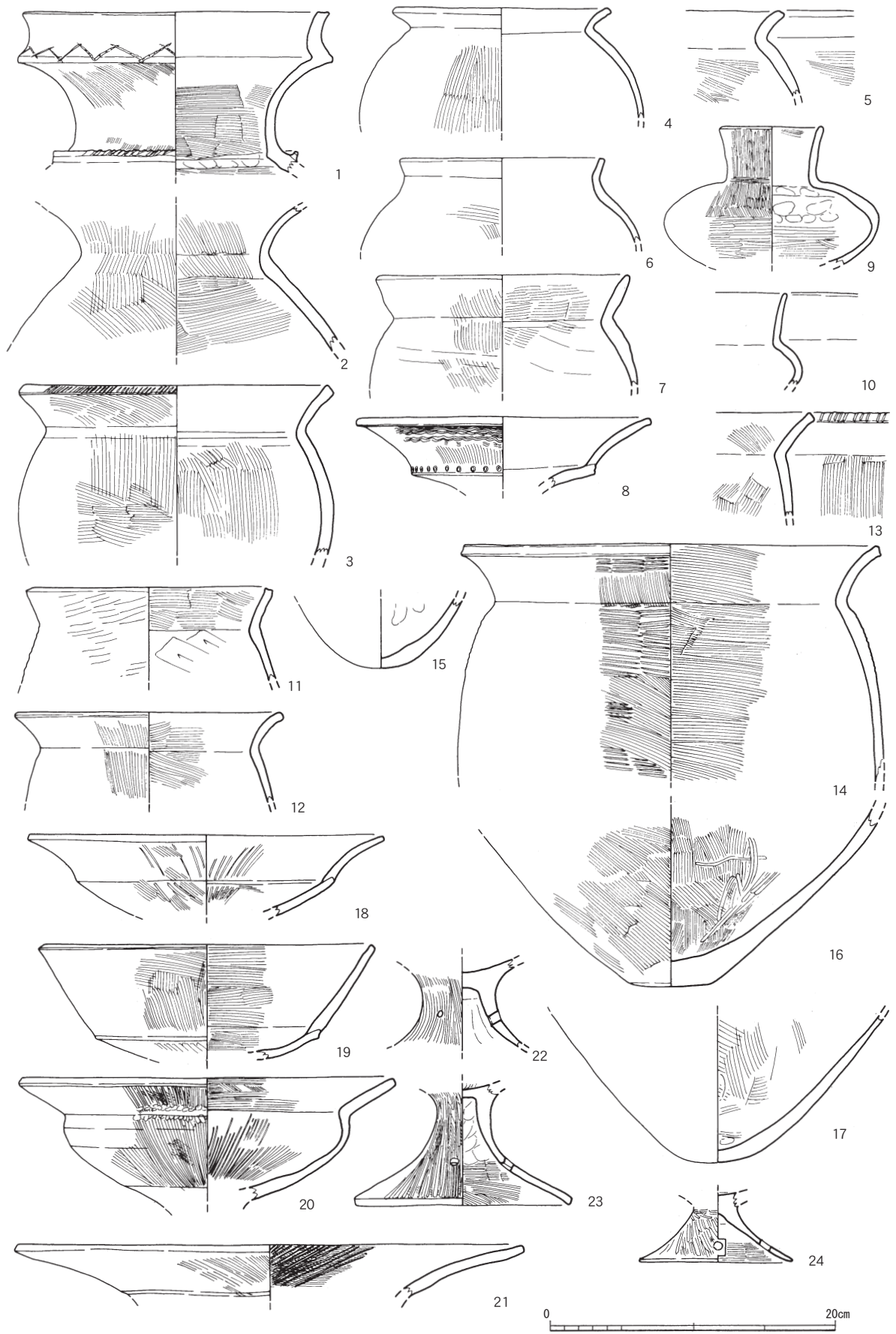
25～32は鉢である。25は胴部が扁球形に近く、口縁部が外側上方にのびる鉢である。26は短
い口縁部がわずかに屈曲するもので、外面は棒状の工具でナデたような調整を施す。27・28は素
口縁の鉢である。29は下半が立ち上がらず、屈曲して口縁部が上方に立ち上がる素口縁の鉢で外
面下半はケズリを施す。30は大型のやや内湾する素口縁の鉢である。31は浅身で、口縁部が緩
やかに屈曲して外側にのびる鉢である。32はやや深身で平底の鉢である。

33は手づくねによる鉢形の土器である。

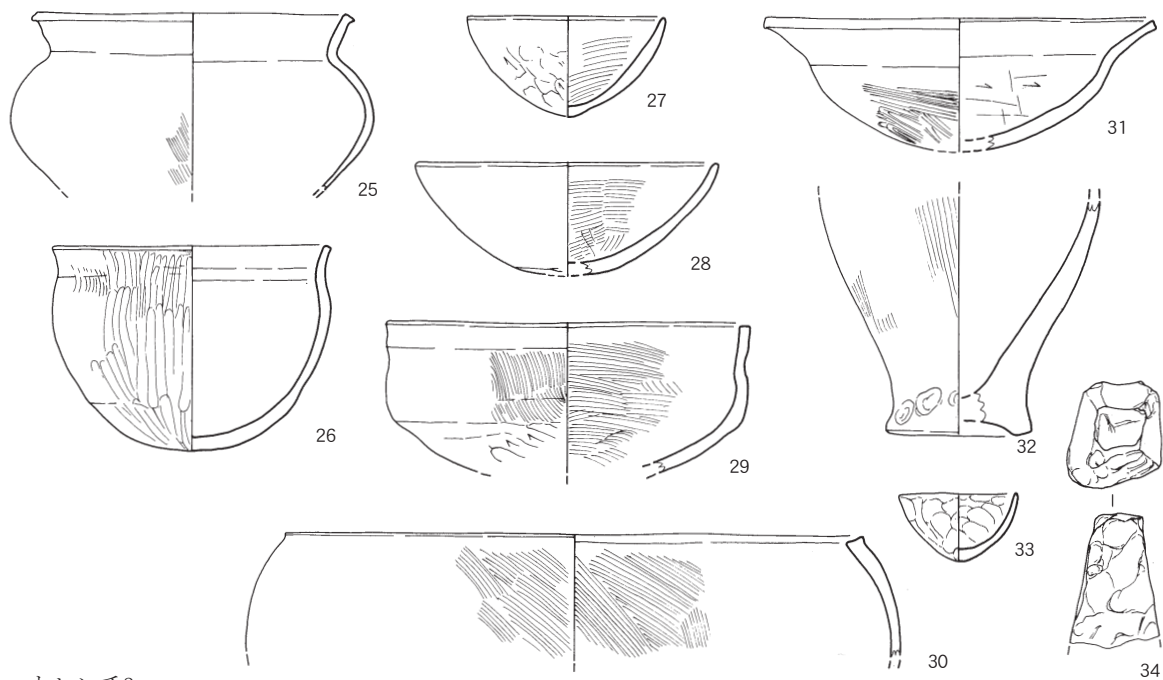
34は方柱状の土製品で、片側の端部が残存するが、他方は欠損する。残存する端部側の反対へ
徐々に太くなっていく。



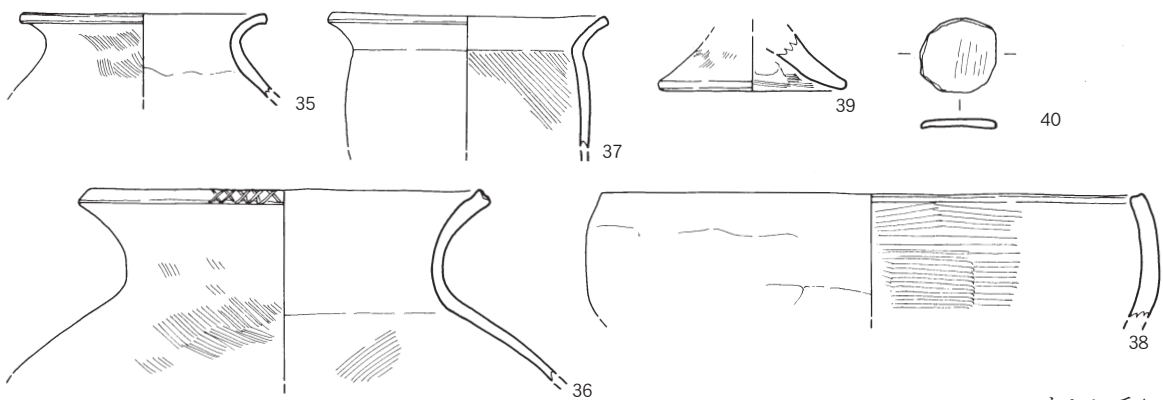
第 156 図 II 区トレンチ出土土器実測図② (1/4)



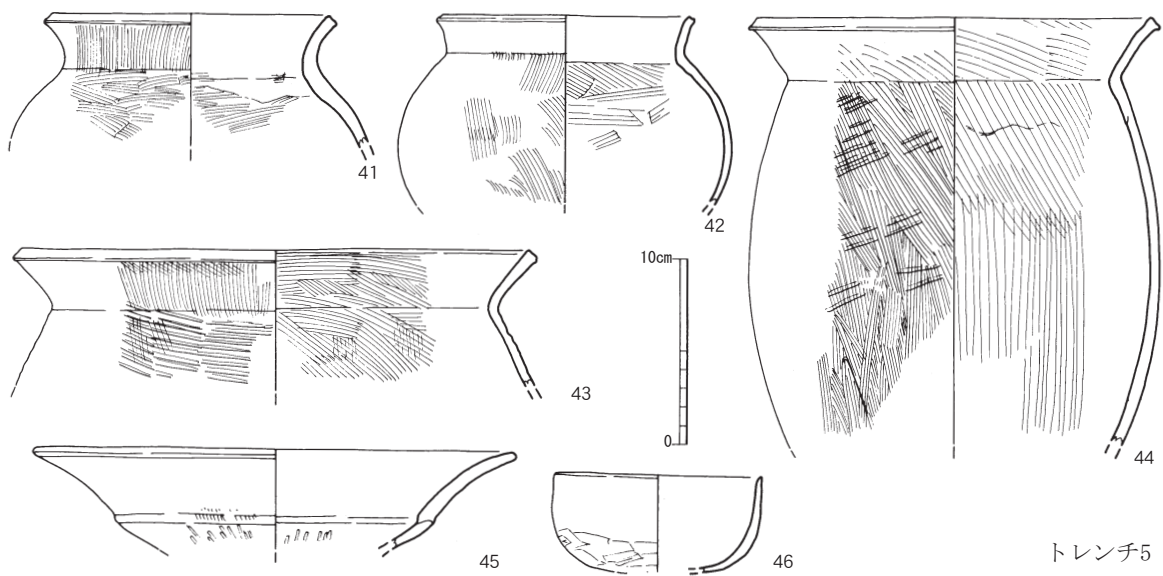
第157図 II区トレンチ出土土器実測図③ (1/4)



トレンチ3



トレンチ4



トレンチ5

第158図 II区トレンチ出土土器実測図④ (1/4)

トレンチ 4 出土土器 (第 158 図 35 ~ 40)

35 はなで肩で短い口縁部が外反して開く短頸壺である。36 は頸部がくびれ、口縁部が緩やかに外反して開く壺である。口唇部には「×」字状にキザミを付す。37 は在地系の小型の甕である。38 は大型の素口縁の鉢である。39 は脚部を有する鉢の下端部である。40 は土製円盤で径 3.8 cm 程度である。

トレンチ 5 出土土器 (第 158 図 41 ~ 46)

41・42 は頸基部があまりくびれず、短い口縁部が屈曲してやや外反して開く短頸壺である。41 は 42 に比して頸基部の屈曲が緩やかである。43・44 は在地系甕で、胴部外面にはタタキが残存し、内面はハケ調整である。45 は高杯の杯部で、上半は外反、下半は内湾し、外面下半にはミガキが残存する。46 は素口縁の鉢で外面下半にはケズリを施す。

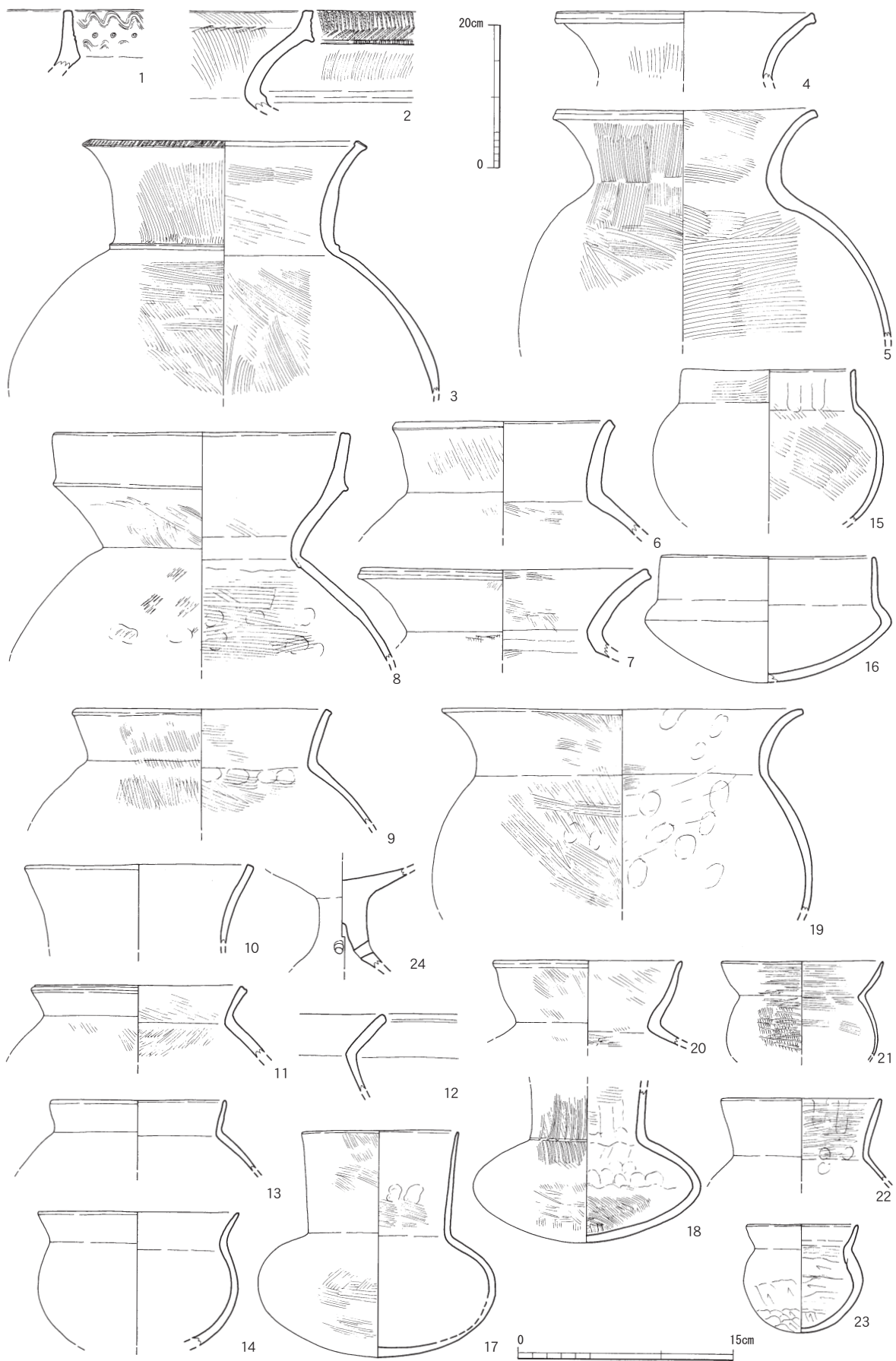
(6) II 区包含層およびその他の出土土器 (図版、第 60・61 図 1 ~ 105)

II 区における包含層・側溝から出土、および検出時・清掃時等で出土した土器について以下にまとめる。

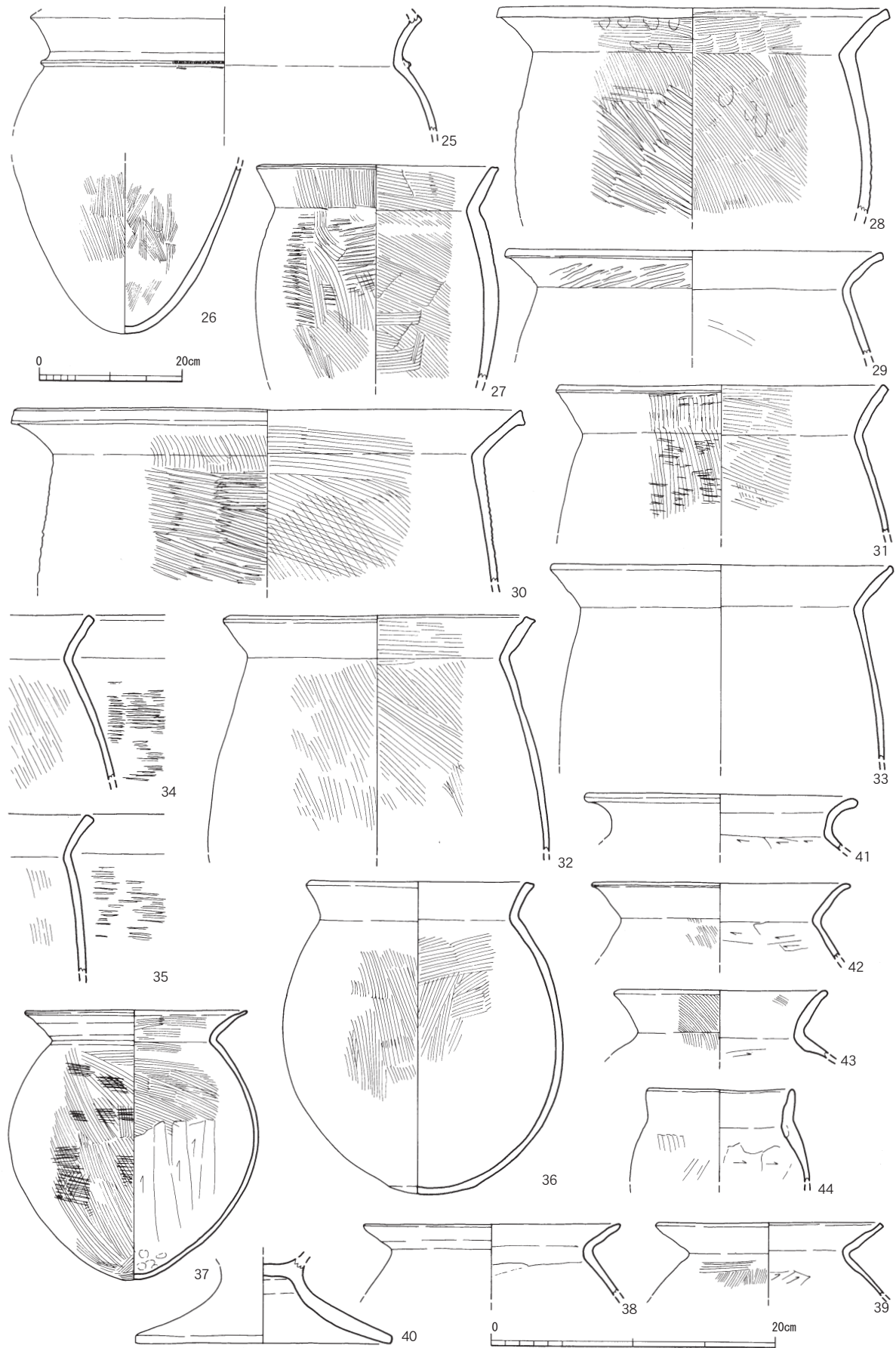
1 ~ 24 は壺である。1・2 は大型の広口壺の口縁部もしくは頸部にかけてである。1 は外面に波状文および竹管文を施す。2 は口縁部外面に上半・下半・下端と分割して密にキザミを施し、頸基部を低く突帯状に隆起させる。4・5 は頸基部で強くくびれて口縁部が外反してのびる広口壺である。6 はやや短い口縁部がやや外側の上方へ強くのびる。7 は頸基部で非常に強く屈曲して口縁部が広がる。8 は在地系の複合口縁壺である。9 ~ 13 は頸基部が強くくびれず太く、やや短い口縁部がやや外側の上方にのびる短頸壺である。14 は胴部が球形に近く、頸基部の屈曲が緩やかで口縁部がやや外側へのびる。15 は胴部が球形に近く、短い口縁部が直上にのびる短頸壺である。16 は胴部が扁平で張りが強く、わずかにくびれる頸基部から口縁部が直上にのびる。17・18 は胴部が扁球形で強く屈曲して口縁部が直上にのびる中部九州系の直口壺である。18 は外面に密にミガキが残存する。19 はなで肩で頸基部のくびれが弱く、口縁部が外反して開く広口壺である。20 は頸基部でやや強くくびれ、口縁部がやや外側の上方へ立ち上がる中型の壺である。21 ~ 23 は小型丸底壺である。21・22 は密にミガキが残存する部分があり、23 は内外面ともにミガキを施す。24 は小型の脚を有する壺で穿孔を施す。

25 ~ 40 は甕である。25・26 は大型の甕である。25 は頸基部にキザミを付す突帯を廻らす。27 ~ 36 は在地系の甕である。ほとんどが最終的な調整にハケを施すが、外面にはタタキが残存するものが多い。36 は胴部の丸みがやや強く、口縁部はやや短い。底部はやや突出気味のレンズ状である。37・38 は庄内系甕である。37 は外面にわずかにタタキが残存し、内面ハケ調整の後に下半は縦方向の粗いケズリを施す。39 は布留系甕である。40 は中部九州系の脚部を有する甕である。41 ~ 44 はいずれも内面にケズリを施す土師器の甕である。44 は頸部の屈曲はわずかで、口縁部は上方へ立ち上がる。

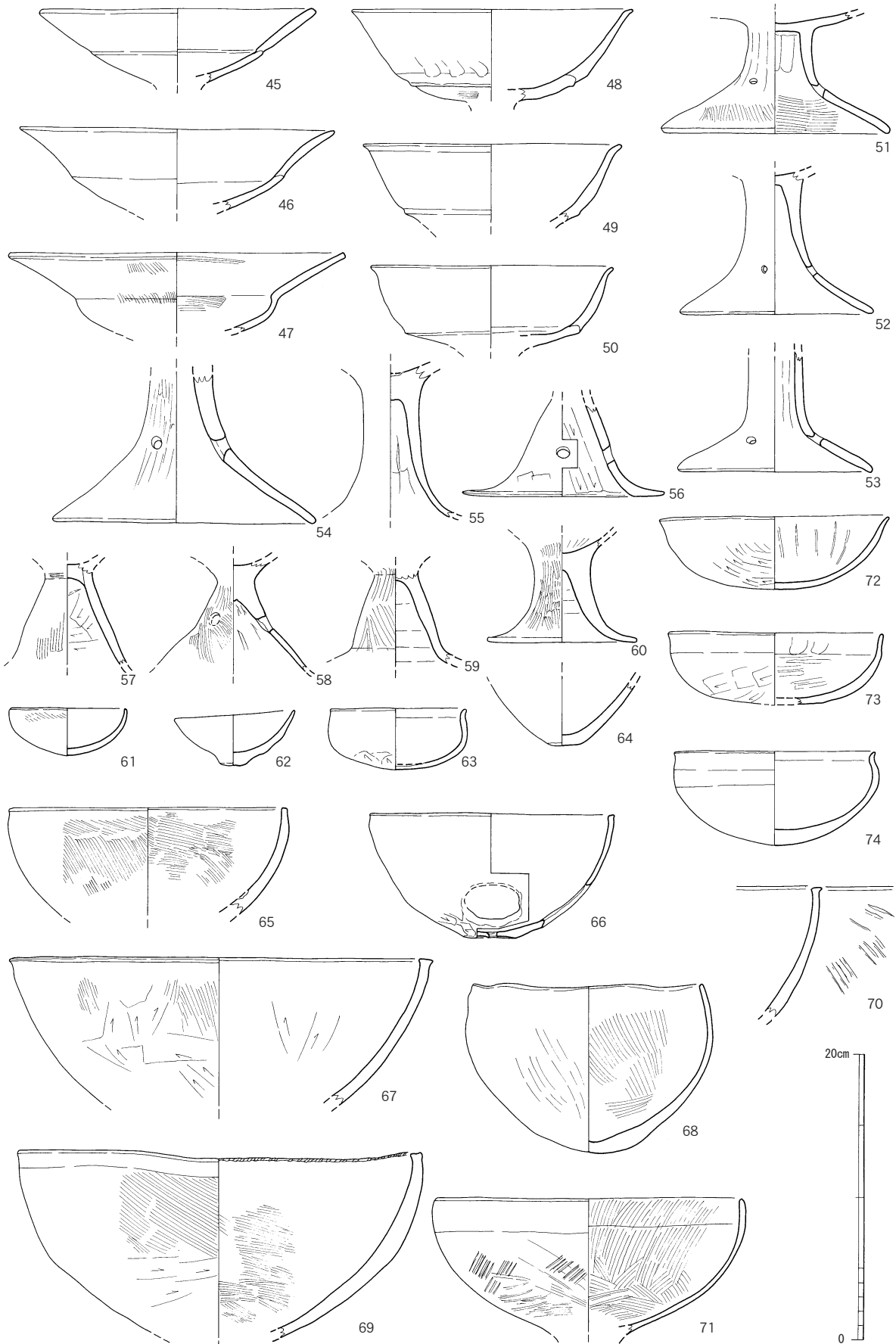
45 ~ 60 は高杯である。45 ~ 50 は杯部。45・46 は中位で緩やかに屈曲する。47 は下半が内湾して立ち上がり、口縁部は屈曲して外側へ直線的にのびる。48 ~ 50 は屈曲部より下位はほとんど立ち上がらず、上位は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。48 は



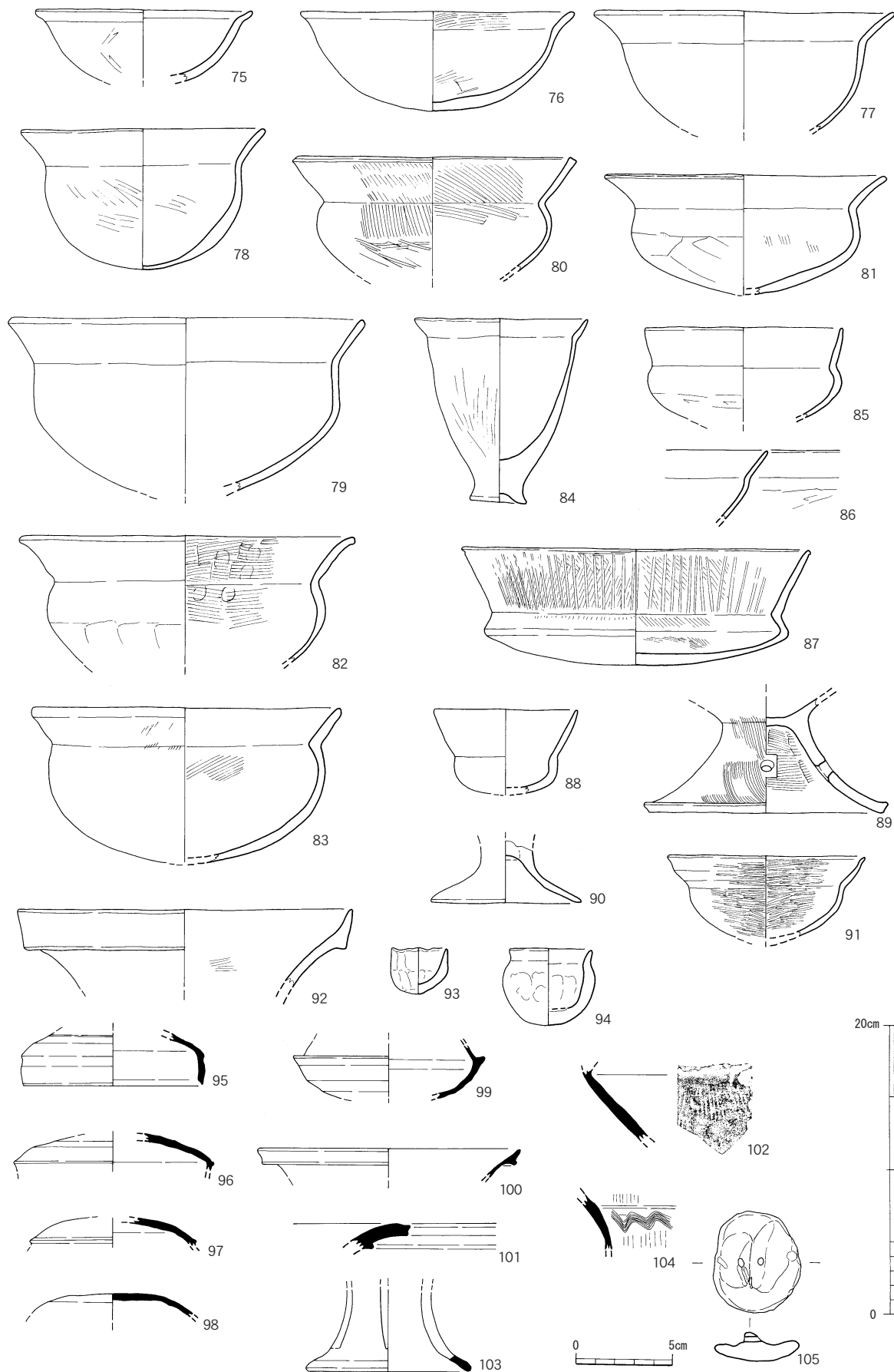
第 159 図 II 区包含層およびその他の出土土器実測図① (1・2 は 1/8、他は 1/4)



第160図 II区包含層およびその他の出土土器実測図② (25・26は1/8、他は1/4)



第161図 II区包含層およびその他の出土土器実測図③ (1/4)



第 162 図 II 区包含層およびその他の出土土器実測図④ (105のみ 1/3、他は 1/4)

屈曲部が突帯状にわずかに隆起する。51～60は脚部である。56～58・60は内面にケズリを施す。51～55は裾部から緩やかにある程度立ち上がって直上に杯部へと伸びるが、56～60は裾部からあまり立ち上がらずに屈曲して、内側に傾斜しながら杯部へ立ち上がる。穿孔は51～54・58が3箇所、56は1箇所である。

61～88については、63・72～74が椀で、他は鉢である。61・62は素口縁の小型の鉢で62の底部は突出している。63は小型の椀で口縁端部がわずかに外反する。64は尖底気味である。65～71は素口縁の鉢である。66は胴部下半に焼成後の穿孔を施した痕跡が残り、底部に焼成前の小さな穿孔を施す。68の口縁部はやや内湾気味である。69は口唇部内側に細かいキザミを施す。71は内面の中位に浅い沈線が廻る。72～74は椀でいずれも口縁端部はやや外反する。72の内面には縦方向の暗文が残存し、73の内面には横位のミガキが残存する。75・76は口縁部がわずかに外反する鉢である。77～83は口縁部が屈曲して外側へのびる鉢であり、そのうち80～83は胴部がやや張り、頸基部がわずかにくびれる。84は口縁部がやや外側に屈曲し、上げ底状で縦長の器形の鉢である。85は胴部が扁平でやや張り、わずかにくびれる頸基部からやや外側の上方へのびる鉢である。86は口縁部がわずかに屈曲して外側へのびる鉢である。87は胴部が非常に扁平で、口縁部が外側の上方へのびる鉢で、口縁部の内外面に暗文が施される。88は半球形の胴部から外側の上方に口縁部がのびる鉢で、脚部を有する可能性がある。89・90は脚部を有する鉢で、88は穿孔が4箇所に穿孔が施される。90は小型丸底鉢で内外面ともに密にミガキが施される。

92は器台の口縁部で外側へ肥厚して面をなす。

93・94は手づくねによる鉢形の土器である。94は口縁部がわずかに外側に開く。

95～104は須恵器である。94～97は杯蓋である。95は天井部に回転ヘラケズリの痕跡が残り、口縁部と天井部の境の稜は明瞭である。97は宝珠つまみが剥落した痕跡が見られる。99は杯身である。100～102は甕である。100・101は口縁部で102は肩部である。103は高杯の脚部で、透かし孔は4箇所に復元される。104は甕の胴部で波状文が見られる。

105は土製模造鏡である。紐となる部分を強くつまみ出し、小さな穿孔を施す。

(7) II区出土石器 (図版62、第163～165図1～33)

II区出土の石器を以下にまとめる。出土地点、法量や石材は表4を参照されたい。

1・2は石包丁でともに大きく欠損する。穿孔部付近に墻打痕は見られない。

3～10は砥石である。3は大きく欠損しており、砥面の使用は顕著ではない。側縁の抉れた部分も磨石として使用した可能性がある。4は砥面が3面残存しており、被熱のためやや変色しており、表面は劣化が激しい。5は砥面が3面残存する。6は残存する砥面は1面のみで、風化により表面は白色化する。7は4つの砥面のうち3面が著しく使用されており、風化により表面は白色化する。8は複数の砥面が残存し、風化により表面は白色化する。9は砥面が4面残存しており、風化により表面は白色化する。10は欠損して3つに分割していたのを接合した。残存する4つの砥面のうち、2側面は非常によく使用され平滑である。残りの表裏面の使用は顕著ではなく、粗い溝が平行する単位が複数残存するため凹凸が激しい。

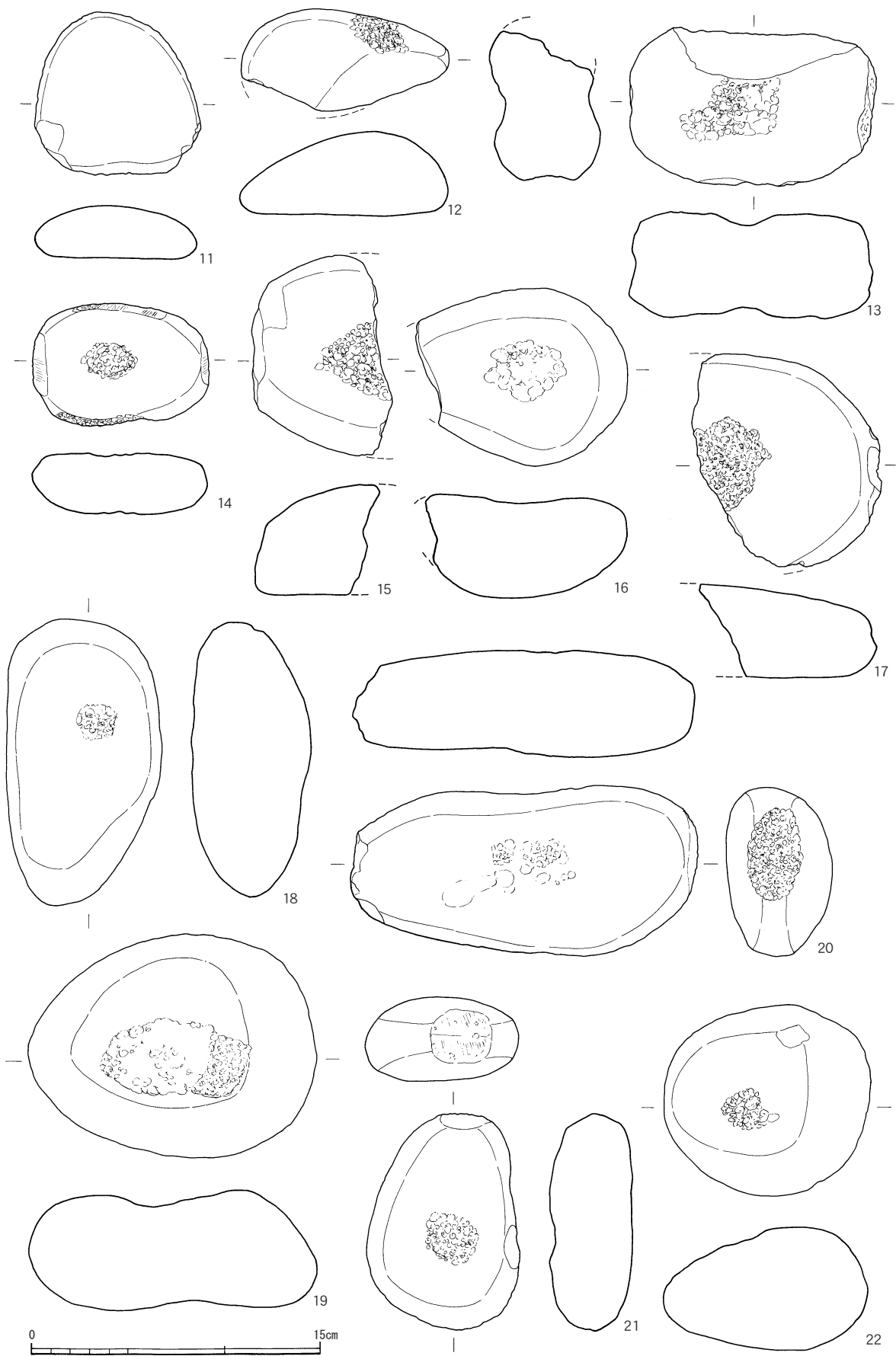
11は側縁を全体的に磨石と叩石の両方で使用している。

12～25は凹石である。12の使用は顕著ではない。13は大きく欠損しており、両面とともに側

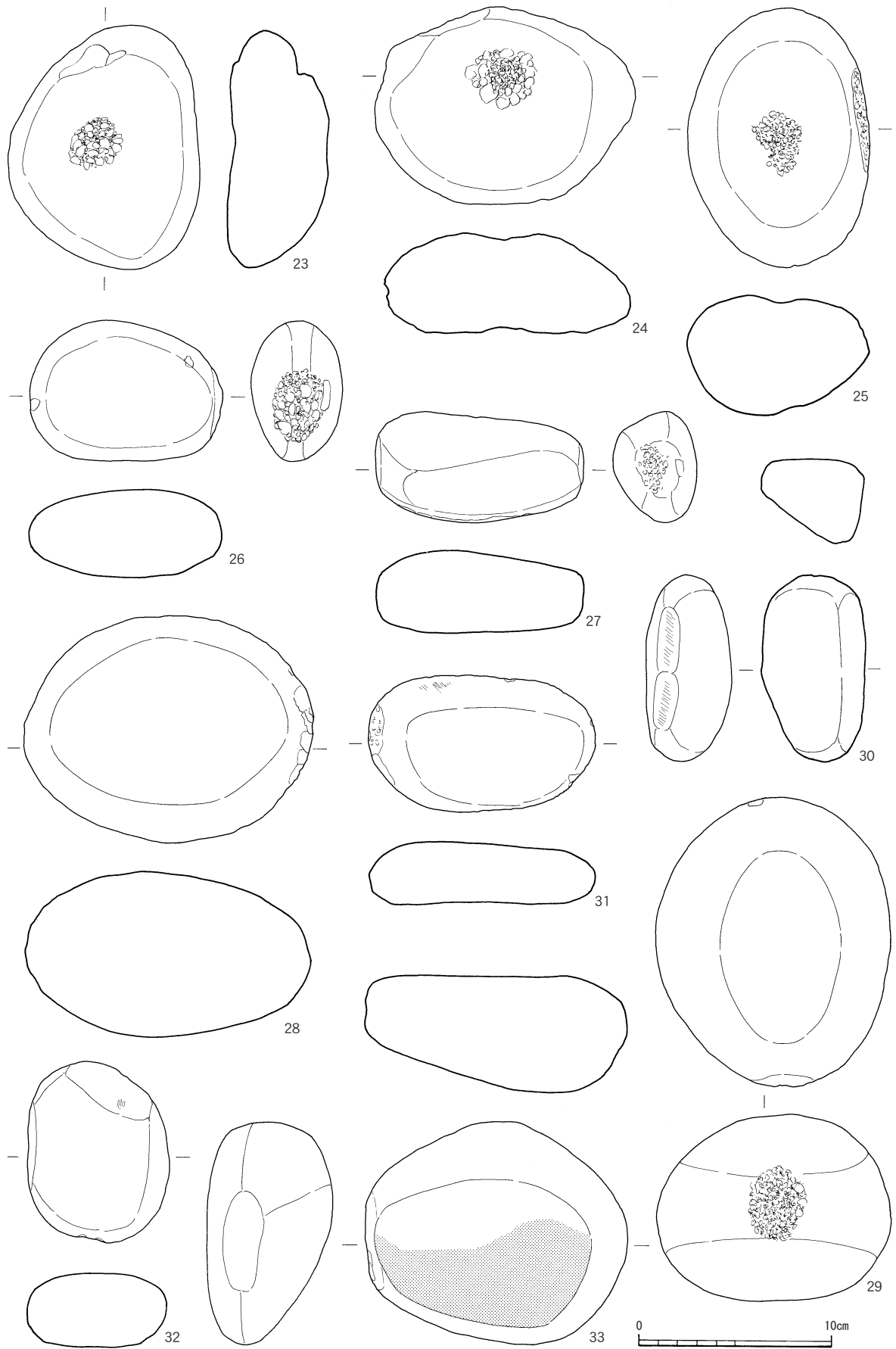
縁2箇所も凹石として使用し、他の側縁には叩石での使用も認められる。14は両面を使用しており、側縁は叩石や磨石に多面的に使用されている。15は大きく欠損しており、片面のみ使用痕が残存する。16は片面を使用しており、側縁を一部叩石として使用する。17は欠損しており、使用は顕著ではない。18の使用はごくわずかである。19は両面を著しく使用する。20は両面ともにわずかに使用され、側縁は叩石としての痕跡が複数見られる。21は両面を使用しており、側縁には叩石・磨石としての痕跡が残る。22は片面のみわずかに使用される。23は使用される表裏面ともに痕跡は顕著ではない。24は表裏面ともに使用される。25は表裏面ともに使用され、側縁の一部が叩石として使用される。



第 163 図 II 区出土石器① (1/3)



第 164 图 II 区出土石器② (1/3)



第 165 图 II 区出土石器③ (1/3)

26～29は叩石である。26は長軸の両側側縁が使用され、片側の使用は顕著であるが反対はわずかである。27は長軸両側端が使用されるが、同一箇所でも磨石としても使用されており、他の部分でも磨石や叩石として使用されたとみられる部分がある。28は側縁の一部のみが使用される。29は長軸両側縁が使用される。

30～33は磨石である。30は側縁の一部が集中的に使用される。31は側縁部が全体的に使用される。32は側縁の一部が集中的に使用される。33は磨石で表裏面ともわずかに使用される。

表4 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土石器一覧表

挿図番号	番号	図版	種類	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号
94	1	35	砥石	I	4号溝	5.1	3.9	2.7	56.7	細粒砂岩	S1-4
94	2	35	砥石	I	落ち込み1	7.7	4.4	2.6	73.0	細粒砂岩	S1-3
94	3	35	砥石	I	落ち込み1	5.8	5.1	1.5	52.0	細粒砂岩	S1-2
94	4	35	砥石	I	落ち込み1	8.9	6.0	2.6	116.6	細粒砂岩	S1-8
94	5	35	砥石	I	土坑19	7.5	6.8	1.5	96.6	砂岩	S1-1
94	6	35	砥石	I	側溝	5.9	5.4	5.0	121.6	砂岩	S1-14
94	7	35	砥石	I	4号溝	6.1	4.2	2.5	60.0	粘板岩	S1-5
94	8	35	砥石	I	住居2(落ち1)	3.8	5.5	2.4	61.1	砂岩	S1-19
94	9	35	砥石	I	土坑7	15.3	7.4	4.1	455	細粒砂岩	S1-23
94	10	35	砥石	I	ビット11	12.1	4.3	4.0	215.1	粘板岩	S1-20
94	11	35	砥石	I	包含層	17.9	13.1	3.6	648	細粒砂岩	S1-36
94	12	35	砥石	I	落ち込み2	18.3	11.4	4.3	1316	砂岩	S1-37
94	13	35	砥石	I	包含層	12.8	7.2	3.7	273	細粒砂岩	S1-35
94	14	35	砥石	I	住居2(落ち1)	11.1	28.6	5.7	2640	硬質砂岩	S1-6
95	15	35	砥石	I	住居2(落ち1)	34.6	16.7	9.1	6500	砂岩	S1-7
95	16	35	石包丁	I	落ち込み1	7.3	4.8	0.7	33.7	片岩	S1-32
95	17	35	磨石	I	住居2(落ち1)	10.7	4.5	3.4	214.9	砂岩	S1-25
95	18	35	磨石	I	住居2(落ち1)	14.1	5.7	3.8	370	玄武岩	S1-22
95	19	35	叩石	I	Ic区包含層	7.2	13.2	5.0	662	玄武岩	S1-34
96	20	35	凹石	I	西側包含層	9.8	7.3	3.6	350	凝灰岩	S1-9
96	21	35	凹石	I	西側包含層	6.3	11.6	5.2	475	礫岩	S1-15
96	22	35	凹石	I	西側包含層	7.4	9.4	5.4	570	凝灰岩	S1-10
96	23	35	凹石	I	落ち込み1	8.5	9.5	3.4	340	凝灰岩	S1-12
96	24	35	凹石	I	西側包含層	8.0	12.0	5.3	695	凝灰岩	S1-13
96	25	35	凹石	I	落ち込み1	8.0	9.9	2.2	202.9	凝灰岩	S1-21
96	26	35	凹石	I	ビット154	8.3	13.9	5.2	749	玄武岩	S1-27
96	27	35	凹石	I	土坑35	16.0	7.8	4.4	740	玄武岩	S1-11
96	28	35	凹石	I	土坑46上層	9.4	10.4	6.9	815	玄武岩	S1-33
96	29	35	凹石	I	包含層	7.5	9.2	3.8	339	玄武岩	S1-26
96	30	35	凹石	I	落ち込み1	14.0	8.0	4.8	720	玄武岩	S1-17
96	31	35	凹石	I	西側包含層	14.2	7.2	5.0	660	玄武岩	S1-24
96	32	35	石皿	I	西側包含層	12.3	14.1	4.4	880	玄武岩	S1-16
163	1	62	石包丁	II	木質集中部	4.9	8.3	0.5	28.9	片岩	S2-1
163	2	62	石包丁	II	木質集中部	4.5	5.5	0.6	17.1	片岩	S2-2
163	3	62	砥石	II	木質集中部	7.5	3.4	2.5	69	礫岩	S2-32
163	4	62	砥石	II	北端検出時	11.8	7.8	6.9	837	砂岩	S2-35
163	5	62	砥石	II	落ち込み5	13.4	15.0	5.9	1481	砂岩	S2-26
163	6	62	砥石	II	落ち込み5	14.6	9.7	6.0	1050	細粒砂岩	S2-21
163	7	62	砥石	II	清掃時	16.5	6.4	4.7	470	細粒砂岩	S2-3
163	8	62	砥石	II	落ち込み5	10.3	7.5	3.8	314	細粒砂岩	S2-20
163	9	62	砥石	II	落ち込み5	18.0	10.4	2.8	770	細粒砂岩	S2-12
163	10	62	砥石	II	落ち込み4	25.3	14.3	7.2	3700	凝灰岩	S2-4
164	11	62	叩石・磨石	II	木質集中部	8.4	8.7	2.8	296	玄武岩	S2-33
164	12	62	凹石	II	南検出時	10.8	5.3	4.4	277	硬質砂岩	S2-29
164	13	62	凹石	II	谷周辺	12.8	8.1	5.9	920	玄武岩	S2-11
164	14	62	凹石	II	遺構面	6.4	9.1	3.2	290	玄武岩	S2-22
164	15	62	凹石	II	木質集中部	10.4	7.2	5.8	493	玄武岩	S2-34
164	16	62	凹石	II	木質集中部	9.2	11.0	5.3	680	玄武岩	S2-23
164	17	62	凹石	II	土坑10	11.0	9.8	4.8	635	玄武岩	S2-16
164	18	62	凹石	II	木質集中部	14.9	8.1	7.0	1104	玄武岩	S2-25
164	19	62	凹石	II	落ち込み5	13.6	10.3	5.3	860	玄武岩	S2-19
164	20	62	凹石	II	落ち込み4	18.1	8.8	5.6	1250	凝灰岩	S2-13
164	21	62	凹石	II	北検出時	11.2	8.0	4.4	570	玄武岩	S2-7
164	22	62	凹石	II	東側溝	10.7	10.0	6.4	850	凝灰岩	S2-8
165	23	62	凹石	II	土坑24	12.7	10.0	5.3	880	凝灰岩	S2-6
165	24	62	凹石	II	落ち込み5	10.3	13.6	5.3	860	礫岩	S2-19
165	25	62	凹石	II	谷周辺	13.5	9.4	6.2	1055	凝灰岩	S2-9
165	26	62	叩石	II	木質集中部	10.1	7.4	4.7	490	凝灰岩	S2-27
165	27	62	叩石	II	谷周辺	10.9	5.8	4.3	390	凝灰岩	S2-10
165	28	62	叩石	II	落ち込み5	15.1	11.9	8.8	1210	礫岩	S2-14
165	29	62	叩石	II	木質集中部	12.3	15.5	9.8	2500	凝灰岩	S2-15
165	30	62	磨石	II	木質集中部	9.8	5.6	4.5	284	凝灰岩	S2-24
165	31	62	磨石	II	落ち込み5	11.8	7.2	3.4	447	凝灰岩	S2-30
165	32	62	磨石	II	谷周辺	9.5	7.4	4.0	423	玄武岩	S2-28
165	33	62	磨石	II	土坑10	11.7	13.7	6.6	1330	玄武岩	S2-17

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(1)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
10	1		I	建物1	ピット147	弥生・土師器	甕	1083	14	26		I	建物9	礎盤b6	弥生・土師器	壺	705
10	2		I	建物1	建1-1	弥生・土師器	鉢	1200	14	27		I	建物9	礎盤b10	弥生・土師器	甕	685
10	3		I	建物1	建1-1	弥生・土師器	器台	1111	14	28		I	建物9	礎盤b42	弥生・土師器	甕	734
10	4		I	建物2	建2-2	弥生・土師器	壺	2321	14	29		I	建物9	礎盤b10	弥生・土師器	甕	686
10	5		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	壺	2292	14	30		I	建物9	礎盤b10	弥生・土師器	高坏	689
10	6		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	壺	2289	14	31		I	建物9	礎盤b10	弥生・土師器	高坏	1267
10	7		I	建物2	建2-2	弥生・土師器	壺	2320	14	32		I	建物9	礎盤b44	弥生・土師器	高坏	737
10	8		I	建物2	建2-2	弥生・土師器	壺	1110	14	33		I	建物9	礎盤b10	弥生・土師器	鉢	1268
10	9		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	甕	2290	14	34		I	建物9	礎盤b16	弥生・土師器	鉢	704
10	10		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	高坏	2291	17	1		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	壺	1325
10	11		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	鉢	2156	17	2		I	建物10	礎盤c25	弥生・土師器	壺	1327
10	12		I	建物2	建2-3	弥生・土師器	鉢	2306	17	3		I	建物10	礎盤b50	弥生・土師器	壺	739
10	13		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	壺	699	17	4		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	壺	1320
10	14		I	建物4	礎盤b2	弥生・土師器	壺	674	17	5		I	建物10	礎盤b8	弥生・土師器	壺	683
10	15		I	建物4	礎盤b20	弥生・土師器	壺	711	17	6		I	建物10	礎盤b46	弥生・土師器	壺	738
10	16		I	建物4	礎盤b20	弥生・土師器	壺	1276	17	7		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	甕	1117
10	17		I	建物4	礎盤b2	弥生・土師器	壺	675	17	8		I	建物10	礎盤c47	弥生・土師器	甕	1332
10	18		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	壺	698	17	9		I	建物10	礎盤b8	弥生・土師器	甕	1306
10	19		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	壺	697	17	10		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	甕	1321
10	20		I	建物4	礎盤b18	弥生・土師器	壺	708	17	11		I	建物10	礎盤c47	弥生・土師器	甕	1333
10	21		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	甕	1273	17	12		I	建物10	礎盤b50	弥生・土師器	高坏	740
10	22		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	甕	1282	17	13		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	高坏	1319
10	23		I	建物4	礎盤b20	弥生・土師器	甕	1280	17	14		I	建物10	礎盤c47	弥生・土師器	鉢	1126
10	24		I	建物4	礎盤b20	弥生・土師器	甕	710	17	15		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	鉢	1322
10	25		I	建物4	礎盤b18	弥生・土師器	甕	1281	17	16		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	鉢	1324
10	26		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	甕	1272	17	17		I	建物10	礎盤c25	弥生・土師器	鉢	1328
10	27		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	甕	1274	17	18		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	鉢	1323
10	28		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	高坏	1271	17	19		I	建物10	礎盤c23	弥生・土師器	器台	1326
10	29		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	高坏	1270	17	20		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	壺	1339
10	30		I	建物4	礎盤b20	弥生・土師器	鉢	1275	17	21		I	建物11	礎盤b49	弥生・土師器	壺	1308
10	31		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	鉢	1269	17	22		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	壺	1337
10	32		I	建物4	礎盤b14	弥生・土師器	鉢	696	17	23		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	壺	1343
12	1		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	壺	726	17	24		I	建物11	礎盤c26	土師器	壺	1341
12	2		I	建物5	礎盤b3	弥生・土師器	壺	1284	17	25		I	建物11	礎盤c15	弥生・土師器	甕	1115
12	3		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	壺	1287	17	26		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	甕	1335
12	4		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	壺	1288	17	27		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	甕	1340
12	5		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	壺	723	17	28		I	建物11	礎盤b51	弥生・土師器	甕	741
12	6		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	甕	722	17	29		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	甕	1344
12	7		I	建物5	礎盤b9	弥生・土師器	甕	684	17	30		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	甕	1338
12	8		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	甕	1289	17	31		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	高坏	1118
12	9		I	建物5	礎盤b1	弥生・土師器	甕	673	17	32		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	高坏	1334
12	10		I	建物5	礎盤b3	弥生・土師器	甕	678	17	33		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	鉢	1119
12	11		I	建物5	礎盤b1	弥生・土師器	高坏	672	17	34		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	鉢	1348
12	12		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	高坏	724	17	35		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	鉢	1223
12	13		I	建物5	礎盤b3	弥生・土師器	鉢	676	17	36		I	建物11	礎盤c26	弥生・土師器	器台	1336
12	14		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	鉢	1290	22	1		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	壺	1076
12	15		I	建物5	礎盤b3	弥生・土師器	鉢	1285	22	2		I	建物12	礎盤c3	弥生・土師器	壺	1377
12	16		I	建物5	礎盤b1	弥生・土師器	鉢	671	22	3		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	甕	1075
12	17		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	器台	725	22	4		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	甕	1375
12	18		I	建物5	礎盤b39	弥生・土師器	器台	1286	22	5		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	1374
12	19		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	690	22	6		I	建物12	礎盤c3	弥生・土師器	鉢	1376
12	20		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	1351	22	7		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	2256
12	21		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	1354	22	8		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	1371
12	22		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	1353	22	9		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	1373
12	23		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	692	22	10		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	1077
12	24		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	壺	1356	22	11		I	建物12	ピット121	弥生・土師器	鉢	1372
12	25		I	建物6	礎盤b7	弥生・土師器	壺	1350	22	12		I	建物13	礎盤c10	弥生・土師器	壺	2263
12	26		I	建物6	礎盤b40	弥生・土師器	甕	727	22	13		I	建物13	ピット122	弥生・土師器	壺	1379
12	27		I	建物6	礎盤b40	弥生・土師器	甕	729	22	14		I	建物13	ピット125	弥生・土師器	高坏	1378
12	28		I	建物6	礎盤b40	弥生・土師器	甕	728	22	15		I	建物14	礎盤c49	弥生・土師器	甕	1380
12	29		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	甕	691	22	16		I	建物14	礎盤c50	弥生・土師器	高坏	1380
12	30		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	甕	1366	22	17		I	建物14	礎盤c50	弥生・土師器	鉢	1128
12	31		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	甕	694	22	18		I	建物15	礎盤c2	弥生・土師器	壺	1112
12	32		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	甕	693	22	19		I	建物15	礎盤c2	弥生・土師器	壺	2266
12	33		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	高坏	1358	22	20		I	建物16	礎盤c41	弥生・土師器	壺	1383
12	34		I	建物6	礎盤b7	弥生・土師器	鉢	682	22	21		I	建物16	礎盤c41	弥生・土師器	壺	1384
12	35		I	建物6	礎盤b11	弥生・土師器	器台	695	22	22		I	建物16	礎盤c48	弥生・土師器	壺	1386
12	36		I	建物6	礎盤b43	弥生・土師器	器台	736	22	23		I	建物16	礎盤c41	弥生・土師器	甕	1382
14	1		I	建物7	礎盤b22	弥生・土師器	壺	713	22	24		I	建物16	礎盤c48	弥生・土師器	甕	1387
14	2		I	建物7	礎盤b22	弥生・土師器	壺	1291	22	25		I	建物16	礎盤c48	弥生・土師器	鉢	1127
14	3		I	建物7	礎盤b22	弥生・土師器	壺	714	22	26		I	建物16	礎盤c48	弥生・土師器	鉢	1227
14	4		I	建物7	礎盤b17	弥生・土師器	甕	706	22	27		I	建物16	礎盤c41	弥生・土師器	鉢	1125
14	5		I	建物7	礎盤b17	弥生・土師器	甕	707	22	28		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	壺	1122
14	6		I	建物7	礎盤b5	弥生・土師器	甕	1291	22	29		I	建物17	ピット128	弥生・土師器	甕	1393
14	7		I	建物8	礎盤b15	弥生・土師器	壺	1294	22	30		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	甕	1121
14	8		I	建物8	礎盤b15	弥生・土師器	壺	701	22	31		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	甕	1392
14	9		I	建物8	礎盤b4	弥生・土師器	壺	679	22	32		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	甕	1390
14	10		I	建物8	礎盤b37	弥生・土師器	壺	718	22	33		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	甕	1391
14	11		I	建物8	礎盤b37	弥生・土師器	壺	1303	22	34		I	建物17	礎盤c36	弥生・土師器	高坏	1124
14	12		I	建物8	礎盤b37	弥生・土師器	壺	716	22	35		I	建物17	礎盤c28	弥生・土師器	鉢	1120
14	13		I	建物8	礎盤b4	弥生・土師器	甕	680	22	36		I	建物17	ピット128	弥生・土師器	鉢	1079
14	14		I	建物8	礎盤b37	弥生・土師器	甕	717	22	37		I	建物18	礎盤c37	弥生・土師器	壺	1395
14	15		I	建物8	礎盤b4	弥生・土師器	甕	1299	22	38		I	建物19	ピット150	弥生・土師器	壺	2271
14	16		I	建物8	礎盤b15	弥生・土師器	甕	700	22	39		I	建物19	ピット151	弥生・土師器	壺	1396
14	17		I	建物8	礎盤b38	弥生・土師器	高坏	721	22	40		I	建物19	ピット151	弥生・土師器	鉢	1397
14	18		I	建物8	礎盤b15	弥生・土師器	高坏	702	22	41		I	建物19	ピット151	弥生・土師器	鉢	1400
14	19		I	建物8	礎盤b38	弥生・土師器	鉢	720	27	1		I	建物20	ピット152	弥生・土師器	壺	2273
14	20		I	建物8	礎盤b15	弥生・土師器	鉢	1420	27	2		I	建物20	ピット152	弥生・土師器	甕	2275

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(2)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
27	8		I	建物20	ヒット152	弥生・土師器	器台	2278	38	14		Ib	主坑13		弥生・土師器	甕	488
27	9		I	建物21	礎盤c19	弥生・土師器	壺	1221	38	15		Ib	主坑13		弥生・土師器	甕	487
27	10		I	建物21	礎盤c16	弥生・土師器	壺	1116	38	16		Ib	主坑13		弥生・土師器	甕	485
27	11		I	建物21	礎盤c18	弥生・土師器	壺	2283	38	17		Ib	主坑14		弥生・土師器	壺	496
27	12		I	建物21	礎盤c19	弥生・土師器	高杯	2282	38	18		Ib	主坑14		弥生・土師器	甕	493
27	13		I	建物21	礎盤c16	弥生・土師器	高杯	1404	38	19		Ib	主坑14		弥生・土師器	高杯	491
27	14		I	建物21	礎盤c16	弥生・土師器	高杯	1407	38	20		Ib	主坑14		弥生・土師器	高杯	495
27	15		I	建物21	礎盤c16	弥生・土師器	壺	1123	38	21		Ib	主坑14		弥生・土師器	高杯	494
27	16		I	建物23	礎盤c34	弥生・土師器	壺	1408	38	22		Ib	主坑15		土師器	坏	498
27	17		I	建物23	礎盤c34	弥生・土師器	壺	2285	38	23	25	Ib	主坑15		土師器	坏	499
27	18		I	建物23	礎盤c34	弥生・土師器	鉢	1224	38	24		Ib	主坑15		土師器	坏	500
27	19		I	建物23	礎盤c34	弥生・土師器	鉢	2284	38	25	25	Ib	主坑15		土師器	坏	497
27	20		I	建物23	礎盤c34	弥生・土師器	鉢	1410	38	26		Ib	主坑16		弥生・土師器	壺	501
27	21		I	建物24	ヒット148	弥生・土師器	壺	1085	38	27		Ib	主坑16		弥生・土師器	甕	502
27	22		I	建物24	ヒット148	弥生・土師器	壺	1084	38	28		Ib	主坑16		弥生・土師器	甕	503
27	23		I	建物24	ヒット148	弥生・土師器	高杯	1412	39	1	25	Ib	主坑17	最下層	土師器	甕	507
27	24		I	建物24	ヒット148	弥生・土師器	鉢	1411	39	2	25	Ib	主坑17	最下層	土師器	甕	509
27	25		I	建物25	ヒット163	弥生・土師器	壺	1416	39	3		Ib	主坑17	上層	土師器	鉢	504
27	26		I	建物25	ヒット163	弥生・土師器	壺	1417	39	4		Ib	主坑17	上層	土師器	鉢	506
27	27		I	建物25	ヒット165	弥生・土師器	壺	2288	39	5		Ib	主坑17	下層	土師器	鉢	1922
27	28		I	建物25	ヒット163	弥生・土師器	壺	1095	39	6		Ib	主坑17	上層	土師器	鉢	505
27	29		I	建物25	ヒット165	弥生・土師器	壺	2287	39	7		Ib	主坑18		須恵器	坏身	745
27	30		I	建物25	ヒット166	弥生・土師器	甕	1415	39	8		Ib	主坑19		弥生・土師器	壺	514
27	31		I	建物25	ヒット166	弥生・土師器	甕	1414	39	9		Ib	主坑19		弥生・土師器	壺	512
27	32		I	建物26	ヒット161	弥生・土師器	高杯	1418	39	10		Ib	主坑19		弥生・土師器	壺	513
27	33		I	建物26	ヒット161	弥生・土師器	鉢	1419	39	11	25	Ib	主坑19	No.4	弥生・土師器	壺	517
31	1	24	I	建物27	土坑28	弥生・土師器	壺	570	39	12	25	Ib	主坑19	No.1	弥生・土師器	壺	516
31	2		I	建物27	土坑28	弥生・土師器	壺	572	39	13		Ib	主坑19	No.2	弥生・土師器	壺	518
31	3		I	建物27	土坑28	弥生・土師器	壺	569	39	14		Ib	主坑19	No.5	弥生・土師器	壺	520
31	4		I	建物27	土坑28	弥生・土師器	甕	567	39	15		Ib	主坑19	No.3	弥生・土師器	壺	519
31	5		I	建物27	土坑28	弥生・土師器	高杯	565	39	16		Ib	主坑19		弥生・土師器	甕	515
31	6		I	建物28	土坑38	弥生・土師器	高杯	619	39	17		Ib	主坑19		弥生・土師器	手づくね	510
31	7		I	建物28	土坑38	弥生・土師器	器台	617	39	18		Ib	主坑19		弥生・土師器	手づくね	511
31	8		I	建物	礎盤b41	弥生・土師器	壺	731	41	1	26	Ib	主坑20	No.1	弥生・土師器	壺	528
31	9		I	建物	礎盤b41	弥生・土師器	壺	732	41	2		Ib	主坑20		弥生・土師器	壺	526
31	10		I	建物	礎盤b57	弥生・土師器	壺	743	41	3		Ib	主坑20		弥生・土師器	甕	521
31	11		I	建物	礎盤c14	弥生・土師器	壺	1114	41	4		Ib	主坑20		弥生・土師器	鉢	525
31	12		I	建物	礎盤c14	弥生・土師器	壺	1113	41	5		Ib	主坑20		弥生・土師器	鉢	524
31	13		I	建物	礎盤b57	弥生・土師器	甕	742	41	6		Ib	主坑20		弥生・土師器	鉢	522
31	14		I	建物	礎盤c39	弥生・土師器	甕	1225	41	7		Ib	主坑21		土師器	壺	530
31	15		I	建物	礎盤c47	弥生・土師器	甕	1226	41	8		Ib	主坑21		土師器	壺	532
31	16		I	建物	礎盤c47	弥生・土師器	器台	1220	41	9		Ib	主坑21		土師器	壺	529
33	1		Ia	土坑2		弥生・土師器	壺	879	41	10		Ib	主坑21		土師器	甕	535
33	2		Ia	土坑2		弥生・土師器	甕	880	41	11		Ib	主坑21		土師器	甕	533
33	3	24	Ia	土坑4	No.1	弥生・土師器	壺	922	41	12		Ib	主坑21		土師器	甕	534
33	4	24	Ia	土坑4	No.2	弥生・土師器	壺	923	41	13		Ib	主坑21		土師器	甕	531
33	5		Ia	土坑5		弥生・土師器	壺	886	41	14		Ib	主坑21		土師器	器台	537
33	6	24	Ia	土坑5		弥生・土師器	壺	886	41	15		Ib	主坑21		土師器	手づくね	539
33	7		Ia	土坑5		弥生・土師器	甕	881	41	16		Ib	主坑21		土師器	手づくね	540
33	8		Ia	土坑5		弥生・土師器	高杯	887	41	17		Ib	主坑22	上層	土師器	壺	541
33	9		Ia	土坑5		弥生・土師器	鉢	883	41	18		Ib	主坑22	中層	土師器	甕	542
33	10		Ia	土坑5		弥生・土師器	鉢	883	41	19		Ib	主坑22		土師器	甕	554
33	11		Ia	土坑6		弥生・土師器	壺	884	41	20	26	Ib	主坑22	下層	土師器	甕	543
33	12		Ia	土坑6		弥生・土師器	壺	885	43	1		Ib	主坑24		弥生・土師器	壺	536
33	13	24	Ia	土坑7	No.1	弥生・土師器	壺	924	43	2		Ib	主坑24		弥生・土師器	壺	555
33	14		Ia	土坑7		弥生・土師器	甕	888	43	3		Ib	主坑24		弥生・土師器	壺	549
33	15	24	Ia	土坑7		弥生・土師器	鉢	889	43	4		Ib	主坑24		弥生・土師器	甕	551
36	1	24	Ia	土坑8		土師器	甕	901	43	5		Ib	主坑24		弥生・土師器	甕	527
36	2		Ia	土坑9		弥生・土師器	甕	892	43	6		Ib	主坑24		弥生・土師器	甕	554
36	3		Ia	土坑9		弥生・土師器	甕	890	43	7		Ib	主坑24		弥生・土師器	甕	556
36	4		Ia	土坑10		弥生・土師器	鉢	893	43	8		Ib	主坑24		弥生・土師器	高杯	552
36	5		Ia	土坑10		弥生・土師器	鉢	891	43	9		Ib	主坑24		弥生・土師器	鉢	550
36	6		Ib	土坑10		弥生・土師器	壺	464	43	10		Ib	主坑24		弥生・土師器	器台	553
36	7		Ib	土坑10		弥生・土師器	甕	461	43	11		Ib	主坑25	No.1	弥生・土師器	壺	561
36	8		Ib	土坑10		弥生・土師器	鉢	463	43	12		Ib	主坑25		弥生・土師器	壺	559
36	9		Ib	土坑10		弥生・土師器	鉢	465	43	13	26	Ib	主坑25		弥生・土師器	甕	560
36	10		Ib	土坑11		弥生・土師器	壺	473	43	14		Ib	主坑25		弥生・土師器	甕	557
36	11	24	Ib	土坑11	No.2	弥生・土師器	壺	479	43	15		Ib	主坑25		弥生・土師器	棒状土製品	558
36	12		Ib	土坑11	No.4	弥生・土師器	壺	1919	43	16		Ib	主坑29		弥生・土師器	壺	575
36	13		Ib	土坑11		弥生・土師器	壺	469	43	17		Ib	主坑29		弥生・土師器	壺	580
36	14		Ib	土坑11		弥生・土師器	壺	470	43	18	26	Ib	主坑29	No.1	弥生・土師器	壺	579
36	15		Ib	土坑11		弥生・土師器	壺	471	43	19		Ib	主坑29		弥生・土師器	壺	573
36	16		Ib	土坑11		弥生・土師器	壺	478	43	20		Ib	主坑29		弥生・土師器	甕	574
36	17		Ib	土坑11		弥生・土師器	甕	467	43	21		Ib	主坑29		弥生・土師器	甕	577
36	18		Ib	土坑11		弥生・土師器	甕	466	43	22		Ib	主坑29		弥生・土師器	鉢	578
36	19		Ib	土坑11		弥生・土師器	甕	472	43	23		Ib	主坑29		弥生・土師器	鉢	576
36	20		Ib	土坑11		弥生・土師器	高杯	474	44	1		Ib	主坑33		弥生・土師器	器台	589
36	21		Ib	土坑11		弥生・土師器	鉢	475	44	2		Ib	主坑33		弥生・土師器	甕	588
36	22		Ib	土坑11		弥生・土師器	鉢	476	44	3		Ib	主坑33		弥生・土師器	甕	584
36	23		Ib	土坑11		弥生・土師器	鉢	477	44	4		Ib	主坑33		弥生・土師器	甕	590
38	1	25	Ib	土坑12	No.1	土師器	壺	508	44	5		Ib	主坑33		弥生・土師器	甕	585
38	2	25	Ib	土坑12	No.3	土師器	壺	481	44	6		Ib	主坑33		弥生・土師器	甕	595
38	3	25	Ib	土坑12	No.2	土師器	壺	480	44	7		Ib	主坑33		弥生・土師器	高杯	582
38	4		Ib	土坑12	上層	土師器	壺	2134	44	8		Ib	主坑33		弥生・土師器	高杯	583
38	5		Ib	土坑12		土師器	壺	462	44	9		Ib	主坑33		弥生・土師器	高杯	586
38	6		Ib	土坑12	上層	土師器	甕	2133	44	10		Ib	主坑33		弥生・土師器	鉢	592
38	7		Ib	土坑12		土師器	甕	2135	44	11		Ib	主坑33		弥生・土師器	鉢	587
38	8		Ib	土坑12		土師器	甕	2136	44	12		Ib	主坑33		弥生・土師器	鉢	591
38	9	25	Ib	土坑12	No.4	土師器	高杯	482	44	13		Ib	主坑33		弥生・土師器	手づくね	593
38	10		Ib	土坑13		弥生・土師器	壺	484	44	14		Ib	主坑35		弥生・土師器	壺	603
38	11		Ib	土坑13		弥生・土師器	壺	483	44	15		Ib	主坑35		弥生・土師器	壺	605
38	12		Ib	土坑13		弥生・土師器	壺	486	44	16		Ib	主坑35				

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(3)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
44	18		I b	土坑35		弥生・土師器	鉢	602	55	5	30	I c	土坑51		弥生・土師器	甕	954
44	19		I b	土坑35		弥生・土師器	鉢	606	55	6		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	960-1
44	20		I b	土坑36		弥生・土師器	壺	612	55	7		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	960-2
44	21		I b	土坑36		弥生・土師器	甕	614	55	8	30	I c	土坑51	最下層	弥生・土師器	甕	962
44	22		I b	土坑36		弥生・土師器	甕	610	55	9		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	958
44	23		I b	土坑36		弥生・土師器	鉢	611	55	10		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	1149
44	24		I b	土坑36		弥生・土師器	鉢	613	55	11		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	957
44	25		I b	土坑36		弥生・土師器	器台	609	55	12		I c	土坑51		弥生・土師器	高杯	956
44	26		I b	土坑36		弥生・土師器	支脚	608	55	13		I c	土坑51		弥生・土師器	高杯	955
44	27		I b	土坑37		弥生・土師器	高杯	615	55	14		I c	土坑51		弥生・土師器	鉢	1148
44	28		I b	土坑40		弥生・土師器	壺	627	56	1	30	I c	土坑52		弥生・土師器	壺	963
44	29		I b	土坑40		弥生・土師器	壺	626	56	2		I c	土坑52		弥生・土師器	壺	1151
44	30		I b	土坑40		弥生・土師器	高杯	625	56	3	30	I c	土坑52		弥生・土師器	壺	964
46	1	26	I b	土坑41	No.6~10	弥生・土師器	壺	401	56	4	30	I c	土坑52		弥生・土師器	鉢	965
46	2	26	I b	土坑41		弥生・土師器	壺	88	56	5		I c	土坑52		弥生・土師器	高杯	966
46	3	26	I b	土坑41	No.2	弥生・土師器	壺	65	56	6	30	I c	土坑53		弥生・土師器	壺	1152
46	4	27	I b	土坑41	No.4	弥生・土師器	壺	85	56	7		I c	土坑53	No.1	弥生・土師器	壺	967
46	5	27	I b	土坑41	No.7~9	弥生・土師器	壺	84	56	8		I c	土坑53		弥生・土師器	高杯	969
46	6		I b	土坑41		弥生・土師器	壺	67	56	9		I c	土坑53		弥生・土師器	鉢	968
46	7		I b	土坑41		弥生・土師器	壺	23-2	56	10		I c	土坑54		弥生・土師器	壺	1153
47	8		I b	土坑41	No.8	弥生・土師器	壺	23-1	56	11		I c	土坑54		弥生・土師器	壺	970
47	9		I b	土坑41	No.7	弥生・土師器	壺	12	56	12		I c	土坑54		弥生・土師器	鉢	1154
47	10	27	I b	土坑41		弥生・土師器	壺	64	58	1	31	I	1号溝	No.1	弥生・土師器	壺	907
47	11		I b	土坑41	No.8	弥生・土師器	甕	9	58	2		I	2号溝		弥生・土師器	壺	630
47	12		I b	土坑41		弥生・土師器	甕	132	58	3		I	2号溝		弥生・土師器	壺	629
47	13		I b	土坑41		弥生・土師器	甕	8	58	4		I	3号溝	No.2	弥生・土師器	壺	633
47	14		I b	土坑41	No.1	弥生・土師器	甕	69	58	5		I	3号溝		弥生・土師器	壺	1249
47	15		I b	土坑41		弥生・土師器	甕	71	58	6		I	3号溝		弥生・土師器	壺	1253
47	16		I b	土坑41		弥生・土師器	高杯	76	58	7		I	3号溝		弥生・土師器	甕	1250
47	17		I b	土坑41		弥生・土師器	高杯	57	58	8		I	3号溝	No.1	弥生・土師器	甕	1251
47	18		I b	土坑41		弥生・土師器	高杯	60	58	9		I	3号溝		弥生・土師器	甕	1247
47	19	27	I b	土坑41	No.5	弥生・土師器	鉢	48	58	10		I	3号溝	No.2	弥生・土師器	甕	1263
47	20		I b	土坑41		弥生・土師器	鉢	66	58	11		I	3号溝		弥生・土師器	甕	1246
47	21		I b	土坑41		弥生・土師器	鉢	74	58	12		I	3号溝	No.1	弥生・土師器	鉢	632
47	22		I b	土坑41		弥生・土師器	鉢	131	58	13		I	3号溝		弥生・土師器	鉢	1248
47	23	27	I b	土坑41	No.7	弥生・土師器	鉢	49	58	14		I	3号溝	No.2	弥生・土師器	鉢	1252
47	24		I b	土坑41	No.9	弥生・土師器	鉢	70	58	15		I	3号溝		弥生・土師器	鉢	631
47	25		I b	土坑41		弥生・土師器	器台	80	59	1		I	4号溝		弥生・土師器	壺	1257
47	26		I b	土坑41	No.1	弥生・土師器	支脚	15	59	2		I	4号溝		弥生・土師器	壺	1258
47	27	27	I b	土坑41	No.1	弥生・土師器	支脚	21	59	3		I	4号溝		弥生・土師器	壺	1259
48	1	27	I c	土坑42		弥生・土師器	壺	1139	59	4		I	4号溝		弥生・土師器	壺	1256
48	2		I c	土坑42		弥生・土師器	壺	1133	59	5		I	4号溝		弥生・土師器	壺	1262
48	3		I c	土坑42		弥生・土師器	壺	1132	59	6	31	I	4号溝		弥生・土師器	壺	640
48	4		I c	土坑42		弥生・土師器	甕	1134	59	7	31	I	4号溝		弥生・土師器	壺	641
48	5		I c	土坑42		弥生・土師器	高杯	1135	59	8		I	4号溝		弥生・土師器	甕	637
48	6		I c	土坑42		弥生・土師器	手つくね	926	59	9		I	4号溝		弥生・土師器	甕	1255
48	7	27	I c	土坑42		弥生・土師器	手つくね	925	59	10		I	4号溝		弥生・土師器	甕	1261
48	8		I c	土坑43	中層	弥生・土師器	壺	931	59	11		I	4号溝		弥生・土師器	高杯	1264
48	9	28	I e	土坑43	最下層	弥生・土師器	壺	941	59	12	31	I	4号溝		弥生・土師器	高杯	636
48	10	28	I c	土坑43		弥生・土師器	壺	939	59	13		I	4号溝		弥生・土師器	高杯	639
48	11	28	I c	土坑43	下層	弥生・土師器	壺	938	59	14		I	4号溝		弥生・土師器	高杯	1254
48	12		I c	土坑43	中層一括	弥生・土師器	壺	932	59	15		I	4号溝		弥生・土師器	鉢	1260
48	13		I c	土坑43	下層一括	弥生・土師器	壺	936	59	16		I	4号溝		弥生・土師器	鉢	638
48	14	28	I c	土坑43	中層一括	弥生・土師器	壺	935	59	17		I	4号溝		弥生・土師器	鉢	635
48	15		I c	土坑43	中層一括	弥生・土師器	壺	934	59	18		I	4号溝		弥生・土師器	鉢	634
48	16	28	I e	土坑43	下層一括	弥生・土師器	壺	937	61	1	31	I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	1131
48	17		I e	土坑43	中層一括	弥生・土師器	鉢	928	61	2		I	落ち込み1	No.13	弥生・土師器	壺	83
48	18		I e	土坑43	中層一括	弥生・土師器	鉢	929	61	3		I	落ち込み1	No.20	弥生・土師器	壺	16
48	19		I e	土坑43	中層一括	弥生・土師器	鉢	930	61	4		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	35
48	20		I c	土坑43	下層一括	弥生・土師器	鉢	940	61	5		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	101
50	1		I c	土坑45		弥生・土師器	壺	1136	61	6		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	123
50	2		I c	土坑45		弥生・土師器	壺	942	61	7		I	落ち込み1	No.1	弥生・土師器	壺	7
50	3		I e	土坑45		弥生・土師器	甕	946	61	8		I	落ち込み1	No.17	弥生・土師器	壺	185
50	4		I e	土坑45		弥生・土師器	甕	947	61	9		I	落ち込み1	No.2	弥生・土師器	壺	10
50	5		I e	土坑45		弥生・土師器	器台	945	61	10		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	194
50	6		I e	土坑45		弥生・土師器	器台	944	61	11		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	894
50	7		I c	土坑45		弥生・土師器	鉢	943	61	12		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	183
52	1	28	I c	土坑46	上層	弥生・土師器	壺	1141	61	13		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	126
52	2	28	I c	土坑46	下層一括	弥生・土師器	壺	948	61	14		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	6
52	3		I c	土坑46	下層一括	弥生・土師器	壺	949	61	15		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	128
52	4		I e	土坑46	下層一括	弥生・土師器	壺	1142	61	16		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	125
52	5	28	I e	土坑46		弥生・土師器	壺	1137	61	17		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	127
52	6	28	I e	土坑46		弥生・土師器	壺	1138	62	18		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	219
52	7	29	I e	土坑46	上層	弥生・土師器	甕	1140	62	19	31	I	落ち込み1	No.24	弥生・土師器	壺	45
52	8		I c	土坑46	上層	弥生・土師器	高杯	1143	62	20	31	I	落ち込み1	No.14	弥生・土師器	壺	86
52	9	29	I e	土坑49	中層一括	弥生・土師器	甕	1144	62	21		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	93
53	1	29	I c	土坑50	最下層一括	弥生・土師器	壺	1145	62	22		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	91
53	2	29	I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	壺	1146	62	23		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	29
53	3		I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	壺	1234	62	24		I	落ち込み1	No.22	弥生・土師器	壺	11
53	4		I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	壺	1235	62	25		I	落ち込み1	No.8	弥生・土師器	壺	5
53	5	29	I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	壺	950	62	26		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	216
53	6	29	I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	壺	1147	62	27		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	105
53	7		I c	土坑50	下層一括	弥生・土師器	甕	1233	62	28		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	38
53	8	29	I c	土坑50	下層一括	弥生・土師器	甕	951	62	29		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	116
53	9		I e	土坑50		弥生・土師器	高杯	953	62	30		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	109
53	10		I e	土坑50		弥生・土師器	高杯	1207	62	31		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	28
53	11		I e	土坑50		弥生・土師器	高杯	1205	62	32		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	113
53	12		I e	土坑50	下層一括	弥生・土師器	鉢	952	62	33		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	207
53	13		I e	土坑50		弥生・土師器	鉢	1203	62	34		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	203
55	1		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	1149	62	35		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	200
55	2		I c	土坑51		弥生・土師器	甕	959-1	62	36		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	205
55	3		I e	土坑51		弥生・土師器	甕	959-2	62	37		I	落ち込み1		弥生・土師器		

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(4)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
63	39		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	208	67	132	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	900
63	40		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	79	67	133		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	221
63	41		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	120	67	134		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	31
63	42		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	78	67	135	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	51
63	43		I	落ち込み1		土師器	壺	218	67	136		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	32
63	44		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	118	67	137		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	224
63	45	31	I	落ち込み1	No.23	弥生・土師器	壺	37	67	138		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	17
63	46	32	I	落ち込み1	No.11	弥生・土師器	壺	44	67	139		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	94
63	47		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	99	67	140		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	104
63	48		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	117	67	141		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	193
63	49		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	119	67	142		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	198
63	50		I	落ち込み1		弥生・土師器	壺	77	67	143		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	190
63	51		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	195	67	144		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	197
63	52		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	130	67	145		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	103
63	53		I	落ち込み1	No.3	弥生・土師器	甕	87	67	146		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	662
63	54		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	182	67	147	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	97
63	55		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	188	67	148		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	89
63	56		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	14	67	149		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	325
63	57		I	落ち込み1	No.17	弥生・土師器	甕	43	67	150	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	34
63	58		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	13	67	151		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	110
64	59		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	90	68	152		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	212
64	60		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	191	68	153		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	122
64	61		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	213	68	154		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	20
64	62	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	628	68	155		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	209
64	63		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	186	68	156		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	211
64	64		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	40	68	157		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	33
64	65		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	214	68	158		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	210
64	66		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	73	68	159	32	I	落ち込み1	No.15	弥生・土師器	器台	63
64	67		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	92	68	160		I	落ち込み1		弥生・土師器	器台	42
64	68		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	189	68	161		I	落ち込み1		弥生・土師器	支脚	115
64	69		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	896	68	162		I	落ち込み1		弥生・土師器	支脚	75
64	70		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	41	68	163		I	落ち込み1		土製品	不明土製品	111
64	71		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	215	68	164	32	I	落ち込み1		土製品	不明土製品	S1-31
64	72		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	181	69	1		I	落ち込み2		土師器	甕	1064
65	73		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	121	69	2		I	落ち込み2		土師器	甕	1060
65	74		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	72	69	3		I	落ち込み2		土師器	甕	1061
65	75		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	192	69	4		I	落ち込み2		土師器	甕	1063
65	76		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	187	69	5		I	落ち込み2		土師器	甕	1059
65	77		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	222	69	6		I	落ち込み2		土師器	高杯	1069
65	78		I	落ち込み1	No.12	弥生・土師器	甕	18	69	7		I	落ち込み2		土師器	椀	1068
65	79		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	206	69	8		I	落ち込み2		土師器	椀	1067
65	80		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	81	69	9		I	落ち込み2		土師器	椀	1206
65	81		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	112	69	10		I	落ち込み2		土師器	椀	1066
65	82		I	落ち込み1	No.5	弥生・土師器	甕	19	69	11		I	落ち込み2		須恵器	甕	1070
65	83		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	62	70	1		I	住居1		弥生・土師器	壺	758
65	84		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	204	70	2		I	住居1		弥生・土師器	甕	752
65	85		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	95	70	3		I	住居1		弥生・土師器	甕	753
65	86		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	43	70	4		I	住居1		弥生・土師器	甕	751
65	87		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	202	70	5		I	住居1		弥生・土師器	高杯	755
65	88		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	202	70	6		I	住居1		弥生・土師器	高杯	756
65	89		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	27	70	7		I	住居1		弥生・土師器	高杯	757
65	90		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	26	70	8	33	I	住居1		弥生・土師器	鉢	759
65	91		I	落ち込み1	No.27	弥生・土師器	甕	2	70	9	33	I	住居2		弥生・土師器	壺	1130
65	92		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	898	70	10		I	住居2		弥生・土師器	壺	781
65	93		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	68	70	11		I	住居2		弥生・土師器	壺	828
65	94		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	96	70	12		I	住居2		弥生・土師器	壺	777
65	95		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	24	70	13		I	住居2		弥生・土師器	壺	811
65	96		I	落ち込み1		弥生・土師器	甕	437	70	14		I	住居2		弥生・土師器	壺	761
66	97		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	217	70	15		I	住居2		弥生・土師器	壺	823
66	98		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	102	70	16		I	住居2		弥生・土師器	壺	771
66	99		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	55	70	17		I	住居2		弥生・土師器	壺	799
66	100		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	129	70	18		I	住居2		弥生・土師器	壺	812
66	101		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	58	70	19		I	住居2		弥生・土師器	壺	839
66	102		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	326	70	20		I	住居2		弥生・土師器	壺	827
66	103		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	102	70	21		I	住居2		弥生・土師器	壺	820
66	104	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	47	71	22		I	住居2		弥生・土師器	壺	770
66	105		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	46	71	23		I	住居2		弥生・土師器	壺	775
66	106		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	56	71	24		I	住居2		弥生・土師器	壺	831
66	107		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	107	71	25	33	I	住居2		弥生・土師器	壺	841
66	108		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	59	71	26	33	I	住居2		弥生・土師器	壺	818
66	109		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	62	71	27		I	住居2		弥生・土師器	壺	825
66	110		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	184	71	28		I	住居2		弥生・土師器	壺	829
66	111		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	61	71	29		I	住居2		土師器	壺	840
66	112		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	220	71	30		I	住居2		弥生・土師器	甕	766
66	113		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	52	71	31	33	I	住居2		弥生・土師器	甕	798
66	114		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	323	71	32		I	住居2		弥生・土師器	甕	806
66	115		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	54	71	33		I	住居2		弥生・土師器	甕	767
66	116		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	100	71	34		I	住居2		弥生・土師器	甕	782
66	117		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	108	71	35		I	住居2		弥生・土師器	甕	778
66	118		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	25	71	36		I	住居2		弥生・土師器	甕	810
66	119		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	53	71	37		I	住居2		弥生・土師器	甕	765
66	120		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	22	71	38		I	住居2		弥生・土師器	甕	776
67	121	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	124	72	39		I	住居2		弥生・土師器	甕	830
67	122		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	39	72	40		I	住居2		弥生・土師器	甕	819
67	123		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	895	72	41		I	住居2		弥生・土師器	甕	821
67	124		I	落ち込み1		弥生・土師器	高杯	106	72	42		I	住居2		弥生・土師器	甕	822
67	125	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	50	72	43		I	住居2		弥生・土師器	甕	784
67	126		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	899	72	44	33	I	住居2		弥生・土師器	高杯	837
67	127	32	I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	1	72	45		I	住居2		弥生・土師器	高杯	800
67	128		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	199	72	46	33	I	住居2		弥生・土師器	高杯	832
67	129		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	196	72	47		I	住居2		弥生・土師器	高杯	788
67	130		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	98	72	48		I	住居2		弥生・土師器	高杯	838
67	131		I	落ち込み1		弥生・土師器	鉢	114	72	49		I	住居2		弥生・土師器	高杯	833

表5 蒲船津江頭遺跡 I・II 区出土掲載土器類一覽表 (5)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
72	50		I	住居2		弥生・土師器	高坏	813	78	45		I	西側流路跡		磁器	鉢	
72	51		I	住居2		弥生・土師器	鉢	803	78	46		I	西側流路跡		磁器	瓶	
72	52		I	住居2		弥生・土師器	鉢	774	78	47		I	西側流路跡		磁器	瓶	
72	53		I	住居2		弥生・土師器	鉢	760	78	48		I	西側流路跡		陶器	皿	
72	54		I	住居2		弥生・土師器	鉢	786	78	49		I	西側流路跡		陶器	火入	
72	55	33	I	住居2		弥生・土師器	鉢	796	78	50		I	西側流路跡		陶器	鍋	
72	56		I	住居2		弥生・土師器	鉢	836	78	51		I	西側流路跡		陶器	插鉢	
72	57		I	住居2		弥生・土師器	器台	785	78	52		I	西側流路跡		陶器	插鉢	
72	58		I	住居2		弥生・土師器	器台	835	78	53		I	西側流路跡		陶器	插鉢	
72	59		I	住居2		弥生・土師器	器台	789	79	1		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	282
72	60		I	住居2		弥生・土師器	器台	826	79	2		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	434
72	61		I	住居2		弥生・土師器	支脚	787	79	3		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	433
72	62		I	住居2		土製品	棒状土製品		79	4		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	339
72	63	33	I	住居2		弥生・土師器	手づくね	797	79	5		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	432
72	64		I	住居2		弥生・土師器	手づくね	816	79	6		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	284
72	65	33	I	住居2		土製品	紡錘車		79	7		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	439
73	1		I	住居3		弥生・土師器	壺	844	79	8		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	240
73	2		I	住居3		弥生・土師器	壺	790	79	9		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	233
73	3		I	住居3		弥生・土師器	甕	783	79	10		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	232
73	4		I	住居3		弥生・土師器	甕	843	79	11		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	317
73	5		I	住居3		弥生・土師器	高坏	842	79	12		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	243
74	1		I	住居4		弥生・土師器	壺	859	79	13		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	137
74	2		I	住居4		弥生・土師器	壺	870	79	14		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	141
74	3		I	住居4		弥生・土師器	壺	865	79	15		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	151
74	4		I	住居4		弥生・土師器	壺	848	79	16		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	138
74	5		I	住居4		弥生・土師器	壺	867	79	17		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	245
74	6	34	I	住居4		弥生・土師器	壺	869	79	18		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	298
74	7		I	住居4		弥生・土師器	壺	862	79	19		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	300
74	8		I	住居4		弥生・土師器	壺	863	79	20		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	297
74	9		I	住居4		弥生・土師器	壺	856	80	21		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	147
74	10		I	住居4		弥生・土師器	壺	858	80	22		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	296
74	11		I	住居4		弥生・土師器	甕	860	80	23	34	Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	1228
74	12		I	住居4		弥生・土師器	甕	866	80	24		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	175
74	13		I	住居4		弥生・土師器	甕	849	80	25		Ib	西側包舎層		土師器	壺	157
74	14		I	住居4		弥生・土師器	甕	868	80	26		Ib	西側包舎層		土師器	壺	246
74	15		I	住居4		弥生・土師器	甕	864	80	27		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	156
74	16		I	住居4		弥生・土師器	甕	852	80	28		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	335
74	17	34	I	住居4		弥生・土師器	高坏	871	80	29		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	139
74	18		I	住居4		弥生・土師器	鉢	861	80	30		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	241
74	19	34	I	住居4		弥生・土師器	鉢	853	80	31		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	244
74	20		I	住居4		弥生・土師器	鉢	857	80	32		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	274
74	21		I	住居4		弥生・土師器	器台	855	80	33		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	373
74	22		I	住居4		弥生・土師器	器台	854	80	34		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	134
75	1		I	住居5		弥生・土師器	壺	877	80	35		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	374
75	2		I	住居5		弥生・土師器	壺	873	80	36		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	416
75	3		I	住居5		弥生・土師器	壺	876	80	37		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	375
75	4		I	住居5		弥生・土師器	壺	875	80	38		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	276
75	5		I	住居5		弥生・土師器	壺	878	80	39		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	133
75	6		I	住居5		弥生・土師器	甕	874	80	40		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	328
76	1		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	354	80	41		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	136
76	2		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	234	80	42		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	135
76	3		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	322	80	43		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	280
76	4		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	311	80	44		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	331
76	5		I	西側流路跡		土師器	壺	425	81	45		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	292
76	6		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	314	81	46		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	406
76	7		I	西側流路跡		弥生・土師器	壺	1244	81	47		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	338
76	8		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	308	81	48		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	272
76	9		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	313	81	49		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	329
76	10		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	1245	81	50		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	225
76	11		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	310	81	51		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	227
76	12		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	303	81	52		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	317
76	13		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	321	81	53		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	壺	229
76	14		I	西側流路跡		弥生・土師器	甕	435	81	54		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	283
77	15		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	427	81	55		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	2137
77	16		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	426	81	56		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	438
77	17		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	429	81	57		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	436
77	18		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	343	81	58		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	442
77	19		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	306	81	59		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	238
77	20		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	424	81	60		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	340
77	21		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	255	81	61		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	285
77	22		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	309	82	62		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	242
77	23		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	430	82	63		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	236
77	24		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	428	82	64		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	237
77	25		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	341	82	65		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	235
77	26		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	305	82	66	34	Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	290
77	27		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	320	82	67		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	140
77	28		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	422	82	68		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	286
77	29		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	423	82	69		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	345
77	30		I	西側流路跡		弥生・土師器	高坏	420	82	70		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	150
77	31		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	342	82	71	34	Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	265
77	32		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	377	82	72		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	266
77	33		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	319	82	73		Ib	西側包舎層		土師器	甕	330
77	34		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	304	82	74		Ib	西側包舎層		土師器	甕	143
77	35		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	312	82	75		Ib	西側包舎層		土師器	甕	239
78	36		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	318	83	76		Ib	西側包舎層		土師器	甕	264
78	37		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	443	83	77		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	231
78	38		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	444	83	78		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	230
78	39		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	353	83	79		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	226
78	40		I	西側流路跡		弥生・土師器	鉢	352	83	80		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	286
78	41		I	西側流路跡		磁器	碗		83	81		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	169
78	42		I	西側流路跡		磁器	碗		83	82		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	386
78	43		I	西側流路跡		磁器	碗		83	83		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	262
78	44		I	西側流路跡		磁器	碗		83	84		Ib	西側包舎層		弥生・土師器	甕	397

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(6)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
83	85	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	254	87	178	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	180				
83	86	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	366	87	179	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	260				
83	87	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	250	87	180	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	382				
83	88	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	174	87	181	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	380				
83	89	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	370	87	182	34	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	291			
83	90	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	362	87	183	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	379				
83	91	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	367	87	184	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台					
83	92	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	361	87	185	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	258				
83	93	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	263	87	186	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	257				
83	94	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	368	87	187	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	355				
84	95	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	371	87	188	1b	西側包舎層	弥生・土師器	手づくね	408				
84	96	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	167	87	189	1b	西側包舎層	弥生・土師器	手づくね	415				
84	97	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	307	87	190	1b	西側包舎層	弥生・土師器	手づくね	413				
84	98	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	350	87	191	1b	西側包舎層	土製品	土製丹盤	315				
84	99	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	365	87	192	1b	西側包舎層	土製品	土製丹盤	316				
84	100	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	288	87	193	1b	西側包舎層	土師器	甗	446				
84	101	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	249	87	194	1b	西側包舎層	土師器	甗	445				
84	102	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	332	87	195	1b	西側包舎層	土師器	甗	448				
84	103	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	256	87	196	1b	西側包舎層	土師器	甗	447				
84	104	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	289	87	197	1b	西側包舎層	土師器	甗	449				
84	105	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	251	87	198	1b	西側包舎層	瓦質土器	茶釜	347				
84	106	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	275	87	199	1b	西側包舎層	土製品	不明土製品					
84	107	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	336	88	1	1b	東側包舎層	弥生・土師器	甗	456				
84	108	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	173	88	2	1b	東側包舎層	弥生・土師器	甗	457				
84	109	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	369	88	3	1b	東側包舎層	弥生・土師器	甗	453				
84	110	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	431	88	4	1b	東側包舎層	弥生・土師器	高杯	455				
84	111	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	372	88	5	1b	東側包舎層	弥生・土師器	高杯	454				
84	112	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	364	89	1	1c	包舎層	弥生・土師器	壺	1421				
84	113	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	344	89	2	1c	包舎層	弥生・土師器	壺	1217				
84	114	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	252	89	3	1c	包舎層	弥生・土師器	壺	302				
84	115	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	165	89	4	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	壺	974			
84	116	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	333	89	5	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1002			
84	117	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	163	89	6	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1001			
85	118	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	164	89	7	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1005			
85	119	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	360	89	8	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1160			
85	120	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	385	89	9	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	壺	1218			
85	121	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	398	89	10	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1159			
85	122	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	358	89	11	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	壺	1055			
85	123	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	334	89	12	1c	包舎層	トゾ2	弥生・土師器	壺	1029			
85	124	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	357	89	13	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	壺	1214			
85	125	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	166	89	14	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1156			
85	126	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	259	89	15	34	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1155		
85	127	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	387	89	16	1c	包舎層	トゾ3	弥生・土師器	壺	1037			
85	128	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	168	89	17	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	989			
85	129	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	171	89	18	1c	包舎層	トゾ2	弥生・土師器	壺	991			
85	130	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	389	89	19	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	1161			
85	131	1b	西側包舎層	弥生・土師器	高坏	293	89	20	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	壺	993			
85	132	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	270	90	21	1c	包舎層	トゾ4	弥生・土師器	壺	1045			
85	133	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	405	90	22	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	壺	973			
85	134	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	161	90	23	34	1c	包舎層	トゾ2	弥生・土師器	壺	1173		
85	135	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	409	90	24	1c	包舎層	トゾ3	弥生・土師器	甗	1179			
85	136	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	281	90	25	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	甗	1215			
85	137	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	159	90	26	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	甗	975			
85	138	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	412	90	27	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	甗	1057			
85	139	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	273	90	28	1c	包舎層	トゾ2	弥生・土師器	甗	1170			
85	140	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	279	90	29	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	甗	1009			
85	141	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	414	90	30	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	甗	1158			
85	142	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	278	90	31	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	甗	1157			
85	143	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	410	90	32	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	甗	1186			
85	144	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	411	90	33	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	甗	1031			
85	145	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	158	90	34	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	甗	1213			
85	146	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	417	90	35	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	甗	1210			
85	147	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	268	91	36	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	高杯	1209			
85	148	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	267	91	37	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	高杯	1057			
85	149	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	271	91	38	1c	包舎層	トゾ3	弥生・土師器	高杯	1040			
86	150	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	269	91	39	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	高杯	1169			
86	151	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	337	91	40	1c	包舎層	トゾ5	弥生・土師器	高杯	1194			
86	152	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	277	91	41	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	高杯	1158			
86	153	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	349	91	42	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	高杯	1212			
86	154	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	176	91	43	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	高杯	972			
86	155	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	287	91	44	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	鉢	977			
86	156	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	248	91	45	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	鉢	979			
86	157	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	152	91	46	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	鉢	999			
86	158	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	275	91	47	1c	包舎層	トゾ1	弥生・土師器	鉢	997			
86	159	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	327	91	48	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	鉢	1162			
86	160	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	407	91	49	1c	包舎層	トゾ4	弥生・土師器	鉢	1049			
86	161	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	346	91	50	1c	包舎層	南周辺	弥生・土師器	器台	1219			
86	162	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	348	91	51	34	1c	包舎層	トゾ2	弥生・土師器	支脚	1028		
86	163	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	162	92	1	1a	側溝	弥生・土師器	壺	904				
86	164	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	179	92	2	1b	ピット76	弥生・土師器	壺	658				
86	165	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	376	92	3	1b	側溝	弥生・土師器	壺	903				
86	166	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	359	92	4	1c	ピット130	弥生・土師器	壺	1199				
86	167	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	172	92	5	1b	ピット37	弥生・土師器	壺	2094				
86	168	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	178	92	6	1b	ピット38	土師器	壺	647				
86	169	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	418	92	7	1b	ピット64	弥生・土師器	甗	670				
86	170	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	388	92	8	1c	ピット154	弥生・土師器	甗	1201				
86	171	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	399	92	9	1a	ピット11	弥生・土師器	甗	920				
86	172	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	392	92	10	1c	ピット169	弥生・土師器	甗	1098				
86	173	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	356	92	11	1b	ピット26	弥生・土師器	甗	644				
86	174	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	170	92	12	1b	ピット21	弥生・土師器	甗	643				
86	175	1b	西側包舎層	弥生・土師器	鉢	177	92	13	1b	ピット60	弥生・土師器	高杯	652				
86	176	1b	西側包舎層	土師器	鉢	404	92	14	1b	ピット65	弥生・土師器	高杯	654				
87	177	1b	西側包舎層	弥生・土師器	器台	384	92	15	1a	ピット10	弥生・土師器	高杯	919				

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(7)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
92	16		I b	ピット90		弥生・土師器	高杯	668	118	27		Ⅱ	建物38	礎盤44	弥生・土師器	壺	2220
92	17		I c	ピット158		弥生・土師器	高杯	1094	118	28		Ⅱ	建物39	礎盤43	弥生・土師器	壺	2221
92	18		I a	側溝		弥生・土師器	高杯	902	118	29		Ⅱ	建物39	礎盤48	弥生・土師器	壺	1838
92	19		I c	北検出時		弥生・土師器	高杯	1238	118	30		Ⅱ	建物39	礎盤42	弥生・土師器	壺	1839
93	20		I b	ピット38		弥生・土師器	鉢	648	118	31		Ⅱ	建物39	礎盤43	弥生・土師器	甕	1841
93	21		I b	ピット44		弥生・土師器	鉢	650	118	32		Ⅱ	建物39	礎盤42	弥生・土師器	高杯	2228
93	22		I b	ピット44		弥生・土師器	鉢	649	118	33		Ⅱ	建物39	礎盤42	弥生・土師器	鉢	2227
93	23		I a	側溝		弥生・土師器	鉢	914	118	34		Ⅱ	建物39	礎盤43	弥生・土師器	鉢	2222
93	24		I a	側溝		弥生・土師器	鉢	915	118	35		Ⅱ	建物39	礎盤42	弥生・土師器	鉢	1840
93	25		I a	側溝		弥生・土師器	鉢	910	127	1		Ⅱ	建物44	礎盤143	弥生・土師器	高杯	2140
93	26		I b	ピット65		弥生・土師器	鉢	653	127	2		Ⅱ	建物44	礎盤143	弥生・土師器	鉢	2230
93	27		I a	側溝		弥生・土師器	鉢	909	127	3		Ⅱ	建物	礎盤220	弥生・土師器	壺	2110
93	28		I c	ピット154		弥生・土師器	鉢	1092	127	4	54	Ⅱ	建物	礎盤203周辺	弥生・土師器	壺	2123
93	29		I c	ピット153		弥生・土師器	鉢	1089	127	5		Ⅱ	建物	礎盤1	弥生・土師器	壺	2131
93	30		I b	東検出時		弥生・土師器	鉢	458	127	6		Ⅱ	建物	礎盤219周辺	土師器	甕	2111
93	31		I b	ピット79		弥生・土師器	鉢	661	127	7		Ⅱ	建物	礎盤219周辺	土師器	甕	2108
93	32		I b	東検出時		弥生・土師器	器台	459	127	8		Ⅱ	建物	礎盤257	弥生・土師器	高杯	2109
93	33		I c	ピット112		土師器	皿	1073	127	9	54	Ⅱ	建物	礎盤202	弥生・土師器	鉢	2130
93	34		I c	ピット112		土師器	皿	1198	127	10	54	Ⅱ	建物	礎盤238	弥生・土師器	鉢	2112
93	35		I a	検出時		須恵器	杯蓋	917	132	1		Ⅱ	土坑2		弥生・土師器	壺	1428
93	36		I c	ピット138		須恵器	杯身	1082	132	2	54	Ⅱ	土坑2		弥生・土師器	壺	1426
93	37		I b	ピット75		須恵器	杯身	747	132	3		Ⅱ	土坑2		弥生・土師器	高杯	1431
93	38		I a	検出時		須恵器	甕	916	132	4		Ⅱ	土坑2		弥生・土師器	鉢	1429
93	39		I b	ピット75		須恵器	高杯	746	132	5		Ⅱ	土坑2	No.1	弥生・土師器	鉢	1430
93	40		I c	攪乱		須恵器	瓶	1106	132	6		Ⅱ	土坑3		土師器	壺	1427
93	41		I c	攪乱		土器	鉢	1232	132	7		Ⅱ	土坑3		土師器	甕	1879
93	42		I c	攪乱		土器	蓋	1230	132	8		Ⅱ	土坑3		土師器	甕	1878
93	43		I a	攪乱		土器	鋳型	460	132	9	54	Ⅱ	土坑3		土師器	甕	1876
93	44		I b	東側検出時		土製品	土玉	S1-28	132	10	54	Ⅱ	土坑3		土師器	甕	1877
102	1		Ⅱ	建物1	建物1-1	弥生・土師器	壺	2141	133	1	54	Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	壺	1890
102	2		Ⅱ	建物1	建物1-2	弥生・土師器	壺	2148	133	2		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	壺	1889
102	3		Ⅱ	建物1	建物1-2	弥生・土師器	壺	2143	133	3		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	壺	1883
102	4		Ⅱ	建物1	建物1-3	弥生・土師器	壺	2147	133	4		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	壺	2083
102	5		Ⅱ	建物1	建物1-3	弥生・土師器	甕	2144	133	5	55	Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	壺	1887
102	6		Ⅱ	建物1	建物1-3	弥生・土師器	甕	2145	133	6		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	甕	1885
102	7		Ⅱ	建物1	建物1-4	弥生・土師器	甕	2146	133	7		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	甕	1886
102	8		Ⅱ	建物1	建物1-1	弥生・土師器	高杯	2151	133	8		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	鉢	1881
102	9		Ⅱ	建物1	建物1-3	弥生・土師器	鉢	2150	133	9		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	鉢	1882
102	10		Ⅱ	建物1	建物1-3	弥生・土師器	鉢	2149	133	10		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	鉢	1880
102	11		Ⅱ	建物2	建物2-6	弥生・土師器	壺	2155	133	11		Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	鉢	1884
102	12		Ⅱ	建物2	建物2-3	弥生・土師器	甕	2153	133	12	55	Ⅱ	土坑4		弥生・土師器	鉢	1888
102	13		Ⅱ	建物2	建物2-2	弥生・土師器	鉢	2152	133	13		Ⅱ	土坑6		弥生・土師器	高杯	1891
102	14		Ⅱ	建物2	建物2-4	弥生・土師器	鉢	2154	133	14		Ⅱ	土坑6		弥生・土師器	鉢	1892
102	15		Ⅱ	建物3	建物3-3	弥生・土師器	壺	2158	135	1	55	Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1944
102	16		Ⅱ	建物3	建物3-2	弥生・土師器	壺	2157	135	2		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1901
102	17		Ⅱ	建物3	建物3-7	弥生・土師器	高杯	2161	135	3		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1894
102	18		Ⅱ	建物3	建物3-7	弥生・土師器	高杯	2160	135	4		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1895
102	19		Ⅱ	建物3	建物3-7	弥生・土師器	鉢	2159	135	5		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1900
102	20		Ⅱ	建物4	建物4-3	弥生・土師器	甕	2162	135	6		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1907
102	21		Ⅱ	建物5	礎盤276	弥生・土師器	壺	2163	135	7		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1905
102	22		Ⅱ	建物5	礎盤276	弥生・土師器	甕	2129	135	8	55	Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1909
102	23		Ⅱ	建物5	礎盤276	弥生・土師器	鉢	2123	135	9	55	Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1910
102	24		Ⅱ	建物6	礎盤254	弥生・土師器	壺	2119	135	10		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	壺	1897
102	25		Ⅱ	建物6	礎盤252	弥生・土師器	壺	2167	135	11		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	甕	1893
102	26		Ⅱ	建物6	礎盤254	弥生・土師器	壺	2113	135	12		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	甕	1894
102	27		Ⅱ	建物6	礎盤252	弥生・土師器	壺	2114	135	13		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	甕	1896
102	28		Ⅱ	建物6	礎盤254	弥生・土師器	壺	2171	135	14		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	甕	1904
102	29		Ⅱ	建物6	礎盤254	弥生・土師器	高杯	2170	135	15		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	甕	1906
102	30		Ⅱ	建物6	礎盤252	弥生・土師器	高杯	2166	135	16		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	鉢	1898
102	31		Ⅱ	建物6	礎盤254	弥生・土師器	鉢	2118	135	17	55	Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	鉢	1908
102	32		Ⅱ	建物7	礎盤248	弥生・土師器	壺	2115	135	18		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	鉢	1902
102	33		Ⅱ	建物7	礎盤248	弥生・土師器	壺	2172	135	19		Ⅱ	土坑8		弥生・土師器	鉢	1903
102	34		Ⅱ	建物8	礎盤245	弥生・土師器	壺	2210	137	1	55	Ⅱ	土坑9		土師器	皿	1911
102	35		Ⅱ	建物8	礎盤266	弥生・土師器	壺	2174	137	2	55	Ⅱ	土坑10	No.1	弥生・土師器	壺	1913
102	36		Ⅱ	建物8	礎盤266	弥生・土師器	壺	2117	137	3		Ⅱ	土坑10		弥生・土師器	甕	1912
102	37		Ⅱ	建物8	礎盤266	弥生・土師器	高杯	2175	137	4	56	Ⅱ	土坑11	No.1	弥生・土師器	甕	1917
102	38		Ⅱ	建物8	礎盤266	弥生・土師器	鉢	2116	137	5	56	Ⅱ	土坑11	No.2	弥生・土師器	甕	1918
118	1		Ⅱ	建物10	礎盤280	弥生・土師器	壺	2178	137	6		Ⅱ	土坑11		弥生・土師器	鉢	1916
118	2		Ⅱ	建物12	礎盤189	弥生・土師器	甕	2179	137	7		Ⅱ	土坑11		弥生・土師器	鉢	1915
118	3		Ⅱ	建物12	礎盤189	弥生・土師器	鉢	2176	137	8	56	Ⅱ	土坑11		弥生・土師器	手づくね	1914
118	4		Ⅱ	建物16	礎盤146	弥生・土師器	高杯	1829	137	9		Ⅱ	土坑12		弥生・土師器	壺	1920
118	5		Ⅱ	建物17	礎盤146	弥生・土師器	鉢	1828	137	10	56	Ⅱ	土坑12	No.1	弥生・土師器	壺	1921
118	6		Ⅱ	建物16	礎盤205	弥生・土師器	甕	2180	137	11	56	Ⅱ	土坑12	上層	弥生・土師器	高杯	2132
118	7		Ⅱ	建物17	礎盤205	弥生・土師器	高杯	2120	137	12		Ⅱ	土坑17		弥生・土師器	高杯	1923
118	8		Ⅱ	建物20	礎盤168	弥生・土師器	鉢	2121	140	1	56	Ⅱ	土坑21	No.3	土師器	壺	1489
118	9		Ⅱ	建物22	礎盤100	弥生・土師器	壺	2124	140	2		Ⅱ	土坑21		土師器	壺	1425
118	10		Ⅱ	建物22	礎盤112	弥生・土師器	壺	2216	140	3		Ⅱ	土坑21		土師器	甕	1424
118	11		Ⅱ	建物22	礎盤100	弥生・土師器	甕	2179	140	4	56	Ⅱ	土坑21	No.1	土師器	甕	1422
118	12		Ⅱ	建物25	礎盤110	弥生・土師器	壺	2263	140	5	56	Ⅱ	土坑21	No.2	土師器	甕	1423
118	13		Ⅱ	建物25	礎盤203	弥生・土師器	壺	2127	141	1	57	Ⅱ	土坑22	No.6~9	弥生土器	壺	1932
118	14		Ⅱ	建物25	礎盤203	弥生・土師器	甕	2122	141	2		Ⅱ	土坑22	No.5	弥生土器	壺	1928
118	15		Ⅱ	建物25	礎盤203	弥生・土師器	高杯	2125	141	3		Ⅱ	土坑22		弥生土器	壺	1925
118	16		Ⅱ	建物25	礎盤109	弥生・土師器	鉢	2211	141	4		Ⅱ	土坑22		弥生土器	壺	1924
118	17		Ⅱ	建物25	礎盤203	弥生・土師器	鉢	2126	141	5	57	Ⅱ	土坑22	No.4	弥生土器	壺	1930
118	18		Ⅱ	建物26	礎盤145	弥生・土師器	壺	1831	141	6	57	Ⅱ	土坑22	No.1	弥生土器	壺	1929
118	19		Ⅱ	建物26	礎盤134	弥生・土師器	壺	1830	141	7		Ⅱ	土坑22		弥生土器	壺	1927
118	20		Ⅱ	建物26	礎盤145	弥生・土師器	鉢	2215	141	8		Ⅱ	土坑22	No.3	弥生土器	壺	1931
118	21		Ⅱ	建物26	礎盤236	弥生・土師器	鉢	2181	141	9		Ⅱ	土坑22		弥生土器	高杯	1926

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(8)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
142	4		Ⅱ	土坑24	No.2	弥生・土師器	壺	1936	147	33		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1939
142	5	57	Ⅱ	土坑24	No.9	弥生・土師器	甕	1942	148	34	58	Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	1963
142	6		Ⅱ	土坑24		弥生・土師器	甕	1937	148	35		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	1978
142	7		Ⅱ	土坑24	No.7	弥生・土師器	甕	1940	148	36		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	2003
142	8		Ⅱ	土坑24	No.10	弥生・土師器	高杯	1943	148	37		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	2001
142	9	57	Ⅱ	土坑24	No.1	弥生・土師器	匙	1935	148	38		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	1976
144	1		Ⅱ	落ち込み1		弥生・土師器	壺	1536	148	39		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	高杯	2009
144	2		Ⅱ	落ち込み1		土師器	高杯	1535	148	40		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	1964
144	3		Ⅱ	落ち込み2		土師器	壺	1803	148	41		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	1969
144	4		Ⅱ	落ち込み2		土師器	甕	1804	148	42		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	2008
144	5		Ⅱ	落ち込み2		土師器	鉢	1805	148	43		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	1995
144	6		Ⅱ	落ち込み2		土師器	鉢	1808	148	44		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	1972
144	7		Ⅱ	落ち込み2		土師器	鉢	1806	148	45		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	1998
144	8		Ⅱ	落ち込み2		土師器	鉢	1843	148	46		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	鉢	2012
144	9		Ⅱ	落ち込み2		土師器	鉢	1802	148	47		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	器台	1949
144	10		Ⅱ	落ち込み2		土師器	小型器台	1807	148	48		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	器台	1948
144	11		Ⅱ	落ち込み2		須恵器	臙	1867	151	1		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1539
144	12		Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2023	151	2		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1483
144	13		Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2033	151	3		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1541
144	14		Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2022	151	4		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1612
144	15		Ⅱ	落ち込み4		弥生・土師器	壺	2034	151	5		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1611
144	16		Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2039	151	6		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1561
144	17		Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2046	151	7		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1538
144	18	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	壺	2032	151	8		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1540
144	19		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2048	151	9	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1605
144	20		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2050	151	10		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1548
144	21		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2021	151	11		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1564
144	22		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2069	151	12		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1563
144	23		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2020	151	13		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1613
144	24		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2019	151	14		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1624
144	25		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2070	151	15	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1616
144	26		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2068	151	16	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1630
144	27		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2049	151	17		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1560
144	28		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2025	151	18	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1573
144	29		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2071	151	19		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1603
144	30	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2018	151	20		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1602
145	31		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2028	151	21		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	壺	1593
145	32		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2026	152	22		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1545
145	33		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2047	152	23		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1567
145	34	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2029	152	24		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1542
145	35		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2078	152	25		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1562
145	36		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2056	152	26		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1568
145	37		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2027	152	27		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1569
145	38		Ⅱ	落ち込み4		土師器	高杯	2030	152	28		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1544
145	39		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2016	152	29		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1565
145	40	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2040	152	30	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1606
145	41		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2045	152	31		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1629
145	42		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2024	152	32		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1566
145	43		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2051	152	33		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1559
145	44	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2017	152	34		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1570
145	45		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2041	152	35		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1627
145	46		Ⅱ	落ち込み4		土師器	鉢	2031	152	36		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1553
145	47		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2065	153	37		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1604
145	48	58	Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2067	153	38		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1617
145	49		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2064	153	39		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1549
145	50		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2061	153	40		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1550
145	51		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2063	153	41		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1554
145	52		Ⅱ	落ち込み4		土師器	甕	2062	153	42		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1546
145	53	58	Ⅱ	落ち込み4		須恵器	杯	2066	153	43		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1547
145	54		Ⅱ	落ち込み4		須恵器	高杯	2036	153	44		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1557
145	55		Ⅱ	落ち込み4		須恵器	臙	2037	153	45		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1555
146	1		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1953	153	46		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1556
146	2		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1946	153	47		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1622
146	3		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1661	153	48	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	甕	1538
146	4		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1971	153	49		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1583
146	5	58	Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1968	153	50		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1578
146	6		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1990	153	51		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1543
146	7		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	2005	153	52		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1579
146	8		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	440	153	53		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1582
146	9		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1993	153	54		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1610
146	10		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1970	153	55		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1580
146	11		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1961	153	56		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1625
146	12	58	Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	壺	1947	153	57	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1623
146	13		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1979	153	58		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1574
146	14		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1994	153	59	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	高杯	1572
146	15		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1945	153	60		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1595
146	16		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1979	153	61		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1626
146	17		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1954	153	62		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1628
146	18		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	2010	154	63		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1594
146	19		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1952	154	64	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1621
147	20		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1433	154	65	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1608
147	21		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1437	154	66		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1596
147	22		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1980	154	67	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1618
147	23		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1432	154	68		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1601
147	24		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1434	154	69		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1609
147	25		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	2002	154	70		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1607
147	26		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	2006	154	71		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1615
147	27		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1435	154	72		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1614
147	28		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	1987	154	73		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1619
147	29		Ⅱ	落ち込み5		弥生・土師器	甕	2007	154	74		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	鉢	1620
147	30		Ⅱ	落ち込み5													

表5 蒲船津江頭遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土掲載土器類一覧表(9)

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号	挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	その他の出土情報	種類	器種	登録番号
154	78		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	器台	1577	159	13		Ⅱb	谷周辺清掃時		弥生・土師器	壺	2073
154	79		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	支脚	1576	159	14		Ⅱa	北西清掃時		弥生・土師器	壺	1770
154	80	59	Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	手づくね	1598	159	15		Ⅱa	谷東清掃時		弥生・土師器	壺	1778
154	81		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	手づくね	1597	159	16	60	Ⅱa	南清掃時		弥生・土師器	壺	1767
154	82		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	手づくね	1599	159	17	60	Ⅱa	谷包含層		弥生・土師器	壺	1531
154	83		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1587	159	18		Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	壺	1800
154	84		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1590	159	19		Ⅱa	検出時		土師器	壺	1642
154	85		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1585	159	20		Ⅱa	西側溝		土師器	壺	1741
154	86		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1589	159	21		Ⅱb	北東隅		土師器	壺	2138
154	87		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1586	159	22		Ⅱa	北検出時		土師器	壺	1645
154	88		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1591	159	23	60	Ⅱa	谷周辺		土師器	壺	1798
154	89		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1588	159	24		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	壺	1661
154	90		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1592	160	25		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	壺	1729
154	91		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1552	160	26		Ⅱb	西側包含層		弥生・土師器	壺	2088
154	92		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1551	160	27		Ⅱ	検出時		弥生・土師器	壺	1848
154	93		Ⅱ	木質集中部		弥生・土師器	土製円盤	1584	160	28		Ⅱa	清掃時		弥生・土師器	壺	1781
155	1		Ⅱ	トレンチ1		弥生・土師器	壺	1493	160	29		Ⅱb	ピット14		弥生・土師器	壺	2096
155	2		Ⅱ	トレンチ1		弥生・土師器	壺	1495	160	30		Ⅱb	西側溝		弥生・土師器	壺	2098
156	3		Ⅱ	トレンチ1		弥生・土師器	壺	1487	160	31		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	壺	2053
156	4	60	Ⅱ	トレンチ1		弥生・土師器	壺	1502	160	32		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	壺	2058
156	5	60	Ⅱ	トレンチ1		弥生・土師器	支脚	1495	160	33		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	壺	1691
156	6		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1529	160	34		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	壺	2080
156	7		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1528	160	35		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	壺	2074
156	8		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1522	160	36	60	Ⅱ	礎盤133周辺		弥生・土師器	壺	1820
156	9		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1521	160	37	61	Ⅱb	北東隅包含層		弥生・土師器	壺	2042
156	10		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1530	160	38		Ⅱ	検出時		弥生・土師器	壺	1845
156	11		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1524	160	39		Ⅱa	北検出時		土師器	壺	1681
156	12		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1503	160	40		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	壺	1663
156	13		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1523	160	41		Ⅱ	検出時		土師器	壺	1654
156	14		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	壺	1504	160	42		Ⅱb	北端検出時		土師器	壺	2060
156	15		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	高杯	1505	160	43		Ⅱa	北検出時		土師器	壺	1675
156	16		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	鉢	1525	160	44		Ⅱ	検出時		土師器	壺	1849
156	17		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	鉢	1526	161	45		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	高杯	1656
156	18		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	器台	1520	161	46		Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	高杯	1795
156	19		Ⅱ	トレンチ2		弥生・土師器	器台	1527	161	47		Ⅱb	西側溝		弥生・土師器	高杯	2101
157	1		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1444	161	48		Ⅱa	谷周辺		土師器	高杯	1796
157	2		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1447	161	49		Ⅱa	検出時		土師器	高杯	1649
157	3		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1446	161	50		Ⅱa	南検出時		土師器	高杯	1722
157	4		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1440	161	51		Ⅱa	南清掃時		弥生・土師器	高杯	1766
157	5		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1467	161	52		Ⅱa	検出時		弥生・土師器	高杯	1656
157	6		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1463	161	53		Ⅱa	南西端側溝		弥生・土師器	高杯	1735
157	7		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1464	161	54		Ⅱa	南西端側溝		弥生・土師器	高杯	1736
157	8		Ⅱ	トレンチ3		土師器	壺	1478	161	55		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	高杯	2057
157	9	60	Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1481	161	56		Ⅱa	北検出時		土師器	高杯	1658
157	10		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1468	161	57		Ⅱa	北検出時		土師器	高杯	1660
157	11		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1461	161	58		Ⅱ	検出時		土師器	高杯	1855
157	12		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1965	161	59		Ⅱa	検出時		土師器	高杯	1647
157	13		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1462	161	60		Ⅱa	西側溝		土師器	高杯	1658
157	14		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1443	161	61	61	Ⅱb	西側溝		弥生・土師器	鉢	2107
157	15		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1485	161	62	61	Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	鉢	1797
157	16		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1488	161	63	61	Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	鉢	1700
157	17		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	壺	1450	161	64		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	鉢	2078
157	18		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1475	161	65		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	鉢	2077
157	19		Ⅱ	トレンチ3		土師器	高杯	1477	161	66		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	鉢	1696
157	20		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1445	161	67		Ⅱb	ピット27		弥生・土師器	鉢	2097
157	21		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1476	161	68	61	Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	鉢	2011
157	22		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1453	161	69	61	Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	鉢	1799
157	23	60	Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1442	161	70		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	鉢	2081
157	24		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	高杯	1479	161	71		Ⅱa	谷底トレンチ		弥生・土師器	鉢	1532
158	25		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1486	161	72	61	Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	鉢	1715
158	26		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1439	161	73		Ⅱ	検出時		弥生・土師器	鉢	1650
158	27		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1441	161	74	61	Ⅱb	東側検出時		弥生・土師器	鉢	2044
158	28		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1454	162	75		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	鉢	2059
158	29		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1480	162	76	61	Ⅱ	清掃時		弥生・土師器	鉢	1793
158	30		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1455	162	77		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	鉢	1716
158	31		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1482	162	78		Ⅱb	谷周辺		弥生・土師器	鉢	2082
158	32		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	鉢	1484	162	79		Ⅱb	北端周辺		弥生・土師器	鉢	2092
158	33	60	Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	手づくね	1490	162	80		Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	鉢	1818
158	34		Ⅱ	トレンチ3		弥生・土師器	土製品	1491	162	81		Ⅱa	西試掘トレンチ		弥生・土師器	鉢	1512
158	35		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	壺	1508	162	82		Ⅱa	谷周辺		弥生・土師器	鉢	1801
158	36		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	壺	1506	162	83	61	Ⅱa	南西部周辺		弥生・土師器	鉢	1819
158	37		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	壺	1507	162	84	61	Ⅱa	東側溝		弥生・土師器	鉢	1747
158	38		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	鉢	1509	162	85		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	鉢	2055
158	39		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	鉢	1510	162	86		Ⅱb	北端検出時		弥生・土師器	鉢	2054
158	40		Ⅱ	トレンチ4		弥生・土師器	土製円盤	1511	162	87		Ⅱb	西側包含層		弥生・土師器	鉢	2087
158	41		Ⅱ	トレンチ5		弥生・土師器	壺	1516	162	88		Ⅱb	北西周辺		弥生・土師器	鉢	2093
158	42		Ⅱ	トレンチ5		弥生・土師器	壺	1513	162	89		Ⅱb	西側溝		弥生・土師器	鉢	2102
158	43		Ⅱ	トレンチ5		弥生・土師器	壺	1518	162	90		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	鉢	1657
158	44		Ⅱ	トレンチ5		弥生・土師器	壺	1514	162	91		Ⅱb	北東包含層		弥生・土師器	鉢	2139
158	45		Ⅱ	トレンチ5		弥生・土師器	高杯	1517	162	92		Ⅱ	検出時		弥生・土師器	器台	1852
158	46		Ⅱ	トレンチ5		土師器	鉢	1519	162	93	61	Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	手づくね	1690
159	1		Ⅱa	南清掃時		弥生・土師器	壺	1788	162	94	61	Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	手づくね	1712
159	2		Ⅱb	西側包含層		弥生・土師器	壺	2086	162	95		Ⅱa	清掃時		須恵器	杯蓋	1871
159	3		Ⅱa	北検出時		弥生・土師器	壺	1694	162	96		Ⅱa	南検出時		須恵器	杯蓋	1728
159	4		Ⅱb	清掃時		弥生・土師器	壺	2079	162	97		Ⅱ	試掘トレンチ		須恵器	杯蓋	921
159	5	60	Ⅱa	東側溝		弥生・土師器	壺	1759	162	98		Ⅱ	南検出時		須恵器	杯蓋	1727
159	6		Ⅱb	ピット7		弥生・土師器	壺	2095	162	99		Ⅱa	南検出時		須恵器	杯身	1725
159	7		Ⅱb	西側検出時		弥生・土師器	壺	2052	162	100		Ⅱa	南検出時		須恵器	壺	1724
159	8		Ⅱa	谷西部		弥生・土師器	壺	1972	162	101							

IV まとめ

1 遺跡の時期

今回報告した蒲船津江頭遺跡 I・II 区からはおびただしい量の土器が出土したが、そのほとんどが弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。しかしながら、庄内系甕・布留系甕・小型精製器種等のごくわずかしこ出土しておらず、またそれらの在地系との併行関係を把握するのに有効な資料にも恵まれていない。そのため、土器組成からではなく、変化の乏しい在地系のみでの型式変化から土師器か弥生土器か、古墳時代の開始後か否かを判断するのは困難である。よって、該期の細分に判断材料に欠くものについては、「弥生時代終末から古墳時代初頭」と留めるにしておきたい。その上で検出した遺構等の時期について概観する。

I・II 区ともに掘立柱建物跡の礎盤から出土した土器はほとんどが小片であり、また出土土器が伴わない建物も多数あり、個別に時期を明示することは困難である。庄内系甕・布留系甕・小型精製器種等はほとんど出土しておらず、一部布留系甕の出土が見られるが（第 127 図 6）、これらは礎盤の周辺からの出土で、厳密に建物跡に伴うものかは定かではない。よって、掘立柱建物跡は、明確に古墳時代に帰属するものは不明で、全般的に弥生時代終末から古墳時代初頭の範疇で捉えられる様相と言える。なお、建物を切る遺構としては I 区では 49 号土坑、4 号溝、II 区では 2・3 号土坑、5 号落ち込みがあり、建物に切られる遺構は I 区 54 号土坑があり、このうち II 区 2・3 号土坑が古墳時代前期でその他は弥生時代終末から古墳時代初頭に当たる点は上記と時代的な齟齬はない。

出土土器と遺構の切り合いから土坑の時期を整理すると以下ようになる。

〔弥生時代終末から古墳時代初頭〕：I 区 2・4・6・7・9・10・11・12・14・16・19・20・23・24・29・33・35・36・37・40・41・42・45・49・51・52・53・54 号土坑、II 区 4・8・10・11・12・17・22・24 号土坑

〔古墳時代初頭〕：I 区 5・8・21・25・43・46・50 号土坑（25・43・46・50 号土坑は在地系複合口縁壺の弥生時代からの型式的変容から判断した。）、II 区 21 号土坑

〔古墳時代前期〕：II 区 2・3 号土坑

〔古墳時代中期前葉〕：I 区 17・22 号土坑

〔7～8 世紀（飛鳥～奈良時代）〕：I 区 18 号土坑

〔12 世紀後半（平安～鎌倉時代）〕：I 区 15 号土坑、II 区 9 号土坑

出土土器がないため時期不詳のその他の土坑について埋土から類推すると、I 区 1・13・44・48 号土坑、II 区 7・13・15・16・20 号土坑は弥生時代終末から古墳時代の可能性が高く、I 区 55 号土坑は古墳時代から中世、I 区 47 号土坑、II 区 1・6・14・18・19・25 号土坑は中世以降の所産と考えられる。

その他の遺構については、以下である。

〔弥生時代終末から古墳時代初頭〕：I 区 2～4 号溝、1 号落ち込み、II 区 5 号落ち込み、木質集中部（一部古墳時代中期の土器も含まれるが、全体の中の割合から混入と考える。）

〔古墳時代初頭〕：I 区 1 号溝

〔古墳時代中期～後期初頭〕：I 区 2 号落ち込み、II 区 1・2・4 号落ち込み

包含層等からの出土土器については、膨大な量のⅠ区包含層出土土器のうちの大半が弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてである点が遺跡の中心時期を表している。さらに、Ⅰ区包含層の甑の把手やⅡ区の出土土師器・須恵器（TK47～MT15 併行）から古墳時代中期から後期初頭にかけての遺跡の存続が認められる。また、少ないながら7～8世紀の須恵器も見られる他、Ⅰ区包含層出土の瓦質土器茶釜の把手のように中世後期の痕跡も含まれる。

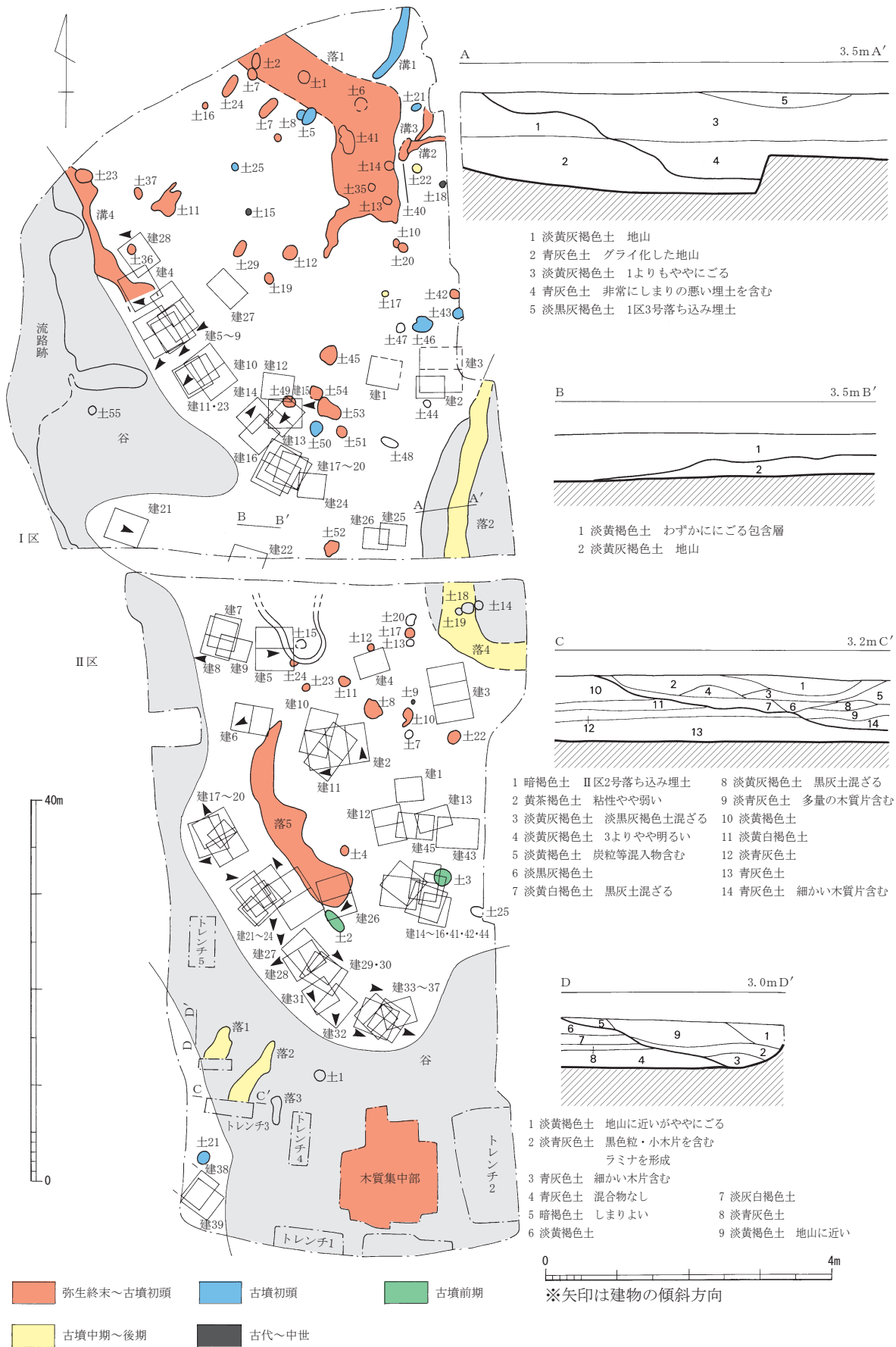
まとめると、弥生時代終末よりもやや古い可能性のある要素を含む出土土器がごくわずかながら含まれているが、遺構や出土土器の量から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてが遺跡の出現期であると同時に最大規模と考えられる。古墳時代前期から中期前葉にかけて大幅に規模が縮小して遺構・出土土器ともに少量となり、その後は遺構が落ち込みのみでごくわずかな土器が出土して後期初頭頃（MT15 併行）まで細々とした継続が認められる。それから時期的な空白があり、飛鳥から平安時代にかけて、また中世においてごくわずかな遺構と出土土器から集落の営みの痕跡が窺える。なお、Ⅰ区西端の流路跡は、そのすぐ西隣を現在流れる二ッ川の前身もしくは一部であった可能性がある。二ッ川は本調査地点から4.5km程度東方で沖端川から二ッ川堰と二ッ川水門により水が引き込まれ柳川城の堀に繋がっている。よって、その成立は柳川城の築城や城下町の形成と深い関連すると考えられるが、築造年代等は知られていない。（三橋町教育委員会1999「二ッ川堰と二ッ川水門」『三橋歴史解体全書』）17世紀末から18世紀やそれ以降の陶磁器類が出土しているが、時期を検討する判断材料とするには内容に乏しい。

2 旧地形の復原

本調査区内の土壌は低湿地の粘質土の特性のためか、遺構の検出作業をはじめ層位の認識が困難となる面が多分にあった。特に地山と包含層を色調や土質的な相違から区分しづらく、好条件が伴わないとその境界も厳密には判別し難かった。また、検出された礎盤が伴っている柱穴の掘形はほとんどが把握することができず、埋土の明瞭な土坑と異なりその遺構面を認識することができなかった。そのため遺跡の旧地形の状況は、層位的な面からのみでは把握し難い部分があった。そこで、調査区内で確認することができたの堆積土層とともに、遺構の平面的な分布、調査面より下層からの出土遺物の有無、礎盤の検出標高などをもとに弥生時代終末から古墳時代の旧地形の復元を試みたい。

調査区内では4地点で堆積土層の確認ができた（第166図）。Ⅰ区北東端付近では、調査面で土壌の色調が微妙に変化する部分が認められたのでトレンチを掘削すると急激に東側へ落ち込む様相が認められた。Ⅰ区の西側では夥しい量の土器が出土した包含層が広がるが、南端部のやや西寄りの位置で土層を観察した結果、西側へ緩やかに落ちていく様相であった。Ⅱ区南西部では、谷部の南西の位置において調査面で土壌の色調が微妙に変化する部分が認められ、近接する2箇所土層を観察した。その結果、調査時点の谷部はある程度埋没した後の状態で、当初谷部は調査を行った面での状況よりも急激落ち込んでおり、谷部の南側へは落ち込む範囲が広がることが確認された。

遺構の分布に関連して考えられるのは、礎盤や土坑等遺構は谷部等の低位となる部分においては分布しない可能性が想定される点である。そうすると、Ⅰ区の西端部周辺、Ⅰ区南東端部周辺、Ⅱ区南端部周辺が弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構の空白地点として挙げられ、これらは



第166図 I・II区遺構配置及び地形復元想定図 (1/600、土層は1/80)

上記で土層から低位部と想定した部分とも一致する。

土質自体で地山と包含層との境界の判別が明確につきにくくとも、トレンチ等で調査面より下層を掘削した際に遺物が出土した周辺は当初低位部であったと想定できる。Ⅱ区トレンチ1～4からはいずれも細かな土器片や木質物が多数出土した。また、Ⅱ区北東端の4号落ち込み周辺でも下層を重機で掘削した際に土器片が出土した。

多数の掘立柱建物跡の礎盤は検出された標高に幅があるが、個々の礎盤間の標高差は各建物での柱穴の掘削深度の相違など多面的な要素が含まれて有意性を見だしにくい。しかし、地点間での平均的な検出標高の推移や、同一の建物に組み合う礎盤間で一定の方向性のある高低差がある場合は、建物が造られた際の地形が反映している可能性が考えられる。

I区の礎盤の検出標高は東側の1・2号建物跡周辺では2.7～2.9m程度のものが主体であるの対し、西側の7～20号建物跡等の付近では同様の標高のものは少なく、2.4～2.6m程度のものが主体となる。また、礎盤の密集範囲でも西端付近の9号建物跡礎盤b10・44、10号建物跡礎盤c47、11号建物跡礎盤c35、17号建物跡礎盤c28・36は検出標高が2.2～2.3m程度と最も低い。他の建物跡と切り合わずやや独立して位置する21・22号建物跡についても、西側の21号建物跡がやや低い標高で礎盤が検出されている。また第166図では礎盤が一定の方向性で高低差のある建物について低く傾斜する方向を示しており、異なる傾向のものも含まれるが西から南西方向を示すものが主体的である。

Ⅱ区の礎盤の検出標高については、5・7・8・9号建物跡周辺、2・10・11号建物跡周辺、1・12～16・41～46号建物跡周辺といった北東部では2.4～2.7m程度が主体である。一方それより西もしくは南側については、6号建物跡の西側の礎盤では2.2m程度、17～20号建物跡周辺では2.1～2.3m程度、22～24号建物跡周辺で2.1～2.4m程度、27～32号建物跡周辺では北側では2.3m程度だが南側では1.6m程度となり、33～37号建物跡周辺では1.5～1.8m程度となっている。また、第166図のⅡ区の建物が低く傾斜する方向についても、斉一的な傾向を示すわけではないが、調査区北側では西方向で、南下するにつれ南方向、そして東方向への方位を示している。14～16号建物跡周辺と33～37号建物跡周辺では礎盤の検出標高に差がある点を踏まえると、その間が礎盤の空閑地となっているのは傾斜が強いためであったと想定される。

以上のように、個別に整理した旧地形を把握するための各要素からは概ね共通した傾向が導き出され、その相関性よりある程度の確実性を認めることができよう。その結果を改めて整理すると、I区は西側が西方へ緩やかに落ち込む緩斜面で建物跡が途切れ谷部となり、南東隅付近は急激に東方へ落ち込む谷部である。Ⅱ区の北側はI区からの連続で、西側は緩斜面で西方へ落ち込み、北東隅は急激に東方へ落ち込む。Ⅱ区南部は調査面で谷部へと落ち込んでいるのと同様に、20～36号建物跡の連なる部分から南側へ落ち込み、やはり谷部となると考えられる。当初の調査面ではさらに南側で地形が高くなり谷部が途切れるが、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期で異なっていたと想定されるのは、南西隅の建物・土坑の所在する周辺を除き、引き続き谷部の落ち込みがⅡ区南端まで広がっていたと考えられる点である。また、最も低位部に所在する33～35号建物跡がともに東側へ低く傾斜していることから、この谷部が東側へと低くなっている可能性がある。なお、木質集中部の土層断面（第149図）では、地山と包含層の境界の標高が1.6m程度であり、最深部の礎盤と近似した標高であるが、礎盤はその上部の遺構面より柱穴が掘り

込まれているので、実際は木質集中部周辺の方がより低位であったとみられる。これらの状況は第166図のように示され、低湿地の微高地上に集落が展開している様相が窺える。

古墳時代初頭以降の時期には、Ⅰ区南東端・Ⅱ区北東端周辺谷部とⅡ区南側に広がる谷部は短時間で急速に埋没して、調査面の状況での地形に至ったと考えられる。その理由として、Ⅰ区2号落ち込み・Ⅱ区4号落ち込みの下層の谷部から出土した土器には、古墳時代初頭の小型精製器種が含まれているがそれ以降のものが認められず、Ⅱ区トレンチ1～4や木質集中部の出土土器も新しい時期のものが含まれるものの、混入もしくは調査面付近の上層での出土とみなせる程度のごく少量である。また、谷部の低い位置での土器の出土はまとまっているが、その堆積土上部からの出土量は少ない。一方で、それらの更に上層で形成されたⅠ区2号落ち込み、Ⅱ区2～4号落ち込みからは古墳時代中期から後期初頭の土器がまとまって出土し、調査面の検出時にも同様の土器が出土している。このような出土土器の様相は、古墳時代中期以前の急速な埋没を示していると言える。しかし、埋没以降もその地点には中世に至るまで落ち込みを除き遺構は形成されず、当時の地形では周辺の微高地上よりまだ低位のままであった可能性がある。

3 木質集中部の性格

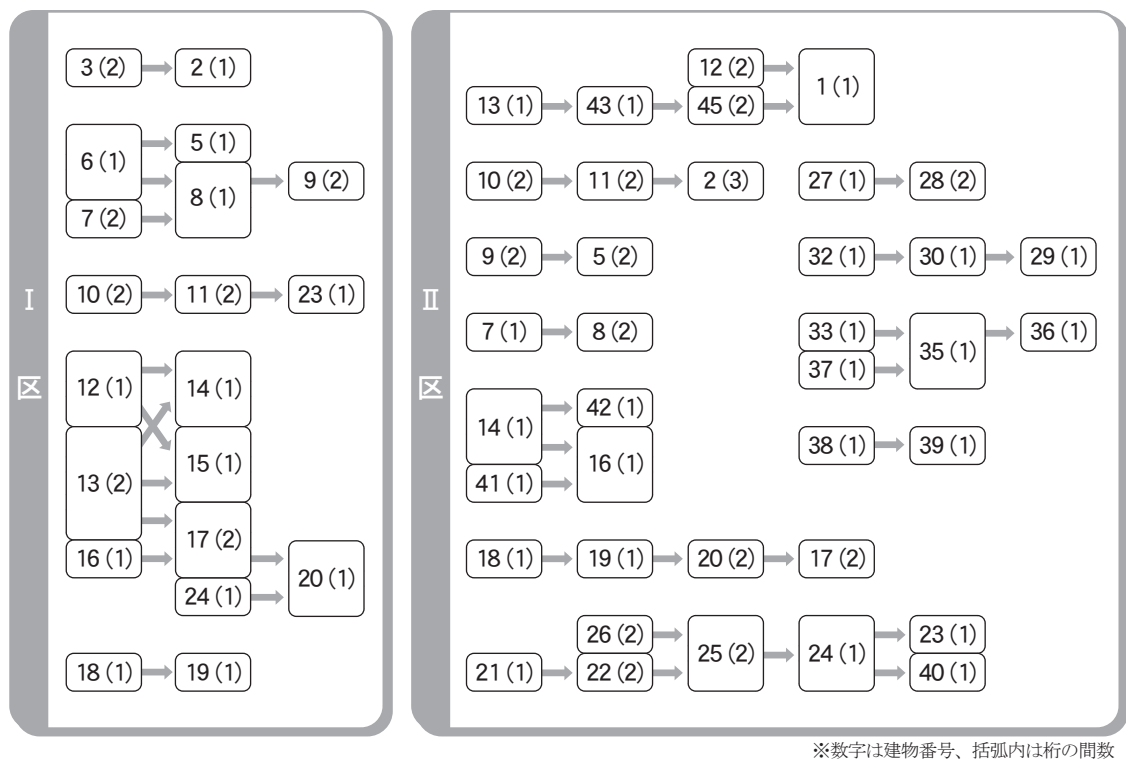
木質集中部については、多数の細長い木片が集中する下部に樹皮が敷かれ、大小の杭が打ち込まれ、木片の軸や杭の配列には規則性が見られないという構造的な面からだけではその性格を類推するには条件に不足する。ただ、軟弱な地盤に下端が尖る杭を打ち込んでいる点は、上部からの大きな力の掛かる構造物を支えるよりも、横方向からの力を受けるのに適しているという点が挙げられる。(佐賀大学低平地研究センター 林 重徳先生御教示による。)

そこで、前記で類推した本遺構が機能していたと考えられる時期の旧地形から判断すると、この木質集中部は、土層図よりある程度谷部が埋没してから標高2m前後で設けているとわかる。標高1.6m程度で検出した礎盤の柱穴の遺構面と同程度と想定され、谷部でも決して高い位置に所在していたわけではないと類推される。したがって、低位にあり杭により横方向からの力を受ける条件ということから水流が想起され、この谷部は流路状であった可能性が想定され、谷部の土層にも一部ラミナの形成が見られる。そうした場合に、杭は木片が流されるのを防止するためと考えられ、特に小型の杭は樹皮を地盤に繋ぎとめておくための効果も有していたとも考えられる。

木片を流水の中に浸しておくという機能があった場合に、木製品の保存ということが考えられるが、木製品は出土しているものの欠損したものが多く、木質物のほとんどが加工はあまり加えられていない。そのため、加工用の木材を保存、もしくはアク抜き等で道具として用いるのに適した状態に調整するための保管空間という性格が一つの可能性として挙げられる。その蓋然性を補強するための要素がまだまだ不足するが、現段階で言及できるのはこの程度に限られる。

4 掘立柱建物跡

検出した多数の礎盤には相互の組み合わせを捉えられなかったものも多いが、Ⅰ区では28棟、Ⅱ区では46棟の組み合わせを掘立柱建物跡として判断した。その規模はⅡ区で3×1間が2棟あるのみで、他は2×1間か1×1間である。建物跡は同一場所で重複する場合はほとんどで、



第 167 図 I・II 区掘立柱建物跡先後関係図

繰り返し建物が建て直されている様相が見える。それらは、遺構同士の切り合いはないため先後関係の不明なものもあるが、直接礎盤同士が切りあって先後関係の判明するものを整理すると第 167 図のようになる。遺構配置図から、建物はその規模と分布状況とに相関性が認められないが、整理した先後関係からも規模と築造順序に相関性は認められない。築造場所と時間的な変遷を反映していない 2 × 1 間と 1 × 1 間という建物の規格の相違は、建物の機能・性格や技術的な進歩と関連づけて捉えることは現段階では困難である。

以上のように本書では I・II 区の内容について報告を行った。本章では遺構・遺跡の時期を整理し、土質の判別が困難なため把握しにくい旧地形を類推し、そこからあまり例を見ない遺構である木質集中部の性格を考察した。なお、次報告以降では引き続き III・IV 区について取り扱っていくが、今回報告できなかった I・II 区の木製品等については、その中で触れていきたい。また、掘立柱建物跡をはじめとした遺構についての最終的な整理も III・IV 区の内容を報告して、本遺跡の報告の最終刊で行う。



空中写真撮影準備風景



I b 区の礎盤検出作業



ニッ川上の橋から見た現在の遺跡周辺

圖 版



1. I b区 遠景 (北から)



2. I b区 全景 (上空から)



1. I a区 全景 (南から)



2. I c区 東全景(北から)

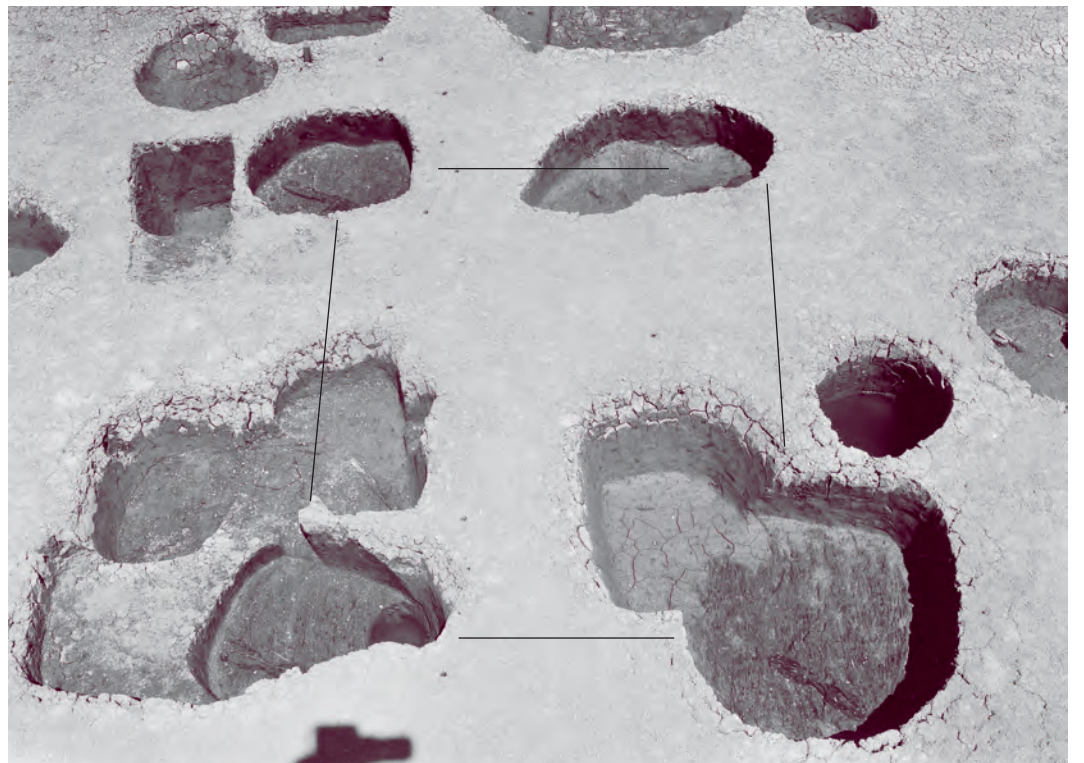


3. I c区 西全景(北から)

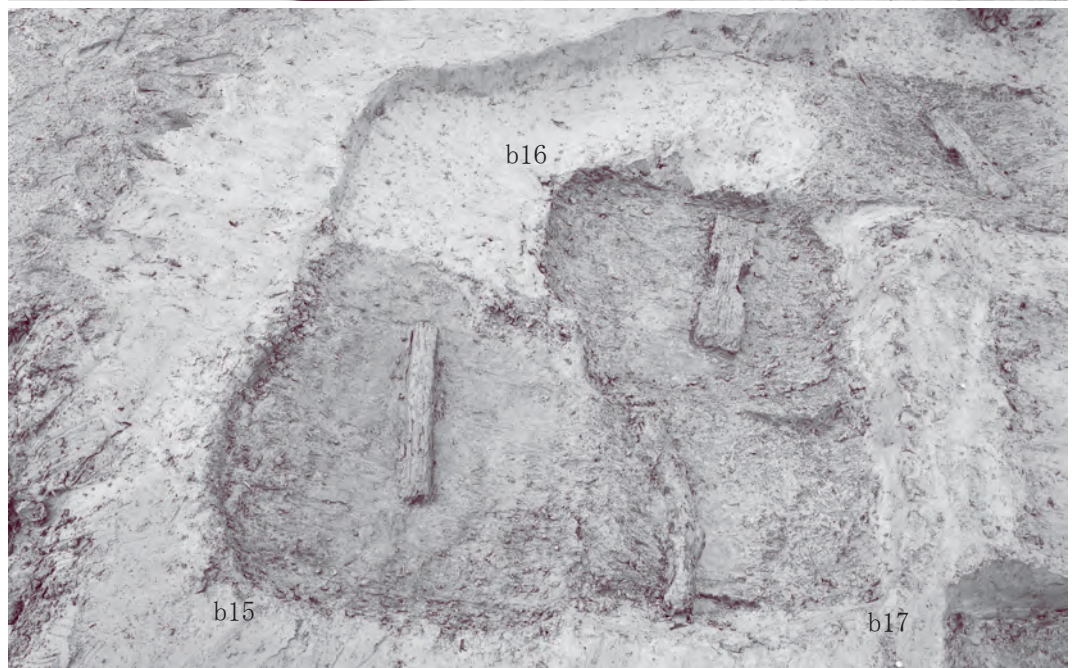
1. I区1号掘立柱
建物跡（南から）



2. I区2号掘立柱
建物跡（西から）

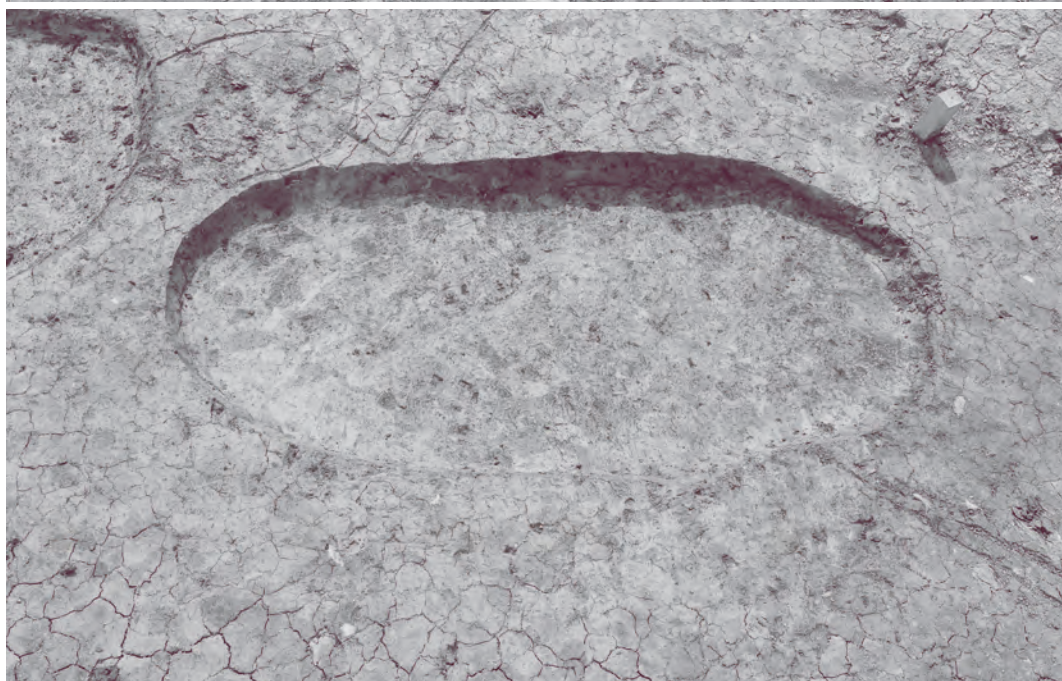


3. I区 礎盤 b15～17
検出状況（南から）

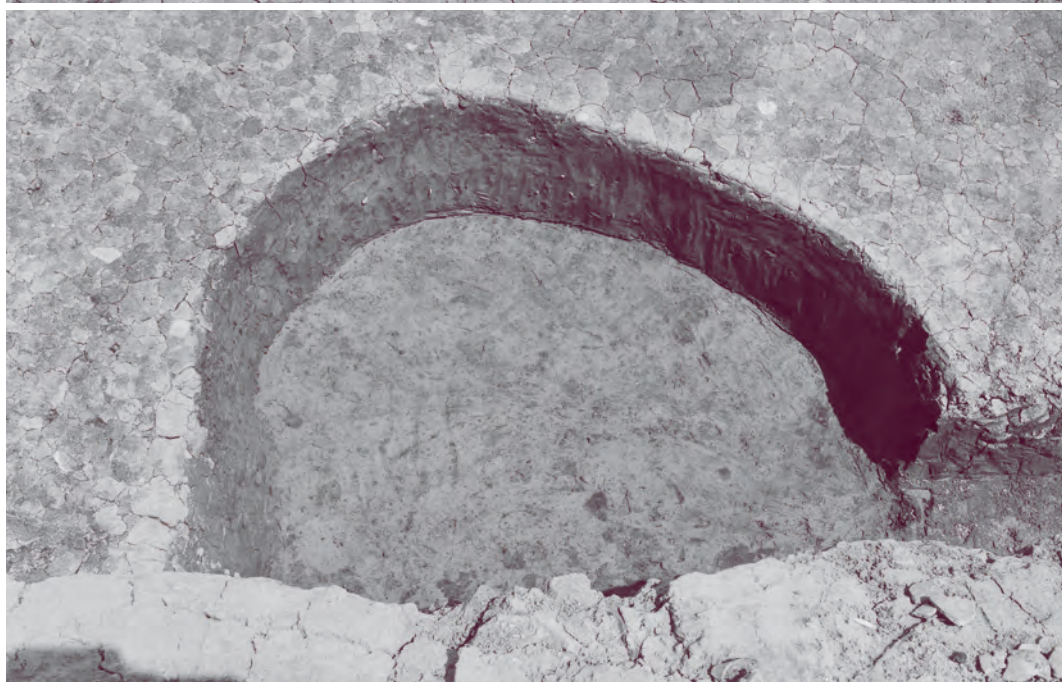




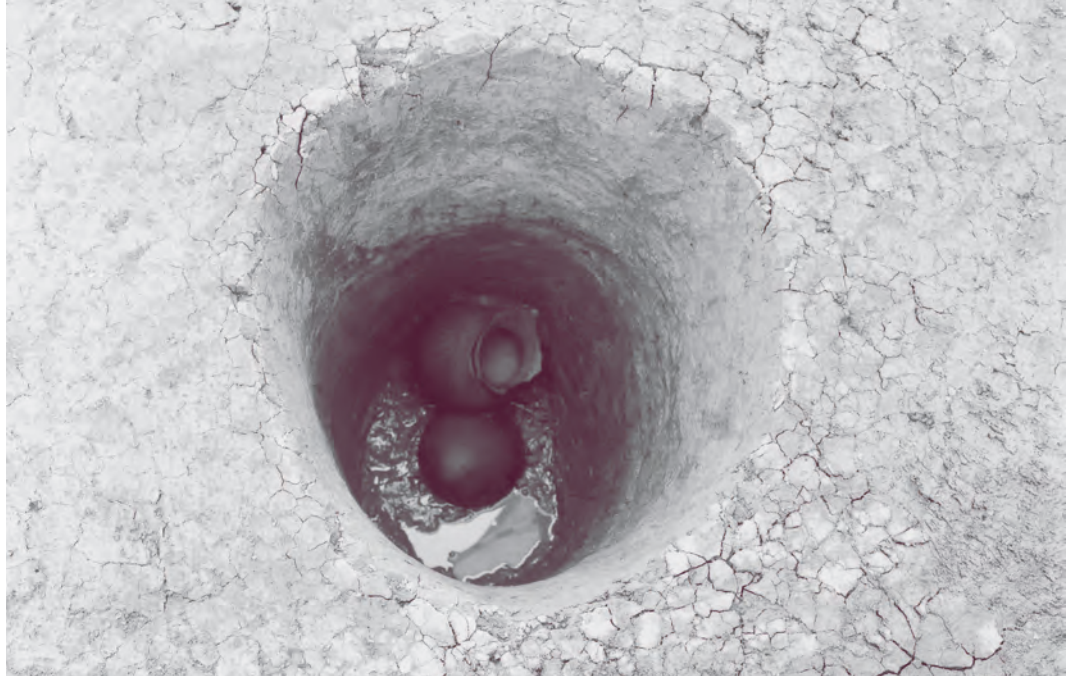
1. I区 1号土坑(東から)



2. I区 2号土坑(東から)



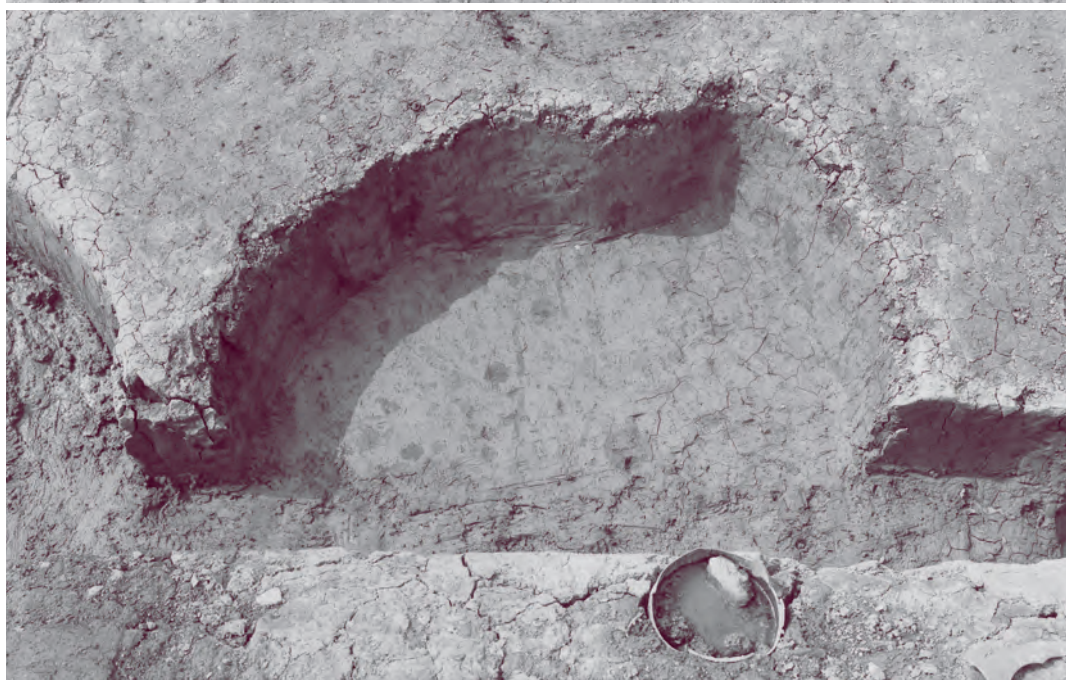
3. I区 3号土坑(南から)



1. I区 4号土坑(南から)



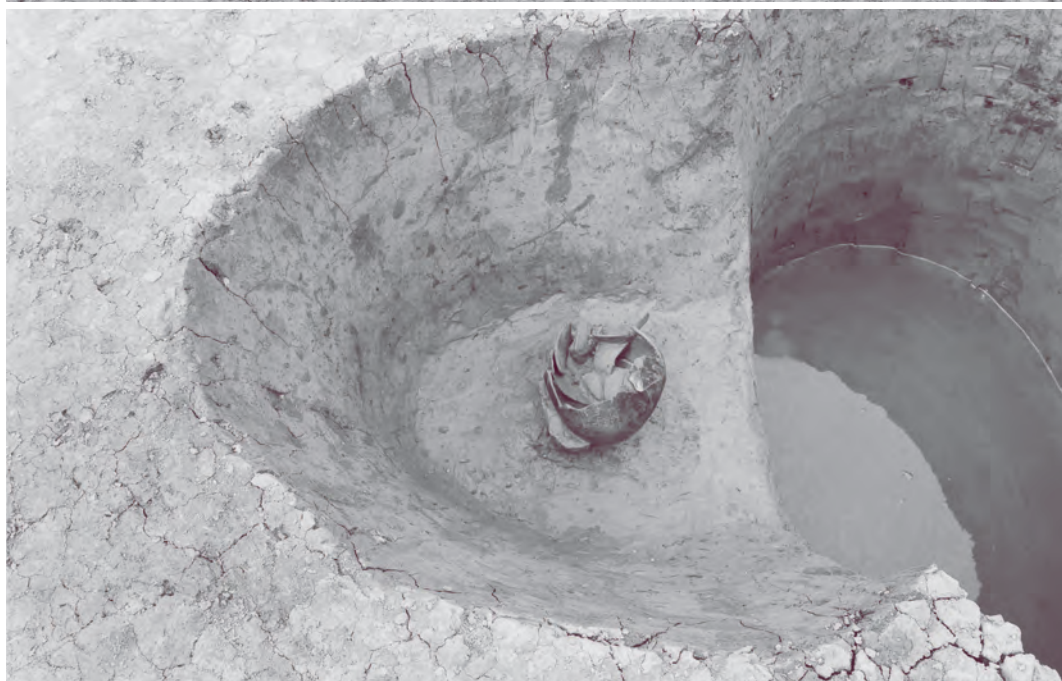
2. I区 5号土坑(西から)



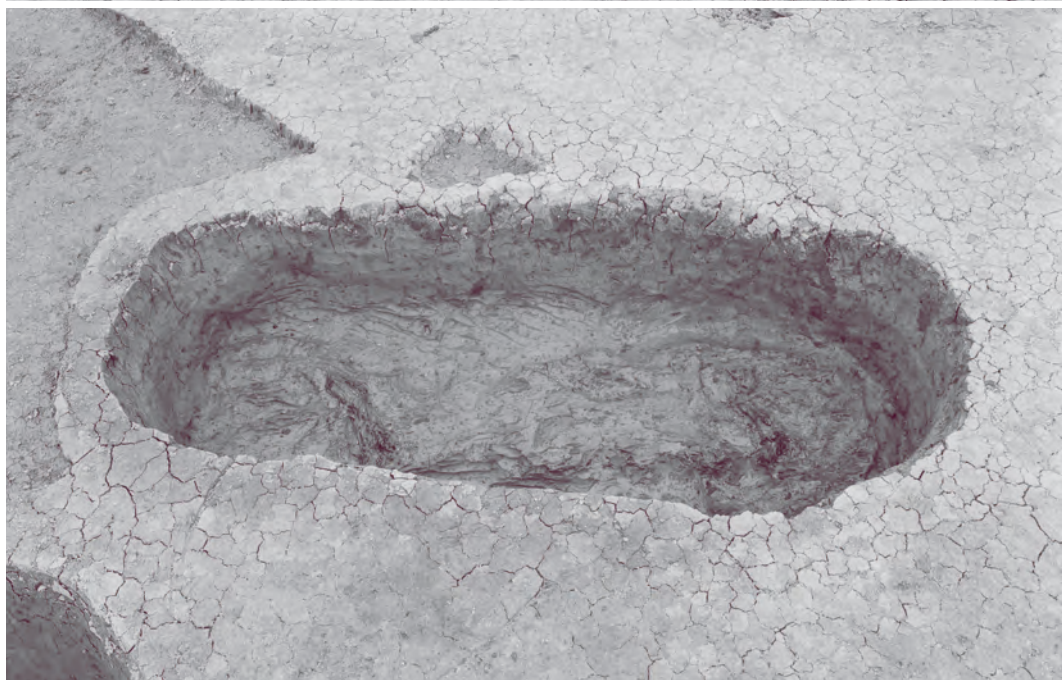
3. I区 6号土坑(南から)



1. I区 7号土坑(西から)



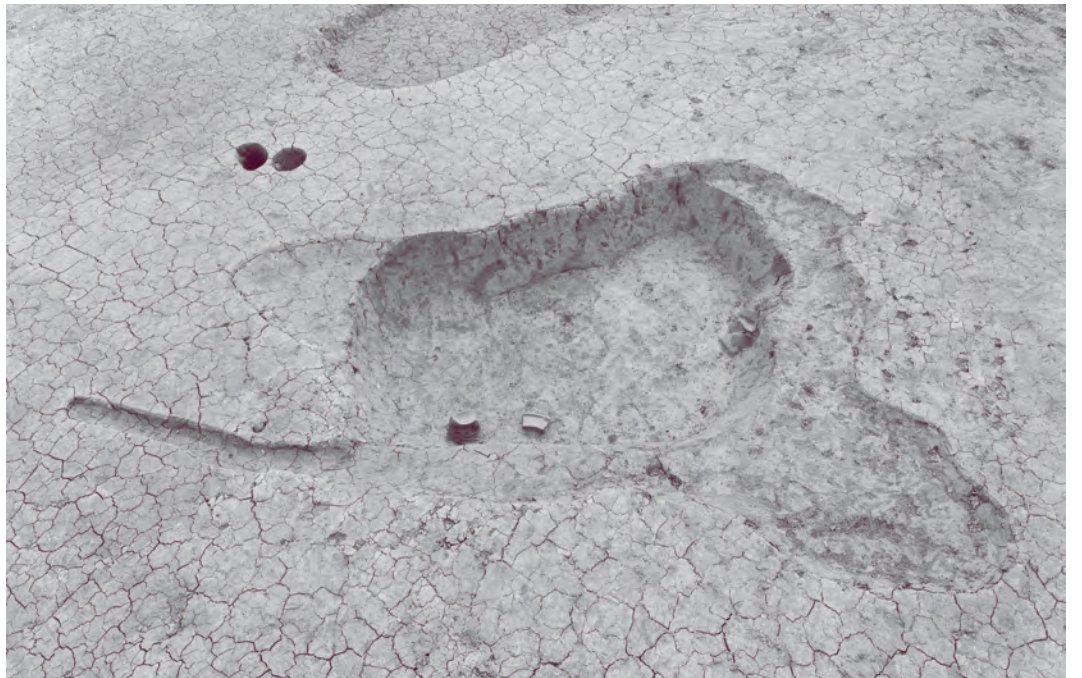
2. I区 8号土坑(南から)



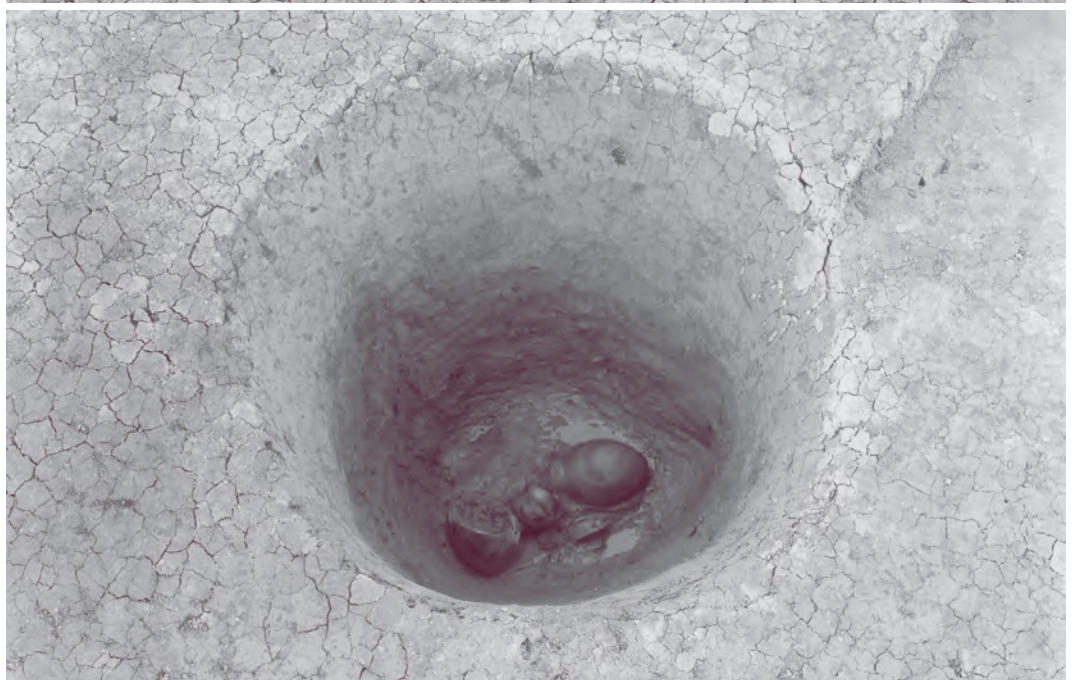
3. I区 9号土坑(北西から)



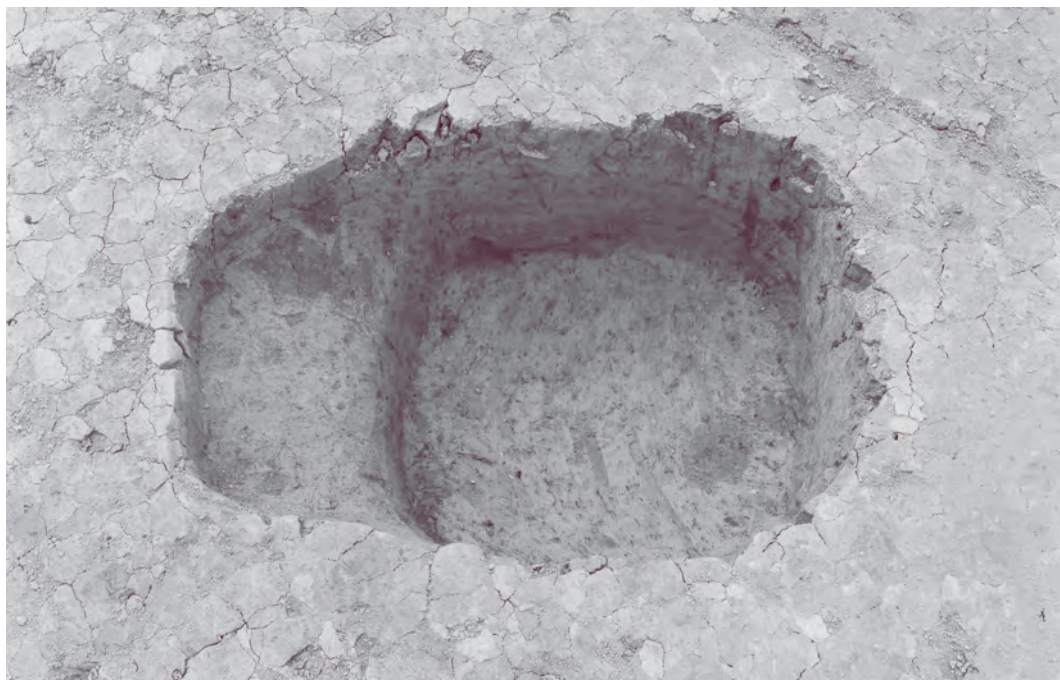
1. I区 10号土坑(西から)



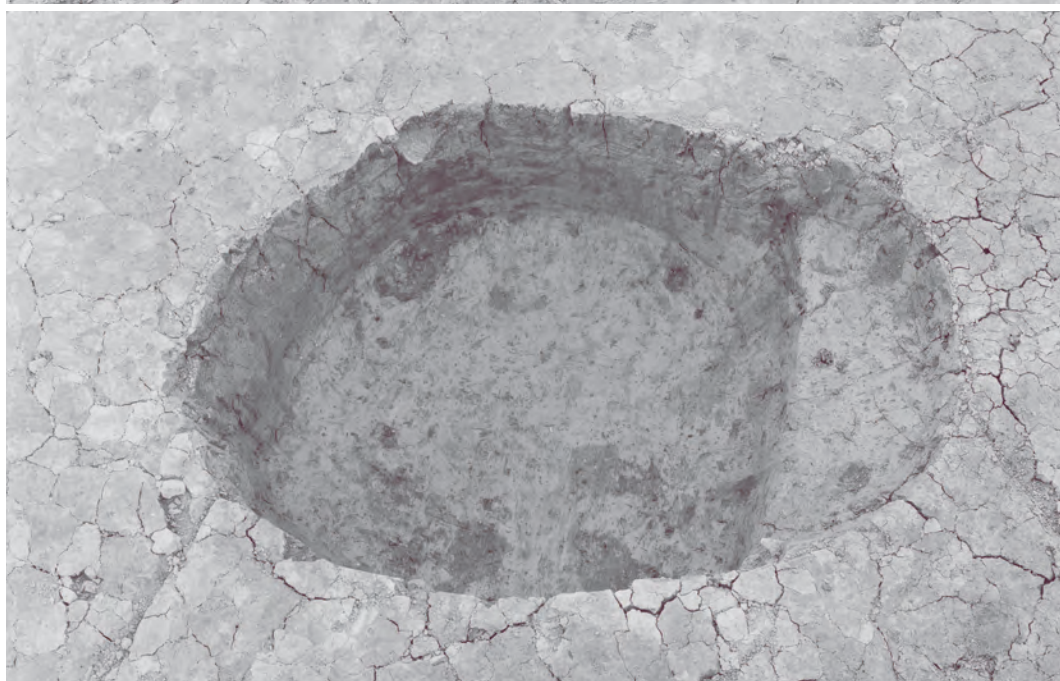
2. I区 11号土坑(北から)



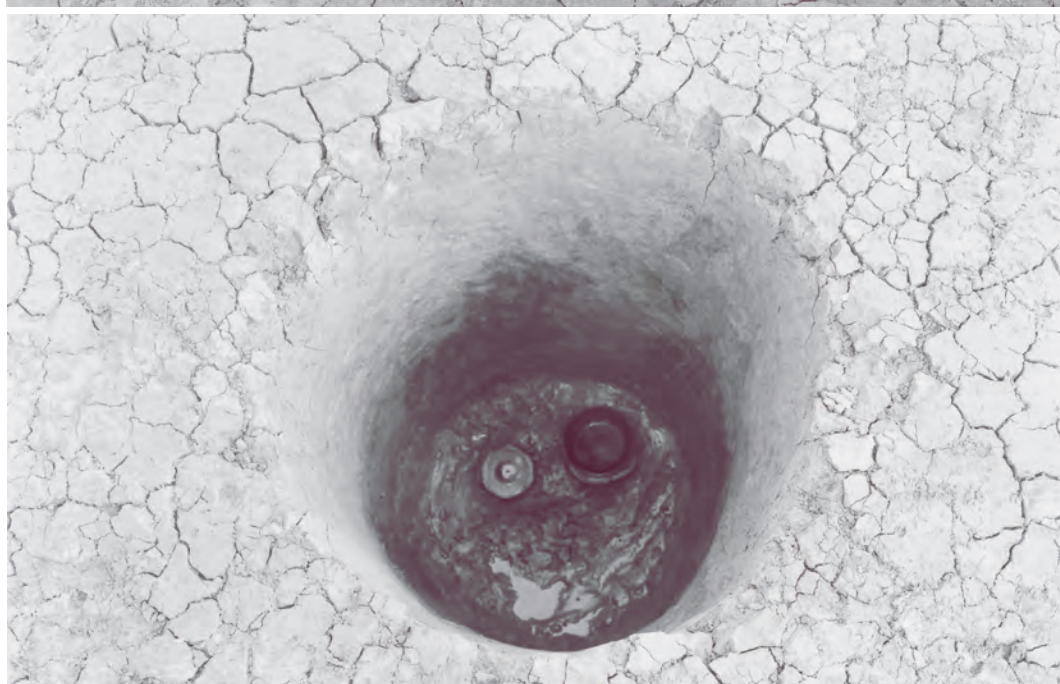
3. I区 12号土坑(南東から)



1. I区 13号土坑(東から)

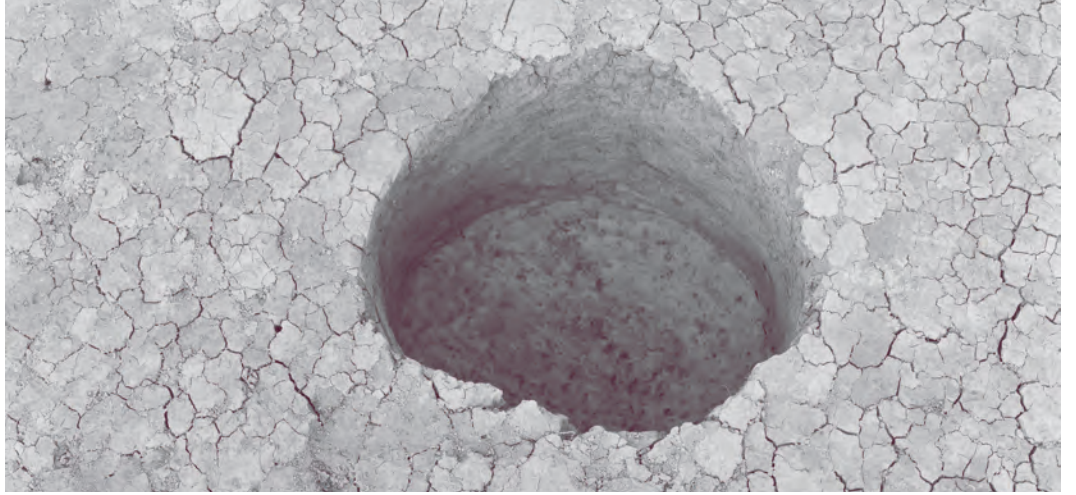


2. I区 14号土坑(南から)

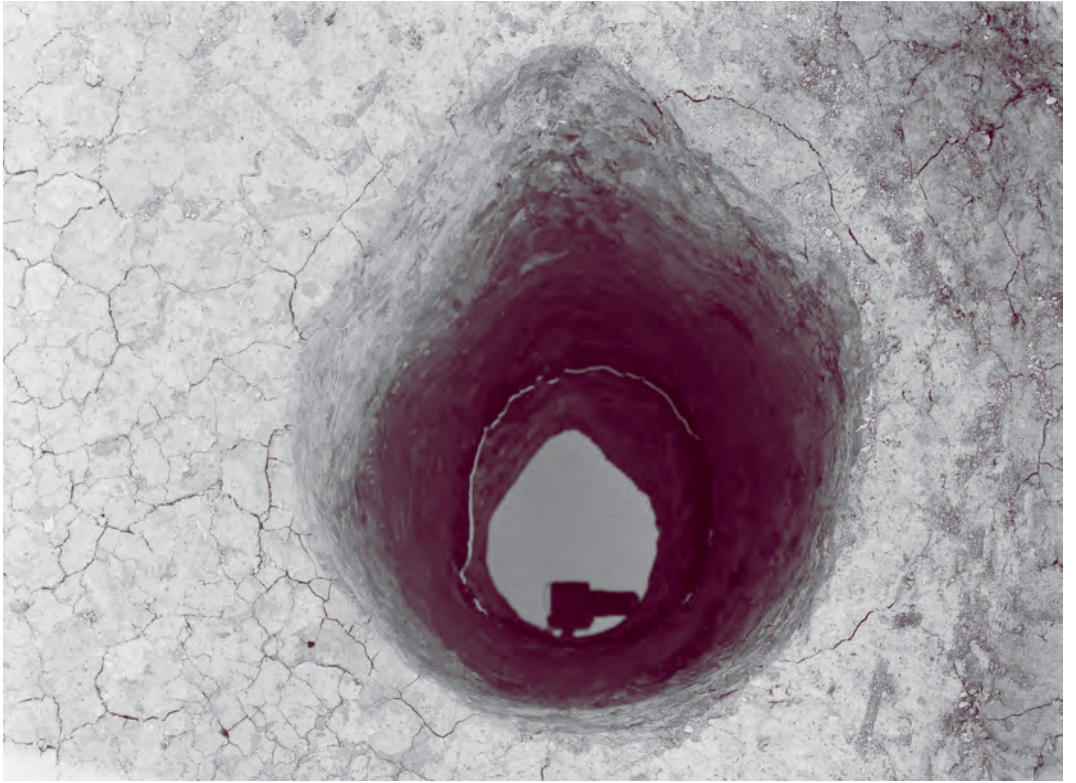


3. I区 15号土坑(西から)

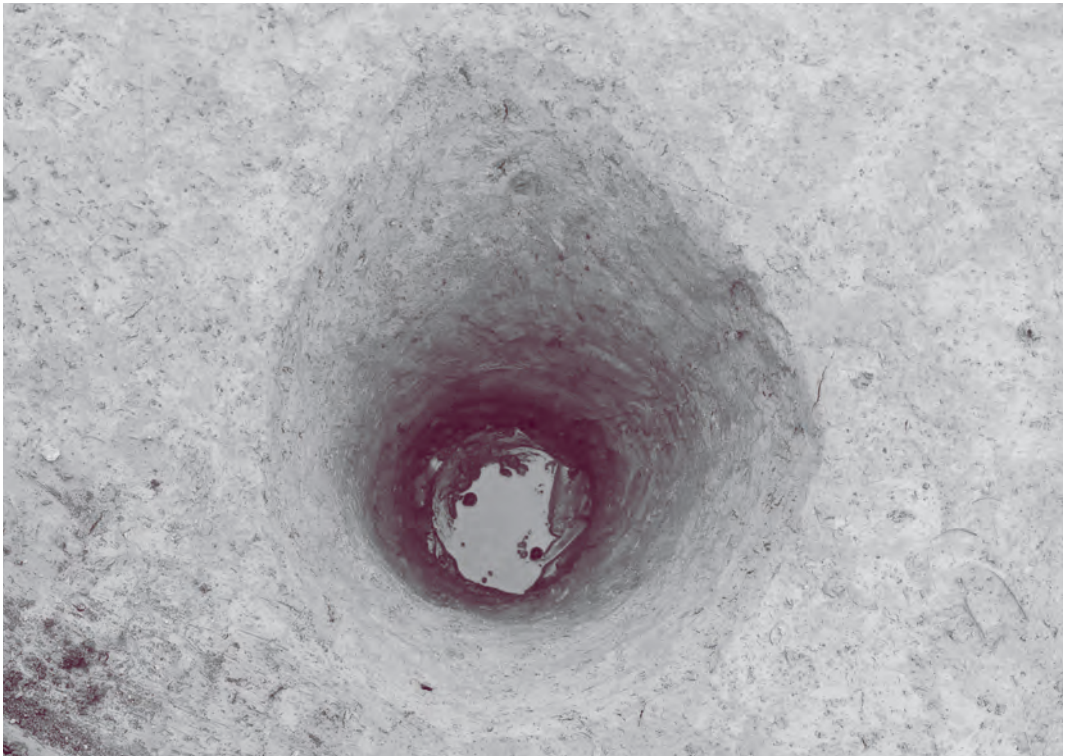
1. I区 16号土坑(南から)

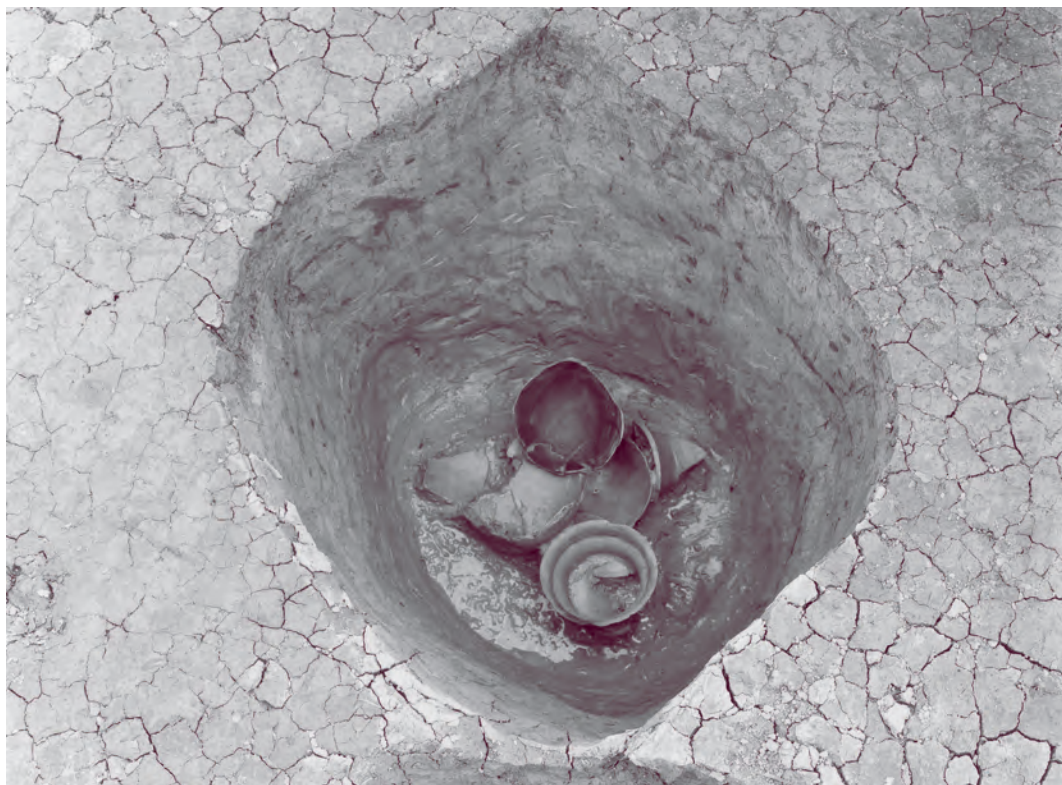


2. I区 17号土坑(南から)

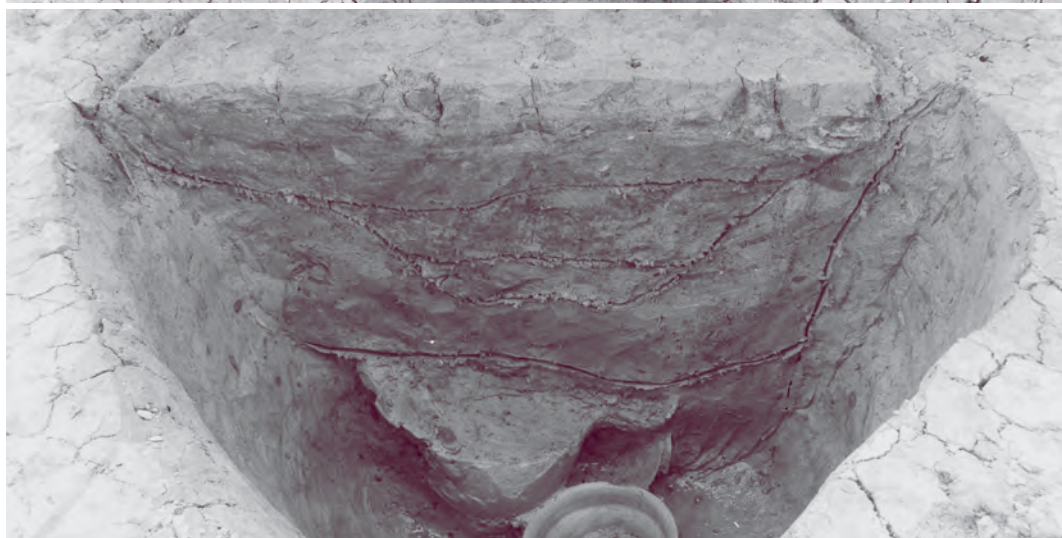


3. I区 18号土坑(東から)

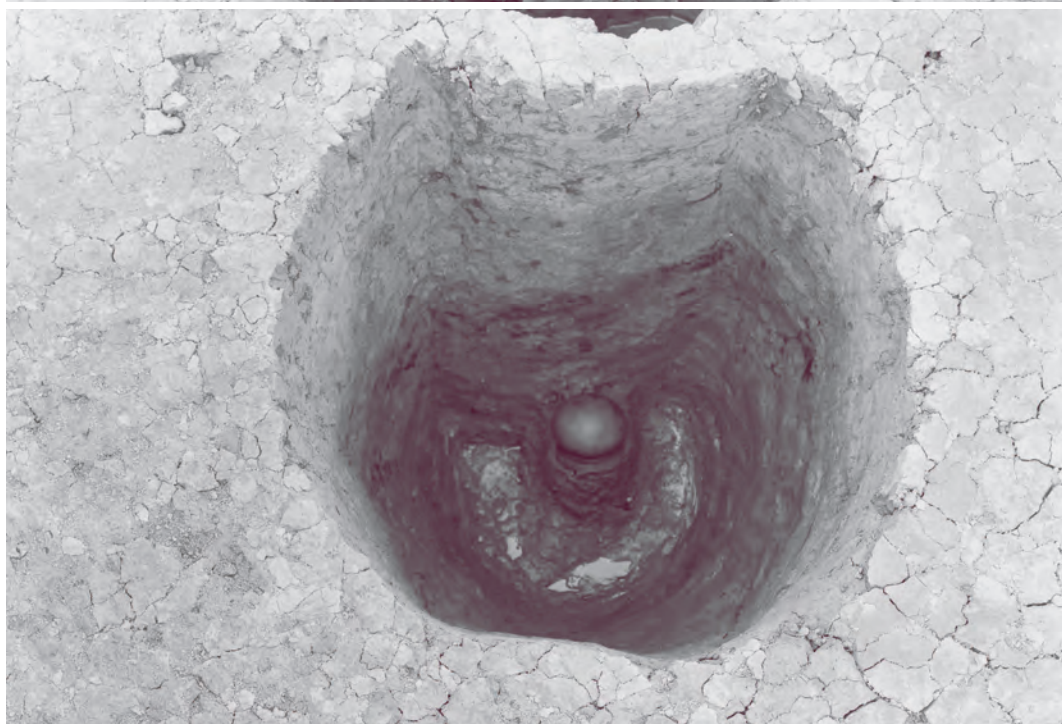




1. I区 19号土坑(北から)



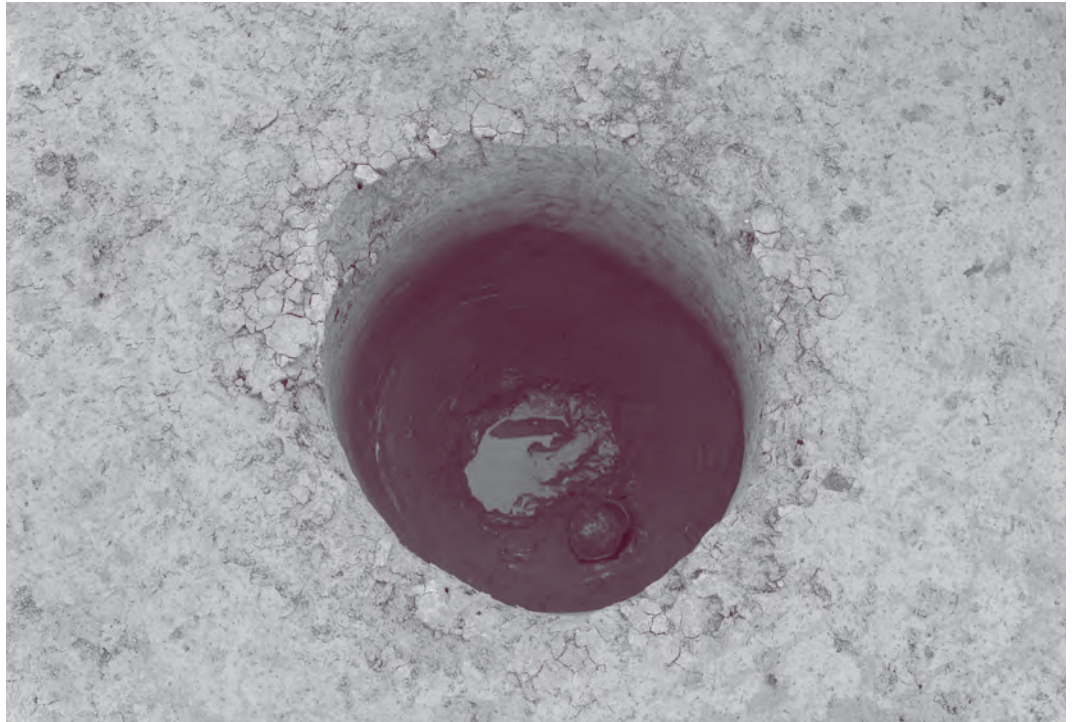
2. I区 19号土坑土層
(北から)



3. I区 20号土坑(東から)



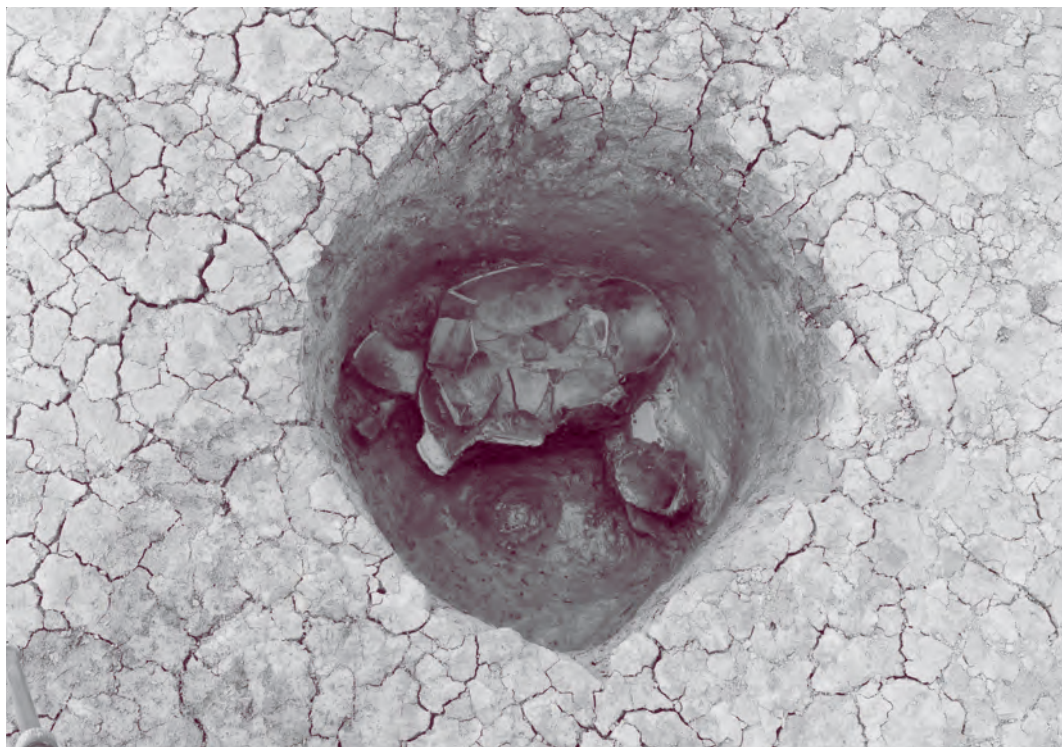
1. I区 21号土坑(東から)



2. I区 22号土坑(西から)



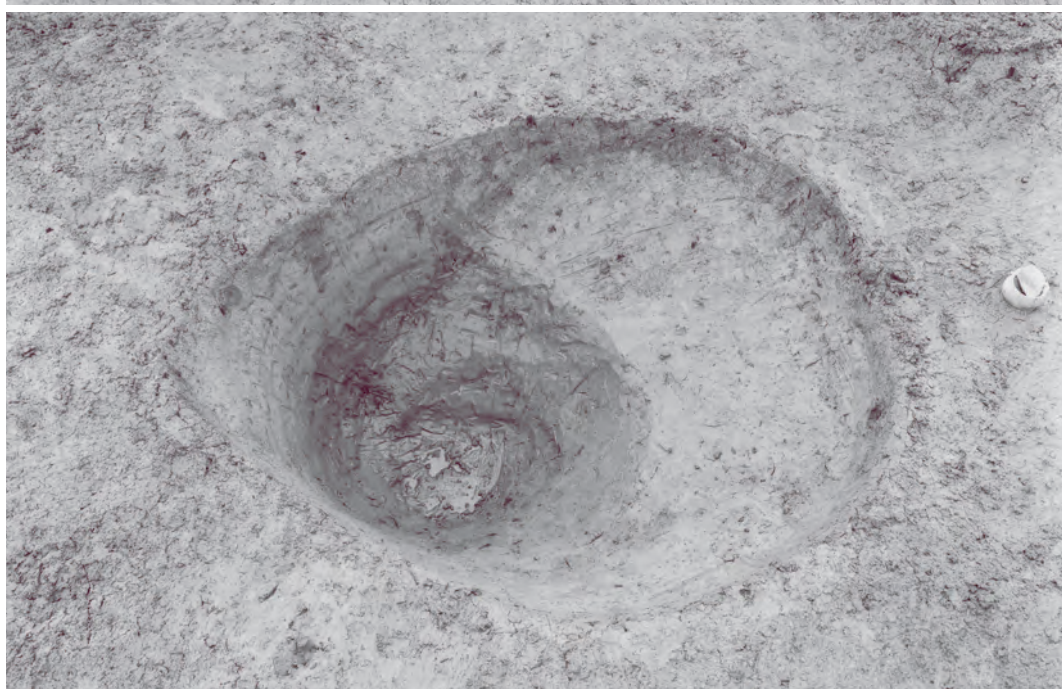
3. I区 24号土坑(北から)



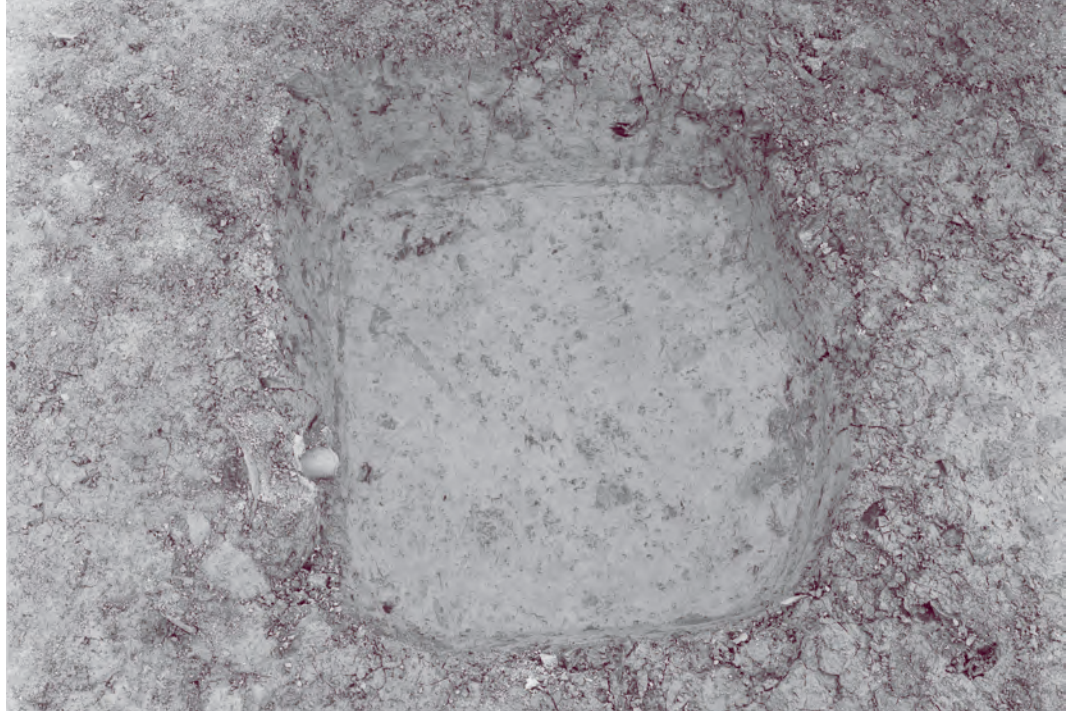
1. I区 25号土坑(南から)



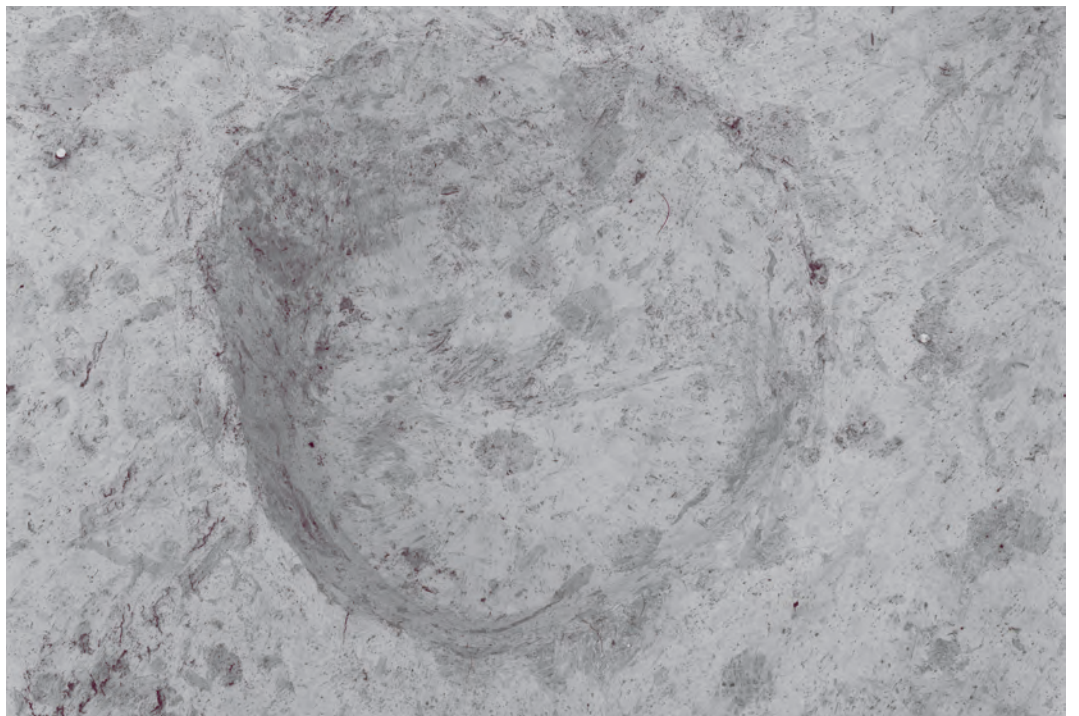
2. I区 29号土坑(南東から)



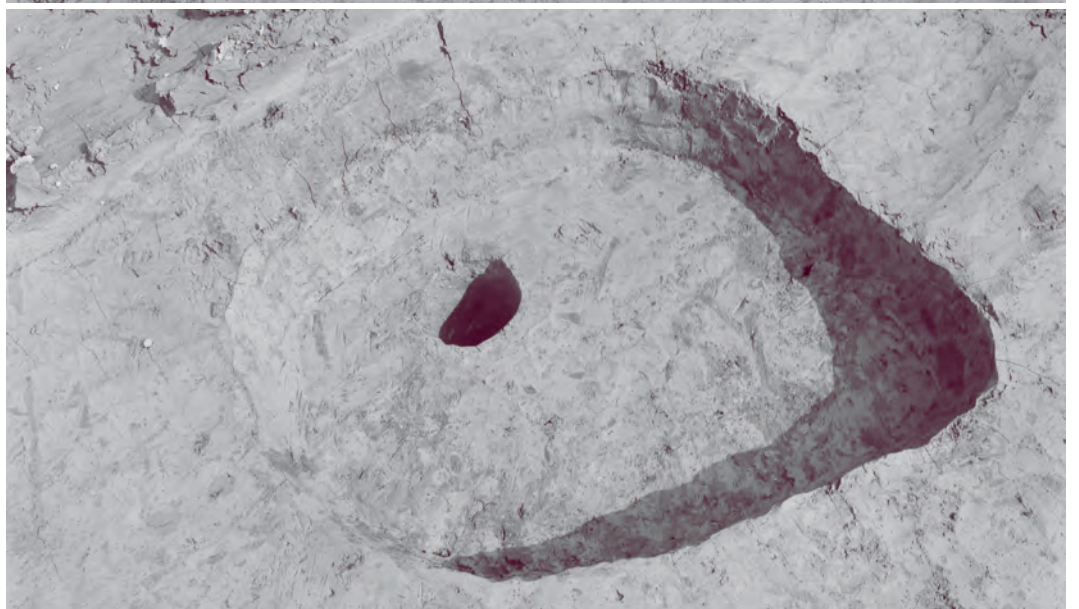
3. I区 33号土坑(北から)



1. I区 35号土坑(北西から)



2. I区 36号土坑(北から)



3. I区 37号土坑(西から)



1. I区 40号土坑(西から)



2. I区 41号土坑(東から)



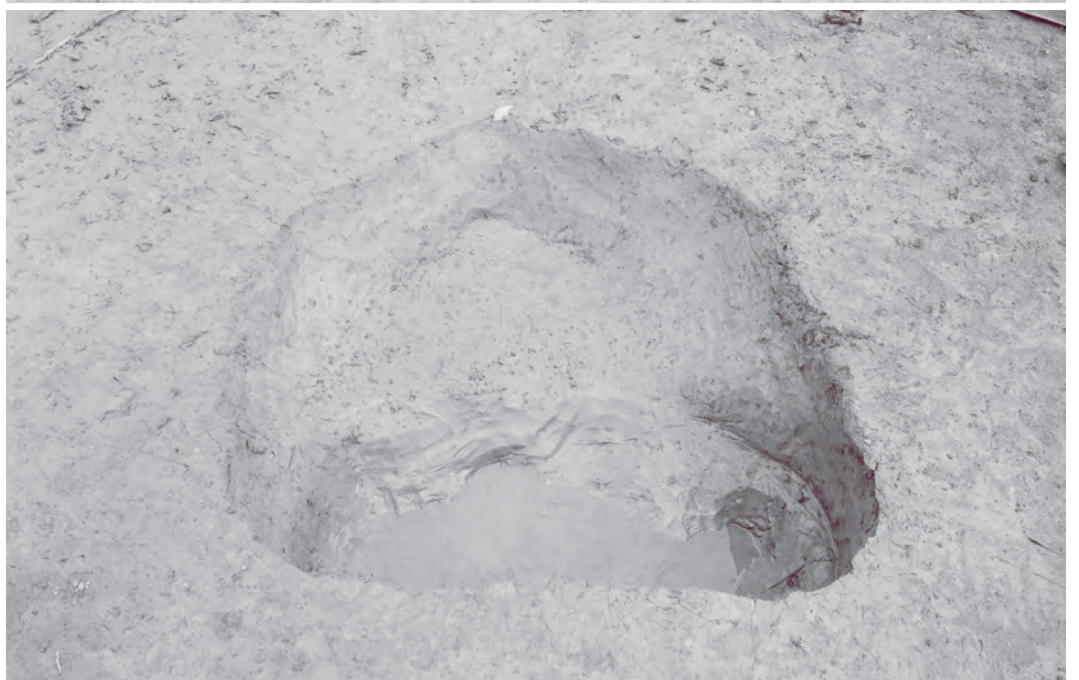
3. I区 42号土坑(東から)



1. I区 43号土坑(北西から)



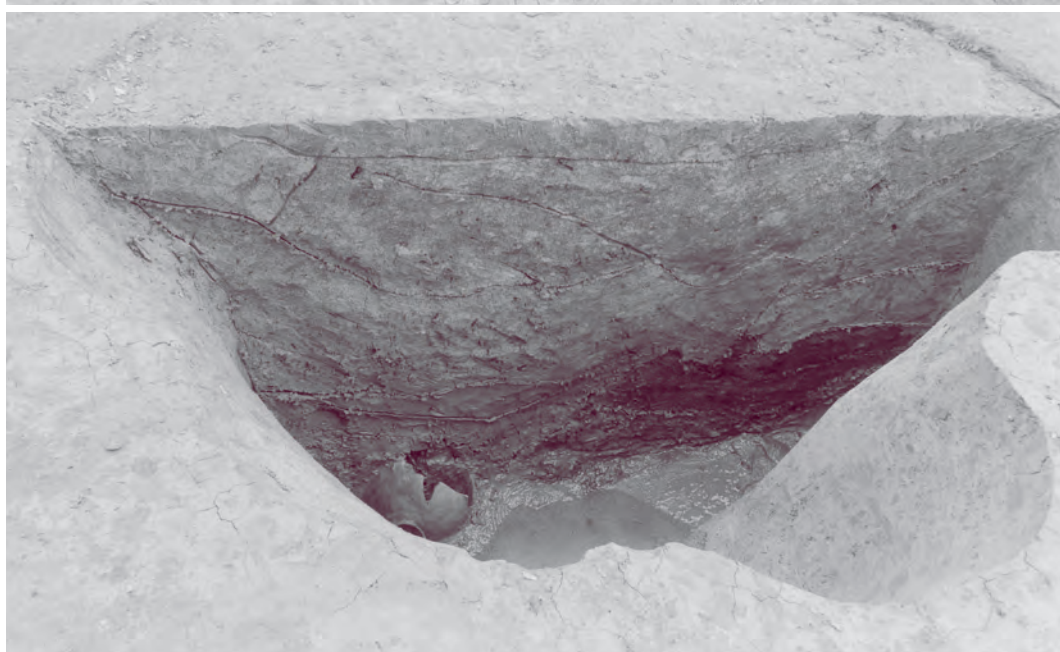
2. I区 44号土坑(西から)



3. I区 45号土坑(西から)



1. I区 46号土坑(北から)



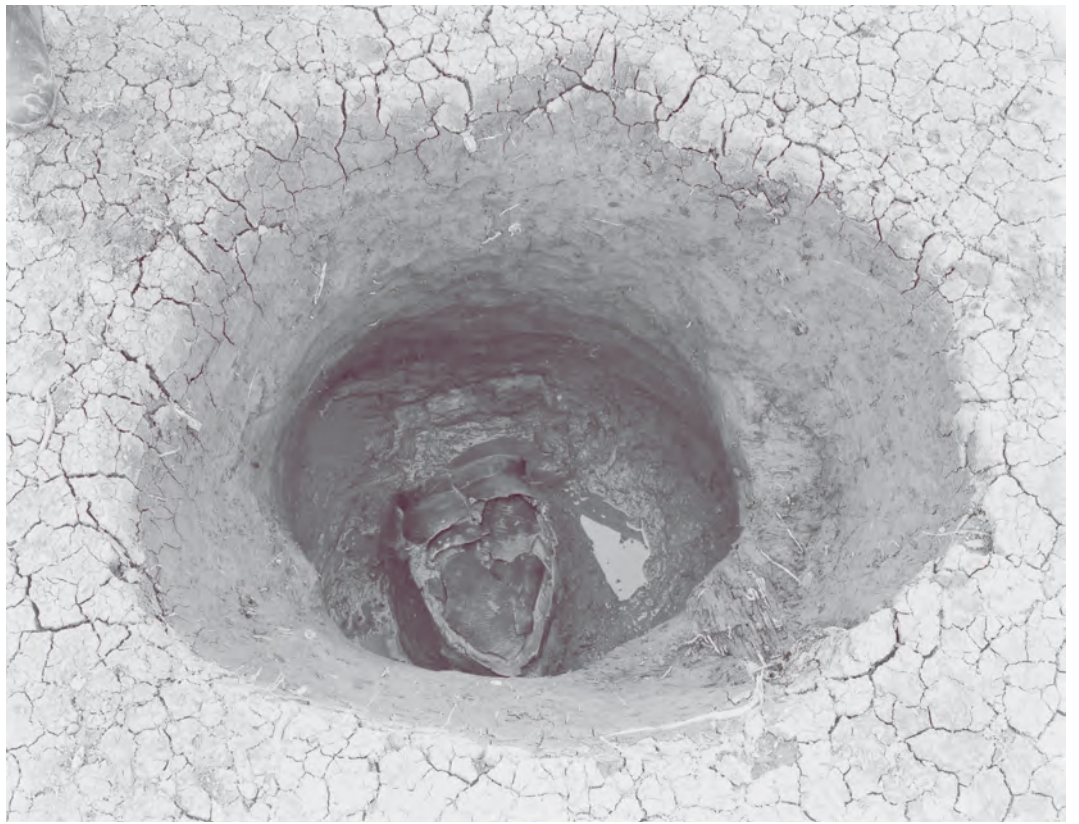
2. I区 46号土坑土層
(北から)



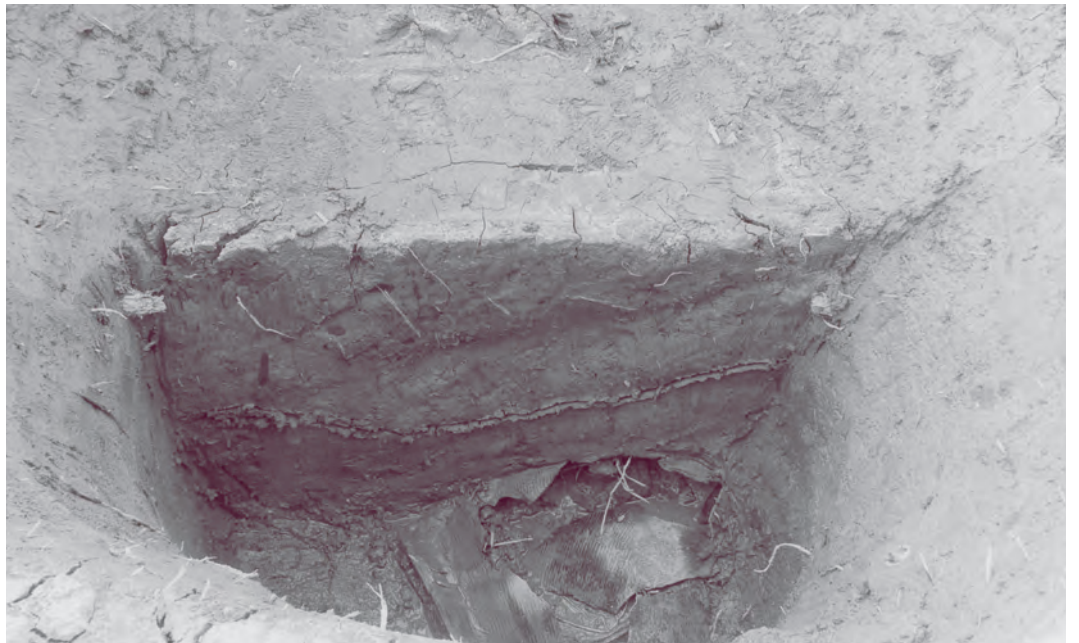
3. I区 47号土坑(北から)



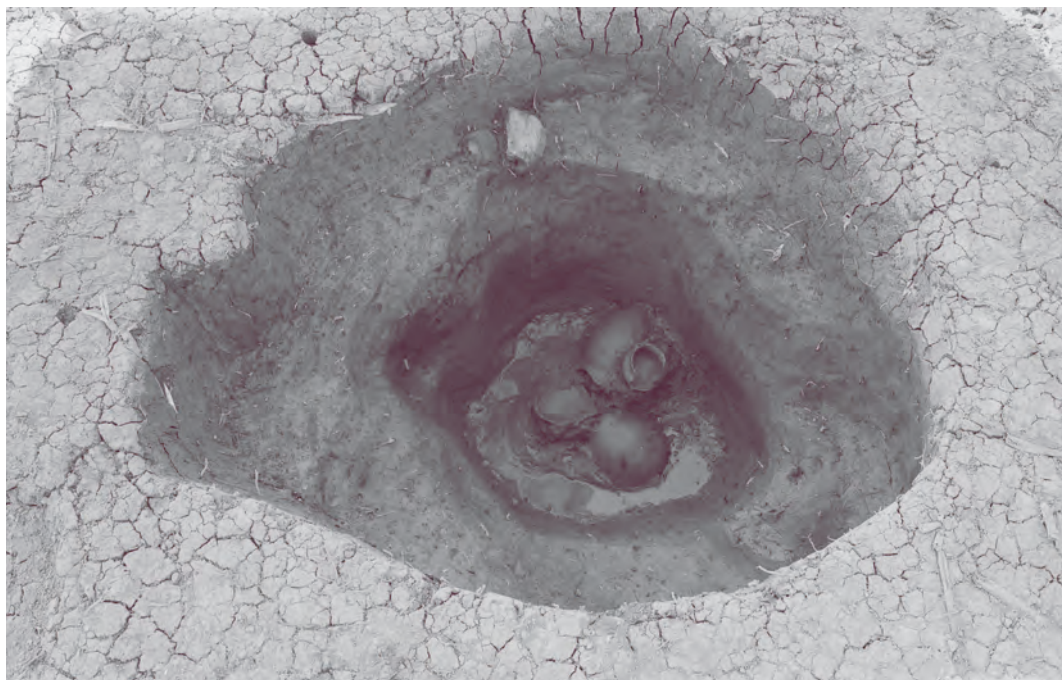
1. I区 48号土坑(南から)



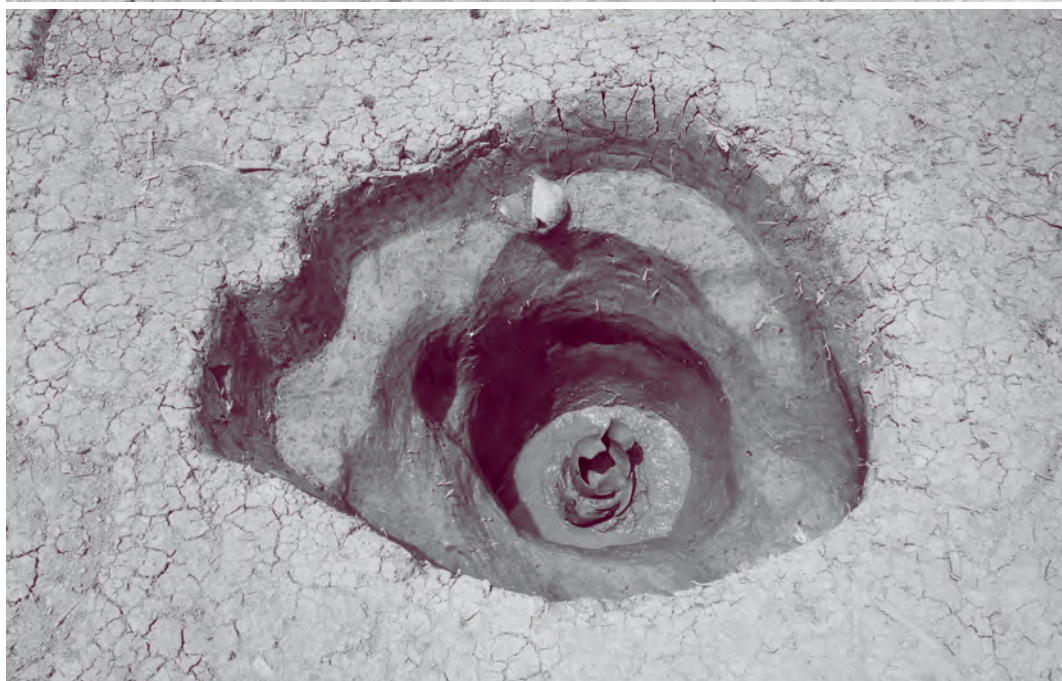
2. I区 49号土坑(北東から)



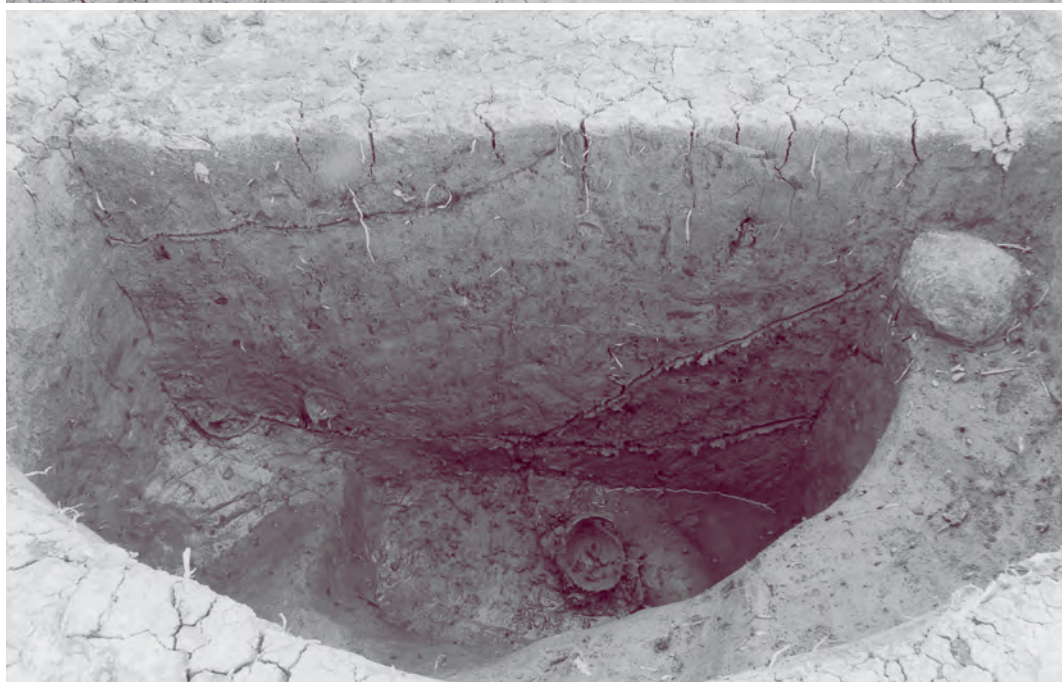
3. I区 49号土坑土層
(東から)



1. I区 50号土坑上層
土器出土状況（東から）



2. I区 50号土坑下層
土器出土状況（東から）



3. I区 50号土坑上層
土層（北から）



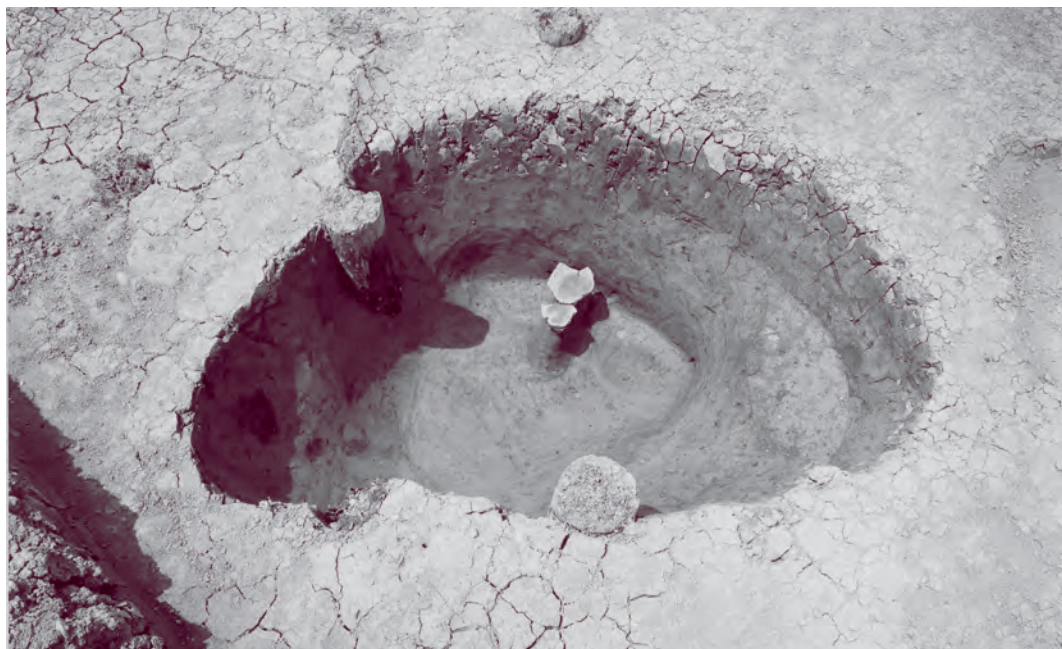
1. I区 51号土坑①(西から)



2. I区 51号土坑②(西から)



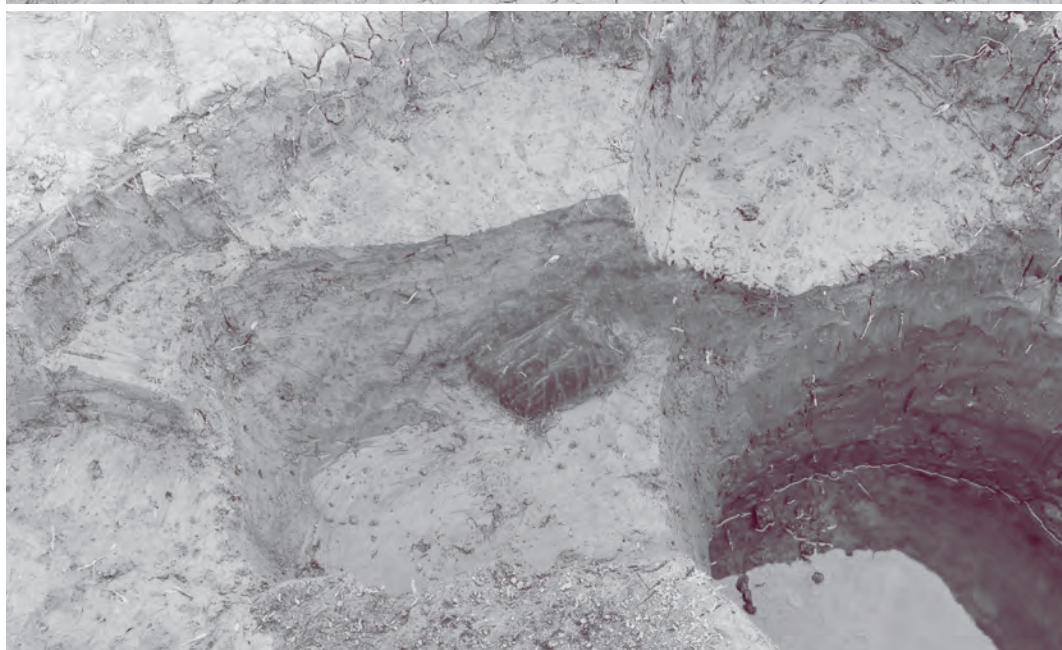
3. I区 51号土坑③(東から)



1. I区 52号土坑(南東から)



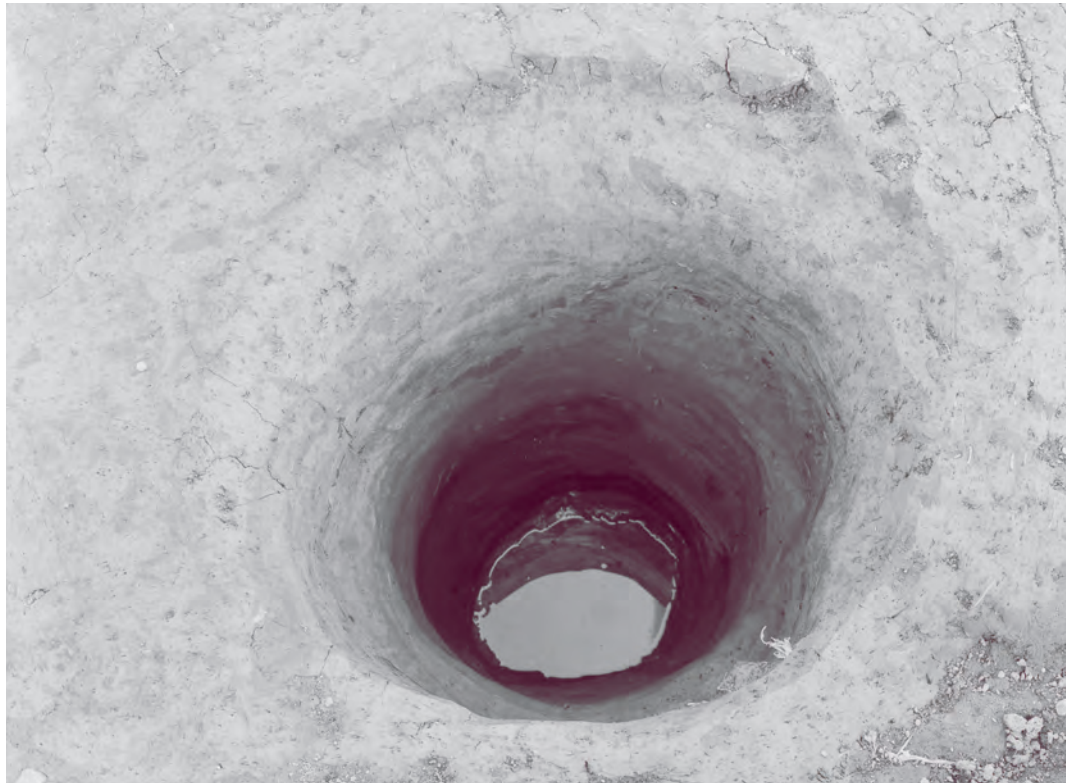
2. I区 53号土坑(北から)



3. I区 53号土坑
木器出土状況(北から)



1. I区 54号土坑(北から)



2. I区 55号土坑(北から)



3. I区 55号土坑土層
(北から)



1. I区1号溝 (南から)



2. I区2・3号溝 (北東から)



3. I区4号溝 (東から)



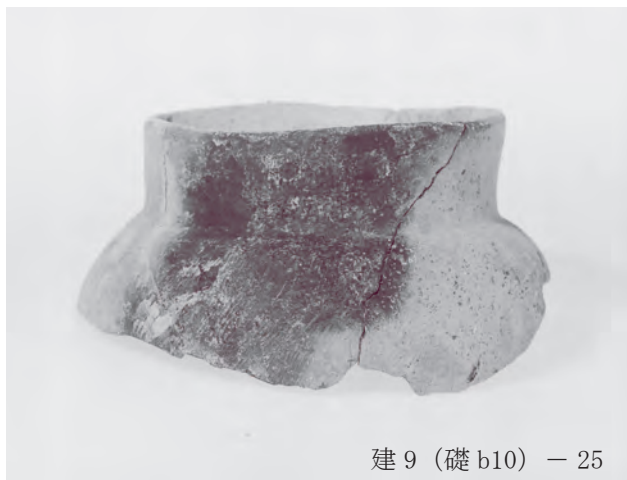
1. I区1号落ち込み
(北から)



2. I区1号落ち込み
(東から)



3. I区1号落ち込み
土層 (北から)





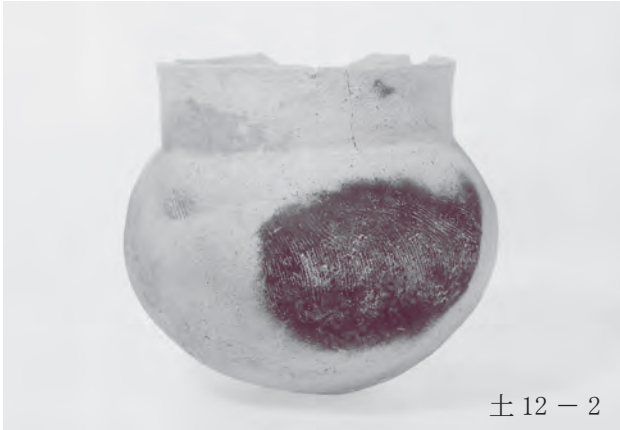
土 12 - 1



土 15 - 23



土 15 - 25



土 12 - 2



土 17 - 1



土 12 - 3



土 17 - 2



土 12 - 9



土 19 - 11



土 19 - 12









土 46 - 7



土 50 - 2



土 49 - 9



土 50 - 5



土 50 - 6

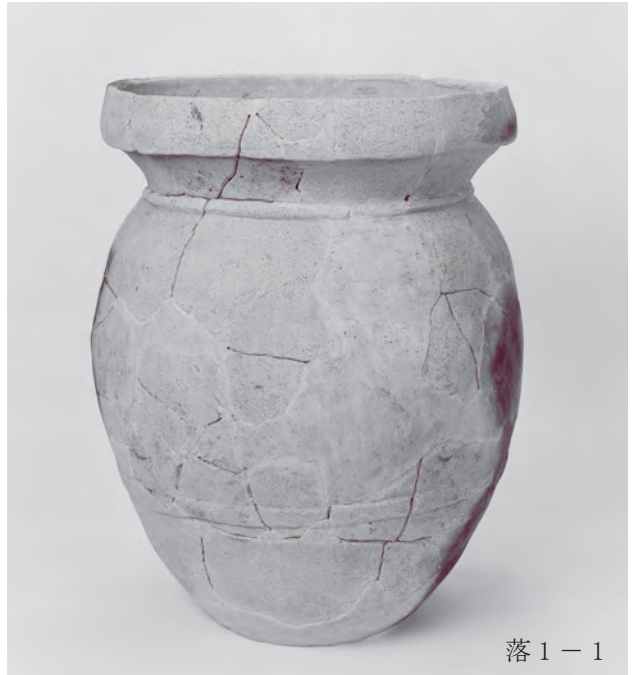


土 50 - 1



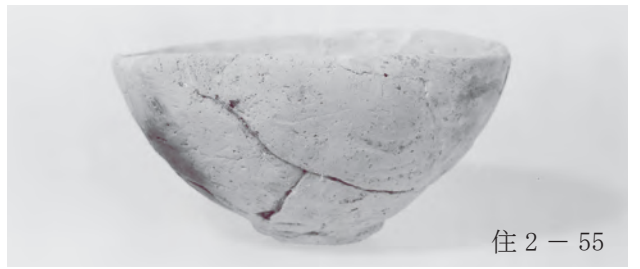
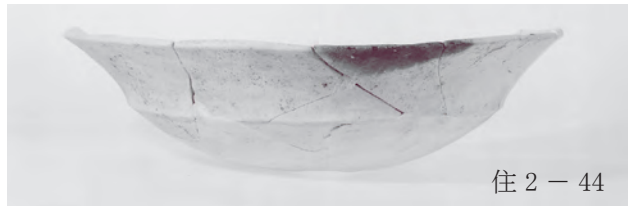
土 50 - 8

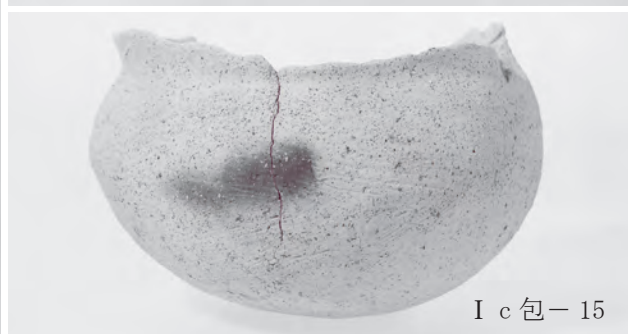


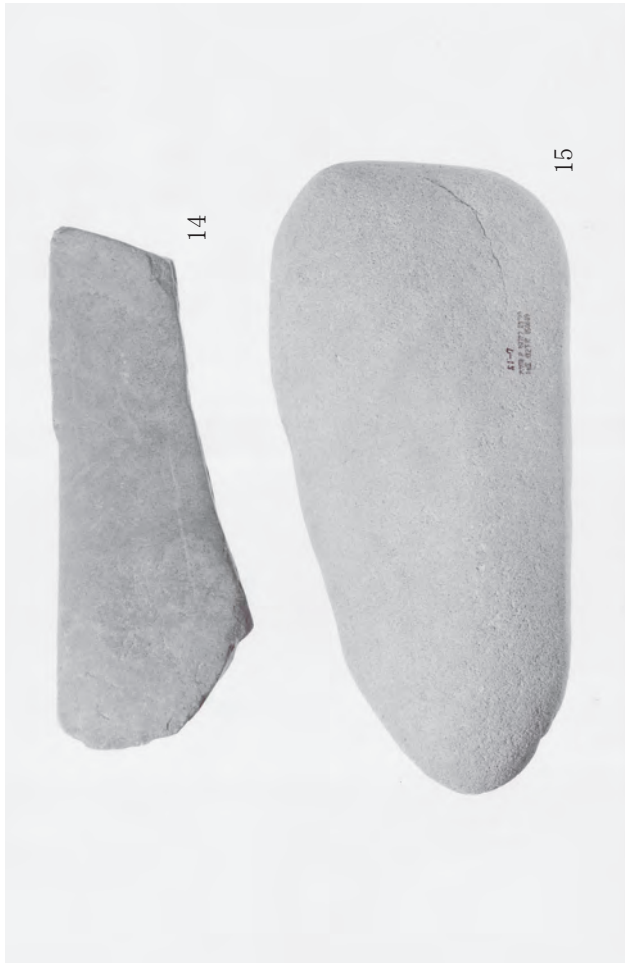
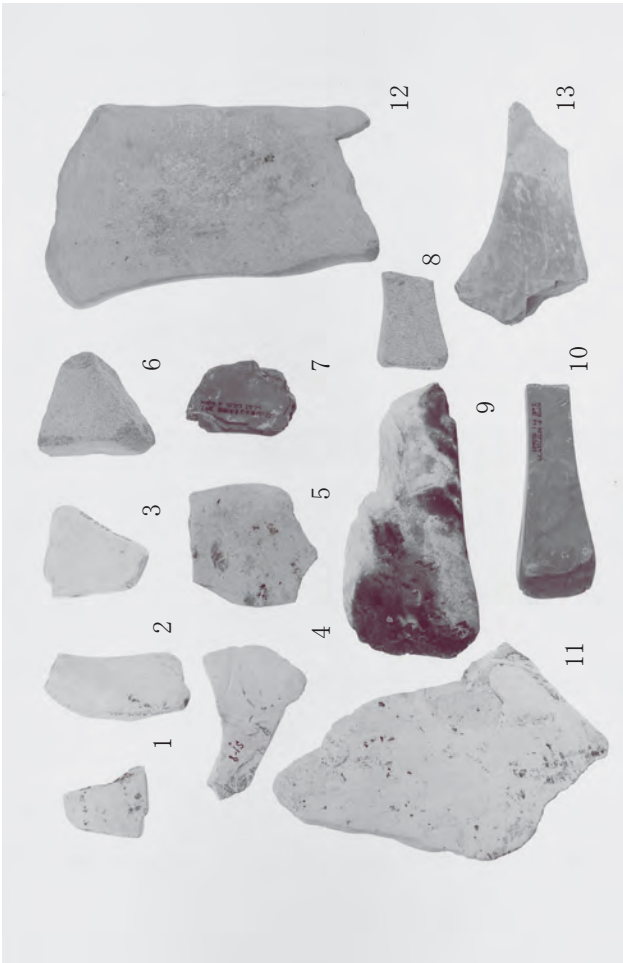
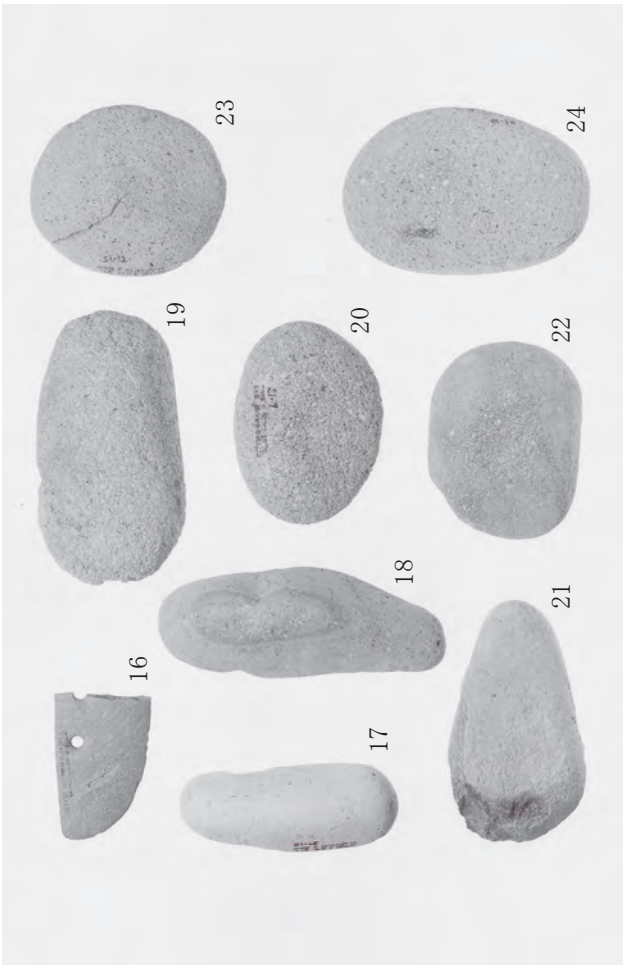


I 区 溝および落ち込み出土土器









1 I区出土石器①
2 I区出土石器②

3 I区出土石器③
4 I区出土石器④

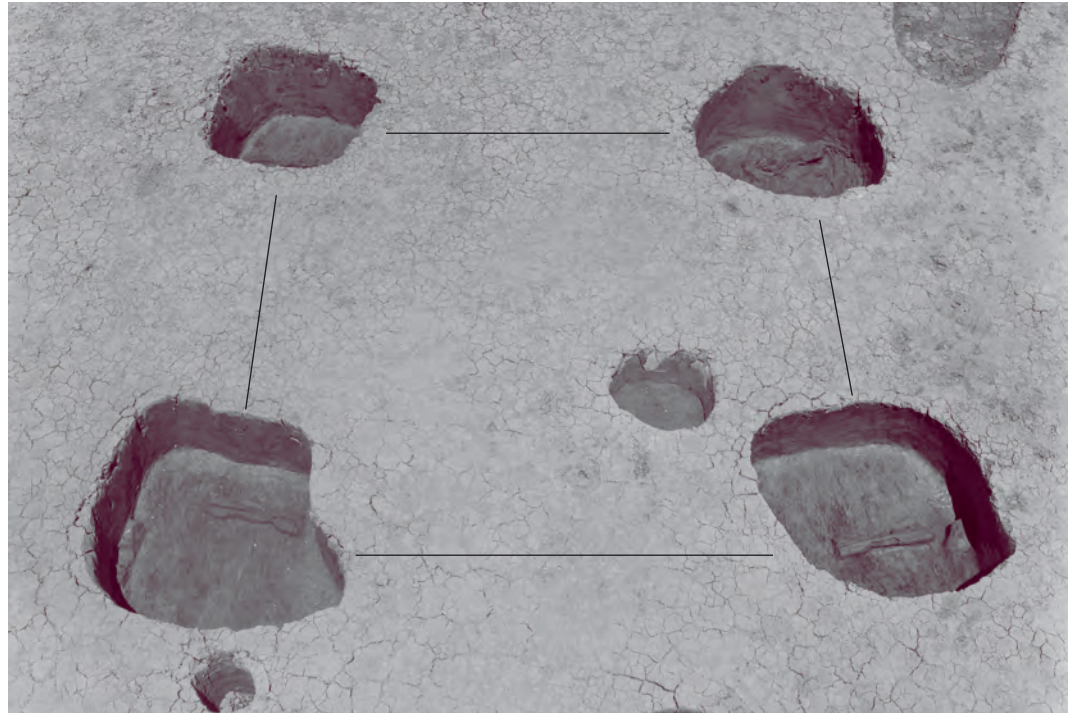


1. II区 遠景（北東から）

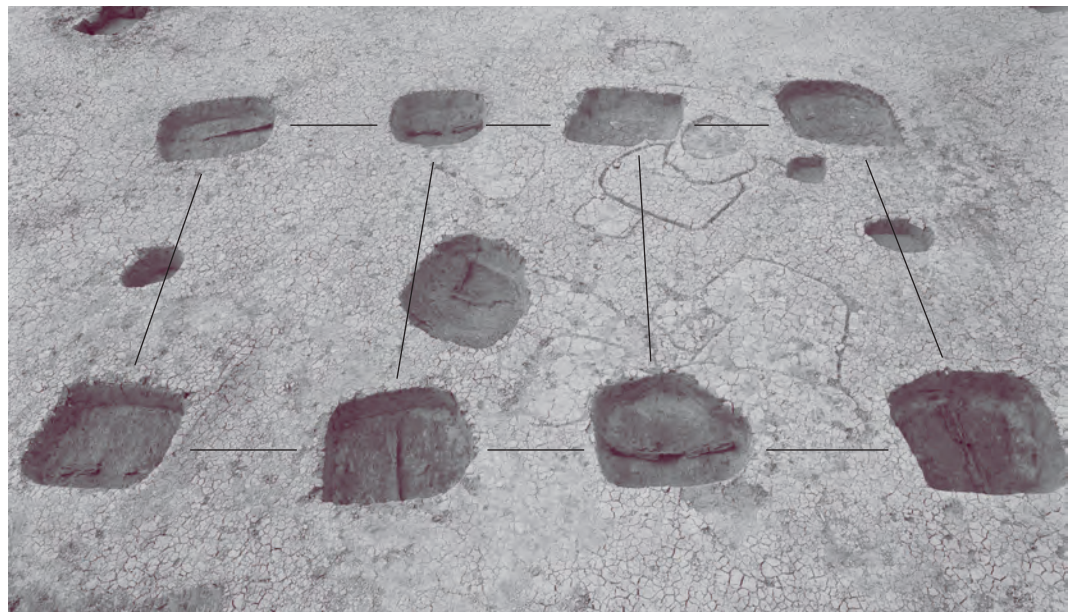


2. II区 全景（上空から）

1. II区 1号掘立柱
建物跡 (南から)



2. II区 2号掘立柱
建物跡 (北から)

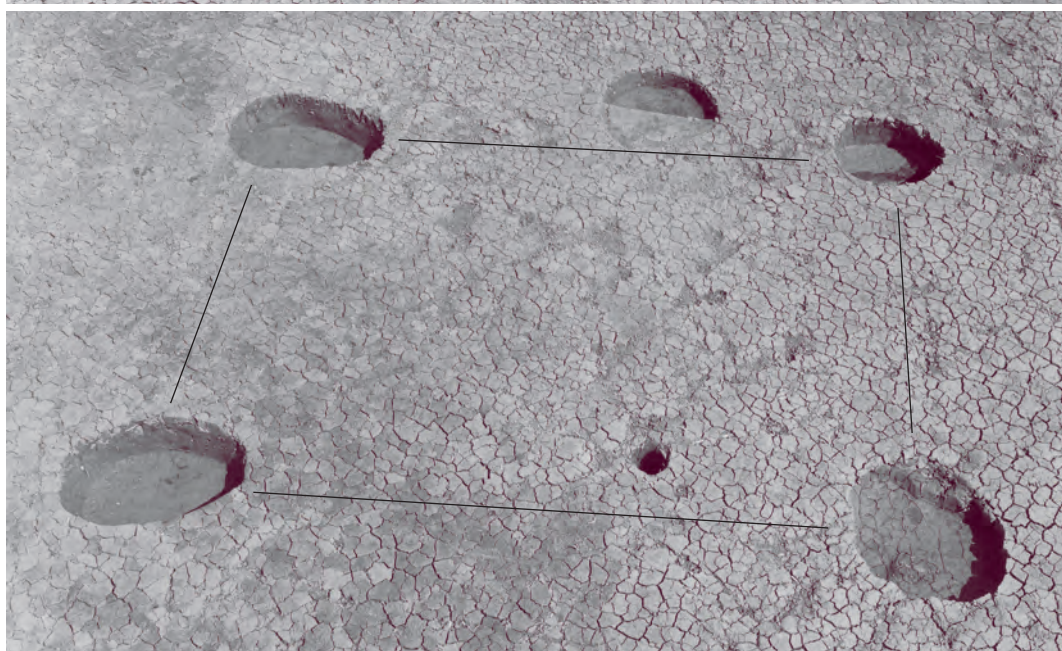


3. II区 2号掘立柱
建物跡柱穴 3
柱痕検出状況 (北から)





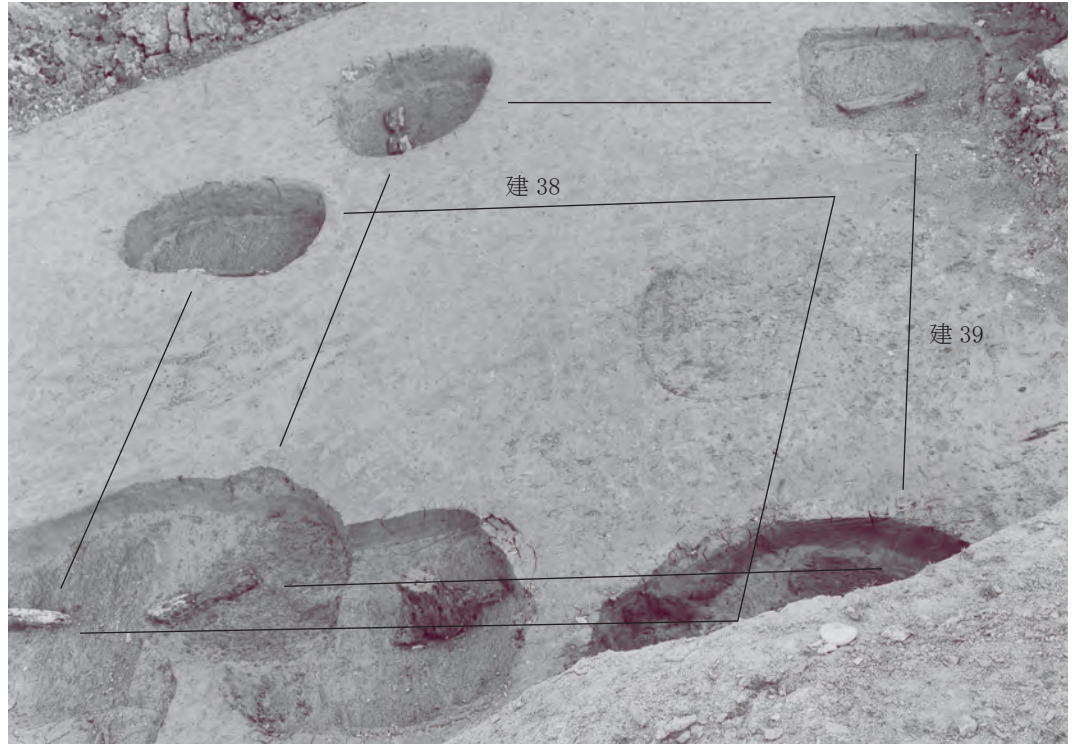
1. II区 3号掘立柱
建物跡 (西から)



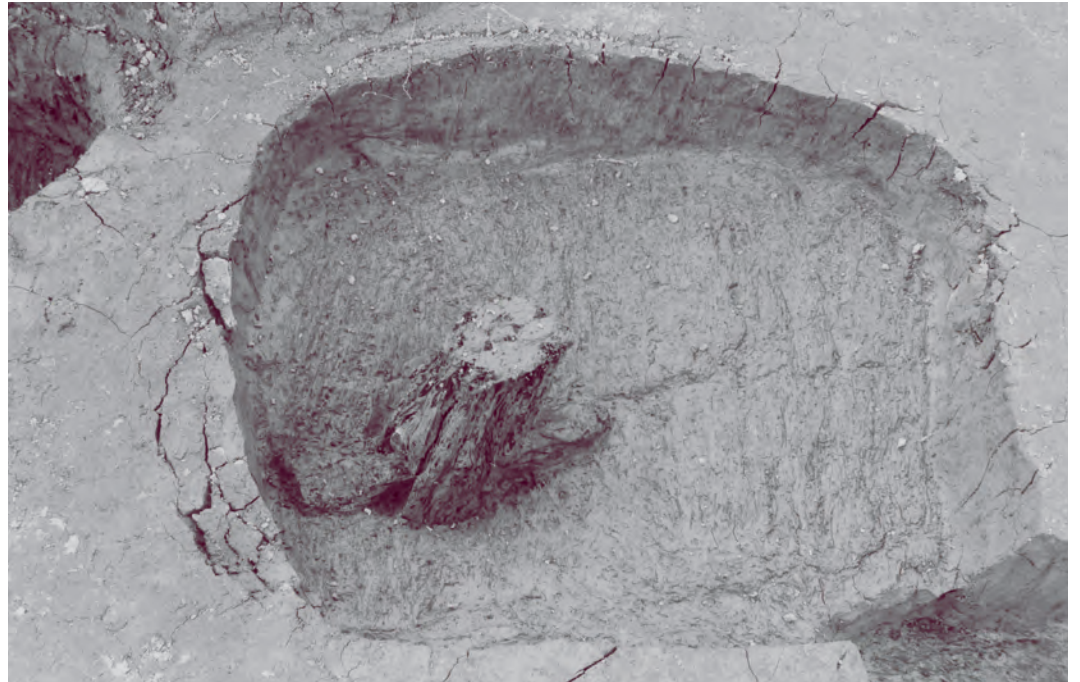
2. II区 4号掘立柱
建物跡 (南から)



3. II区 6号掘立柱
建物跡 (北から)



1. II区 南西隅礎盤
検出状況 (西から)



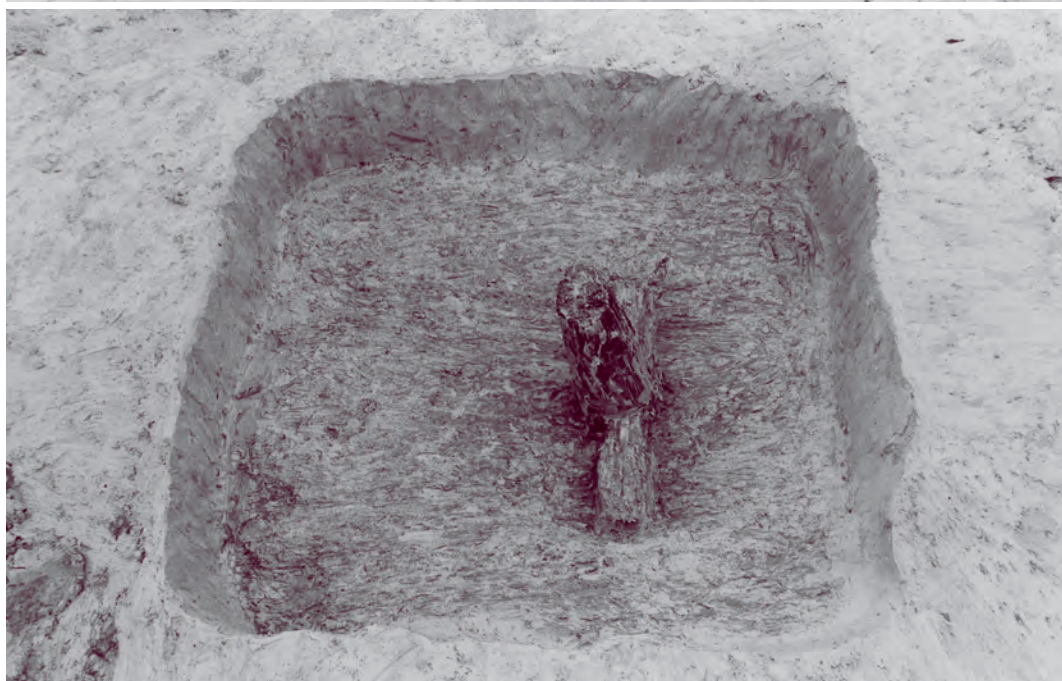
2. II区 礎盤 47
検出状況 (東から)



3. II区 谷底トレンチ礎盤
検出状況 (南から)



1. II区 礎盤 222(東から)

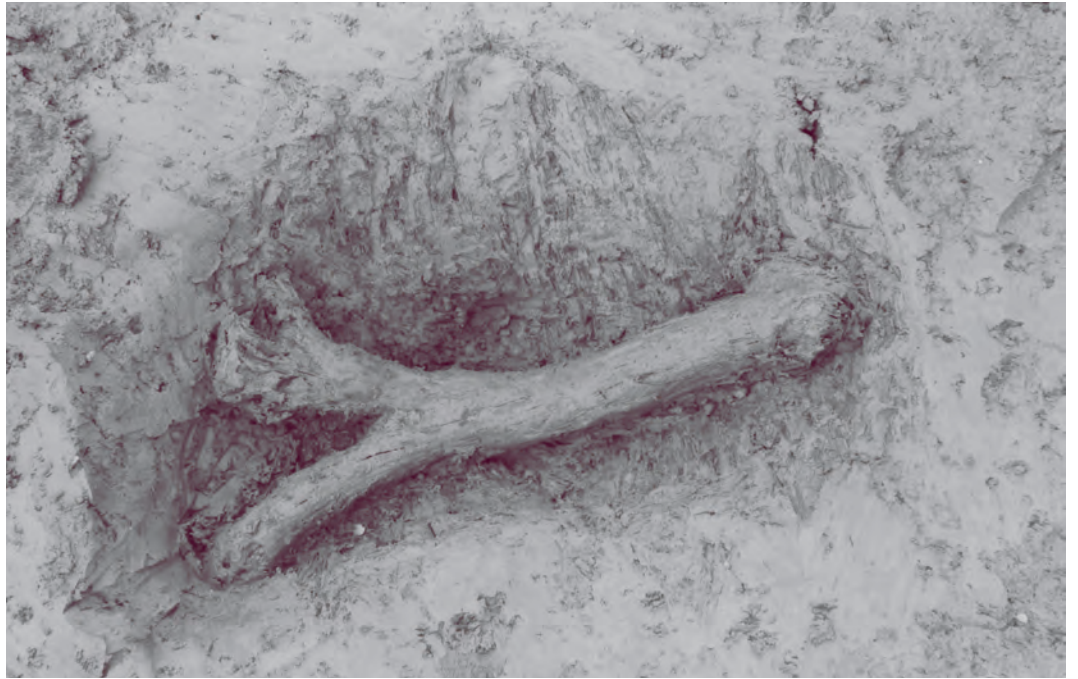


2. II区 10号掘立柱建物跡
礎盤 280 (北から)



3. II区 13号掘立柱建物跡
礎盤 212 (北から)

1. II区 15号掘立柱建物跡
礎盤 141 (南から)



2. II区 25号掘立柱建物跡
礎盤 109 (南から)

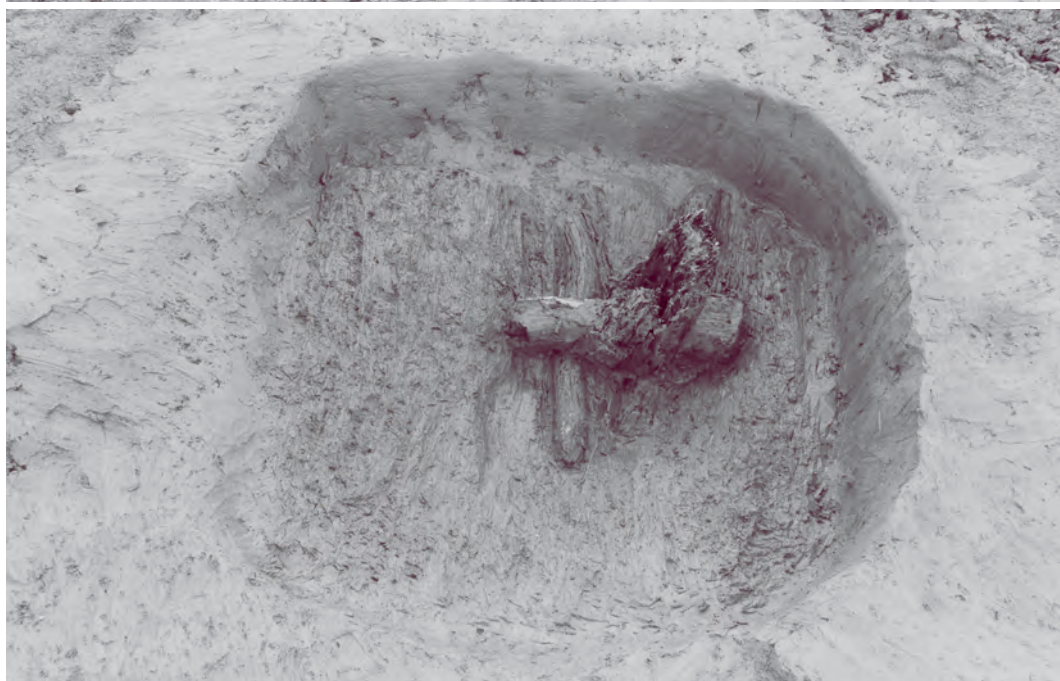


3. II区 25号掘立柱建物跡
礎盤 110 (南から)





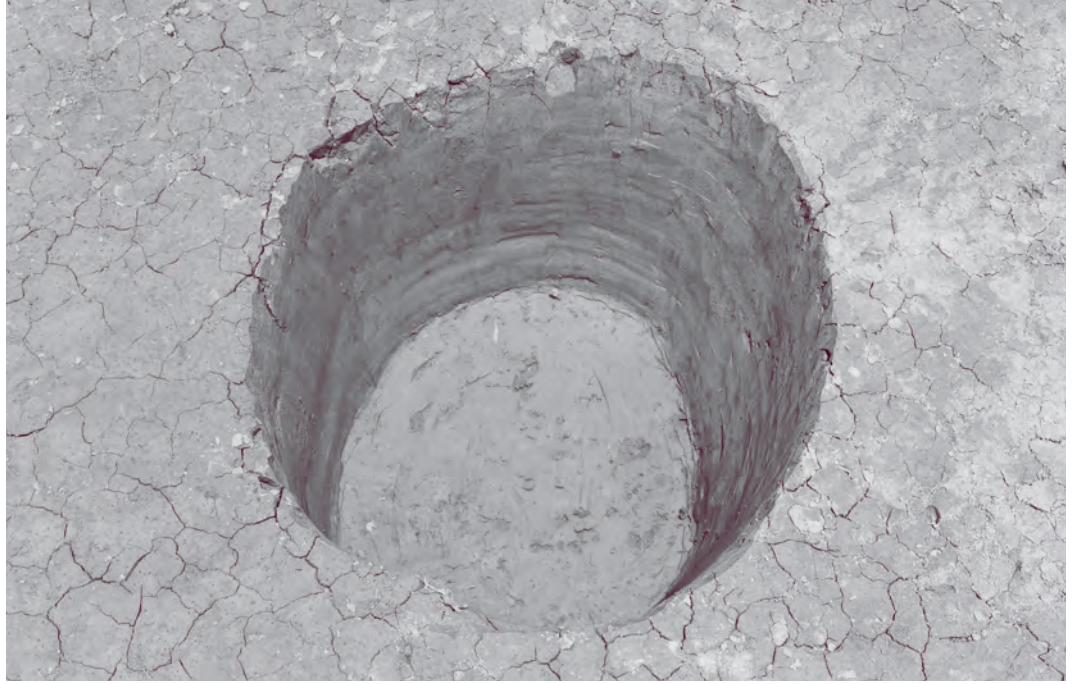
1. II区 25号掘立柱建物跡
礎盤 128 (北から)



2. II区 25号掘立柱建物跡
礎盤 138 (北東から)



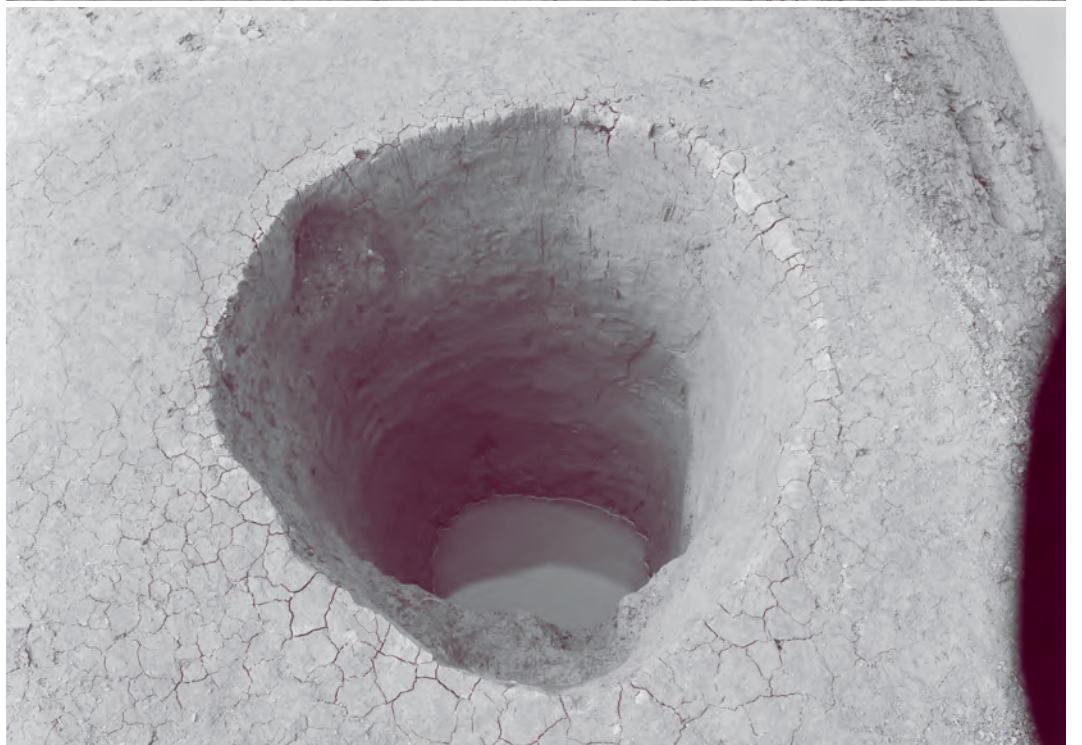
3. II区 45号掘立柱建物跡
礎盤 202 (東から)



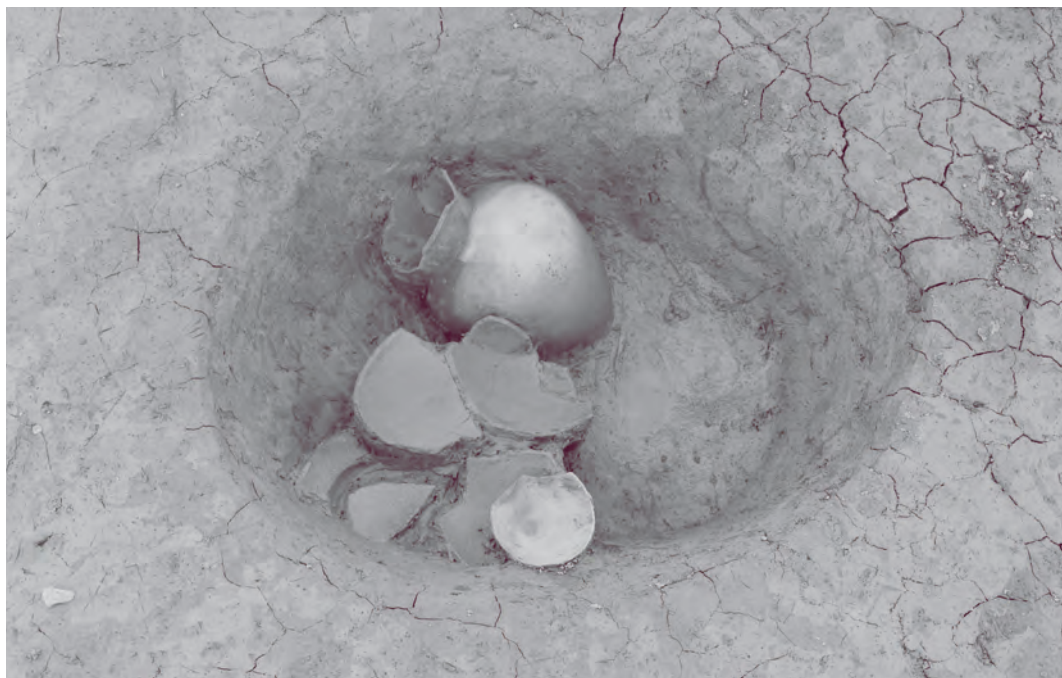
1. II区 1号土坑(南から)



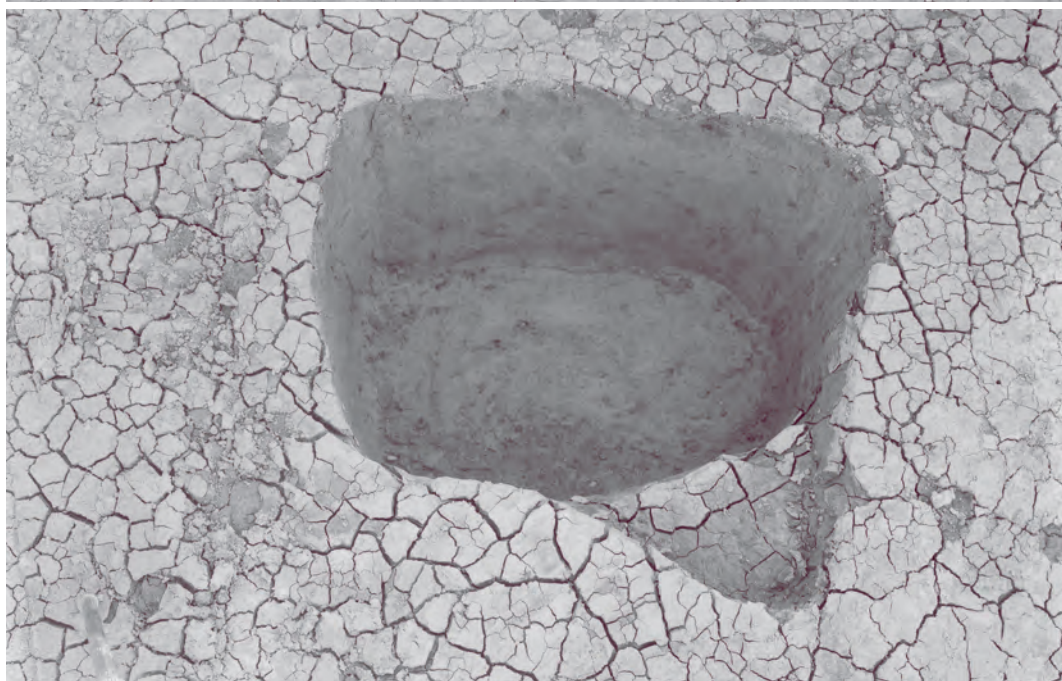
2. II区 2号土坑(北から)



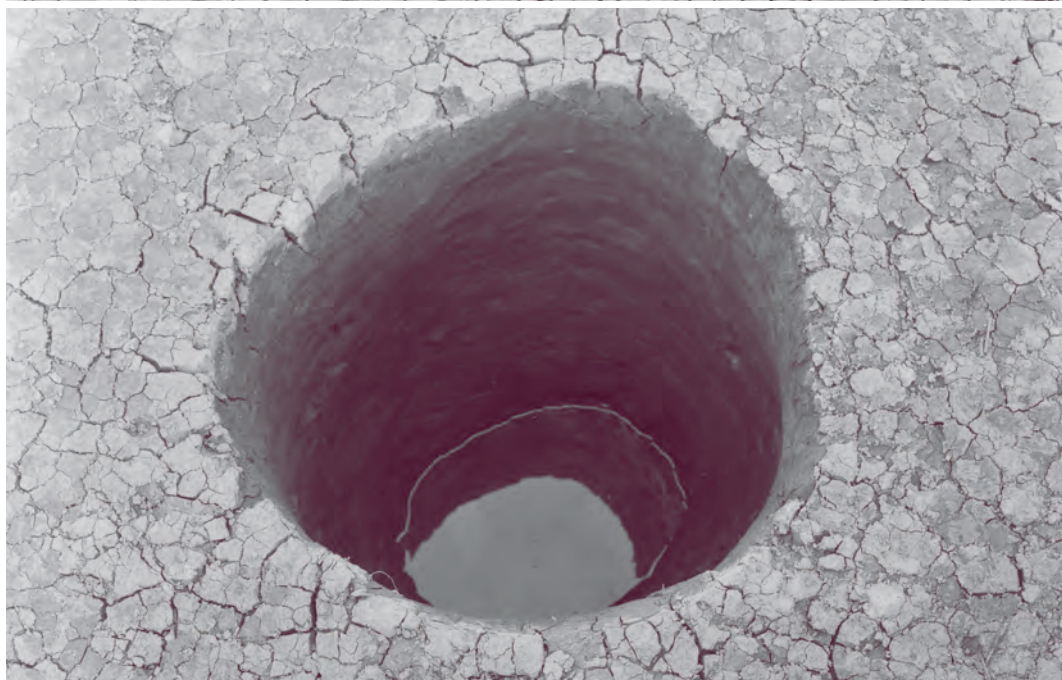
3. II区 3号土坑(南から)



1. II区 4号土坑(東から)



2. II区 6号土坑(東から)



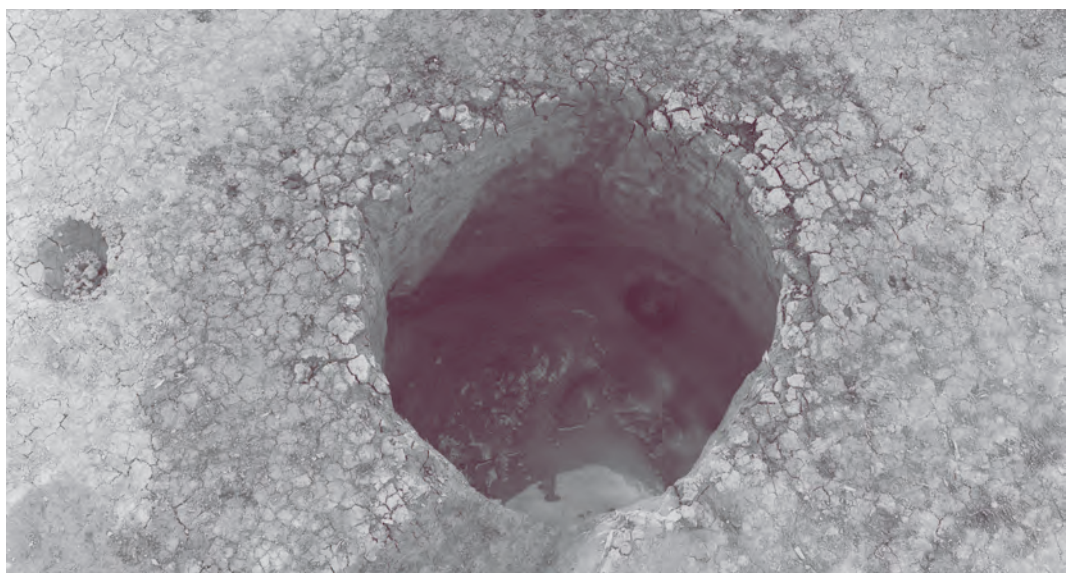
3. II区 7号土坑(西から)



1. II区 8号土坑(北西から)



2. II区 9号土坑(北から)



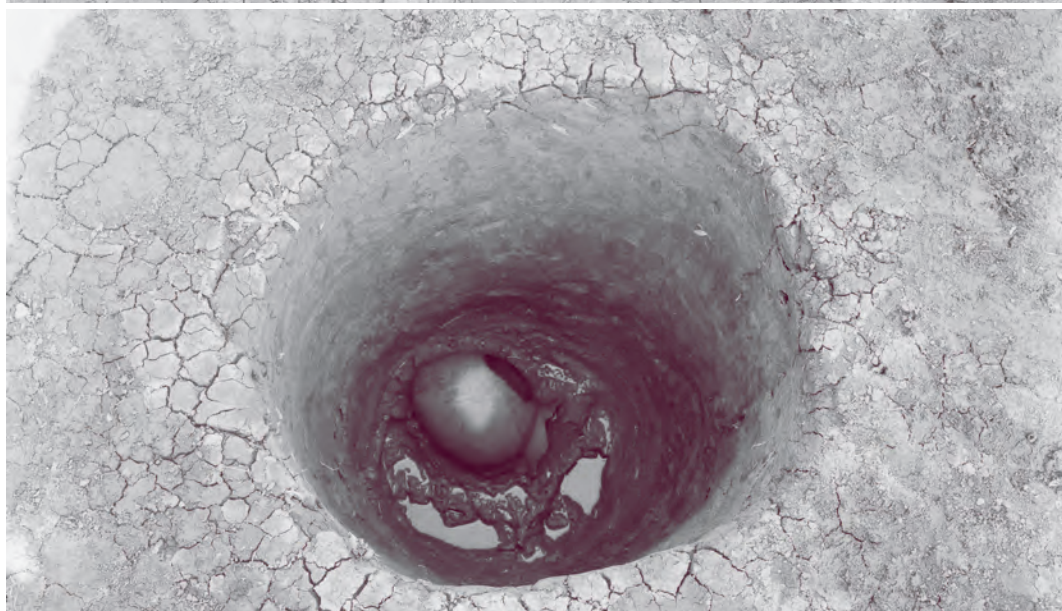
3. II区 10号土坑(北から)



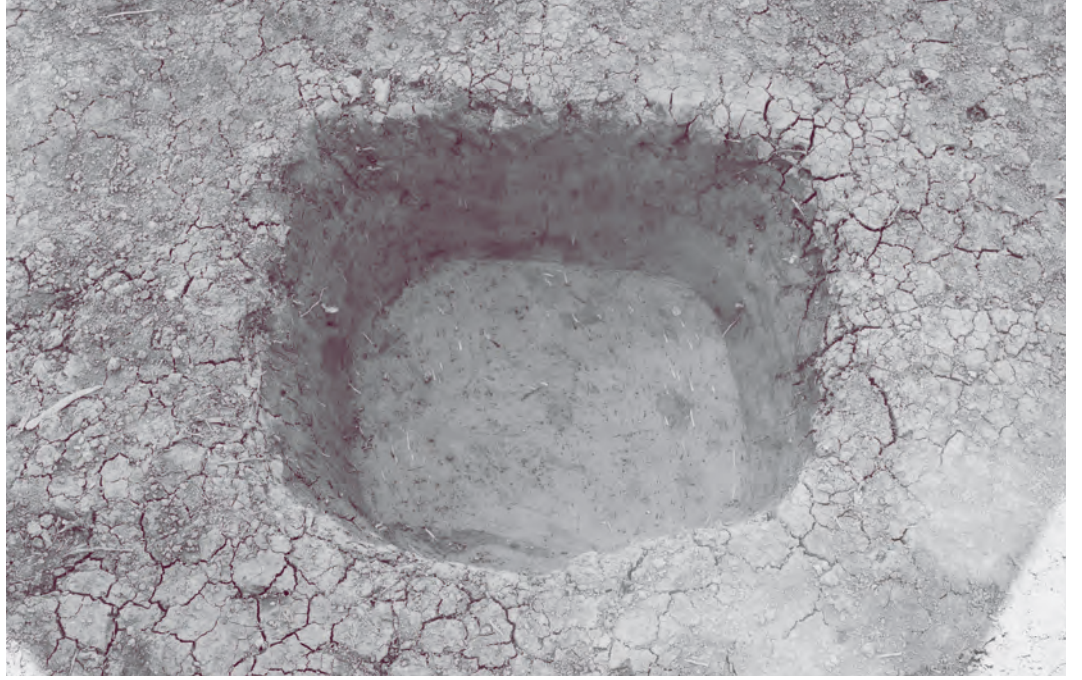
1. II区 11号土坑上部土器
検出状況（北から）



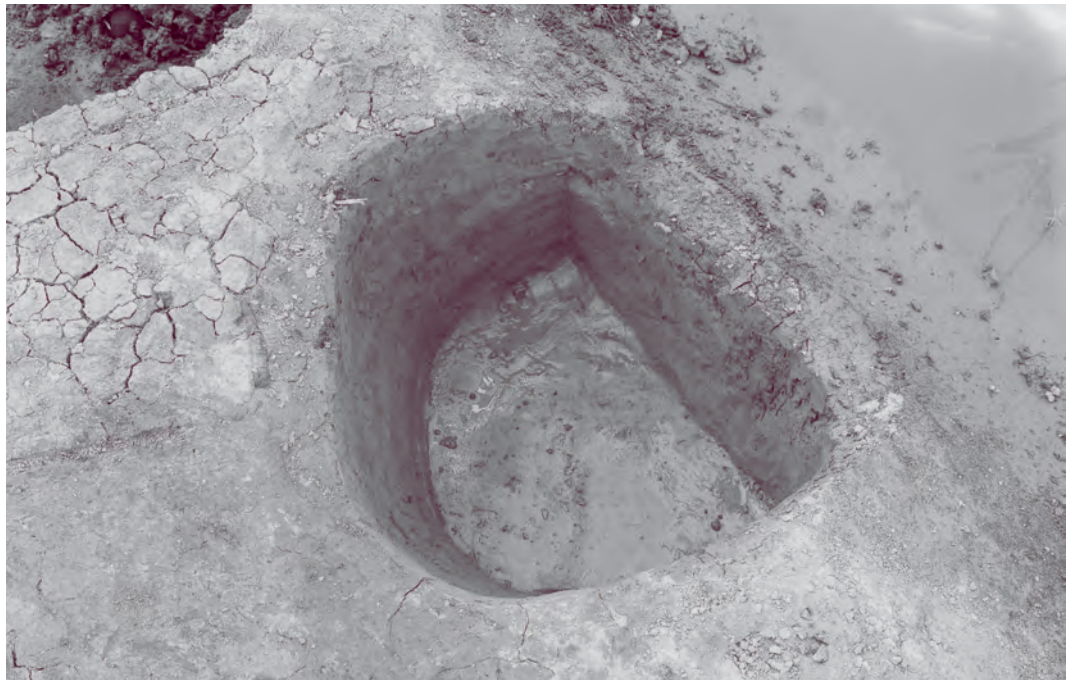
2. II区 11号土坑(北から)



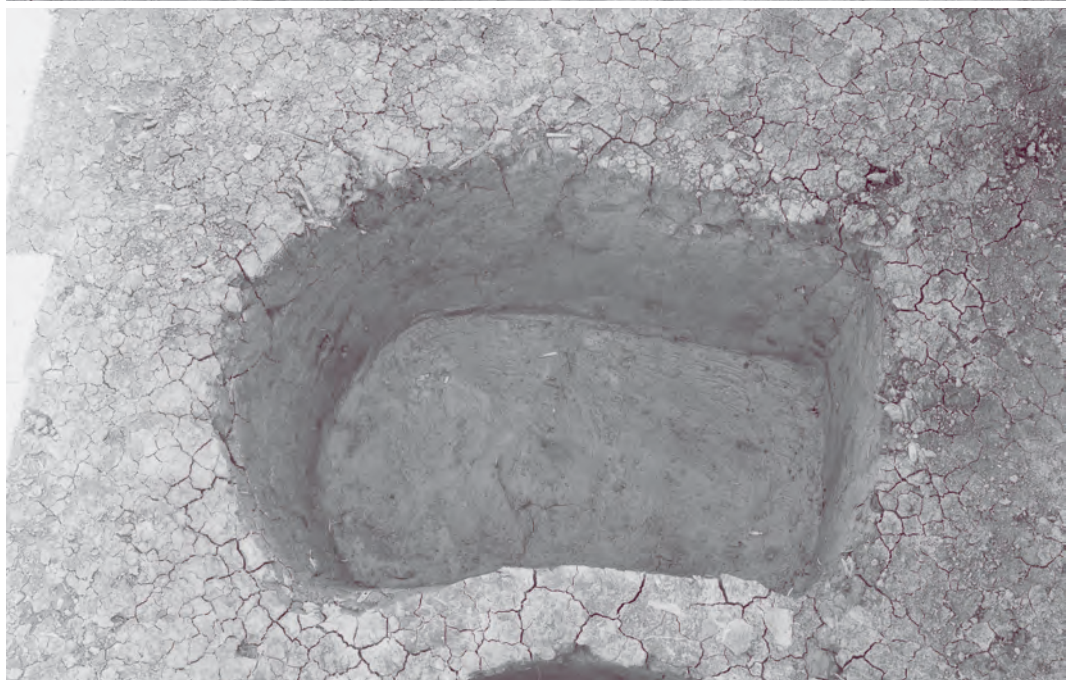
3. II区 12号土坑(西から)



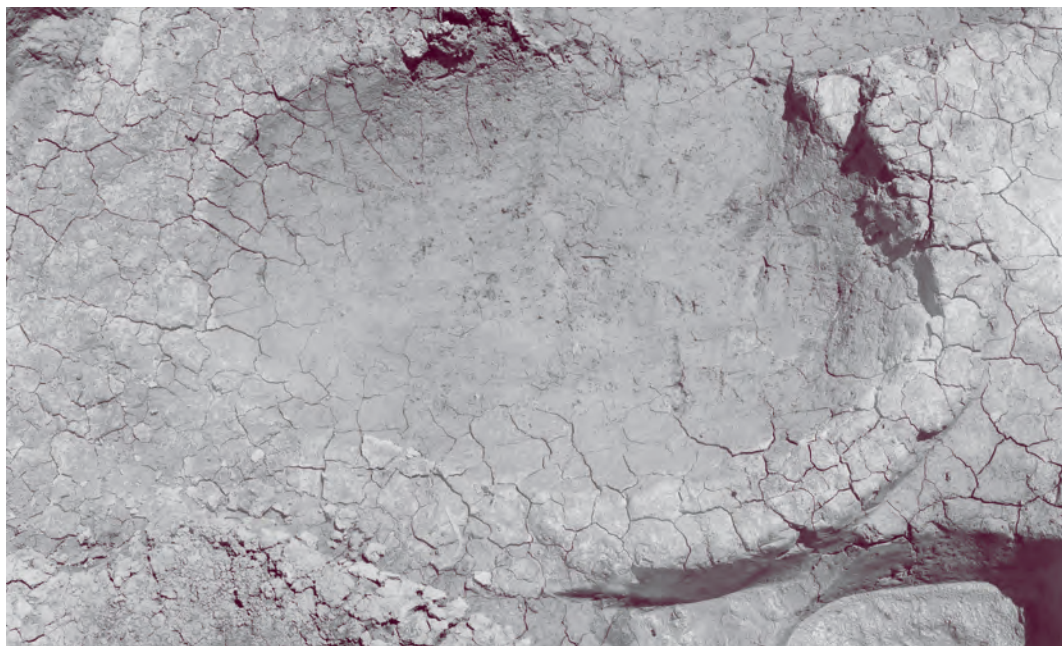
1. II区 13号土坑(北から)



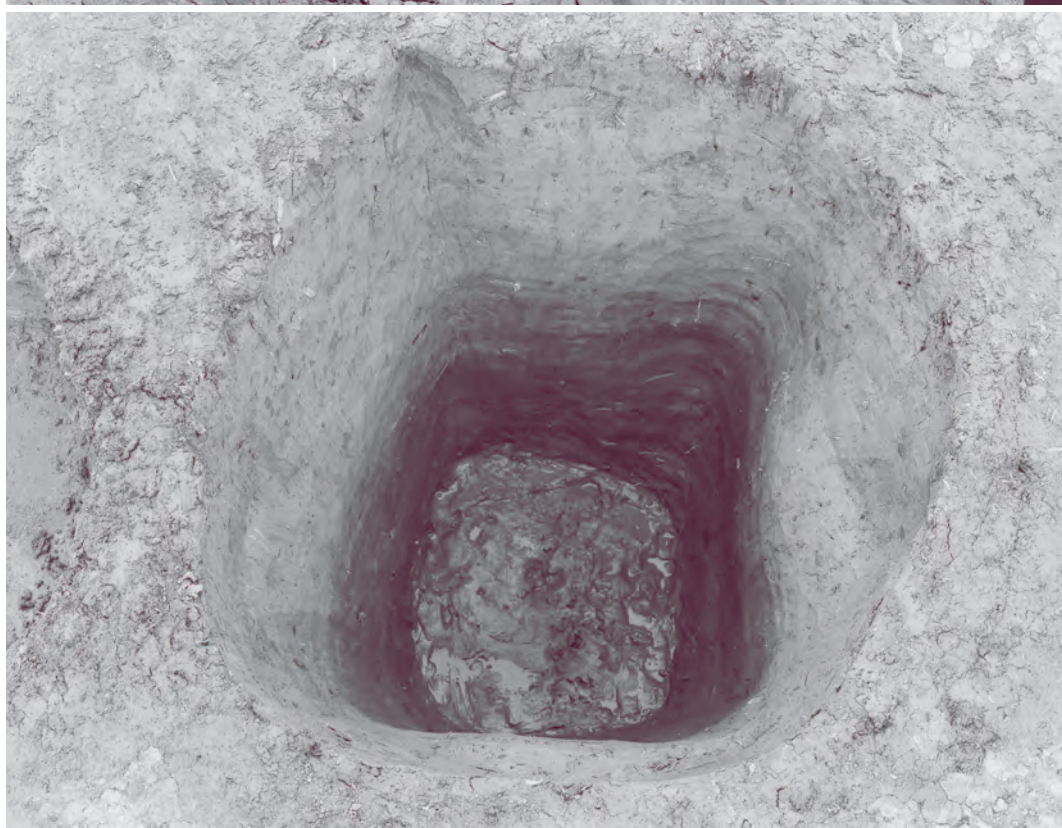
2. II区 14号土坑(東から)



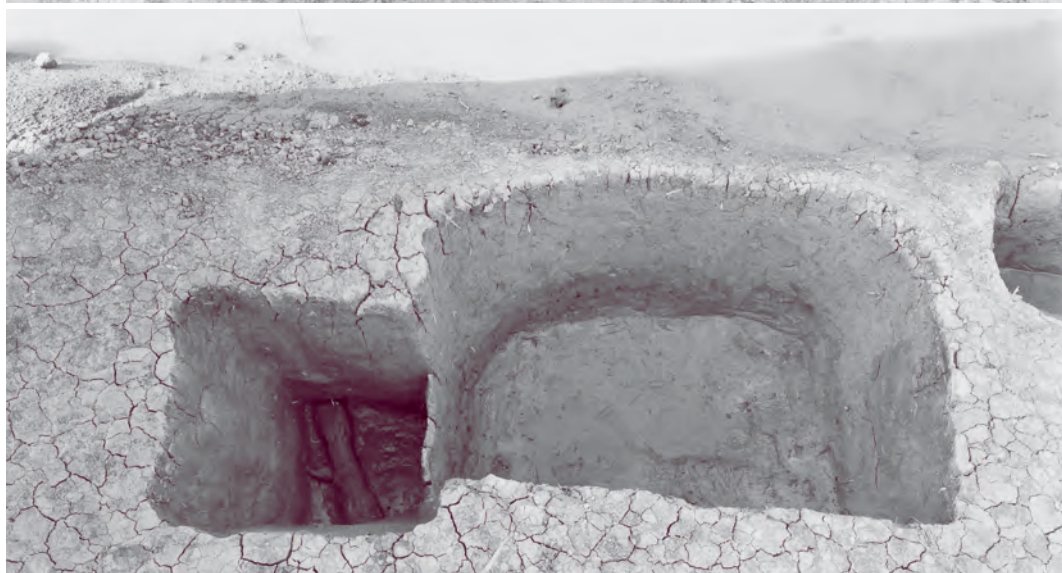
3. II区 15号土坑(東から)



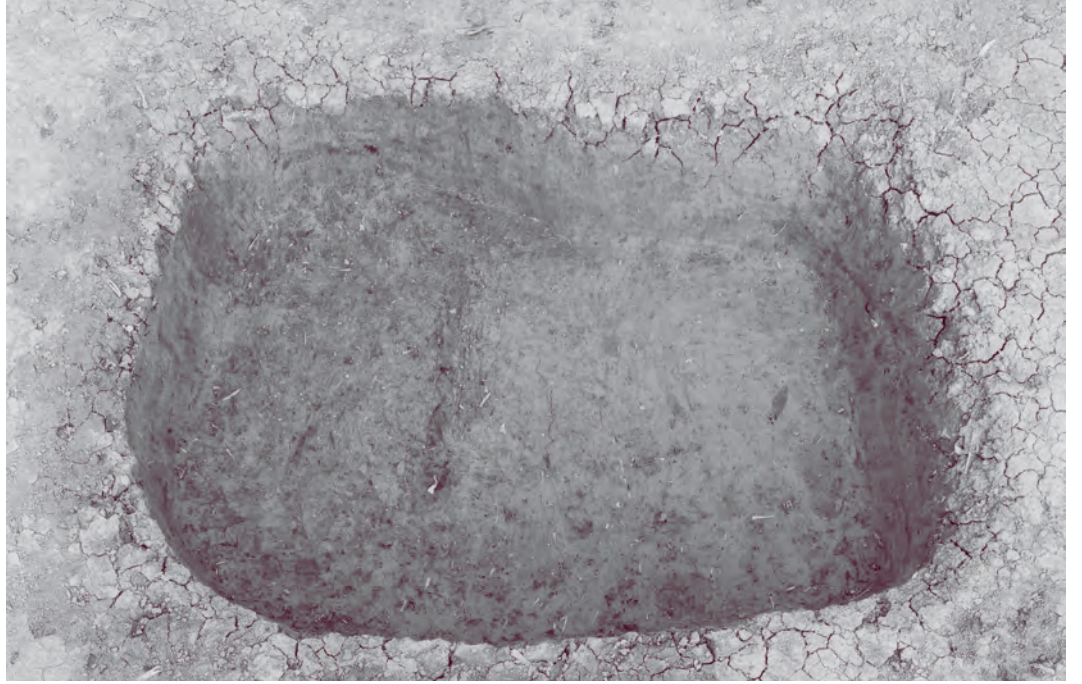
1. II区 16号土坑(西から)



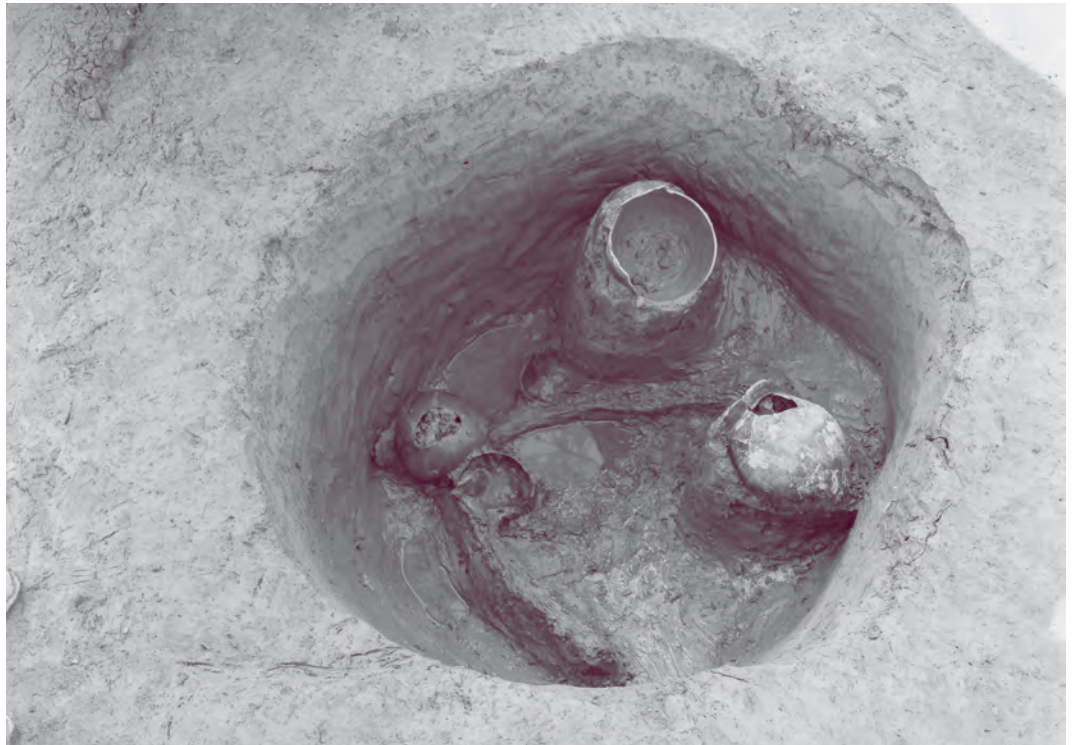
2. II区 17号土坑(東から)



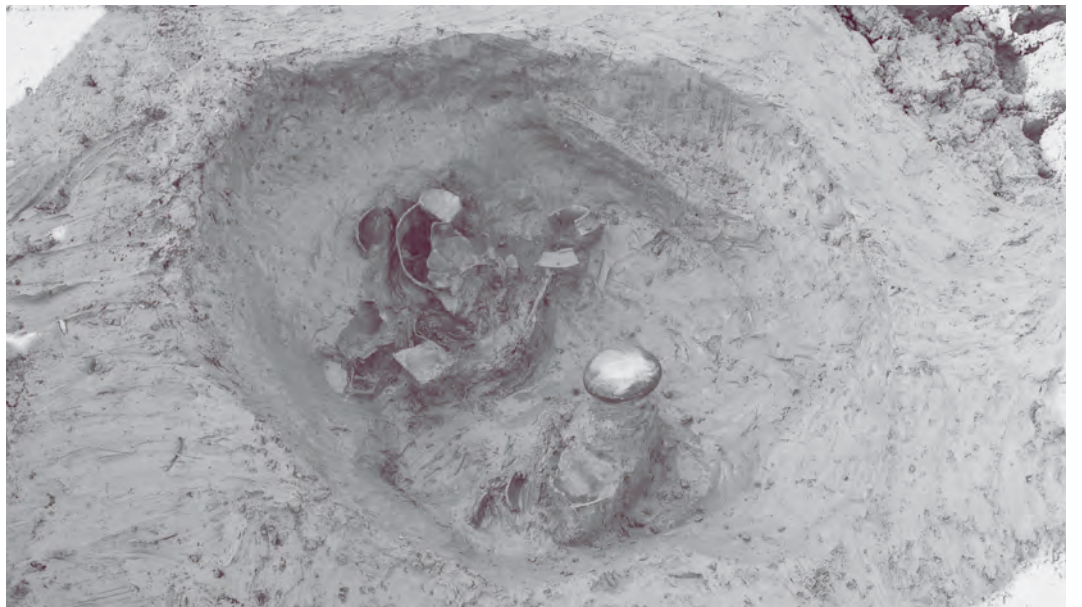
3. II区 18・19号土坑
(南から)



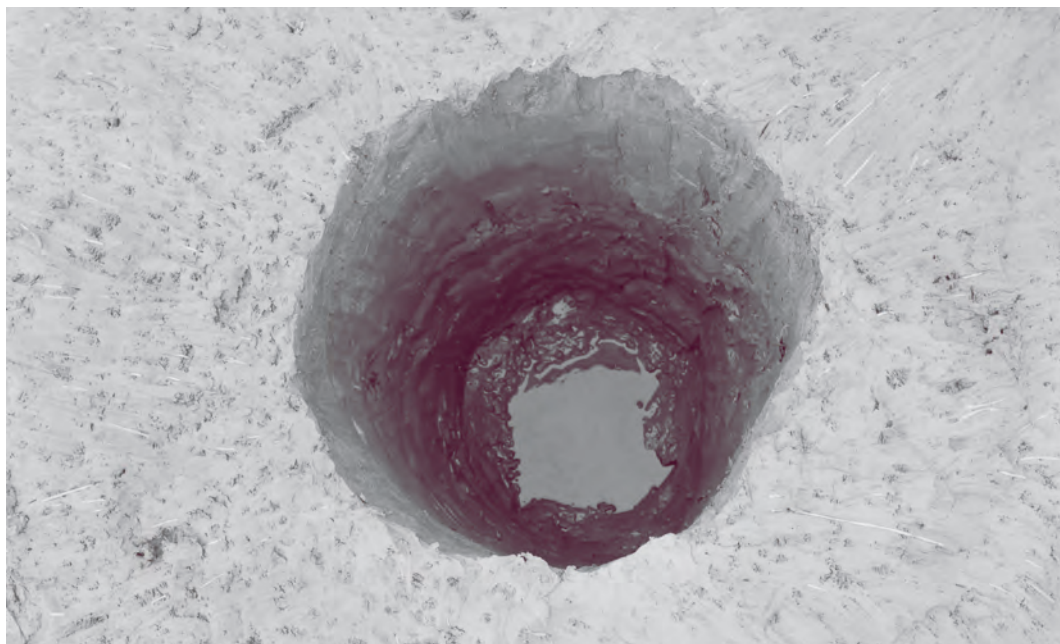
1. II区 20号土坑(西から)



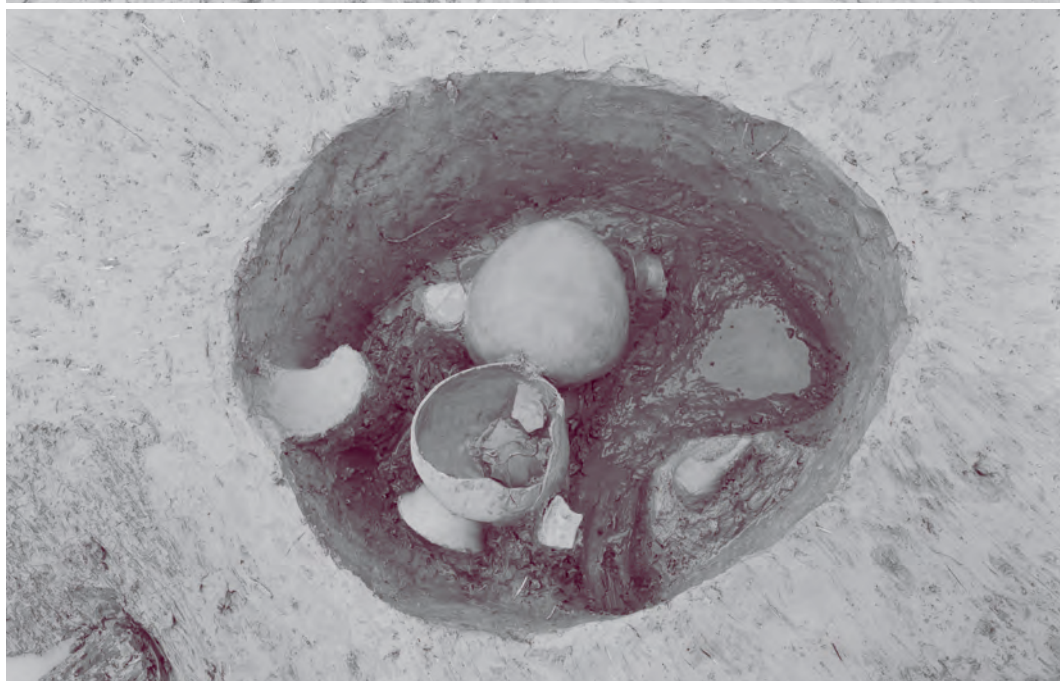
2. II区 21号土坑(北から)



3. II区 22号土坑(東から)



1. II区 23号土坑(南から)



2. II区 24号土坑(東から)



3. II区 25号土坑(北から)



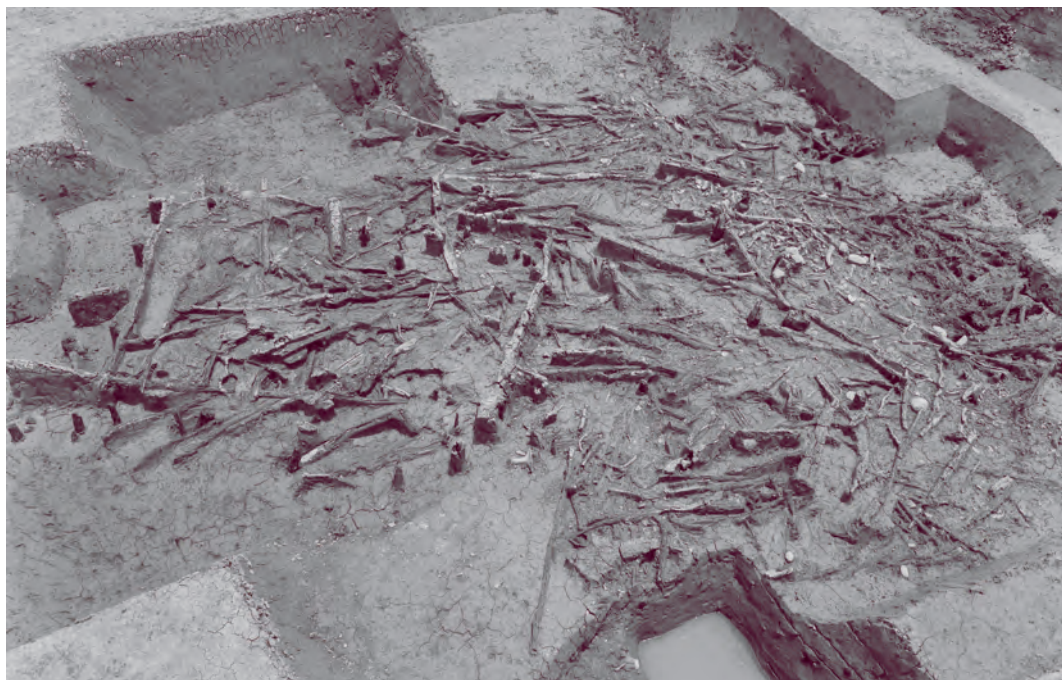
1. II区 1号溝 (南から)



2. II区 4号落ち込み
(南西から)



3. II区 5号落ち込み
(西から)



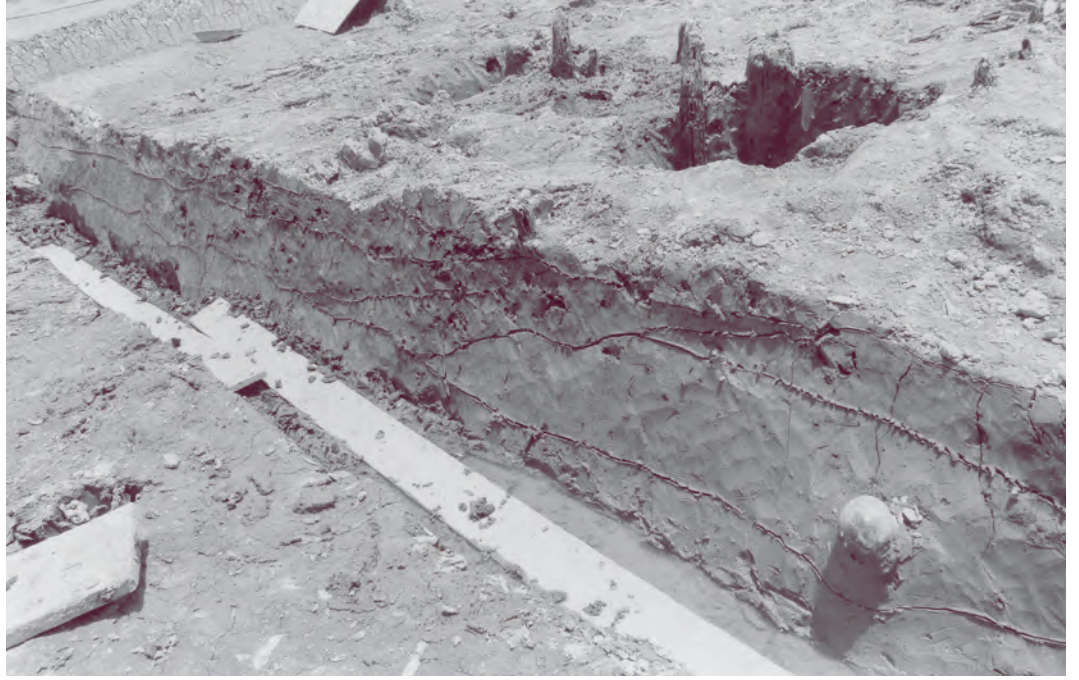
1. II区 木質集中部
(西から)



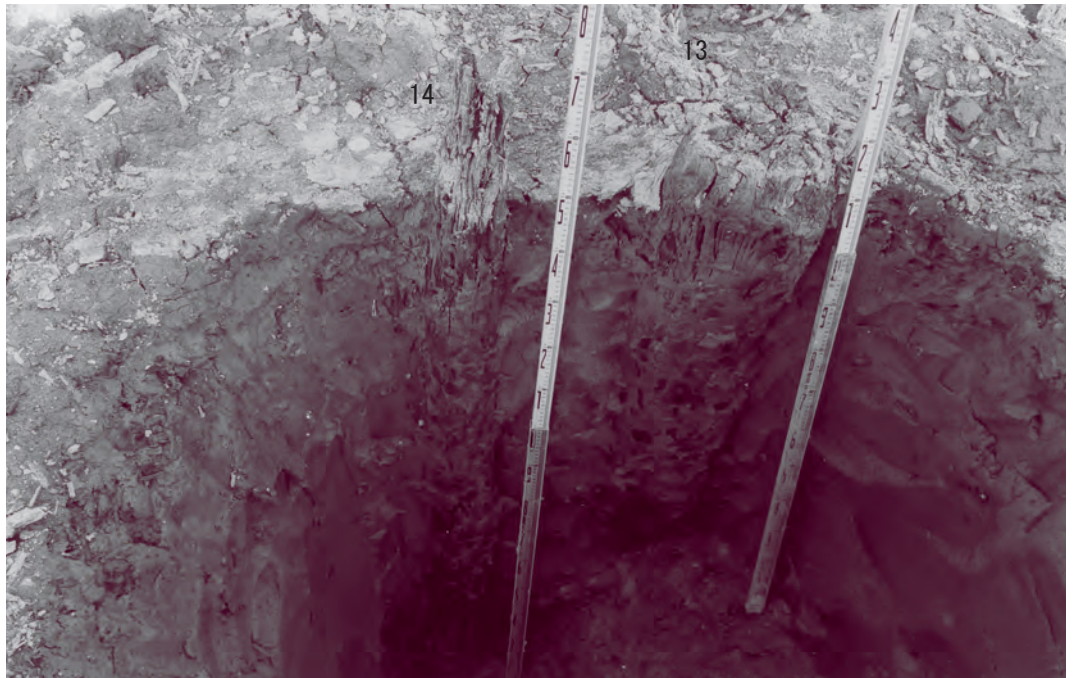
2. II区 木質集中部
(北から)



3. II区 木質集中部樹皮
検出状況 (西から)



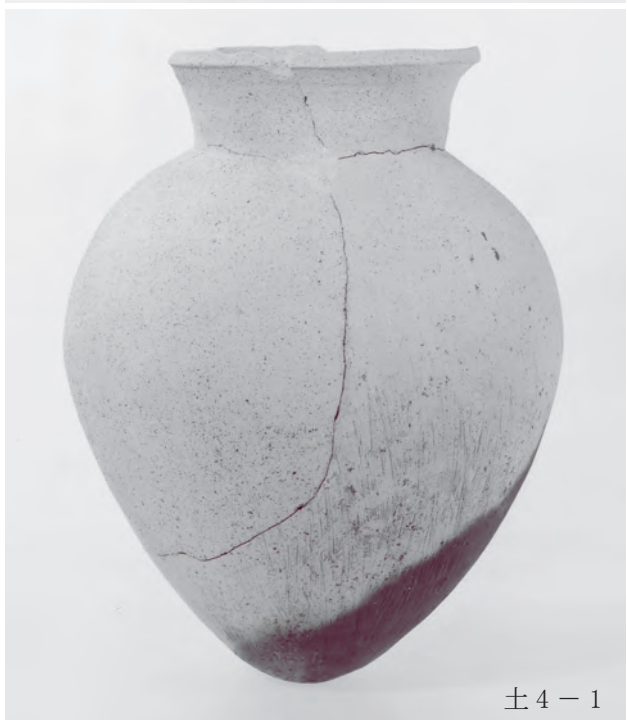
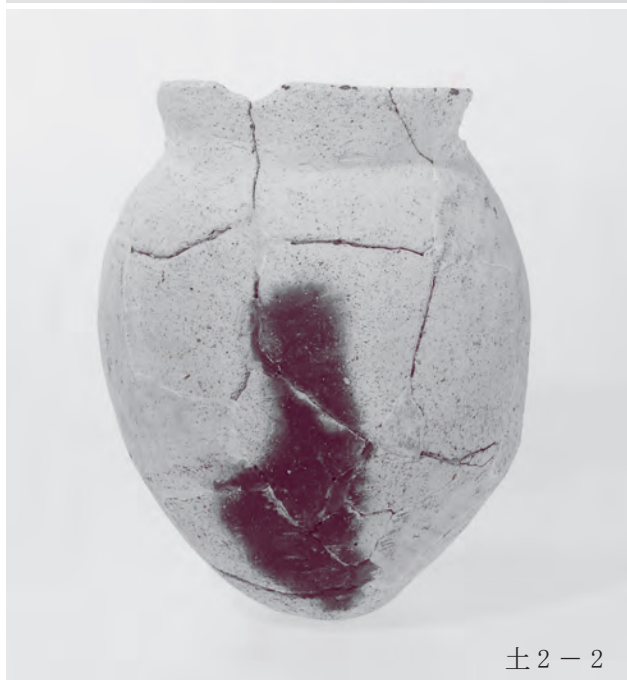
1. II区 木質集中部土層
(南西から)



2. II区 木質集中部大型杭
下部確認状況 (北から)



3. II区 木質集中部小型杭
下部確認状況 (西から)





土 4-5



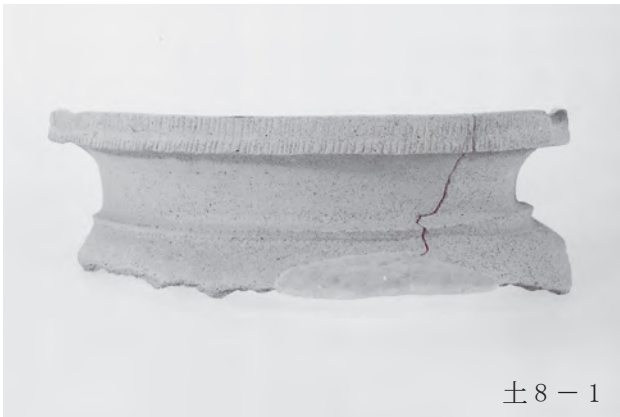
土 8-9



土 4-12



土 8-17



土 8-1



土 9-1



土 8-8



土 10-2

II 区 土坑出土土器①





土 22 - 1



土 24 - 2



土 22 - 5



土 24 - 5



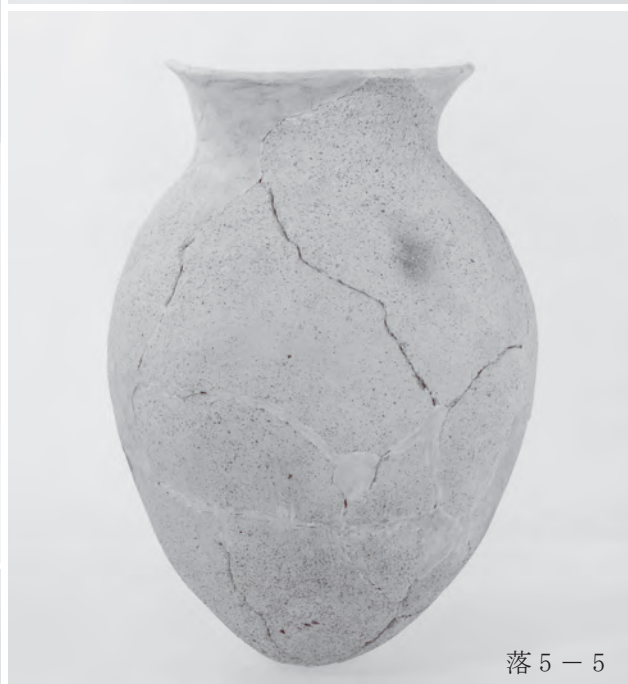
土 22 - 6



土 24 - 9



土 24 - 1

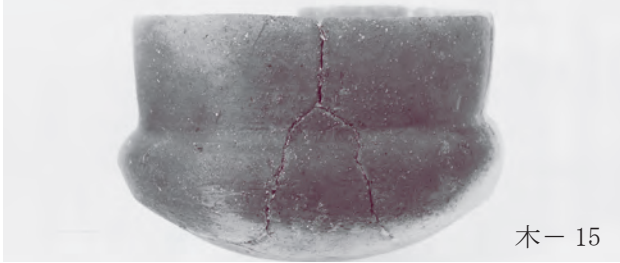




木-9



木-57



木-15



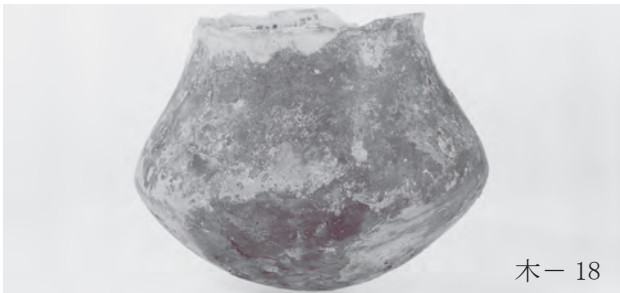
木-59



木-16



木-64



木-18



木-65



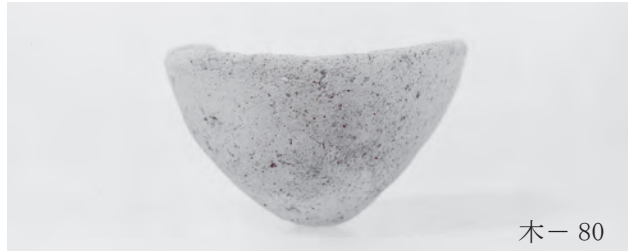
木-30



木-67



木-48



木-80



トレ 1-4



その他-5



トレ 1-5



その他-16



トレ 3-9



その他-17



トレ 3-23



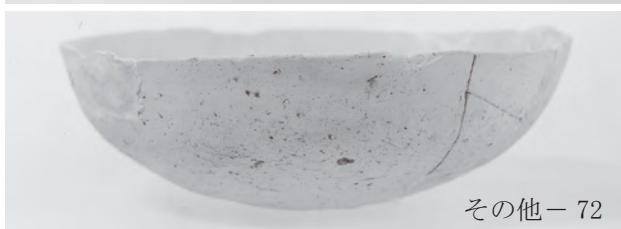
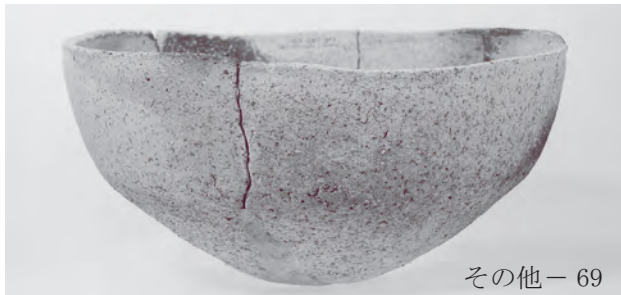
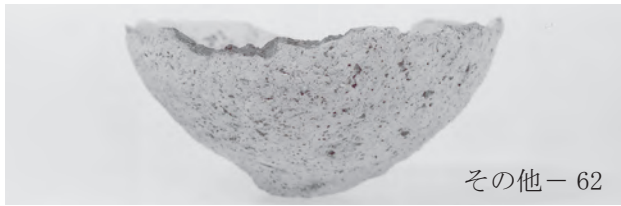
その他-23

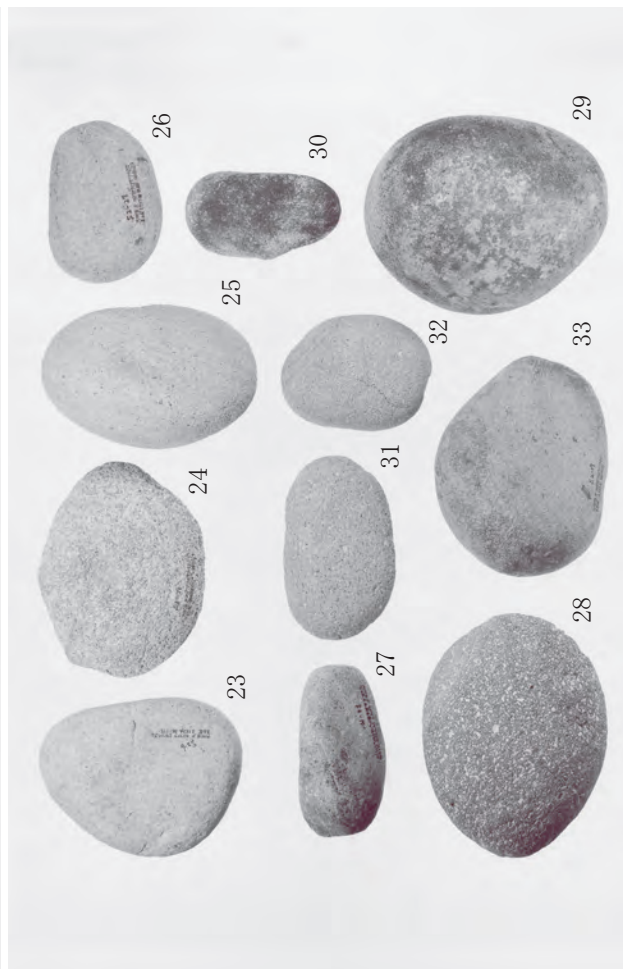
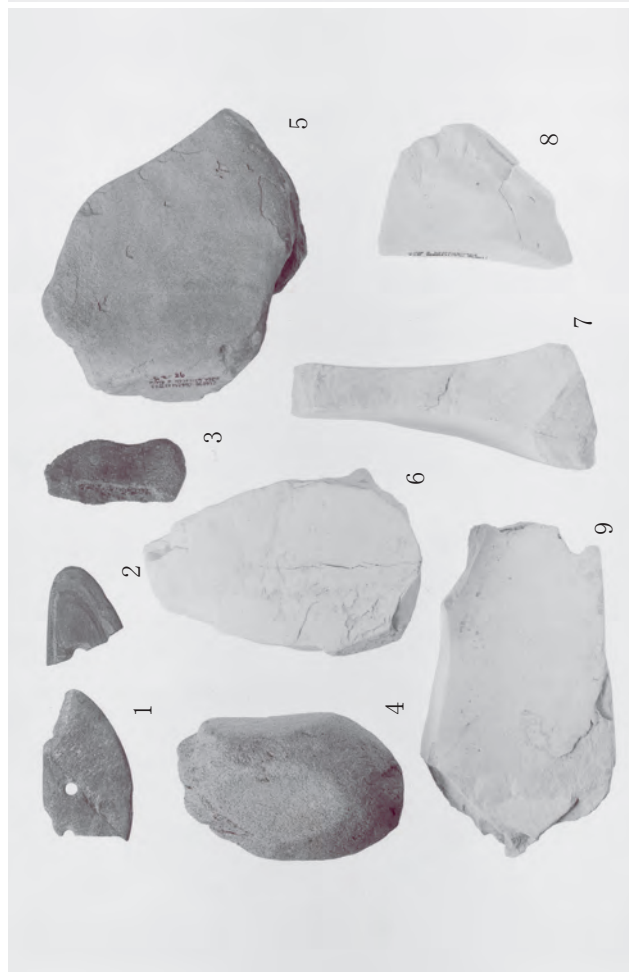
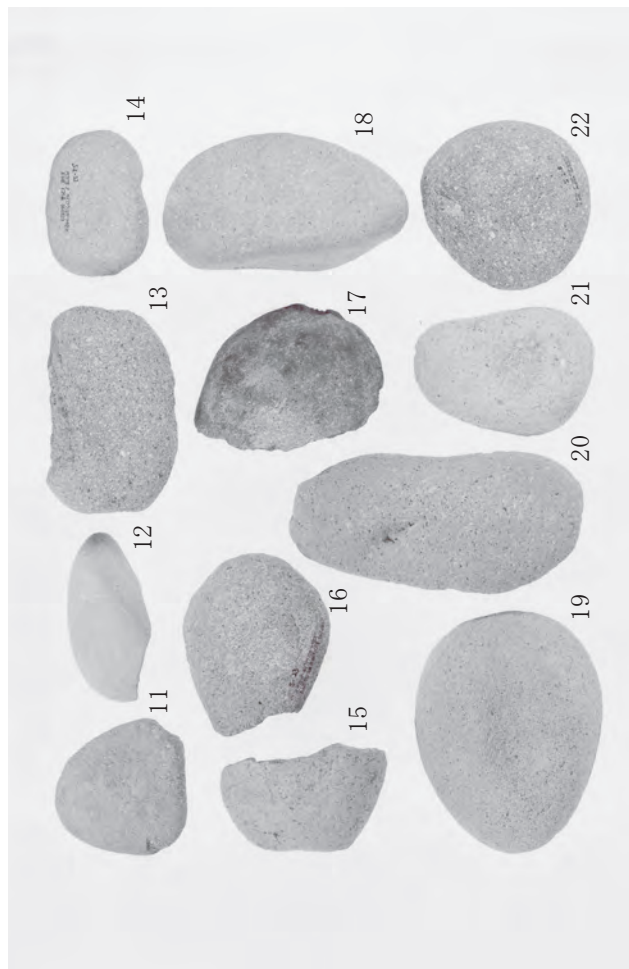


トレ 3-33



その他-36





1. II区 出土石器①
2. II区 出土石器②

3. II区 出土石器③
4. II区 出土石器④

報告書抄録

ふりがな	かまふなつえがしらいせき いち							
書名	蒲船津江頭遺跡 I							
副書名	ー福岡県柳川市三橋町蒲船津所在の遺跡の調査ー							
巻次								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	坂元 雄紀							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.jp							
発行年月日	平成21(2009)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かまふなつえ がしらいせき 蒲船津江頭 遺跡	ふくおかけんやながわしみつはしまちかまふなつ 福岡県柳川市三橋町蒲船津	402079		33° 10' 20"	130° 41' 13"	20050516~ 20070621 (間にⅢ区調 査期間含む)	I 区 2350㎡ II 区 2450㎡	国道ハイ パス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
蒲船津江頭 遺跡	集落	弥生時代終末 古墳時代初頭 ～後期初頭 古代～中世	掘立柱建物跡74棟 土坑70基 溝5条ピット 落ち込み7基 木質集中部	弥生土器・土師器 須恵器・陶磁器 石製品・木製品	・低湿地の集落遺跡 ・掘立柱建物跡の礎盤を多数 検出 ・木質集中部は木製品原材の 保管場所である可能性			
要 約	<p>本調査は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴う蒲船津江頭遺跡のⅠ・Ⅱ区の調査であり、両区あわせて4800㎡を調査した。調査区内は標高3m前後の低湿地の微高地上の立地で、土壌は特有の粘質土である。弥生時代終末から古墳時代初頭が遺跡の中心で、その後も古墳時代後期初頭までや古代・中世にもわずかながら遺構・遺物が認められる。主な遺構としては、掘立柱建物跡の礎盤を多数検出し、その組み合わせから78棟の建物の組み合わせを確認した。他には井戸を含むと思われる土坑を70基や、ピット・溝・落ち込みを検出した。また、木質物が集中的に検出された木質集中部は、谷の低位部の立地が想定され、木製品原材の保管場所である可能性が考えられる。出土遺物については、おびただしい量の弥生時代終末から古墳時代初頭の時期の土器が出土し、その他にも古墳時代・古代・中世の土師器・須恵器が出土した。砥石・凹石等の石器や低湿地の特性から木製品も出土した。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 20	登録番号 5

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集

蒲船津江頭遺跡 I

平成21年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 大野印刷 株式会社

福岡市博多区榎田2丁目2-65